

通俗二十一史

豫約發行の要旨　内容見本



通俗二十一史一覽

原本廿一部、四百五十七卷

（一）	通俗 十二朝軍談（十四卷）	天地開闢より殷の紂王に至るまでに支那の王朝は十二回の變革を經たり、故に此幾千百年の治亂を記せる書を十二朝軍談と名く
（二）	通俗 周武王軍談 一名、列國志前編（廿四卷）	周の武王が兵を擧げて殷の紂王を滅し、國號を周と改めし事を詳記し、それより第二十四代景王の廿五年に至る治亂を記す
（三）	通俗 呉越軍談 一名、列國志後編（十八卷）	周の第廿五代敬王の元年より秦の始皇帝の廿六年までの治亂を記す、呉越の戰爭が興味多きものたるを以て名く
（四）	通俗 漢楚軍談（十五卷）	秦の始皇帝の末年より漢の第二代惠帝の即位までの治亂を記す、漢楚の戰爭が本書の中心點たるを以て漢楚軍談と名く
（五）	通俗 西漢紀事（廿卷）	漢の高祖の一統より、逆臣王莽が漢の第十二代孺子嬰を廢して帝位を簒ふまでの治亂を記す、帝都が西方長安に在るを以て名く
（六）	通俗 東漢紀事（十卷）	後漢の光武皇帝が王莽を誅して天下を一統せし軍談を記す、東漢とは當時の帝都が東方洛陽に在るを以て名く
（七）	通俗 三國志（五十一卷）	後漢末の天下の爭亂より魏蜀呉の三大國が各一方に割據して天下を爭ひし軍談を詳記して晉の一統に至る
（八）	通俗 續三國志（卅七卷）	晉の武帝より第三代懷帝の朝に至る軍談を詳記す、晉成漢三國間の戰爭は主なるものとす
（九）	通俗 續後三國志（卅二卷）	晉の懷帝の朝より第四代愍帝が漢の劉曜に殺されて晉の滅亡するに至るまでの軍談を記す
（一〇）	通俗 續後三國志 後編（卅五卷）	愍帝殺されて晉の滅亡せしを聞いて東晉の元帝が建康にて帝位に即きしより第三代成帝に至るまでの軍談を記す
（一一）	通俗 南北朝軍談 前編（十五卷）	南齊と北魏との戰爭を詳記して梁の武帝の即位に至る、當時天下が南北兩朝に分れ居たるを以て書名とす
（一二）	通俗 南北朝軍談 後編 一名、北魏南梁軍談（廿六卷）	南梁と北魏との戰爭より陳の武帝が梁を滅すまでの軍談を記す
（一三）	通俗 隋煬帝外史 一名、隋史軍談（八卷）	隋の文帝が天下を一統せしより、第三代恭帝が位を唐の高祖に禪りて隋の亡ぶるまでの治亂を記す、煬帝は其中心人物なり
（一四）	通俗 唐太宗軍談（二十卷）	唐の第二代太宗皇帝が、隋末の亂れたるを見て、父高祖を輔けて天下を一統せし軍談を記す
（一五）	通俗 唐玄宗軍談（二十卷）	唐の第五代玄宗皇帝が奢侈に耽りて天下の大亂を招き、各地に戰爭の起りしことを詳記して第八代代宗皇帝の即位に及ぶ
（一六）	通俗 五代史軍談（廿四卷）	唐末の天下の騒亂より筆を起して梁、唐、晉、漢、周の五朝に亙る治亂を記す
（一七）	通俗 宋史軍談（二十卷）	五代史中の後唐の第二代明宗の頃より筆を起し主として宋の太祖の天下一統に關する軍談を記して開寶八年に至る
（一八）	通俗 兩國志 一名、岳飛軍談（廿六卷）	宋金兩國の軍談にして宋の第八代徽宗皇帝より第十代高宗皇帝の退位に至る、其中心人物は岳將軍なり、故に岳飛軍談とも云ふ
（一九）	通俗 宋元軍談（十二卷）	宋元興亡の軍談にして主として、元の天下一統に關する事蹟を記し、元の第六代成宗の泰平に至る
（二〇）	通俗 元明軍談 一名、皇明英烈傳（二十卷）	元末の天下の騒亂より筆を起して明の太祖の元を滅して天下を一統せし軍談を記す
（二一）	通俗 明清軍談 一名、國性爺忠義傳（二十卷）	明の萬曆年間より清の康熙二十年に至る明清興亡の軍談を記す、國性爺が明朝の爲に盡瘁せし美談は其中心點なり、故に名く

通俗二十一史
豫約要項一覽

申込期限

本年四月三十日限

豫約價

甲種（一時即納）　金拾圓
乙種（毎月壹圓宛）　金拾貳圓

郵送料

東京市内　一回、四錢　十二回、四拾八錢
内地　一回、拾貳錢　十二回、壹圓四拾四錢
清韓樺臺　一回、廿五錢　十二回、參圓

送本期

本年五月より毎月壹卷宛發行
四十五年四月までに全部完成

注意一、豫約金及郵送料を前納せされば送本せず
但、官廳及府縣立學校に限り前金を要せず豫約價を乙種とす
注意二、本書は選擇豫約の需に應ぜず
注意三、本書の發行は卷數の次第に依らず成るに從て發行す

體裁紙數

菊版總布製拾貳卷
總紙數凡そ七千頁圖像數十面入

平假名交り假名附、五號新活字二段組密植◎沿革地圖廿面入
▲毎卷の紙數は分冊の便宜上一樣ならず四百頁乃至七百頁とす

東京市牛込早稲田
豫約元　早稲田大學出版部
振替東京壹壹貳參番
各地書肆豫約取次

通俗二十一史（豫約發行の要旨）

健全娛樂と支那軍談書

娛樂は人生の一大要求なり。故に健全なる娛樂を與へざれば、不健全なる娛樂を貪るに至り、有益なる娛樂を授けざれば、有害なる娛樂に耽るに至る。これ蓋し勢の免れざる所なり。風教の振作を思ふもの、豈娛樂を輕視するを得んや。思ふに往時に於て一たび盛行せし支那軍談書は、久しく高閣に束ねられて、其書名すらも、今や大半、世人に忘れられたれば、太古より清朝に亙る上下五千年の軍談書の夙に完備せる事實の如きは、何人も意外とする所なれども、其軍談書は、現下必須なる支那歷史の智識を普及するの上に於て、忠勇義烈の氣概を鼓舞激勵して淫靡懦弱の弊風を一掃するの上に於て、將た健全なる娛樂を供給して、人生の一大要求に應ずるの上に於て、復た得易からざるの重要典籍たり。請ふ吾人をして少しく言ふ所あらしめよ。

日本人と軍談

日本人の如く軍談を好むものは稀なるべく、又、日本人の如く軍談に通せるものは、比類尠かるべし。思ふに我國が**萬世一系の皇室**を奉戴して連綿絶えざるの歴史を有せると、其歴史が、**忠臣義士の美談**に富みて、我が**尙武の氣象**に投合せるとは、日本人をして斯く軍談を好むに至らしめたるなり。故に都會の地には、夙に**軍談師**と云ふものありて、場を設け、古來の戰記を讀むを以て職業と爲し、四民亦、之を聽くを以て娯樂と爲したり。之が爲に國民の**史的智識**は知らず識らずの間に涵養せられ、下層社界の無敎育者と雖も、尙且つ、賴朝義經を知らざるもの無く、又、關羽張飛を知らざるもの無し。

軍談の起原沿革

往時朝庭に語部（ウタリベ）といふものありて、祖先の功業と事變とを語り傳へ、その語り傳へたる事實が筆記せられて、古事記、日本書紀となりたるは、史上炳焉の事實なれども、直に之を以て、今日の謂はゆる軍談の起原とは見るべからず。軍談は**戰國時代の嗜好**

風尚に應ぜんが爲に出でたる「**太平記讀み**」より初まりたるものなり。此「太平記讀み」は足利時代の戰國末に盛に行はれて德川時代に及び、一轉して今日の謂はゆる軍談となりたり。

元和偃武の頃に至りては、**百戰の勇士**は既に老い、世は一般に太平となりたれば、勇士も百練の戰術を實地に試みて、之を子孫後生に敎ふるに由なしと雖も、軍事は、その最も重んぜし所にして、又、その最も得意とせし所なれば、或は筆に依り、或は舌に依りて、其**實戰談**を子孫後生に傳へ、一世のもの、亦、その實戰談を聽くことを喜びたり。故に其實歷に繫る戰記類は、當時夥しく世に出たり。大久保彥左衛門の三河物語の如き其一例なり。**一世の趨向**、以て察すべし。山鹿素行、由井正雪等の兵法學者は、この氣運に乘じ、是等の戰話を**武道敎育**に適用して一世を風靡し、大名を得たるものなり。然れども是等の戰話は、元來事實を敎ふるを以て其主眼と爲せるものなれば、趣味固より乏しくして、廣く上下に行はるゝに至らざれども、一世の好尙は、之が爲に、戰話に導かれたり。是に於てか前代の戰記に、多少の脚色を加へて、四民の娯樂に供せるもの續出し、非常の好評を得て、廣く四方に行はるゝに至れり。これ即ち軍談にして「太平記讀み」の一變せるものに外ならず。

支那軍談書の大成

日本の軍談に附帶して支那の軍談を要求するに至れるは蓋し自然の勢なり。此要求に應じ、元祿二年を以て、支那軍談書の劈頭第一に出でたるものは通俗三國志なり。三國時代の爭戰地域は本邦の全地域に幾倍し、猛將勇卒の簇出せること本邦の戰記に其類を見るべからず。加之、支那一流の權謀術數は到る處に用ひられ、支那一流の誇張の筆に依て縱横無盡に叙述せられたれば、其爭戰の雄大壯快なる、他に其類を見ず、讀者をして血湧き肉躍り、思はず拍案三歎せしむるものあり。此書が非常の好評を得て、廣く上下に行はれしより、三國時代以後の軍談書を出すに當りても、尚且つ、三國志の續編たることを標榜するに至れり。之より或は上代に遡り、或は後代に下りて、支那軍談書は續々發行せられ、遂に正史の二十一史に該當すべき通俗二十一史は遺憾なく完備せられたり。今發行の順序に從て其書名を示せば左の如し。

(一) 三國志 元祿二年　(二) 漢楚軍談 元祿三年
(三) 唐太宗軍談 元祿四年　(四) 西漢紀事 元祿十二年
(五) 東漢紀事 元祿十二年　(六) 武王軍談 元祿十六年

(七) 呉越軍談　元祿十六年
(八) 續三國志　元祿十六年
(九) 唐玄宗軍談　寶永元年
(一〇) 南北朝軍談前編　寶永元年
(一一) 南北朝軍談後編　寶永二年
(一二) 五代史軍談　寶永二年
(一三) 元明軍談　寶永二年
(一四) 續後三國志　正德二年
(一五) 十二朝軍談　正德二年
(一六) 續後三國志後編　享保三年
(一七) 宋史軍談　享保四年
(一八) 兩國史　享保六年
(一九) 明清軍談　享保十年
(二〇) 隋煬帝外史　寶曆十年
(二一) 宋元軍談　寛政十年

支那軍談書の著者及び目的

元祿は文化旺盛の時代にして、**美文界**には近松、西鶴等の巨匠を出し、**漢文界**には木下順庵、山崎闇齋等の大家を出したれども、世間一般には漢文の幼稚なること、殆ど今日に異ならず。故に漢文の專門家に非ざる者は、概して漢文を讀むこと能はず、**士大夫**の如きは、支那史に通せんことを望みたれども、一は書籍の**缺乏**に因り、一は其書の**難讀**なるに因て、其希望を遂ぐること能はざりしなり。是れ通俗支那軍談書の出

でざるを得ざる所以なり。試に其書を見るに毛利貞齋その他の二三の外は、概して匿名なれば、今其著者を詳にするを得ずと雖も、其文が壯重なる漢文調を帶びて一種の威嚴を有すること、院本小說類と遙に其撰を異にせるより見るも、又、其序跋等の文旨が、治亂興敗の因る所を明にして士大夫の鑑戒と爲すに在るより見るも、其著者は當時に於ける達文の漢學者にして、其目的が士大夫の閱讀に供するに在りたるや疑ふべからず。故に其書は、堂々の文を以て治亂の顚末、人物の正邪を明にし忠烈正義の鼓吹を以て其要歸と爲さゞる無し。是れ其書が、院本小說類と、全く其趣を異にせる所なり。若し是等の軍談書を指して、童蒙婦女の讀物に過ぎずとなすものあらば、其謬見たるや論なきなり。

支那軍談書と史實

支那には二十一史に該當すべき歷代の演義書あれども、其書は專ら娛樂の爲に出でたるものなれば、其記事は史實を去ること甚だ遠きものあるを免れず。而して是等の書は、元代以後に成りたるものなれば、後世の俗語を混ずること甚しくして、元祿前後の漢學者には、概して之を讀下すること能はず、且つ其書を得ること容易な

らざりしなり。故に當時の漢學者が、支那軍談書を著すに當りては、已むを得ずして其骨子を正史に採り、支那演義の如きは、概して脚色の參考に供するに止めたり。是れ其軍談書が、大體に於て正史と一致して史的智識の普及を助けし所以、又、之を今日の學界に薦め得る所以なり。されば軍談書の著者が、支那演義を讀み得ざりし事は、偶然にも、却て學界の幸福たりしなり。

支那軍談書の薫化

一世の歡迎を博せる支那軍談書は、本邦の讀書界に向て、如何なる薫化を與へしかを考ふるに其効果の絶大なるを認めざる能はず。漢學不振の時代に於て、支那史の智識が廣く普及せられしは、是等軍談書の賜たるや疑ふべからず。政治家は其經綸の材料を是等の書に採り、兵學者は其戰術の例證を是等の書に得て、益するところ尠からざりしのみならず、又、之に依て、一般に尚武の氣象を鼓舞し、正善の慕ふべく邪惡の賤むべきを知らしめ、人格の育成を資けしこと幾何なるを知るべからず。近世農政學の大家にして何事にも創見を以て鳴れる佐藤信淵翁の海防論に、品川灣に柴船を放ちて夷船を燒棄すべきを說けるが如きも、知らず識らずの間に、支那軍談

書の影響を受けしものたるや疑ふべからず。

支那の史的研究

思ふに支那人の、唯、**自我觀念**ありて、國家觀念なきは、古來、**革命頻繁**の結果に外ならざるなり。然るに支那史を知らざるものは、支那人の特性を解せず、支那人を以て諸外國人に異ならずと爲す。これ其支那に於て失敗せる所以なり。今や支那は正に**世界列強の角逐場**たり。支那と**唇齒の關係**ある本邦の爲に、支那の史的研究が、如何に切要なるかは、之を言ふを要せず。

歴史は乾燥なるべからず

然らば何に依て支那の史的研究を爲すべきか。**卷帙浩瀚**にして箇人の私藏に適せざる二十一史(二千六百四卷)の外に、綱鑑易知錄、通鑑擥要、十八史略等の類、無きに非ずと雖も、歴史は久しく誤解せられし如く、年代記その者には非ず。一種の年代記に過ぎざる綱鑑易知錄等の如く、乾燥無味なる史乘は到底通讀するに堪へざるなり。故に**繁劇なる今日**に於て、專門家以外の者の通讀すべき歴史は**多趣多味**の者に限らざる

べからず。近時歐米の學界に於ては、興味を以て歴史を讀ましめんが爲に、多大の苦心を費せるより見るも、歴史は乾燥無味の年代記たるべからざるは喋々を要せざるなり。

學界の慶事

現時の如く繁劇の世に在りては、趣味娛樂の間に、知らず識らず歴史の大要に通ずるに非ざれば、到底史的智識を得ること能はざるなり。然るに前掲二十一種の軍談書は、正史の粹を拔きて之に豐富の趣味を加へしものなれば、之を以て二十一史の和解とも見るべく、又、二十一史の精華とも見るべきものたり。故に是等の書に依れば、娛樂の間に支那史の心髓を得べきなり。其書の現下に切要なる、何ぞ多言を要せん。試に今日の學界を見るに、學者は日新學術の奔命に疲れて、復た漢文を讀むの暇なきを以て、漢文が一般讀書界に適せざること、元祿時代に異ならず。今日の紳士に、漢文の難解たることも、敢て元祿時代の士大夫に讓らず。然るに支那の史的研究は、愈、益、切要なり。此時に方りて、通俗二十一史の如く、古今に一貫せる趣味豐富の軍談書が、大半散佚して容易に得難きに至れるに拘らず、少部數ながらも、安全に今日に傳はりたるは、學界の慶事と謂はざるべからず。

本書の豫約發行

曩に本部が、經書、諸子類、詩文集の講義を網羅せる**漢籍國字解全書**（二十五册）の豫約發行を企てゝ漢文の普及に務め、今正に其發行の中途に在るは江湖の知るところなり。今復た玆に漢籍國字解全書の引續きとして歷史部面に移り、**二十一史國字解**とも見るべき通俗二十一史の豫約發行を企つるもの、言ふまでも無く、**健全娛樂**の供給に依て風敎の振作に資すると共に、支那の**史的智識**を普及して學界に貢獻せんとの微旨に外ならざるなり。

◉本書の活字　本書の原本は四百五十七卷の多きありて所藏携帶に便ならず。今本書は、讀み易くして而かも紙數を減じ得べき五號新活字を用ひて密植方を採りたれば、大凡七千頁を以て其全部を網羅することを得るなり。若し普通の五號活字を用ひ、普通の疎植法に從ひたらんには、少くとも一萬四千頁以上たるべし。

◉沿革地圖　地名が古今に依つて異なるのみならず、其地形すらも古今大に異なるものあり。故に歷史を讀むものは、座右に沿革地圖を備ふるに非ざれば、隔

靴掻痒の歎あるを免れざるなり。故に支那歷代沿革地圖中にて最も高名にして而かも精良なる李氏歷代沿革地圖に據り、二十一史に關係ある地圖二十葉(菊版二頁大にして二色刷)を加ふる事となしたり。

◉**圖像**　本書中に活動せる英雄豪傑の圖像は、憑據の正確なる原本より選出して、無慮數十面を收む。

◉**排列、發行及び紙數**　本書は時代の順序に依て之を各卷に配當したりと雖も、其發行は必ずしも卷數の順序に依ること無く、印刷の成るに從て發行すべし。各卷の紙數は四百頁より七百餘頁に亙り必ずしも一樣ならず。總紙數凡そ七千頁とす。

◉**豫約の正確**　世の所謂豫約出版は其約を履まず其發行期を無限に遷延して加盟者に迷惑せしむるを以て常とす。本部は是等の惡習慣を出版界より一掃せんことを期するものなり。本部が曩に豫約法に依て發行せる「大日本時代史」(十卷)、「經世七大名著」(九卷)、「漢籍國字解全書」(正編十二卷)、近松傑作全集」(五卷)等の諸書が如何に嚴正に發行せられしかを見て、本部の豫約が如何に坊間書肆の豫約に異なるかを知るべし。

則天武后



伯顏



項羽悲歌別ニ虞氏一

項王は諸軍勢没落の事を夢にも知らず、尚中軍に休み居けるが、早漢の兵、間近く來れりと覺えて、四面に楚歌を歌ふ聲、洋々として耳に喧しかりしかば、忽ち目を醒し、陣中の體を望み見て大に驚き、漢已に楚を得たるか、是何ぞ楚人の多きやと云ひければ、周蘭、桓楚、悲み泣て申しけるは、韓信計を用ひて山上に簫を吹きければ、御方の諸軍、頻に悲を生じ季布、鍾離昧等を始として、八千の子弟も抜々に皆逃げうせ、今大將は臣たゞ二人、士卒は僅に八百餘人殘り留れり、陛下たゞ急々に此所を落玉へ、然らずんば漢の兵虛に乘て亂れ入らん、陛下、兵微に大將寡うして何を以てか防ぎ玉ふことを得ん、項王これを聞て、泪泉の涌くが如く、帳中へ蒐入て、天を仰いで長嘆し、上天我を亡せりやと云へば、滿座の上下、一同に泪を流して泣叫ぶ聲止まざりしかば、虞氏急に走り來り、陛下何事ありてか頻に悲み玉ふと問ふに、項王泪を抑て申しけるは、今わが將士悉く逃失せて、漢の兵攻圍むこと甚だ急なり、我いま汝と別て何方へも落行かんと思へども、心中碎くるが如くにして、展轉反側の情、遽に捨去るに忍びず、思ふに我汝と相馴れて、數年の間、千軍萬馬の中だにも朝夕相伴つて、暫も離るゝこと無りしに、今長き別となることは、如何なる運の極ぞやと、又地の上に倒臥し、聲を放て泣號ぶ、虞氏は此由を聞くよりも、兎角の返答にも及ばず、堪ぬ思に臥沈み良ありて申しけるは、妾幾年か君につき傍奉りて深く恩愛を受けたれば、暫も忘るゝことなく、縱ひ虎ふす野邊、鯨よる浦なりとも、伴ひ行て、死ば一處に死べしと、常々心に思ひしに、今いかなれば情なく此に捨置き、去らんとは宣ふぞとて、項王の甲の袖にすがり付き絶入ばかりに悲みければ、項王さしもの勇夫なれども、心亂れて爲方もなく、自ら盃を執て虞氏と數盃を傾け、一首の歌を造て曰、

力抜レ山兮、氣蓋レ世、時不レ利兮、騅不レ逝、騅不レ逝兮、可ニ奈何一、虞兮虞兮奈レ若何、

項王歌ひ了りて又數盃を飲みければ、虞氏は餘の思に堪兼ねて又一首の歌を造て和して曰、

漢兵已略レ地、四方楚歌聲、大王意氣盡、賤妾何聊レ生、

項王は虞氏と共に、歌うては泣き泣ては歌ひ、尚も別るゝに忍びず、覺えず時刻を移して、已に五更の鼓も鳴りしかば、周蘭、桓楚、帳外より聲を揚げて曰、いま夜すでに明けんとす、陛下急々に打立ち玉へ、項王泣て又虞氏に向ひ、我は敵の

亂れ入らぬ先に、何方へも逃行くぞ、汝たゞ能く命を全うせよ、我もし運命未だ盡きずんば、再び廻り逢ふべきぞと云ふに虞氏泪に咽んで申しけるは、君いま此處を去り玉はゞ、妾を何にか置き玉ふぞ、項王の曰、汝元より容色世に勝れたれば、劉邦決して殺すまじ、少も之を思ふると勿れ、虞氏今はいよいよ堪兼て、妾願は君に從つて、此圍もし出づべくんば、何地までも伴ひゆき、若出づると能はずんば、早く自害して死なん、縱ひ骸は空しくなるとも、魂魄は君に從つて江を渡り、再び故鄕へ歸るべし、項王申しけるは、是固く無用なり、今亂軍の中、戈戟地に滿て、驍勇の者だにも、容易く進むと能はず、增てや汝女性の身として、爭か此を逃るゝを得ん、虞氏項王の從ざるを見て、佯りて申しけるは、願は君の寶劔を借し玉へ、妾之を帶で假に男の形に出立ち、君の跡に從ひ行かん、項王これに欺かれ了に腰なる劔を拔て虞氏に與へ、然らば我跡より來れとて、馬に打乘て出でんとすれば、虞氏手に劔を握り、跡より呼で、妾君の大恩を受けて未だ萬一も之を報ぜず、今より必ず妾を以て心に掛け玉ふな、是までなりと云ひも果てず了に首を刎て死んだりければ、項王之を見るに、目もくれ心も消果て、鎧の袖を顏に當てさめ〴〵と泣沈んで、已に馬より落ちんとす、周蘭急に抱き止め、陛下たゞ天下を以て、重しとし玉ふべし、何ぞ左程に悲み玉ふぞと諫めしかば、項王泣〳〵八百餘騎を二手に分て、自ら先手に進み、圍を突て出でんとするに、漢の大將灌嬰、本部の軍馬を引て路を遮る、項王馬を踊らせ鎗を撚りて、十餘合戰ひしが、灌嬰叶はずして逃走り、急に中軍へ馳歸つて、漢王韓信に報じ、大軍を以て追蒐しむ、項王は敢て灌嬰を追はず、只圍を開て逃げんとするを、樊噲山の上より之を見て、急ぎ合圖の旌を動せば、漢の兵八面より討て出で、大將曹參、副將劉賈、王遂、周從、李封四人を率ゐて斬て廻るに、周蘭桓楚が後陣に備へて走るに出合ひおつ取こめて、露塵ばかりも餘さじと揉だりしかば、楚の兵今は只二十餘人に成りにけり、周蘭桓楚天を仰で長嘆し、我力こゝに至て支ふると能はず、空く敵の手に掛りて死なんよりはとて、二人共に腹かき切て失せければ、二十餘人の兵は、忽ち漢の勢に討れてけり、項王は這々圍を切拔け、此時なほ百餘騎の兵ありしかば、急に淮河を望んで走りけるに、岸に小舟一艘ありけるを、是こそ究竟の事よとて、皆これに取乘て事なく向の岸に上り、又五六里馳せて陰陵と云ふ所へ至て、忽ち路に蹈迷ひ、四方を望むに皆これ細き谷路なれば、如何はせんと胡亂堪まはる處に、俄に四方より金鼓を鳴して、喊の聲天に震ふ、項王膽魂も身に沿はず、亘を顧る

張飛據レ水斷レ橋

去程に文聘は兵を引て趙雲を追かけ、長坂橋に近付て向を見れば、張飛只一騎橋の上に馬を立て、丈八の矛を横たへ、盔を脱で鞍にかけ、頭の髪倒に上りて獅子の怒毛の如く、眼は逆に裂けて光り、百練の鏡に朱を洒ぎ、怒れる鬼鬚左右に分れて、悪鬼羅刹も是には爭か及ぶべき、又橋の東に一村茂りたる林あり、塵ほこりを蹴たて、馬烟を起て、木陰の中に多くの兵往來す、文聘怪んで敢て進まず、跡に續いて曹仁、李典、夏侯惇、夏侯淵、樂進、張遼、許褚、張郃、ことごとく來り集り、この體を望み見て皆心に疑をなし、張飛が目を怒らして只一騎立ちたるは、必ず孔明が深き計ならん、暫く進むヿなかれとて、早馬打て曹操に注進す、曹操これを聞て火急に馳きたり、其體を伺ひ見るに、張飛敵の後陣に白旄黄鉞を取並べ、青羅の傘蓋を指上げたるを見て、是必ず曹操ならんと思ひければ、大の眼を怒らして大音あげ、吾は乃ち燕人張飛誰か來て勝負を決せんと呼はる、其聲雷の鳴るが如くなりければ、曹操が勢みな色を失ふ、曹操大に驚き、急に傘蓋を収めて白旄黄鉞を取隱し、諸將を顧て曰、昔關羽が顏良を討取りたる時、我甚だ稱嘆せしかば、關羽申しけるは、某が如きは云ふに足らず、某が弟に燕人張飛と申すもの、百萬の軍中に入て、大將の首を取るを、嚢を探て物を取るよりも易しと云へり、汝等も聞きつらん、世に怕しき者ぞとて、密に伺ひ居たりけるに、張飛敵の俄に旗幟を隱し、傘蓋を收めたるを見て、又眼を怒し、大に叫で、吾はこれ燕人張飛、誰か出て快く戰はんと呼はりければ、曹操退かんとする心ありて、軍中みな躁ぎけり、張飛又敵の後陣色めき立ちたるを見て、面白きヿに思ひ、大音聲をあげて戰ふとも又戰へじ退くとも又退けじと叫ぶ音いまだ絶えざるに、曹操が傍に在りける夏侯霸、震ひ怕れて膽魂を失ひ、馬より倒に落ちければ、曹操馬を回して退くと云ふ程こそあれ、數十萬の兵、西を望て逃ぐる、其ありさま黄口の孺子雷の聲を聞き、病體の樵夫虎の吼るを怕るゝが如く、鎗を棄て戈を投て潮の退き山の崩るゝが如く、推殺され踏倒され、頭を損じ手足を折るもの、その數勝て計へがたし、曹操は馬を飛ばし色を失て逃げるが、冠を落し簪を失ひ、髪をさばきて鞭を加へ、跡より御方の逃來るを敵の追ふぞと心得て、魂も身に附かず、張遼、許褚、やうやうに追付き轡を取て引止めければ、曹操敵ぞと思うて大に叫ぶ、張遼が曰、これはいかなるヿにて候ぞ、追かくる敵もなし、量るに張飛一人、なんぞ怕るゝに足らんや、早く兵

を揃へて追かけなば、玄德を擒にせんと云ひければ、曹操色を直して敗軍を集める、張飛は曹操が大軍の、一擁して退きたるを見て獨笑して喜び、彼林の陰に置きたる二十騎の兵を呼で、長坂の大橋を切落し、今は心安しとて、回り來て玄德に見え、右の趣を語りければ、玄德の曰、汝勇なるとは尤も勇なり、但惜むらくは計を仕損じたり、張飛その故を問ば、玄德の曰、曹操は兵法に通じて計深し、汝もし橋を斷落さずんば、彼疑て追來らじ、張飛が曰、我等が叫ぶ聲に怕れ、馬を飛ばして逃去れり、爭か再び追來らん、玄德の曰、汝もし橋を落さずんば、伏勢あらんとを疑て、彼敢て追來らじ、今橋を落せるを見ば計も無く力も盡きて敵を畏るゝ故に此するぞと知るべし、曹操百萬の勢あり、例令江漢を涉るとも塡めさせて通るべし、今是ほどの橋を曳たればとて、彼なんの畏かあらん、敵さだめて蒐りぬらん、今は江陵城に行くと能はじ、沔陽を望で橫合に小路を馳せ、漢津に出でよとて、取るものも取敢ず、揉に揉で急ぎ玉ふ、曹操兵を整へ、張遼、許褚を遣はして再び長坂橋の樣を見せしむるに、回り來て、橋すでに斷落して、敵一人も見えずと申す、曹操後悔して申けるは、われ計を仕損じたり、彼すでに橋を落したるは、計なくして只我を畏るゝ故なり、一萬の人夫を遣はし、三所に橋を掛けよと下知して、即時に河を渡しければ、李典諫めて曰、これも又孔明が計にて、吾等を引寄せん爲なるべし、輕々しくは進み玉ふな、曹操が曰、張飛は只血氣の勇なり、何ぞ深く怕れんやとて、喊を作り鼓を打ち、百萬の軍勢漢津に向て飛ぶが如くに追蒐たり、玄德は百騎ばかりにて漢津の渡に到り、前に大江あり後に追手かゝれり、如何せんとて身を揉玉へば、曹操自ら馬を出だし大軍を下知して、玄德は釜の中の魚、穽の中の虎なり、今生捕らずんば、何の時を期せん、若とり逃す時は、魚を大海に放ち、虎を深山に歸すが如し、一齊に蒐れと呼はりければ、張遼許褚を先として、大力の覺取たる荒者共われ一番に組留めんとて、大軍一度に競ひかゝり、已に危く見えける所に、忽ち山際に鼓を打て、一彪の軍馬かけ出で、我此にありて久しく待つと呼はり、曹操が勢に斬てかゝる、是乃ち關羽が江夏城に行て、劉琦に一萬餘騎の勢を借り孔明が計を受けてこの所にて相待たるなり、關羽一陣に馬を馳せ、靑龍刀を提げて、新手を驅て進みければ、曹操大に驚き、又孔明が計に落されたり、早く退て命を扶かれとて、皆散々に逃ければ、關羽十里あまり追て回りけり、

劉玄德敗走㆓夏口㆒

日本神風鏖胡舟

さても大元一統の后は、勢日々に盛にして、海外の諸國と雖も、東は耽羅、高麗に至り、南は安南、瓜哇、暹羅等まで悉く臣服し、貢を入れずと云ふこと無し、先より日本にも使を遣し、入貢の事を求むると雖も、日本敢て從はず、元國よりの使者、既に二三度に及ぶ、今は兵を以て相交へんとありければ、本朝此時、後宇多の帝の御宇、鎌倉に北條時宗執權たりけるが、異國の使の趣を朝庭に奏聞す、朝庭やがて公卿僉議ありけるに、諸卿各々曰ひけるは、異國の使を追回すこと屢なり、今度も又空く還さば異賊必ず襲ひ來るべし、されども北胡は、今新に起るの時なれば、恐くは由々敷大事ならんかとて、評議區々なりけるに、何某の大納言の仰せけるは、我朝、神孫の降臨より以來、日月と共に不窮の國なり、豈異域の爲に削られんや、假令賊軍襲ひ來るとも、合戰の成敗は、天照大神の神慮に任せ奉り、好を醜虜に通ずる事は決して有るべからず、早く胡人の使を斬るべしと曰ひければ、朝議之に一決して其趣を鎌倉に下知したまふに、時宗命を受け、直に元の使を誅し終り、異方に信を絶つことを明白に示しけり、元主これを聞て大に怒り、速に兵を起して日本を伐たんと謀るに、群臣多くは然りとせず、翰林承旨王盤諫めて申しけるは、日本は東海の孤島なりと雖も開闢以來、王統を變ぜず、武備尖にして、外夷竟に侵すことを得ずと聞けり、其上大軍を遙たる海外に差向け、假令勝つとも治守すること難し、若し勝たざる時は、萬里の外に援兵を發せんこと、又急に調ひ難からんか、元主の曰、古へ日本は、魏晉より隋唐の代に至るまで、伯姪の禮を用ひて好を通ぜり、其後中國に信を絶つこと數百年なり、今又昔の如くに入貢を爲さしめば、我朝大に宇宙を併呑せるの威を、永く萬世に示すなりとて、更に群臣の諫を用ひず、然れども此時、趙弘範、阿朮等は既に死したり、誰か東征の大將たらしめんと議せられけるに、伯顏申しけるは、昔日の大將は多く年老いたりと雖も、阿剌罕は智勇兼備、屢々水陸の戰に馴れたり、彼を以て大將と爲すべし、元主然るべしとて阿剌罕に斧鉞を賜ひ、東征の大將軍と定め、范文虎を副將軍とし、忻都、洪茶丘の二人を添へて、都合四人の大將、十萬の精兵を率ゐて三年の兵粮を貯へ、鐵砲火箭を夥しく用意し、六萬艘の大艦を東洋の大海に押浮め、高麗國王を案内者として既に進發したりけるに、本朝の日神、震怒し給ひけるにや、總大將阿剌罕は船中にて疾に罹り、身心惱亂し、躍り狂ふて死に

けり、元兵まづ是に氣を落し、各々心中に怪み怖れけれども、范文虎、强て諸軍を勵まし、忻都、洪茶丘、共に力を合せて、先づ日本の壹岐、對馬の二州を襲ひ取り、勢に乘て五龍山に推移る、本朝にも固より用心したりければ、筑紫九州の軍兵、馳せ集り、海岸に高く柵をふり、櫓楯、隙なくかき並べ、其陰より究竟の精兵、箭先を揃へて射出しけり、元の舟には、船中に高く櫓を設け、さしもに備へたる日本の陣を眼の下に見降し、鐵砲をつるべ放つに、本朝いまだ此術を知らず、迸る音雷の如く、頭手足を微塵に碎かれ、或は櫓楯に火燃えつき、打消すべき暇も無く、胡軍勝つに乘て攻めかゝれば、菊地、原田、松浦等の官軍も力を極めて斫て廻ると雖も、彼鐵砲を防ぐこと能はず、手負、打死、多かりければ、此由都へ急を告ぐるに兩六波羅大に驚き、急ぎ鎌倉に訴へ、早く加勢を下すべしとて、夜を日に續で、軍勢を諸國に催促ありければ、都鄙遠近あわて騷ぎ、早馬急を告げて往來すること引もきらず、主上も宸襟を惱まし給ひ、諸山諸寺に仰せて大法を修せられ、伊勢、石淸水、加茂、春日、平野、松尾を始め、廿一社の御神より小社禿倉に至るまで、勅使來つて奉幣祈願し給ひけり、斯りければ諸社の神殿俄に鳴動し、諏訪の湖水より赤雲たなびき、鹿島の神前に飈起り、熱田の神馬汗を綴き、春日の神鹿雲路に翔り、伊勢の風の社より白氣昇り、加茂の寶殿より鏑矢鳴出で、叡山の靈猿、稻荷山の神狐各々西を指して白日に飛行し、諸神鎭西に赴き給ふ粧の嚴然として見えければ、上下各々賴もしげにぞ思ひける、斯て西海の賊軍は勢に乘て官軍を追立て、既に陸地に登らんとするに、八月朔日の寅の刻より忽然として大風吹起り、大木を根拔にし、岩石を飛せて、海上の怒浪天を突き、雷　夥しう鳴て賊船に落ちかゝれば、電光閃々として船皆微塵に碎かれ、或は逆波に打ちかへされて、憐むべし胡軍六萬艘悉く亡び失せにけり、宋の降將范文虎も海底に沈み、忻都、洪茶丘も岩に當てられ碎け死し、十萬の胡軍、一時が程に片甲も殘らず亡び失せけり、されども其中に張百戸と云ふもの、二三千騎にて破船に乘り、博多の浦に漂ひけるを、官軍押かゝり、一人も殘らず擒にし、海岸に紲つて悉く誅し了りけるが、纔に三人を免し、本朝の神威を爾が主に談れとて、小船に乘せて元國へ放ちやりぬ、實に本朝日神の威德、萬世と雖も明に、忽必烈が雄武なるも、窺ふことを得ざりけり、斯て異賊亡びければ、天子叡感の餘に、伊勢の風の社を風の宮と崇め給ひ、諸神に勳一等を揚げ給ふ、諸將は鎌倉より恩賞行はれ、猶も宇都宮貞綱に仰せて筑

監査票

口座番號　東京壹壹貳參番
加入者氏名　早稻田大學出版部
局番號印
受付番號
一金
拂込人氏名
受付局日附印
管理所日附印

拂込票

口座番號　東京壹壹貳參番
加入者氏名　早稻田大學出版部
※一金
拂込人住所氏名　※
受付局日附印
管理所日附印
※印を附しある部は拂込人に於て記入すること
遞信省

拂込通知票

口座番號　東京壹壹貳參番
加入者氏名　早稻田大學出版部
※一金
拂込人住所氏名　※
受付局日附印
管理所日附印
※印を附しある部は拂込人に於て記入すること
遞信省

受領票

口座番號　東京壹壹貳參番
加入者氏名　早稻田大學出版部
一金
拂込人氏名
殿
受付局日附印

拂込注意

一、通俗二十一史（全拾貳卷）の豫約代金郵送料左の如し

●壹部の豫約代金
甲種（即納）　金拾圓
乙種（十二回分納、毎月壹圓宛）　金拾貳圓

●壹部の郵送料
東京市内（四錢宛、十二回）　金四拾八錢
内地（拾貳錢宛、十二回）　金壹圓四拾四錢
滿韓樺臺（廿五錢宛、十二回）　金參圓

二、此拂込を爲す者は送金額に應じて左記の料金を郵便局に拂込むことを要す
壹圓迄壹錢　五圓迄貳錢　拾圓迄四錢　五拾圓迄六錢

三、此送金は郵便局より交付する受領票を以て證となすべきが故に郵券を添へて請求あるに非ざれば當部より受領書を送ることなし

通信文記載欄

一金　送金の目的

一金　通俗二十一史　部　種豫約金第　回分

一金　同上小包料

一金

一金

計金

注意

一、振替貯金の拂込を爲さむとするときは此用紙中拂込票及拂込通知票相當の部（※印を附しある箇所）に口座番號、加入者の氏名、拂込金額、拂込年月日及拂込人の住所氏名を記載し受領票及記帳票の部接續の儘現金（又は郵便爲替證書、郵便取立金取立濟通知書、中央金庫に於て支拂はるべき仕拂命令券）と共に郵便局所に差出し受領票を受取らるべし

一、拂込票及拂込通知票に記載すべき金高及拂込年月日等は其の字體を明瞭正確に記載し一二三十の數字は壹貳參拾の文字を用ひらるへし

一、拂込通知票裏面の通信記載欄には拂込人に於て拂込金に屬する事項は勿論其他拂込人より加入者に宛てたる各種の通信文を記載することを得るものとす

一、拂込金に對する受領票の金高其の他に相違あるときは直ちに其の更訂を求めらるへし

一、受領票は振替貯金拂込の證據となるへきものとなるに依り大切に之を保管せらるへし

本書は二十一史二千六百零四巻の精粹を聚めて平易なる假名文に綴れるものなり

娯樂の間に支那古來の歴史を知るべきもの只本書あり

軍談は忠勇、廉恥、正氣の一大鼓吹者なり

軍人讀まざるべからず青年讀まざるべからず忠烈正義を愛するものは何人も之を讀まざるべからず

原本今や散佚して金錢を以て得べからず本書は廣汎の流布を希ひて實費に等しき廉價にて加盟者に頒つ

豫約發行の正確は出版界の徳義なり名譽なり請ふ我が出版部の既往將來を見よ

文學博士井上哲次郎著

訂正增補

日本朱子學派之哲學 全

東京
合資會社 冨山房發兌

日本朱子學派之哲學序

余嚮に明治三十三年を以て「日本陽明學派之哲學」を世に公にし、次いで又明治三十五年を以て「日本古學派之哲學」を世に公にし、以て我が邦に於ける陽明學派と古學派との學脈、學風及び學說等を紹介することを務めたり。然れども尙ほ我邦に於ける朱子學派の變遷いかんを闡明するにあらざれば、德川時代に最も勢力を占めたる重要なる哲學派の硏究、未だ整備せりといふべからず。是故に明治三十五年の九月より力を純正哲學に用ふるの傍、別に又我邦に於ける朱子學派の史的硏究を始め、凡そ三星霜を經て、今年九月に至り、漸く其概要を敍述し了り、玆に之を脫稿することを得たり。

因りて輯めて一卷となし、題して之を「日本朱子學派之哲學」と名づけ、書肆富山房をして之を世に公にせしむ。印刷已に成るに及んで、更に又之を考察するに、朱子學派は之を堀川派以外の古學派若くは陽明學派に比すれば、差〻穩健にして且つ中正を得たるの感あるを覺ゆ。殊に是れを教育主義とすれば、儒教の諸學派中にありては、最も危險少きものとなす。但〻其寂靜主義に陷れるが如きは、殊に惜むべしとなすのみ。朱子學は、概して之を言へは、人をして溫良ならしめ、恭謙ならしめ、又篤實ならしむるものなり。簡短に之を言へば、人をして君子人たらしむるものなり。是れ朱子學は功利主義と全く相反し、專ら人格完成を期するものな

ればなり。　朱子學派の道德主義は今の所謂自我實現說と假令ひ其形式を異にするも、其精神に於ては、殆ど同一轍に出づるものにて、英國の新韓圖學派グリーンミユルヘッド諸氏の言ふ所と往々符節を合するが如し。

乃ち道德主義の古今を通じ、東西を貫いて易はらざるものあるを知るべきなり。　固より朱子學派の學說悉く是正若くは的確なりといふにあらず。　今日よりして之を觀れば、謬見誤想の多々之あるは言ふ迄もなきなり。　然れども此れに拘はらず其中永遠不變の道德主義ありて存することは、到底之を否定するを得ざるなり。　朱子學派は此の如き永遠不變の道德主義を取りて立つものなるが故に、人をして忽ち耳を聳てし

むるが如き花々しき態度に出づるものにあらず。故に其言、動もすれば輙ち平凡に流れ易きなり。是を以て人或は之を輕視するの傾向なしとせず。然れども是れ反りて朱子學派の供給する所、一日も人生に無かるべからざることを證するものなり。朱子學派の説く所は、猶ほ平地を指して之を示すが如く、一も奇々怪々の事あるなし。之に反して危險にして且つ中正を得ざる異說は、奇山の突兀として天表に秀づるが如く、人の視線を惹くこと決して尋常なりとせず。然れども人の平生蹈んで以て利とする所は、決して此の如き奇山にあらずして、寧ろ坦々たる平地に外ならざるなり。是故に世の此書を讀むものに諗ぐ、朱子學派の學

説の千篇一律の如く單調なるを見て、敢て遽に之を侮蔑することなからんことを。朱子學派の學説に就いて吾人の學ぶべき所固より少しとせずと雖も、然れども其實行せる道德に至りては、吾人の學ぶべき所、尚ほ一層多しとなす。殊に藤原惺窩、林羅山、木下順菴、安東省菴、室鳩巢、中村惕齋、貝原益軒諸氏の如きは、其人格の清高なる、其品性の純潔なる、我邦に於ける朱子學派の代表者ともいふべきものにして、又永く後世に其道德的模範を垂るゝに足るものといふべきか。今や日露戰爭已に終結を告げ、我邦の威光、大に宇内に發揚するに隨ひ、歐米の學者、漸く我邦の强大なる所以を究明せんとす。斯時に當りて德川氏三百年間我邦の教育主

義となりて、國民道德の發展上に偉大の影響を及ぼしゝ朱子學派の史的研究、豈に亦一日も之を忽にして可ならんや。世の學者にして德敎に志あるもの、宜しく深く思を此に致すべきなり。偶〻感ずる所を述べて、以て之が序となす。

明治三十八年十一月廿三日

井上哲次郎識

凡例

一此書は「日本古學派之哲學」及び「日本陽明學派之哲學」等と相俟ちて共に同じく日本に於ける哲學思想の發展を組織的に敍述且つ評論せるものなるが故に、冀くば世の學者、是等の書と比較對照して、之を講讀せられんことを、

一朱子學起原は、史的發展の順序としては、卷頭に編入すべきものなれども、其中學說の紹介すべきもの、殆ど全く之なきが故に、遂に是れを附錄として、卷末に附載することゝせり、

一先哲の肖像を挿入することは、本と著者の志にあらざるも、亦其高風を仰慕するの一端ともなるを以て、偶ゝ學者の參考に資するに足るものを得れば、則ち採りて以て之を其關係ある處に挿入せり、例へば、此書載する所の藤原惺窩、林羅山、木下順菴及び貝原益軒の肖像の如き、是れなり、惺窩の肖像は堀鉞之丞氏の藏する所に係り、羅山の肖像は史料編纂掛の藏する所に係り、順菴の肖像は錦里文集の載する所に

係り、益軒の肖像は本と其子孫の藏する所に係る、

一此書編著の際、文學博士三上參次氏は德川時代の史料に關し、種々なる便宜を與へられ、堀鉞之丞氏は其所藏の惺窩の肖像を縮寫することを、又正木直彥氏は益軒の肖像の寫眞を複寫することを聽許せられたり、因りて玆に厚く之を陳謝す、

明治三十八年十一月廿三日

著者又識

日本朱子學派之哲學

目次

日本朱子學派之哲學

文學博士　井上哲次郎　著

叙論

儒教は應仁天皇十五年及び十六年百濟を經て始めて我邦に輸入せられ、平安朝に至りて經書及び諸子類を講ずるもの、漸く多く、殊に菅原大江二氏の如きは、儒教を以て家を成し、其門下より濟々たる多士を出だせり、然れども儒教が當時頗る盛況を呈せしに拘はらず、哲學的考察は、毫も其端緒を開かざりき、佛教に關しては空海の如く多少哲學的考察の結果を敍述するものなきにあらずと雖も、儒教に關しては、單に漢魏の古註によりて經書及び諸子類の旨意を講ずるに止まるのみ、已れが頭腦によりて哲學的考察をなさんよりは、寧ろ形式的に解釋し、了解し、

傳承することを務めたり、漢魏の學者は、力を訓詁に用ひ、經義を解釋することを主とし、周末の學者の如く自ら己れが頭腦によりて哲學的考察をなすものにあらず、平安朝の學者は此の如き沒精神沒趣味の訓詁學者を先容として、經書及び諸子類を講ぜり、此の如くなれば眼光能く紙背に徹することは能はず、いかんぞ思想の源泉を己れが內界に開拓するを得ん、哲學的考察の遂に開始せられざる所以のもの、推して以て知るべきなり、平安朝より鎌倉時代に至るまで儒敎次第に衰退し、鎌倉時代より海內漸く戰爭多く、人、武事を尙んで、文事を輕んじ、最も哲學思想を胚胎するに便ならず、殊に元弘建武の頃即ち十四世紀より全く亂世となり、後、慶長年間即ち十七世紀の初め、德川家康覇權を執り、海內を戡定するに至るまで、凡そ二百七十餘年間學問最も萎微して振はず、文苑の荒蕪、此時より甚しきはなし、是れを我邦の暗黑時代となす、朱子學の起原は實に此暗黑時代にあり、暗黑時代を經て德川時代の初めに至り、熙々として閃く平和の曙光と共に文學復興(ルチッサンス)は羽翼を廣

げて頓に勢威を振へり、然るに此文學復興の先驅として大に人心を激動し、感化し來たれるものは、朱子學なり、是れを德川時代に於ける哲學思想を惹起せる主動者と稱するも、決して過言にあらざるべきなり、因りて茲に先づ朱子及び朱子學の地位を一瞥せん、

朱子名は熹、字は元晦、一の字は仲晦、晦菴と號し、又考亭と號す、其他數多の別號あり、南宋の建炎四年(即ち紀元一一三〇)九月を以て延平の尤溪に生る、尤溪は今の福建省にあり、慶元六年(即ち紀元一二〇〇)三月を以て病歿す、年七十一、人となり篤實にして博學、比類まれなり、伯林のウヰルヘルム、ショット氏曾て學士會院に於て、朱子の事を論じ、彼れを「ポリヒストル」(博學家)と稱せり、洵に當れりといふべし、朱子曾て官に仕へて種々なる職を奉じ、前後上奏する所數十回に及び、直言憚らざるものあり、然れども多くは議論迂濶にして時務に適切ならず、蓋し彼れ本と政治家にあらず、徹頭徹尾道學の師なり、道學の師としては其感化の偉大なる、殆んど孔子に匹敵せんとす、彼れが學は支那朝鮮及び我邦に永く

其影響を及ぼし、後世彼れを奉じて起れるもの、勝げて數ふべからず、儒敎中種々學派ありと雖も、未だ彼れが一派の勢力に優るものあらざるなり、朱子は著書甚だ多く、啻に等身のみならず、然れども彼れが學說は主として經書の註解と語類及び文集とにあり、

朱子及び朱子學の地位を明かにせんが爲めに、支那の學問の變遷を考察せん、支那の學問は、周末より趙宋までに三變せり、周末の學問は、支那建國以來始めて煥發せしものにて、其思想の淸新なる、其氣象の活潑なる、其議論の奇拔なる、今に至りて尙ほ大に見るべきものあり、是れ當時の思想、未だ單調に歸せず、孔孟の外、諸子百家の自由に意見を述ぶるものあればなり、周末は蓋し哲學的考察の時代なり、若し更に一層の發達をなしたらんには、希臘の古代と頡頏するに足るものありしならん、惜いかな、秦の始皇、支那を統一してより自由の精神、俄に桎梏せられ、哲學的考察の如きは、殆んど全く迹を絶つに至れり、漢より唐に至るまで一千一百餘年の久しきを經るに、哲學的考察をなすもの、寥々として聞ゆ

ることなく、啻に落々たる晨星のみならざるなり、若し强ひて擧ぐれば、董仲舒、王充、楊雄、王通、韓愈の徒あれども、皆薄弱なる周末の反響に過ぎざるなり、隋唐の間、佛教徒の中に有力なる思想家を出だせりと雖も、支那獨立の思想家は、之れと雁行すること能はざりき、但前漢以來學者專ら力を訓詁の學に用ひたり、孔安國、馬融、鄭玄、趙岐、王肅、王弼、何晏、杜預の徒、周末の書類に註解を加へ、古人の思想を後世に傳ふることを務めたり、故に漢唐は哲學的考察の時代にあらずして、訓詁の時代なり、然るに趙宋に至りて學問又一變せり、北宋の時周濂溪、邵康節、張橫渠及び程明道程伊川等起りて哲學的考察をなし、直に蹤を周末孔孟の學に接せんとせり、是に於てか秦漢以來殆んど全く精神を失ひ、木乃伊の如くになれる道義の學は、復た蘇生し、人の肉となり、血となりて炎々たる活氣を吹き起し來たれり、是故に聖人は千數百年前の歷史に於て客觀的に攻究するを得といふが如き疎遠なることにあらずして、聖人の情緒は近く己れ自身の心臟に鼓動するを覺ゆるに至れり、之れを要するに、言語文

句の解釋によりて聖人の道を了解することを試みるよりは、寧ろ己れが頭腦によりて哲學的考察をなし、直に內界より聖人の域に達せんとするの學、一時に勃興せり、此の如くにして哲學的考察の時代は再び回り來たれり、然るに南宋に至りて朱子起り、北宋の學を紹ぎ、悉く之れを自家の洪鑪中に入れて、集めて大成するを得たり、而して其蘊蓄する所を以て多く古書の註解を作れり、大學と中庸とを禮記中より選出して別本とせしは、程子に始まると雖も、之れに論語と孟子とを合せて四書と稱し、悉く之れを註解せしは即ち朱子にして、其功決して尋常ならずとなす、朱子の註を新註といひ、朱子以前に行はれたる漢魏の註を古註といふ、猶ほ玄奘以前の譯經を舊譯といひ、玄奘以後のを新譯といふが如し、朱子の註は單に本文の解釋とのみ見るべきにあらず、又彼れ自身の思想なり、換言すれば、彼れが眼に映じたる孔孟の道なり、故に孔孟を併せて己れが哲學の圈套中に入れたるが如きの觀なきにあらざるなり、之れを要するに、孔子以來規模の大なる、未だ朱子の如きはあらざる

なり、孟子曾て孔子を稱して、集めて大成するものとす、此點に於て朱子最も孔子に類似せり、果して然らば朱子の如き、豈に又學術界の偉人ならずとせんや、支那にありては後世陽明學派及び古註學派即ち考證學派起れりと雖も、朱子學の勢力、最も多大なるが如し、殊に、明代、以後、官府に於て經說は朱子と一定し、進士及第の法を劃一したるを以て之を觀れば、朱子學は「オルソドックス」の地位を占めたるものと謂ふを得べし、韓國に於ても金宏弼、鄭夢周、李退溪等の如き錚々たる學者は皆朱子學派に屬する人なり、殊に退溪の如きは韓國第一の學者にして其我邦の朱子學派に及ぼせる影響も、亦決して尠少にあらざるなり、

我邦にありては朱子學は古學及び陽明學に先ちて起り、且つ徳川氏三百年間の敎育主義として學術界の重鎭となり、思想界の根底を成せり、朱子學が諸學派紛爭の間に於て前後一貫して優勢の地位を占めたるもの、其因由する所なくんばあらず、吾人の見る所によれば、朱子學が他の學派の學に對して少くも左の二種の長處を有せり、

（一）朱子學は實行と學問、即ち修德と研究と兩者を兼ねて之を全うせんとする者なり、故に道德の一方にのみ偏せず、知識の一方にのみ偏せず、兩者を合一して中庸を得るの傾向あり、之に反して陽明學は道德の實行に偏し、動もすれば、輒ち知的探究を怠るの弊あり、又蘐園風の古學及び古註學派は往々知的探究を主として反りて道德の實行を疎かにすることあるを免れざるなり、

（二）朱子學は實行と共に學問を尙ぶと雖も、其學問は實行の爲めに要する所にして、實行を離れたる學問を尙ぶものにあらず、故に單に知的探究を主とするの弊なく、必ず反りて修身の一事に歸す、是を以て朱子學は教育主義として比較的穩健なるものなり、

但〻古學派の中にて堀河一派の學は寧ろ朱子學に類するものなり、若し朱子學との共通點を擧ぐれば、第一、兩者共に道を以て自然に出づとなし、第二、氣質變化を豫想し、第三、窮理をなすことを務め、第四、聖人を學んで之に達せんとし、第五、孔子に次いで孟子を尙ぶが如き、是れなり、此の

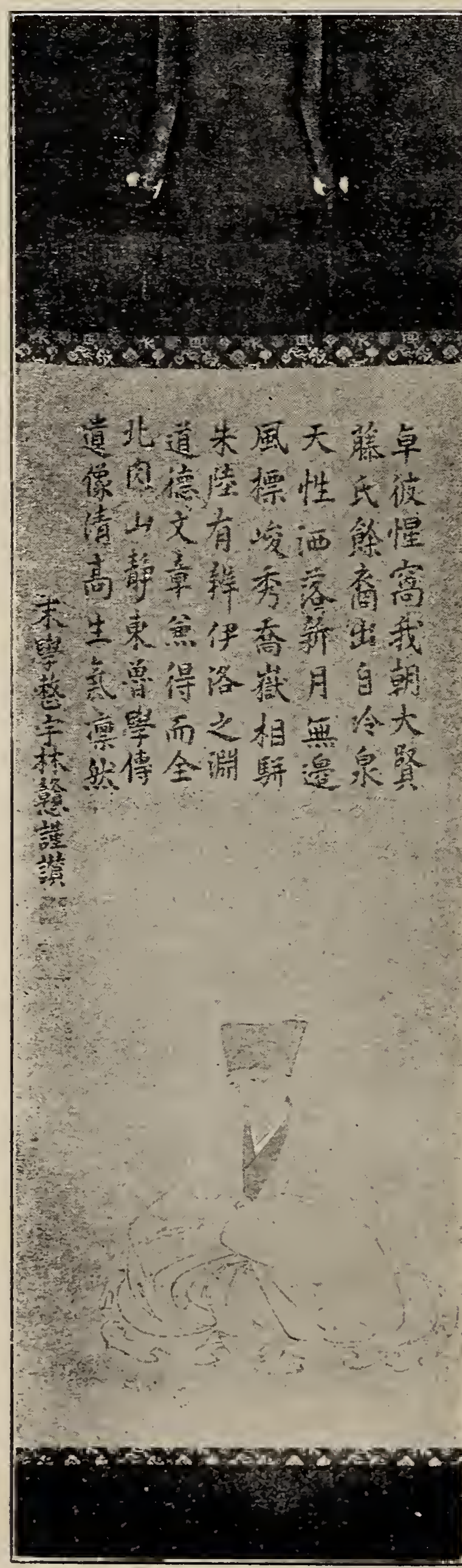
如く堀河派は其學朱子學に近きが故に修德の一點に於て殆んど同一の徑路を辿れり仁齋及び東涯の性格が如何に朱子學派のそれに似たる所あるかを見るべし、堀河一派を外にして之を言へば、朱子學派は確に如上の長處を有するものなり、試に德川時代に於ける朱子學派の代表者を擧ぐれば、藤原惺窩あり、林羅山あり、木下順菴あり、中村惕齋あり、貝原益軒あり、室鳩巢あり、悉く是れ一代の純儒にして道學先生の標本たり、就中順菴の感化力に富める、益軒の博學にして德行ある、鳩巢の操持する所に堅固なる、皆他人の及び易からざる所なり、其他山崎闇齋が宗教的克己を以て自ら律する所ありしが如き、亦以て珍とするに足るものあるなり、是等の謹嚴篤實なる人格によりて主張せられたる朱子學が慶長以來三百年間の德育に資する所の多大なりしは、何人も否定するを得ざる所なり、維新以來洋學勃興して、我邦の敎育全く面目を改むと雖も、獨り德行の一點に於ては、永く朱子學派の代表者に學ぶ所あるべきは、吾人の斷じて疑はざる所なり、

感懷十首 節四

披書見古人　反思志不高　前賢直自期　磨礪何厭勞
汗血驚鞭影　奔帆截雪濤　消除經營心　超達即人豪
吾慕紫陽學　學脈淵源深　洞通萬殊理　一本會此仁
進退任天命　從容養道心　嘆息千秋久　傳習有幾人
圍碁何其變　顏面一不同　人事率如此　變態誠無窮
何以應無窮　靈活方寸中　果知君子學　總在格知功
心官只是思　思則眞理生　或在一身上　又入天下平
古今天地事　莫不關吾情　寂然一室中　意象極分明

橫井小楠

藤原惺窩之肖像


卓彼惺窩我朝大賢
藤氏餘裔出自冷泉
天性洒落新月無邊
風標峻秀喬嶽相駢
朱陸有辨伊洛之淵
道德文章兼得而全
北肉山靜東魯學傳
遺像淸高生氣凜然
末學整宇林戇謹讃

第一篇　藤原惺窩及び惺窩系統

第一章　藤原惺窩

第一　事蹟

元弘建武以來積年の兵亂、漸く鎭靜に歸し、海內始めて太平を謳はんとするに當り、文學復興(即ちルネッサンス)の率先として世に出でたる大儒を藤原惺窩となす、是れ所謂京學の祖なり、惺窩名は肅、字は斂夫、(一に斂夫に作るは誤なり、)惺窩は其號なり、其他柴立子、廣胖窩、竹居、都勾墩及び北肉山人の號あり、永祿四年(即ち紀元一五六一)を以て播磨國三木郡細河村に生る、是れ實に信玄謙信川中島に戰ひたるの年なり、惺窩は我邦第一の名門たる藤原家に屬し、歌人として有名なる中納言藤原定家十二世の孫にして、彼れが祖先は世〻冷泉家と稱し、歌道を以て顯はれ、播磨國三木郡細河村を領せり、父を爲純といひ、參議にして侍從たり、男子五人あり、惺窩は其三男たり、偶〻土豪別所長治の爲めに其領地を侵掠せらる、爲純乃ち

長子爲勝と之れを禦ぎしも、利あらずして皆死す、是時に當りて織田信長覇を中原に唱へ、羽柴秀吉其臣として之れを助く、惺窩乃ち秀吉に告ぐるに事情を以てし、死者の爲めに讐を報いんと欲す、秀吉答ふるに時を待つに如かざるを以てす、是に於てか遂に其地を失ふ、惺窩幼にして穎悟、七八歳の時、僧東明に龍野に從ひ、心經法華經等を學ぶに、其進歩殊に著しきを以て人呼んで神童と稱す、幾もなく、剃髮して佛門に入り、名を蕣といひ、妙壽院と號し、博く禪敎を學び、兼て群書を見る、後、京師に游び、相國寺に入り、益〻力を佛敎の研究に用ふ、是時五山にありては詩學尚ほ盛にして、其中才鋒を以て稱せらるゝものなきにあらず、然れども惺窩に遇へば、即ち折北して支へず、是を以て惺窩の名、佛門に重んぜらる、天正十九年關白豐臣秀次五山の詩僧を相國寺に會し、聯句を作りて其技を鬪はしむ、惺窩初め一たび往いて、後、復た赴かず、衆之れを強ふれども肯んせず、或は諷するに關白の旨を以てするに、惺窩頭を掉りて曰く、

凡そ物は類を以て聚まる、韓愈孟郊、才の相若くが如くにして、後、聯句

を作りて可なり、若し然らざれば、猶ほ隻脚に木屐を着け、隻脚に草鞋を着くるがごときか、其耦せざるや必せり、予偶(即ち木偶)に耦せらるゝを欲せざるなり、

秀次之れを聞いて悦ばず、是時に當りて朝鮮の役あり、太閤秀吉軍を整へて肥前の名護屋にあり、惺窩乃ち秀次を避けて名護屋に赴き、豐臣秀秋に遇ふ、秀秋惺窩と舊相識たるを以てなり、秀秋之れを邀へて客となす、彼れ年少にして粗豪なりと雖も、惺窩を敬憚し、飲宴嬉戲の間に屬すと雖も、惺窩入りて來たると聞けば、必ず容を改めて以て之れを待つ、其性行之れが爲めに改むる所多しといふ、德川家康亦軍中にあり、惺窩の賢なるを聞いて、時々之を延見し、問ふに聖學の要を以てし、心竊に之れを敬重す、是れより惺窩豐後に遊び、江戸に赴き、又京師に還りて、獨り僑居にあり、此時宋儒性理の書を讀み、遂に佛敎に慊焉たらず、佛門を脱して儒敎に歸せんと欲す、然れども當時良師なきを憂ひ、忽ち奮發して明國に入らんと欲し、直に筑陽(筑前博多ならん、)に到り、渡航の途に上ぼれり、是れ

實に文祿二年の事なり、其出發の際友人に贈れる歌あり、云く、

なれくらし、人の心を、つきにはなに、おもひいくへの、山のおもかげ、

然るに彼れ會〻風濤に遇ひ、漂流して鬼界が島に到れり、時に又歌あり、云く、

やまと歌の、あはれかけゝり、目に見えぬ、鬼のしまねの、月のゆふなみ、

其時又歌あり、云く、

薩摩がた、八重のしほかぜ、告げやらん、あはれうきみは、おやだにもなし、

けふりたつ、澳の小しまや、いにしへの、おもひのいろを、なほのこしつゝ、

見よいかに、雲路の鳥は、とび消えて、かへるゆうべの、山もありけり、

鬼界が島は今の硫黄島にして、薩摩の河邊郡に屬す、俊寛が曾て流罪に處せられたる所なり、惺窩其年の冬、鬼界が島より出でゝ、鹿兒島灣口の山川港に泊し、偶〻正龍寺を訪ひしに、僧問得なるものありて四書新註の

和訓を徒弟に授くるを聞き、大に心に之れを怪み、試みに假りて之れを誦讀するに、其施す所の和訓、其義に稱はずといふことなし、因りて其本づく所を問ふて始めて是れ南浦の點する所に係るを知れり、南浦の點する所は即ち岐陽及び桂菴の傳ふる所を修正せしものなり、惺窩偶然にも南浦の點を得て、乃ち歎じて曰く、

今將に明に渡らんとするも、亦他なし、惟〻之れを求むるのみ

と、因りて問得に請ふて悉く之れを寫して京師に還り、以爲く、聖人常の師なし、吾れ之れを六經に求めて足りなんと、乃ち戸を杜ぢ客を謝して之れを六經に求め、最も深く四書新註を究め、遂に儒を以て家を成し、京師學（單に京學ともいふ）の祖たるに至り、元和五年秋九月十二日を以て卒す、享年五十九、京師の相國寺に葬る、

惺窩、德川家康の知遇を受けたるの外、當時の權門勢家に優待せられたること一再ならず、慶長の初め少將豐臣勝俊、長嘯子と號し、潛居して京師の東山の靈山(りやうせん)にあり、好んで和歌を詠じ、且つ多く書を藏す、曾て惺窩

の名を聞いて之れを招き、學問文藝に就いて共に論談評隲する所ありき、惺窩文集中長嘯子に寄する詩歌文章の少からざるを以て之れを見れば、其交誼の深厚なるものありしを知るべきなり「赴靈山長嘯子看花」の作に云く、

君是護花花護君、有花此地久留君、入門先問花無恙、莫道先花更後君、

龍野の城主赤松廣通（一説に政村といふは誤なり）學を好み、深く惺窩を尊信し、嘗て學校を刱し、釋奠を行ふ、惺窩竊に以爲く、此人當に斯道を期すべしと、時に石田三成佐和山に居り、亦惺窩を敬重し、戸田内記なるものをして之れを聘せしむ、惺窩往かんと欲して果たさず、明年三成敗死するに及んで廣通亦自殺す、惺窩爲めに慟哭せりといふ、歌集に「悼赤松氏」三十首あり、今其三首を擧げんに、云く、

かくばかり、終りたゞしき、筆の跡を、みるかひもなく、みだれてぞ思ふ

神無月、思ふもかなし、ゆふしもの、おくやつるぎの、つかのまの身を、

つるぎ羽の、くだきてし身を、鴛鳥の、おしむかひなく、われぞなくなる、

朝鮮の刑部員外郎姜沆歸化して龍野にあり、一たび惺窩を見て盎然心醉し、稱揚已まず、惺窩が姜沆に與ふる書に云く、

赤松公今新書四書五經之經文、請予欲以宋儒之意、加倭訓于傍、以便後學、日本唱宋儒之義者、以此冊爲原本、嗚呼流水之知音、雖無子期、後世之知己、又有子雲乎、

と、姜沆嘗て文章達德錄の序を作りて惺窩を推尊して曰く、

斂夫王綱の振はず、亂賊の橫恣なるを以て、幼より隱居して自ら樂む、余が日東に落つるもの三年、斂夫を王京に得て之れと遊ぶもの數月、始めて其人となりを知りて、而して其學たるを叩く、既に其學たるを叩いて、而して益〻其人となりを信ず、其人となりや韜晦して聞達を求めず、人聞くべくして見るべからず、見るべくして知るべからざるなり、善を見ては驚くが若く、惡を疾んでは風の如し、道の合はざる所は、王公大人と雖も、顧みざる所あるなり、簞瓢陋巷、之れに處りて裕如たり、義の不可なる所は、千駟萬鍾と雖も、屑しとせざる所あるなり、其學

たるや、小道に局せず、師傳に因らず、千歳の遺經に因りて千歳の絕緒を繹ぬ、云云、

と、亦以て惺窩の人物性行を證するに足るなり、但、惺窩が姜沆に與ふる書に宋儒の意を以て和訓を四書五經に加ふるものは、己れが手に成るものを以て嚆矢となすとするは、甚だ怪むべきことなり、四書に和訓を加ふるは岐陽を以て率先となし、桂菴南浦之れに次いで之れを修正し、遂に之れを惺窩に傳ふるに至りしこと、史的事實の以て徵すべきものあるなり、唯、五經の和訓は未だ之れあらざりしも、周易程傳本義の如きは、已に南浦の和訓を加へしものありしなり、是故に惺窩が和訓を加ふるを以て全く己れの獨創に出づるが如くに公言せしは、蓋し彼れが一生の過失とせざるを得ざるべし、惺窩も本と禪宗の僧にして、岐陽、桂菴、南浦等と同じく宋學を好みしものにて、彼等と甚しき差異あるにあらず、然れども惺窩は身佛門を脫して全く儒者となりて宋學を唱道せり、是れ其大に岐陽、桂菴、南浦等と地位を異にする所以なり、物徂徠が都三

近に與ふる書に云く、

昔在二邃古一、吾東方之國、泯々乎罔二知覺一、有二王仁氏一而後民始知レ字、有二黄備氏一而後經藝始傳、有二菅原氏一而後文史可レ誦、有二惺窩氏一而後人々言則稱レ天語レ聖、斯四君子者、雖三世尸二祀乎學宮一可也、（徂徠集巻廿八）

と、惺窩の我邦文教に功ある、洵に徂徠の言ふ所の如し、惺窩佛門を脱して儒教に歸せるを以て僧侶之れに遇へば、之れと相容れざるが如き形迹あり、關ヶ原の亂平ぐや、家康京師に入り、屢〻惺窩を延見す、惺窩儒服して入りて見ゆ、家康乃ち其言を聽かんとす、時に僧承兌及び靈三なるもの、座にあり、惺窩に其眞を捨て俗に還るを詰る、惺窩乃ち答へて曰く

佛者より之れを言へば、眞諦あり、俗諦あり、世間あり、出世間あり、若し我れを以て之れを觀れば、人倫皆眞なり、未だ君子を呼んで俗とすることを聞かざるなり、我れ恐くば僧徒乃ち是れ俗ならんことを、聖人何ぞ人間世を廢せんや、

他日惺窩又承兌靈三と某所に會す、壁間に草書一幅を掛く、皆讀むこと

能はず、乃ち草書の讀み難く、楷書の讀み易きをいふ、惺窩之れを一覽し輙ち朗誦して曰く、

能く眞を讀むもの、亦能く草を讀む、

と、衆益〻悅びず、此の如くにして惺窩屢〻承兌靈三等と衝突する所あり、是に於てか、復た出づるを欲せず、乃ち洛北の市原村に退隱して深く自ら韜晦せりといふ、

慶長十八年林羅山、東照公に建言し、學校を京師に創設し、惺窩を以て祭酒(即ち校長)となし、廣く四方の俊髦を敎育せんと欲す、公之れを嘉納す、因りて地所の選擇に着手せり、然るにたま〳〵大阪の役起り、公亦尋いで歿す、是を以て其事遂に寢む、後、大臣列侯相謀りて惺窩を台德公に推薦す、公亦之れを敬信す、然れども未だ急に決せず、元和五年、方に聘禮を議するに及んで惺窩會〻下世す、故に遂に官途に就かず、乃ち終身民間の一大儒たるを得たり、林羅山が惺窩を論じて

那波活所、惺窩を稱揚して曰く、嗚呼噫嘻先生之嘉言善行。人々無レ不レ知レ之。所レ謂四海蒼生口是銘者乎。

先生不レ出而道益高ニ於當時一、先生能言而道益行ニ於後世一者乎、といふもの洵に當れり、惺窩の人となり、寛厚慈仁なりしが如し、後光明天皇の御序にも「寛仁大度之君子也」とあり、以て其從容迫らざるの狀を想見すべし、然れども其義の存する所に至りては、亦儼として侵すべからざるものあり、茅窓漫錄に彼れを形容して「溫良恭儼威而不レ猛」といふもの、蓋し當れり、或る時某惺窩を訪ひ、窓前の蜂窠を見て、其蜂を殺さんとす、惺窩其螫すことなきを以て之れを止む、然れども某起ちて扇を揭げて頻りに之れを撲たんとす、惺窩遂に悉く其蜂を放つ、後、某と之れが爲めに絶交せり、乃ち彼れが同情の蟲類にまで及べることと、及び不仁の人を憎めることとを察知すべきなり、

惺窩、山水を好み、花草を愛し、興に乘じて吟詠し、白樂天の風流を喜び、又彭澤（卽ち陶淵明）の人となりを慕ふ、其俗情を超脱せるの氣品、亦以て想見するに餘りありといふべきなり、

惺窩左の眉の傍ら黑點三寸餘あり、俗に所謂「クロクサ」なり、眼に重瞳子

玉山遺稿〔卷之八〕に惺窩先生肖像贊あり。

あり彼れ儒に歸するの後、唯〻其項髮を餘して其長きを厭はず、視るもの之れを怪む、然れども其端嚴を憚りて其故を問ふものあるなし、彼れ性、酒を嗜む、然れども或は旬日を經て尙ほ唇を沾さゞることあり、或は痛飮することあれども、醉ふて亂れず、平生往來雜遝を好まず、然れども人に接すれば欣然坐談して已まず、若し來たり問ふものあれば、其人品いかんによりて之れを敎誨す、譬へば猶ほ鐘を撞くが如く、或は少しく鳴り或は大に鳴る、總べて之れに對する者の力量によりて異なれりといふ、

惺窩は詩を作り文を屬し、又和歌に巧に國文に長ぜり、彼れは定家の後裔たる丈ありて最も和歌と國文とを能くせり、詩文は粗大にして未だ精工ならず、其學問の如きも、規模廣大ならずとせずと雖も、深遠は未だし、彼れは畢竟創業の人にして、其功は唯〻率先して德川氏三百年の文敎を開拓せしにあるのみ、

第二　著書

惺窩文集五卷林道春編輯
同　續編三卷菅得菴編輯
惺窩文集十二卷藤原爲經編源光國校

此文集は體裁に於ては前者より一層能く整頓せりと雖も內容に於ては相互に異同あり、學者宜しく兩者を參照すべきなり、

惺窩和歌集五卷仝上

文集と歌集とを合して凡そ十七卷あり、是れ惺窩の孫藤原爲經の編輯する所にして、卷首に後光明天皇の御序あり、其中に云く「近世有北肉山人惺窩先生者、寬仁大度之君子也」云云と、儒林以て非常の榮譽となす、

惺窩和歌集一卷寫本〇內閣本

文章達德錄百卷

文章達德錄綱領六卷

此書は作文の方法に關する古人の言論を蒐集して之れを分類せるものなり、卷首に朝鮮人姜沆及び堀杏菴の序あり、前に掲げたる文章達德錄の綱領と見えたり、

千代もとくさ一卷

此書は惺窩が其母に儒敎を說示せんが爲めに著はす所なり、岡山の菱川岡山(名は賓、字は大觀、)之れが序を作れり、天明八年の刊行に係る、近くは又日本倫理彙編卷之七に收載せり、世に假名性理と題せる一卷の書あり、是れ此書の異名に過ぎざるなり、

第三　學說

惺窩の學說を敍述するに當り、先づ其何故に佛敎を棄てゝ儒敎に歸したるかを考察するを要す、林羅山が撰ぶ所の惺窩先生行狀中に謂へるあり、云く、

先生以爲く、我れ久しく釋氏に從事す、然れども心に疑あり、聖賢の書を讀んで信じて疑はず、道果して玆にあり、豈に人倫の外ならんや、釋氏既に仁種を絕ち、又義理を滅す、是れ異端たる所以なり、

此れに由りて之れを觀れば、惺窩は佛敎の世間を侮蔑して、出世間を企圖し、一切人間の理義を顧慮せざるの弊を看破し、乃ち佛門を脫し、還俗して儒者となれり、然れども彼れ已に儒者となれるの後に至りても、尙ほ妄りに佛敎を非議するが如きことをなさゞりき、彼れ論じて曰く、

上に治統の君あり下に道統の師あり、則ち渠れ何ぞ我れを妨げん、若し其れ無ければ、則ち渠れをいかん、且つ余が如きもの、堅白未だ足ら

ずして妄りに磨涅を試みば還りて渠れが爲めに議せられん愧づべきこと、之れより甚しきはなし、唯自ら警め自ら勤むるのみ(答林秀才書)

と、言論よりは寧ろ實行によりて佛敎徒と頡頏せんとせし彼れが氣勢、此れに由りて知るべきなり、又行狀の中に左の記事あり、云く、

先生幼にして學び、壯なるに至りて怠らず、釋老に出入し、諸家を閱歷し、兼ねて日本紀、萬葉集、歷代の倭歌詩文等を習ふや、其間聖賢の書を讀んで而して後、異學を棄てゝ醇如たり、云云、

彼れは佛敎の外道敎及び神道の書類をも攻究せしと雖も、遂に儒敎に歸し、之れが純然たる系統を開始するを得たり、

惺窩は朱子の學を崇奉せり、其「如朱子者、繼往聖開來學、得道統之傳者也」といふは、之れが爲めなり、然れども彼れ又陸象山を回護して、之れを朱子と調和せんとせり、其言に云く、

紫陽(朱子の事)質篤實にして、邃密を好む、後學支離の弊あるを免れず、金谿

（象山の事）質高明にして簡易を好む、後學怪誕の弊あるを免れず、是れを異なりとするものなり、人其異を見て其同を見ず、同は何ぞや、同じく堯舜を是とし、同じく桀紂を非とし、同じく孔孟を尊び、同じく釋老を排す、天理に同うするを公となし、人欲に同うするを私となす、然らば則ちいかん、學者各〻心を以て之れを正し、身を以て之れを體し、優柔饜飫し、圓機流轉し、一旦豁然として貫通するときは、則ち同か異か、見聞の智にあらずして而して必ず自ら知りて然して後已む（答林秀才書）

惺窩が朱陸二氏を調和する處、頗る禪宗頓悟の說に類す、然れども學問の根柢より達觀し來たれば、兩者の間、固より融合一致して些の撞着をも認めせざるなり、惺窩其區々たる枝葉、即ち差別の一遍に拘泥せず、更に之れを超脱して、其左右逢原、合して一を成す終局の點より工夫を着け、以て自家の立脚點を定む、是れ其規模の大なる所以なり、又寄林三郎書に云く、

先哲尙ほ資稟の近き所によりて、數字を點出して、人に示して警策を

なす、各〻入頭の處を得たり、所謂大小程子の敬、朱子の窮理、金谿の易簡、陽明の良知等なり、

又惺窩答問に云く、

聖賢の千言萬語、只人の理會し得んことを要す、故に示す所同じからず、入る所即ち一なり、且つ古人各〻自ら入頭の處あり、周子の主靜、程子の持敬、朱子の窮理、象山の易簡、白砂の靜圓、陽明の良知の如き、其言異なるに似て入處別ならず、（羅山文集卷三十二、第七葉左）

是れ亦大小程子、朱子、象山、陽明等を擧げて悉く自家藥籠中の物となすものにて、凡そ吾人の悟入すべきの端緒、必ずしも一に拘はらざるを意味するなり、寄林三郎書に又云く、

陽明が詩一冊、丘濬が詩一冊、暫く之れを留む、陽明文錄、僧三要が書室にあり、是れより先き借りて瞥爾として過ぎ了はる、云云、

又曰く、

陽明が詩、灑落愛すべし、

と、乃ち知る、惺窩が陽明の詩文をも好んで之れを講讀し、朱子學を以て自ら標榜するの故を以て之れを擯斥するの愚をなさゞりしを、寛永の末に至り、中江藤樹始めて陽明學を唱道すといふと雖も、始めて陽明の詩文を講讀せしものは、惺窩其人なりき、惺窩は此の如く宋明の諸家を貫穿して之れを包容するの概ありしを以て純然たる朱子學派なりといふを得ず、佐藤一齋曰く、

我邦首として濂洛の學を唱ふるものを藤公（即ち惺窩の事）となす、而して早已に朱陸を并取す、

眞に其言の如し、然れども尙ほ推して之れを考ふるに、惺窩は啻に宋明の諸家を包容するのみならず、又殆んど儒佛二敎を調和するかの如き態度あり、其柴立子說贈蕣上人の一文は、已に儒敎に歸せる柴立子が尙ほ佛門にある蕣上人に贈るに擬するものにして、稍遊戲の如くにして遊戲ならず、試みに之れを讀むに、論旨太だ奇なり、其中謂へるあり、云く、

儒釋の道、造る所異なりと雖も、力を用ふるの功、亦應に殊ならざるべ

し、眞に力を積むの久しきに至り、一朝豁然の境に造りては、則ち吾儒の所レ謂知至るにして、而して佛者の所レ謂契悟なり、

と、儒佛二敎が如何に相異の點を有するも、亦得道の點に於て一致する所なしとせず、是れ惺窩の此に道破する所なり、蓋し彼れは異中に就いて其同を把捉するものなり、然れども若し其形式に就いて之れを論ぜば、儒敎と佛敎と、左支右吾、相容れざるものあり、是故に惺窩は儒佛二敎の一致を道破すと雖も、已に儒敎に歸せるの後は、佛敎に對して復た何等の同情をも表することなし、是れ其造る所異なるが爲めか、重建二和歌浦菅神廟一碑銘に

列國侯伯達官、唯有下佞二賣瞿曇一衒中耶蘇上者之譸張爲レ幻、而未レ聞レ有下崇二儒敎一者上、彝倫攸レ斁、是之懼、

と云ひて、深く儒敎の振はざるを慨し、又寄二林三郞一書に

佛書は今日の急務にあらず、異書は先哲の戒むる所、然れども亦彼の崖略を知らば、則ち其術中に墮ちざらん、

と云ひて、佛書を攻究するの必要を暗指せり、其佛書を攻究するの必要は、佛教を尊崇し、佛門に歸依するが爲めに之れあるにあらずして、唯〻佛教徒の術中に陷るが如き不覺を取らざらんが爲めに之れあるのみ、其他「千代もとくさ」の中往々學者を警發するに足るものあり、因りて之れを左に擧ぐ、

一

明德とは天より分れ來て、我心となりて、いかにも明かにして、一もよこしまなるこゝろなく、天道にかなふたるものを明德といふなり、天より生れつきたるごとく、此明德を明かにみがきたてたる人を聖人といふなり、又人間と生れ來てより後に、人欲といふものあり、欲心ふかく見る事聞く事にまよふものをいふなり、此人欲さかむになれば、明德おとろへて、かたちは人にして、心はとりけだものに一になるなり、たとへば、明德は鏡の明かなるが如し、人欲は鏡のくもりなり、日々夜々に此明德の鏡をみがゝざれば、人欲の塵つもりて、本心を失ふ、明

德と人欲とは敵味方なり、一方かてば、一方は必ずまくるものなり、

二

天の本心は、天地の間にあるほどの物をさかえるやうにあはれみ給ふなり、かるがゆゑに人となりては、人に慈悲を施すを肝要とするなり、慈悲を施すに次第あり、先づ一門一類によりどころなき貧者ならば、するく〵までも尋ね求めて、之れにあはれみを加へ、其後他人の親もなく、子もなく、たよりもなきものあらば、分々に應じて物を與ふべし、天の道には、次第のみだれざるを肝要とするなり、先づ我家の内、眷屬をよくして、其後國を治め、天下へ慈悲を施すべきなり、此の如くすれば人の恨を受けぬものなり、人に慈悲を施せば、又よく報あり、報を受けんとて慈悲をするは、慈悲にあらず、又富貴なるものに物を與へたるも、天の道にかなはず、慈悲にあらず、

三

人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中、堯舜禹の三聖人此十六字をも

て、天下を治め給ふ、云云、此十六字、萬世聖人心學の傳授なり、此十六字のこゝろは、人心とは人の心なり、道心とは天の心なり、我心のはじめは、天の心と一體なり、然れども人と生れ來りては、人心といふものゝ出來るものなり、上智の人と雖も、人心あり、又下愚の人と雖も、道心あり、此二つのもの、人の胸中にまじはりてあるものなり、之れを治むるゆゑを知らざれば、人心主人となり、道心被宮となりて、天理ほろぶるなり、此人心と道心とのふたつの間を、くはしくして察すべし、又かの本心を正しくして、胸中にはなさずして、一にする事すこしもたえぬ間なきやうにするときは、道心主人となり、人心被官となりて、天理日々に明かにして、天心にかなふ、云云、人心は長じやすく、道心はほろびやすし、譬へば、いばらからたちはしげりやすく、牡丹芍藥はきえやすきが如く、惡人は盛んにして、善人は稀なり、四書五經其外萬卷の書をまなぶも、此十六字のこゝろを知らん爲めなり、筆にあらはし、口にいひほどき難き妙處あり、然れどもこれを本として工夫をめぐらさば、聖

人のさかひにも至るべし、欲ふかく、民をしへたげ、人をたらし、財寶を集むる事、人心の長上なり、又物知りと人に言はれんと思ふも、人心なり、只心をみがゝん爲めの學問なり、又藝能にすぐれて、人に譽められんと思ふも、人心なり、我職をみがくは道なり、武道をはげみて、名を高うせんと思ふも、人心なり、まして所領を受けんなど丶思ひてするぶんは、更に沙汰にも及ばず、たゞ君の爲めにいのちを捨つる事、道なりと思ふべし、鳥類畜類だにも、其役々はつとむるならひなり、人となりて鳥にだも若かざるべけんや、又我家のうちをも齊へず、眷屬の末々の貧しきをもみつがずして、他人に物を與ふるも、人心なり、一類なりとも、富貴なる人にたからを與ふべからず、他人の貧しき人を惠むを仁といふなり、

其他「千代もとくさ」の中に儒敎と神道とを調和して、其契合一致を論ぜり、其言に云く、

日本の神道も、我心をたゞしうして、萬民をあはれみ、慈悲を施すを極

意とし、堯舜の道もこれを極意とするなり、もろこしにては、儒道といひ、日本にては神道といふ、名はかはり、心は一つなり、

此れに由りて之を觀れば、惺窩は、啻に儒佛二敎を調和せしのみならず、又神儒二敎を調和し、區々たる畛域を超脫して一切を融合せる博大の見解を有せる者の如し、彼れに就いて尙ほ一つの注意すべきことあり、何ぞや、彼れ已に佛敎より轉じて儒敎に歸すと雖も、因果應報の說の如きは、依然として佛敎のそれを維持するものに似たり、「千代もとくさ」の中に謂へるあり、云く、

惡人なれども、一代の富貴にさかえたるあり、善人なれども、貧しきものあり、之れにこゝろ二つあり、先祖の人善人にて、慈悲を施し、人を惠みぬれば、其子孫惡人なれども、榮える事あり、又吉日良辰に生れて、富貴なるものあり、然れども其人惡人なれば、一代か、又子孫にむくい、ほろぶるなり、夏の桀、殷の紂王、日本にて賴朝、又は明智日向守がたぐひの如し、又惡日にうまれて貧人あり、

彼れは又別に「五事之難」を論じて、其中に亦因果應報の理を叙述せり、其五事といふは一に天道、二に災難、三に因果、四に有₂正直而貧賤者₁、有₂邪曲而富貴者₁、五に惡人之榮、是れなり、彼れ有₂正直而貧賤者₁、有₂邪曲而富貴者₁、を論じて曰く、

凡そ正直なるもの、義に近づく、故に常に己れに差づるを知りて、而して未だ利に走るを知らず、是を以て必ず富まず、邪曲なるもの、欲に溺る、故に日夜汚穢に處りて利に放つ、是故に必ず富む、

と、尙ほ舜の聖にして富むは、氣の通正なるを得て、吉星の運に乘ずとし、蹠の邪にして富むは、吉星の運に乘ずと雖も、氣の偏塞なるを得とせり、其思想の幼稚なる、今更に論ずる迄もなきことなり、歌集の末に敎訓の書一篇を附載す、凡そ十章あり、一に君臣の事、二に父子の事、三に夫婦の事、四に兄弟の事、五に朋友の事、六に嫡子庶子の事、七に女子の事、八に妾婦の事、九に交隣國の事、十に隱居の事、今之れを一讀するに、別に何等の卓見もなし、然れども平易に儒敎の旨意を叙述せり、當時にありては有

益の書なりしならん、此書は惺窩が後陽成帝の命を奉じて之れを著はし、謹んで闕下に献上せしものなり、一說に此書の旨意は幕府の大老本多正信の實行する所となり、當時の政治上に影響する所少からざりしといふ、

惺窩又門人吉田貞順の爲めに、舟中規約を作る、其文左の如し、云く、

一　凡回易之事者、通有無而以利人己也、非損人而益己矣、共利者雖小還大也、不共利者雖大還小也、所謂利者義之嘉會也、故曰、貪賈五之、廉賈三之、思焉、

一　異域之於我國、風俗言語雖異、其天賦之理、未嘗不同、忘其同怪其異、莫少欺詐慢罵、彼且雖不知之、我豈不知之哉、信及豚魚、機見海鷗、惟天不容僞、欽不可辱我國俗、若見他仁人君子、則如父師敬之、以問其國之禁諱、而從其國之風敎、

一　上堪下輿之間、民胞物與、一視同仁、況同國人乎哉、況同舟人乎哉、有患難疾病凍餒、則同救焉、莫欲苟獨脫、

一　狂瀾怒濤雖險也、還不若人欲之溺人、人欲雖多不若酒色之尤溺人、到處同道者相共匡正而誡之、古人云、畏途在袵席飮食之間、其然也、豈可不愼哉、

一　瑣碎之事記於別錄、日夜置座右以鑑焉、

是れ海外貿易の爲めに極めて適切なる舟中規約にして、其中又惺窩の宏量雅懷をも窺ふべきものあるなり、殊に其「凡そ回易の事は有無を通じて、以て人己を利するなり、人を損じて己れを益するにあらず」云云と云へるが如き、言簡なりと雖も、貿易本來の趣意を道破して、復た餘蘊あるなし、又其「少しも欺詐慢罵すること莫れ」云云、「惟れ天、僞を容れず、欽んで我國俗を辱むべからず」と云へるが如き、貿易上最も顧慮すべき點にして、今日と雖も、寸毫も異なる所あるにあらず、信用は貿易の際、些の虛僞を交へざるによりて得らるゝものなり、然るに我邦の商人にして、外國と貿易をなすもの、之れを知らず、屢、虛僞の行爲あり、是を以て信用を失ひ、我邦の品位を傷づくること實に少しとせず、惺窩の言、一般貿易商

に適切なりといふべし、又其「上堪下輿の間、民胞物與、一視同仁」と云へるが如き、四海同胞の旨意を聲明し、人道博愛の精神を説示するものと見るを得べし、又其「到る處道を同うするもの、相共に匡し正うして之れを誡めよ」といへるが如きも、舟中の規約として無かるべからざる所なり、貞順は安南と通商せるもの、故に此舟中の規約あり、貞順が事は門人の條に詳なり、

第四　惺窩門人

林羅山、名は忠、其事蹟は後に出だす、羅山の惺窩先生行狀によれば、惺窩嘗て人に語げて曰く、「近時皆驢鳴犬吠なり、故に久しく筆硏を廢す、今夫れ道春は予を起すもの、韓山の片石、共に語るべきのみ」と、乃ち羅山が惺窩門の高足弟子として深く屬望せられしこと、推して知るべきなり、

松永尺五、名は遐年、字は昌三、小字は昌三郞、尺五と號し、又講習堂と號す、平安の人、六十六歲にして家塾に卒す、或は明曆元年とし、或は明曆三年とす、未だ其何れか是なるを知らず、門人木下順菴、宇都宮遯菴等あり、尺五の事蹟は先哲叢談卷二に出づ、

那波活所、名は觚、字は道圓、播磨の人、正保五年を以て歿す、享年五十四、堀杏菴、名は正意、字は敬夫、杏菴と號し、又杏隱と號す、近江の人、當時林羅山、松永尺五、及び那波活所と倶に惺窩門の四天王と稱す、杏菴は儒に

して醫を兼ぬ、嘗て尾張侯に仕ふ、寛永十九年十一月廿五日を以て歿す、年五十八、芝切通金地院に葬る、物徂徠が「與屈景山書」に云く、

余不佞髫年の時、之れを先大夫に聞く、昔し洛に惺窩先生なるものあり、其高第弟子羅山活所諸公の若きもの五人、名、海内に聞ゆ、皆務めて辨博を以て相高ぶる、而して屈先生は、獨り溫厚の長者たり、乃ち四人の間に詘然として退讓自ら將きゆ、名の高きを求めず、其東都に來たる、先大夫亦嘗て一二接見すと云ふ、夫れ儒者斷々古より然りとなす、而るに乃ち能く爾るもの、千百人中一人のみ（徂徠集卷之廿七）、

と、乃ち杏菴が謙讓の人たりしを知るべきなり、杏菴二子あり、長、名は正英、立菴と號し、安藝に仕へ、次、名は道鄰、尾張に仕ふ、立菴二子あり、玄達といひ、正朴といふ、玄達の子を正超といふ、正超字は君燕、景山と號す、徂徠と仝時代の人にして學名あり、正朴、木下順菴の女を娶りて正修を生む、正修字は身之、習齋と號し、又南湖と號す、名聲景山と相對す、

其系圖左の如し、

堀杏菴─┬─正英─┬─玄達─正超
　　　　│　　　　└─正朴─正修
　　　　└─道鄰

今第一高等學校の敎授堀鉞之丞といふ人あり、是れ杏菴の遠裔なり、杏菴が事蹟は日本古今人物志〔卷五〕先哲叢談〔卷之二〕皇國名醫傳〔卷之上〕及び近世叢語〔卷之四〕に見ゆ、

菅得菴、名は玄同、字は子德、得菴と號し、又生白室と號す、播磨の人、得菴、四天王の中に入らずと雖も、亦之れに次いで有名なるものなり、先哲叢談〔卷之一〕に「惺窩高第弟子五人、得菴其一也」といふを以て之れを知るべし、寛永五年六月十四日、家人皆出でゝ、祇園の祭典を觀る、得菴獨り家にありて書を讀み、覺えず微睡す、弟子安田安昌といふもの、潜に來たりて、之れを刺し殺す、時に年四十八、得菴、惺窩續集を編輯せるもの、林羅山其碑銘を作る、羅山文集〔卷第四十三〕に見ゆ、又其事蹟は日本古

今人物志〔卷五〕及び先哲叢談〔卷之一〕に見ゆ、

三宅寄齋、名は島、字は亡羊、寄齋は其號なり、又江南野水翁と號す、通稱は玄蕃、和泉の人、先哲叢談後編〔卷之一〕に「其學無常師」といへり、然れども、古今人物史に「師事惺窩先生」とあり、故に今之れによる、寄齋天正八年正月元日を以て生れ、慶安二年六月十八日を以て歿す、享年七十、洛北の鷹峯に葬る、寄齋、男なし、乃ち門人合田道乙を養ふて以て子となし、女を以て之れに妻はす、道乙名は子燕、鞏革齋と號す、寄齋が事蹟は日本古今人物史〔卷之五〕先哲叢談後編〔卷之一〕及び近世叢語〔卷之七〕に見ゆ、

石川丈山、名は凹、初の名は重之、字は丈山、俗稱は三彌、後に嘉右衛門といふ、號は種々あり、或は六々山人といひ、四明山人といふ、其他凹凸窠、大拙、烏鱗等皆其別號なり、三河の人なり、武人の家に生れ、少壯にして勇氣あり、元和元年大坂の役にあり、獨り竊に陣營を出で﹅、敵の首を斬りて二級を得たり、然れども其軍令を犯すを以て黜けらる、後叡山の

西麓一乘寺村に隱れ、翰墨を以て自ら娛む、嘗て漢晋より唐宋に至るまで能詩のもの三十六人を選び、畫工狩野守信（即ち探幽）をして其像を寫さしめ、自ら其詩各〻一首を錄し、之れを其居る所の堂に揭げ、號して詩仙堂といふ、顯官鉅公にして來訪するものあれば、彼れ悉く之を謝絕し、唯〻林羅山、堀杏菴、野間三竹、僧元政及び明の陳元贇の徒と相交はる、後水尾帝屢〻之れを徵せども、固く辭して出でず、和歌一首を作りて其志を述ぶ、云く、

渉らじな、瀨見の小川の淺くとも、老の波そふ、影ぞ恥づかし、

又嘗て富士山の詩を作る、云く、

仙客來遊雲外巓、神龍棲老洞中淵、雪如紈素煙如柄、白扇倒懸東海天、

是れ人口に膾炙する所なり、要するに、彼れは詩人なり、汲々として經義を攻究するが如き學究にあらざるなり、寬文十二年五月廿三日を以て歿す、享年九十、洛北の一乘寺に葬る、丈山妻妾を置かず、故に嗣子なし、著はす所覆醬集三卷、覆醬全集廿四卷等あり、其事蹟は、先哲叢談

〔卷之二〕近世叢語〔卷之四〕先哲像傳〔卷之一〕隱逸全傳〔卷下〕及び事實文編〔卷之十二〕等に見ゆ、

吉田素菴、名は貞順、一の名は玄之、字は子元（一に子允とする は蓋し誤なり、）通稱は與市、素菴は其號なり、洛西嵯峨の角倉に居る、故に世人角倉氏を以て之れを呼ぶ、有名なる角倉了以の子にして、工業に功あり、又商船を安南に遣して彼れと貿易をなせり、是れ惺窩が爲めに舟中規約を作る所以なり、素菴詩を作り、歌を詠じ、書を能くし、其風流以て一時を推倒するに足れり、彼れ又惺窩に從つて經史を研究し、又羅山と相識る、慶長九年三月始めて羅山を惺窩に紹介せしものは、實に彼れなり、惺窩文集及び羅山文集に所謂田玄之、是れなり、惺窩常に言ふ、素菴道を信ずるの篤き、企及すべからずと、以て其人物性行を察知すべきなり、素菴又史記評林を得て、始めて之れを飜刻せり、世稱して之れを嵯峨本といふ、著はす所藤原系圖一卷、武家系圖三卷あり、其事蹟は先哲叢談續編〔卷之一〕に出づ、

第五　惺窩關係書類

惺窩先生行狀　林羅山撰
　惺窩文集の卷首に收載せり、
惺窩先生系譜畧　藤原爲經撰
　藤原爲經の編輯に係る惺窩文集の首卷に收載せり、
本朝儒宗傳〔卷之下〕巨正純巨正德編
先哲叢談〔卷之一〕
近世叢語〔卷之二〕
先哲像傳〔卷一〕
大日本史料原稿
日本詩史〔卷之三〕江村北海著
古今諸家人物志　釋萬菴著
日本諸家人物志

儒林姓名錄永忠原輯
學問源流那波魯堂著
近世大儒列傳〔上卷〕內藤燦聚著
望海每談
垂統大記
漢學紀源〔卷四〕伊地知季安撰
儒林傳澁井太室著
斯文源流河口靜齋著
學白集
扶桑拾葉集
羅山文集
梅村載筆
老人雜話
明良洪範〔卷之一〕

茅窓漫錄
野史〔第二百五十一卷〕
事實文編〔卷之七〕
前橋舊藏聞書
日本名家人名詳傳〔下〕
大日本人名辭書
鹿兒島外史
近代名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
墨水一滴　稻葉默齋著

林羅山之肖像



第二章　林羅山

第一　事蹟

徳川氏三百年間の教育主義を一定して朱子學となしゝものは、林羅山なり、羅山名は忠、一の名は信勝、字は子信、又三郎と稱す、幼名は菊松丸、薙髪して道春と稱す、羅山は其號なり、又浮山、羅洞、四維山長等の別號あり、其先は藤原氏の餘流にして、加賀の士族たり、後、紀伊に移る、祖父を正勝といふ、三子あり、長を吉勝といひ、次を信時といひ、少を周堅といふ、羅山は信時の子にして母は田中氏なり、正勝歿する時三子尚ほ幼なり、乃ち母に從つて大坂に移り、後、京師に到つて住す、羅山天正十一年八月を以て京師の四條新町に生まる、幼にして神彩秀徹、常人の及ぶ所にあらず、年(イ)甫め十三にして書を建仁寺に讀み、夙夜孜々として怠らず、造詣已に侮るべからざるものあり、當時の禪僧にして世に名あるもの、疑義

(イ)先哲叢談及び近世叢語には十四とすれども、行狀及び年譜によるに十三なり、故に今之れに從ふ、

あれば、乃ち之れを羅山に問ひ、得る所少しとせず、是に於てか「多智文殊の如し」の評あり、彼等以爲く、若し此人にして佛門に入らば、必ず善智識となるべしと、因りて勸むるに出家を以てす、然れども羅山肯ぜす、竟に去りて家に歸り、復た寺門に入らず、誓つて曰く、

余れ何ぞ釋氏に入り、父母の恩を棄てんや、且つ後なきものは、不孝の大なるなり、必ず之れをせず、

是れより遍く書を四方に求め、得るに從つて之れを攻究し、學業漸く進み、遂に眼を宋儒の書に著けて、精を四書六經に專にするを得たり、嘗て言ふ、

漢唐以來の文字皆原づく所あり、推して之れを究むれば、大要、六經に歸す、唯〻六經の文字、原づく所なし、道固より此にあり、

又言ふ、

後世能く六經の旨を得るもの、唯〻程朱の學あり、今日異端外說、又之れを壅塞す、是れ力めて闢かざるべからず、

と、一意洛閩の學を興すを以て己れが任となし、十八歳の時已に宋儒の學を講じ、以て徒弟を敎ふ、當時清原家の儒者の四書を講ずるや、唯〻大學中庸のみ、朱子の章句を用ひ、論孟の如きは、尙ほ何晏趙岐の註、皇侃邢昺の疏を用ひて、未だ朱子の集註を取らず、五經は、僅に漢唐の註疏を窺ふのみ、然るに羅山之れに拘はらず宋儒の學を講じ、論語集註を用ふるを以て人其新奇を喜び、來り聽くもの席に滿つ、是に於てか清原秀賢其才を忌んで、奏して曰く、

古より勅許なければ、書を講ずること能はず、廷臣だも猶ほ然り、況んや俗士に於てをや、請ふ之れを罪せん、

是れ學問を壟斷せんと欲するの意にして、其量の狹少なる、豆を容るゝの餘地だもなし、秀賢が言、遂に家康に聞ゆ、家康莞爾として哂つて曰く、

各〻其好む所に從ふべし、何ぞ告訴の淺卑なるや、

と、却て羅山を以て見る所ありとなす、是に於て秀賢口を緘む、因りて羅山益〻力を講學に用ふるを得たり、時に藤原惺窩、洛北に隱れて程朱の學

を唱道すと聞き、景慕已むこと能はず、慶長九年羅山年二十二、惺窩の門人吉田玄之を介して惺窩に謁し、始めて門人となる、惺窩乃ち羅山に深衣道服を與ふ、羅山是れより深衣を著けて書を講じ、疑問の點を擧げて之れを惺窩に問ふ、惺窩之れか批答をなし、是れを惺窩答問となす、載せて羅山文集卷第三十二及び第三十三にあり、惺窩嘗て人に語りて曰く、

怜悧のもの多く世にあれども、志を立つるものは寡し、我れ啻に信勝が利智を嘉するのみならず、又其志を嘉するなり、近時皆驢鳴犬吠なり、故に久しく筆硯を廢す、彼れは夫れ予れを起すものか、

惺窩乃ち羅山を以て高足となし、傾倒惜まず、稱して林秀才といへり、其後幾もなく幕府羅山を聘して、以て顧問に備ふ、羅山祝髮して道春と稱す、時に年二十有五、後、四十七歲の時に至りて弟永喜と與に法印の位に叙せられ、民部卿法印となれり、中江藤樹嘗て林子剃髮受位辨を作りて大に之れを非議せり、曰く

林道春は記性穎敏にして、博物洽聞なり、而して儒者の道を說き、徒に

其口を飾り、佛氏の法に效ふて、妄りに其髪を剃り、安宅を曠うして居らず、正路を舍てゝ由らず、朱子の所謂能く言ふの鸚鵡なり、而して自ら眞儒と稱するなり、

又曰く、

己巳の除夕に之れに賜ふに沙門の位を以てす、林氏兄弟のもの、之れを受けて以て榮幸とするなり、而して世の毀笑を慮るや、文を作りて以て其非を飾り、而して其惡を成せり、

又曰く、

夫れ林氏の剃髪は佛者にあらざれば、則ち形を假るの徒なり、我俗に從ふにあらざるなり、言はずして知るべし、而るに斷髪の權、卿服の義を附して、自ら欺き、人を欺く、其世を惑はし、民を誣ひ、仁義を充塞す、其害勝げて言ふべからず、これを小人に譬ふるに猶ほ穿窬の盜のごとくなるか、

其言極めて酷辣なりと雖も、羅山の甘受せざるを得ざる所なり、然れど

も羅山は幕府創業の際に當りて、極めて有用の人物なりき、彼れ學問淵博にして、且つ詩文の才あるを以て律令の制、官府の書は勿論、宗廟祭祀の典より異國交際の事に至るまで、大抵參預して規畫せざるはなし、或は彼れを以て漢の叔孫通に擬するもの亦以ありといふべきなり、明曆三年正月十七日、羅山例によりて紅葉山に詣し、東照公の廟を拜す、家に還りて氣宇常ならず、十八日江戸大火あり、春齋が家、火災に罹り、書庫獨り存す、翌十九日江戸又火あり、城下大半火災に逢ひ、羅山の家も亦烏有となる、羅山遁れて別墅に赴くとき、輿中携ふる所、唯〻朱を點する所の梁書一冊のみ、羅山晩年二十一史全部を首より尾に至るまで卷を逐ふて朱を點せんと欲し、已に晉書、宋書、南齊書を覽て共に朱を點し了はり、方に梁書を讀んで半を過ぐる比に、火炎々として起る、時に羅山尙ほ端坐して朱を點す、事已に急なるに及んで、春齋春德の二子保護して之れを出だす、羅山已に野墅に至るに及んで尙ほ以爲く、獨り銅庫は堅牢なり、必ず火災を免れんと、既にして是れ亦已に焦土となれるを聞き、歎じて

曰く、

多年の精力、一時に盡く、嗚呼命なり、

と、終夜嘆息し、胸塞り、氣鬱し、遂に病に臥し、二十三日に至りて簀を易ふ、時に年七十五、私に諡して文敏先生といふ、子孫家學を繼ぐ、門人亦少しとせず、人見卜幽軒、全鶴山(一竹洞號は)、永田善齋、那波木菴、坂井伐木、菊池耕齋、白井靈蘭等皆嘗て羅山の薫陶を受くるものなり、

羅山人となり、恭遜謹恪にして、敢て上に忤はず、是を以て幕府四代に歷事して、未だ嘗て其譴責に逢はず、前後の執政亦謗害する所なし、羅山は衆に勝れて才ありと雖も、敢て其才を誇らざりしが如し、年譜の寛永十六年の條に云く

先生天性敦厚、才名を以て人に誇らず、

と、蓋し彼れは交際に圓熟せしものならん、其官遊年多きを得たるも、亦此に因由することと疑なきなり、羅山平生保養を謹めるを以て偶〻微疾に遇ふも重症に至らず、能く健康の情態を持續せり、但〻彼れには鼻疾ありて、終

身之れを憂ひたるが如し、其疾は寒涕常に流下して胸に至り、時ありては血を混入せるなり、或は今の所謂鼻加答兒の如きものなりしか、是れ假令ひ危險の疾ならずとするも、醜穢なること甚し、羅山因りて鼻疾賦を作りて、嘆じて曰く

惟鼻之爲狀兮、乃天中面上之山、偶金臟之蘊熱兮、寒涕流而爲淵、剩甕類之未止兮、痂血出而朱殷、

と、又石川丈山に與ふる書に云く

宿痾鼻涕、雨滴の壁に流るゝが如く、云云、右の鼻、內爛れて瘍の如く、時々痂をなす、而して拭ふに紙を以てすれば、血と同じく凝り落つ

と、然るに丈山も亦之れと同樣の鼻疾あり、羅山書を之れに與へて曰く、

兼ねて聞く足下鼻涕流れて未だ止まずと、云云、余も亦鼻疾あり、云云、紙を捻りて鼻に實つ、余れ老いて此患彌留す、以て憐むべし、

と、羅山が鼻疾の爲めに深く困窮せしこと、以て察知すべきなり、彼れは又屢〻耳疾咳疾をも併せて患ひたること、丈山に與ふる書によりて證す

べきなり、

羅山は專攻精到よりは寧ろ博覽强記を務めたるが如し、彼れ二十二歳の時已に讀了するもの、實に四百四十餘部の多きに及べり、其終身の造詣いかんは、畧〻此れに由りて推測するを得べきなり、行狀に

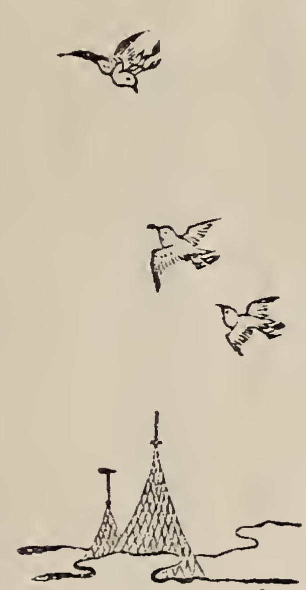
所謂世間字あるの書、見ざることなしとは、先生是れなり、

と云ひ、又先哲叢談に

羅山洽博、天下の書に於て讀まざるなし、

といふもの、必ずしも虛褒濫賞にあらざるなり、羅山著はす所一百四十七種あり、之れに文集、詩集等を合すれば、一百五十餘種となる、眞に等身の著書といふべし、然れども多年研究の精粹 quintessence として世に出だしたるものは殆んど之れなく、大抵は粗雜なるものなり、固より今日にありても參考に資すべきものは、之れあり、但〻學者の必要缺くべからずといふ程のもの殆んど稀なり、然れども羅山が德川時代に於ける一鉅儒たりしは、何人も否定するを得ざるなり、

幕府嘗て上野の地(今の山王臺所在の地)を羅山に賜ふ、羅山乃ち以て別墅となし、聖堂を建て、文庫を構へ、以て講學の地となす、今の御茶の水の聖堂は後、上野より之れを移したるものなり、



第二　著書

羅山文集七十五卷
羅山詩集七十五卷
羅山文集附錄五卷

文集及び詩集は羅山歿後其子鵞峯が弟の春德と共に編纂せし所にして、羅山の學說を窺ふべき唯一の材料なり、殊に往復の書牘、惺窩答問及び隨筆の類、最も注意を惹くに足るなり、

儒門思問錄四卷

上下二卷を分ちて四卷とせり、鵞峯の羅山編著書目に三卷とするは誤なり、

道統小傳二卷

首めに羅山が序あり、寬永廿一年の作に係る、終りに源信成が後序あり、詳に此書の來由を述ぶ、此書は儒學の系統を探るに、缺くべからざ

春鑑抄、三徳抄、敵戒説、續々群書類從卷十教育部にあり。

るものなり、

經典題説一卷

此書は詩、書、禮記、周禮、儀禮、樂經、周易、春秋、左傳、公羊傳、穀梁傳、孝經、爾雅の十三經を解題せしものなり、

陽明攅眉一卷

此書は、未だ捜索し得ず、鵞峯の羅山編著書目によれば、陽明の學説を排斥せしものなり、

梅村載筆三卷　寫本

此書は隨筆體の著にして、惺窩の説も亦處々に散見す、一讀の際、興味あるを覺ゆ、百瀨川（卷之二十三）には一卷として之れを收載せり、

其他經書の註解、老子の標註及び神道關係書類等少しとせざるなり、

第三　學說

羅山は純然たる朱子學派の人なり、曾て藤原惺窩に師事せしと雖も、惺窩の如く陸象山をも併せて崇敬するものにあらず、況んや其他異端に屬するものをや、羅山が始めて惺窩の門人となりしは二十二歲の時にして嘗に四百四十餘部の書を讀破せしのみならず、又已に一家の定見ありて朱子學を確守せり、行狀及び年譜によるに、羅山は十八歲の時より宋儒の書を攻究し、二十一歲の時已に朱子學を唱道するの氣勢あるを見る、此れに由りて之れを觀れば、羅山が朱子學派となりしは、惺窩の薰陶によるにあらず、之れに先ちて獨り自ら見地を此に定めしなり、若し學問の博宏、才識の敏慧を言はゞ、羅山迥に惺窩に優れる者の如し、然れども惺窩は羅山よりは十八歲の年長者にして、德望一代に卲し、然かのみならず、若し心胸の量度、學問の正大を言はゞ、羅山惺窩に數步を讓らざるを得ず、是れ其弟子の禮を取りて師事せざるを得ざる所以なり、

然れども惺窩の學問、差ゝ寬宏に失し、其主張する所、遂に茫漠の弊なき能はず、是れ其朱子を取りて之れに反する陸氏を棄つる能はず、已に儒敎に歸しながら、尙ほ佛敎の痕迹を存するに因るなり、佐藤一齋曾て惺窩を論じて曰く、

我邦濂洛の學を首唱するものを、藤公となす、而して早已に朱陸を併せ取ること此の如し（言志晩錄）

然れども惺窩の併せ取るもの、獨り朱陸のみならず、又更に儒佛をも併せ取り、一切を包容して之れを融合するの傾向あり、其一派の學に偏せざるは、可なりと雖も、亦模稜、兩端を持するの態度なしとせず、然るに羅山にありては、旗幟鮮明にして此の如き曖昧模稜の點あるを見ず、已に朱子學を崇奉する以上は、全然之れを崇奉して一切之れと異なるものを排斥するを厭はず、即ち陸象山を排し、王陽明を排し、道敎を排し、佛敎を排し、耶蘇敎を排して、己れ自ら取る所の朱子學を主張せり、殊に其「寄田玄之書」に云く、

向きに專ら陸氏の學を言ふ、陸氏の朱子に於ける、薰蕕氷炭の相反するが如し、豈に同器ならん、同爐ならんや、

又曰く、

其夫子の道は、六經にあり、經を解することは、紫陽氏より粹なるはなし、紫陽を舍てゝ之れに從はず、而して唯、區々たる象山を是れ信ず、惑へるに似たるに幾からずや、

此の如く、其家學の系統を揭げ來たりて復た疑を容るべからざるものあるなり、然るに是れ羅山が吉田玄之によりて惺窩に寄するの書にして、書中言ふ所は、直に惺窩其人に對して之れを言ふなり、蓋し羅山が未だ惺窩の門に入らざる時、先づ惺窩の門人吉田玄之を識る、故に玄之によりて書を惺窩に送れり、惺窩が之れに答ふるの文、亦載せて惺窩集中にあり、羅山の此文と惺窩の之れに答ふるの文と、共に二氏の學問識見いかんを窺ふるに足るものなり、羅山の朱子學を崇奉すること、之れを惺窩に比すれば、逈に峻峭明快なるものありと雖も、山崎闇齋の如くに

偏固狹陋に陷りたるにあらざるなり、佐藤一齋論じて曰く、

博士家古來漢唐の註疏を遵用す、惺窩先生に至りて初めて宋賢復古の學を講ず、神祖嘗て深く之れを悅び、其門人林羅山を擧ぐ、羅山師傳を承繼し、宋賢諸家を折中す、其說漢唐と殊に異なり、故に稱して宋學といふのみ、闇齋の徒に至りては、拘泥過甚、惺窩羅山と稍〻同じからず、（言志晚錄）

又曰く、

惺窩羅山其子弟を課する、經業大略朱氏によりて、其取舍する所は、特に宋儒のみならずして、元明諸家に及ぶ、鷲峯も亦諸經に於て私考あり、別考あり、乃ち知る、其一家に拘はらざるもの顯然たるを、

是れ本と一齋が自家取る所の首鼠兩端の地位を辯護するの意に出づと雖も、亦羅山が全く朱子の圈套中に埋沒するの愚をなさゞりしといふことは、未だ必ずしも否定するを得ず、然れども其朱子學派としての旗幟は決して曖昧模棱なるものにあらざるなり、一齋が惺窩と羅山と

を一様に見做し、寛宏の度に於て異同なきが如くに論ぜしは、未だ其肯綮を得たるものといふを得ざるなり、

羅山の太極陰陽天命心性等に關する諸說は、皆朱子より得來たるが故に、之れを叙述するも、是れ唯ゞ朱子の旨意を反復するに過ぎずして、毫も此れに由りて羅山の特色を見るに足らず、故に是等は悉く之れを度外視せん、蓋し羅山は別に自家獨創の見あるものにあらず、哲學倫理等の事に關しては、朱子の旨意を叙述若くは敷衍するに過ぎざるなり、然れども此れを外にして左に一の注意すべき點を擧げん、

羅山は朱子を尊崇しながら、獨り理氣の說は王陽明のそれによれり、「寄田玄之書」に論じて云く、

太極は理なり、陰陽は氣なり、太極の中、本と陰陽あり、陰陽の中、亦未だ嘗て太極あらずんばあらず、五常は理なり、五行は氣なり、亦然り、是を以て或は理氣分つべからざるの論あり、勝(羅山の名)其朱子の意に戻るを知ると雖も、而も或は强ひて之れを言ふ、

と、朱子は理氣を分離して決して是れ二物となす、然るに陽明は理氣は合一して分つべからずとす、今羅山は朱子に背いて陽明に與みす、是れ其全く朱子の圈套中に埋沒せざる所なり、隨筆の四に云く、

程子曰く、性を論じて氣を論ぜざれば備はらず、氣を論じて性を論ぜざれば明かならず、之れを二にすれば則ち是ならずと、古今理氣を論ずるもの多きも、未だこれに過ぐるものあらず、獨り大明の王守仁云く、理は氣の條理、氣は理の運用と、（文集卷六十八第二十八葉左）

是れ程子以後獨り陽明の說、創見に屬するを謂ふなり、又云く、

理氣は一にして二、二にして一、是れ宋儒の意なり、然れども陽明子曰く、理は氣の條理、氣は理の運用と、此れに由りてこれを思はゝ、彼れ支離の弊あり、後學によりて起らば、右の二語、此れを捨てゝ彼れを取るべからざるなり、之れを要するに、一に歸するのみ、惟心の謂か、（文集卷六十八第十葉左）

宋儒の理氣を論ずる、必ずしも一轍に出でず、朱子は理氣は必然に相待

ちて倶に存するものとし、殆んど其合一を説かんと欲して、未だ必ずしも其合一を説かず、遂に決して是れ二物と斷言せり、故に朱子の取る所は即ち理氣併存論なるを知るべし、然れども程子の見解は反りて理氣合一論に近し、彼れ以爲く、性と氣とは分離すべからずと、性は人に就いて言ふ所なりと雖も、是れ亦理に外ならず、是故に其性と氣とを分離すべからずとするは、即ち理と氣とを分離すべからずとするものなり、然れども陽明は氣の條理を以て理となし、理の運用を以て氣となし、分明に其同躰不離を道破して、之れが一元たることを説示せり、是故に羅山は宋儒の説よりは寧ろ陽明の説の從ふべきを斷言せり、其「一に歸するのみ」といふは、一元を意味し、其「惟心の謂か」といふは唯心を意味するが如し、若し彼れが尙ほ一層深く考察して唯心的一元論を主張するに至りしならば、哲學上最も興味多き結果を生ずべかりしも、彼れは遂に此れ以上に歩を進むること能はざりき、之れを要するに、羅山は理氣の説に就いては宋儒の説を以て滿足せず、反りて陽明の一元的世界觀を取

王といふが如き首鼠兩端の地位を取るものにあらざるなり、隨筆の四に云く、

周子の主靜、明道の動も亦定、靜も亦定、伊川の主一、朱子の窮理、各〻悟入する所の處あり、其成功は一なり、皇明に至りて一代の巨擘、陳白沙が靜座、王陽明が良知の如き、即ち頓悟に似たりと雖も、高明ありと雖も、然れども平易ならざるか、(文集卷六十八第二十四葉右)

是れ羅山が未だ陽明學派の人となること能はざる所以なり、然れども其論鋒の極めて薄弱なるを見る、其「平易ならざるか」の語、殊に陽明に適切ならず、陽明の學は、直に內部より聖域に到達せんとするものにして、眞に直截簡明なるものなり、故に最も平易なるものとこそいふべけれ、今是れを「平易ならざるか」といふも、毫も陽明が學に對する打擊とするに足らざるなり、羅山自ら「か」といひて、自家立論の未だ鞏固ならざるを表白せり、之れを夫の惺窩が

古人各自ら入頭の處あり、周子の主靜、程子の持敬、朱子の窮理、象山の易簡、白沙の靜圓、陽明の良知の如き、其言異なるに似て、入る處別ならず、（文集卷三十二、第七葉左）

と云へるに比すれば、其見解の精粗、果して如何ぞや、惺窩答問中に羅山陽明を論じて曰く、

陽明出でゝ后、皇明の學大に亂る、必ず又畏るべきの君子者出づることありて之れを一にせん、

と、彼れは又別に陽明攢眉の一書を著はして陽明の學を排斥せり、之れに反して其朱子を尊崇すること孔子に次ぐ、其言に云く、

其大に斯道を開き、全く聖學を起すは、之れを上にして夫子、之れを下にして文公なり、末俗小儒、毛を吹き、聲に吠へ、妄に文公を議す、固より脣吻に掛くるに足らず、（行狀）

此れに由りて之れを觀れば、羅山は朱子に左袒するものにて、必ずしも陽明を尸祝するものにあらざること、復た論を竢たざるなり、

羅山の陸象山王陽明を擯斥すること、頗る其度に過ぐるものあるが如し、「寄田玄之書」に象山を攻撃して、復た餘力を遺さず、其中謂へるあり、云く、

象山は莊周に似たり、朱子は孟子に似たり、若し莊周をして一たび孟子に見えしめば、則ち道を聞くや必せり、象山朱子に見ゆれども、其偏見遂に改めず、然れば似たることは似たり、是れ未だ是ならざるものか、（文集卷二、第五葉右）

此論未だ必ずしも是ならず、先づ象山が莊子に似たりといふ事に就いて多少の異論なきにあらざるべきも、姑く之れを看過せん、然れども其「若し莊周をして一たび孟子に見えしめば、則ち道を聞くや必せり」といふは、抑も何によりて之れを斷定せるや、假令ひ莊子が眞に孟子と相逢ふて議論を上下することありたりとするも、莊子が果して容易に孟子に屈伏せしや否や、最も疑ふべしとなす、寧ろ老子と孔子との會見を以て之れを推測するを當れりとなすが如し、何ぞ大早計に「道を聞くや必せ

り」といふを得んや、隨筆の六に云く、

周子の主靜、明道の定性、伊川の主一無適、朱子の格物窮理、皆是れ其入る所異にして致す所異ならず、金溪の易簡、新建の良知の若きは、則ち自ら以て儒となす、然れども世呼んで儒中の禪となす、其門人末流の弊、狂禪に陷る、(文集卷七十第十葉左)

若し門人末流の弊を言はゞ、朱子も亦之れあり、何ぞ獨り陸王を咎むべけんや、且つ夫れ世人が如何に呼び做すも、是れ必ずしも顧慮するを須ひず、但〻精細に之れを攻究して、其禪と如何なる異同あるかを論證するを要す、然るに羅山是れをなさずして世人の呼び做すに從ひ、冒頭より之れを擯斥するの意志あるに似たり、是れ其到底偏見を免れざる所以なり、羅山又老子を排せり、其言に云く、

李耳曰く、道の道とすべきは、常の道にあらずと、其所謂道は、淸淨無爲をいふなり、天地未分をいふなり、夫れ人今の世に生れて上古の無事をなすべからず、而るを況や何を以て此身を天地未だ判れざるの先

きに置かんや、若し天地を以て譬喩となし、渾沌未だ開けざるを以て一念を起さずとせば、則ち一息未だ斷えざるの間、何を以て一念を起さゞらんや、人は本と活物なり、爭か枯骸と似んや、蒙叟が槁木死灰及び柴立の說、亦是の如く、異端の言語なり、聖人の道は然らず、其道、君臣父子男女兄弟朋友の外にあらず、之れを行ふ所以のものは、五常なり、五常本と一心にあり、此心の具ふる所の理、即ち是れ性なり、人々の共に由る所のものは道なり、道を心に得る、之れを德といふ、故に道德仁義禮智は、其名異にして、實は一なり、李耳が云ふ所の道にあらざるなり、若し人倫を棄てゝ、別に道ありといはゞ、則ち儒道にあらざるなり、聖人の道にあらざるなり、堯舜の道にあらざるなり、（文集卷六十八第二十四葉左）

若し羅山にして一たび老子の無名は易の太極にして、朱子の理と同じく實在の觀念を言ひ表はせるものなるを知らば、豈に此の如く老子を排するを得んや、中庸にも、

喜怒哀樂の未だ發せざる、之れを中といふ、

とあり、此塲合にありては、中は未だ一念を起さゞる混沌未分の境界と見るを得べきにあらずや、然れども羅山は是等の事實を顧慮せず、斷然老子を排し、其取る所の主義、確乎として定まり、牢乎として拔くべからざるものあり、惺窩曾て羅山に敎ふるに、見地未だ堅く定まらざれば、妄に異端の書を讀むべからざるを以てせり、（文集巻三十二、第三葉左）此れに由りて之れを觀れば、羅山見地の堅きもの、亦惺窩の此の言に起因する所なしとせざるなり、

次ぎに羅山は佛敎を排斥し、頗る痛快の論をなせり、其主意は佛敎を以て人倫を廢棄し、全く聖人の道と相戻るとするにあるなり、殊に其禪徒に告ぐる言の如き、頗る奇矯なりとなす、云く、

大燈國師妙超始め丐人（即ち乞食）たるとき、五條橋下に居ること年あり、其門徒の行狀年譜を作るや、皆諱んで載せず、獨り狂雲子宗純賛を作りて曰く、「風飡露宿無人犯、第五橋邊十五年」、と、世傳ふ、妙超弱齡にして法を顯密の家に問ふて心に快からず、乃ち元に入りて法を求めんと欲

し、遂に博多に赴く、適〻僧紹明が元より歸るに遇ふ、是に於て參禪す、時に超妻子あり、恩愛の欲を斷たんが爲めに、妻をして酒を買はしめ、獨り戶を鎖して其二歲の兒を殺し、之れを串にし炙る、妻還りて之れを見て怪むに及んで、乃ち炙れる兒を噉つて以て飮む、妻熟視して大に叫喚して出づ、超も亦出づ、是れ乃ち紫野の大燈國師なり、（文集卷五十六、第二十九葉右）

羅山此事を叙述し了はりて大聲疾呼、佛徒の人倫を滅し、義理を絕つの非を擧げて痛く之れを攻擊せり、妙超が己れ自身の兒の肉を啖ひたりといふこと、亦梅村載筆にも載すれども、未だ其果して事實なりや否やを知らず、然れども彼れが二十年間も乞丐と相伍して極めて枯淡なる生活をなしたるは、事實なるが如し、本朝高僧傳（卷之二十五）に妙超が傳あり、今之れを讀むに、超曾て大應國師に建長寺に參禪し、一朝忽然大悟して、偈を作る、應其後に書して曰く、

吾宗儞に到りて大に世に與らん、但〻是れ二十年長養して然して後、人

をして吾證明あることを知らしめよ、

超乃ち京師に還り、之れを實行せしと見え、高僧傳に

洛東の雲居寺に逸居す、衲侶數輩、枯淡にして自ら彊むること二十年に垂んとす、

と、云へり、而して尙ほ又贊に於て其乞丐の生活なりしを明かにせり、云く、

第五橋邊、長養沈蘿、殆乎二十年、與乞丐厲人、將終其身矣、

一休詩を作りて此事を歌へり、其詩載せて狂雲集(上)にあり、羅山が引用する所と異同あるが故に左に之れを擧げん、云く、

排盡大燈輝一天、鸞輿競譽法堂前、風飡水宿無人記、第五橋邊二十年、

妙超が乞丐と相伍したるは十五年にあらずして實に二十年なり、然れども是れ獨り超の奇行といふべきものにあらず、釋迦彼れ自身と雖も、全く乞丐の生活をなしたるものにて、後の僧侶は皆之れに傚ふべきものなり、羅山又喩三人の文を作りて天台眞言及び禪を飜弄嘲罵し、論じ

て曰く、

浮屠氏畢竟山河大地を以て假となし、人倫を幻妄となし、遂に義理を絕滅し、我道に罪あり、云云彼れ、君臣を去り、父子を棄て、以て道を求む、我れ未だ君父の外、別に所謂道あるを聞かざるなり、（文集卷五十六、第三十一葉右）

尙ほ併せて修驗道を非議して曰く、

今浮屠中の徒、頭巾を着け、露衣を挂け、劒を帶び、錫を杖き、大螺貝を佩び、事あれば乃ち貝を吹いて衆を呼ぶ、世の號する所の山伏なるもの、是れなり、其徒、法を犯し、罪に當るものあれば、衆胥議し、深坑を穿ちて活ながら之れを埋め、然して後、石を下だし、以て封樹し、表して某山伏罪ありといふ、官の禁ずる能はざる所なり、云云、吾れ聞く、浮屠は不殺を貴ぶと、何ぞ夫れ刻激なるや、（文集卷五十六、第二十七葉右）

又「寄頌遊」書に虛實の點より儒佛の二教を比較して、論じて曰く、

夫れ儒は實、佛は虛、寔に虛實の惑、滔々たるもの天下皆是れなり、今若し虛と實とに於てせば、誰れが虛を取りて實を舍てんや、云云、昔し關

中の大儒張横渠壯にして釋書を訪ひ、年を累ねて盡く其說を究む、得る所なきを知りて、反りて之れを六經に求む、渙然として自ら信じて曰く、吾道自ら足ると、烏乎横渠は善く過を改むるものといふべきなり、其れ李唐にありては、韓氏が原道、佛骨表、趙宋にありては、程子朱子已下、釋老の事を言ふを愧づ、云云、程子曰く、佛書は淫聲美色の如く、能く人を惑はし易しと、朱子曰く、寂滅の說高うして實なしと、云云、彼れが所謂道は道にあらざるなり、吾所謂道は道なり、道なると道にあらざると、他なし、實と虛となり、公と私となり、(文集卷三、第七葉左)

羅山の佛敎を排斥する、其敎義中誤謬の存する所を逐一列擧して之れを擊碎するの勞を取らず、寧ろ大處より之れを考察し、單に其人倫を滅し、義理を絕ち、虛妄に陷るの弊害を論破するに過ぎずと雖も、亦略〻要領を得たりといふべきなり、

羅山又當時伴天連によりて輸入せられたる耶蘇敎を排斥せり、彼れ少壯の時頌遊(歌人松永貞德)が紹介により弟信澄(一名永喜)と共に耶蘇宣敎師の不干

氏Frois（葡萄牙人）の許に至り、種々論難をなせり、後其事を叙述して「排耶蘇」三篇を作る、其中耶蘇教の教義に關する問答にして、學者の一顧を價するものは左の如し、

羅山問ふて曰く、利瑪竇、天地鬼神及び人の靈魂を以て始あり終なしとす、吾れ信ぜず、始めあれば終あり、始なく終なきは可なり、始あり終なきは不可なり、然れども殊に證すべきものあるか、

不干答ふること能はず、

羅山曰く、天主、天地萬物を造ると云云、天主を造るものは誰ぞや、

不干曰く、天主始なく終なし、

羅山以て遁辭となし、更に問ふて曰く、理、天主と前後あるか

不干曰く、天主は躰なり、理は用なり、體は前にして用は後なり、

羅山乃ち面前の器を指して曰く、器は體なり器を作る所以のものは理なり、然らば理は前にして天主は後なり、

不干更に譬喩を換へて曰く、燈は體なり、光は理なり、

羅山曰く、火の燈たる所以のものは、理なり、光は理にあらざるなり、唯之れを光といふのみ

不干曰く、器を作るの一念起る處を理となす、一念起らざる以前、元と無想無念にして體あり、然らば則ち體は前にして、理は後なり、

羅山之れを駁して曰く、不可なり、無想無念といはず、唯理と天主とをいはんのみ、無想無念の時、理ありて存す、

羅山は朱子學の立脚點より論じ、不干は天主教の立脚點より論じ、各其見る所に執着して、他をして己れに從はしめんとす、故に一上一下、遂に歸着する所なし、若し理は即ち哲理上の本體にして、天主は即ち之れを人格化せるものなりとせば、彼我の間に融合調和の點を發見するを得ん、天主は即ち儒敎に所謂上帝なり、羅山が問答の際、上帝を連想せざりしは、甚だ意外の事といはざるを得ず、兎に角此問答は不結果に終りしなり、是れ畢竟彼我の思想、到底相徹せざるに由るなり、最後に頌遊笑つて曰く、問高うして答卑し、彼れが解せざる、信に宜なるかなと、羅山乃ち

事ありて坐を起つ、時に暴雨疾雷、不干悦びずして曰く、

儒者の所謂太極は、天主に及ばず、天主は卿曹弱年の知る所にあらず、我れ能く太極を知る、

と、少しく羅山一輩を侮蔑するの口氣ありしなり、是を以て信澄之れに耐へず、乃ち罵りて曰く、

汝狂譃なり、太極は汝が知るべき所にあらず、

不干怒りて口を杜づ、時に、羅山坐に復りて曰く、

凡そ義理を言ふは、彼れに益あらずんば、必ず此れに益あり、若し勝つことを爭はゞ、則ち忿怒の色、嫉妬の氣、面に見ゆ、是れ心術を害する一端なり、之れを愼めや、

と、流石は羅山なり、之れを信澄に比すれば、其老實にして平靜なる、自ら大家の氣象あるを見るなり、（文集卷五十六、第三十一葉乃至第三十四葉）羅山又「示石川丈山」書中に耶蘇敎を論じて曰く、

耶蘇變じて異學となる、猶ほ妖狐の妲己を食ふて妲己に化するが如

し、畏るべきか、云云、近歲禁ずること最も嚴なり、賊蠻其面を革むと雖も、然も其心を姦にす、其共に同じく謀るもの、叨に異學を唱へ、儒の天道を說くを竊んで、糟粕を吐く、其心密に謂へらく天主に本づくと、天主は彼れが崇信する所なり、佛の性空を說くを掠めて、心理を誣ふ、亦密に謂へらく、其天敎を傳ふと、將に之れを奪はんとして、先づ之れに與ふ、亦老聃を盜むなり、善なく惡なく、善あり惡あり、善をなして惡を除く、亦王陽明を剽むなり、儒にあらず、老にあらず、釋にあらず、之れを三脚の猫鬼といふ、云云、戒めざるべからざるなり、彼れ隻字を知らず、自ら稱して人の師となり、一宿を經ず、自ら稱して大悟といふ、烏の雌雄を知らず、自ら稱して予れ聖なりといふ、氓の蠢々たる、耳を傾けて雷同す、衆の昏々たる、口を異にして淵默す、吁耶蘇の變此に至りて極まれり、誰れか太公を九原に起し、妲己を斬りて其首を白旗に懸くるもの、之れあらんか、世こぞつて狐の人を惑はすを怖る、是れ惡むべし、唯〻懼くば人中の狐、是れ誠に最も憎むべきなり、(文集卷七、第四十葉)

尙ほ耶蘇敎を以て有害となして、論じて曰く、

耶蘇の變、果して亂臣賊子となること、唯〻是れを之れ懼る、若し意あるもの、何ぞ微を防ぎ漸を杜がざらんや、

又曰く、

耶蘇變じて訛言となり、旣に善類を敗り、或は妖狐となり、或は流離(鳥の名)となる、なんすれぞ懲めざらん、

と、其異學を排斥して、自家の學問を主張するや、滔々として論じ、娓々として辯じ、其欝勃たる精神、一時に迸出して、光燄萬丈の大文字を成せり、但〻今日より之れを見れば、其論旨の刻薄に失するものあるは、蓋し蔽ふべからざる事實なり、然れども是れ本と其自家の學問に忠實なる熱心の餘に出づるものなるを知らば、亦必ずしも深く咎むるに足らざるなり、羅山又「示₂石川丈山₁」書中に耶蘇敎徒の一夫一婦の敎を布くを難じて曰く、

世の匹婦と雖も、妬忌最も多し、耶蘇、女を誑し、以て男、妾を蓄へず、强姦

せず、和姦せざるを教ふ、故に婦女悦んで之れを信奉す、彼の邪學、諸方の室家を誘勸するも、亦之の如しとしかいふ、(文集卷七、第四十四葉)

又曰く、

彼の邪徒、外疎くして内親み、陽に默して陰に談る、是れ邇日の仄聞なり、主人に敎ふるに鄙吝を以てし、婦を誑すに夫妾を蓄へざるを以てす、皆是れ蠻奴耶蘇の妖變なり、(文集卷七、第四十八葉)

と、儒敎には本と一夫一婦の敎あるなし、唯文中子魏相篇に「一夫一婦、庶人之職也」とあるのみ、耶蘇敎の一夫一婦の敎は、恰も儒敎の缺陷を補ふべきものなるが故に、羅山喜んで之れを取り、以て自家藥籠中のものとなすべきに、反りて之れを非議し、譎詐の策に出づるの外、復た何等の旨意なしとするもの、決して是れを精到の見といふを得ざるなり、

羅山は一方に於て力を極めて異學を排斥すると同時に、又一方に於ては、我邦の神道と結託和合せんとするの傾向を表はせり、文集の初めに載する所の「倭賦」に武人の跋扈を憤慨し、佛敎の侵蝕を憂慮し、殊に歷代

帝王の稜威を稱揚するが如き、已に其尋常儒者の口吻にあらざるを見る、行狀によるに、彼れは嘗て曰く、

本朝の神道は是れ王道、王道は是れ儒道、固より差等なし。（文集附錄卷三、第二十七葉）

是れ神道と儒道と王道の點に於て一致するものにて、復た二途なきをいふものなり、又隨筆の二によるに、或る人羅山に神道と儒道と如何に區別すべきかと問ひしに、羅山之れに答へて曰く、

我より之れを觀れば、理一のみ、其爲異なるのみ。（文集卷六十六、第三葉）

又曰く、

王道一變して神道に至り、神道一變して道に至る、道は所謂儒道なり、（全上）

羅山は斯の如く神儒二敎の融合調和を成せり、隨筆の二に又曰く、

伊勢皇太神宮に詣するの時や、外清淨あり、内清淨あり、肉を食はず、酒を飮まず、葷を茹はず、女を御せず、身凡ての穢惡に觸れざる、之れを外

淸淨といふなり、所謂齋なり、心敬して名利を忘る、之れを內淸淨といふなり、所謂心齋なり、今の世の人の如き、外淨だも尙ほなさず、而るを況んや內淨に於てをや、是を以て未だ神明に協ふものあらざるなり、

心は宅なり、神は主たり、敬亦一心の主宰たり、故に敬あれば、則ち神來たり格る、若し敬なければ亡ぶ、本心故に空宅たり、神なんすれぞ來たり止まらんや、唯〻敬か、敬は神明に合ふ所以なり、



第四　子孫附林家系圖

羅山の子孫は世々相繼いで幕府の儒官となり、鬱然として一家の系統をなせり、羅山五子あり、長は叔勝、字は敬吉、小字は左門、夭す、次は長吉、亦夭す、次は春齋、名は恕、又は春恕、一名は春勝、字は子和、後、之道と改む、鵞峯と號す、延寶八年を以て歿す、年六十三、私に謚して文穆先生といふ、著はす所、鵞峯文集、本朝通鑑等數十種あり、次は春德、初の名は守勝、字は子文、通稱は左近、後に名は靖、字は彥復、祝髮して春德と稱す、函三子、讀耕齋等は皆其別號なり、寬文元年を以て歿す、享年三十八、著書十數種あり、次は女子、春齋に二男あり、長は梅洞、名は春信、又の名は愨、字は孟著、寬文六年を以て歿す、年二十四、私に謚して頴定先生といふ、著はす所梅洞文集十六卷、史館茗話一卷等數種あり、次は鳳岡、名は戇、一名は信篤、字は直民、別號は整宇、享保十七年を以て歿す、年八十有九、私に謚して正獻先生といふ、博學にして著書頗る多し、長野豐山が松陰快談(卷之一)に云く、

榴岡の門人に後藤芝山柴野栗山等あり。

羅山鳳岡二先生、其學該博、和漢古今之書、靡所不窺、可謂前無古人、後無來者矣、近世以博識自負者、或知彼而不知此、或知古而不知今、豈足望二先生之萬一哉、

是れ固より推奬過當の言たるを免れずと雖も、鳳岡が羅山と同じく一大碩儒たりしこと疑なきなり、鳳岡に三男あり、長は春宗、次は信充、一名は愨、字は士信、榴岡と號す、著はす所、榴岡詩集五卷、正懿先生文集六卷及び其他數種あり、次は信智、信充に二男あり、長は信言、字は士恭、鳳谷と號す、安永二年を以て歿す、年五十有三、私に謚して正貞先生といふ、著書數種あり、次は信寛、夭す、信言に男あり、名は信愛、明和八年を以て歿す、年二十有八、私に謚して孝悼先生といふ、信愛に男あり、名は信徴、天明七年を以て歿す、年二十有七、私に謚して正良先生といふ、信徴、信敬を以て養子となす、信敬寛政四年を以て歿す、年二十有六、私に謚して簡順先生といふ、信敬、信衡を以て養子となす、信衡字は叔紞（たん）、一の字は公鑑、幼字は熊藏、述齋と號す、天保十二年を以て歿す、年七十四、私に謚して快烈先生とい

ふ、著書頗多し、林家中興の人なり、佐藤一齋と兄弟の如き關係あり、述齋九男あり、長は光、先づ歿す、次は輝、夭す、次は煌、字は用韜、檉宇と號す、著はす所數種あり、次は燿、次は熑、次は煒字は弸中、式部と稱し、復齋と號す、著はす所數種あり、次は爙、次は熴、別に孫の鳥居燿を養うて以て子となす、述齋の事蹟は近世先哲叢談續編(卷上)に見ゆ、中村敬宇先生嘗て述齋を論じて曰く、

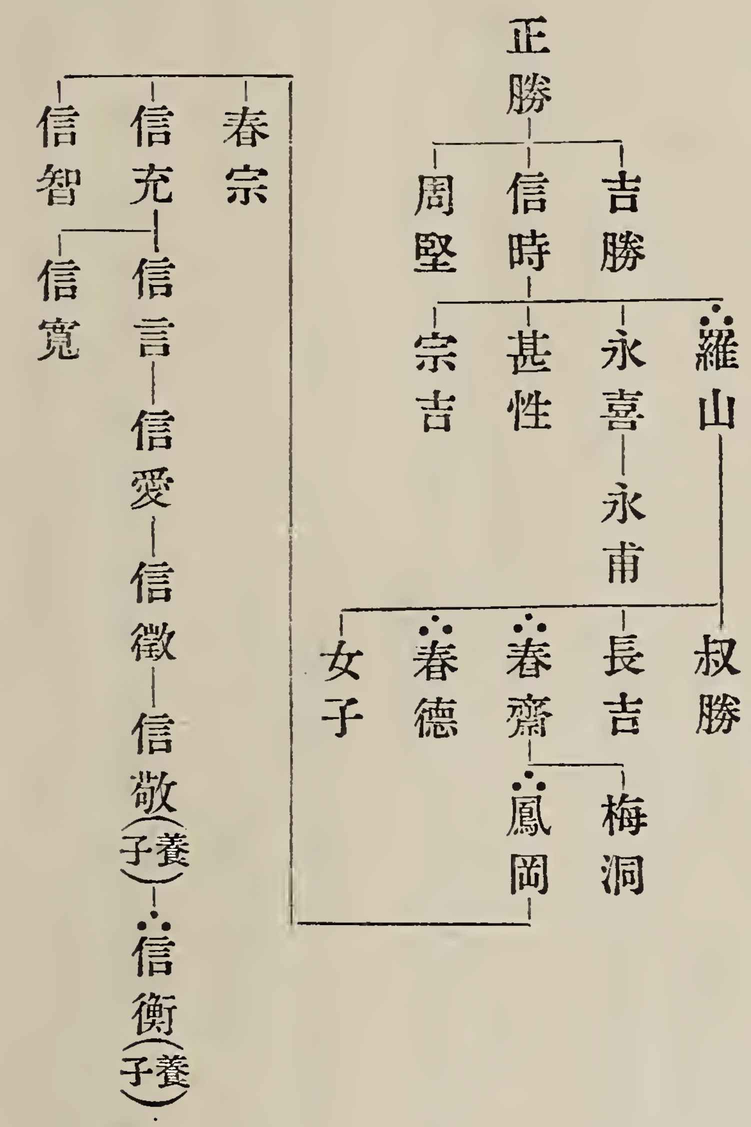
林述齋先生一時儒林の魁たり、豁達にして大度あり、事をなすこと多く人の意表に出づ、而して其嗣檉宇君は、謹厚小心、規に循ひ矩を踏み、大に嚴君に異なり、人或は以て言をなす、公曰く、兒の我れを學ばざるもの、正に兒の善く我れを學ぶなり、(敬宇文集卷之七)

羅山には是等子孫の外、又弟三人あり、永喜といひ、甚性といひ、宗吉といふ、甚性と宗吉とは、何れも僧なり、永喜、一名は信澄、東舟と號す、刑部卿法印となる、寛永十五年を以て歿す、年五十四、其子信次、薙髮して名を永甫と改む、又春德の子に勝澄あり、一名は憲、字は章卿、右近と稱し、晉軒と號

す、後、名を春東と改む、延寳四年を以て歿す、年二十有三、私に謚して晋軒先生といふ、著はす所、稽古録六巻、晋軒文集十二巻及び其他數種あり、信如を養うて以て子となす、信如字は翼成、葛廬と號す、通稱は又右衛門、享保十九年を以て歿す、年六十四、私に謚して温謙先生といふ、信如の男に信亮あり、天明元年を以て歿す、年七十有五、私に謚して齋莊先生といふ、信亮の男に信方あり、寛政八年を以て歿す、年六十有四、私に謚して良順先生といふ、信方の男に信隆あり、又鳳岡の三男信智は百助と稱し、寛保三年を以て歿す、年五十有七、私に謚して靖厚先生といふ、信智の男に信有、信彭あり、信有、初め仙助と稱し、後に百助と稱す、天明五年を以て歿す、年五十有五、私に謚して紹定先生といふ、信彭、頼母と稱し、後、主水と稱し、又百助と稱す、養子なり、寛政八年を以て歿す、年三十有四、私に謚して堅頃先生といふ、就中最も傑出せしものを春齋、春徳、鳳岡、述齋（名は信衡）の四人となす、羅山の子孫は單に此の如く列擧するのみにて、其如何に繩々として長き歳月に渉りて蔓延せるかを知るべし、綿々たる瓜瓞とは、蓋し

林家の如き一族を形容するに最も適切なる文字ならん、王朝時代にありて菅江二家の如き、何れも學閥を成せりと雖も、其權勢に至りては、未だ林家に及ばざるものの遠きが如し、一たび林家の手中に歸せし學閥としての權勢は、時に消長なきにあらざるも、兎に角德川氏三百年を通じて地に墜ちざりき、豈に亦盛なりといはざるべけんや、

林家系圖



羅山十二世の孫林學齋幕府に仕へて儒者奉行たること十八年。王政維新後司法省に出仕し、後群馬縣前橋の師範學校及び女學校の校長となり。多年教育に從事し、又嘗て日光東照宮に官たりしが、明治三十一年辭して熊谷の柿沼に住し、閑雲野鶴を友とせり。明治三十六年の頃二豎の冒す所となり、臥床三年、遂に明治三十九年七月十三日を以て逝く。享年七十四。

- 光
- 輝
- 煌
- 耀
- 燫
- 煒
- 爦
- 焜
- 桄（養子）

∴春德―勝澄―信如（養子）―信亮
　　└信方―信隆

∴鳳岡―信智┬信有
　　　　　└信彭（養子）

第五　羅山關係書類

羅山先生年譜二卷春齋撰
羅山先生行狀春德撰
羅山先生編著書目一卷春齋撰
以上三部の書は羅山文集附錄に收載せり、
先哲叢談〔卷之一〕
先哲像傳〔卷一〕
近世叢語〔卷之一〕
儒職家系〔一〕
玉滴隱見
筆のすさひ
寛政重修諸家譜
鵞峯文集

近世大儒列傳〔上巻〕内藤燦聚著
武門諸説拾遺
嶲燕偶記
明良洪範
老人雜話
常山紀談〔巻之十八〕
日本古今人物史〔巻之五〕宇都宮遯菴著
近代名家著述目錄〔一〕
慶長以來諸家著述目錄〔上〕
鑒定便覽〔一〕
大日本人名辭書
儒林傳滋井太室著
日本名家人名詳傳〔上〕
讀史論集山路彌吉著

事實文編（卷之十一）
國書解題
名家全書
日本德育史傳
東洋倫理大綱（後編）
大日本史料原稿一卷
藤樹全書（卷十）
野史（第二百五十四卷）
斯文源流　河口靜齋著
墨水一滴　稻葉默齋著

木下順庵之肖像



第三章　木下順菴

惺窩の系統を繼ぎ、敎育家として異彩を放つもの、是れを木下順菴となす、順菴、名は貞幹、字は直夫、小字は平之丞、順菴は其號なり、又錦里と號す、京師の人、幼より强記、善く書を讀み、字を寫し、頗る早熟の徵を現はせり、僧天海見て之れを奇とし、以て法嗣となさんとす、然れども順菴從はず、年十三にして太平頌を作る、載せて文集卷十八にあり、其造句構思の技倆、廸も十三童の作と思はれざる程なり、大納言烏丸公之れを後光明帝に献ず、帝大に之れを賞賛す、其後惺窩の門人松永尺五が門に入り、學業大に進む、尺五乃ち期するに大器を以てす、旣にして東、江戶に赴き、道の合はざるを見て、復た京師に歸り、跡を東山に潛め、書を讀み、人を敎ふること幾ど二十年、其家塾を雉塾といひ、殆んど一世の俊髦を集め、彬々として人材を出だせり、是に於てか順菴の名、天下に聞え、臺閣公卿爭ひ引いて以て門客となし、一時の名士貝原益軒、安東省菴、宇都宮遯菴の如き

亦皆推重して、敢て之れと並ばず、其聲望の盛なる、以て想見すべきなり、

加賀侯幣を厚うして順菴を召す、順菴辭して曰く、

余は尺五先生の門人なり、今先生の嗣子永三(昌易の弟)あり、未だ仕途に就かず家道屢〻空し、請ふ先づ之れを聘せられよ、

侯之れを聞き、嘆じて曰く、

順菴の如き古人の風ありといふべし、

即ち松永氏と共に之れを聘せり、天和二年常憲公命じて國史を修めしむ、書成りて之れを上る、其後常憲公親ら周易を講ずるに當り、常に順菴をして其座に侍せしむ、順菴元祿十一年十二月廿三日を以て歿す、享年七十八、私に謚して恭靖先生(恭靖或は誤りて靖恭に作る)といふ、順菴が墓、今池上本門寺の傍にあり、蓋し當時彼處に葬りしものならん、順菴著はす所錦里文集十九卷及び班荊集二卷あり、二子あり、長は敬簡、字は順信、淨菴と號す、早く死す、次は汝弼字は寅亮、小字は平三郎、菊潭と號し、又竹軒と號す、加賀侯に事ふ、菊潭の曾孫に靜、字は正直なるものあり、天明中順菴が遺稿

を校刻す、今の錦里文集是れなり、順菴が弟に木下恒菴あり、恒菴の子に巽軒あり、名は國堅、字は彌夫、又栗園と號す、巽軒曾て恭靖先生挽詞十首を作る、載せて錦里文集卷末にあり、又祇園南海が巽軒に寄送するの序、南海文集(卷之五)に見ゆ、

順菴は教育家として成功せるものにて、其門下より濟々たる多士を出だせり、例へば、新井白石、室鳩巢、祇園南海、榊原篁洲、南部南山、松浦霞沼、三宅觀瀾、服部寛齋、向井滄洲等の如き、皆順菴の薫陶を受けたるものなり、柴野栗山曰く、

盛なるかな錦里先生門の人を得るや、大政に參謀するは、源君美在中室直清師禮、外國に應對するは、雨森東伯陽、松浦義禎卿、文章は祇園瑜伯玉、西山順泰健甫、南部景衡思聰、博該は榊原玄輔希翊、皆瑰奇絕倫の材、其岡島達の至性、岡田文の謹厚、堀山輔の志操、向井三省の氣節、石原學魯の靜退、亦得やすからざるものにして、師禮の經術、在中の典刑、實に曠古の偉器、一代の通儒なり、夫れかくのごとき數子の資を以てし

て、而して終身先生の訓を奉遵服膺し、敢て一辭も異同あらず、則ち先生の德と學と想ふべし。(錦里文集序)

順菴門人中白石、鳩巢、芳洲、南海、篁洲の五人を木門の五先生といふ、之れに南山、霞沼、觀瀾、寛齋、滄洲の五人を加へて是れを、木門の十哲といふ、又南山霞沼の二人甲子相同じきを以て木門の二妙と稱す、一說に霞沼と南海とを二妙とし、又一說に南山と西山とを二妙とす、順菴が句に「舊遊雖已沒、二妙繼餘芳」の句あり、是等の門人の外安東省菴の如きも嘗て順菴に接し、殆んど其門人の列にありしものゝ如し、彼れ自ら柳震澤に寄する書に曰く、

令師順菴先生去年特徵を得て、天下の儒宗たり、蓋し先生學古今を豁にし、道聖賢を師とす、不肖京にありて素より知る所なり云云、不肖昔し僭に同門の末席に陪し、栽培に沐し、陶鑄を承く、奉別以往今に三十餘年未だ嘗て領を引いて東に望み、懿範を欽慕せずんばあらざるなり、(省菴遺集卷之五)

貝原益軒も亦屢〻順菴と相接して得る所ありしもの、如し、(益軒年譜)順菴が薫陶の廣且つ大なる、決して尋常ならざるものありしを知るべきなり、

順菴著はす所文集ありと雖も、學說の紹介すべきものあるなし、然れども彼れが敎育家として成功せるを以て之れを觀れば、必ず其成功し得べきものを有せしに相違なし、木下菊潭が撰に係る錦里先生小傳に云く、

其朝にあるや、終日整齊嚴肅にして、容らざる者の如し、其家にあるや、燕居私室と雖も、恒に盛服端坐す、人之れを望むに神の如し、天資至孝にして父母に事へて其志を致し、其養を極む、云云、

又云く、

三宅澹菴君の女を娶りて配となす、先づ卒す、後再び娶らず、孤枕獨衾、野僧の如く然り、平生一も嗜欲なし、食は必ず淡泊、服は必ず黃白、云云、

此れに由りて之れを觀れば、順菴は古風の道學者にして、高尙なる人格

を有せるものなり、菊潭又順菴の學を論じて曰く、

先君子天質穎悟の器を抱き、大平無事の世に遇ふ、一生の受用、道德性命の學を以て根本となし、博聞多識を以て枝葉となす、其詩賦文章の如きは、殘膏剩馥のみ、(錦里文集序)

木門の出身に鳩巣芳洲等の如く道德を重んずるの士少しとせざる以上は、其師の學の必ずしも文學の一方に偏せざりしを察知すべきなり、祇園南海は親しく敎を順菴に受くるもの、嘗て順菴を論じて曰く、

恭靖公は一代の宿儒、道德文章、所謂醇乎たる大賢、賓客門生、薰然として化せざるはなきなり、左右使令、充然として醉はざるはなきなり、(南海文集卷之五)

室鳩巣又曰く、

嗚呼先生德業の崇き、文章の懿なる、獨り天資の然らしむるのみならず、亦學術の自ら致すに由る、故に其行の篤きや、家にありては親に事へて孝に、兄に事へて弟に、以て室家宗族の類に及ぶ、恩義の厚き至ら

ざる所なし、云云、(祭恭靖先生文)

此れに由りて之れを觀れば、順菴が有道の君子たりしこと、復た疑なきなり、順菴は言論よりは寧ろ實行によりて子弟を感化せしものと見え、道學に關する著書は一も之れなきに拘はらず、反りて人材を養成し、敎育の効果を不言の中に顯はせり、雨森芳洲其著「たはれ草」の中に順菴の事を記して云く、

ある人、神は聰明正直にして、一なるといふ言葉をあげて、聰明とはいかゞいひたる言葉なるかとたづねしに、一念こゝにおこれば、そのまゝ知り給へばこそと、わが師なりし人こたへられしに、其座に侍りたる人ども、いづれもせなかに水をそゝぎたるやうにおぼえ感悟したりき、今かきつけて見れば、さまでかはりたる事にもあらねど、まことに會得したる人のいへるは、言詞のほかに人を感ずる事あるにや、頭上三尺の天といへることはたふとしと、わが師はつねにかたりき、

是れ順菴がいかに子弟を感化せしかを證するに足るものなり、今其旨

意を考ふるにソロモンの箴言第五章第廿一節に、

各自の途は神の目の前にあり、彼れは總べて其行爲を量れり、

と云へるに同じ、東西洋の暗合も、此に至りて聊、奇異の感なき能はざるなり、芳洲又橘窓茶話〔卷中〕に順菴の人物を論じて曰く、

愷悌にして書を愛し、英才を敎育するは、之れを見る、其他吾れの得て知る所にあらざるなり、

芳洲が此數言幾ど順菴の人物を形容し盡くせり、「愷悌にして書を愛し、英才を敎育する」は、順菴一生の事業にして是れ彼れが敎育家として成功せる所以なり、近世叢語〔卷之三〕に順菴が事蹟を叙し、論じて云く、

人を敎ふるに力あり、磨礱淬濯、其器を成就す、

是れ蓋し順菴が耳提面命の狀況を說示するものにて未だ其何のよる所あるを知らずと雖も、事實の多く之れに差はざること畧、想見するを得べきなり、頃ろ偶、長野豐山が松下快談〔卷之四〕を覽るに云く、

余程朱を尊信すること神明の如し、我先輩にありては、獨り順菴鳩巢

二先生に折服す、鳩巣の才德、世皆之を知る、今必ずしも之を論ぜず、順菴先生に至つては、世唯目するに溫厚長者を以てするのみ、先生の德量の大、當時無雙なるを知らざるなり、若し夫れ鳩巣白石觀瀾南海芳洲の數人は皆右の所謂奇才豪傑にして、各長ずる所を擅にし、名聲天下に震曜す、獨り先生默然として能くする所なき者の如し、而して前の數子皆先生に師事す、猶ほ七十子の孔子に於けるがごとく、思ふて服せざるなし、是れ豈に徒に聲音容貌を以て世を欺き名を盜む者の能くし得る所ならんや、先生人を敎ふるに、各其材に因つてこれを篤うす、猶ほ孔門の諸子の德行政事言語文學各其材を成すがごときなり、是れ豈に腐儒の柱に膠して瑟を鼓し、舟を刻んで劍を求め、一定の權衡を懸けて以て人を待つと同じからんや、先生才を愛し、士を好み、稱譽薦達、唐宋名賢の風度あり、亦余の深く其德量に服する所以なり、

是れ亦能く敎育家としての順菴が人格性行を描出するものなり、之れを要するに、順菴は直接に自家の主張によりて何等の貢獻する所も、之

れなしと雖も、間接に敎育によりて朱子學の發達を助成せるの功、淺少なりとせず、

尙ほ順菴の學問文章に就いては、先哲叢談(卷之三)に左の如き評論を擧ぐ、云く、

物徂徠曰く、錦里先生なるもの出でゝ、搏桑の詩、皆唐なりと、服部南郭曰く、錦里先生實に文運の嚆矢たり、其詩工ならずと雖も、唐を首唱すと、又聞く、先生恒に言ふ、十三經注疏を熟讀するにあらざれば、則ち經に通ずといふべからずと、此れに由りて之れを觀れば、所謂古學も亦先生之れが開祖たり、

若し此十三經注疏云云の事果して眞實ならば、順菴は、古學の開祖といふよりは、寧ろ折衷派の開祖なり、何んとなれば、假令ひ十三經註疏を熟讀するの必要を言ひしも、程朱を排斥するの意は寸毫も之れなければなり、彼れ述懷の詩あり、云く、

滔滔儒流天地始。發レ源太極少二人窺一。羲黃堯舜百王祖。孔孟程朱萬世師。敬

直義方宜守靜、博文約禮豈求奇、東夷小子空勤苦、佛法千年涵四維、

又朱子と題する詩あり云く、

遺經千歲決群疑、義理精微抽繭絲、仰止鵞湖論舊學、確乎鹿洞定新規、百王蓍鑑編綱目、四子階梯錄近思、頓悟金谿何足貴、泗源嫡派舍君誰、

其程朱を尊信するの篤き、以て知るべきなり、唯自ら卑下して東夷と稱するは、徂徠と同じく拜外の弊に陷ゐるものにて、深く惜むべしとなす、之れを要するに、順菴は篤く程朱を尊信すと雖も自ら其圈套中に限極せしにあらずして、更に又古註を併取せしもの丶如し、其門人榊原篁洲が折衷的態度を取りて、學派を區別することを好まず、古註と新註とを兼用せしもの、順菴が指導に本づくにあらざるか、併せ記して姑く疑を存す、

次ぎに順菴門人の事蹟を一瞥せん、

(1)新井白石、名は君美、字は在中、小字は勘解由、初の名は璵、姓は源氏、白石は其號なり、又錦屛山人と號す、江戸の人、幕府に仕ふ、白石は當時

の人豪にして、學識も亦非凡なり、然れども經學者にあらず、寧ろ歷史、故實、制度、詩文等に長ぜり、其著はす所一百六十餘種ありといふ、然るに堤朝風撰ぶ所の白石先生著述書目には凡そ一百七十種を列擧せり、我邦に於ては、古來著書の多き、未だ白石に及ぶものあらざるなり、白石少より大志あり、常に自ら誦して曰く、大丈夫生きて封侯を得ずんば、死して當に閻羅となるべしと、彼れ享保十年五月十九日を以て歿す、享年六十九、淺草の報恩寺に葬る、門人益田鶴樓、土井霞洲あり、(先哲叢談、卷之五、先哲像傳卷三、近世叢語卷之二、文會雜記、鑒定便覽、閑散餘錄、甘雨亭叢書、活版經籍考、近聞寓筆、白石先生著述書目)

(2) 室鳩巢、後に出だす、

(3) 祇園南海、名は瑜、又の名は正卿、字は白玉、一の字は斌(ひん)、小字は與一郎、南海は其の號なり、又鐵冠道人と號す、紀伊の人、紀州侯に仕ふ、詩を以て名あり、寶曆十一年を以て歿す、享年七十五、著はす所、南海集五

先哲叢の上に白石先生年譜を加ふ。

卷、湘雲瑣語三卷等あり、(先哲叢談卷之六、近世叢語卷之三、日本詩史卷之四、補遺鳩巣文集卷之六、諸家人物志、書乘要略)南海の子を鐵船といふ、鐵船名は倘瀬、字は師援、小字は孫三郎、亦文墨を以て世に名あり、

(4) 榊原篁洲、名は玄輔、字は希翊(いよく)、篁洲と號す、通稱は小太郎、後、元輔を以て通稱となす、篁洲は其號なり、又惕々子と號す、和泉の人、紀州侯に仕ふ、篁洲は主として力を經義に用ひ、旁ら雜技に及べり、順菴晩年戲に人に謂つて曰く「伯陽の華音、君美の典詁、師禮の經義、希翊の技藝、我門の手足なり」と、篁洲書畫を善くし、又支那の法制を研究せり、或は云ふ、我邦に於て、支那の律學政書を講明するは實に篁洲より始まる、と篁洲常に云く、

天下の技藝、各、四等あり、一に曰く、下手、二に曰く、巧者、三に曰く、上手、四に曰く、冥盡、上下三千年、縱橫一萬里、存する所、此に出でず、學者の道に於けるも、亦然り、

彼れ寶永三年を以て歿す、享年五十一、著はす所、十有餘種あり、男、名は延壽、字は萬年、孫、名は良顯、字は彰明、靑洲と號す、(先哲叢談後編卷之二、近世叢語卷之三、後編鳩巢文集卷之十六、諸家人物志、鑑定便覽、日本名家人物詳傳)

(5) 雨森芳洲、後に出だす、

(6) 南部南山、名は景衡、字は思聰、南山は其號なり、又環翠園と號す、通稱は昌輔、長崎の人、富山侯に仕ふ、正德二年を以て歿す年五十五、南山人となり溫恭にして、經史に精通し、詩文を以て稱せらる、子あり景春といふ、景春、字は國華、幼にして詩才あり、享保二年を以て歿す、年僅に廿三、(先哲叢談後編卷之三、近世叢語卷之四、先民傳、鑑定便覽)

(7) 松浦霞沼、名は儀、字は禎卿、通稱は儀右衛門、霞沼と號す、播磨の人、雨森芳洲と同じく對馬侯に仕へ、屢〻韓人と相接す、享保十三年を以て歿す、年五十三、著はす所通交大記五十卷、宗氏家譜卅二卷、殊號辨正二卷、殊號事畧正誤一卷等あり、彼れ嗣子なし、乃ち芳洲の第二子名

は權允なるものを養ふて子となす、權允字は文平、通稱は贇二郎、職を襲ぐ、(先哲叢談續編巻之五、近世叢語巻之四、諸家人物志、鑑定便覽)

(8)三宅觀瀾、名は緝明、字は用晦、小字は九十郎、觀瀾は其號なり、石菴の弟、平安の人、初め水戸義公に仕へ、後白石の推薦により幕府に仕ふ、正德二年を以て歿す、年三十八、著はす所中興鑑言一巻、觀瀾文集二巻等あり、彼れ兄石菴の陽明學を奉ぜしとは其流を異にして、朱子學を奉じ、殊に薛敬軒丘瓊山を稱揚せり、(送嚴書記序)梁田蛻巖が文柄と題する文に云く、

物徂徠老たり、弩末縞に入ること能はず、天又滕煥圖を奪ふ、左右の手を失ふが如し、室鳩巣は醇乎たる古先生、澹泊自ら守り、鬪心なきなり、宅觀瀾幟を駿臺に竪て、堂々正々の威、殆んど牛門をして關を塞いで敢て東馬に飲ましめざらしむ、不幸にして星隕す、勝げて嘆すべけんや、(蛻巖集後編巻之八)

觀瀾の當時に於ける名望、此れに由りて知るべきなり、彼れ早逝す

と雖も、當時有名の士と並び稱せらる、(先哲叢談卷之五、近世叢語卷之三、甘雨亭叢書、蛻巖集、諸家人物志、)

(9) 服部寛齋名は保庸、字は紹卿、通稱は藤九郎、寛齋は其號なり、又龍溪と號す、服部氏自ら修して服とす、東都の人、文廟の侍講となる、寛齋人となり至孝にして其行謹厚に、博學にして才華を競はず、弟愿、字は維恭、亦共に侍講となる、享保六年を以て歿す、年五十五、(諸家人物志、鑑定便覽、名人忌辰錄)

(10) 向井滄洲、名は三省、字は子魯、後に魯甫と改む、通稱は小三次、一時柳川氏を冐せり、攝津の人、滄洲曾て仕志ありしも遂に果たさず、家居して學行を修め、其居る所の堂を名づけて敬居といふ、其言に云く、

子弟を教育する、宜しく我躬之れに先ずべし、德以て經となし、才以て緯となす、二つのもの居敬に始まる、

と、眞に然り、彼れ享保十六年正月十九日を以て歿す、年六十六、門人字明霞、石川麟洲、上柳四明等あり、(先哲叢談續編卷之五、近世叢語卷

之三、鑑定便覽、諸家人物志、)

(11)西山西山、名は順泰、字は健甫、西山と號す、通稱は健助、本と阿比留氏、後、氏を西山に改め、自ら修して西となす、對馬の人、對馬侯に仕ふ、元祿元年十月三日を以て江戸に歿す、年三十一、(先哲叢談後編卷之二、近世叢語卷之六、諸家人物志、鑑定便覽)順菴西山が碑陰を作る、(錦里文集卷十八)

(12)岡島石梁、名は達、字は仲通、小字は忠四郎、本姓は越智氏、加州侯に仕ふ、寶永六年六月を以て歿す、年四十四、(鑒定便覽)

(13)岡田竹圃、名は文、字は信威、小字は文藏、東武の人、其先は朝鮮人、壬辰の亂に我兵に掠められて遂に歸化せり、竹圃は其孫なり、從仕して南紀にあり、(諸家人物志、鑒定便覽)

(14)堀山輔、字は順之、江戸の人、年二十餘にして始めて順菴に學び、家貧窶なりと雖も、其志を屈せず、高行の聞えあり、故に栗山も其志操を稱せり、(近世叢語卷之四、鑒定便覽、諸家人物志)

(15) 石原鼎菴、名は學魯、字は貫卿、鼎菴は其號なり、又梓山と號す、長崎の人、元祿十一年を以て歿す、時に年四十二、著はす所梓山拾翠集あり、(續近世叢語卷之三、鑒定便覽、諸家人物志)

(16) 圓田宗叔、字は子彝、雲鵬と號す、後勝田氏に改む、東武の人、醫を以て業となす、(鑒定便覽、諸家人物志)

(17) 青木東菴、名は證、字は元證、一の字は元微、又以行、別號は松岳、姓は餘(あまり)氏、京師の人、(鑒定便覽、大日本人名辭書)

(18) 安東省菴、名は守約、字は魯默、筑後の人、後に出だす、錦里文集卷三に左の詩あり、云く

送安東詞宗還海西

渭城聲裏暗添愁、行色明朝天一涯、春樹暮雲千里眼、斷山極浦幾篇詩、盟存車笠深知去、學辨陶陰博決疑、好賴平生稽古力、榮名長向九州馳、

(19) 柳川震澤、名は順剛、字は用中、通稱は平助、震澤は其號なり、又霅(たう)溪釣

叟と號す、震澤木門にありて、尤も先輩となす、篁洲、南山、西山、鳩巢等、皆之れに兄事す、惜くば彼れ僅に不惑を踰えて歿せるを、著はす所霅溪日錄六卷、續錄六卷、平菴漫錄二卷、震澤長語十卷、韓館酬和集二卷、及び遺文集若干卷あり、（先哲叢談續編卷之二、鑒定便覽、諸家人物志）鳩巢が柳川三省に與ふる書に云く、「吾友震澤博物の識、人に過ぎるの材あり、宜しく世の用ふる所となるべくして、遂に窮死す、未だ嘗て震澤を識らざるものと雖も、苟も稍學を好み、書を識るものは、猶ほ愛惜して之れを嗟嘆す、況んや淸、震澤と同門の友、交遊の久しき、一念、此に至る每に、未だ嘗て慨然大息し、之れに繼ぐに泣を以てせずんばあらず、」云云（前篇鳩巢文集卷之八）

(20)

板倉復軒、名は九、字は惇叔、小字は九郎右衞門、江戶の人、初め業を木門に受くと雖も、後、徂徠と交はり、其子をして皆徂徠に學ばしむ、享保十三年を以て歿す、年六十四、（先哲叢談後編卷之三、鑒定便覽、日本名家人名詳傳）

第四章　雨森芳洲

第一　事蹟

惺窩羅山以後朱子學を奉じ、一家を成すもの、其人に乏しからずと雖も、學説の見るべきものに至りては比較的に少し、但、雨森芳洲、安東省菴、室鳩巣の三人は倫理に就いて説を立つること少しとせず、因りて先づ芳洲を考察せん、芳洲、名は東、(ロ)一の名は誠淸、字は伯陽、小字は東五郎、芳洲と號し、又尙絅堂と號す、其先橘姓に出づ、或は京師の人と云ひ、或は伊勢の人と云ふと雖も、對州十日記に據るに、彼れ本と近江國雨森村に生まる、甫め十二三歳の時、人或は醫を學ばんことを勸む、時に伊勢の名醫高森某といふもの、人に謂つて曰く、書を學べば紙費え、醫を學べば人費ゆ、此語眞に然りと、芳洲傍にありて之れを聽いて以爲く、人其れ費やすべけんやと、乃ち醫を學ぶの志を絕つ、年十七八の頃江戸に赴き、

(ロ)近代名家著述目録に名は俊良とすれども、未だ其確實なる根據あるを發見せず、故に姑く疑を存す、

木下順菴に從つて學ぶ、芳洲人となり風神秀徹、螢雪の功を積むに及んで、博學多通、順菴乃ち稱して後進の領袖となす、對馬侯人物を木門に求むるに當りて順菴彼れを勸む、彼れ是に於てか對馬侯に仕へ、藩の文教を掌り、屢〻朝鮮人に接對し、名聲海の內外に聞ゆ、彼れ能く朝鮮音に通じ、又支那音に通ぜり、故に通辯を俟たず、直に朝鮮人及び支那人と談話するを得たりといふ、橘窓茶話(卷之下)に云く、

余心を唐話に用ふること五十餘年、朝より夕に至るまで少しも廢歇せず、一に沙を搏ちて把握すべきこと難きが如し、云云、

彼れの苦心、以て知るべし、思ふに、芳洲は殊に詩文を以て長ぜるものにあらず、就中詩は最も拙なり、彼れ晩年常に人に謂つて曰く、

吾れ詩才なし、平生作る所無慮數百千首、而して人に示すべきもの、數十首なり、(日本詩史卷之四)

晩年歌を作りて其數萬首に及ぶと雖も、亦成功せるものにあらず、換言すれば、文學者として大に一代に秀でたる所あるを見ず、然れども彼れ

は朝鮮音と支那音とを學んで正則的に漢學を研究せり、是れ其餘人に異なる所なり、且つ彼れは一種の見識を具有せり、物徂徠の彼れを推重せしもの、此にありて存するか、答屈景山書に云く、

洛に伊原藏あり、海西に雨伯陽あり、關以東に室師禮あり、

眼一世を空うする徂徠にして、天下の學者を數へ來たりて海西の芳洲に及ぶ、芳洲の未だ遽に侮るべからざるものあること、此れに由りて知るべきなり、又與江若水書に云く、

雨芳洲果して來訪す、劇談三日、偉たる丈夫、其子顯允、予を拜して師となす、門下に留まるもの三月、行々將に西に歸らんとす、亦偉たる丈夫、必ず家聲を墜さゞるもの、余皆序を作りて之れを送る、芳洲更に丈夫子二人あり、皆幼にして詩を善くす、渠れ啻に偉たる丈夫なるのみならず、亦福人といふべきなり、

徂徠が此の如く芳洲を推重するに拘はらず、芳洲は徂徠に於て未だ心に滿たざるものあり、芳洲嘗て徂徠を江戸に訪ひ、相見て甚だ之れを悅

ぶと雖も、學問文章、徂徠と其途を異にす、是れ其途に徂徠に心服せざる所以なり、彼れ竊に徂徠を評して曰く、

博覧文章、域内比なし、第大綱上に於て差あり、心實に慊せり、（橘窓茶話巻中）

又徂徠の教育法を論じて曰く、

徂徠人を教ふるに盛氣を以てす、此れ一術なり、然れども知らざるものは、激厲未だ至らずして、遽に自ら許與す、故に徂徠の精細なるが如きこと能はず、此れ亦思はざるべからざるなり、（橘窓茶話巻上）

芳洲嘗て一たび其子顯允をして徂徠に從學せしむ、既にして歎じて曰く、

茂卿は一代の豪傑、然れども其人を教ふるや浮華を尚んで德行に原づかず、久しく少年輩を託すべからざるなり、（甘雨亭叢書）

乃ち塾を出でゝ歸らしむ、蓋し芳洲、徂徠と心術性行、一致せざるもの多し、徂徠李王を喜べども、芳洲之れを喜ばず、論じて曰く、

朱明王李等の家集の如き讀むもまた可なり、讀まざるもまた可なり、又從つて言つて曰く、讀まざるに如かず、(橘窓茶話卷上)

是れ畢竟李王を無用視するものなり、徂徠支那を崇拜すること甚しく、總べて我官名地名をも支那風にせり、然るに芳洲は大抵原名を漢文中に使用せり、徂徠は支那を崇拜するの極、或は名分を顧みざることあり、芳洲は名分を正すに嚴なり、其論に云く、

惺窩の二先生以來東藩を稱して柳營となし、將軍を呼んで大樹となす、名實相稱ふ、字を識るの儒といふべし、余二十歲の時、東にあり、世人唐詩選を讀むを知り、爭ふて、詞語宏麗を以て貴しとなし、動もすれば丹鳳城青瑣闥等の語を用ひ、以て東藩の事となす、翰林の宗匠も亦之れを能く禁ずることなし、蓋し人の無知なる、此の如きものあり、云云、(同上)

是れ彼れが二十歲の時の事なれば固より蘐園の徒に對して言ふ所にあらず、殊に其翰林の宗匠といふは、林鳳岡を指して言ふものなり、(文集卷之

二を見よ)然れども亦能く蘐園一派の弊に當れり、徂徠豪傑の態度を取りて道德を重んぜず、道學先生たらんよりは寧ろ曲藝の士たらんことを公言せり、然るに芳洲は儉素にして道義を重んじ、一點耿々として良心の胸中に存するを見る、彼れ道を論じて曰く

天下の道を言ふもの、これを口に發して、之れを弟子の耳に入る、弟子これを耳に得て、又之れを其弟子の耳に入る、口耳相傳へて、心與ることなくんば、何の益かあらん、故に曰く、之れを敎ふるに言を以てするは、之れを敎ふるに身を以てするに如かず、(同上)

實踐躬行の千言萬語に優ること、眞に彼れが言ふ所の如し、古人が「言に訥にして行に敏ならんことを欲す」といひしも、亦此意に外ならざるなり、彼れ又曰く、

中庸に云く、詩に曰く、尙くば屋漏に愧ぢず、君子の及ぶべからざる所のもの、其れ唯、人の見ざる所かと、余甚だ斯言を重んじ、心に銘し、骨に刻み、初學より年將に八十ならんとするに至るまで、未だ嘗てしばら

くも忘れざるなり、但未だ其髣髴を得ざるのみ、（橘窓茶話巻中）

此れに由りて之れを觀れば、彼れが私室に於ける時と雖も、亦常に其動作を愼み、戰々兢々として聖人の敎に背かざらんことを務めたるを知るべきなり、彼れは又自ら奉ずること、極めて儉素なりき、其言に云く、吾れ飮食衣服より以て宮室爵位に至るまで、絶えて偏好なし、故に閨厨寂然、家門事なし、此れ即ち以てこれを鬼神に質して愧なかるべし、縱ひ老莊に及ばざるも、關尹以下は蔑如たり、唯平生最も堪へざるものゝ四あり、一に曰く、詩の惡しき、二に曰く、碁に輸くる、三に曰く、身の疼き、四に曰く、錢なきのみ、（同上）

又曰く、

余庸拙不肖、素より片善の寸稱なし、但世人患ふる所の疝氣痰火頭痛痔瘻等の症、一もある所なし、禀質健康にして、年將に八十ならんとす、又早く侯家に托して、身凍餒の憂なし、長子亡ぶと雖も、次男三男以て家を保すべし、女子女孫早く已に閤より出でゝ、孫兒箕裘の望なきに

あらず、亦人生の大快事ならずや、王侯の貴、素封の富、盛ならざるにあらざるなり、然れども吾が慕ふ所にあらざるなり、此れ皆祖宗の貴德、父母養育の致す所、平日祠堂香火、唯〻拜謝あり、敢て祈禱の言をなさず、蓋し器小に量窄く、願欲足り易きが故なり、(同上)

彼れ平生儉素にして其分に安んずるを以て平和は常に彼れが胸中に宿り、貪欲なる煩悶の爲めに累はさるゝが如きことなかりき、彼れかゝる人格にてありながら意外にも戲謔を好めりと見え、或る人嘗て何故に其戲謔の多きやを問へり、彼れ乃ち之れに答へて曰く、

余素より東方朔の人となりを慕ふ、敢て大先生たるを願はざる故なり(同上)

彼れ固より德行を修むと雖も、亦嚴肅の一方に走り、全く洒落の趣を失ふが如き、興味索然たる態度に陷らざりしこと、以て知るべきなり、室鳩巢「たはれぐさ」の末に朝鮮の趙泰億が芳洲に贈れる留別の詩を載す、云く、

絶海誰奇士。芳洲獨妙譽。能通諸國語。且誦百家書。落拓寧非數。才華儘有餘。明朝萬里別。回首意如何。

祇園南海は木門の俊秀なり、嘗て芳洲を論じて曰く、

予諸友に於て其敬畏する所、伯陽氏に如くはなし。(鍾秀集)

芳洲の時人に推重せられしこと此の如し、彼れ白石と共に木門に出でゝ相識ること三十年、然れども遂に相合はず、白石を以て其心術、測るべからざるものとなす、白石、朝鮮の使者に對し、幕府を稱して日本國王といへり、芳洲乃ち書を白石に送り、其非を論じ、横說縱說、復た餘力を遺さず、其書載せて文集巻二の首めにあり、自ら書尾に書して曰く、

東此書を作る、實に憂慮に切なり、一言既に出でゝ、駟馬追ひ難し、倘し加ふるに時政を誹訕するの罪を以てせば、則ち家門の禍、勝げて言ふべけんや、第一片慷慨忠義の心、勃々として自ら制すること能はず、且つ紀綱に任じ、名分を正す、唯君子の學をなすもの、之れを能くす、若し自ら威を畏れ、安を偸み、口を履霜堅氷の際に箝まば、則ち平生讀む所

のものくして何の書ぞや、縱ひ不測を踏むも、實に甘心する所、云云
彼れが如き實に名分を知るの士といふべし、諸家人物志に芳洲の人と
なりを記して、
性質溫厚にして、人と爭はず、
と云へども、苟も大義名分の關する所に至りては、侃々諤々、之れを爭ふ
て寸毫も假借する所なきなり、
芳洲は寶永五年正月六日を以て歿す、享年八十八、著はす所橘窓文集二
卷、橘窓茶話三卷、芳洲口授一卷、たはれ草一卷等あり、就中茶話は普通の
隨筆に過ぎずと雖も、亦間〻彼れが道學に關する學殖を窺ふに足るもの
あり、芳洲口授は甘雨亭叢書に收載し、たはれ草は百家說林中に編入せ
り、

第二　學說

芳洲深く宋儒の學說を尊信し、明儒を喜ばず、明儒、宋儒を以て迂腐となすと雖も、宋儒は反りて孔子に近似し、明儒は之れと其軌を異にし、申韓老莊の說を雜へ、滔々として詭譎に流れんとするものとせり、彼れ論じて曰く、

洙泗の後、唯々閩洛の學、以て不朽に垂るべし、本末巨細、悉く備はらざるなし、諸家紛々の說、陸象山の頓悟、陳同甫の事功、王陽明の良知の如き皆其範圍の中にあり、彼れ其務めて一偏の說をなすもの、卒然として之れを見れば、竦動せざるにあらず、究竟聖人を去るや遠し、(橘窗茶話卷上)

彼れが程朱を推尊すること餘りに度に過ぎたり、陸象山陳同甫及び王陽明の學說を以て悉く其範圍內にありといふも、未だ遽に首肯すること能はず、若し陸王の見解を以て明道に本づくものとせば、姑く之れを

恕すべきも、悉く洛閩の圏套外に出でずとするが如き、頗る過言の嫌なしとせざるなり、彼れ程朱を尊信すること、深且つ厚なりと雖も、彼れ自身の見解は極めて豁大にして迥に洛閩に超絶するものあるなり、彼れ論じて曰く、

上天の載は聲もなく臭もなし、聲もなしとは形なきなり、臭もなしとは、體なきなり、佛家は之れを虚空といひ、道家は之れを自然といひ、儒家は之れを理といふ、曰く、然らば三家、門を同うするか、曰く、敎を立つること異あり、自ら修むること一ならず、五官四肢之れを形といふ、湊して之れを名づけて之れを體といふ、(同上)

是れ儒道佛の三敎を通じて異なる所なき根本主義を執へて之れを論ずるものにて、同中に異を認め、異中に同を認むる處、自ら一家の識見あるを知るべきなり、彼れ又論じて曰く、

老聃は虚無の聖なるものなり、釋迦は慈悲の聖なるものなり、孔子は聖の聖なるものなり、三聖人の形而上を言ふや、謀らずして同じ、蓋し

天唯一道にして理に二致なきが故なり、其形而下を言ふや差へり(同上)

是れ儒道佛共に其敎の由りて生ずる所の精神(即ち形而上)は異なることなきも、其敎を世に施す所の方法(即ち形而下)は同じからざるをいふなり、此事、實に然り然れども獨り孔子のみを以て聖の聖なるものとするは、其好む所に僻するに由るなり、或る人嘗て彼れに三敎に於て之れを待つの道を問ふ、答へて曰く、

余以爲く、夫子なり、迦なり、聃なり、此三人は衆父の父なり、我れ子弟の列にあるもの、敢て抗せざるなり、抗すべからざるなり、當に之れに抗遇すべからざれば、之れを拱し、之れを揖し、之れを拜し、之れを稱すれば、先覺といふ、亦宜ならずや、(橘窻文集卷之二)

彼れ又曰く、

天惟一道にして、理に二致なし、惟敎を立つること異なるあり、故に自ら修むること一ならず、釋子の法は乾燥、儒門の敎は滋潤、彼れ以爲く、

其滋潤ならんよりは、寧ろ乾燥ならん、此れ以爲く、其乾燥ならんよりは寧ろ滋潤ならん(同上)

其乾燥といふは、陰氣なるを意味し、其滋潤といふは、陽氣なるを意味するに似たり、彼れ又同一の旨意を述べて曰く、

僕不肖竊に三家の斷案を立つ、曰く、「天惟一道、理無二致、立教有異、自修不一」と、一生得る所、惟此十六字あるのみ、未だ果して然るや否やを知らず、(橘窓茶話卷下)

彼れ此の如く一生得る所惟此十六字あるのみといふを以て之れを觀れば、是れ彼れが一生に於ける得意の論と見るを得べし、要するに、彼れの懷抱する所は三教一致の說なり、支那にありては、元の陶宗儀、明の林兆恩の徒、三教一致の說を唱道せり、我邦にありては僧空海始めて孔老釋の一致を言ふと雖も、儒者にして之れを言ふもの、恐くば、芳洲を以て嚆矢とすべけん、芳洲の得意、想ふべきなり、宋儒は竊に佛教に取る所あるも、未だ曾て之れを公言せず、而して佛教を排牴すること切なり、芳洲

は之れと異にして佛敎に對し寬大なる態度を取れり、其言に云く、

ある人の佛道をそしるとて、つくれる文を見るに、おほかた僧徒の悪業をのみあばき出だして、ほとけのみちの是非にはおよばず、かくいはゞ儒生のよろしからぬしかたいかほどもかきあらはし、ひじりのをしへをそしるべし、影を見てかたちをおもひ、ながれをさぐりてみなもとを知るは、まことにさる事なれど、末のつひえある事のみをいひて、其もとのいかゞと知らざるもうるさし、(たはれ草)

此論洵に公平なりといふべし、尙ほ又老釋の言、未だ必ずしも非とすべからざるを論じて曰く、

老子の言未だ非とすべからざるなり、釋子の言亦未だ非とすべからざるなり、異端たる所以のもの、事業差ふのみ、(橘窓茶話卷上)

是れ道敎佛敎共に根本主義に於て儒敎と異なる所あるにあらず、唯其敎を立つる方法に於て、此れと同じからざる所あるをいふものなり、彼れ又孔老釋を論じて曰く、

三聖一致にして未だ敢て三敎一法といはざるなり、然れども斯言をなすや、自ら其洛閩の罪人たるを知るなり（同上）

彼れの見解が儒敎の範圍を超脫して、一層豁大なる丈其れ丈程朱の軌道を離るゝこと遠し、是れ其自ら洛閩の罪人と稱する所以なり、彼れ又時ありて佛敎を以て儒敎に優れるものとするが如し、其言に云く、

形而上のもの、之れを道といふ、釋老以て敎となす、所謂第一義佛法なり、形而下のもの、之れを器といふ、吾儒以て敎となす、所謂第二義王法なり（同上）

若し道敎と佛敎とを以て形而上の敎となし、儒敎を以て形而下の敎となさば、是れ儒敎を以て道敎と佛敎とより一層卑きものとするにあらずして何ぞや、凡そ是等の言、悉く純然たる儒者の口より出づるものとして之れを考察せば、亦奇異の感なき能はざるなり、是を以て當時已に芳洲の立脚點を疑ふものありき、橘窓茶話（卷下）に云く、

或は曰く、子喜んで佛說を言ふ、所謂駸々然として其中に入るものか

笑つて曰く、非なり、

彼れ自ら此に其佛敎徒にあらざることを斷言せり、然れども佛經に說く所を以て理氣の二字に攝し、如來藏を以て天道となすが如く、儒敎の旨意を以て佛敎を解釋するの傾向あり、是を以て他の儒者の如く、佛敎に對して、甚しき反情を懷かざるなり、彼れ朱子を論じて曰く、

朱子佛を修むるものを以て槁木死灰となす、蓋し迹上の斷なり、（橘窓茶話卷中）

又山崎闇齋を論じて曰く、

嘗て妙心寺に沙彌たり、廿歲左右闢異一篇を著はし、寺門に貼し、還俗髮を蓄ふ、丈夫といふべし、惜いかな、其れ未だ佛意を知らざるなり、（同上）

芳洲が佛敎に對して寬容の態度ありしは、森儼塾の徒と異なることなし、然れども又儒敎の長處を發揮せざるにあらず、乃ち朱子の言を引いて云く、

異端固より說き得て著する處あり、但綱常上の說にあらず、君子のするを屑しとせざる所なり、（橘窓茶話卷下）

又揚子の言を引いて曰く、

揚子に云く、老子の道德を言ふ、吾れ取るあるのみ、仁義を搥投し、禮學を絕滅するに及んでは吾れ取るなきのみと、吾れ佛敎に於ても亦云ふ、（橘窓茶話卷中）

尙ほ又積極的に儒敎の世間敎なるを明言して曰く、

聖人の敎は惟天下を治むるなり、天上にあらざるなり、（橘窓茶話卷下）

更に又佛敎の旨意已に儒敎中に含有せらるゝことを論じて曰く、

釋子西域に生まれ、一生の力を窮むと雖も、言ふ所中國聖人の說に出でず、（橘窓茶話卷中）

此に至りて彼れの言、過大に失せり、例へば、四諦の說、三界の說、十二因緣の說、三世因果の說、豈に儒敎中にあるものならんや、解脫涅槃の說も、牽合附屬の解釋をなすにあらざれば、儒敎中にありといふを得ず、其他儒

致に之れなくして佛教に之れあるもの、一々算へ來たらば、實に其煩しきに堪へざるなり、此れに由りて之れを觀れば、佛教を以て儒教の範圍に出でずとするは、固より其當を得たるものにあらざるなり、

彼れ聖人の人格に就いて論じて曰く、

所謂聖人は即ち英雄の極なり、(橘窓茶話卷上)

其意印度に於て釋迦及び其他の智者(例へば「ジャイナ」派の祖師の如き)を指して大英雄 Mahā-vīra と稱すると同じ、又曰く、

思慮人より高きこと一等なれば、便ち一等の人たり、等しく之れを上げ、聖人に至りては人より高きこと、其幾何なるを知らず、萬世の教主たる所以なり、(橘窓茶話卷中)

是れ聖人の人格の天下萬衆に超絶して、思議すべからざるものあるをいふなり、又曰く、

聖人の百世を憂ふること一日の如し、蓋し智愈〻大なれば、慮愈〻遠し、小人は是れに反す、(同上)

次ぎに聖人の行藏いかんを論じて曰く、

富貴榮耀は君子の已むを得ずして之れに居る所以のものなり、貧賤幽潛は君子の甘じて之れを樂む所以のものなり、惟聖人は榮耀に意なく、亦幽潛に意なし、遇ふ所に遭ふて其命に循ふのみ(橘窓茶話卷下)

是れ孔子を以て聖人の標本となし、其意中の眞相を寫出だせるものなり、

芳洲義利の別を論じて曰く、

仁義の中、固より自然の利あり、義と利と元と二にあらざるなり、然れども人に告ぐるに此の如くすれば利にして、此の如くすれば不利なるを以てすれば、耳を傾けて聽かざるなし、若し之れに告ぐるに此の如くすれば義にして、此の如くすれば不義なるを以てすれば、面、忤色あらざるなし、君子は面、忤色あるを以てして、義を以て自ら慊はらず、耳を傾けて聽くを以てして之れを誘ふに利を以てせず、(橘窓茶話卷上)

又同一の旨意を述べて曰く、

功利を以て之れを誘へば、人皆喜ぶ、道德を以て之れを責むれば、人皆沮む、君子其沮むを以てして、其道德の責を廢せず、蓋し之れを誘ふに功利を以てすれば、人欲日に熾んにして、禍必ず之れに隨ふ、之れを責むるに道德を以てすれば、善心日に興りて、禍或は歸へることあらん、豈に自然にあらずや、(橘窓茶話卷中)

此れに由りて之れを觀れば、芳洲が義を以て道德的行爲の目的とし、功利論者の如く、利を以て目的とせざること明瞭なり、彼れ以爲く、利を以て目的とすれば、反りて利ならず、義を以て目的とすれば、反りて利ありと、是れ彼れが「仁義の中固より自然の利あり」といふ所以なり、尙ほ一層分明に其旨意を述べて曰く、

聖は樂の府なり、天下未だ聖人を樂まずんばあらず、然れども樂に意あれば、樂得べからず、唯〻當になすべき所をなせば、求めずして自ら得、(橘窓文集卷之二)

彼れの說此に至りてグリーン氏の倫理說と左右逢原、殆んど符節を合するが如し、何んとなれば、其旨意、グリーン氏の道德的行爲の目的は、快樂其物にあらずして、寧ろ自己充足 Self-satisfaction にありとするに一致すればなり、一般の幸福即ち公利公益は道德的行爲の目的たり得べしと雖も、個人的快樂は道德的行爲の目的にあらず、道德的行爲の目的は自己の良心に質して何等の疚しき處もなき自己充足を得るにあるなり、自己充足の結果として內界の快樂を得べく、又其結果として外界の快樂をも得べし、然れども快樂其物を目的として努力すれば、個人以上に超絕したる高尙なる道義を失ふの恐れあるを免れざるなり、果して然らば、芳洲の說、徂徠のそれと正反對を成して反りて其當を得たるものなるを知るべきなり、

次ぎに又彼れが爲學の方法を見るに、平素諸生に揭示して曰く、

學は人たることを學ぶ所以なり(橘窓茶話卷上)

と、或る人其餘りに單純にして且つ明白なるを怪み、問ふて曰く、

學は人たることを學ぶ所以なり、此意、人々之れを知る、何ぞ之れを奥妙といふを得ん、(同上)

彼れ乃ち答へて曰く、

是れなり、是れなり、人々之れを知りて而して人々未だ必ずしも知らざるのみ、(同上)

彼れが人たることを學ぶといふは即ち、人格修養を意味するなり、其言恐くば尹持講が「學者、所以學爲人也、」と云へるに本づくなるべしと雖も、之れを掲示して以て爲學の方法となすが如き、其當を得たりといふべきなり、彼れ又一日諸生を戒めて曰く、

老身叨に函丈の尊により、動もすれば、輒ち恣に責讓をなして曰く、賢等不敏なりと、此れ自ら老身を敏として、獨り賢等を不敏とするにあらざるなり、老身の賢契に於ける、一同不敏中の輩行、但、書を讀むこと日久しく、坐位較、差ふのみ、所謂聰敏なるものは、必ず程朱韓蘇に至りて乃ち極まる、然れども程朱韓蘇未だ嘗て不敏を以て自ら嘆ぜずん

ばあらざるなり、故に曰く、士は賢を希ひ、賢は聖を希ひ、聖は天を希ふ、蓋し義理窮りなき故なり、云云、(同上)

此最後の言、周子が通書に「聖希天、賢希聖、士希賢」と云へるを倒逆せるものにて大に味あり、普通の士人が直に天を以て己れが模範とするも、之れを實現せんと努力すること餘りに突飛なり、故に其間に二種の段階を設け、以て迥に相接することを得せしめたり、或る人又彼れを詈りて曰く、

叟將に八十に近からんとし、讀書倦まず、是れ自ら其學の竟に成ること能はざるを知らざるなり、愚といふべし、(同上)

と、彼れ乃ち之れに答へて曰く

活くること一日なれば讀むこと一日にして、務めて上り前まんと欲す、乃ち吾黨の志なり、學の能く成ることとなきや、吾れ之れを知ること久し、(同上)

是れ彼れが向上的進路を取りて活動し、一息の間も亦已むことなきを

叙述するものなり、彼れ又講學の妙機を說破して曰く、

昨夜一劍客を見る、其術を言ふこと甚だ詳かに、反覆萬端、之れを聽くに耳を以てすることなくして、之れを聽くに心を以てす、之れを聽くに心を以てすることなくして、之れを聽くに氣を以てするの說にあらざることなし、夫れ藝は至理の寓する所、故に一擊劍の微と雖も、其道に精はしきもの、其言暗に至道と合す、奇といふべし、(橘窓茶話卷中)

一技一藝に長ずるもの、必ず之れに長ずる所以のものあり、之れに長ずる所以のものを說くに及んでは、聽くもの亦必ず講學の妙機を連想し來たらざるを得ざるなり、

最後に芳洲が神道を尊重せしことを看過すべからず、文集の卷首に大寶說あり、三寶の意義を說き、國體の尊嚴を述ぶること至れり盡くせりといふべし、其言に云く、

三寶の設けや、一に曰く、璽、二に曰く劍、三に曰く鏡、璽は仁なり、劍は武なり、鏡は明なり、明以て之れを燭らし、武以て之れを斷じ、而して仁以

て之れを成す、云云、

大寶説は彼れが得意の文と見え、橘窓茶話の最後に云く、

吾が平生の文字、只大寶の一説あるのみ、

以て其意の存する所を察すべきなり、又橘窓茶話(卷中)に論じて曰く、

神道は三つ、一に曰く、神璽は仁なり、二に曰く、寶劍は武なり、三に曰く、鏡は明なり、我東、質を尙び、未だ以て之れを文にするものあらず、然りと雖も、深く信じ篤く行ふて而して得るあり、何ぞ必ずしも言語文章を之れせんや、或は已むことを得ずして其説を求めんと欲せば、之れを孔門六藝の學に求めて可なり、所謂三器は、本と經なり、鄒魯の述ぶる所のもの、我註脚なり、人或は雜ふるに釋老異端の説を以てするものあり、其神道を去ること遠し、

彼れが此に斷じて「所謂三器は本と經なり、鄒魯の述ぶる所のもの、我註脚なり」といふもの、誠に痛快なりといふべし、凡そ國體の尊嚴を知るものの、這箇の識見なかるべからず、彼れ又曰く、

神代一卷、以て尊重せずんばあるべからず、其言たるや、遼濶奥頤、究めずして可なり、人其的確を求めんと欲す無識といふべし、(橘窓茶話卷下)

其神代の事を以て究むべからずとするは、未だ首肯すべからずと雖も、神代一卷を尊重するもの、本と國體を尊重するの意に出づ、今是れを儒者の言として之れを考ふれば、亦甚だ床しき所あるを覺ゆ、殊に彼れが、

天下の人心、唯ゞ我國淳厚にして古に近しとなす、今日を以て之れを視れば、唐と韓と、如かざる所あり、豈に神聖の遺澤にあらざらんや、(同上)

といふが如き、爾餘の儒者と大に其見解を異にする所あり、是れ芳洲が親しく支那人及び朝鮮人と相交はり、而して後、自己の經驗によりて道破する所なり、故に反りて事實に近きものあるを知るべきなり、

橘窓文集(卷之二)の末に附載せる劄記二十八則は彼れが語錄なり、其中に謂へるあり、云く、

心正しければ身修まる、只此四字、未だ嘗て頃刻も忘れず、便ち是れ君

子、言、忠信、行、篤敬、吾友又新庵喚んで萬病圓となす、余之れが爲めに節を擊ちて嘆賞す、今は亡ぶ、

此れに由りて之れを觀るに、芳洲の平素德行を重んじ、其心を正うし、其身を修むることを務めたるを知るべし、其他彼れが著書中に散見せる、格言を拾集して之れを左に列擧せん、

一

夫れ書は以て讀まざるべからず、聖を師とし、賢を友とする所以のもの、是に於てか得、何ぞ以て廢すべけん、人、聖人を以て師となし、賢人を友とせざれば、平生膠の如く漆の如きもの、皆是れ庸夫俗子、幾何にして庸俗の人たるに染まざらんや、人生得ると雖も、百歲過ぎ易し、魯憧鶻突、道理を明かにせざれば、大は狗彘たり、小は蟲蛭たり、歐陽公の所謂德を立て、功を立て、言を立つ、三つのもの一つも得る所なく、草木禽獸と歸を同うして澌盡するもの、豈に慙づべきの甚しきものにあらずや、

二

凡そ讀書は、聖賢の言を視、輙ち喜悦恐怖、自省自警の心あるもの、以て君子の學をなすべきに庶し、若し泛然として之を視、居然として之れを誦し、越人の越を說くを聽くが如くせば、或は案により卷を手にすと雖も、終日唔咿して成すなきに竟らんのみ、況やよるに未だ案を必とせず、手未だ卷を必とせざるものをや、

三

天下の事、是中に必ず非あり、非中に必ず是あり、全是なく、全非なし、人の人に於けるや、先づ彼の是とする所を是とし、彼れの非とする所を非とし、然して後、徐にして我れの是とする所を是とし、我れの非とする所を非とせば、爭論庶くば息まん、爭氣なるものあり、遽に彼れの是とする所を非として、之れを壓へんと欲す、是れ彼れが非とする所にして、而も之れを張らんと欲す、朝を終へ夕を畢へ、相壓へ相張る、呶々然として一に歸すること能はず、豈に惑にあらずや、

四

凡そ人只君上に事ふるを知りて父母に事ふるを知らず、蓋し臣の使はるゝを背ぜざるもの、即時に職を罷め祿を奪はれ、其勢、使はれざるを得ざるなり、父母は然らず、故に事へんと欲せば、之れに事へ、事へんと欲せざれば、事へず、是れを愛を恃むといふ、然れば其君に事ふるや、利の爲なり、忠の爲めにあらざるなり、

五

天下二あり、才といひ、德といふ、德を尙ぶものは迂腐に似たり、才を尙ぶものは聰敏に似たり、

六

德を尙ぶものは、君子の歸なり、才を尙ぶものは、小人の漸なり

七

明察なるものは、僞に流れ、質朴なるものは、闇に近し、

八

身は外なり、輕し、心は內なり、重し、身を外にして、安を心に求むるものは、君子なり、身に切々として、心の安を求めざるものは、小人なり

九

天下の不祥なるもの、王侯に若くはなきなり、

十

僥倖の心多きものは、必ず救はれざるの敗あり、

十一

君子は君に勸むるに恭儉を以てす、其國に益あらんことを欲するなり、不肖は君を誘ふに驕奢を以てす、其己れに利あらんことを欲するなり、

十二

下を視て餘りあれば、驕慢の心を起す、上を視て窮りなければ、謙虛の意を生ず、世の自滿自大なるもの、皆下を視て自ら覺らざるなり、

十三

地位高ければ見る所遠し、否れば之れに反す、君子小人の殊なる所以のもの、其れ遠近の間にあるか、

十四

物に固然あり、事に必至あり、春あれば夏あり、秋あれば必ず冬あるもの、物に固然あるなり、春去り夏來たり、夏去り秋來たるもの、事に必至あるなり、少壯老死、一呼吸も亦然り、



第三　芳洲關係書類

先哲叢談〔卷之六〕
近世叢語〔卷之一〕
續近世畸人傳〔卷之四〕
甘雨亭叢書
日本詩史〔卷之四〕
類聚名物考
文會雜記
常山樓筆餘
對州十日記
觀瀾文集〔卷之上〕
鳩巢文集後編
名家手簡〔二集上〕

木門十四家詩集
日本諸家人物誌
紹述文集〔卷二十五〕
湘雲瓚語
鍾秀集
徂徠集
蘐山麗澤秘策
近代名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
日本名家人名詳傳〔卷之下〕
鑒定便覽〔卷上〕
大日本人名辭書

智識と勇氣とは、偉大を造出だす、此二者は人をして不朽たらしむ、是れ不朽なるものなるが故なり、如何なる人も智識を有する丈其れ丈の價値あり、而して智者はなし能はざる所なし、人にして智識なければ、世界は暗黒中にあるなり、識見と勢力即ち目と手となかるべからず、勇氣なければ、智識も結果なきものなり、

グラチアン

第五章　安東省菴

安東省菴、名は守約、字は魯默、初めの名は守正、通稱は市之進、省菴は其號なり、筑後の人柳川侯に仕ふ、青年の時、江戸にあり、松永尺五に學び、日夜刻苦、精神を消磨し、死に瀕して已まず、友人之れを諫む、彼れ答へて曰く、方正學曰く、人或は以て食はざるべきなり、而して以て學ばずんばあるべからざるなり、食はざれば死す、死すれば已む、學ばずして生れば、則ち流れて禽獸に入る、而して自ら知らざるなり、其禽獸に與せんよりは、寧ろ死せよと、我れ學をなして死せば、幸これより大なるはなし、

(甘雨亭叢書)

其人乃ち笑つて止む、省菴偶〻小瘡を患ひ、久しく牀褥にあり、時に耶蘇の賊、島原に起る、彼れ乃ち病を强ひ、馬に跨り、侯に從つて西し、島原の有馬に至り、劇痛を忍んで陣頭に立ち、其志、必死にあり、時に年僅に十六、彼れが勇敢の性、以て知るべきなり、明暦元年明の朱舜水長崎に來たる、舜水

は學問あり、節操ある人なり、然れども時人未だ之れを知るに及ばず、獨り省菴往いて之れを師とし、己れが祿の一半を割いて之れを贈る、世稱して一大高誼となす、伊藤仁齋が「答安東省菴書」に云く、

承り聞く、明國の大儒越中の朱先生、船、秦を帝とせざるの義を懷き、來たりて長崎に止まる、臺下急ち弟子の禮を執りて之れに師事し、且つ妻子を蓄へず、衣食を恤へず、廩祿の半を奉じて、以て師を留むるの計をなす、其道に志すの高き、義を行ふの潔き、文王を待たずして興るものにあらずんば、豈に能く然らんや、(古學先生文集卷之一)

舜水自ら深く省菴の高誼を感ぜしと見え、其「與孫男毓仁書」に云く、

日本の唐人を留むるを禁ずること已に四十年、先年南京の七船、同じく長崎に住まる十に九、富商連名具呈、懇留累次、俱に準せず、我れ故に此に意なし、乃ち安東省菴苦々懇留、轉展人を央む、故に留駐此にあり、是れ特に我一人の爲めに此厲禁を開くなり、既に留まるの後、乃ち半俸を分ちて我れに供給す、省菴薄俸二百石、實に米八十石、其半を去り

て止四十石、毎年兩次崎に至りて我れを省す、一次に費銀五十兩、二次共に一百兩、苜蓿先生の俸此に盡く、又士儀時物、人を差はして送り來たる、其自ら奉ずるは、敝衣糲飯菜羹のみ、或は時に豐腆は魚鰯數枚のみ、家止一唐鍋、時を經て物を烹調することなく、塵封鐵鏽、其宗親朋友、みな共に之れを非笑し、之れを諫沮す、省菴恬然として顧みず、惟日夜書を讀み道を樂むのみ、我れ今此に來たること十五年、稍物を寄せ意を表するも、前後皆受けず、矯激に過ぎ、我れ甚だ樂まず、然れども改むること能はざるなり、此等の人中原亦自ら有ること少し、汝、名義を知らず、亦當に心に銘し、骨に刻し、世々忘れざるべし、云云、(舜水文集卷一)

省菴が始めて舜水に師事せしは、尺五歿後五年なりき、省菴舜水に感化せらるゝ所多く、其學問德行是れより大に進み、遂に關西の巨儒と稱せらるゝに至れり、後、舜水水戸に聘せらるゝに及んで、尚ほ屢書翰を送りて學問道德を論じ、相互に氣脈を通ずることを廢せざりき、省菴の舜水を尊崇すること至れり盡せり、彼れが曾て舜水に送れる書に云く、

守約之れを聞けり、萬物の生、人より貴きはなし、人の業、儒より貴きはなし、儒者の道は、身及び家を修め、國天下を平にして、以て神明に配して、變化に參はるべきなり、苟も斯に志ざゝずんば、其生たるや、徒に天地の疣贅のみ、百工技藝の小にして、賤しきものも、亦皆師ありて以て其術を廣む、況や儒として師なかるべけんや、守約昏愚と雖も、而も志なきものにあらず、不幸にして未だ君子の大道を聞かず、汲々乎としてて先生長者の敎を求むること、猶ほ饑寒の衣食に於けるがごとし、先生の來たる、豈に平生の願にあらずや、もし程朱日本に來たることあらんに、之れに師事せざれば、なんぞ之れを識見あるものといはんや、今先生の來たるは、即ち程朱の來たるなり、守約幸に其業を儒にし、而も往いて見ゑざれば、彼の曲藝小技の人、師を尋ねて千里を遠しとせざるに如かず、はた之れを道に志すといはんや、（省菴遺集卷之六）

省菴一生唯、孜々として學を講じ、德を修め、書を著はすの外、別に特筆すべき異變なし、彼れが舜水に送れる書中に云く、

守約門に雜賓なし、學問の事にあらざれば、諸生と雖も、亦來たらず、(同上)

是れ蓋し其平素の狀况を形容し盡くせるものなり、板倉勝明嘗て省菴が傳を作りて曰く、

晚節制行滋卲、威而和、毅而謙、粹如也、(甘雨亭叢書)

是れ恰も吾人が省菴の爲人に就いて想見する所を描出するものなり、省菴元祿十四年十月廿日を以て歿す、享年八十、著はす所省菴遺集十一卷、恥齋漫錄二卷等十有餘種あり、省菴二男あり、長は早く夭す、次は元簡、字は守直、俗稱は正之進、洞菴と號す、父の業を繼いで柳川侯に仕ふ、著はす所洞菴文集あり、元簡の男を守經といふ、守經字は士勤、仕學齋と號す、幼にして父を喪ひ、京師に往いて伊藤東涯に學ぶ、後、家に歸り職を繼ぎ、藩の文學となる、著はす所仕學齋文集あり、省菴晚年男元簡に遺訓を與へて曰く、

我れ才なく德なし、汝諸生と年譜、行狀、行實、碑銘、墓銘及び文集の序等

を撰ぶこと勿れ、嗚呼實なきの譽を後に垂るゝときは、君子之れを何といはんや、我れ人に若かずと雖も、而も生平自ら欺くことをなさず、豈に死して人を欺かんや、（省菴遺集卷之七）

是れ春日潛菴及びショッペンハウエル氏の遺囑と相似たり、潛菴死に際し、嗣子淵を呼んで曰く、

吾れ死するの後、碑文を刻する勿れ、大丈夫の宇宙を昭映する所以のもの、區々たる碑上の文字にあらざるなり、

ショッペンハウエル氏も亦人に遺囑して碑上に唯〻其名字を刻せしむ、其他には一字もなし、歲月も何もなし、門人グヴキンネル氏死骸は何處に埋むべきかと問ひしに、何處にても宜し、世人我れを見出だすべしといへり、潛菴及びショッペンハウエル氏の碑文を要せざりしは、必ずしも謙遜の意に出でたるにあらず、然れども其區々たる死後の碑文を取らざりしは同じ、世の巨石を立て諛辭を刻するもの、豈に之れを聞いて赧然たらざるを得んや、安積澹泊が「與山崎玄碩書」に云く、

古人文集多附行狀年譜、其懿德茂行、可以就見、而省菴卑謙敦篤、遺訓一篇、其見卓越前古、使人歎服不已云云、(澹泊齋文集)

是れ亦省菴が少なからざる感動を時人に與へたる一證と見るを得べきなり、

省菴嘗て遺興の詩二首を作る、其一に云く、

我生愚魯不如人、自許居常慕隱淪、爲善近名本非善、志仁役物亦何仁、種花靜觀有開謝、酌月朗吟作主賓、至樂知從自然得、隨時舒卷任天眞、

亦以て其懷抱と性情とを知るに足るなり、彼れ又嘗て雜箴六首を作る、其一を立志といふ、云く、

今、古に如かざるは、其志なきを以てなり、爾の食する所のものは、孔顏の食、爾の服する所のものは、孔顏の服、仁義禮智、口耳鼻目、動止語默、皆吾れと同じ、心に於て何ぞ異なる、或は私、或は公、公は舜の徒、私は跖の徒、爾何ぞ思はず、自ら甘んじて愚に歸する、我れ百工を視るに、其術、遂ぐることあり、惟士たるものは、德業多くは棄つ、何によつて然る、志の

立つと立たざるとなり、苟も志立つことなければ、百事ならず、猶ほ柁なきの舟の流蕩方なく、又輪なきの車の推輓、將ゐることなきがごとし、五尺の童子も猶ほ且つ耻づるを知る、毀りを得れば、怒ることあり、譽れを得れば、喜ぶことあり、爾儻し譽れを求めば、學を勤むるに若くはなし、聖域遠しと雖も、之れに志せば、則ち卓たり、

彼れが青年子弟を敎ふる、厚しといふべし、彼れ又諸生を敎ふるに三條を以てす、一に曰く、仁に志す、二に曰く、言を愼む、三に曰く、己れを虚にす、是れ亦青年子弟の以て自警となすべき所なり、省菴の學說を窺ふべき書類、目錄によれば、少くも數種あるが如しと雖も、今日にあつては之れを獲ること難し、因りて左に耻齋漫錄中より其稍見るべきものを抄出せん、

彼れ朱陸の異同を辨じ、頗る其肯綮を得たるものあり、云く、

朱陸の同異說紛々として、終に千古未了の談たり、予嘗て自ら揣らず、其辨を作りて曰く、天下の水一なり、其支分派別、同じからざるもの、流

の然るなり、其源未だ嘗て一ならずんばあらず、聖賢の道に於けるも亦然り、其敎を立つるや、或は本によりて末に達し、或は末より遡りて本を探る、其入る所同じからずして而して、其至る所のもの一なり、云云、朱陸鵞湖の議論合はざりしより、其門人其師の淵源を知らず、朱に左袒するもの、陸を以て禪寂となし、陸に左袒するもの、朱を以て支離となし、互に相姍議し、聲に隨つて雷同し彼れは堅、我れは白、戈を操りて室に入る、其流弊や、洪水の氾濫たるより甚し、云云、蓋し、朱子は博文にして漸次に約に歸するを以て敎となし、陸子は頓悟一跳して、道に至るを以て敎となす、夫れ博文を以て支離とせんか、經禮三百、曲禮三千、何すれぞ煩碎なる、頓悟を以て禪寂とせんか、一貫忠恕、何すれぞ簡易なる、其博文や、所謂末より遡るなり、其頓悟や、所謂本によるなり其約に歸すると道に至ると、未だ始めより本によらずんばあらざるなり、然れども本末元と二にあらず、況や其堯舜を師とし、仁義を尙び、人欲を去り、天理を存せば、其心同じく、其道同じ、是れ其支離禪寂や、特に

末流の弊なるを知るのみ、云云、

省菴が區々たる朱陸二派の爭論を超脫して、聖學の淵源に接せんとするの意氣眞に敬すべしとなす、彼れ理氣に就いては理氣合一論を取り、理は氣に隨つて具はるものとし、殆んど唯氣一元の見解に進めるが如き痕迹あり、其言に云く、

天地の間、理と氣とのみ、然れども之れを二にすれば是ならず、之れを一にする亦是ならず、先儒の論、一に歸せず、豈に管窺の及ぶ所ならんや、羅整菴曰く、理須らく氣上に就いて認取すべし、然れども氣を認めて理となす、便ち是ならず、此處間髮を容れず、最も言ひ難しとなす、要するに、人善く觀て、默して之れを識るにあり、只氣に就いて理を認むると、氣を認めて理となすと兩言、明かに分別あり、若し此に於て看て透らずんば、多く說くも、亦用なきなりと、又曰く、理は只是れ氣の理、當に氣轉折の處に於て之れを觀るべし、往いて而して來たり、來たりて而して往く、其然る所以を知ることなくして然るあり、一物の其間に

主宰たるあつて之れをして然らしむるがごとし、此れ理の名ある所以なり、易に太極ありとは此れをいふなり、若し轉折の處に於て看て分明なるを得ば自然に頭々皆合すと、此說極めて明かなり、要するに須らく省悟すべし、

此れに由りて之れを觀れば、省菴は貝原益軒と同じく、理氣の說に於て羅整菴に贊同するものなり、整菴は理氣の二元を認容すと雖も、理は唯、氣に就いて存するものとし、氣を以て主要なるものとなし、理を以て殆んど其屬性なるが如くに說き來たる、故に歸する所は、唯氣一元にありといふを得べきなり、整菴、名は欽順、明人、困知記を著はす、省菴が實行の餘に發したる訓言は、後進の徒に裨益する所少しとせず、左に其剴切なるものを擧げんに、

一

學は自得を貴ぶ、苟も自得せず、文義に泥み、聞見に溺るれば、本然の明、反りて蔽ふ所となる、所謂學を以て益を求め、反りて自ら損するもの、

儘亦之れあり、當に自ら思ふべし、

二

道に志すもの、急迫之れを求めば、即ち所謂助長なり、甚しきは奇を求め、異を取り、世を驚かし、俗を駭かすに至る、苟も此の如くなれば、人學ぶこと能はず、己れも亦久しきこと能はず、且つ道を以て別に一箇行ひ難きの事となす、是れ人を遠ざけて以て道とするなり、

三

名を好むは學者の大病、善をなして名をなせば、則ち是れ善名を釣るの具たり、以て善となすに足らざるなり、

四

名を好むを惡む所以のもの、其實なくして、徒に譽を干むるを以てなり、實あれば、名從ふ、之れを避けんと欲すと雖も、得べからざるなり、其後世の名の如き、君子未だ始めより之れを欲せずんばあらざるなり、

五

後世の名と雖も、實なくして之れを求めば、則ち徒に臭を遺すのみ、

六

人能く己れを虚うせば、善を人に取る、江海虚うして受く、是を以て能く容るゝあり、甕盎狹うして拒む、是を以て容るゝ能はず、聖自ら聖とせず、聖たる所以、愚自ら愚とせず、愚たる所以、克伐怨欲、意必固我、皆心を虚うせざるの致す所なり、

七

君子の德業は、宜しく一日は一日より勝り、一月は一月より勝り、一年は一年より勝るべし、往年此の如く、今年亦此の如くなれば、其積む所のもの何事ぞ、只恐る呉下の阿蒙に終らんのみ、

八

惡を惡むは、卽ち是れ羞惡の心、然れども己れが惡を惡まずして、人の惡を惡まば、人容れずして、己れ亦病む、縱令ひ己れ惡なきも、急暴人を責むるは、禍を取るの道なり、

九

人皆曰く、我れ能く言を受くと、其之れを規すに及んで、輙ち遁辭をなし、自ら改むること能はず、甚しきものは、終に隙あり、蓋し自ら許して賢となす、故に不善のある所を知らず、人の規すを善しとせざる所以なり、若し能く己れを虛うして反りて求めば、則ち當に人の規すを待たずして、自ら之れを知るものあるべし、

十

毀譽は君子と雖も、喜怒の心なきこと能はず、蓋し自ら知ること審なれば、之れが爲めに動かされざるなり、我れ善あれば、人の譽むるは、理なり、當に自ら彊めて善を脩めて可なるべきなり、我れ善なければ人の譽むるは、愚なり、只虛名の笑を取らんことを恐るゝなり、何の喜びか之れあらん、我れ不善あれば人の毀るは、理なり、當に自ら勵んで惡を去りて可なるべきなり、我れ不善なければ、人の毀るは、狂なり、只實惡の禍を招かんことを恐る、何の怒ることか之れあらん、毀譽は人に

あるものなり、喜ばず怒らざるは、我れにあるものなり、只當に我れにあるものを求めて、人にあるものを求むべからざるべきなり、

十一

命理は知り難し、須らく先づ人のなす所と天のなす所とを知りて後、之れを言ふべし、春生秋殺は、天のなす所なり、播種灌漑は、人のなす所なり、天のなす所は、人なすこと能はず、人のなす所は、天なすこと能はず、宜しく人事を盡くして、天命を俟つべきなり、人其なす所に懈り、一にこれを天に委す、天豈に能く之れをなさんや、

是等の訓言に由つて之れを察するに、省菴胸中名利の念なく、粹然たる君子人の態度を有せしこと復た疑なきなり、省菴舜水平素の行狀を叙して曰く、

謹んで其動靜語默を察するに、一として道に合はずといふことなし、其矯飾虛僞の如きは、天下を得るともせず、(上朱先生書)

又曰く、

其人となり、一生僞らず、言行動息、自然に道に合ふ、我儕交接の間、強ひて人を悦ばしめんと欲す、覺えず僞に渉るもの、間〻之れあり、豈に心に媿ぢざらんや、庸衆人の若きは、或は昏夜哀を乞ふて、人に白日に驕り、或は富んで財に乏しきことを歎じ、貧うして多金に夸るものあり、言として僞にあらざるなく、行として利にあらざるはなし、庶くば先生の風を聞いて頑懦を起さんことを、(同上)

舜水の感化せしこと、此等の言に由りて、以て略〻想見するを得べきなり、省菴が事蹟は先哲叢談(卷之三)甘雨亭叢書、先民傳、近世叢語(卷之六)儒林傳、舜水文集等に見ゆ

第六章　室鳩巣

第一　事蹟

大塚護國寺の右方に小墓地あり、荊棘叢生して風景荒涼たり、是れを儒者捨塲とす、儒者捨塲の一隅に小碑あり、高さ約三尺、正面に「鳩巣室先生之墓」の七字を題す、米人ノックス氏「日本之哲學者」を著はすに當りて、劈頭第一に其寫眞を揭げて、以て其人を追想せしむ、今鳩巣其人の事蹟學問等を討究すること、豈に亦一種の興味なしとせんや、鳩巣、名は直清、字は師禮、又の字は汝玉、幼字は孫太郎、通稱は新助、室氏、鳩巣は其號なり、又滄浪と號す、其先は熊谷次郎直實に出づ、父、名は玄樸、草庵と號す、備中國英賀郡の人、初め攝州に移り、後、武州に徙り、家居して醫を業とす、母は平野氏、萬治元年(紀元一六五八)二月廿六日を以て鳩巣を武州谷中村に生む、鳩巣幼にして穎悟、大に常兒に異に、甚だ讀書を好み、總角已に成人の如し、年甫め十五にして出でゝ加賀侯に仕へ、順祥と稱す、一日侯の命を

奉じて大學を講ぜしに、義理明暢なり、侯乃ち以て異器となし、嘆じて曰く、眞に英物なり、宜しく其材を養成して、以て天下の器とならしむべしと、因りて之れに命じて京師に遊學し、業を木下順菴に受けしむ、鳩巣順菴門下に於て神童を以て稱せらる、錦里文集(卷十一)に左の詩あり、云く、

室、少年、穎、悟、絕、倫、歲纔、十、四(恐くば十五の誤ならん)、頭、角、崭、然、既有二老、成、之、氣、象一、講、書、賦レ詩、適應二羽林公命一、卒賦二小詩一、辭、義、可レ觀、感嘆之餘、爲次二韻以祝二前程一、

五岳英靈鍾二少年一、一篇珠玉踵二前賢一、聰明自與二世人一異、未三必降レ才無二二天一、

此れに由りて之れを觀れば、順菴が鳩巣の文才を驚嘆せしこと疑なきなり、鳩巣是れより學益々精しく、文益々進み、慨然道を以て自ら任じ、世の功名富貴の爲めに毫も其心を動かすことなく、泊如として守る所あり、木門本と俊髦の士多きも、皆彼れが爲めに席を讓るに至れりといふ、鳩巣が木門に在學せしは、其果して幾年なるやを知らずと雖も、鳩巣年譜によるに、二十三四歲に至る迄は屢々加州京師及び江戸の三箇處を往來せしを以て之れを觀れば、多年間引續いて木門にありしにあらざるが如

し、然れども彼れが順菴の薫陶を受けしこと決して尋常なりとせず、文集の前篇卷之三に詩あり、云く、

將レ赴二賀陽一奉レ簡二順菴先生一

斯文倚重在二先生一、休レ歎二金門一奏二太平一、齒德倶高懸二北斗一、風霜比レ潔照二東瀛一、緇帷嘗辱十年誨、華袞肯分一字榮、征路慘將レ違二杖几一、何時廊廟當レ調レ羹、

以て彼れがいかに其師を尊崇せしかを知るべきなり、彼れが京師にあるや、深く菅公を尊信し、一夜菅廟に通夜して將來の成功を禱れりと云ふ、是れ或は事實ならん、補遺鳩巣文集卷十に「祈二菅神一自警文」あり、云く、

維延寶辛酉二月壬寅。武城布衣室 順祥 謹告二于菅相公之靈一。維相公生以二道德忠義一顯二於當時一。死有二神靈一。以二廟食于百生一。方今天下衆庶莫レ不二尊信一。矧維相公實我儒之先師。爲二本朝文學之祖一。在二 順祥 等一尤當二依賴一。順祥 自二幼時一以二儒爲一レ業。竊不二自量一。欲下立レ義行レ道。不レ負二所學一。而氣質昏弱。不レ能二自勝一。因循苟且。以至二於今一。然自料二區區之志一。不レ可二終已一。夫雖三爲レ仁由二己。不レ可二他求一。然使二人有レ所レ畏。有レ所レ信而不レ敢自欺一焉。非二神之聰明正直者一。其誰能レ之。自レ今以往。身

心動靜。維神是依。莫所顧慮。願垂庇庥。監護弱質。使能自成立。以終素志。不勝大願。敢布懇迫。神其鑒之。　自警條目

一　每朝卯前後可起。

一　每夜子前後可臥。

一　除賓客或疾病及難避事。不可一日懈怠。

一　每朝對案先整衣帶。乃一坐了。非有事故。不可妄動。

一　對案之間。惰念將生。呼起正念。可痛懲之。暫時不可忽。

一　不可妄語。雖下人不可接無益之言。

一　飲食須充飢渴。不可過節。及不可不時食飲。

一　色欲之念。一萌便可遏絕之。不可有時放之。

一　雜念不問善惡。最害於讀書之間。戰戰兢兢。可預防之。

一　讀書之時。凝定志意。不可急速。又明張心目。不可蹉過。

一　畢竟不過盡己職分。以終一生。則修行之間。不可有功利之念。

右十一條欲銘心肝而操守之。一一在天之照覽。敢昭告于百神之靈。

是れ彼れが二十四歳の時の作に係る、彼れがいかに菅公を推尊して、其庇護を祈願せしかは、此れに由りて察知するに足るなり、正德元年幕府の儒員に擧げられ、頗る信任せらる、其著六諭衍義大意及び五倫五常名義は皆命を奉じて撰する所なり、鳩巢初め白石の推薦によりて幕府に仕ふるに至ると雖も、已に幕府に仕ふるの後に及んで、稍〻白石の態度に慊焉たらざるものあり、其幕府に仕ふるの翌年白石に書を送つて之れを諫めて曰く、

昔延喜年中にありて、菅相公儒家より出でゝ、時に用ひられ、權を專らにす、時に三善淸行書を奉りて、菅公を諫むるに身を愼み、禍に遠ざかるの道を以てす、夫れ菅公の材德、古今に傑出して、丞相の貴きに居れり、固より天下の衆、畏服する所にして、誰れか敢て間然するものあらんや、然るを淸行一介の賤士を以て、獨り其威嚴を冒して、人の言はざる所を言へり、そのかみ恭靖先生いましゝ時に、僕と此事を論じて、淸行を以て天下の奇士とせり、僕おもへらく、淸行豈に奇士の名を求む

るものならんや、實に菅公を愛するの深きに出づるのみ、今吾兄儒望の高きこと菅公に比するに、いかんといふことを知らずと雖も、其學術文章に於ては、恐く菅公の及ぶ所にあらず、加之聖主の知遇に逢ふて、其材力を振ふことも、菅公の後、未だ儒官の斯の如くなることを聞かず、僕昔より同門の交りを辱うして、近頃眷顧の厚きを蒙ること日久し、竊に思ふに、吾兄を愛するの深き、誰れか僕に若くものあらん、淸行これを疎交の相公にいふことを得て、僕これを同學の故人にいはずんば、既に切偲の情に背き、又仁を輔くるの道に違へり、今吾兄の寵隆を聞いて、來つて忠告するもの、必ずいはん、今より以後、迎接を愼み、權利に遠ざかれと、是れ常人の知る所なり、豈に吾兄の爲めに論ずるに足らんや、僕がいふ所はこゝにあらず、吾兄志氣の間にあり、吾兄朝廷に於て、將順匡救の功、頗る赫々として、人の耳目にあり、然れども古人天下に勳勞あるに比せば、恐くば未だ並稱するに足らず、吾兄の豪傑なるを以て胸中に塵芥ばかりともせざるべし、豈に是等么麽の事

を以て、自ら滿つるの志あらんや、たゞ盤根錯節、利刄にのがるゝことと
なうして、破竹の勢あるによつて、其詞色の間、おのづから剛鋭果敢の
氣盛んにして、謙退抑損の心すくなし、吾兄も其此の如くなることを
覺えざるべし、書に曰く、有其善喪厥善、矜其能喪其功と、僕願くば、吾兄
其善を有せず、其功に矜らざらんことを、孟之反が其馬に策ちて、聖人
に賞せられ、馮異が樹下に辟くる、古今の美談とせり、是れ吾兄の取る
べき所なり、正考父が鼎の銘に曰く、一命而僂、再命而傴、三命而俯、循墻
而走、亦莫余敢侮と、蓋し其位彌のぼれば、其心彌下れり、譬へば堂を作
るに、上一尺の崇さを添ふれば、下一尺の基を增すが如し、然らざれば
必ず傾覆の禍あり、方今聖明上に臨んで、讒毀の患なく、彼延喜の時と
ひとしからずと雖も、盈つるを害して、謙に福し、盈つるを惡んで、謙を
好するは、天人不易の常理なり、愼まずんばあるべからず、僕願はくば、
吾兄謙々の心を秉つて、天人の道に叶ひ、能く其擧を終へて、福音□し
からざらん事を、今吾兄寵錫の新なるを聞いて、祝を以てせずして、規

を以てす、たゞ吾兄其愚を哀んで、これを察納せよ、不備、

鳩巣晩年即ち享保十二年以來末疾を患ひ、之れを久うして癒えず、或は脚氣症なりしか、駿臺雜話の序にも「ちかき頃より衰病日に加はり、それに痿痺の疾ありて起居も心に叶はねば、日夜衾枕をのみ親しみ、書類にさへうとくなりにたり」といへり、彼れ乃ち疾の故を以て退いて老を養はんことを乞ふもの再三に及ぶ、然れども遂に允されず、因りて尚ほ職名を帶び、駿臺に家居し、靜養を以て事とせり、駿臺の邸宅は蓋し幕府の賜ふ所に係る、彼れ病間門人子弟と講論する所を叙述して一篇の書を著はす、是れを駿臺雜話となす、其序に享保十七年の月日を錄せり、享保年間徂徠古學を江戸に唱へてより、其學風一世を風靡せり、鳩巣此時に當りて毫も徂徠と相爭ふの氣なく、寧ろ謙退抑損の態度に出で、多く生徒を謝絶し、超然迹を掃ふて自ら其節を守れり、然れども篤志のものありて來たり請へば、必ずしも強ひて拒絶せず、之れを其牀下に引き、疾を力めて指敎し、諄々として倦まず、各〻其材によりて之れを成就せり、病の

已に漸するや、尚ほ太極圖述を著はし、其平生の蘊蓄を盡くさんとせり、是れ實に彼れが絶筆に屬す、彼れ遂に享保十九年（紀元一七三四）八月十二日を以て歿す、行年七十七、男名は洪譔、字は孔彰、通稱は忠三郎、勿軒と號す、年僅に三十四にして歿す、女某高階氏に嫁すといふ、甥昌言あり、姓は大地、新八と稱す、鳩巣文集を編纂せり、

鳩巣は經學文章共に一代の大儒たるに恥ぢず、享保年間徂徠と相對して學界の重鎭たりしもの、彼れと東涯とあるのみ、省菴、仁齋、芳洲、益軒等相繼いで歿したるの後、鳩巣は徂徠、東涯二氏と鼎足の勢を成し、眞に侮るべからざるものありき、橘窓茶話（卷下）に云く、

觀瀾、鳩巣、東涯、徂徠はいかん、曰く、この數人は盛名雷轟す、何ぞ曹丘生を待たん、

鳩巣が當時の名望、以て察知すべきなり、江都北海が日本詩史（卷之四）に云く、

余嘗ていふ、經儒、文藝に習はず、文士或は經業を遺す、能く二者を兼ぬ

るは、唯〻東涯滄浪の二儒のみ、

此論、全く徂徠を度外視するが故に公平なりとは言ひ難し、然れども經學と文章とは極めて兼備し難きものなるに、鳩巢が能く之れを兼備し得たるが如きは、亦以て珍とするに足らずとせんや、又錦里文集(卷八)に左の詩あり、云く、

鳩巢室生、吾門益友也、忠信篤敬、有志聖學、英才博識、專美文場、不日將歸鄉里、忽有留別瓊贈、走筆和答、以華行色、

老境年來畏後生、羨君高志仰昌平、昌平興起三千魯、學士行登十八瀛、理義常甘芻豢美、囊裝忽促錦歸榮、好將歎脚忘憂物、併遺萱堂頴谷羹、

師たる順菴彼れ自身が鳩巢を以て益友となし、「忠信篤敬、有志聖學」といひて、其經學を以て身を立つるを意味し、又「英才博識、專美文場」といひて、其文學の才の卓絕せるを意味せり、此れに由りて之れを觀れば、鳩巢亦一種得易からざるの材なること、以て知るべきなり、又長野豐山曰く、

本邦の儒先、藤惺窩、林羅山、木順菴、室鳩巢諸公の如きは皆忠厚質直、千

載之を傳ふるも、弊なきの學なり、(松陰快談卷之一)

亦鳩巣の崇拜者と見るを得べし、又板倉勝明、鳩巣を論じて曰く、

我邦洛閩の學に醇なるもの、山崎闇齋中村惕齋二人のみ、然れども闇齋は從容涵泳の味に乏し、惕齋は苦心力索の功少なし、唯ゞ先生は其成を集むるものなるか、當時物茂卿の徒出で、ゝ異說蜂起す、先生獨り卓然、道を以て自ら任じ、力めて異端を排し、以て聖道を扶く、善類之れが爲めに踴躍す、斯道の地に墮ちざるもの、實に先生の力なり、絅齋淺氏曰く、羅山子の功、十哲の下にあらずと、余先生に於ても亦云ふ、(甘雨亭叢書)

古學全盛の際に當り、鳩巣が朱子學を一縷の危きに持續し、之れを後世に傳へたるが如き形迹あるは、事實なり、此點より之れを言へば、鳩巣の功、決して堙沒すべからざるものあるが如し、文章に於ても鳩巣は唐宋八大家を尸祝し、殊に韓歐を稱揚せり、故に其作る所徂徠の古文辭と顯著なる對比を成せり、(答二堀正修一書を參看せよ)拙堂文話(卷一)に云く、

徂徠鳩巣と世を同うして出で、盛氣相下らず、猶ほ弇州の歸震川と睥睨相軋するがごとし、弇州後、震川に心折し、功を桑楡に收む、是れ徂徠に勝る處、

又摩島松南が娛語〔巻之四〕に鳩巣が文を論じて云く、

嘗て鳩巣集を讀むに、其文辭齊整博贍、亦一時の鴻匠なり、朝鮮聘使に寄する二百韻詩の如き、詞鋒精鋭、以て雞林を衝くに足る、云云、

是等の評、大抵其肯綮に當れり、鳩巣敢て徂徠に對して挑む所なしと雖も、隱然一敵國を成しゝや疑なし、先哲叢談〔巻之五〕に左の一節あり、云く、

鳩巣、蘐苑の徒と互に相輕んず、金華一日來つて鳩巣を見る、其得意の文一篇を出だして之れを示し、且つ刪正を求む、鳩巣一過善しと稱す金華彊ひて正を乞ふ、乃ち二十字を削りて、更に五字を益す、金華喜びずして去る、翌日に至り、これを南郭に質す、南郭决するを得ず、又これを徂徠に質す、徂徠鳩巣が改竄する所のものを視て曰く、此の如くにして後、文を成すと、是に於て其徒始めて鳩巣を重んず、

徂徠も文章の技に於て決して鳩巣を侮ること能はざりしこと、此れに由りて知るべきなり、鳩巣の師事せしは順菴なりしも、其他亦羽黑成實に得る所多し、成實、字は養潛、牧野と號す、近江の人、闇齋に學び、儒行あり官に彥根に就き、後、仕を致して加賀に徙る、鳩巣嘗て此人に師事し、義理の學に於て推重すること淺からず、答羽黑先生第二書に云く、

清幼より學を好み、畧古人の遺意を得るものあり、見聞する所士大夫亦頗る多し、然れども義理に於ては則ち必ず高明の許可を得て以て自ら信ず、文辭に於ては則ち必ず木翁の品題を經て以て自ら足る、私心自ら謂ふ、二公は天下の知己なり、故に平生今の世二公あるを以て樂となすのみ、(前篇鳩巣文集卷之十)

又答遊佐次郎左衛門第一書に云く、

羽翁と一たび京師に邂逅して、其趣向造詣を見るに、曲學淺識の徒にあらざるなり、既にして翁、敝邑に寓居し、相與に優遊、其議論を上下すること今に十年、常に以て虛く往き實に歸り、日に其聞かざる所を聞

き、我が惑を解き、我が疑を辨じ、我が善を誘ひ、我が惡を戒む、視て法を取る所あり、畏れて爲さゞる所あり、我れをして放辟邪侈に陷ることを免れしむるもの、翁の力多しとなす、豈に古人の所謂斯人なかりせば、誰れと與に歸するものか(前篇巣文集卷之八)

又祭文を作りて曰く、

始め吾れ公を京師に見る、尋いで復た北陸に來辱す、爾來上下議論、往復切偲、忠告善道、一に道義を以て相期す、而して不肖弱質、公に賴りて勉强して以て學に進むもの、茲に十有七年、云云、嗚呼公か遂に吾れを棄てゝ死するか、今より以往、惑あらば將に誰れか之れが爲めに辨ぜんとす、而して過あらば將に誰れか之れが爲めに規さんとするか、之れを瞽にして相なきに譬ふ、倀々乎として其れ何んか之かん、(補遺鳩巣文集卷之十一)

鳩巣が羽黑牧野に負ふ所多かりしは此れに由りて察知すべきなり、鳩巣最も經學文章に長ずと雖も、亦詩を能くし、歌を能くし、且つ國文の技

に長ぜり、謁恭靖先生墓の詩に云く、

荒煙滿目自傷春、愁見年々草色新、今日九原如可起、應憐白髮泣恩人、

又忠臣無二の心を詠ずる歌に云く、

ならはじなこのてがしはのふたおもて身は葛の葉のからみありとも。

北窓瑣談後篇に此歌を評して「其體は後世の風なれども、詞調ひ義理穩にて面白くよく讀みおほせたる歌なり」といへり、又大學和歌十八首あり、左の如し、

明明德

皆人のもとの心はます鏡みがいばなどかくもりはつべき。

新民

ふりにける、ならの都の、ならはしも、あらたまりぬる、君がまことに。

止至善

よしとみる、そのひとふしを、難波江のあしかるかたにうつさずもか

な。

格物

我宿の、千草の花を、とめてこそ、色なき春の、色もしらるれ。

しらくもの、いく重と見えて、越え來れば、只ひとすぢの、山路なりけり。

致知

日を歷つゝ、ふみ見るにこそ、玉鉾の、みちの奥をも、しら川の關。

月花も、馴れて見るにそ、まさりける、さりとてかはる、色かならねば。

誠意

いろ見えぬ、こゝろの水は、こもり江の、艸のはつかに、つゆもにごすな。

烏羽玉の、夜をてらさずば、からにしき、ひるもうらなき、色と見ましや。

人しれぬ、心に恥と、はぢてこそ、つひに恥なき、身とはなるらめ。

正心

三輪の山、杉たつかどを、尋ね來て、すぐなる神の、心をぞ見る。

修身

朝夕に、たもつ我身は、から衣、たちゐにうつせ、道のすがたを。
思へたゞ、身のあやまりを、みかさ山、さして心の、とがならずとも。

齊家

いつまでも、ともにくむ井の、底つゝみ、むすびもかはせ、もとのこゝろを。

治國

しるやいかに、民の竈に、たつけふり、いく夕暮の、ながめなりとは。
何ごとも、みるめかひある、國なれや、こゝぞうき世に、すみよしの濱。

平天下

九重の、よるの玉衣、そてさむく、おほふばかりに、世を思ふらむ。
春風の、ふくとはなしに、おのづから、のどかに見ゆる、四つのうみづら。

鳩巣が如何に國文に堪能なるかは、駿臺雜話の一書によりて之れを知るべきなり、三上博士の日本文學史〔下卷〕に

標本とすべき國文の精華は、實に木門に在りといふも、甚しき過言に

はあらざるべし、

と云へるは、新井白石、雨森芳洲等の外、又鳩巣の如き卓絶せる作家あるが故なり、

滅ぶるに先ちて人の心は亢ぶり、名譽を得るに先ちて苦痛を受けざるべからず、

ソロモン

第二　著書

前篇鳩巣文集十四卷

鳩巣曾て加州にあるとき、甥の大地昌言（通稱は新八、）に命じて其作る所を錄し、一家の集を成さしむ、昌言乃ち撰次の任に當り、手づから校し手づから書し、業に已に年を積み、纔に前集十三卷を成し、終に編を完うすること能はず、中途にして沒す、是に於てか中村蘭林（字は明通、稱は深藏、）書を加州に致して、遂に其稿本を得、將に家塾に於てこれを刊せんとす、然るに天之れに年を假さず、遽然として下世す、其疾革なるや、伊東澹齋（名は貞、）を呼んで志を繼ぎ、業を成さしむ、澹齋備蕃の補助を得て、此書を上木するに至れり、前篇凡そ十三卷、序目を合して凡そ十四卷、其收載する所、悉く鳩巣が加州に在るときの作に係る、

後編鳩巣文集二十一卷

此篇は鳩巣が江戸に在るときの所作を收載す、凡そ二十卷、序目を合

して二十一卷となす、

補遺鳩巢文集十一卷

此篇は前篇後編に洩れたる所作を收載す、以上皆寶曆年間に於て刊行する所なり、

鳩巢集外纂二卷寫本

是れ蓋し前篇後編及び補遺に洩れたるものを集めて編次する所なり、然れども其編者の果して誰れなるかは、未だ詳ならず、最後に鳩巢の墓誌及び門人所作の祭文等あり、

駿臺雜話五卷

此書は隨筆體の書にして、記する所種々なる方面に及べり、決して專ら道學をのみ論ずるものにあらず、然れども道學に關すること頗る多く、鳩巢が學說を知るが爲めには、缺くべからざるの書なり、關儀一郎氏之れが註釋を作り、上下二卷となして誠之堂より發行せり、或は云ふ、寬政異學の禁、實に鳩巢が此書に本づくと、亦一說なり、

書批雜錄三卷

此書は土佐の鈴木重充の輯錄する所にして、甘雨亭叢書中に收載せり、

赤穗義人錄二卷

此書は甘雨亭叢書中に收載せり、大地昌言其題跋を集めて一卷となし、是れを義人錄後語といふ、又尾張の國枝惟熙、義人錄の補正を作り、是れを赤穗義人錄補正といふ、二卷あり、明治五年の刊行に係る、

大學和歌一卷

是れ大學の三綱領八條目を詠ずるものにて、凡そ十八首あり、板倉勝明之を甘雨亭叢書中に編入せり、別に單行本も亦之あり、寛政八年の刊行に係る、今悉く之を第一の事蹟の末に掲載せり

鳩巢經說若干卷寫本

大學或問一卷、中庸二卷、論語若干卷、孟子六卷、大極圖述二卷、合して十有餘卷、是れを鳩巢の經說となす、伊東澹齋が編纂する所に係る、

献可錄三卷寫本

此書は古今の制度及び其他當時の政治に裨補すべきことを叙述せるものなり、是れ蓋し鳩巢が幕府の下問に應じて著はす所ならん、就中彼れが幕府の命を奉じて撰述せりといふ五倫五常名義の如きは、此書の第一卷に收載せり、

西銘詳義一卷

六諭衍義大意一卷

五常五倫名義一卷

此書は献可錄の上卷中に收載せり、其跋文は文集の後編卷之十五に見ゆ、

朝鮮客館詩文稿一卷

士說一卷

是れ蓋し文集の後編卷之十四に收載するものと同一ならん、

國喪正議一卷寫本

是れ鳩巢が白石に代はりて作る所にして、載せて、鳩巢集外纂（卷上）にあり、又別に單行本もあるなり、

不亡抄 卷數未詳

神儒問答一卷

鳩巢小說三卷 寫本

此書は又鳩巢逸話ともいふ、蓋し彼れが見聞する所を輯錄せしものにて、一種の隨筆なり、經說に關する事は此書に徵すべからずと雖も、歷史上の事實としては多少參考に資すべきものなきにあらざるなり、平山兵原が鳩巢小說評論一卷あり、蓋し堤朝風が鈐林巵言六十八九兩卷中より鈔出する所に係る、

鳩巢小說後編二卷 寫本

鳩巢秘錄二卷

駿臺翁遺訓一卷

兼山麗澤秘策八卷 寫本

此書は一名を鳩巢手簡ともいふ、内容は鳩巢が幕府に仕へて江戸に在る時、在金澤の門人青地齊賢、同禮幹等と往復せし書翰を輯錄せしものにて、齊賢禮幹等の書翰も亦其中にあり、兼山は齊賢の號なり、此書は齊賢の編纂に係るを以て兼山の二字を冒するものなり、卷數は寫本なるを以て多少の異同あり、

兼山秘策拔書一卷寫本

此書は前の兼山麗澤秘策中より鈔出せしものなり、其果して何人の手に成りしものなるやは未だ詳ならず、

文公家禮通考一卷

此書は甘雨亭叢書第一輯の劈頭第一に收載せり、

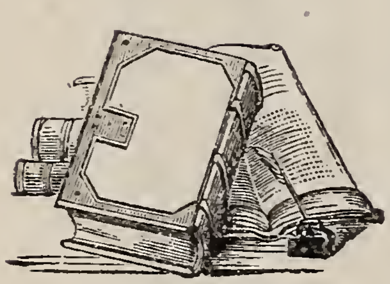
天下天下論一卷

病中須佐美一卷

右二部の書も亦共に甘雨亭叢書中に編入せり、

明君家訓一卷

此書は鳩巣が明君の敎訓に擬して作れるもの、故に初め憚りて己れが名を署せざりしと見え、世其何人の作なるやを知らず、時に井澤蟠龍が武士訓の附錄として出づ、故に往々此書を以て蟠龍が著書となす、然れども兼山麗澤秘策〔卷五及び卷六〕に據るに、其鳩巣の作たることと疑なし、且つ鳩巣後自ら此書を「楠正成諸士敎」と改題し、序文中に其理由を論ぜり、此書の卷末に松宮観山が跋あり、亦其鳩巣の作たることを言へり、因りて茲に此書を蟠龍が著書とすることの誤謬なるを明かにす、



第三　學說

鳩巢は純然たる朱子學派の人なり、先きの惺窩、後の一齋の如く、朱子學を標榜しながら朱王を併取するが如きものにあらず、徹頭徹尾朱子を尊奉せしものなり、仁齋徂徠の古學、東西に呼應し、一代を振撼するの時に當りて、狂瀾怒濤中に屹立する巖礁の如くに動搖せざりしものは、鳩巢其人なり、乃ち彼れが如何に篤く朱子を信憑せしかを察知すべきなり、彼れが朱子學に歸せし由來及び其最後に決定せし立脚點は彼れ自ら駿臺雜話の首めに「老學自敍」と題して論ずる所によりて明かなり、云く、

ある日講はてゝ、宋儒以來、學術の異同に及ぶ、座中に程朱の學に疑を貽（のこ）す人ありしに、翁のいふやう、某もわかゝりし時、俗儒に習つて、記誦詞章を學びて、多くの年月を曠（むなし）うせしが、或る時忽ち往日の非を悟つて、古人己れが爲めにするの學に志ありしかども、不幸にして良師友

もなかりしかば、諸儒紛々の説に眩惑して、程朱をも半信じ半疑ひつ
ゝ定見なかりし程に、兎角して又空しく歳月を經にけり、年四十にち
かきころにてあらん、深く程朱の學、つひに易ふべからざることを悟
りて、それより日夜程朱の書をよみて、心を潛め、思を覃うする事、今に
三十年、仰げばいよ／＼高く、きればいよ／＼堅く、高遠に過ぎず、卑近
におちず、聖人復た出づとも、必ず其言に從はん事疑なし、されば天地
の道は、堯舜の道なり、堯舜の道は、孔孟の道なり、孔孟の道は、程朱の道
なり、程朱の道を捨てゝ、孔孟の道に至るべからず、孔孟の道を捨てゝ、
堯舜の道に至るべからず、堯舜の道を捨てゝ、天地の道に至るべから
ず、老學もとより信ずるに足らぬ事には侍れども、是ればかりは實見
ありて申す事には侍る、若し實見なくして、さもなき事を申すならば、
翁が身忽ち天地の罰を蒙るべしと、誓ひけるにぞ、座中も聽を改むる
氣色なり、

鳩巣斯く論ずれども、程朱が果して正しく孔孟の道を傳へたるや否や

は、卽ち異論の存する所にして、仁齋及び徂徠の古學は之れが爲めに起れり、是故に單に程朱は孔孟の道を傳へたるものと唱道するのみにては、未だ十分ならず、更に進んで仁齋及び徂徠の古學が全く妄謬に過ぎざることを說破し、明確なる事實により程朱の正しく孔孟の道を傳へたることを證明せざるべからず、然るに鳩巢毫も之れを企圖せず、故に其唱道する所、畢竟獨斷の見解たるを免れざるなり、又其堯舜の道によらざれば、天地の道に至るべからずとするが如きは、尙ほ一層甚しき獨斷の見解といふべし、假令ひ彼れ實見によるといひ、天地の罰を蒙るといふと雖も、かゝる言は、以て證明に代ふるの價値あるものにあらざるなり、鳩巢又其論を續けて曰く、

其時翁いふは、是れは五百年來論定まりたる事なり、今更翁が誓を待つべきにもあらず、朱子以後、宋には眞西山、魏鶴山、元には許魯齋、吳草廬、明には薛敬軒、胡敬齋の諸賢をはじめ、其外道學に志ある人、程朱を尊信せざるはなし、一代の碩學なる事、宋潛溪の如く、百家を綜核する

事、楊升菴が如き、文字論說の末に於ては、程朱を議すと雖も、學術道德に於ては、間然することを聞かず、されば明の中葉までは、おほやう世の學術も正しく、名敎も頽れざりしぞかし、王陽明出でゝ、良知の學を唱へ、朱子を排せしより、明の學風大に變じぬ、陽明既に沒して、其徒王龍溪の如き、つひに禪學となる、それより世の學者、良知に沈醉し、窮理に欠伸し、其弊嘉靖萬曆の間に至りては、天下の學者、陽儒陰佛の徒となりてやみぬ、諸賢よく思ひて見給へ、西山以下の諸賢、假令ひ汙下なりとも、好む所に阿ねるには至らじ、又其德行材識、いづれも明季並に今の儒者の下にあるべきにあらず、それに程朱萬分の一にも及ばぬ學識をもて、輕々しくなにくれと譏議するは、鷃の鵬を笑ひ、蠡にて海を測るに似たり、韓愈がいはゆる井に坐して天を小なりといふの類なり、然るに輕薄無識の徒、其說の新奇なるを喜びて、雷同瓦鳴する事、あげて數ふべからず、國家百年以來、太平久しく、文化日に開けて、師儒世に輩出しけり、其學の是非は知らず、たゞ程朱を堅く崇信して、ふる

き模範を失はざりしをぞ、ひとつの幸とせしに、ちかき頃俑作る人ありて、始めて一家を立て、徒弟を集めしより、老姦の儒いでゝ、其上に立たんことを欲し、猖狂の論を肆にして、忌み憚ることなし、一犬虚を吠ゆれば、群犬これを和する習なれば、邪說橫議世に盛なるこそ、理にて侍れ、誠に此道の厄運ともいふべし、云云、

鳩巢が茲に程朱以外に一家言をなすものありとして、痛く其非を論ずるは、仁齋及び徂徠の古學を唱道するを指して之れを言ふものなること疑ひなし、東涯の時學に對して一語をも發せざるとは、大に其趣を異にすと雖も、亦其崇信する所の學に忠なるものといふべきなり、然れども程朱の學を以て五百年來論定まりたりとするは、己れの好む所に僻するの訾を免れず、朱子の時已に陸象山ありて別に一派を成せるのみならず、陽明の如きは、象山を繼いで一新紀元を劃せり、加之我邦の古學派及び清朝の考證家の如き、皆程朱を信奉せざるものなり、故に未だ必ずしも程朱の學を以て論定まりたりといふべきにあらざるなり、鳩巢

又高木氏の僞學論に題して曰く、

古より邪說の道を害すること多し、然れども其妄誕麤惡、忌憚する所なきこと、今世の甚しきが若きものあらず、或は古學と稱するものあり、曰く、大學は孔氏の遺書にあらずと、又曰く、我れ能く伊洛の淵源を塞ぐと、或は文學を矜るものあり、曰く、道天に出でずと、又曰く、道は事物當然の理にあらずと、其他淫辭浮言、勝げて數ふべからず、若し此等の說をして數十年の前に出でしめば、庸人孺子と雖も、亦其妄を知りて之れを非笑せん、今や然らず、世の師儒と稱するものより、皆之れが爲めに動かされ、其說を崇んで之れを信ぜずといふことなし、況や後學晩進のものに於てをや、宜なるかな、其靡然として趨いて之れに歸すること、吾れ是に於て世道の日に下だり、人心の日に僞るを知る、亦悲むべし、然りと雖も彼の釜鳴死合の徒、何ぞ道ふに足らんや、吾れ意ふ、儻し能く規範を守りて變ぜざるもの、先後輩其間に出づるあらば、邪說左道の一時に熾なるもの熄まん、古人曰へるあり、千人の諾々は、

一士の諤々に如かずと、吾れ嘗て世に正學不屈の人あるを聞けば、則ち私心深く以て喜びとなす、此れが爲めなり、(後編鳩巣文集卷之十六)

又中村氏五經筆記の序を作りて曰く、

奈何ぞ近世邪誕の説、競ひ起り、漢唐を凌駕し、程朱を詆毀し、一己の私見を以て天下の耳目を誣ひんと欲す、有識の士をして之れが爲めに憤惋殆んど寢と食とを廢せしむるに至る、勝げて嘆ずべけんや、(同上卷之十三)

是等憤慨の言、皆鳩巣が仁齋徂徠の古學に激昂して發する所なり、然れども多くは其人の名を顯はさず、隱然之に敵抗するものゝ如し、獨り仁齋のみは時ありて之れを明言し、公然異端として之れを排斥するを憚からざるなり、遊佐木齋に答ふる第二書に論じて曰く、

伊藤仁齋經書を駁し、程朱を非とす、則ち我徒の戈を倒にするもの、亦異端なり、其他博識著述を以て京師及び東都に鳴るもの、則ち所謂記誦詞章の學、皆俗學なり、(前篇鳩巣文集卷之八)

鳩巣更に又一層甚しき激語を發して曰く、

若し王者起ることあらば、必ず海内の籍を聚め、悉く其叢雜無用の書を取りて、之れを火にし、然して後、天下の學者に詔し、專ら體察踐行を務め、空言を事とせず、虛文を抑へ、浮華を剗ぎ、人心を正し、邪說を拒がん、是の如きこと數年ならば天下靡然として復た正に歸せん、(同上)

彼れが自家崇奉する所の學に忠なるの極、爾餘一切の學を撲滅せんと欲するの氣勢を示し、殆んど秦の始皇の如き暴王を豫期するが如き口吻をなせり、凡そ文運の勃興は、種々なる思想の競起によりて催進せらるゝものなり、然るに敢て己れが好む所に僻して、悉く己れが好まざる所を勦絶せんとす、其偏狹固陋にして寬宏の氣象に乏しき、寧ろ憫笑すべきなり、人或は彼れを以て寬政異學の禁を馴致せるものとす、彼れの言論に徵して之れを考察するに、吾人未だ之れを否定する所以を知らざるなり、彼れ仁齋、徂徠及び其他一切朱子學派にあらざるものを牴排毀譏すると同時に獨り朱子をのみ賛賞嘆美して之れを九天まで指し

擧げたり、其言に云く、

古の經をなすもの、漢に專門の傳あり、唐に義疏の說あり、儒家者流、遞に相祖述す、之れを經に功なしといふは、固より不可なり、然れども其學、記聞に拘滯し、大義に憒如として、聖人垂敎の意を發明すること能はず、徒に乃ち區々として章句訓詁を分析し、以て之れを得たりとなす、抑〻亦末なり、遂に學者をして其卑近を厭ひ、高遠に鶩せしめ、顧つて老佛の說を以て聖人の言を亂りて乃ち已む、夫れ唯、程朱の學か、其說性理に本づき、進修に切なり、之れを高うして空虛に流れず、之れを卑うして口耳に墜ちず、宜なり其經解の書、本經と相上下し、猶ほ日月の天に並び懸かるがごとし、云云、(後編鳩巣文集卷之十三)

又云く、

聖人の學、明德を明かにするを以て體となし、民を新にするを用となし、至善に止まるを體用の極となす、而して博文約禮を進修の法となす、朱子の若きは、博文約禮、兩ながら其至るを極むるものなり、故に其

克つて德行となるや、面に睟に、背に盎れ、周旋、禮に中たる、其發して事業となるや、政脩まり、事擧がり、至る所、風に嚮ふ、之れを行狀に考ふれば、則ち見るべし、其晩年義精うして仁熟し、德盛んにして禮恭しく、聲名四海に溢れ、施ひて蠻貊に及ぶに及ぶ、豈に殆んど聖域に入るものか、其六經を注する、皆其行ふて心に得るものを以て、之れを文字に施し、以て經に附す、名は傳註の書たりと雖も、其實聖經と並び、以て日月と光を爭ふものなり、朱子の朱子たる所以のもの、此の如くなれば、則ち近世の諸儒、稍〻文字を以て樹立するものありと雖も、豈に以て其藩牆を望むに足らんや、(前篇鳩巢文集卷之八)

鳩巢が朱子を推尊すること至れり盡くせりといふべし、唯〻惜むらくば其言差〻溢美に失するの嫌なしとせざるを、彼れ此の如く朱子學に熱心なるが故に、我邦の朱子學派に對しては、深く同情を表すべき筈なるに案外に冷淡なる批評を下だして憚からざるなり、林羅山、米川操軒、中村惕齋の如き、皆彼れが無遠慮なる月旦を免れず、又彼れが山崎闇齋を評

隲するの言、左の如し、云く、

山崎氏佛を逃れて儒に歸し、朱氏を尊んで、百家を黜け、師道を嚴にして後生を誘ひ、其斯道に裨あるが若きは、誣ふべからざるものあり、亦近世豪傑の士なり、云云、然れども聞く、山崎氏自ら處ること太高く、人を待つこと太だ嚴に、含弘の度少く、人の過失を容れず、其授受の間、能く心を平かにし、懷を虛にし、從容委曲、以て彼我の情を盡くすことなしと、此れ其短なる所なり、(同上)

尙ほ闇齋を以て朱子に比し「螢燭の太陽に於ける、涓流の河海に於けるなり」と道破し、意氣昂然たるものあるを見る、

鳩巢の學說、全く朱子に本づき、別に自ら發明する所あるにあらず、然れども其道德に關する言、躬行に益あるもの少しとせざるが故に、學者宜しく傾聽すべし、彼れ愼獨の要を論じて曰く、

君子室に居て言を出だして善なれば、千里の外應ず、況やその邇きものをや、室に居て言を出だして不善なれば、千里の外違ふ、況やその邇

きものをやと、孔子ものたまへり、さゝりとて家にてする事の忽に千里に及ぶといふにはあらず、たとへば風の草木に移つるが如し、其ひゞき彌高にまさりゆく程に、家より國にひゞき、國より天下にひゞく、是れ自然の理にして、誠のおほふべからざる所なり、是を以て君子は常に内に心を用ひつゝ、たゞ手前を正しくして、外を飾る事なし、たとへば錦を衣てうはおほひするが如し、其美おほへども、おほふべからず、いやましにしるきぞかし、小人は内行おさまらずして、外見をのみ飾れば、くさきものに蓋するが如し、其臭ふさげども、ふさぐべからずいとあらはるゝぞかし、枚乘が吳王を諫むる書に、欲人勿聞、莫若無言、欲人勿知、莫若勿為、此語淺きに似て味ふかし、名言といふべし、口にいふて人のきかぬやうにし、身になして人のしらぬやうにとするは、いやしきたとへながら惡に利息を添へて身におふが如し、日にそひ、月にそひて、其おひまさりなば、いかでおほひかくすべき、聖人より以下は、君子も過ちなきにあらねども、これをかくさんとはせずして、人の見

るまいに改むる程に、過ちは過ちと見え、改むるは改むると見えて、其仕方にかくるゝ事なく、心に一點くもりなきと知るれば、反りて其德のひかりもまさりぬべし、云云（駿臺雜話卷之一）

是れ古來聖人の僞善を戒め、至誠を敎へる旨意を敷衍するものにて、實行上頗る適切なるものあるを知るべし、馬太傳第十章第廿六節に

Es ist nichts verborgen, das nicht offenbar werde, und ist nichts heimlich, das man nicht wissen werde.

と云へるも、亦這箇の消息を洩すものに外ならず、眞に東西一揆といふべきなり、彼れ又存養の工夫を論じて曰く、

我といふものゝある所を尋ぬるに、一念未生の時、本然未發の體是れなり、君子こゝを存養してそこなはねば、天地も我れより位し、萬物も我れより育し、鬼神も我れより感應す、何事か我れによらぬ事あるべき、邵康節の一念起ることなければ、鬼神も知る事なし、我れによらずして、誰れにかよらんといへるは、これをいふなり、云云、常人多くは心

に閑思雜慮、常に絕ゆる事なく、何事も思慮作爲の中より出づる程に、氣にひかれ、物にうばゝれて、我れといふもの、自立する事能はず、さればこの我れを失はじとならば、心源存養の工夫をなすべし、心源存養の工夫は、私欲なきを本とす、この心、私欲だになければ、靜虛動直とて、何事も思慮作爲をからず、たゞ靜虛の中より、道理のまゝに眞直に出る程に、萬物の先きに定まりて、萬物の後に墮つる事なく、鬼神を制して、鬼神に制せらるゝ事なし、聲もなく臭もなくして、天下の大本となる、無體の體ともいふべし、思ひもなく爲すもなくして、萬化の大柄となる、不御の權ともいふべし、(同上)

尙ほ善惡に對する用意を論じて曰く、

我心に人しらず一念のきざすは、獨居の時、暗處の事なれば、なにのけしきも見えず、いはゞ年の內に春の來るに同じ、一念の萌す處に、旣に善惡のわかれあれば、年の內にこぞとことしの分かるゝに同じ、されば千里の謬も、毫釐の差よりおこるといふもこゝにある事なり、濂溪

先生の幾は善惡といへるも、此事なり、是非のさかひ、善惡の關と知るべし、されば目をはなたず、此關を守りて、我れと我心に善とやいはん、惡とやいはんと尋ねつゝ、一筋に惡を去り、善に向ふこそ、我儒の修行の本とする事なれ、若し此處に心ゆるして、色にいで、聲にあらはれて、始めてさとらば、たゞ手の延びたるといふばかりにもあらず、たとへ勉强すとも力を用ふるに難かるべし（同上）

鳩巣は我れに本體我ありとし、本體我は善（卽ち絶對善）にして、一切外物の左右し得る所にあらず、然れども纔に外物に接し、想念を惹起するに及んで忽ち善惡の差別を生じ、動もすれば輙ち惡の方面に傾向するの恐れありとするものなり、是れ彼れが存養の工夫を說き、省察の力行を論ずる所以なり、彼れ聖門の學の何たるかを辨じて曰く、

すべて學といふは、聖賢の道をつとめ習ふ事なり、そのつとめ習ふに致知あり、力行あり、されど其理を知るは、書に限らねども、聖賢の書を第一とする程に、學といへば、致知を主とし、致知といへば、讀書を主と

す。云云、しかいへど學は讀書に限るべからず、書をよみて、義理を講じ、事物に卽きて、其理を窮むる、同じく致知の事にして、力行の始めなり、もとより聖人の道は、日用事物を外にせねば、父母につかへ、君につかふまつり朋友に交はるより、其外世にあらゆるもろ〳〵の應接に至るまで、一事一物、いづれか致知の地にあらざる、一動一靜、いづれか力行の時にあらざる、善は其善なる理をきはめ、惡は其惡なる理をきはめなば、世事善惡ともに、皆我學中の事なり、いかで世事にさへられて懈るといふ事あるべき、(同上)

彼れ又陽明學派の人が朱子格物の說を以て先づ事物の理を窮めて後に其事をするものとなすを非として、論じて曰く、

朱子の格物といふは、さにはあらず、親に事ふる上にて、其事々に卽きて、孝の理をきはめ、君に事ふる上にて、其事々に卽きて、忠の理をきはめ、昨日情の未だ至らざるを今日知り、今日事の未だ盡くさゞるを明日知る、是れ格物致知の學なり、官に居り職に任ずるが如きも、必ず、其

事をつとむる上にて、當否を處し、事空を察し、日々に職事に熟し、誠實にすゝむ、是れ則ち格物致知なり、云云、されば事に大小ありて、理に大小なければ、時となく處となく、格物の地にあらざるはなかるべし。(同上)

或る人鳩巣に吾儒の道は、百行を該ぬれば、何をか題目として心懸くべきと問ひしに、彼れ之れに答へて、

翁常に立居につけて思ひ出でつゝ、忘れぬ事三あり、其三は父の恩、君の恩、聖人の恩なり、(同上)

といひ、尙ほ委しく之れを說明して曰く、

夫れ本に報い、恩を忘れざるは、人道の大端なり、されば父母はわが出來し本なり、我れを生じて、我れを育す、一毛一髮までも、父母の遺體にして、遺愛のある所にあらざるはなし、いかがして忘るべき、さて君恩に浴して、餓ゑず寒むからず、妻子を養ひ、親族を賑はす、すべて生を養ひ、死を送るの道、世話にいふ箸一本までも、君恩にあらざる事やある、

いかがして忘るべき、されど飽くまで食し、煖に衣て、君父につかふまつる道をもしらずば、禽獸に近かるべし、幸に聖人の敎によりて、義理のあらましをもしり、禽獸に免かるゝは、これ聖人の大恩にあらずや、いかがして忘るべき、およそ人として常に此三を忘れずば、天理おのづからほろびずして、本心を失ふに至らざるべし、衆善のあつまる所ともいふべし、(同上)

是れ彼れが最も重大視せし所と見え、更に其衷情を吐露し、

翁は常に此三を忘れず、おもひ出てて、身にしむばかりに覺え侍る、家學の要訣とも申しつべし、

と云へり、彼れ又仁を論じて曰く、

心の仁あるは、人の元氣あるが如し、人の元氣は脉にあらはれ、心の元氣は、愛にあらはる、脉のかよひ絶ゆれば、人死する如く、愛の理ほろぶれば、心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし、夫れ心は活物なるにより、人に情あり、物の哀れをしりて、常にいきたる物ぞかし、よりて

父母を見ては、自然に親愛し、親愛せざるに忍びず、君長をみては、自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず、齒德を見ては、自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず、義を聞きては、必ず感ずる事を知り、不義を聞きては、必ず恥づる事を知る、若し情なく哀れを知らずば、其心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん、何を以て自愛し、何を以て恭敬せん、義を聞きて感ずる事なく、不義を聞きても恥づる事なかるべし、是れを以ていふに、仁義禮智いづれも心の德にして、各、其理分るれども、其本源は仁に外ならず、人として不仁なれば、義も禮も智も其さまあり其用ありといへど、所詮內より生ぜねば、眞の德にあらず、公の理にあらず、この故に仁に心の德といふて、外に德をいはず、仁に愛の理といふて、外に理をいはず、そのいはざる所に深き意ありと知るべし、

（駿臺雜話卷之二）

是れ仁を以て愛情となし、愛情を以て唯一の心德とするものにて、其倫理、畢竟博愛に歸するものなり、偶〻哥林多前書第十三章を繙閱するに、左

の言あり、云く、

假令ひ我れもろ〳〵の人の言葉及び天使の言葉を語るとも、若し愛なくば、鳴る銅や響く鈸の如し、假令ひ我れ預言するの能あり、又すべての奥義と、すべての學術に達し、又山を移すほどなるすべての信仰ありと雖も、若し愛なくば、我れに益なし、愛は寛忍をなし、又人の益を圖るなり、愛は妬まず誇らずたかぶらず非禮を行はず、己れの利を求めず、かろ〳〵しく怒らず、人の惡しきを念はず、不義を喜ばず、眞理を喜び、凡そ事容れ、凡そ事信じ、凡そ事望み、凡そ事忍ぶなり、愛は永久も墮つることなし、然れども預言は廢り、方言は息み、知識も亦廢らん、我等の知識、未だ全からず、預言も未だ全からず、全きもの來たるときは、全からざるもの廢るべし、云云、それ信仰と望みと愛と、此三つのものは、常に在るなり、此中尤も大なるものは愛なり、

是れ鳩巢の言ふ所と其精神に於て全く一致するものといふべきなり、然れども鳩巢は仁と共に義の重んずべきことを忘れず、乃ち、

若し義の裁制なくば、心の生道を損じて、仁も亡びぬべし、と言ひて、義の要を說くに力を用ひ、且つ所謂浩然の氣の如きも、義より生ずるものとせり、其言に云く、

浩然の氣は、至大至剛、天地の間に塞がるといふにはあらずや、各〻考へて見給へ、かくばかり盛大なるものが、いかなれば義より生ずるといふにやあらん、人は天地の正氣を得て、もと浩然たるものにて候へども、私欲ありて、心のきれをなづまする程に、其氣いつとなくちゞけて、小さくなる事にて候、されば浩然の氣は、心のきれより生ずるものと知るべし、云云、浩然の氣は義より生じて其生じたる氣が、又義を助くることそ、いと奇妙に覺え侍る、（駿臺雜話卷之二）

彼れ又義の觀念に本づき、武士道を論ずること頗る委曲周到なるものあり、或る人彼れに

兵家山鹿の何がしが、世に士の金銀の事を口に沙汰するは、いやしき事といふは、大きなる僻がことなり、金銀はなくて叶はずして、至りて

大切なる物なり、それをいやしめ輕んずべきにあらずとて、諸侯より金銀を贈れば、取りて戴きてさしおきける、(駿臺雜話卷之五)

事を述べて之れを質しゝに、彼れ乃ち答へて曰く、

それは兵家利害の僉議よりいふにやあらん、士の道はさにはあらず、いかにとなれば、士は義理より大切なるはなし、其次ぎには命を大切とし、金銀は又その次ぎなり、此二つも大切なるもの故にやゝもすれば、生死の場、金銀の事に臨んでは、かの義理といふおもき物を取違へるぞかし、よりて生を貪り利を貪るの事をば、心にとゞめじ、口にもいはじと心づかひするは、士はかりにも利欲に近づかじとなり、總じて利欲といふは金銀の欲にかぎらず、身の勝手を思ふは、皆利欲なり、されば命は金銀より大切なる物にあらずや、勝手を以ていはゞ、命をいくるばかり勝手によき事はなけれども、義に臨んでは塵芥よりも輕んずるは、士の道なり、いはんや金銀に於てをや、もとより大切のものなれば、常に身の養生を愼み、金銀もあらく費やし用ひざるは、さもあ

るべき事なり、されば、とて命をし、金銀たつとし、と心におもひ、口にもいふは、商賈などには似合ひたるべし、士にはあるまじき事なり、(同上)

此れに由りて之れを觀れば、義を以て生命金錢等より一層高尚なるものとして、凡そ士たるものは、徹頭徹尾義によりて立つべしとするものなり、武士道の根本主義が義てふものにありて存すること彼れが論ずる所の如し然るに是れ實に儒敎の大骨頭といふべきものなり、儒敎と武士道と毫も相戻るものにあらず、武士道は我邦に淵源すと雖も、儒敎によりて助成せられ、益發達するに至れること疑なきなり、彼れ又鬼神を論じて曰く、

神は正直なるものといふ事は、誰れも知れども、聰明なる事を知らず、神ばかりすゝときものはなし、其故は人は耳を以てきけば、耳の及ばぬ所は、師曠が聰といふとも、きかずしてありなん、目を以て視れば、目の及ばぬ所は、離婁が明といふとも、見ずしてありなん、心ありて思慮すれば、穎悟の人といふとも、なほ猶豫ありぬべし、神は耳目をからず、

思慮に渉らず、眞直に感じ、眞直に應ず、是れ二つもなく、三つもなき、唯一つの誠より得たる徳と知るべし、されば天地の間に極めて耳とく、極めて目はやき物ありて、時をもわかず、所さりせずありのまゝに現在し、端的に往來し、あらゆる物の體となりて、兩間に盈ちわたりてあれども、元より形もなく聲もなければ、人の見聞には及ばずして、たゞ誠あれば感じ、感ずれば應ず、誠なければ感ぜず、感ぜねば應ぜず應ずれば忽ちあり、應ぜねばおのづからなし、是れ天地の妙用にあらずや、云云、譬へば清くすめる水には、其まゝ月のうつりて、互に光をますが如し、久しくなれば、一つ誠に渾融して、神と人とをわかず、譬へば水や空、空や水、一つにかよひてすめるが如し、こゝに至りては洋々乎として、其上に在すが如く、其左右に在すが如くなるべし、是れ神のあらはるゝなり、誠のおほふべからざるなり、さりとて神を遠き事とな思ひ給ひそ、たゞ我心に求め給へ、いかにといへば、心は神明の舍なり、一毫も私欲のさはりなければ、おのづから天地の神明と同氣相應じて、か

くいちじるしきぞかし、但、相感ずる事なければ、さる事なかるべし(駿臺雜話卷之一)

彼れは此の如く神の實在を信じ、又我れに誠あるによりて之れと相感應し得るものとせり、其他彼れが著書中に散見せる格言として紹介すべきものは左の如し、

一

天下の法は、寬大にして江河の如くなるべし、瑣細にして溝渠の如くなるべからず、江河は大きにしていちじるければ、よけやすし、しかも深廣にしてあなどり難き故に、犯し難し、溝渠は小さくしてしげゝれば、よけ難し、しかも淺狹にして近づき易き故に犯し易し、

二

身の文章は言語より重きはなし、

三

學問は勉勵を要とす、たゞ急にして迫切なるをおそる、義理は涵泳を

貴ぶ、緩にして懈弛なるを戒む、迫切ならず、懈弛ならず、學者進修の道に於て緩急相得て背かざるに近かるべし、

四

一日いきては、一日の道を盡くして死し、一月いきては、一月の道を盡くして死し、一年いきては、一年の道を盡くして死す、かくてはたとひ朝に道を聞きて、其夕に死しても、絲毫の遺念なし、

五

たゞ改めてもいひわけの立ち難き事二つあり、士の死ぬべき場をはづしたると、ぬすみしたると、此二つは一たび其事ありては、一生の疵となりて、其人ながくすたりぬべし、然ればＸの家に生まるゝ者には、男女ともに幼少より節義の事を常にいひきかせて、忘れさすまじき事なり、

六

君子の行は、士たるに始まりて、聖たるに終はる、

七

士は義を以て職となし、商賈は利を以て職となす、義利の間士商判る、

八

士の重んずる所のものは、義なり、商賈の重んずる所のものは、利なり、重きことは義にあれば、輕きことは利にあり、重きことは利にあれば、輕きことと義にあり、

九

士の志す所のものは、道なり、守る所のものは、義なり、富は固より我れの欲する所なれども、其道にあらざるに當りては、今日の富貴も、明日之れを棄てん、生は固より我れの欲する所なれども、其義を取るに當りては、今日生くと雖も、明日之れを捨てん、是れに由りて之れを言へば、天下道より大なるはなく、義より重きはなし、死生禍福に至りては、君子以て心とせざるものあり、況や一身の奉に於てをや、

十

今士大夫の家、古書名器を蓄へんには、必ず其眞を擇んで、後之れを藏す、一たび其贋を覺れば、捨てゝ收めず、身の言行に至りては、則ち外是にして内非に、陽善にして陰惡なり、是れ其身を以て天下の僞物となすなり、且つ身と書器と孰れか重き、孰れか輕き、書器、眞にあらざれば、鄙んで之れを棄つるを知る、身僞物たるは恬として之。恥づるなし、亦其理に昧きを見るなり、

十一

凡そ學は志の立たざるを患ふ、力の足らざるを患へず、夫れ志は氣の帥なり、志の至る所にして、氣之れに從ふ、未だ志立つて力の足らざるものあるを聞かず、若し夫れ學を好んで志立たざれば、善道ありと雖も、安んぞ施す所あらんや、然りと雖も志を立つるに本あり根あり、譬へば植木の地にあるが如きなり、必ず根ありて立つ、則ち其本を强うし、其根を固うするにあるのみ、

十二

學者志を立つるの要は、道を信ずること篤きにあり、道を信ずること篤ければ、之れを得ること深し、之れを得ること深ければ、之れを守ること堅し、其之れを得ること深くして、之れを守ること堅ければ、一心卓然として根據する所あり、而して天下能く之れを易ふることなし、豈に外物の能く奪ふ所ならんや、

十三

世の學者、書を讀まざるなくして、而して善く書を讀むもの、天下鮮し

十四

學は深淺を論せず、行は難易を論せず、其志の邪正いかんを顧みるのみ、

鳩巢が務めて節義を說き、忠孝を論じ、以て世道人心に裨益する所あらんを期せしは、後世人の最も感謝すべき所なり、日本詩史(卷之四)に彼れを論じて「嘗著大學新疏、義人錄、駿臺雜話等書、莫非提起經義、維持名敎者也」といへるは誠に當れり、然りと雖も、一つの疑はしきものあり、他なし、

彼れが幕府を貴んで、帝室を蔑如せしこと、是れなり、彼れが寄朝鮮聘使二百韻の詩中幕府を稱して七廟といひ、敢て之れを天子に擬するの嫌あり、摩島松南が娯語〔卷之四〕に論じて云く、

夫れ當今七廟等の稱、天朝にあらざるよりは、決して之れを用ふるを得ず、其他辭を措き、字を下だす、皆辨別なし、安んぞ知らん、其他邦を誇揚するもの、適〻以て我れの德を損するに足るなり、關東の諸儒白石、鳩巢、徂徠、春臺の諸先生、皆此弊を免れず、惜いかな、

又觀瀾文集〔卷之下〕を見るに、左の驚くべき記事あり、云く、

有藤井蘭齋者在京師、今則死矣、素以質行稱、嘗聞其爲人亦箇好人、其人恒言、名不正則言不順、孔子之言昭昭、今土地政令、則悉歸關東、而正朔冠服、僅在京師、不名不正之甚哉、吾於此論、確乎不易、若一日被關東徵、則首發此議、直移虛位天子、淮爲三格耳、室直淸話、予聞此論愕然驚、感然愀、如知天地間漸有爲此說者、使我執政、取誅此人、科均少正卯耳、

鳩巢が皇室に對する見解、果して此の如くなりとせば、其大義名分に於

て誤れること實に甚しとなす、彼れが又德川家康を尊崇するの極、餘りに豐太閤を貶黜したるは、殊に惜しむべしとなす、其太閤を論ずる言に云く、

豐臣秀吉は、もとより不仁にして、暴を誅し、亂を止むるの兵にてはなけれども、勝敗の大數に明かなりしかば、師を出だすになにの造作もなく、兵を行るになにの巧計もなく、戰となれば、必ず功を一擧に收む、遂に兵を頓して日を曠うすることをきかず、いはゆる拙にして速なるものに近し、其將畧、恐くは謙信、信玄の及ぶ所にあらじ、然れども慓輕猾賊の人にして、禮樂慈愛は、夢にも知らざりし程に晩節無名の師を興して、朝鮮を征伐し、久しく師旅を暴露し、多く人民を魚肉せしかば、天下の人心離れ叛きけり、亦兵久うして收めざるの禍なり(駿臺雜話卷之四)

又云く、

かの朝鮮を征伐して多くの人を殺し、大佛を建立して多くの財を費

やしぬるは、天下の害にてこそあれ、國家の爲めになにか絲毫の益になる事ある、たゞ愚人の耳目を驚かすばかりにて、少し心ある人は、いまの世迄も眉をしはむるぞかし、しかれば末の世に名を遺すとはいへど、ながき譏を招くなるべし、(駿臺雜話卷之三)

鳩巢の太閤を非議するの言、一理なきにあらざるも、餘りに貶黜に過ぎたるものあるを知るべし、英雄の心事は、尋常儒者の窺ひ知るべからざるものありて存す、當時海內の爭亂、太閤によりて平定せられ、無數の勇士、其鬱勃の氣を洩すに由なし、乃ち悉く之れを驅りて、武勇を海外に示すが如き、眞に大和男兒の膽力を鍛錬すべき震天動地の大事業にして、胥に以て異邦人を驚駭せしむるに足るのみならず、又永く後昆をして之れに倣ふて奮起せしむるものあるなり、太閤が雄大の氣勢は、殆んど東方の天地を呑吐するの狀なしとせず、是れ豈に千古の一大快事ならずとせんや、鳩巢甚しく太閤を貶黜し、之れに反して大に家康を稱揚して曰く、

しらずや今日光の御廟、屹として泰山の如く、國々までも奉祀して、仰ぎ奉らざるはなし、是れこそ永代不朽の御名譽とはいふべけれ、それに別してひとつ感じ奉るべきは、かくばかり古今に傑出し給ふ御事にて、御在世の內、御自身の聰明に傲り給はず、常に下の直言を納めさせ給ふこそ、眞の御聰明とも申し奉るべけれ、(同上)

家康固より一世の人傑なるに相違なきも、鳩巣は殊に之れを尊崇し、其德を頌すること一再ならず、遂に朝廷に就いて言ふべきことを以て之れに擬せんと欲するに至る、果して然らば其事ふる所に佞するの嫌ありといふべきなり、偶〻三宅尚齋が默識錄(卷之四)を讀むに左の言あり、云く

聞室某荻生某等、陰有革命之說、大義湮晦、滅綱常、其罪莫所容矣、

と、吾人鳩巣が革命の議をなしゝ事を信ぜず、然れども彼れが皇室を眼中に置かざるが如き弊ありしは、蔽ふべからざる所なり、但〻鳩巣が徂徠春臺等と其說を異にし、赤穗の四十七士を義人と稱せしは、名敎に裨補

する所なしとせず、然れども、楠正成に至りては又稍〻之れを貶黜するの口氣あり、其言に云く、

正成かくの如く絶倫の材を以て聖賢の道を學びずして、孫呉が術をのみ崇びしは、遺恨といふべし、湊川にて自殺するとて、弟正季と最後の一念を語る事甚だ陋し、(駿臺雜話卷之四)

鳩巢佛敎に對しては左の如く言へり、云く、

君をすて親をすてゝ佛に歸して、我身一つたすけむとおもふは、世をば捨つれども、其心は君にかへ、父にかへて、其身をばすてぬにてありけり、身を捨てずしては、世をすつともいふべからず、世にありて名利をねがふも、世をすてゝ、極樂をねがふも、清濁はかはれど、身の樂みを思ふは同じかるべし、もとより佛の敎は、人倫を假りと見れば、君父をすつるはよし、さもあらばあれ、たゞとても捨つるとならば第一に身の樂みを思ふ心をもすてゝ、扨名利にはなれて見よかし、世をのがるゝにも及ばず、名敎中に自然の樂地あるべし、何ぞ必ずしも人倫をす

て、事物を離るべき、人倫をすて、事物を離れて、たゞ己れが往生極樂を」ねがふは、世をすつるといへど、未だ身をすてえぬより起りて、樂欲甚だしともいふべし、云云、されば昔より佛に歸する人、貴賤男女をいはず、いづれも身の苦樂を思ふより起らぬはなし。(駿臺雜話卷之五)

是れ宗教心の利己的方面を道破して頗る其肯綮を得たるものなり、固より宗教心なれば必ず悉く利己的なりといふを得ず、其高尚なるものに至りては、區々たる個人的の藩畦を超絶して、全く普遍的なるものなり、換言すれば、絶對的に博愛的なるものなり、然れども滔々たる世俗の宗教心に至りては、利己的の動機に本づかざるもの殆んど稀れなり、鳩巣、普通宗教家の急所を衝きたりといふべし、彼れ又神道に就いて左の如く言へり、云く、

其所謂道とは、果して何の道ぞや、其れをして聖人の道に合はざらしめば、則ち異端なり、吾儒たるもの、當に力めて其異を辨じて、之れを排し、人をして他岐の惑あらしめざるべし、當に苟も阿附する所ありて

以て我國の道となすべからざるなり、其れをして聖人の道に合せしめば、則ち神道も亦儒なり云云、當に儒と並び稱して之を左右すべからざるなり、（鳩巢集外纂卷之上）

且つ又其守る所を述べて云く、

直清が愚のごとき、惟孔孟の道を道とし、程朱の學を學とするを知るのみ、誓つて此れを以て一生を終へ、以て天下の道これに尙ふるなしとなす、（同上）

彼れ深く儒教を信じ、儒教以外の道の如きは、其佛教たると、道教たると、將た又神道たるとを問はず、皆斷じて之れを信ぜず、故に其守る所に篤きは稱揚すべしと雖も、頑固と崇外との訾は、恐くば其免れざる所ならん、尙ほ最後に鳩巢が立教の態度を瞥見するに、槪して消極的なり、換言すれば、制止的なり、故に最も自由の行爲を嫌惡するの傾向あり、乃ち論じて曰く、

人となれば自由ならず、自由は人をなさず、蓋し宋の時の諺に然かい

ふ、此れ俗語と雖も、最も切要の言となす、凡そ士大夫其身を持することと自由なると自由ならざるとを見て、然うして後、一生の成就、トすべし、吾れ天下の人を觀るに、未だ擧動自由にして、能く身を立て名を墜さざるものあらず、古稱す、善に從ふは登るが如く、惡に從ふは崩るゝが如し、安んぞ自由にして惡に流れざるものあらんや、士大夫好人たることを欲せざれば則ち已む、苟も好人たることを欲せば、凡そ言行動靜、須く規矩繩墨の中より過ぎて、常に畏れ忌む所あるが如くなるを要すべし、乃ち善く久しければ、之れに處ること安し、然らざれば縱ひ未だ科を犯し咎を招いて、大惡に陷るに至らざるも、亦終に一無狀の小人となりて乃ち已まん、譬へば匠人の器を製するが如し、規矩に由らざれば方、方を成さず、圓、圓を成さず、無名無用の器物たるに過ぎざるのみ、況や目の色を欲し、耳の聲を欲し、四肢の安逸を欲す、苟も以て之れを制することなければ、則ち其大惡に陷ること、亦難からず、但其始め自由なると自由ならざるとにあるを要するのみ、一つの自由

は凶人となるの端なり、一つの不自由は吉人となるの端なり、戒めざるべけんや、懼れざるべけんや、(後編鳩巣文集卷之二十)

若し自由の二字を以て放蕩無賴の義とせば、眞に鳩巣の言ふ所の如し、然れども自由は各個人の發展に必要なる行動を束縛せざるの義とすべきものにして、必ずしも放蕩無賴の義とすべからざるなり、若し一概に自由を嫌惡せば、人をして其自然の發展を桎梏せしむるの弊なしとせず、此點より之れを言へば、鳩巣は徂徠の自由主義と相反し、形式に拘泥し、消極的の一方に偏せること復た疑なきなり、



第四　鳩巣門人

大地昌言、字は士兪、一の字は行甫、通稱は新八郎、奚疑と號す、又遜軒、東川等の別號あり、加賀の人、鳩巣の外甥なり、彼れ幼にして學を好み、年僅に十二三にして、善く文を屬し、詩を作る、新井白石之れを稱して千里の駒といへり、長ずるに及んで、事大小となく、鳩巣を以て法となし、容儀を脩むることに於て深く心を用ひ、居る常に道にあらざれば言はず道にあらざれば行はず、動止進退必ず禮あり、是を以て士大夫皆其有德に服す、眞に君子人といふべし、寶曆二年を以て歿す、享年六十、著はす所奚疑遺稿二卷あり、(燕臺風雅拔抄)奚疑、鳩巣の遺命により鳩巣文集を編輯し、唯ゞ其前篇をのみ完了し、其補遺と後編とは未だ成らずして歿せり、其事は伊東澹齋が前篇の叙に詳悉せり、

中村蘭林、名は明遠、字は子晦、通稱は深藏、蘭林は其號なり、又盈進齋と號す、姓は藤原氏、江戸の人、幕府に仕ふ、彼れが父玄悦、幕府の醫官たり、是

を以て蘭林も亦初め玄春と稱し、父の業を修め、著はす所醫方綱紀三卷あり、然れども彼れ醫官たるを好まず、其志す所寧ろ儒官たるにあり、嘗て歎じて曰く、士君子世を濟ふ、奚ぞただ醫のみならんやと、乃ち幕府に上言して儒官たらんことを請へども、允されず、居ること數年、幕府之れに命じて侍醫を以て經筵の事を行はしむ、是れ蓋し特恩に出づと雖も、亦其志にあらざるなり、延享四年に至りて始めて醫を改めて儒員に擢んでらる、此時蘭林年正に五十有一、彼れが得意想ふべきなり、彼れ寶曆十一年を以て歿す、年六十五、著はす所學山錄六卷、講習餘筆四卷等あり、蘭林鳩巢に學ぶと雖も、鳩巢の如く固く宋說を守らず、多少仁齋及び徂徠の說を參酌するものあるが如し、(先哲叢談卷之七、續近世叢語卷之一、前篇鳩巢文集叙)

綾部絅齋、名は安正、字は伯章、一の字は惟木、通稱は進平、豐後杵築の人、幼にして穎悟、其父道弘に從つて書を受け、長ずるに及んで、京師に遊び、伊藤東涯、北村篤所に從つて學ぶ所あり、後又江戸に到り室鳩巢を見

て大に悅び、乃ち弟子となり、主として洛閩の學を治め、旁ら服部南郭に從つて詞章を講ず、後編卷之十三に鳩巢が送序あり、頗る其人となりを知るに足る、絅齋性剛直にして謹恪、身を奉ずること淡薄にして、家を持するに法あり、人の窮乏を視ては、賑卹をなし、唯〻及ばざらんことを恐るゝのみ、嘗て杵築藩の龍溪公に仕へ、能く輔弼の道を竭くせり、時に詩あり、云く、

春暉歲々知難報、細草指天是寸心、

蓋し其志をいふなり、彼れ寬延三年を以て歿す、享年七十五、著はす所家庭指南一卷あり、絅齋が二子、長を富阪といひ、次を剛立といふ、皆一家を成せり、門人三浦梅園獨創の見を以て世に顯はる、(近世叢語卷之一、後編鳩巢文集卷之十三、鑒定便覽等)

河口靜齋、名は子深、字は穆仲、一說に名は光遠、字は子深、通稱は三八、靜齋は其號なり、又苧山と號す、江戶の人、川越侯に仕ふ、寶曆四年十二月十六日を以て病歿す、享年五十二、麻布六本木の善學寺に葬る、著す所斯

文源流一卷、靜齋筆記一卷等あり溫知叢書第三編に收載せり、別に靜齋文稿の著ありといふ、門人植木筑峯、近藤西涯、岩瀨華沼、及び伊東好義齋最も世に聞ゆ、(鑒定便覽、名人忌辰錄、諸家人物誌)

伊東澹齋、名は貞、字は知量、通稱は貞右衛門、長門國豐浦の人、好義齋の養子なり、晚年悠哉と號す、明和元年九月廿一日を以て歿す、享年六十六、(一說に七十一、又一說に五十餘)著す所性理節要鈔あり、澹齋の功は鳩巢の文集及び經說を編纂せしにあり、文集中前篇は奚疑の編輯に係ると雖も、之れを上木せしは澹齋なり、補遺と後編とは蘭林之れを刊行せんとせしも、不幸疾に罹り、復た起つ能はざるを自覺し、澹齋を召び囑するに彼れが志を繼ぎ、此事を成すを以てす、澹齋乃ち補遺と後編とを編輯して之れを世に公にせり、(文集叙記、續諸家人物誌、鑒定便覽)

淺岡芳所、名は朝、字は之蓂、一の字は子喜、小字は喜藏芳所は其號なり武州の人、河越侯に仕へて儒官となる、明和中に歿す、著はす所經說及び

文章ありといふ、或は曰く、彼れ業を靜齋に受くと、又補遺鳩巣文集の叙によれば、澹齋の門人なるが如し、姑く疑を存す、(鑒定便覽、續諸家人物誌、慶長以來諸家著述目錄)

奥村修運、字は子復、通稱は源左衞門、祿三千石、

青地齊賢、字は伯孜、一の字は伯强、通稱は藏人、兼山と號す、祿千石、著はす所兼山麗澤秘策八卷あり、

青地禮幹、字は貞叔、通稱は藤太夫、齊賢の弟、文集の補遺(卷之一)に贈青地貞叔序あり云く、

伯や吾れ其縝栗にして齊莊なるを愛す、叔や吾れ其恢弘にして疎通なるを愛す、禮を好み、義に近づき、古道自ら處り、卓然として以て自ら流俗に異なることあるものに至りては、二君之れを同うす、皆一國の選なり、

小谷繼成、字は勸善、一の字は勉善、通稱は伊兵衞、

以上四人は本と羽黒牧野の門人なりしも、牧野歿して後、皆鳩巣に師

事せり、(斯文源流を參看せよ)

河口仲賓、白河侯に仕ふ、

兒玉圖南、薩摩の人、文集の後編(卷之五)に送兒玉圖南の詩あり云く、

　征旆行々去不留、涼風蕭颯歲云秋、滄溟雲黑鯨吹浪、古渡月殘客喚舟、
　腰下泣龍鳴佩劍、驛邊立馬賦登樓、南中舊友如相問、爲道夢思感昔遊、

圖南の門人に山田君豹あり、補遺の跋文を作れり、

中根東里、名は若思、字は敬父、通稱は貞右衞門、東里は其號なり、伊豆下田の人、彼れ嘗て鳩巢に師事すと雖も、後又陽明學に轉ず、其事蹟及び學問は日本陽明學派之哲學(第二篇第六章)に詳なり、

第五　鳩巣關係書類

鳩巣先生行狀 大地玄昌撰

翁草卷四十一に收載せり

文集叙記 伊東澹齋著

前篇鳩巣文集の首めに載する所の澹齋が叙は、鳩巣の事蹟を記述し、併せて昌言が經歷に及ぶ、以て參考に資すべきものなり、

鳩巣先生年譜

鳩巣傳

鳩巣先生墓誌 大地昌言撰

鳩巣集外纂卷之下に收載せり、

先哲叢談〔卷之五〕

近世叢語〔卷之三〕

日本詩史〔卷之四〕

北窓瑣談(後篇)
木門十四家詩集
儒學源流
日本諸家人物誌
近代名家著述目錄
瀨田問答
　溫知叢書中にこれを收載せり、
大日本史料原稿
儒林傳　澁井太室著
野史(第二百五十八卷)
甘雨亭叢書
大日本人名辭書
松陰快談　長野豐山著
鑒定便覽

近世大儒列傳（上卷）
日本名家人名詳傳（下）
日本之哲學者（英文）ノックス氏著
事實文編（卷之七）

人胸中各有箇聖人。只自信不及。都自埋倒了。

王陽明

第二篇　惺窩系統以外の朱子學派

叙論

藤原惺窩が一たび朱子學を京師に唱へてより其源流滾々として盡くることなく、僅かに半世紀を經るに及んで、已に我邦に於ける思想の一大潮流となれり、其脉絡關係いかんは、大要第一篇中に叙述せり、然るに惺窩系統以外に於て單獨に朱子學を唱ふるもの往々之れあり、其重もなるものは中村惕齋、藤井懶齋、貝原益軒の徒にして、是等は皆木下順菴雨森芳洲、室鳩巢等と大抵同時代に出でしものなり、惕齋、懶齋、益軒の徒は其數多の著書によりて當時名敎を裨補せしこと少しとせざるなり、懶齋は筑後の人、嘗て醫術を以て久留米侯に仕へしも、或る時一患者を療し、其起たざるを見、自ら思へらく、治を誤りて此に至ると、乃ち慨然匕を投じ醫術に斷念し、儒を以て家を成す、其學、紫陽を主とし、米川操軒及び中村惕齋と友たり、著はす所本朝孝子傳、國朝諫諍錄の類、皆志、名敎を

裨補するにあるもの丶如し、然れども彼れが一家の學說として見るべきものあるなし、故に今惕齋と益軒とを擧げて以て惺窩系統以外の朱子學派となす、



第一章　中村惕齋

第一　事蹟

惕齋名は之欽、字は敬甫、小字は仲二郎、或は云ふ、七左衞門と稱すと、惕齋は其號なり、京師の呉服屋の子なり、彼れ童子たりし時より身を持すること厚重にして、嬉戯を好まず、長ずるに及んで唯〻篤實を務め、浮靡を喜ばず、彼れが家本と市中にありしも、惕齋其喧囂を厭ひ、遷りて閑靜の地に居り、日に門を杜ぢて心を大業に潜め、學を論じ文を談ずるの外は、敢て人と交際をなさず、獨逸語に所謂「プリヷート、ゲレールテル」として極めて單調なる生活を成せるもの丶如し、或は彼れを以て阿州侯の儒臣とすれども、其眞否疑なしとせず、彼れ元祿十五年七月廿六日を以て病歿す、享年七十四、洛北の一條寺村圓光寺に葬る、著はす所講學筆記、四書鈔說、五經筆記、四書筆記、讀易要領、三器通考、三器考略、愼終疏節、追遠疏節、姬鏡、本朝學制考等凡そ五十餘種あり、亦朱子學派中の一大家といふを

得べきなり、

惕齋幼年の時句讀の師ありしと雖も、朱子學に就いては別に常師あらざりしが如し、恐くば獨學自修によりて得る所ありしものならん、名人忌辰錄(上卷)に惕齋を以て貝原益軒の門人とすれども、信憑すべき根據あるにあらず、又澁井太室の儒林傳に惕齋を以て山崎闇齋の門人とするも、亦全く誤聞に出づるものなり、

惕齋、博物洽聞なりと雖も、德行を修め、名敎を裨くるを以て、己れが任となし、純然たる道學先生の態度あり、雨森芳洲曰く、

余童丱の時、米川儀兵衞、中村迪齋、藤井蘭齋、倶に經學を以て京師に敎授す、信從のもの衆し、(橘窓茶話卷中)

迪齋は惕齋の誤なり、思ふに惕齋在世の時、伊藤仁齋古學を京師に主張し、一世を振撼するの概あり、此時に當りて固く朱子學を守りて仁齋に對するもの、京師に惕齋及び米川操軒の徒あるのみ、又曰く、

余少歳の時、明經を以て志となす、中村米川の諸儒の如き固より博學、

を以て之れに名づくべからず、然れども其身を立つる卓偉、自ら修むる謹嚴、亦以て篤行の郷先生となすべし、今は則ち斯人なし、(同卷中)

室鳩巢又惕齋の人物を論じて曰く、

聞く、洛下の宿儒中村惕齋先生なるものあり、隱居して經を家に講ず、一に皆朱子を崇尙し、其五經論孟等の書に於ける、皆筆記あり、篤學の人なり、其後惕齋已に沒し、京師の學、大に變ずること今に三十年、猶ほ人をして先輩の風を感慕して自ら已まざらしむ、(中村氏五經筆記序)

又曰く、

惕齋京師にあり、其學行頗る人の爲めに信ぜらる、(答牧野先生書)

又曰く、

惕齋一生程朱を崇信し、始終變はらず、近世の醇儒者といふべし、(與和角淸左衞門書)

鳩巢は此の如く屢々惕齋の人格と學問とを稱揚せり、是れ一は其同じく宋學を崇奉するに由ると雖も亦以て當時惕齋の儒林に名望ありしを

察知すべきなり、然れども惕齋世の子弟を敎授するを好まず、退いて獨り學を講じ、道を樂み、閉戸先生を以て自ら擬し、頗る山中獨善の風あり、是を以て鳩巢其所爲を非議して曰く、

惕齋隱居して人に接することを惡む、來りて贄を執るものあれば、固く辭して見ず、彼れ志を求め、獨り善くせんと欲す、故に此の如し、亦一の道なり、然れども朋來たるものは、君子の樂む所、麗澤の益、相觀るの善、古より學に志あるもの、皆之れを急にす、今物を絶ち、人を拒ぐに偏にして遁思を以て自ら遂ぐれば、則ち罪を大中至正の敎に得て、自ら知らざるなり(答遊佐次郎左衛門第二書)

惕齋は實に市隱と稱すべき生活を成せり、故に門人の如きは殆んどあるなし、門人としては獨り增田立齋あるのみ、立齋名は謙之、字は益夫、阿州の人、講學筆記の序及び惕齋が行狀を作れり、先哲叢談(卷之四)に云く、

惕齋、伊藤仁齋より少きこと二歲、頡頏名を齊うす、當世稱して曰く、惕齋兄たり難く、仁齋弟たり難しと、

此れに由りて之れを觀れば、惕齋退隱して人と爭はずと雖も、其名聲の世に高かりしこと推して知るべきなり、惕齋は蓋し鳩巢の徒なり、然れども之れを鳩巢に比すれば、一層消極的にして、又反りて粹然己れを持するの態度あるが如し、閑散餘錄〔卷之上〕に云く、

中村惕齋は忠信篤實なる學者なり、旁ら樂を好んで音律に精し、朱子のいふ處、もし孔子の道に戾らば、朱子に欺かれたりと思ふて、朱子に隨はんと抔といへるを見れば、其人品の溫なること想ひやられたり、

又彼れが商家に生長しながらいかに財利に淡泊なりしかは、如下の事實によりて之れを知るべきなり、先哲像傳〔卷三〕に云く、

嘗て家の手代某、引負の事ありて、親戚の人々其罪を、官に、訟へんと、議る、惕齋獨り許さず、從容として諭して言ふ、吾財を以て人を死地に陷る、甚だ不慈なりと、また意とせず、これより家產零落に及ぶといへども、志いよ〳〵高く、性理の學を修め、禮義を踐行して、篤行先生と稱せらる、

又彼れが他人に對して如何に深厚なる同情を有せしかは、思齋漫錄(上卷)に叙述せる逸事によつて明かなり、云く、

ある時ほど近き家に、火を失しけるに、をりふし惕齋の家、風下なりしかば、親戚門人驚きて馳せ集りしに、忽ち風ふきかはり、風上となり、今は類燒の憂なしと衆みな心を安んじ相賀するに、惕齋ひとり却て憂ふる色甚しければ、人々あやしみ、其故をとふに、其火もとの人々、今まで風上なりとて、心を安んじ、油斷の所、俄に風かはりし事なれば、喜忽ち引きかはりて、さぞ周章し、措き所を失はるべしと、思ひやりて憂ふるなりと答へられしにより、集れる人々感じて、いそぎ火もとに馳せ行き、防ぎたすけしと、ある人かたられし、

尚ほ又惕齋の人格いかんは彼れが自像の題詩によりて彷彿するを得べし、云く、

利名雙字胡爲者、億萬民生倶策驅、耆耋弃材慚世計、考槃林曲永言娛、

彼れが超然として名利以外に脫出し、一生學者としての清節を持せし

は、他人の容易に企及する能はざる所なり、又彼れが女子教育に裨補する所あらんを欲し、姫鏡の一書を著はしたるが如き、其功績決して鮮少なりとせざるなり、

汝果して最高のもの、最大のものを覓むるか、植物之れを汝に教へん、然れども植物の之れをなすや意志なし、汝は意志を以て之れをなせよ、即ち是れなり、

シルレル

第二　學說

惕齋が學說として紹介すべきは、主として講學筆記にあり、講學筆記は寧ろ語錄の如きものにして、毫も秩序的に學說を立てたるものにあらず、然れども言々句々、彼れが躬行實踐の餘に成る所にして、後世の學者を裨益する所少しとせず、就中仁愛、存養省察、死生等に關する見解の如きは、殊に趣味あるを覺ゆ、因りて左に之れを擧ぐ、

(一)　仁愛の說

吾儕學をすること、私に克ち己れを推すの功に於て少しく試みる所なきにあらずと雖も、而も未だ其力を得ず、所謂擴充といふことに於ては、則ち未だ嘗て其旨趣いかんを知らず、竊に嘗て之れを思ふに、是れ未だ仁者の大公博愛の意味氣象を知らざるに由るなり、之れを知らざる所以のものは、又心を立つるの大本、未だ其道を得ざるに由るなり、心を立つるの道いかん、按ずるに、程子言へるあり、曰く、人只自ら私して自家の

軀殼上頭を以て意を起すが爲めの故に、道理を看得て佗底を小にし了はる、這の身を放ち來たりて、都て萬物の中に在りて一例に看れば、大小大活快なりと、今是れに由りて之れを論ずるときは、凡そ事に學に從つて道を求め、德を修めんと欲するものは、須らく先づ張子の所謂天地の爲めに心を立つといふを以て學ぶ所の頭腦本領となすべし、然らざれば則ち其心の注ぐ所、皆吾軀殼上より發し來たり、私欲の由りて生ずる所も、亦其源を同うす、乃ち此心を以て之れに克たんと欲するは、猶ほ家人相爭ふに之れを管するものなきがごとし、是を以て纔に私欲を禁ずれども、又隨つて生ず、我れ元と人と其利を共にし、其善を共にせんと欲するの心なし、苟も人と共にするの心なきときは、則ちたゞ獨り己れを利することを要するのみならずして、己れが是とすることを視て、亦囂々として自ら足れりとす、猶ほ終日訟庭にありて、人と對頭し、曲直を爭辨して、己れを伸べ、人を伏するときは、悦んで以て志を得たりとするものゝごとし、是を以て一時己れを推して人に及ぼすと雖も、而もしばら

くありて復た物我相隔つるを見る、今廓然として其軀殼を私するの心を忘れて、一に天地の爲めに箇の心を立て定め、己れを以て天地間の一人となして、其是非利害に於ける、己れが自ら知るの實なるを以て人を處し、人、己れを視るの公なるを以て自ら處して、愛惡僻む所なきときは、其心の發用、殆んど彼の造物者と上下流を同うす、凡そ事に應じ、物に接するの際、我仁愛の被る所にあらずといふことなし、乃ち人情の欲すべき所のものと雖も、皆公共の心を以て之れを視るときは、則ち眞情自ら發見して、之れに處すること、各其宜しき所を失はず、私情自ら縮退して、之れに克つこと、亦其力を容れ易し、未だ復萌の念あるを免れずと雖も、亦以て漸くに之れを遏むべし、其己れを推して人に及ぼすものも、亦中心油然として人と其利を共にし、其善を共にすることを樂む、豈に其惟し去ること難からずして、又能く後に保つことを得ざらんや、其れ能く此の若くなるときは、則ち我惻隱の情、類を以て之れを擴めて其本量に充つべし、夫れ學をなすの大本既に立つときは、則ち善端の發見、皆此れ

に由りて擴充して以て己れに全うすべし、又此れに由りて推し去りて、以て人に及ぼすべし、其不善なるものも、亦此れに由りて克治して、以て天理に復るべし、又此れに由りて己れを盡くし、實を履み、言行相顧みるときは、則ち以て誠を己れに存して、物を感動すべし、百行萬事、皆此れに由りて進修して、以て吾仁を全うするに庶かるべし、

蓋し人、天地生物の理を得て以て生ず、而して生理乃ち心に具はる、此れ便ち是心の德、所謂仁なり、故に人心物を愛するの情、便ち是れ仁の發用人の生脉にして、亦其心を用ふること、由りて公なる所の主なり、若し此理を明かにせずして、徒に直を秉り、平を持して、以て物我を一にせば、則ち公に似て公にあらず、只是れ絞直のみ、其弊或は父の罪を訐いて、以て直とするものあり、竟に奔々蕩々として、以て都て仁と交渉なきに至る、此れ惟私なきを以て公とすることを知りて、而して人心本然の生意を以て主とすることを知らざるが故なり、竊に謂へらく、人身は是れ生氣の會にして、心は是れ生理の府、若し能く吾身を放ちて同じく天下人の

間に置き、吾心の本然の德を以て天地萬物に體するときは、則ち外、物我の私を容れず、內、形氣の欲を生せず、普博公平の中、自然に惻怛慈愛の意あり、乃ち仁たる所以なり、云云、凡そ君子のなす所、常に生機を存す、云云、凡そ小人のなす所、皆殺機に歸す、故に愛を施すことありと雖も、而も愛し得て公ならず、是を以て喜ぶもの未だ饜かずして、怨みるもの隨つて至る、且つ往々其愛する所以のもの、適(まさ)に以て之れを害するに足る、況や其私する所に厚きときは、則ちこれを公に奪ふことあるを免れず、是を以て其愛亦殺に歸するのみ、凡そ四端の善、感に隨つて應ずと雖も、然れども皆惻隱の情に由りて、以て其頭を起す、便ち是れ天地の生機、少しも息むことなきものなり、學者切に戒めて生機を擊つこと勿れ、須らく生機の發動によりて皆擴めて之れを充つべし、此れ乃ち仁を求むるの要なり、這箇の工夫、豈に人と是非曲直を爭ふことを知りて、軀殼の外、恝(かい)然として憂ふる所なきもの、能く與にする所ならんや、夫れ天地の大德を生といひ、人心の全德を仁といふ、其理一なり、聖人の天に繼いで人を

治むる所以の道、學者の義に則り、己れを修むる所以の法、豈に他あらん
や、仁を尙ぶのみ、

程子曰く、心は腔子裏にあらんことを要すと、又曰く、滿腔子是れ惻隱の
心と、又曰く、仁者は天地萬物を以て一體となす、己れにあらずといふこ
となきなりと、今此三言を看得て、其旨相串き、渾て一片となさんことを
要すれば、亦益あるべきに似たり、蓋し仁は是れ天地、物を生ずる所以の
理、人此生理を得て以て生ず、心は乃ち此生理を具ふる所以にして、人の
由りて生じ、由りて活する所のものなり、故に直に人心を以て仁となし、
心の德を以て仁を訓す、朱子の所謂仁は、是れ此心の德、才かに此心を存
し得るときは、即ち仁ならざるものなしと、亦即ち是れなり、人能く常に
箇の心を收めて腔子裏にあるときは、則ち心、其所に安んずることを得
て、腔子裏に充滿す、乃ち其充滿する所のもの、皆吾惻隱の由りて發する
所なり、滿ち得ること十分に至るときは、則ち觸れて應ずる所、思ふて及
ぶ所、細となく、大となく、皆惻隱の情によりて以て發見流行す、其れ此の

如くなるときは、則ち天地の大、萬物の衆と雖も、吾仁の包ぬる所にあらざるなく、吾慈愛の貫く所にあらざるなし、豈に以て一體とするものにあらずや、若し天下の事物に於て慈愛惻怛の情、未だ應せず、未だ及ばざる所のものあらば、是れ吾本心滿腔子裏、未だ十分ならざるの故なり、何ぞ能く天地萬物を以て一體とすることを得ん、然れども其未だ腔子に滿たざる所以のものは、乃ち只箇の心或は物の爲めに誘はれて、放逸して外にあり、或は物の爲めに繫がれて、其鄉に安んぜざるに由る、故に學者能く敬を持し、獨を愼んで、以て物欲を克ち去りて箇の心を操存して、常に腔子裏にあるときは、則ち心、養ふ所を得て、生理滋息し、惻隱の由りて發する所、漸く以て滿腔子十分に至るべし、愚程子の三言を看得て、相串いて一となさんと要するもの、其意此の如し、程子の所謂滿腔子是れ惻隱の心とは、只是れ人身の生氣を以て仁の體段を語るに過ぎず、蓋し人の一身、生氣の貫かずといふことなし、故に觸るゝ處必ず、痛癢を覺ゆ、人此れによりて滿天地此理本と充塞し、生氣徧く貫通することを知り

て、強ひて恕して、以て仁に至るを求めんと欲するのみ、然れども常人の心は、人の痛痒己れが身に關せず、若し人心の德、本と人己を隔てざるに由りて之れを觀るときは、則ち所謂木頑不仁なるものなり、一身の痛癢、相貫かざるは、風邪之れを障ふるが爲めなり、人己の憂歡、相關せざるは、私欲之れを隔つるが爲めなり、身體の不仁、未だ廢用に至らずと雖も、而も必ず之れを患へて、以て療安を求む、心術の不仁は、則ち我が人たる所以のものを亡ぼせども、而も之れを患ふることを知らず、哀むべきかな、故に愚又嘗て謂へらく、人、生を好み、死を惡まざるものなし、利に趨り害を避けざるものなし、一己を以て之れを言へば、私意のみ、然れども實に是れ人心本然の德、愛の理によりて發するものなり、

蓋し天、萬物を生成するの外、他心なし、而して人の道とする所以のもの、一に其生成の功を賛するにあらずといふことなし、但し其親を親として、民を仁(あは)れみ、民を仁んで物を愛(いつく)しむ、施す所緩急の序あるのみ、生とは、天の仁心なり、仁とは、人の生道なり、惟仁のみ以て天德に配すべきとき

は、則ち至大なり、至難なり、而して其由りて出づる所の源は、卽ち我心にあり、所謂仁は心德なり、其之れを行ふの術も、亦獨り己れが心を盡して、以て之れを人に推すにあるのみ、則ち亦至近なり、至易なり、然れども擴めて之れを充つるときは、則ち六合に彌り、萬物を貫く、是れ聖人の道たる所以なり、

(二)　存養省察の說

朱子常に學をするの要を擧げて人に示すこと涵養、致知、力行にあり、而して三つのものゝ序、乃ち涵養を頭となし、致知之れに次ぎ、力行又之れに次ぐ、凡そ書を讀み、理を窮むるの功、固より涵養を以て本となす、然れども見聞講討の積、淺深ありと雖も、皆分に隨つて以て開明する所あり、明かなる所既に多きときは、則ち又相照して以て進むことを得、若し夫れ躬行實踐の工夫は、卽ち常に其進み難うして退き易きを患ふ、特に其賴りて進む所のものは、專ら涵養の功を主として、其常に存して失はざる所以は、則ち又省察の力にあり、故に中庸の首章、戒懼愼獨を以て道に

體するの要となす、戒懼は存養なり、愼獨は省察なり、自ら修むるの士、必ず此兩端を以て並に其功を施して、須臾くも忘るべからざらんと欲す、今嘗みに二者の名義によりて其略を論じて曰く、所謂存養とは何ぞや、此心を操存して之れを涵養するの謂ひなり、蓋し心の體たる、本と靜かにして、天理完く具はる、心を操りて之れを存するときは、則ち湛然の靜體、失はずして、天理と涵泳す、滋息長養を得る所以なり、其功を用ふるの法は、此心を收斂して、之れを純一にし、之れを淸虛にし、以て常に囧々惺々ならしむ、是れ固に內に向つて之れを存する所以なり、衣冠整齊に、容貌嚴肅に、門を出ては賓の如く、事を承けては祭るが如きの類の如き、亦皆外の恭敬に由りて、其內を養ふ所以なり、動靜相含み、表裏交〻正しきときは、是れ存養の全功たり、蓋し其統體の工夫たるを以ての故に、體用を包ね、動靜を貫く、而して又省察の地たる所以なり、且つ存養の要は、其成熟の效を見るにあり、若し養ふて熟せざるときは、養を貴ぶ所なし、然れども其熟せざる所以のものは、又其功を用ふることの間斷あるに由

りてなり、夫れ出入時なうして、其鄕を知ることなきものは、心なり、其機の繫る所、至危にして測るべからず、故に操らざれば、之れを舍つるとなし、存せざれば、之れを亡ぼすとなす、其舍てゝ顧みず、亡ぼして尋ねざるが若きは、亦甚だしからずや、云云、人心既に養ふ所あるときは、其善を擴充し、其怨を推し去るも、亦皆力を資る所あり、靈根、滋息を得るときは、知識啓發して、耳目聰明なり、故に理を窮め、知を致すの功、亦由りて進むことを得、格物愈〻精しきときは、涵養愈〻熟す、故に先儒謂へらく、此二事互に相發すと、若し存養の功、深く造るときは、至密、屋漏の地と雖も、亦恥づる所なく、至靜未だ睹聞せざるの時と雖も、亦戒懼する所を忘れず、是の如くなるときは、則ち至靜至密の中、自ら烱然として昧からざるものありて、頑冥に陷らず、乃ち能く靜中の動を存す、故に其發するに及んでや、喜怒哀樂、皆節に中ることを得、是を以て能く中和の德を致して、天地位し、萬物育するに至る、是れ聖學の極功なり、所謂省察とは何ぞや、自ら警省檢察する所あるなり、專ら發用に厲して、之れを施すこと將に動かんと

するの始めにあり、存養の間に備ふる所以なり、云云、人心の體、未だ始めより靜ならずんばあらず、但し其用に發するもの、靜によりて動くときは、正たり、動によりて動くときは、妄たり、是れ人の常に動に失する所以なり、故に聖人靜を主として、人極を立つ、其能く化育を贊して、天地に參はる所以のものも、亦茲にあるなり、蓋し敬に居て以て心を存するは、固に其靜體を涵養する所以なり、省察の功、動端に屬すと雖も、然れども內心の存否を察して、以て提撕收斂の敬を興し、外身の應接を察して、以て是非正偏の幾を審にし、或は事既に過ぎて、其後に滯る所を察す、察するときは、則ち心止まりて靜かなり、靜かなれば、欲退いて理見はる、故に凡そ事必ず心一たび靜かにして、乃ち之れに應ずれば、斯に妄動を免る、卽ち是れ此心をして其動中の靜を失はざらしむる所以なり、苟も一時の察せざるあらば、其主宰を失ふて、以て此身を檢することなし、一念の察せざるあらば、其權度を失ふて、應接其正を得ず、彼の存養を緝繼し、私欲を克治するの功、亦並に其察せざる所に廢す、若し省察の功、其精を致すと

きは、視聽言動、一も察せざるものあるなし、乃ち之れを羹に見、之れを牆に見、其前に參はり、衡に倚るを見るに至るときは、道理、心目と常に相依りて離れず、豈に惟、念々にして省し、事々にして察するのみならんや、其れ能く此の如くなるときは、存察並に間斷なうして、其日に就り月に將す、むの效窮むべからず、是れに就いて夫の欲に克つこと、猶ほ紅爐上一點の雪の如きのみ、原ぬるに夫れ理は是心の蘊にして、仁は是心の德なり、敬は心を操りて仁に體する所以の要なり、存養の功は全く敬を主とするによる、而うして省察克治も亦皆敬を以て本となす、察して之れに克つも、其功亦存養に歸す、蓋し理は本心の固有にして、之れを害するものは、私欲なり、故に其理を存して、以て心を養はんと欲するもの、先づ理欲を察して、其欲を克ち去らずんばあるべからず、理常に存するときは、則ち心の德周流して、慈愛曁ばざる所なし、乃ち以て仁を語るべし、今學者其心を立つること、當に仁を求むるを以て本となすべし、其功を用ふること、當に存察を以て要となすべし、立心用功の二者並び行はれて、猶ほ

未だ其效を得ざるときは、亦當に只自ら其之れをすることの、未だ着實ならず、且つ其未だ備に困勉の味を嘗めざることを咎むべきのみ、豈に又他術あらんや、

(三) 死生の説

既に其當に死すべきを見て、自ら許すに死を以てし、再び深く之れを察するときは、又其未だ死すべからざるの義あるを疑ふ、然れども苟難過高の人、是に於て未だ其是否を決せずして、遽に死に就くときは、恐くば義未だ正しからずして、反りて其勇を害するものあらん、若し理既に定まりて、而して後死に就くときは、死に果せるにあらずや、嗚呼死生は大事なり、遺體を奉行して之れを敬せざるときは、毀傷すら且つ不孝なり、況んや性を滅するをや、其死果して是なるときは、則ち義正しく勇全うして、遺體を辱めず、乃ち孝たり、其死或は非なるときは、則ち義未だ正しからず、勇未だ全からずして、遺體を愼まず、乃ち不孝たり、二つのもの疑似の間にありて之れを辨ずること審ならざれば、相違ふこと霄壤す、死

して過ぎたるは、復た改むべからず、事既に迫まりては、決せずんばあるべからず、明哲の君子にあらざるよりは、孰れか能く眩惑せざらん、云云、若し一時の見る所、是非相半ばするときは、則ち其苟も生を貪らんよりは、寧ろ安んじて死に就かん、是れ又理の疑はしきもの、厚きに從ふの義なり、然れども其志趣常に此にあるときは、未だ時の宜しきに稱はずして、死を輕んずるの失あり故に事に臨んで義を擇ぶには、心を虛うするを以て至要となす、云云、

（四）　神明の說

天地の神、洋々浩々として、人をして齊明盛服して、以て祭禮につかふまつらしむ、然れども人心神速靈妙の至れるに比すれば、猶ほ汎然として未だ親切ならずとなす、且つ天監の明、幽暗と雖も、照らさずといふことなし、然れども人猶ほ視て以て彼是の別ありとなす、若し夫れ心の神明己れにありて自ら知るときは、則ち將に之れを奈何せんとするや、嗚呼畏るべくして罔ふべからざるものは、我心より嚴なるはなし、尊むべく

して忽にすべからざるものは我心より重きはなし、安んぞ、閃睒すべきの地、放置すべきの時あることを得んや、又安んぞ此身を以て須臾も卑下の地に居き、毫釐も穢濁の犯すに忍ぶべけんや、彼の自ら貪冒玷汚の事をなして、僥倖して以て免るゝことを要するものは、皆耳を掩ふて鈴を竊むの智のみ、故に道を學ぶもの、一言一動の微と雖も、亦我天君を尊奉するを忘れずして、而して後に操存の功、其力を得ることありて以て屋漏の耻ぢざるにちかゝるべし、云云、

是等惕齋の見解、毫も朱子學の範圍を出でずと雖も、大抵皆着實にして穩健、頗る其肯綮を得たるものあり、乃ち其篤學者なりしを察知すべし、彼れが言辭の間、近世的ならざるものあるの理由を以て其旨意の眞摯にして、且つ實行に益あることを忘るべきにあらざるなり、

第三　惕齋關係書類

惕齋行狀一卷　増田立齋撰
其概要は先哲像傳に轉載せり、
先哲叢談〔卷之四〕
先哲像傳〔卷三〕
近世叢語〔卷之五〕
諸家人物誌
鑒定便覽
橘窓茶話〔卷中〕
名人忌辰錄〔上卷〕
鳩巢文集
閑散餘錄〔卷之上〕
大日本人名辭書

日本名家人名詳傳
事實文編〔卷之十九〕
思齋漫錄〔上卷〕
近代名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
儒林傳　澁井太室著



第二章　貝原益軒

第一　事蹟　附貝原氏家系畧圖

貝原益軒は日本に於ける朱子學派中の巨擘なり、益軒、名は篤信、字は子誠、小字は久兵衞、益軒は其號なり、初め損軒と號す、後、或る人の勸めにより改めて益軒と號すといふ、筑前の人、黑田侯に仕ふ、益軒、寛永七年(紀元一六三〇)十一月十四日を以て福岡城中の官舍に生まる、父は利貞、寛齋と號す、黑田侯の醫官たり、偶〻存齋遺集を覽るに、左の詩あり、云く、

稱先考有美德

謙德平生不侮臣、外遇急難内常春、機心既盡無機事、安樂塲中自養眞、

此れに由りて之れを觀れば、寛齋人となり謙德ありて、自得する所ありしが如し、母は緒方氏、益軒は其第四男にして、三人の兄あり、長は家時、山三郎と稱す、其事蹟詳ならず、次は元瑞、存齋と號す、次は義質、樂軒と號す、存齋、樂軒共に學名あり、益軒幼より警敏にして殊質あり、甫め九歳にし

貝原益軒之肖像



て兄存齋に就いて書を讀み、多く暗誦を成す、年譜に曰く

先生深耽於讀書、雖然此時也家貧無書、村居無師、且梓行之書未多、故不能讀書籍、徒費時月而已、

と、益軒少時の苦學、以て想見すべきなり、然れども彼れの父兄能く文字を識るを以て或は字、或は詩、或は歌を學び、家庭敎育に於て殆んど備はらざる所なきが如し、彼れの父醫官たるを以て亦略醫書にも通ずるを得たり、彼れ後日に至りて養生の道を說くもの、其由りて來たる所あるを知るべきなり、年譜に又云く、

先生素崇浮屠、日誦佛敎、常念佛號、毎月當佛日、則素食拜佛堂、仲兄（存齋の事）告之以浮屠之非、一旦悟其過、而終身不好佛、自是始知聖人之道可尊、而深信之、

是れ實に彼れが十四歳の時の事なり、彼れが儒者たらんとするの徵候、已に十分に呈露するを知るべし、中年に及んで京師に講學す、然れども曾て常師あるなし、其後屢京師江戶福岡の間を往來し、又好んで各處に

旅行をなし、足跡殆んど海内に遍し、正德四年(即ち紀元一七一四)八月廿七日を以て家に病歿す、享年八十有五、荒津の金龍寺に葬る、辭世の歌あり、云く、

こしかたは、一夜ばかりの心地して、八十(やそぢ)あまりの夢を見しかな。

益軒の妻江崎氏、名は初、字は得生、東軒と號す、年僅に十七にして益軒に嫁す、時に益軒年三十九、能く東軒を敎育す、東軒遂に才德を成すを得たり、然れども益軒に先つこと一年にして病歿す、享年六十有二、東軒子なし、是を以て益軒初め樂軒の子好古(耻軒と號す、)を以て養子となす、然れども好古益軒に先ちて歿す、是を以て更に存齋の子重春を以て嗣子となす、」

益軒二十六歲の時、江戶に赴く、途上川崎の旅宿に於て祝髮し、柔齋と號す、蓋し醫たらんと欲するなり、然れども寬文八年に至り、復た束髮して久兵衞といふ、時に彼れ三十九歲なりき、是れより遂に一生を儒敎に委ぬるに至れり、

益軒初め陸王の學を好めり、然れども陳献章が學蔀通辨を讀むに及ん

て、遂に陸王の學を棄てゝ、純然朱子學派の人となれり、年譜に云く、
先生嘗て陸學を好み、且つ王陽明の書を玩讀し、數歳朱陸兼用の意あり、今年始めて學蔀通辨を讀み、遂に陸氏の非を悟り、盡く其舊學を棄てゝ純如たり、先生謂へらく、尙書論語は、是れ聖人の說く所、此れを以て陸王の說を正さば、則ち大に齟齬する所ありて、而して歸向する所大に異なるを覺ゆ、是れに由りて益〻濂洛關閩の正學を信じ、直に洙泗の流に泝らんと欲し、心を專らにし、志を致し、晝夜力め學んで懈らず、寢食を忘るゝに至る、

是れ彼れが三十六歳の時の事に係る、然れども晩年宋學に就いて疑ふ所あり、乃ち大疑錄二卷を著はし、其自ら見る所を叙述す、是れを彼れが最後の作となす、序文中に謂へるあり、云く、

篤信十四五歳より聖學に志あり、夙に宋儒の書を讀んで、敎く其說に於て之れを宗師す、復た嘗て大に疑ふ所あり、然れども愚昧の資、發明すること能はず、復た明師の質問すべきなし、近來老耄洊りに至り、益〻

惑を解く識見の力なく、思を覃うすること三十餘年なりと雖も、然れども獨り惑を抱いて未だ啓明すること能はず、以て終身の慊となす、此に於て姑く疑惑する所を記し、以て識者の開示を望むのみ、何ぞ敢て自ら是として先正と抗論すべけんや、

其謙讓の意、以て知るべきなり、

益軒博學多識にして著はす所百有餘種あり、皆世人を裨益するを以て志となす、故に經學に關するものゝ外は大抵皆國字を以て之れを著はし、一に其解し易く、入り易きを以て旨とせり、是を以て兒童走卒と雖も、亦能く其敎に與り聞くを得たり、益軒の社會敎育に大功あるもの、全く此に因由するを知るべきなり、愼思錄の末に附載せる自己編中に左の一節あり、云く、

或は曰く、吾子夙に經學に志あり、然り而して嘗て和漢名數等の小說を著はし、今復た方技猥陋の書を作る、此れ皆小道、泥むことを恐るゝの事、何ぞ蹭蹬たること此の如くなるや、世儒の姍笑を奈何せん、予之

れに答へて曰く、吾曹昊天極まりなきの恩を受くること他人に逾えたり、何を以て其德の萬一をいんや、經傳を解釋し、義理を發明するが如きは、古人作者、既に備はれり、之れを前修の書に求めて足れり、況や區々たる庸劣、豈に能く喙を其間に容れんや、別事又なすこと能はず、唯國字の小文字の衆庶と童稚とに助あるものを作爲して以て後輩を待たんと欲するのみ、庶幾くば民生日用に小補あらんと云ふこと爾り、嗚呼吾輩嘉穀を食ひ、白日を消し、生れて時に益なくんば、禽獸と同じく生く、便ち是れ天地の間の一蠹のみ、苟も民生に助あらば、方技の小道を執りて、世儒の誹議を受くと雖も、亦辭せざる所なり、

此れに由りて之れを觀れば、益軒の心事、以て諒とすべきなり、益軒は順庵、仁齋、徂徠等の如く、私塾を設けて子弟を敎授せず、蓋し其人となり謙遜にして敢て人の師たるを欲せざるなり、故に其直接の門人としては、東軒、耻軒等の外竹田春菴、香月牛山二人あるのみ、若し之れを彼の濟々たる多士を出たせる順菴、仁齋、徂徠等に比せば、其差亦甚だしからずや、

然れども社會敎育家として之れを論ずれば、德川氏三百年の間、益軒の右に出づるもの、一人もあるなし、益軒亦偉大の敎育家なるかな、

益軒年三十九にして近思錄備考を著はし、明年又小學備考を著はす、年譜に云く、

凡そ小學備考近思錄備考の世に行はるゝや、甚だ廣し、故に其後學を惠むの功、亦少からず、云云、小學註解の如きは、從前頗る多し、近思錄に至りては、未だ之れを詳說するものあらず、先生の備考出づるに至りて、則ち初學の此書を說くもの、始めて其逕庭を知る、此れに因りて興起するもの多し、嘗て人見友元の言を聞く、凡そ古昔本邦の先儒、述作する所多し、然れども經傳註釋を輯錄するもの、先生の小學近思錄備考を以て始めとなすといふ、

果して然らば、益軒の功、實に洪大なりとなす、然れども惕齋、鳩巢の徒、益軒と時代を同うす、經傳註釋は寧ろ當時世運の然らしむる所と見るを妥なりとす、竹田定直が撰に係る益軒の墓誌にも

近世興性理之學者先生爲始、

と云へり、然れども性理の學は惺窩羅山に始まるを以て、獨り益軒を以て其嚆矢となすを得ず、但益軒の如く深く宋學を攻究し、細に性理の說を發揮せしもの、未だ曾て之れあらざりしが如し、是れ彼れが功の決して埋沒すべからざる所なり、

益軒は少小より學を家庭に講じ、長ずるに及んで益力を硏鑽に用ひ、晚年に至るまで殆んど間斷なきの勉强をなせるが如し、年譜を見るに、彼れが二十九歲の處に

先生比年日夕力學則苦、或至通宵不寢、

と云ひ、又三十六歲の處に

晝夜力學不懈、至忘寢食、

と云へり、苦學以て想見すべきなり、又其著述の如きも、老いて益務めたるが如し、五十六十は言ふまでもなく、已に七十にして、和字解、日本釋名、及び三禮口訣を著はし、七十四にして筑前續風土記、點例及び和歌紀聞

を著はし、七十五にして菜譜を著はし、七十六にして鄙事記を著はし、七十九にして大和俗訓を著はし、八十一にして樂訓及び童子訓を著はし、八十二にして五常訓及び家道訓を著はし、八十三にして心畫規範及び自娯集を著はし、八十四にして養生訓及び日光名所記を著はし、八十五にして愼思錄及び大疑錄を著はす、其精力の多大なる、眞に人をして驚嘆せしむるに足るものあり、益軒自ら其勉强して休まざることを敘して曰く、

許白雲曰く、吾れ大に過ぎたることあるにあらず、唯學をなすの功、間斷なきのみ、篤信も亦謂ふ、吾が不肖固より一事の人に如くものなし、唯書を讀むの功、老に至りて勉勵休まず、老耋の年、衰憊の至りと雖も、亦敢て間斷することなきのみ、然れども古語に云く、家に弊帚ありて、之れを千金に享つと、是れ以て輕薄の人、自ら小しく才能あるに矜るに喩ゆべきなり、吾れ此語を思ふて、敢て勉强して休まざるを以て自ら人に敖らず、(自己編)

又曰く、

篤信が性を稟くるや、信に庸劣、是故に文學の事、一も能くする所なし、百事皆拙陋、人に及ぶこと能はざること遠し、唯〻恐くば勤苦して書を讀み、恭默して道を思ふの二事、以て人に及ぶことあるのみ、古語に云く、愚者も千慮すれば、必ず一得あり、蓋し區々辛苦思繹して、萬一を覬覦するもの、其れ或は此語に庶幾からん(同上)

益軒萬事に於て謙遜を極むと雖も、唯〻勤苦して書を讀むと恭默して道を思ふとの二事に於ては、敢て人に讓らざることを斷言して憚らざるなり、此れに由りて之れを觀れば、其休むことなきの勉強、優に餘人を凌ぐものありしを察知すべきなり、

更に又益軒が謙遜の德いかんを考察せば、其決して餘人の及ぶ所にあらざるを了知せん、近世名家書畫談(下卷)に云く、

貝原先生遺事あり、聞くまゝに左に錄す、先生京師へ上りし時、道中湊川を過ぎ、楠公の昔を追想し、折しも田間に一彈丸の如き小高き所あ

るを恠み見て傍なる老農にこれを問はれしに答へて云く、これは往古より口碑に傳へ楠公討死し給ひし時、其遺骸をこゝに瘞めし所なりとて、今に到りても御覽の如く、畦畝の間この所は除き耕やしまうさずと語る、先生この言をきゝ、不覺涙下り、慨然としておもへらく、公の忠臣なること古今に比なく、芳名靑史に垂れ、千歳不朽なりといへども、其窀穸の所、今かく荊棘に沒し、片石の表する無きはいかんぞや、かくては後來ものの知らぬ牧豎田夫の爲めに此所いかゞなるべきや、吾輩讀書の者、聊義理をも辨へ、此事を聞くまゝにいかで過ぐべき、責めては公の梗概を片石に記し、是れを表してあらば、往來の人も自然と遺跡の存するをも知り、又牧豎田夫の唐突をも免れんと思ひ、其日は先生兵庫の商賈某の家に宿を投ず、（某は兵庫の富める者にて福岡侯大阪廻米等の國用を聞く者なり、）此夜先生宿主人に旅中の事ども物語り、湊川にて所見所聞、並に自らの趣意にも及びければ、主人欣然として云く、扨も難有思召を聞くもの哉、鄙人數代此所に住居し、畢竟其古ならば鄙人等も楠公の民な

り、物換り星移り、公の瘞まりし所さへかくなり行くことは、嘆かはしきことどもなり、鄙人は數代此所にて先生御國の御用をも蒙り、右をもて多口の家眷を安穩にいたし居候へば、先生此度の御趣意に付、力を出だしまゐらすべし、況や公の塋域、先生御筆にて題はるゝこと、鄙人も又望む所なり、先生京師におはするうち碑文を作り給ひ、歸途には必ず賜はれかし、碑式は其上御指圖を得て立石の事、速に成就申さんとて、殊に喜びけり、無程先生京師にて碑文を作り、約の如く歸途に主人へ贈りければ、おしいたゞき、猶ほ御歸國には碑式委しく御認め賜はれかしとて、匆々に別れけり、其後、先生の書來りければ、主人取りあへず、碑式此中にあるべしとて開き見るに、左にはあらで先生の言ひおこせしは、碑文を返さるべしとばかりみえたり、宿主人不審ながら、或は改竄し給ふこともやあらんと、頓て返しやり、再びこれを待つに、又程もなく書來りて云く、我等先きに湊川の見聞する處をもて、一旦さは思ひしままに、匆卒にも貴殿に其言漏らしはべりぬ、退いて考

ふるに、楠公の精忠、千古に亘り、日月と光を爭ふ、かゝる希代の忠臣を碌々たる書生の拙文もてこれに表せんこと、誠に己れの分を知らざるわざなり、今是を心に恥ぢ、不覺惣身汗を流せり、かゝれば此事思ひ止みぬ、返す〴〵も貴殿へ倉忽の言を申したりと言ひおこせりとなん、實に先生の德行、此一事にてもしるべし、

と、偶〻自娯集〔卷之三〕を覽るに、楠公墓記あり、云く、

今茲暮春、余京師より發して將に故里に歸らんとす、偶〻西風に阻てられ、舟を攝津州の兵庫に泊む、衣を攝して船より下り、陸行して湊川の北に到り、公の墓を見る、墓は平田の中にあり、榛莽蕪穢、埏隧なく、墳封なく、又碑碣なし、塋上唯〻松梅二株あり、悲風蕭々として、春草青々たり、余歔欷すること良〻久し、低回して去ること能はず、忽ち謂ふ、今碑石なきこと此の如し、恐くば後世、或は公の墓たることを認めず、古墓犂じて田となり、松梅摧かれて薪とならんも、亦未だ知るべからざるを、是に於て兵庫の館人繪屋氏に託して、小石碑を其塋上に建てんと欲す、

頗る彼れと營計をなして去る、予鄉に歸りて自ら顧念す、公の偉烈洪名、區々の揄揚を待たずして明けし、若し今彼の德業を稱述して之れを石碑に勒せんと欲せば、文章に老いたるものにあらざれば、則ち能はざるなり、且つ吾儕微賤にして石碑を他邦に立つるは、僭率の罪を逃るゝこと能はざるを恐る、終に改め悔いて其事を廢む、且つ書を兵庫の館人に送り、彫刻を輟めしむ、然れども感歎の餘、默止すること能はず、頗る其懷ふ所を記すと云ふこと爾り、

此れに由りて之れを觀れば、近世名家書畫談に記する所は事實なりしなり、其後水戶の義公、楠公の爲めに碑を立て、碑面に「嗚呼忠臣楠子之墓」の八字を刻し、其背面に朱舜水の文を刻せり、今にして之れを考ふるに、舜水は一種奇節のありし人なるに相違なきも、本と是れ亡國の遺臣にして且つ其節も亦全しといふべからず、彼れ二君に仕へずとの意にて日本に逃れ來たりしならば、何故に水戶侯に事へて、祿を受けしか、かゝる支那人をして楠公の碑文を撰ましむるよりは之れを益軒の如き高

德清節の日本人に囑するを逈に優れりとなす、又近世畸人傳〔卷之一〕に云く、

先生歸國の海路にて、同船數輩、各〻姓名をとひきくにも及ばず、何となき物がたりどもをして、日を重ねしに、其中一人の若き男、人々に對して經書を講ず、先生例の恭々しく默して是れを聽いて、一言是非を論ぜず、船着岸して、各〻始めて其鄕里をあかし、再會を契りて別るゝに臨み、先生も、吾れは貝原久兵衞と申すものなりと名のらるるを聞いて、彼の若き男、大きに恥ぢおそれて、速ににげ去りしとなん云云、

亦以て益軒の人となりを知るべきなり、益軒は其學、實用を主とするを以て詩文の如きは、唯〻其思惟する所を叙述するに止まるのみ、蘐園一派の鴻文雄詞の如きは、彼れに就いて求むべきにあらず、然れども道德若くは事實に關しては、大に彼れに學ぶべきものあるなり、門人竹田春菴、自娛集の序を作りて曰く、

益軒先生自ら其平日著はす所の文字を纂輯し、蘊めて七卷となし、名

づくるに自娯を以てす、蓋しこれを五柳先生の言に取れり、其自娯とする所以のものは、獨り自家天然の趣味にありて、之れを衒ふて以て譽を世人に要(もと)めんと欲するにあらざるなり、夫れ文も亦同じからざるあり、古昔賢哲作る所の文は、譬へば布帛の美、菽粟の味の如く、一日も闕くべからざるものなり、夫の詞人墨客爲る所の若きは、則ち徒らに浮華を尚び、藻飾を好み、務めて人の耳目を悦ばしむ、殆んど俳優に類するのみ、所謂巧女の刺繡、精妙絢爛なりと雖も、初めより實用に補なきもの、豈に以て貴しとするに足らんや、故に君子は詞章の習、眞儒の事にあらずといへり、我先生幼より深く聖學に志し、老に至りて孜々として倦まず、靜養の餘、今茲壽を保つこと八十有三、身體康寧を得、未だ嘗て一日として書を讀むことを廢せず、博洽精勤、識和漢に達す、然れども其從事する所、專ら濂洛關閩の學を崇んで、泛濫駁雜を惡み、恭默道を思ふを以て務となす、先生性を稟くること謙遜にして、人の師たることを好まず、且つ僻遠の海隅に居れり、然れども聲望の籍甚

なる、高門華族の人と雖も、亦其敬を致し、遐方鄙野の徒と雖も、猶ほ其名を識る、著はす所の書、凡そ百有餘種、皆世俗を曉し、民用を利するの言、業に已に坊間に刊行するもの、亦多きに居れり、本集の如きは、則ち事物に感觸するの際、胸裏の蘊を攄發する所以にして、道德仁義の說にあらざるはなし、且つ其字を用ふること平易、其言を立つること切實にして、皆其眞情に發し、其肺腑に出づるもの、浮虛巧飾の文にあらず、其世敎を補ひ、後學を惠むこと寡からず、豈に啻に自ら娛むといはんや、

と、益軒の文の質實にして浮華ならざること、眞に春菴の言ふ所の如し、

詩に就いては益軒本と一家の持論あり、云く、

詩を作ること多しと雖も、講學に益なし、況んや之れを能くするものと雖も、苦思の勞、時を廢するの失あり、苟も此の如くならざれば、則ち巧なること能はず、國俗、唐詩の聲韻文字に通ぜず、此れ古來本邦人の詩に拙き所以なり、然らば則ち唐詩を作爲するは、本邦風土の宜しき

所にあらざるなり、故に本邦の人、唐詩を作りて、以て其志を述ぶるも、これを和歌に比するに、甚だ及ばずとなす、已むことを得ざるにあらずんば、詩を作らずと雖も可なり、唯古人の詩の、其時情と景致とに合するものを詠吟して足れり、豈に自ら拙詩を作りて勞苦するに迨らざらんや、古の君子の詩を作るが如きは、所謂和順、中に積んで、英華、外に發す、性情を吟詠して、其志を述ぶる所以なり、後世の及ばざる所以なり、(愼思錄卷之五)

益軒が茲に詩といふは固より漢詩の事なり、我邦人の漢詩を作るが如き、唯支那の格調を模倣するのみにて、決して其自然にあらず、我邦の詩は國語を以て作りたるものならざるべからず、漢詩は到底外國の詩にして我邦の詩にあらず、漢詩を作りて支那人を凌駕せんこと決して其能くすべき所にあらず、況んや支那音をも解せずして漢詩を作るをや、此點よりこれを言へば、我邦人に取りては、漢詩を作るよりは、寧ろ和歌を作りて情懷を抒らすに若かざるなり、益軒此意を述べて曰く、

本朝の歌詠、微婉にして溫雅、且つ精巧を極むるもの多し、恐くば中夏の歌詩と爭ふて頡頏をなすべし、乃ち國字の文章の若きは、專ら艶麗を務めて、體製柔媚なりと雖も、然れども其奇巧なるもの數家、亦以て倭歌に亞ぐべし、若し夫れ本邦の詩文は、古昔名家の製と雖も、中華の作者と比儷をなすに足らず、故に本朝の詩文を以て之れを和歌和文に較ぶるに、其巧拙雅俗、日を同うして談ずべからざるなり、是れ豈に國俗と土宜とに合はざるによるにあらずや、（同上）

又曰く、

和歌は、我國俗の宜しき所にして、詞意通曉し易し、故に古人の歌詠、極めて精絕なり、古昔婦女と雖も、亦之れを能くするもの多し、唐詩は、本邦風土の宜しき所にあらず、其詞韻、國俗の言語に異にして、中華に模倣し難し、故に、古昔の名家と雖も、其作る所拙劣、和歌に及ばざること遠し、我邦只和歌を以て其志を言ひ、其情を述ぶべし、拙詩を作りて、以て詅癡符の誚を招くことを要せざれ、（同上）

益軒此の如き見解を有せるが故に多く力を詩に用ひず、間〻和歌を作りて、其胸臆を吐露するものあり、然れども詩も亦作らざるにあらず、慶長以來諸家著述目錄には損軒詩集一卷を掲ぐ、是れ蓋し寫本の儘、家に藏する所ならん、江邨北海が日本詩史(卷之三)に益軒を論じて云く

元和以來、著述おほしと稱するもの、東涯徂徠の外、蓋し益軒に如くものなし、其撰ぶ所名高の爲めにせず、勤めて後人に益す、乃ち家範、鄕訓樹藝、製造に至るまで、亹々懇々、余少年の時、事を解せず、意、其學術を輕んず、今にして之れを思へば、殊に懺悔をなす、其詩も亦朴實なり、

北海の如き專門詩家にして猶ほ且つ益軒の詩の朴實を稱せる以上は其一概に捨つべからざるものあるを知るべきなり、益軒は亦書に巧なりき、近世名家書畫談(下卷)に云く、

貝原先生篤學德行の君子儒なること、誰れか知らざるものあらん、又筆札をも好まれしかど、世に傳ふること稀なる故、其賞する輩、これを見ること星鳳の如し、

伊藤東涯亦曾て益軒の書を見て歎じて曰く、

嗚呼損軒子之書、端好有度、老而不衰、(紹述文集卷之十五)

今試みに益軒の筆蹟を見るに、其清高溫雅の趣は、蓋し天性に出づるものにして、有道の氣象自ら筆墨の間に溢る、豈に世の徒に文字を修飾して、始めて體を成すものと同一視すべけんや、益軒は又音樂を好み、頗る音樂の事に通曉せしものゝ如し、年譜を見るに、元祿三年の處に言へるあり、云く、

先生彈琵琶、好逑鳴箏、

益軒自ら琵琶を彈ずるの技倆ありしこと此れに由りて知るべきなり、殊に益軒が晩年京師に在るに當りては、幾多の公卿、彼れが音樂を好むを聞き、彼れが爲めに、伶人をして音樂を奏せしむること、啻に一再ならざるなり、

益軒は人見竹洞、木下順菴等と親密なる交際をなせり、仁齋とは曾て一たび相見しことあるも、說相合はず、(紹述文集卷之十五を參看せよ、)先哲叢談(卷之四)に

益軒の學、常師なきを叙し、併せて辯じて云く、「或以爲₂松永昌三門人₁者謬矣」と、當時益軒を以て松永昌三の門人とするの説ありしと見ゆ、果して然らば是れ大なる誤なり、益軒が一回だも松永昌三に會見せしことありや否や、それさへも頗る疑なきこと能はず、況や師弟の關係に於てをや、或は益軒を以て闇齋若くは順菴の門人とするものあるも、是れ亦何等の根據もなきことにて、全く臆説に過ぎざるなり、年譜の元祿五年の下に、

此行淹留之間、屢與₂人見友元(竹洞が事)、木下順菴₁談論、兩儒養遇厚至

とあり、玆に「養遇厚至」といふが如き、豈に師弟の關係を意味するものならんや、甘雨亭叢書に益軒の傳を載せ、叙して云く、

從₂松永尺五山崎闇齋木下順菴諸公₁而學焉、

と、是れ固より確證の據るべきものあるにあらざるなり、蓋し益軒は主として獨學によりて一家を成しゝものにて、曾て師事する所ありしにあらざるなり、

貝原氏家系畧圖

- 貝原寬齋（妻 緒方氏）
  - 家時（稱二山三郎一）
  - 元瑞（號二存齋一）
    - 可久
    - 重春（爲二益軒嗣一）
  - 義質（號二樂軒一）
    - 好古（號二耻軒一）
  - 益軒（妻 東軒（江崎氏））
    - 重春

益軒の妻江崎東軒學才あり、曾て女大學一卷を著はす、此書一時大に世に行はる、其女子敎育に影響すること少しとせず、或は以て益軒の作とするは誤なり、然れども固より益軒の校閲を經たるものなるべく、又其旨意は和俗童子訓中の敎女子法に本づくものゝ如し、

第二　著書

慎思錄六卷

此書は益軒晩年の作にして、正德四年の春を以て脱稿する所に係る、乃ち知る、是れ彼れが逝去の年なるを、益軒著書多しと雖も、彼れが道德に關する學說は、大抵此書中に叙述せり、其體裁は全く宋儒の語錄に擬す、蓋し得る所あるに隨つて、之れを書に筆せしものならん、故に全篇唯〻幾多の思想の斷片を集錄せるの狀あり此の如くにして其分類なく、組織なきは、今日より之れを觀れば、甚だ遺憾なりとせざるを得ざるなり然れども其中格言の以て服膺すべきもの、勝げて數ふべかず、我邦に於ては是れを語錄中の白眉と稱するもの、決して溢美にあらざるなり、又之れを薛敬軒の讀書錄、若くは胡敬齋の居業錄に比するも、恐くば伯仲の間にあらん、自叙あり、云く、

余十四五歲より頗る聖學の尙ぶべきを知りて、經傳を誦讀するを

好み幼より老に至りて、晨昏廢てず、妄意に自得せんと欲するの志あり、且つ性を稟くること拙鈍にして機務に闇し、是を以て他事の念に縈(まと)ふなし、爲に講學の事を以て當務の急となす、故に平生拙詞を作り、訓詁に泥んで無益をなし、學功を曠(むなし)うすることを喜ばず、閒に居、書を讀むの時、毎に心に疑惑を生ずることあれば、開通せんと欲し、恭默して之れを思ふ、之れを思ふて得ざれば措かず、精氣の極、鬼神之れを敎ふることあるに似たり、此に於てか毎に心に會することあれば、之れを箋に記し、歲を積んで編を成す、云云、

最後に自己編を附載し、自己精神の存する所を叙述すること頗る詳密なり、今にして之れを閲讀するに、謙遜恭敬の意、誠實眞摯の情、蔽ふべからざるものありて存す、乃ち以て其人格のいかんを想見すべきなり、

大疑錄二卷

此書は益軒が最後の作なり、年譜によるに、正德四年益軒八十五歲、先

づ愼思錄を脫稿し、尋いで此書を脫稿す、而して幾もなく長逝せり、益軒已に愼思錄中に於て多少宋儒に異なる意見を叙述せり、然れども未だ敢て宋儒の範圍以外に出づるを欲せず、乃ち陸王を排し、又暗に仁齋徂徠を排し、大に周張程朱を稱揚し、斷言して、

孔孟の意を得て、之れを發明し、傳註を作るもの、程朱に止まるのみ、後世豪傑の士ありと雖も、及ぶべからざるのみ、

と云へり、然れども益軒遂に宋儒の說に滿足すること能はず、乃ち幾多の疑を存す、是れ此書の成る所以なり、太宰春臺嘗て此書を讀んで批評をなせり、春臺文集（後稿卷之十）に「讀」損軒先生大疑錄」を載す、是れなり、春臺が批評に對しては鈴木離屋又「跋」大疑錄」を作りて批評をなせり、（離屋集初編坤）益軒歿後五十二年を經て、仙臺の北海大野通明なるもの、始めて此書を上木し、卷首に彼れが跋文と春臺の批評とを揭ぐ、益軒の自叙は年譜の末に附載せるも、大野氏之れを得ざりしは聊遺憾となすのみ、番外雜書解題（卷之十七）に、

篤信が生涯の見識は、此書にありと知るべし、

と云へるは事實にして、益軒一家の見解は此書に於て窺ふべきなり、彼れ本と謙遜にして敢て一家の學を唱道するを好まず、是れ其此書を大疑と名づくる所以なり、

自娯集七卷

此書は益軒の文集にして、正德二年を以て脫稿する所に係る、益軒の遺稿として家に藏するものを見るに、詩も亦少しとせず、然れども益軒自ら見る所ありて、詩は一首も自娯集中に編入せず、此書の內容は論あり、說あり、辨あり、記あり、書あり、序あり、贊あり、實に種々雜駁なる文章を以て成るものなり、然れども道德に關するもの殆んど其半に居る故に益軒の學を窺はんと欲するもの、此書を度外視すべきにあらざるなり、自己編に云く、

篤信嘗て鄙文百七十八編を作爲し、之れを命けて自娯集といふ、且つ俚語を輯錄すること十卷愼思錄と號す、其書たるや固に拙陋、言

ふに足らずして、僭妄の罪、識者の誹笑を免れ難し、是れ啻に吾後覽に備へんと欲するなり、且つこれを後裔に傳へて予の幼より老に至るまで刻苦怠らざるを示さんとするのみ、其中或は愚者千慮一得にして自ら信ずるものあり、昔し揚雄、法言を作りて曰く、後世揚子雲が如きものありて、必ず之れを好まんと、我が此書は恐くば紕謬、後世の子雲を待つこと能はざるのみ、

此書の首めに竹田春菴が序あり、正德二年の結撰に係る、發行は正德四年三月にして、猶ほ益軒存命中の事に屬す、谷秦山が隨筆(卷一)に

益軒自娛集七卷、其學可謂正矣

といひて、鑽仰の意を述べ、併せて批評を附載せり、益軒の學說を知るに最も重要なるものは、愼思錄、大疑錄及び自娛集の三書となす、

初學知要三卷

此書は讀んで字の如く初學の徒の爲めに編纂する所にして、内容は爲學、修身、接物、處事、警戒の五項に分ち、多く有益なる古人の言論を揭

げ、附するに自家の見解を以てす、其後進を裨補すること、殆んど朱子の小學に劣らざるの觀あり、首めに門人伊藤素安の序と、益軒の自序とを載せ、卷末に「元祿十一年戊寅仲秋吉辰」とあり、乃ち其存命中の發行に係るを知るべきなり、

自警編一卷

此書は心術、言語、威儀及び應接の戒を叙述せしものにて、古人の名言を引用すること少しとせず、明治廿七年に吉安小谷二氏之れを譯解して、今日の青年に便にせり、

小學備考六卷

此書は朱子小學の解釋にして、益軒が四十歲の時に上木せるものなり、卷末に益軒が跋あり、云く、

程朱の書、海に航して、我れに傳ふるもの、蓋し此に三百餘年、然れども小學近思錄の世に行はるゝや、未だ二紀(即ち廿四年、)に滿たず、眞に恨むべしとなす、我曹幸に今の時に生れて此書を見て、之れを講習す

ることを得たり、苟も徒に空文を事として、心に體し、身に行ふこと能はずんば聖賢を侮るものに幾からざらんや、此れ亦朱子の罪人なり、云云、

最後に「寛文己酉六月三日」とあり、此れに由りて之れを觀れば、年譜に此書を三十九歳の時に「彫刻終功」とするは、疑なきを免れざるなり、

近思錄備考八卷

年譜の貞享三年の下を見るに左の注意すべき記事あり、云く、

今年中夏の人、朱彜尊長崎に來たり、頗る好んで書を讀み、先生作る所の近思錄備考を看て、以て好書となして、曰く、中夏と雖も此の如き註解なし、然れども日本自ら嚴禁あり、本邦印本の如きは、携へて中夏に歸ること能はず、終日繕寫して還る、

此書偶然にも經學に精通せる朱竹垞の稱揚する所となりて、一段の光彩を添へたりといふべし、

頤生輯要六卷

此書は門人竹田定直の編次する所にして、多く古人の衛生に關する論説を蒐集し且つ分類するものなり、要するに一篇の養生論なり、其世人を救濟する心の切なる、フヘランド氏の延壽學 Makrobiotik と相類するものあるなり、首めに益軒の序あり、云く、

篤信素より氣を禀くること薄弱にして夭札を免るゝことを能はざるを恐る、故に幼より衛生の術に志あり、書を看るの際、古人の言、養生を資くるものある毎に、則ち隨つて之れを抄出す、道義に合はざるものは、舍てゝ採らず、年を積むこと久うして、漸く數百條に至る、竊に謂へらく、頤生の道いさゝか具はれりと、自ら覺ゆ、予の幸にして夭札を免れて耄耋に至るもの、乃ち職として此れに由るなり、

最後に竹田春菴が跋あり、外に古今養生論和解一卷を附載せり、華洛の居行子が序と補篇とあり、

五常訓五卷

此書は五常の義を平易に國字を以て解釋せしものにて、寛永八年の

刊行に係る、卷の一は總論にして、卷の二、卷の三は仁を說き、卷の四は義と禮とを說き、卷の五は智と信とを說けり、卷首に竹田春菴が序あり、

大和俗訓八卷

此書は爲學、心術、衣服、言語、躬行及び應接の六門に分ち、實踐躬行に裨益あることを平易に說示せるものなり、首めに竹田春菴が序あり、益軒を論じて云く、

其著述する所、只勤めて民俗の益をなすを要す、而して敢て夸高して人に耀かすを好まざるなり、此れ先生の志なり、

益軒の國字の自序も亦あり、寛永五年の作に係る、

和俗童子訓五卷

此書は兒童敎育の書にして、卷の一二は總論にして、卷の三は隨年敎法及び讀書法を論じ、卷の四は手習の法を論じ、卷の五は敎女子法卽ち女子敎育を論ぜり、首めに益軒の序あり、此書又兩葉文鑑と題する

ことあり、恐くは後世人の命ずる所ならん。

初學訓五卷

此書は初學のものゝ爲めに講述せる修身書なり、首めに竹田春菴が序あり、此書を評して云く、

諸訓の中にもとりわき親切著明の懿訓なりと言ひつべし、

以て其書の內容いかんを知るべきなり、

文訓二卷

此書は文學に關する事を說示するものにて、武訓と相竢ちて雙璧たり、首めに竹田春菴が國字の序あり、享保元年の作に係る、其中謂へるあり、云く、

益軒先生平生の著述すべて百餘種に及べり、其坊間に出で世に行はるゝは、三が一のみ、況や晚年に著はし給へるたぐひは、猶ほ草本のまゝにて、藏めて篋笥にあるも亦多し、正德甲午の秋先生世を謝し給ひし後、同門の輩、其令嗣令姪と共に先生の舊堂に會集し、遺編

を檢閲して、こと〳〵く梓に壽せむことを議す、爾後定直東行して江府に淹留し、ふたゝび裘褐を更へて猶ほ未だ西に歸ることを得ず、郷邑の同志も、他の塵務に暇なく、荏苒として其宿志を果さず、此ごろ同志のもとよりはづかに文訓武訓各一部を淨謄し更に附けて寄せこせぬ、定直歡喜に堪へず、すなはち京師に送りつかはし、書肆柳枝軒に授けて刊布せしむ、云云、

又云く、

凡そ先生著述を好み給ふこと、ひとへに人を愛し、俗をあはれむの仁心より出で、一念も名に近づき給ふ意なし、

其他此序文中益軒平素の心術行狀を徴すべきもの、少しとせざるなり、

武訓二卷

首めに竹田春菴が序あり、享保元年の作に係る、

家道訓六卷

此書卷の一二三は總論にして、卷の四五六は用財を論ぜしもの、是れいゝを當時のゝ家政學ゝといゝふも不ゝ可ゝなきゝなり、卷末に京師の書肆柳枝軒茨城信淸が跋あり、正德二年の作に係る、

樂訓三卷

卷の上は總論にして、卷の中は節序を說き、卷の下は讀書を說き、最後に後論あり、內容は高尙なる和樂の道を敘述せしものなり、

君子訓三卷

是れ在位の君子の道を說示せし書なり、首めに自序あり、

養生訓八卷

此書卷の一二は總論にして、卷の三は飮食、卷の四は飮食、飮酒、飮茶、及び愼色欲、卷の五は五官、二便、及び洗浴、卷の六は愼病及び擇醫、卷の七は用藥、卷の八は養老、育幼、鍼、及び灸治を論ぜり、最後に益軒の後記あり、云く、

愚生昔しわかくして書をよみし時、群書の內、養生の術を說ける古

語をあつめて門客にさづけ、其門類をわかたしむ、名づけて頤生輯要と云ふ、養生に志あらん人は、考へ見給ふべし、こゝにしるせしは、其要をとれるなり、

此後記は正德三年の作に係る、賴春水詩あり、云く、

益軒西筑古名臣、捐館方過一百春、原識門生傳學久、且聞藩主采蘋新、立言平實修成德、居業網羅裨益人、著作雖多最堪仰、養生遺訓濟斯民、

以上列擧せる十種の通俗的國字訓戒の書を「益軒十訓」と稱す、東京女學館敎授西田敬止氏之れを輯めて一冊となし、「益軒十訓」と題し、博文館より出版せり、

克明抄一卷

此書は益軒が天和二年十一月を以て起稿し、黑田侯に上りて、治者の道を示せるものにて、人君爲學之要、爲學之工夫、改過、知人、賞罰、明人倫の六篇に分ちて之を論ぜり、此書久しく寫本にて傳はりしを明治三十五年に至り、躬行會叢書第一集に收載して之を刊行せり

格物餘話一卷

此書は甘雨亭叢書中に收載せり、一種隨筆體の書なり、

神祇訓一卷

三禮口訣二卷

太宰府天滿宮故實二卷

古今知約七十餘卷寫本

此書は益軒が博く古今の書を涉獵するに當りて、後日の記憶に備ふるが爲めに抄錄して編成する所なり、

日本釋名三卷

點例二卷

和字解一卷

扶桑紀勝五卷寫本

筑前續風土記廿九卷寫本

大和本草廿五卷

心書軌範一卷
鄙事記八卷
和漢名數三卷
日光名勝記一卷
和名本草二卷
筑前名寄二卷
初學詩法一卷
本朝詩仙抄六卷
歷代詩選五卷

其他紀行、植物、歷史等に關する著書少しとせず、然れども今悉く之れを省略す、益軒の學說を知るに必要ならざるもの多きが故なり、又益軒の訓點書類數種あり、世是れを「貝原點」といふ、

第三　學說

(一)　總論

益軒の學說を叙述せんとするに當り、先づ其立脚點を明かにせん、彼れ初め陸王の學を好み、朱陸兼用の意ありしも、三十六歲の時、偶〻學蔀通辨を讀み、其非なるを悟り、專ら朱子學を尊崇するに至れり、年譜を見るに、三十九歲の處に

先生頃歲益〻朱文公の學術を信じ、其文集を好む、

とあり、乃ち知る彼れが中年學識の進步するに從つて、純然たる紫陽一派の人となれるを、時に近思錄備考、小學備考等の著あるも、亦全く此思想の傾向に本づくなり、彼れ嘗て孟子以來の學統を論じて曰く、

孟子夫子の道を傳へて謬らず、嗚呼吾が夫子は古今天下一人のみ、其道大中至正、純粹精微、夫れ賢者と雖も、偏性なきこと能はず、恐くば其道を傳ふること能はじ、孟子固に賢哲と雖も、未だ聖人に及ばず、何を

以て能く夫子の道を傳へて謬らざること此の如くならんや、蓋し孟子嘗て言ふ、聖人の世を去ること、此のごとく其れ未だ遠からず、聖人の居に近きこと、此のごとく其れ甚しと、其命世の才を以て且つ聖人の世と聖人の居とを去ること、其近きこと此の如し、宜なるかな、聖人の道を傳へて謬らざること、漢唐の諸儒の如きは、雋傑の才ありと雖も、道統の傳に於て繼述すること能はず、獨り宋の諸君子の如きは、畧ゝ其統を承けて其道を失はずといふべきなり、然れども聖人の道、大中至正、精微純粹、孟子の後、諸儒全く其體を備へて、偏なく黨なきこと能はず、然れば孟子歿して後、聖人の道を略ゝ傳ふといふは可なり、全く傳ふといふは不可なり、蓋し孟子の後、道を知るもの、二程及び朱子なり、是れ聖人の道畧ゝ傳ふるなり、(愼思錄卷之四)

乃ち彼れが程朱を以て孔孟の嫡傳とするを知るべきなり、殊に朱子に就いて論じて曰く

陳北溪が曰く、孔孟周程の道、朱子に至りて益ゝ明かなりと、魏鶴山曰く、

韓子謂ふ、孟子の功、禹の下にあらずと、予謂ふ、朱子の功、孟子の下にあらずと、陳魏二氏の言、適中といふべきなり、誰れか過當の言、其好む所に阿るといはんや、(同上卷之五)

此の如く朱子の功を以て孟子の下にあらずとするの說に贊同するを以て之れを觀れば、其崇敬の念、決して尋常ならざりしを察すべし、然れども朱子の如きも、未だ聖人といふべからざるが故に、過失なきを免れずとせり、其言に云く、

夫れ朱子固に聖人にあらず、且つ其著述する所、亦甚多し、其中過失恐くば亦間〻將に之れあらんとす、故に古人曰く、人聖人にあらざれば、誰れか過なからんと、又曰く、智者も千慮に必ず一失ありと、然らば過失の事、朱子と雖も、免れざる所なり、然りと雖も、孟子の後、六經語孟を傳述して、後世に垂示し、往聖を繼ぎ、來學を開くもの、朱子一人のみ、其功恐くば孟子の下にあらず、恨むらくは後人往々に朱子を知らず、且つ未だ朱子の全書を見ず、故に其疑ふ所未だ朱子立言の本旨に達せざ

るもの多し、聰明英俊、陸子靜、王守仁が如しと雖も、猶ほ未だ誣枉をなすを免れず、況や其下なるものをや、(自娯集卷之四)

益軒又「異學誹」「朱子辨」を作りて

朱子誠に是れ眞儒、振古の豪傑といふべきなり、其往聖を繼ぎ、來學を開くの功、後世に於て極りなきの恩あり、云云、(同上)

といへども、尙ほ朱子の未だ聖域に入る能はずして過失なきを免れざるを認容せり、彼れ又朱子の學說に就いて左の如く言へり、云く、

朱子が大學の格物致知誠意正心を說くが如き、則ち知を先きにし、行を後にす、論語を說くに、博文を先きにし、約禮を後ちにす、中庸の性道敎を說くに、戒懼愼獨を以て存養省察の工夫となす、及び西銘を說いて天地に事ふるの道となす、此等の諸說、聖人また起るとも、恐くば此言を易へざるべきなり、(愼思錄卷之三)

此れによりて之れを觀れば、益軒の朱子學派の人なること、復た辨を竢たざるなり、然れども彼れは徹頭徹尾朱子の學說に服するものにあら

ず、其いかなる點に於て朱子と異なるかは大疑錄によりて之れを證すべきなり、愼思錄は尙ほ朱子學の立脚點より叙述せるものなりと雖も、時ありては異說の一端を見るを得、例へば、性を分ちて本然氣質の二種とせずして、單に氣質の性をのみ認容するが如き、是れなり、然れども益軒の朱子を尊崇すること實に甚しきものあり、是れ其朱子學派の人として數へざるを得ざる所以なり、彼れ固より朱子學派の人たるを以ての故に獨り朱子を尊崇するのみならず、又周程諸氏の如く宋學の系統に屬するものは、皆之れを尊崇し、其主張の存する所を明かにせり、彼れ論じて曰く、

周子の通書、二程全書、學者須らく反覆熟覽せんことを要すべし、晩年熟讀して得る所最も多きを覺ゆ、孟子以後、復た這等の書なし、尤も貴重すべし、(同上卷之二)

又周張二氏の書を論じて曰く、

周子の通書、漢より以下第一の好書とすべし、蓋し諸子の最も粹なる

ものなり、張子の言、氣象雄偉、語意の淳厚、其學亦正大光明といふべきなり、西銘一篇の如き、前人の未だ發せざる所、大に聖門に功あり、然れども其餘正蒙の諸說の中、間〻程子の說く所と異なるものあり、學者、須らく更に精審を加ふべし、（同上）

又更に程朱を擧げ、之れを論じて曰く、

程子の言、氣象渾厚、語意簡深、其說を立つること、規矩準繩の如く、學者の法則となすべし、朱子の言、氣象平直、語意詳明、其說を立つること、夜行の燈燭、迷者の指南の如く、學者の明證となすべし、二子の出づる時を異にすと雖も、然れども其道の異ならざること符節を合するが如し、蓋し朱子の學、二程を崇師とするものなり、經說の如き、間〻同じからざるものありと雖も、寡し、蓋し訓詁の較〻異なる、其道の同たるを害せず、（同上）

又特に二程子を比較論斷して曰く、

程叔子の學、正大高明、易傳の說の如き、專ら訓詁解釋を主とせず、胸裏

在る所の蘊奥を攄發するのみ、儒者の學、當に此の如くなるべし、廣大を致し、精微を極むといふべきなり、其言謹嚴にして緊切、後學の箴砭となすべし、百世の下、之れを聞くもの興起し、貪夫をして廉に、懦夫をして立たしむ、其益たる亦少からず、是れ大に名教に功ありといふべきなり、其教を立つるや、嚴毅方正、蓋し孟子以後一人のみ、其人を論じ、人を責むるの際、抑揚褒貶、儼然として畏るべし、只恐くば從容不迫の氣象すくなし、之れを伯子の言の溫厚和平なるに比すれば、自ら同じからず、云云、明道は美玉の如く、伊川は精金の如し、皆天成純粹の德、固より末學愚者の敢て輕く議すべき所にあらざるなり、(同上卷之五)

上來引用する所の評論によりて益軒の濂洛關閩に出づるを知るべし、乃ち周張程朱、皆孟子以後、洙泗の正脈を傳へたるものとして之れを師宗とするものなり、然れども其中獨り張子に對しては、間、意に滿たざるものあるを言へり、例へば、正蒙に「知死之不亡者、可與言性」と云へるを非なりとし、是れ寧ろ老子の所謂「死而不亡者壽」と云へるに異ならずとし、

論じて曰く、

張子正蒙の中、猶ほ疑ふべきこと此の如きもののあるは、何ぞや、豈に偏僻の害たるや、賢者と雖も免れ難きにあらずや、(同上巻之三)

其張子が「形潰反原」といひ、又「萬物不能不散而爲太虚」といへるを以て程朱の説と相戻るとなし、敢て之れに從はざるの意を示せり、然れども大體より之れを言へば、張子も亦其尊崇する所の一人たるを失はざるなり、上は孔孟より下は周張程朱に至る迄の間に於ては、益軒殊に董仲舒と韓昌黎とを推尊せり、其言に云く、

漢儒董仲舒に如くはなし、唐儒韓退之に如くはなし、孟子より以來五季に至るまで儒を以て世に名あるもの多からずとせず、而して聖學を尊び道術を正うするもの、たゞ此二人のみ、韓子の如きは、固より疵瑕なきこと能はず、然れども此れを以て其大體を掩ふべからず、左傳に曰く、吾れ一眚を以て大德を掩はずと、斯言宜なるかな、凡そ人を論ずるは、材を用ふるが如し、寸朽を以て連抱の材を棄つべからず、(同上)

益軒此の如く周張程朱の外董仲舒及び韓退之を尊崇すと雖も、陸象山と王陽明とは、痛く之れを排斥せり、曾て「陸象山論」を作りて曰く、

象山の人たるや、豪邁穎悟、人に絕す、固に振古の英傑となすべきなり、然れども性を稟くること偏僻、故に疎放曠達、矜高にして志を遜ること能はず、自ら用ひて以て足れりとなす、己れが聰明を負み、人に取ること能はず、故に蔽塞する所多し、朱子の器小なりとする所以なり、其學をなすや粗畧、格物窮理を以て支離となし、一超直入を以て工夫となす、朱子の禪學とする所以なり、而るに其作る所の文字言語を顧みるに一語も禪佛の說を取るものなし、只其學術と心術とを看るに、禪たるを免れざるのみ、云云、陸氏人の惡む所を好み、人の好む所を惡む、人性に拂るといふべきなり、其才性大に人に過ぐと雖も、然れども其學術躬行、甚だ偏異、功過相掩ふこと能はず、惜むべきかな、(自娛集卷之六)

又王陽明の學術を論じて、左の如く言へり、云く、

明儒博識聰明にして才俊なるもの、往々陽明を宗師とし、之れを尊信することと神明の如し、中庸に云く、百世以て聖人を俟ちて惑はずと、人を知ればなり、陽關が學の如き、果して聖人を俟ちて惑はざるものならんや、之れを尊信するもの、安ぞ人を知るといふべけんや、嗟乎陽明文章功業、一世に超絕す、天下の英才といふべきなり、其學術の如きは粗謬、孔孟の敎と同じからず、葱嶺より來たることを免れず、其述作する所を見て知るべきのみ、然れども其述作する所を見ると雖も、猶ほ未だ其禪佛の徒たることを悟らず、是れ學術の蔽惑是非の心なきに幾からずや、(愼思錄卷之四)

又云く

歷世儒臣多きこと明朝に若くはなし、獻徵錄載する所を看て知るべきのみ、其衆多の中、學術純正なるもの、極めて鮮し、異學に陷溺するもの、滔々として天下皆是れなり、其餘弊流れて胡清に至りて未だ止息せず、恐くば外國に傳へて遠く及ばん、此弊陳白沙王陽明を以て作俑と

なすべし、陽明最も稱首となす、天下後世の蒼生を誤まるもの、此人にあり、何ぞたゞ晋人清談を尙ぶの弊のみならんや、然れども明淸の諸儒才俊にして、畧學識あるもの、亦迷眩し、之れを尊んで宗師となすこと、神明の如くするものは、何ぞや、云云、蓋し學術の偏異迷溺、英俊の人と雖も、免るゝこと能はず、古よりして然り、怪となすに足らず、學者の恐省すべき所以なり、東坡が六一居士集の序に曰く、「邪說の人を移すこと、豪傑の士と雖も、免れざるものあり」と、誠なるかな此言や、（同上卷之六）

益軒は陸王の學術の弊を論ずること、痛切を極むと雖も、其人物の雋邁なる一點に於ては竊に之れを認容するものゝ如し、彼れ又陸王を捨てゝ、專ら朱子を尊崇すと雖も、時ありて其學說寧ろ陸王に近きものあるは、殊に注意すべき所なりとなす、

益軒又當時の古學に對して、屢批評をなせり、例へば、其

近世の學者、往々古義に執定して、人情に合はず、動もすれば、時宜に負

く、是れ蔽固にして通ぜず、此病ある所以なり、(同上)

といふが如きは、蓋し仁齋徂徠の徒を言ふならん、又其近世異學の輩出でゝ、以て只之れを道といふべく、之れを理といふべからずといふ、此れ亦固陋の甚しき、時變に通ぜざるものなり、(同上巻之四)

といひ、又大學は聖人の言にあらずとするものを斥けて、近世の俗儒といふが如き、殊に仁齋の徒を指すに似たり、又其浮虛高きを貪りて大言するもの(同上巻之一)

といひ、

游蕩氾濫、偏僻駁雜(同上)

といひ、

書を讀み、文を學ぶの事常に多く、德を愼み、行を力むるの功常に少し、(同上)

といひ、

其行ふ所己れに矜り、人を責め、刻薄不仁にして、誹謗を好み、己れに反り自ら厚うすること能はず、(同上)

といひ、

己れが說を立てんと欲して、人の小疵を責め、動もすれば、常に刻薄に傷づけらる、其說是なるものありと雖も、其心は非なり、浮躁淺露、君子の氣象にあらず、其文字間〻採るべきものありと雖も、其人は猥陋賤むべきのみ、(同上卷之五)

といふが如きは、皆徂徠の徒を指すに似たり、彼れ此の如く仁齋徂徠の徒を排斥すと雖も、時ありては又折衷を主張し、殆んど古學派の如き口吻をなせるは一奇といふべし、其言に云く、

六經語孟を讀むに、宋儒本註を以て先とすること固に善し、然れども古註疏亦廢すべからず、朱子の曰く、漢魏の諸儒、音讀を正し、訓詁に通じ、制度を考へ、名物を辨ふ、其功博し、學者苟も先づ其流を涉らずんば、亦何を以て其力を此に用ひんと、朱子四書詩易に於て既に傳註を作

りて、其言此の如し、然れば古註疏も亦考へざるべからず、夫れ朱子の傳註を作る、義理精當、固より古註疏を待たず、然れども訓詁、文義、名物、制度の如きは、古註疏に譲りて、詳に解せざるもの多し、今人の經を讀むや、古註疏を考察せず、却て汲々として明儒の諸説を貪り見る、是れ本初を舍て、末流に趨るなり、蓋し漢唐諸儒の註疏を看れば、文義の故實を得て考證となすべきもの多し、廢すべからず、(同上巻之一)

是れ全く折衷説なり、折衷説なりと雖も、明儒の諸説よりは寧ろ古註疏を取るものなるが故に古學派に近し、其説、朱子に本づくと雖も、殊に此必要を言ふもの、偶〻以て益軒の闇齋一派の如く決して偏狹固陋ならざるを證するに足るなり、益軒又論じて曰く、

後儒の説、宋儒と訓義同じからざるものあり、亦各〻見る所ありて、説を立つるのみ、若し異學偏僻の説にあらずんば、己れに異なりとなして、都て之れを排斥すべからず、蓋し義理窮りなし、博く取り周く謀れば、益を得ること少からず、須らく之を存して參考に備ふべし、(同上巻之

六)

此れに由りて之れを觀れば、宋儒以後の學說と雖も、亦併せ取りて參考に資するの意なきにあらず、其襟度宏量、推して知るべきなり、然れども又一方に於ては學術の當に純一無雜ならざるべからざることを道破せり、其言に曰く、

夫れ道は一のみ、故に學ぶものは、純一を貴ぶ、若し王道を行ふて霸術をまじふるものは、伯道となす、王道にあらざるなり、儒となりて異術をまじふるものは、異術となす、儒にあらざるなり、程朱を學んで陸王をまじふるものは、陸王の徒たり、程朱の學にあらざるなり、道誼を行ふて、功利をまじふるものは、功利となす、道誼にあらざるなり、蓋し清冽の水と雖も、苟も一點の汚穢あれば、呑むべからざるなり、(同上卷之一)

今益軒の學說を一瞥するに、陸王を排斥して、反りて陸王に近き處あり、古學派に反抗して、反りて古學に類する處あり、是れを純一無雜といはは

んと欲するも豈に得んや、益軒の言、未だ終始一貫せりといふを得ざるなり、

（二）　唯氣論

益軒朱子を尊崇すること、神明の如しと雖も、宇宙觀に關する重大なる點に於て他の見解を取り、寧ろ王陽明の學說と同一轍に出づるは、亦一奇といはざるを得ざるなり、朱子は理氣の二元を立てゝ、宇宙を解釋せり、故に彼れは分明に二元論者なり、唯ゞ朱子が太極を立て、以て宇宙の根本主義とする所より之れを言へば、恰も一元論者の如しと雖も、太極は彼れにありては理なり、氣にあらざるなり、又理氣二者の合體にもあらざるなり、故に彼れは到底二元論者たるを免れざるなり、然るに王陽明は朱子に反し、理氣を合一し、畢竟一元論に歸せり、然るに益軒亦理氣を分ちて二者となすべからざることを主張せり、其言に云く、

理氣決して是れ一物、朱子理氣を以て二物となす、是れ吾昏愚迷うて、未だ信服すること能はざる所以なり、（大疑錄卷之上）

又「理氣不可分論」を作りて、論じて曰く

理氣決して是れ一物、分ちて二物となすべからず、然れば則ち氣なきの理なく、又理なきの氣なし、先後を分つべからず、苟も氣なければ、何の理か之れあらん、是れ理氣の分ちて二となすべからざる所以、且つ先づ理ありて後、氣ありといふべからず、故に先後を言ふべからず、又理氣二物にあらず、離合を言ふべからざるなり、蓋し理は別に一物あるにあらず、乃ち氣の理のみ（大疑錄卷之下）

益軒は此の如く理を以て氣の屬性の如くに見做し、斷然理氣合一を道破し、此點に於て朱子と相背馳し、寧ろ陽明及び仁齋と同一轍に出づる所あるを示せり、朱子は「答劉叔文書」に

所謂理と氣と此れ決して是れ二物（朱子文集卷四十六）

といへり、此れに對して益軒は

理氣決して是れ一物

といへり、乃ち知るべし、此れは一元論にして彼れは二元論なるを、益軒

又理氣の關係を說いて曰く、

理氣本と是れ一物、其運動變化、作用ありて、生生息まざるを以て之れを氣といふ、其生長收藏、條貫ありて紊亂せざるを以て、之れを理といふ、其實一物のみ、然れども之れを命じて理といへば、則ち氣の純粹至善、正しからざるの名なし、是れを以て常變の言ふべきなし、之れを命じて氣といへば、則ち時ありて雜糅、紊亂して災沴となり、其常度を失ふ、是れ乃ち運動變化して定まらざるに由る、故に常を失ふなり、然れども此れ陰陽の本然にあらず、其氣の常を語れば、則ち正しからざるなし、其常は是れ氣の本然、卽ち是れ理のみ、これを水に譬ふ、水本と清潔、然れども泥土の中に過ぐれば、則ち溷濁汚穢、其淸潔を失ふ、然れども其濁穢を以て水の本然となすべからざるなり、故に氣能く萬物を生ず、而して理能く萬物を生ずといふも、亦可なり、苟も理能く氣を生ずといふは、則ち不可なり、何んとなれば、理は氣の理なり、本末先後あるにあらず、（大疑錄卷之下）

益軒が理を以て氣の附屬物とし、理よりは寧ろ氣を重んずるの思想は羅整菴より來たれるが如し、整菴曰く、

理は須らく氣上に就いて認取すべし。（困知記卷上）

又曰く、

理は只是れ氣の理。（同續卷上）

益軒は整菴の此語を引いて、論じて曰く、

宋儒理氣を分開して二物となす、其後諸儒、宋儒に阿諛して、論辨すること能はず、只羅氏程朱を師とし尊んで、好む所に阿らず、其論ずる所、最も正當となす、宋季以下元明の諸儒の言ひ及ばざる所なり、豪杰の士となすべきなり、薛瑄胡居仁二子の如き、明儒の首稱たりと雖も、然れども其見る所、欽順に及ばざること遠し。（大疑錄卷之上）

理氣合一論は獨り羅整菴の唱道する所とすべきにあらず、呉蘇原及び王陽明の如きも、亦此點に於ては彼れと殆んど同一轍に出づるものあるが如し、然れども益軒は這般の思想を整菴の困知記より得來たること

と疑なかるべし、整菴、名は欽順、字は允升、明の嘉靖年間の人なり、彼れ羅整菴と同じく理氣合一論を主張すと雖も、理は氣の屬性に過ぎざるが故に、畢竟唯氣論に歸着せざるを得ざるなり、乃ち論じて曰く、

夫れ天地の間、二氣なし、唯〻一氣のみ、一氣は何ぞ、是れ乾坤の氣、萬物資りて始め、資りて生るに由る、故に之れを名づけて元氣といふなり、元氣の流行を陽となし、凝聚を陰となす、陰の流行は、卽ち是れ陽、陽の凝聚は、卽ち是れ陰、陰陽の由りて分るゝ所を原ぬるに、本と是れ一氣のみ、故に朱子の曰く、二氣の運は、便ち是れ一氣の分と、蓋し一氣分れて二となり、一陰一陽にして天地の道行はる、故に陰陽は天地の道なり、元氣の分なり、天地日月四時鬼神萬物、皆これによりて立つ、（自娯集巻之一）

蓋し益軒は太極を以て氣となし、朱子の太極を以て理となすと相反せり、其言に云く、

天地の道、其よる所を原ぬるに、其初め兩儀溟涬にして未だ開かず、一

氣渾沌として未だ分れず、是れ至理の會する所にして、而して陰陽の象、未だ著はれず、之れを名づけて太極となす、（大疑錄卷之下）

又云く、

蓋し一氣未だ分れざれば、一氣の渾沌を以て太極となす、陰陽既に分るれば、則ち陰陽の道、太極の流行たり、太極陰陽、前後の分ありと雖も、其名を異にするなり、然れども至理ありて存するは異ならず、蓋し太極は是れ一氣の渾沌、陰陽未だ分れざるの稱、陰陽は是れ太極既に分るゝの名、其實二あるにあらざるなり、（同上）

此れに由り之れを觀れば、益軒の宇宙觀は一元的にして、唯氣をのみ世界の本體として認容するものなること、復た疑なきなり、彼れ固より全く理を否定するものにあらず、然れども理は彼れにありては唯氣に依存する附屬物にして、決して太極其物にあらざるなり、朱子は太極を論じて曰く、

太極は只是れ天地萬物の理なり、（朱子語類卷第一）

又曰く、

未だ天地あらざるの先き、畢竟また只是れ理、此理あれば便ち此天地あり、若し此理なくんば便ち亦天地なけん、人なく物なくんば、都て該載することなく了はらん、理あれば便ち氣あり、流行して萬物を發育す、(同上)

又曰く、

太極は只是れ一箇の理の字、(同上)

朱子は此の如く理先氣後の説を持し、太極と理とを同一視せり、益軒深く朱子を尊崇すと雖も、宇宙觀に於ては大に之れと異なるものあるを知るべきなり、

(三) 事天地論

益軒は人道を天道より演繹し來たりて、道德的模範を宇宙の運行に取れり、卽ち倫理の本源を以て天地に出づるものとせり、是れ儒教本來の思想に外ならずと雖も、彼れの之れを説明すること、殊に詳密精細にし

て、最も適切なるものあるなり、彼れ人道を天道より演繹し來たるが故に、實踐道德としては、先づ天地に事ふるを以て第一とす、天地に事ふるとは天地の道、卽ち天道を以て吾人行爲の模範とするをいふ、然らば吾人は如何なるものを天地の道とし、如何にして之れを實行するを得べきか、請ふ先づ彼れの所論を傾聽せよ、自娯集（卷之二）に「事天地說」上下二篇あり、其上に云く、

大なるかな乾元、萬物資りて始む、至れるかな坤元、萬物資りて生る、是を以て人の生まるゝや、始めを天に資り、生を地に資る、故に曰く、乾を父と稱し、坤を母と稱すと、且つ其有生の後、終身覆載愛育の功、亦至れり大なり、猶ほ父母我れを生むの後、復た其鞠育敎誨を受けて長成するがごときなり、嗚呼人、天地の中に生れ、天地の養を受けて、身を天地の間に寓す、天地を以て大父母となして怙恃となす、且つ天の人を寵異する、之れを萬物に比するに、最も厚しとなす、是を以て人の天地に於けるや、極りなきの恩を受く、之れが德を報いんと欲するに、其廣大

深厚、限量すべからず、人たるもの、其萬一を報いんと欲するの志なかるべけんや、須らく終身之れに奉事するに、其道を以てすべく、須臾も忘るべからざるなり、之れに事ふるの道いかん、曰く、天地の心を奉若して、乖戻せざるにあるのみ、是れ乃ち孝子、父母に奉順するの道、仁人の天に事ふる、亦須らく此の如くなるべきなり、天地の心いかん、曰く、生のみ、易に曰く、天地の大德を生といふと、生とは何ぞや、朱子の所謂天地は生物を心となす、又曰く、天地一もなす所なし、只萬物を生ずるを以て事となすと、是れなり、之れを奉若して乖戻せざるの道いかん、曰く、仁のみ、蓋し天地生物の心、人之れを受けて、以て心となす、所謂仁なり、生と仁と天に在り、人にあるの別ありと雖も、其理は異ならず、故に仁をなすは、乃ち天地の大德に奉若する所以なり、仁をなすの方いかん、孟子の曰く、親を親んで民を仁み、民を仁んで物を愛す、是れ仁をなすの序なり、而して仁をなすの方、其重んずる所、人倫を愛するにあるのみ、蓋し天地は物を生じて、其生ずる所を愛す、譬へば父母の子に

於けるが如し、天地の生ずる所、乃ち是れ萬物のみ、其生ずる所の萬物の中、人類を愛すること最も重し、此れ人は萬物の靈たるに由るなり、是を以て吾れの人倫を厚うするもの、豈に啻に同胞に悖きのみならんや、抑も天地人を愛するの心に順つて、之れに事ふる所以なり、故に天地に事ふるの道、稟くる所の五常の性に率つて、人倫を愛するにあるのみ、人倫を愛するの中、父母に厚きを以て最も重しとなす、蓋し父母は人倫の本なり、厚うせざるべからず、親を親み、民を仁むの餘、又物を愛するにあるのみ、物を愛するに、又序あり、禽獸を愛するを先きとなし、草木を愛するを次ぎとなす、且つ君子の物に於けるや、之れを用ふること禮あり、之れを取ること時あり、之れを殘忍し、之れを暴殄すべからず、物を愛するも亦是れ天地の心に奉若する所以にして、之れに事ふるの一事なり、總て之れを論ずれば、中庸に所謂性に率ふを道といふ、是れなり、蓋し五常の性に率へば、則ち五倫の道、此れに由りて行はる、仁の性に率へば、父子親あり、義の性に率へば、君臣義あり、禮の性

に率へば、長幼序あり、智の性に率へば、夫婦別あり、信の性に率へば、朋友信あり、是れ人の道あるや、天性の中、固より有る所なり、

又其下に云く、

惟れ天地は萬物の父母、惟れ人は萬物の靈、故に人たるの道、終身の職業、唯〻天地に事ふるにあるのみ、此れ天地の子となして悖らず、萬物に靈にして恥ぢざる所以なり、天地に事ふるの道いかん、曰く、奉若畏敬して敢て違はざるにあるのみ、奉若して違はざるの道いかん、曰く、天の賦する所を存養し、天の生ずる所を愛育するにあるのみ、蓋し天の賦する所を心性となす、仁義禮智の如き、是れなり、宜しく保持して之れを存養すべきなり、天の生ずる所を人物となす、人倫と禽獸草木との如き、是れなり、宜しく親厚して之れを仁愛すべきなり、此れ心性を存養すると人物を愛育すると、乃ち天地に事へて奉若畏敬する所以の道なり、此二つのもの、固より體用の別ありと雖も、合して之れをいへば則ち仁のみ、人倫と品物と、其貴賤甚だ殊なり、故に親を親み、民を

仁み、物を愛するの厚薄、其差等同じからずと雖も、然れども其仁たるは則ち一のみ、

下篇に論ずる所は上篇の旨意と異なるものあるにあらず、唯、他語を以て同一の見解を述ぶるに過ぎざるのみ、尚ほ又益軒の論旨を總括して之れを述べんに、彼れ思へらく、天地は大父母にして、其人類に於ける恩、實に鴻大なり、故に其恩に報いざるべからず、其恩に報いんと欲せば、天地の心を體して、之れを遵奉せざるべからず、是れを天地に對するの孝となす、然らば其天地の心は果して那邊に於てか之れを認むべきといふに、天地は萬物を生ずるものなり、此れに由りて之れを觀れば、天地の心は生にあるなり、若し人類にして生を以て心とすれば、乃ち仁となる、是故に仁をなすは、即ち天地の心を遵奉する所以なり、仁をなすの法は、他なし、五常の本性に率つて同類を愛し、延いて禽獸草木に及ぶにあるのみと、其天地の心を愛に於て認識し、更に此れを以て人類の道德となすの意、殆んど春風の生氣を吹起すが如きの感なしとせず、益軒は又同

一の旨意を五常訓大和俗訓等に述ぶれども、其初學訓中に說く所最も丁寧親切にして實踐道德に裨益する所少しとせず、殊に其愛の理を詳悉するに至りては、哥林多前書第十三章に說く所より一層適切なるものあるが如し、今之れを看過せんこと餘りに遺憾多きが故に左に其文を擧げんに、云く、

およそ人となれる者は、父母これをうめりといへども、其本をたづぬれば、天地の生理をうけて生る、故に天下の人は、皆天地のうみ給ふ子なれば、天地を以て大父母とす、尙書にも、天地は萬物の父母といへり、父母は、まことにわが父母なり、天地は天下萬民の大父母なり、其上うまれて後、父母の養を得て生長し、君恩をうけて身を養ふも、其本をたづぬれば、皆天地の生ずる物を用ひて、食とし、衣とし、家とし、器として、身をやしなふ、故におよそ人となれる者は、はじめ天地の生理をうけて生るゝのみならず、うまれて後、身をはるまで、天地の養をうけて、身をたもてり、然れば人は萬物にすぐれて、天地のきはまりなき大恩

をうけたり。こゝを以て人のつとめてなすべきことわざは、わが父母につかへて力をつくすは、云ふに及ばず、一生の間、つねに天地に事へ奉りて其大恩を報じ奉らんことを思ふべし。是れなん、人となりて、つねにこゝろにかくべきことにぞあるべき。

人となる者は、つねに天地につかへて、其大恩を報ぜんことを思ひ、父母につかへて、孝を行ふが如く、天地に仁をつくし、わするべからず、仁とは、心にあはれみ有りて、人物をめぐむをいふ、是れ天のめぐみにしたがひうけて、天地につかふる道なり、是れ人の道とする本意にして、一生の間つとむべきわざなり、怠るべからず、忘るべからず、天につかへて仁なると、父母につかへて孝なるとは同じ、仁孝一理なり、人たる者の必ず知りて行ふべき理、これより大なるはなく、又是れより急なるはなし、すべて人は父母の家に居ては、父母に專に孝を盡し、君に仕へては、君に專に忠をつくすべきが如く、天地の中に在りては、天地につかへ奉りて、仁をつくすべし、人となる者、若しかゝる大事を知らで、

いたづらに日をおくり、世をすぐさば、一生を空しくして、人となれるかひなかるべし、人となれる者、是れを知らざらんや、是れ即ち人の道とする所なり、此外に若し道ありといはば、まことの道にはあらず、

天につかへて怠らずとは、人となる者、只朝夕天道の眼前にありて遠からざることを思ひ、つねに天道をおそれうやまひてあなどらず、かりにも天道を背き、無道のことをなすべからず、天道にしたがひてそむかず、わが身をへりくだりて、人をあなどりほこらず、欲をこらへて恣にせず、天地のうみていつくしみ給ふ人倫を、あつくあはれみて、あなどらずそこなはず、天地の人のためにつくり出し給ふ五穀と、よろづのたからを、わが一人の欲のためにみだりにつひやさず、次ぎに鳥獸蟲魚の生ける物をみだりにころさず、草木をも時ならずして、みだりにきらず、是れ皆天地のうみ出しやしなひて、いつくしみ給ふ物なれば、これをあはれみ養ふは、天地の御心にしたがひてそむかざるわざなり、かくのごとく萬物をあはれむを仁といふ、仁とは、あはれみの

心なり、是れ天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る道なり、人倫の內、親をしたしみ、次ぎに萬民をあはれみ、次ぎに鳥獸、およそ生けるものをそこなはず、是れ天地の御心にしたがひて、仁を行ふ序なり、親を愛せずして、他人を愛し、人を愛せずして、鳥獸を愛するは、不仁なり、

禽獸草木を愛するの敎は、原始基督敎に之れなきが如く、原始儒敎にも亦之れなし、益軒儒敎中の仁の意を擴充して遂に禽獸草木を包含するに至れるか、將た又此思想を佛敎より得來たるか、獨り人類のみならず、又禽獸草木を併せて之れを愛するの敎は本と佛敎中に之れあるなり、然れども儒敎中にも亦少しく之れに類するものなきにあらず、例へば、書經に「暴殄天物」といへるが如き、生物と非生物とを問はず凡そ天產物の損傷すべからざることを意味し、孔子の「斷一樹、殺一獸、不以其時、非孝」といへるが如き、一樹一獸と雖も妄りに損傷すべからざるを意味し、孟子が「君子之於禽獸也、見其生不忍見其死、聞其聲不忍食其肉、是以君子遠庖廚也」といへるが如き、君子の愛は、獨り同類に對するのみならず、又

延いて禽獸に及ぶことを意味するなり、益軒或は佛教慈悲の觀念に觸發せられ、是等儒教中の仁の意義を一層廣大に解釋せしものならんか、初學訓に又云く、

凡そ人は天地のめぐみを受けて生れ、天地の心を受けて心とし、天地の養を得て身をやしなふ、かゝる天地の大恩を受けて、天地の内にすみながら、天地の我れにあたへ給へる心の徳をすてゝ保たず、天地の道にそむきて行はず、其上天地の子として、あはれみ給へる人倫と、次ぎには、鳥獸をそこなひくるしめて、不仁なるは、天地の御心にそむきて、罪ふかし、是れ天地のにくみ給ふ所なり、天道はおそるべし、あなどりてそむくべからず、

人として天をおそれず、人をあはれまず、惡これより大なるはなし、惡を行へば、天のにくみ給ふ所、天のせめ、のがれがたし、卽時にわざはひあると、後に禍來るとのかはりあれども、惡をなして禍なきの理なし、又天地の御心にしたがひて、そむかざる人は、天地のめぐみありて、必

ず福あり、もしは其福早く來らざれども、後必ず福ありて禍なし、もし我身に福なければ、必ず子孫に至りて福あり、是れ必然の理なり、古の聖人の教、明かなり、聖人の言おそるべし、信ずべし、疑ふべからず、古を引くにも及ばず、近世にも、此ためし多し、

天地の生ずる所、人を貴しとなす、是れ仁義禮智の五常の性を受けて、人の道倫あり、是れ人の萬物にすぐれてたふとき所なり、此五常を失ふべからず、これを失へば、天地にそむきて、人にあらず、そのうへ人は天地の生ずる五穀のよき味、鳥獸魚介のうまき肉をくらひて、身を養ひ、布帛をあたゝかにき、家に居て、風寒暑濕をふせぎて、身をやすんず、衣食家居の養は、父母主君の恩によれりといへども、其本は、皆天地の生じ出せるたまものなり、されば人はかくのごとく、天地のきはまりなき御めぐみを受くること、萬物にすぐれたりかゝる大恩を受けて知らざるは、むげにおろかなり、天恩を忘れて、人とかく生れたる身の貴き理をいたづらになすは口をし、

おほよそ人は恩を知るべし、恩を知るを以て人とす、恩を知らざれば、鳥獸に同じ、君に忠し、親に孝するも、君父の恩を報ずるの道なり、此故に恩を知れる人は、必ず親に孝あり、君に忠あり、恩を知らざる人は、忠孝なし、忠孝なければ、人たるの道を失ふ、況や人として天地の大恩を忘るゝは、天地の爲めに、不孝の子なり、人道の本意を失へり、

凡そ天地のうめる所の萬物、皆是れ天地の氣をうけたりと雖も、其中に就きて、人ばかり貴きものはなし、いかんとなれば、人は仁義禮智信の五常の性あり、是れ天地の心をうけて本性とするなり、此身五倫に交り、生れつきたる五常の本性のまゝに順へば、五倫の道行はる、是れ先づ人の貴き大本なり、其上目に五色を分ち、耳に五音をわきまへ、口に五味を知り、鼻に五臭をかぐ、書を讀み、古を學んでは、天地人の道をさとり、萬物の理に通じ、古今天下のことを知る、是れ人の萬物にすぐれて、いと貴き所なり、故に尙書に人は萬物の靈といへり、靈とは、すぐれてあきらかなるたましひあるをいふ、人は全く天地の御心をうけ

て心とせり、此故に其心、靈なり、

天地の心とは、人と萬物をうみやしなひ給ふ御めぐみの道をいふ、其理、天地ひらけしより後、萬世までにかはらず、一年につきていはゞ、年々に春は生じ、夏は長じ、秋はをさめて、冬はかくす、此四時にめぐり行はるゝ道を、天道といふ、是れ天地の、萬物を生ずるめぐみの生理なり、此四時に行はるゝ道の名目を、元亨利貞といふ、是れ四時の理なり、これを天地の道とす、天は地をかぬる故に、すべてこれを天道といふ、仁とは、天地の萬物を生じ、養ひ給ふあはれみめぐみの理を、人の心にうけて、生れつきたるをいふ、仁を行ふの道は、先づ天地のうみて子として愛し給へる人倫を、あつくいつくしむにあり、人倫をあつくするの道は、先づ父母に孝をつくすを本とし、主君につかへて、忠を盡くし、親戚をしたしみ、家人をあはれみ、民をめぐみ、朋友に信あり、次ぎに萬民をあはれむ、是れ人倫をあつくするなり、次ぎには、鳥獸蟲魚を愛し、次ぎに草木を愛す、人倫は、我同類なり、天地のいとあつくあはれみ給ふ

物なる故、我れも亦天地の御心にしたがひて、人倫をあつくあはれむべし、次ぎに鳥獸蟲魚草木も、皆天地のうみ給へる物なれば、我同類にはあらざれども、すでに人倫を愛して後、是れをあはれむも、亦天地の御めぐみにしたがひて、天地につかへ奉る道なり、すべてかくの如く、人倫と萬物に情ふかきを仁といふ、仁とは人と物とを、あはれみめぐむ善心をいへり、天地につかへ奉りて、人の道とする理は、仁の外に出でず、仁は義禮智をかねて、其内にあり、

およそ天地につかへ奉る道は、人倫と萬物とを愛するにあり、其故いかんぞや、天地其うめる所を愛し給ふこと、人の親の子をあはれむが如し、人倫と萬物は、天地のうみて愛し給ふ所なれば、道れを愛するは、即ち天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る是なり、故に天地の恩を報ぜんと思はゞ、先づ我心に、天地よりうけたる仁をたもちて、其心にしたがひて、五倫をあつく愛し、次ぎに萬物を愛すべし、是れ即ち天地につかへ奉りて、其恩を報ずる道なり、人の道の本意とすること、

此外にさらにあるべからず、人となれる者つとめてこれを知りて行ふべし云云、

此の如き言は、眞に純潔淸廉なる動機を有する君子人にあらざるより、口、之を發すること能はず、益軒の訓戒する所、獨り靑年の身に有益なりといふ而已ならず、又如何なる老學者と雖も、之を實行して終身盡きざるを見るべきなり、但し彼れ餘りに謙遜和順なる宗敎的情操の一方に偏して、大膽豪邁なる知的抱負に於て、未だ人意に充たざるものあり、尙ほ是等の事に關しては、批評の條に於て論ずる所あるべきなり、

（四）　知行並進說及び其他の諸說

益軒は陽明の知行合一論に對し、知行並進說を主張せり、彼れ以爲へらく、先づ行ふべきことを知るにあらざれば、之を行ふこと能はず、已に知ると雖も、之を行ふこと能はざれば、其知る所全く無用に屬す、知ると行ふとを比較すれば、行ふは卽ち目的なり、知るは畢竟行ふが爲めに知るなり、是故に行を以て重しとなす、然れども先づ知るにあらざれば、何事

も行ふこと能はず、知る所も、之を行ふて後、眞に之を知ることを得、之を知ること進むを得ば、之を行ふことも亦進むを得、之を行ふこと進むを得ば、之を知ることも亦進むを得と、是れ知行並進説なり、是れ蓋し朱子の思想に本づくものにして、其知先行後説と毫も相戾るものにあらざるなり、(愼思錄卷之一、四及び六)

其他彼れは人心の神明は天神の我れに在るものとし、天神と人心の神明と、本と自ら一般にして、只統體と各具との差別あるのみ、故に人の自ら欺くは、卽ち天を欺くものとせり、亦一種の神明論なり、(愼思錄卷之三及び四)又彼れ性に就いては仁齋と同じく單に氣質の性をのみ認容し、氣質の外に本然の性あるにあらずと斷言して、程朱と相背馳する所あり、然れども彼れは本然は卽ち氣質の本然として、反りて程朱の眞意を得たりと思惟せり、(愼思錄卷之四及び自娯集卷之五)彼れ又我國體を重んずるの念を懷き、時勢境遇を異にせる支那の制度を取りて、妄に我邦を律すべからざることを痛論せり、其言に云く、

綱常倫理は、天下の常經なり、萬世に亘り、四夷に通じて、變易すべからず夫の禮法制度の如きは、古今宜しきを異にし、華夷俗を殊にし、時に隨ひ處に隨つて相同じからざるものあるは、自然の理なり、故に天下の事、固より古に於て行ふべくして、復た今に於て行ふべき者あり、又古に於て行ふべくして、今に於て行ふべからざる者あり、中華に於て行ふべくして、復た本邦に於て行ふべき者あり、中華に於て行ふべくして、本邦に於て行ふべからざる者あり、古今華夷の宜しきを異にする、此の如し、然れば則ち今の行を制する者、須らく古今華夷の宜しきと否とを斟酌して之を去取すべし、是れ時の宜しきを知ると爲すべきなり、苟も時俗土地の宜しき所を測らず、妄りに中華の古禮を執りて、之を本邦の今世に行はんと欲するは、譬へば舟車の宜しきを水陸に異にし、裘葛の用を冬夏に殊にするを知らざるが如く、固陋の甚しきなり、是れ道の行はれ難き所以なり、(愼思錄卷之三)

是れ當時にありては、誠に卓見なりとなす、何んとなれば、一世の風潮、滔

々として支那を模倣することを期すればなり、維新以來西洋を模倣するに當りても、亦彼國の制度を取りて、强ひて我邦を律せんとするの弊なしとせず、乃ち知る益軒の言、今日にありても、能く適中する所あるを、益軒又嘗て「本邦七美說」を著はして我日本に七種の長處あるを論證し、又「國俗論」を著はして、論じて曰く、

本邦風俗本自淳美、超軼華夏者亦多矣、如節義驍勇廉恥之類是也、如眞儒輩出、文教盛興、倡而導之、則變而至於道、亦不難矣、

と、亦其識見の存する所を見るべきなり、彼れ又我皇統一系に就いて論じて曰く、

夫本邦之帝胤、萬世傳繼不易、此一事可爲吾邦之一大美事、萬世不易之法、而中華暨諸夷之所以不及也、（愼思錄卷之四）

白石鳩巢の徒が皇室を蔑如し、直方尙齋の徒が皇統を冷笑すると何等の差異ぞや、

今左に益軒の著書中に散見する格言を抄出せん、

一

人生れて學ばざれば、生れざると同じ、學んで學を知らざれば、學ばざると同じ、知りて行ふこと能はざれば、知らざると同じ、故に人たる者、必ず學ばざるべからず、學を爲す者は、必ず道を知らざるべからず、道を知る者は、必ず行はざるべからず、道を知ること至りて難し、古より英才敦行の士、多からずとせず、然れども道を知る者鮮し、學問思辨の功、闕くべからざる所以なり、

二

顔之推曰く、「人生難得、勿過空」と、斯の言旨有る哉、蓋し群生の中、人と爲ること難しとなす、且つ再び生まるゝこと能はず、豈に空しく此生を過すべけんや、惜む可し、醉生夢死し、枉げて一生を過すことや、苟も人となりて人道を聞くこと能はざれば、長生不死と雖も、空しく過ごすと爲す、然らば則ち人となりては須らく道を聞かんことを要すべし、道を聞くの工夫、又唯能く學ぶに在るのみ、

三

人生百歳に滿たず、豈に放蕩にして日を曠うして、而して空しく斯生を過ごすことを惜まざるべけんや、古人の曰く「天地有萬古、此身不再得、人生只百年、此日最易過、幸生其間者、不可不知有生之樂、又不可不懷虛生之憂」と、此言時に省みるべし、

四

志士は日を愛む、蓋し百年の期、保ち難くして、時日の逝きて過ぎ易く、萬端の事繁重にして、而して進修の功成り難きを懼るゝなり、而して人生最も日を愛むべきの時三あり、其一は幼弱の時、記憶と精力と倶に盛んなり、故に博聞強記の功成り易し、一たび記誦すれば則ち終身忘れず、此時精勵せば則ち一日の功以て十日に當るべし、此れ學者の當に日を愛むべきの時なり、其二は少壯の時、父母既に老い、久しく侍養すること能はず、是を以て定省の功、一日も怠廢すべからず、此れ人子の當に日を愛むべきの時なり、其三は老境衰殘の日、躬既に仕を致

せば、則ち公事鹽無きの勤勞無し、此時に方りて須らく其死期の迫近するを思ふて、而して日々娛樂優游して身を終ふべし、此れ老衰當に日を愛むべきの時なり、夫れ善く勤勞し、善く娛樂するは君子一張一弛の事、一時を以て一日と爲し、一日を以て十日と爲し、一年を以て十年と爲す、是れ日を愛むなり、遜志齋曰く、善愛其身者能使百年爲千載こと、亦此意のみ、能く娛樂し能く勤勞せざれば、則ち日々空しく過ぎ、年年徒らに度り、怠惰にして生を虛うし、憂苦して身を終はるのみ、

五

衆人の人たると、草木禽獸の物たると、其生は則ち異にして、其死は則ち同じ、何となれば則ち衆人下愚と雖も、其生ける時亦皆五品の交、四民の業あり、且つ衣食の養、屋室の安ありて、誠に禽獸と同じからず、其既に死するに迨んでや、一に腐壞に歸す、德行の人に遺すなく、令名の世に傳ふる無く、一時に澌え盡きて而して餘り無く、草木禽獸と異なること無し、人たる者、豈に之れを恥づることを知らざるべけんや、如

し之を恥づれば學を爲すに如くはなし、學んで而して得ることあれば、則ち德澤功名、後世に流れて而して滅びず、虛く生きずとなす、此れ君子沒して後、衆人及び禽獸草木に異なる所以なり、

六

君子の世に處するや、常あり、變あり、常に居らば、固より宜しく勤愼すべく、變に逢はゞ最も須く力を用ふべし、大凡大節に臨んで奪ふべからずして、而して後其君子たるを見る、苟も此處に於て一たび節を失へば、平日他の善の稱すべきありと雖も、亦觀るに足らざるのみ、

七

司馬遷曰く、「要之死日、然後是非乃定」と、愚謂ふ、要は及ぶなり、衆人の行、初め節正にして、而して晚節を保たざる者之れあり、故に曰ふこと然り、蓋し初節を愼む者は、血氣のしわざなり、故に易しと爲す、晚節を保つ者は、德行の力なり、故に難しと爲す、初節は愼むと雖も、晚節を保たざれば、則ち平生の爲す所、皆虛妄となる、故に晚節を保つを重しとな

す、學者最も力を著くべし、

八

衆人富に居て多く貧を忘る、須らく節儉にして奢侈なかるべし、貴きに居て多く故舊を忘る、當に存卹して疎んぜざるべし、歳長じて多く父母を忘る、宜しく身を終るまで思慕すべし、病愈えて多く愼みを忘る、須らく安樂にして常に病苦の時を思ふべし、凡て自ら修むる者は、當に初を忘るゝを以て誡となすべし、

九

聖賢と殘賊と、其人既に沒すと雖も、善惡の芳穢、千載に流れて、而して休まず、人の一身、豈に生前百年血肉の軀に止らんや、抑も身後千歳毀譽する所の美惡、亦是れ其の身分内の事となすべし、然れば何ぞ聖愚同じく腐つて餘りなしと謂はんや、

十

蓋し義ありて利自ら來らば、則ち義に於て害なし、只義を舍てゝ利を

取り利の爲めにして義を行ふ者は不可なり、苟も義を以て主と爲さば、則ち利も亦た義なり、利を以て主と爲さば、則ち義も亦利なり、公私の間に在るのみ、蓋し利は人に施すべくして、己れに專らにすべからず、夫子罕に利を言ふ、利を言はざるに非ざるなり、

十一

危きに臨んで懼れず、義に當つて其身を愛せず、是れ君子變に處するの道、此の如くせざるべからず、須らく此に於て能く勇猛果敢にして而して奮發すべし、若し恐怖して苟も免るれば則ち平日小廉曲謹ありと雖も、觀るに足らざるのみ、蓋し大節に臨みて奪ふべからざれば、君子人となす可きなり、

十二

心を平にし、氣を和にす是れ身を養ひ、德を養ふの工夫、

十三

君子の智は廣うして倚らず、譬へば高山に登りて四方を望むが如く、

見る所廣遠、其規模の大なるなり、小人の智は狹うして偏なり、譬へば管を以て天を窺うが如く、能く一偏に通ずと雖も、其量たるや小なり、

十四

其好惡する所を看て、其人知るべきのみ、

十五

善をなす者は、其道を馴致することを須ふ、蓋し積習して已まざれば、則ち必ず其功を成して、自然の如し、然れば善をなす者は、馴致の功、貴ぶべし、惡をなすも、亦馴致のみ、

第四　批判

惺窩時中以來朱子學を崇奉して立つもの、果して其幾千萬人なるを知らず、然れども益軒の其間にある、實に孤鶴の群鷄中にあるが如く、殊に卓絶せるものなり、若し德行家として之を觀れば、優に木下順菴及び室鳩巢と雁行するに足る、若し博識家として之を觀れば、優に林羅山及び新井白石と並立するに足る、然れども吾人は其他の點に於て益軒の夐然一頭地を群儒の間に拔くを觀る、何ぞや、他なし、彼れが倫理に關する最も有益なる著書を最も多く世に公にせしこと、是れなり、固より朱子學派の手に成る所の著書、啻に汗牛充棟のみならず、然れども多くは是れ經書の註解にあらざれば、朱子の學説の鸚鵡的反復若くは閑文字たる詩文集の類のみ、若し强ひて倫理に關する一家の見解を敍述するものを擧ぐれば、僅に鳩巢の駿臺雜話、惕齋の講學筆記、尙齋の狼疐錄及び默識錄の類あるのみ、何ぞ其れ寥々たるや、然るに益軒の如きは、其研究

の事項、極めて多方面に涉れるに拘はらず、倫理に關しても、亦一家の見解を叙述する所少しとせず、卽ち愼思錄あり、大疑錄あり、自娛集あり、其他初學知要、自警編、克明抄、家訓、五常訓、大和俗訓、和俗童子訓、初學訓、文武訓、家道訓、君子訓等、枚擧に遑あらず、何ぞ其れ豐富なるや、鳩巢、惕齋、尙齋等の一家の見解を叙述せる著書を悉皆合一するも、未だ以て益軒に比敵するに足らざるなり、且つ益軒の著書は、悉く躬行に裨益あるものにして、是れを千古不磨の價値ありといふも、未だ必ずしも否定するを得ざるべきなり、此點より之を言へば、益軒の如きは、朱子學派中にありて屹然挺拔せるものなり、

益軒は又我邦に於ける敎育家の元祖ともいふべき人なり、王朝時代にありては菅原氏大江氏等力を敎育に用ひ、德川時代にありては惺窩、羅山、順菴、闇齋等の諸儒、亦皆敎育に盡す所なしとせず、然れども是等の學者は、未だ曾て敎育其物に就いて考察する所あらず、卽ち敎育の目的、方法、順序、範圍等に就いて未だ何等の定見を有するに至らず、然るに益軒

は始めて教育其物に就いて考察し、教育學の端緒を開けり、殊に彼れが女子教育に着眼せしが如き、大に稱揚すべき所なりとなす、彼れ自身は京坂に江戸に福岡に往來頻繁なりしを以て家塾を開いて多く子弟を教育するの機會を得ざりしと見え、彼れが門人として數ふべきもの、僅々數人のみ、然れども彼れは其有益なる著書によりて廣く社會教育を施し、隱然一大勢力を及ぼしたるものゝ如し、又彼れの教育說がヘルバルト氏のそれと殆んど同一轍に出づるものあるは、明治の教育家をして往々驚嘆せしむる所なり、他の點は姑く之を置き、教育の目的に於て益軒とヘルバルト氏とは全然一致せり、ヘルバルト氏は教育の目的は德性を涵養するにありとせり、(Herbart: Aphorismen zur Pädagogik) 然るに益軒も亦氏と同一の精神を懷き、大和俗訓の爲學篇に於て十分に德性を涵養するの要を論じ、更に初學訓(卷之三)に於て學問の道は、他なし、只道をしりて、善惡を明かに分ち、善を行ひ、惡を去るにあり、

といひ、又愼思錄(卷之一)に
爲學之道、唯以爲善爲事而已矣、
といひ、又自娯集(卷之一)に
大凡學也者欲爲君子之道也、
といひ、分明に敎育の目的の德性を涵養するにあるの旨意を道破せり
東西の暗合、甚だ奇なるが如しと雖も、超實際的立脚點より敎育を論じ來たれば、必然に此に到着せざるを得ず、ヘルバルト氏曰く、
プラトンよりフヒテに至る迄敎育に就いて多少思惟し、且つ書き著はせる偉人は、皆理想に向つて努力することを示せり、而して如何にして然らざることを得るか(Aphorismen zur Pädagogik)
眞に然り、然るに益軒の如き東洋の敎育家も、亦理想に向つて努力するの一人たることを忘るべからざるなり、此點より之を觀れば、尙ほ一層益軒の蠢々たる群儒の間に卓絕せる姿勢を想見するを得べきなり、
益軒本と朱子學を崇奉すと雖も、世界の根本主義に關する理氣の說に

於ては之に從はずして、唯氣の一元を信じ、殆んど仁齋と歸着する所を同うするが如し、是故に或は益軒の學は仁齋の學に本づくにあらざるかと疑ふものなしとせず、然れども益軒の學の羅整菴に本づくこと愼思錄及び大疑錄によりて明かなり、而して益軒の學の仁齋に本づくの證、一も有るなきなり、蓋し羅山、仁齋、益軒等皆期せずして同じく唯氣論に歸着せしものならん、益軒は唯氣論及び之と關連せる氣質論に於ては朱子と相容れずと雖も、其他の點に於ては、大抵朱子による、故に之を仁齋に比すれば、遙に朱子に近く、之を朱子學派といふも、羅山を朱子學派といふと同じく、毫も適切ならずとせざるなり、朱子と殆んど何等の共通點をも有せざるものは、徂徠なり、徂徠に比すれば、仁齋は遙に朱子に近く、益軒は又一層朱子に近きものなり、益軒と仁齋との學說の相違點を擧ぐれば、第一、仁齋は古學を主張して朱子を攻擊すれども、益軒は朱子を尊崇して、未だ必ずしも古學を主張せず、益軒亦曾て古註疏の廢すべからざることを言へども、固より朱子の新註を以て先きとするも

のなり、第二、仁齋は宋儒の寂靜主義 Quietism に反して活動主義を主張すれども、益軒は未だ嘗て活動主義を主張せず、但〻愼思錄〔卷之二〕に

苟も忠信を以て主とせず、徒に敬を以て一心の主宰とせば、是れ工夫を以て心の主となす、恐くば敬に偏して、流れて束縛强持の病とならん、

と云ふが如く、頗る宋儒の寂靜主義に反するものゝ如し、然れども彼れは仁齋の如く整々堂々活動主義を標榜して立つものにあらざるなり、第三、仁齋は孟子に本づき、仁義を以て道とせり、然るに益軒はいかん、愼思錄〔卷之二〕に、

蓋し理一は仁なり、分殊は義なり、

といひ、自娛集〔卷之四〕に、

人、天地を以て父母となす、生れて澆漓の世にありと雖も、天地の道を奉若し、之を法則として、仁と義とを立てずんばあるべからず、是れ人道の立つべくして廢すべからざる所以なり、

といふを以て之を觀れば、彼れ必ずしも仁齋の說に反せざるべし、然れども大疑錄（卷之上）によれば、彼れは寧ろ易の繫辭に本づき、陰陽卽ち氣を以て道とするものなり、而して未だ會て仁義卽ち道なりと斷言せしことあるを見ざるなり、兩者の間に於ける差異點は此三種に過ぎざるのみ、

益軒は快樂を以て人類の本來有する所となし「樂是人心所固有說」を著はして之を論じ、又人類は高尙なる快樂を求めて、自ら修養する所あるべきものとし、頤生輯要の末に樂志の一篇を加へて之を論ぜり、彼れ必ずしも快樂を以て苦痛より多しとは斷言せざれども、己れに固有する所の快樂を修養すれば、其結果苦痛は快樂より少からざるを得ず、是故に彼れの懷抱する所は厭世主義 Pessimism にあらずして寧ろ樂天主義 Optimism と見るを得べし、又「禍福論」を著はし、論じて曰く、

古語に曰く、天道好還と、蓋し善惡必ず禍福の應あり、是れ天道自然の理、古今華夷吉凶僭はず、但遲速の異あるのみ、是れ必然の驗、甚だ昭晰

として、信ずべく、且つ畏るべきなり、夫れ君子の善をなすは、道の爲めにす、福を徼るに意あるにあらず、法を行ふて命を俟つのみ、云云（自娯集卷之二）

是れ純然たる福徳合一論なり、是れ西洋にありてはソクラーテスの如き希臘の古賢を首めとし、後の哲學者ホッブス、スピノッツア、ウォルフ、シャフツボリー、ヒューム等の諸氏に至る迄皆福徳二者の必然的關係を認容せり、原因結果の關係は獨り物理界に於てのみ之あるにあらず、又倫理界に於ても之あること餘りに明瞭なる事實なり、因果應報てふ事も、若し單に之を倫理界に限るとせば、決して否定するを得ざるなり、乃ち益軒の自得する所に至りては、往々西哲の言ふ所と暗合するものありて、後人をして趣味を感ぜしむること、鮮少なりとせざるなり、又益軒は反覆丁寧に仁愛を以て天地の本體となし、隨つて天地の恩の洪大なるを明かにし、次いで吾人々類の此れに對し仁愛の實を擧げて、必ず報いる所なかるべからざるを說示せり、其旨意たる、差「ストア」派の合自然的生活

Das naturgemässe Leben (ὁμολογουμένως τῇ φύσει ζῆν) に似たる所あれども、之に比すれば一層情熱ありて、寧ろ基督教の宗教的觀念に近き所あり、殊に彼れが仁愛を論ずるの旨意に至りては哥林多前書第十三章のそれと符節を合するが如し、是に於てか東賢西賢、其揆一なりといふべきなり、

益軒は殆んど人格を完成したる教育家なり、又其識見の如きも往々卓拔なるものあるは、上來論ずる所によりて明かなり、殊に當時の儒者と稱するもの、大抵皆漢文を以て高尙となし、國字を以て道を論ずるもの比較的少數なるに際し、彼れ獨り心學派に先ちて已に通俗的の著書をなしゝが如き、今日より之を見れば、寧ろ卓見なりとなす、但彼れが餘りに謙遜に、餘りに和順なるが爲めに、大膽に其知識を發展し、此れに由りて痛快に其見る所を論斷するの擧に出でざるは、聊遺憾なりとせざるを得ざるなり、例へば天地の恩を說くが如きは、毫も不可なしと雖も、地震、洪水、海嘯、及び其他の天災地妖の如き、如何にして此洪大なる天地の

恩と調和するを得べきか、感情上より之を言へば、是等の事を思惟するは、已に天地の恩を傷つくるが如しと雖も、知識上より之を言へば、何等か十分人意を充たすが如き解釋なかるべからざる所なり、

善人は胸中の善庫より善なるものを出だし、惡人は胸中の惡庫より惡なるものを出だす、蓋し是れ胸中に充つるが故に口頭に溢るゝなり、

馬太傳第十二章第卅五節

第五　益軒關係書類

益軒先生年譜三卷寫本○貝原好古編撰

此書の最後の部分は存齋の子卽ち益軒の姪可久の撰錄する所に係る、

益軒先生墓誌銘竹田定直

貝原篤信遺事畧一卷逸名

此書は事實文編〔卷之二十〕に收載せり、

熊貝遺筆二卷寫本○撰人名闕

近世畸人傳〔卷之二〕

日本詩史〔卷之三〕

閑散餘錄〔卷之上〕

先哲叢談〔卷之四〕

近世叢語〔卷之一〕

先哲像傳（卷三）
近世名家書畫談（下卷）
群書一覽
儒學源流
近世名家著述目錄
慶長以來諸家著述目錄
春臺文集
熊澤蕃山傳
紹述文集
日本諸家人物誌
鑒定便覽
日本儒林傳　澁井太室著
野史
大日本史料原稿一卷

日本名家人名詳傳
大日本人名辭書
貝原益軒一卷　沖野辰之助著
日本偉人傳
甘雨亭叢書
日本近世教育史　横山達三著
日本倫理史稿　湯本武比古石川岩吉共編
益軒の教育學　三宅米吉著
實用教育學及教授法　谷本富著
益軒樂觀一卷　西田敬止編次

余は唯一回此世を經過すべし、是故に如何なる善事にせよ、若し余が之れを爲し得るならば、若くは如何なる親切にせよ、若し余が人に示し得るならば、今之れを爲すべし、余をして之れを延期し、若くは懈怠せしむること勿れ、余は再び此道を經過せざるべければなり、

マルクス、アウレリウス

第三篇　南學及び闇齋學派

第一章　南學起原

慶長元和の頃藤原惺窩が朱子學を京師に唱道し、所謂京學の基礎を置くに當り、之と全く系統を異にして、谷時中なるもの、朱子學を海南に唱道す、是れを海南學若くは南學となす、時中名は素有、字は時中、通稱は大學、後、三郞左衞門と稱す、土佐の人、彼れ本と惺窩と同じく、圓頂緇衣の人にして、高知の眞常寺に住す、彼れ曾て眞宗の僧天室に從つて學び、後、天室の師南村梅軒が朱子學を奉ずることを聞き、百方捜索して、朱子の書を見んと欲し、遂に語孟朱註、學庸章句、朱子文集等を得て、之れを讀了し、浮屠の人倫を廢棄することを慙愧し、乃ち髮を蓄へて還俗し、儒と醫とを以て高知に敎授す、時に元和の初めなり、時中嘗て天室が大學の「生財有大道」の章を講說するを聞くに、講じ畢りて人に語りて曰く、

　貲財は人を殺し、身を喪ふの本なり、其之れを有することの難からん

より之れなきの易きに若かず、

と、時中乃ち曰く、

財本と人を殺すに心なし、人貪奪し、自ら敗亡を取る、譬へば明燈の蛾を殺さゞれども、自ら明燈を撲つが如し、眞に閔むべきのみ、

と、天室大に之れを奇とせり、時中眞常寺に住せし時、謙退して人に降ることを欲せず、權要の士に遇ふも、唯〻長揖して、未だ嘗て之れを拜せず、貴冑豪族に遭ふも、唯〻其名を呼ぶのみ、樣の字を付して之れを稱することなし、故に人以て矜誇なりとなす、一士人あり、大に其不遜を怒り、刀を揮つて之れを恐嚇して曰く、

貴僧何の德ありてか、常に士大夫の上にある、若し一言の說くべきなくんば、身首處を異にせん、

と、時中神色變ぜず、自若として曰く、

爾が欲する所に任す、我れ死生を視ること、一の若し、何ぞ以て恐るゝに足らんや、

と、士人之れを異として遂に害を加へず、以て時中の人となり如何を想見すべきなり、時中資性豪邁にして畏敬する所なしと雖も、晩年に至りて程朱を尊信すること、愈〻益〻堅確に、力を修養に用ふること深く、平素の行動に於て愼まざる所なし、是故に其子弟に對する教育の如きも、亦頗る嚴なるものありき、時中の學を講ずる頃は、戰國の後にして、文運未だ闢けず、書を獲ること極めて難し、況や海南僻陬の地に於てをや、然れども彼れ捜索の勞を厭はず、乃ち書を京師に浪華に長崎に求め、積年の久しき、之れを蓄藏すること少しとせず、彼れが家本と貧ならざりしも、多く書を購求するの故を以て資財爲めに蕩盡す、彼れ嘗て曰く、

富貴も志を失へば、田產數百石、此れ以て子孫に嘉詒する所以にあらざるなり、吾れ聖賢の書を讀んで、道義を講明し、之れを以て後に傳ふるに若かず、

と、彼れが田產を以て子孫に傳ふるに足らずとして、心中別に期する所あるは、西郷南洲が

我家遺法人知否、不爲兒孫買美田、

と云へると同一轍に出づ、唯、其異なる所は後者は豪傑、前者は學者なりと云ふにあるのみ、又彼れが田產の代はりに道義を子孫に傳へんと欲せるは、釋迦が羅睺羅に其菩提樹下に得たる所を傳へて、此れを以て世間の財寶より七倍貴重なりとするの精神と符節を合するが如し、時中慶安二年を以て歿す、時に年五十二、著はす所文集六卷及び語錄四卷ありと云へども、吾人未だ之れを得ること能はず、未だ其果して今日尙ほ現存するや否やを知らず、時中の門人に小倉三省、野中兼山及び山崎闇齋あり、皆一時の傑物なり、殊に闇齋は朱子學の勃興に與りて力あるものなり、時中も三子の凡ならざるを認識し、遇するに弟子の禮を以てせず、三子も亦時中が人となりに心服し、感化を受くること少しとせず、就中闇齋の如きは、時中の態度に倣ふ所最も多大なるを知るべきなり、

時中の門人中小倉三省最も年長者たり、三省、名は克、字は政義、通稱は彌右衞門、三省は其號なり、土佐の人、三省、士人の家に生まれ、國侯に仕へて

火器隊長となり、又中大夫となり、尋いて上大夫となり、國政上功を建つること少しとせず、時に野中兼山も亦國侯に仕へ、其天稟の能才を以て頻りに赫々の功を成し、殆んど三省をして後に瞠若せしむるの看あり、是れ蓋し二人性行の大に相異なるものあるが爲めなり、未だ此れに由りて遽に三省の人物を藐視するを得ざるなり、兼山は人となり剛毅英特にして、勇往直行、毫も他を顧みず、其思ふ所を遂げざれば已まざるの概あり、故に事往々人情に背き、利する所多しと雖も、害する所も亦少からず、漸く怨を含んで背後に呟ぐものあるに至れり、之れを要するに、兼山は才餘りありて德足らず、三省は才は兼山に及ばずと雖も、德は反りて優れり、三省人となり、溫柔寬宏にして、物と忤ふことなく、進退坐作、急遽を好まず、殆んど兼山と正反對の資性を有せり、兼山は三省に取りて本と時中門下の學友たるを以て、彼れ嘗て之れを諫めて曰く、

公强ひて人を知らんと欲せば、好んで明を用ひよ、その照らすこと自然にあらざれば、恐くば反りて過察に入らん、云云、兢々業々として須

く事を始めに愼むべく悔を後に貽すこと毋れ、

三省歿するに及んで爭友の缺點を指摘するものなく、事稍〻安穩なるを得たり、是を以て兼山遂に其終りを全うすること能はざりき、三省嘗に君に忠なるのみならず、又親に孝にして、坦懷虛襟、衆善を取るを喜ぶ、居る常に自ら奉ずること儉素にして、餘あれば乃ち窮乏を賑卹し、全く慈善家の態度ありき、彼れ恒に人に謂つて曰く、

我性、聲色臭味の欲に於て自ら淺く、敢て心を役すること乏し、

と、彼れ其政をなすこと嚴なりと雖も、愛を失はず、一に國民を安ずるを以て己れが任となす、嘗て廳壁に書して曰く、

一命の士、苟も心を物を愛するに存せば、則ち人に於て必ず濟ふことあらん、

常に見て以て之れを心に戒めたりといふ、彼れ又嘗て謂へるあり、曰く、

學者當に止まるを知るを以て學、至處を得るの效證となすべし、萬事各〻當に止まるべきの處あり、其大なるものは、人の子となりては孝に

止まり、人の臣となりては忠に止まるの類なり、其小なるものは、手の容は恭しく、足の容は重きも、亦手足の當に止まるべきの處なり、若し能く止まるを知りて、志定まれば、外物の爲めに移されず、異端の爲めに眩せられず、大に行ふと雖も加へず、云云、今書生貧賤に戚々として、富貴に施々たるは、皆止まることを知らざるによるなり、是の如くなるものは、博聞強記も、更に何の見る所かあらんや、乃ち無用の糟粕のみ、

茲に止まると云へるは、今日にありては、主義方針を確定するの意味に解せば、可ならん、彼れ承應三年の夏、父の喪に丁り、哀戚すること甚しく、爲めに削瘦して疾を致し、秋七月十五日に至りて卒す、時に年五十一、門人長澤潛軒、谷一齋等あり、彼れ嘗て弟子を敎へて曰く、

學は其れ知るべきなり、行ふべきなり、涵養は須く主一を用ふべく、理を窮むることは書を讀むを以て要となす、書を讀むは氣を平にして商量するにあり、迂濶なること莫れ、奇異なること莫れ、看來たり看去

りて、至當の義に歸するのみ、

唯惜むらくば遺著の學說を徵すべきものなきを、

野中兼山、名は止、字は良繼、小字は傳右衞門、兼山は其號なり、土佐の人、三省と同じく時中に學び、後國侯に仕ふ、兼山、朱子の書を四方に求めて之れを攻究す、然れども此時に當りて書籍、尙ほ甚だ乏し、因りて歲ごとに人を長崎に遣し、舶來の書を購求し、或は之れを飜刻して以て後學に利する所あり、又山崎闇齋は當時の鴻儒にして、實に南學系統の巨擘たり、然るに始めて闇齋を慫慂して朱子學に就かしめしものは兼山なり、兼山の朱子學に功ある、以て知るべきなり、然れども兼山は學者といふよりは寧ろ事業家にして、最も經濟地理に長ぜり、蓋し彼れの人格は頗る熊澤蕃山に似て、尙ほ多少の差あるものなり、蕃山は衆に絕する深智ありて其經營する所、情理相兼ぬるが如し、然れども兼山は敏惠急峻にして、事を成すこと速なりと雖も、人情に於て或は顧みざる所あり、乃ち兼山の蕃山に及ばざるものあるを知るべきなり、閑散餘錄〔卷之上〕に兼山

が事を叙して云く、
土佐の地は、山多くして水がゝりあしゝ、然るを山を穿ち、溝渠を通じ、艸萊を開き、農作の利をなせり、
兼山一生の事業、實に此にあり、又彼れが特殊の場合に於ける英斷と功績との如きは、大高坂芝山之れを南學傳〔上卷〕に記述せり、要するに、兼山は敢爲決行の精神に富める事業家にして、決して蠹書堆裏に埋沒する腐儒の徒にあらざるなり、然れども人となり嚴毅にして其政を行ふや、峻法假すことなし、三省常に之れを諫めて曰く、
古の功臣、終りを善くして、福祿子孫に及ぶもの、皆德量寛大、仁を垂れ、惠を布く、若し夫れ嚴刑重罰、一時效をなすと雖も、其積怨畜禍、亦未だ自ら全うするものあらず、吾子よく之れを慮れ、
と、兼山以て善言となす、然れども終に改むること能はず、彼れが唯一の爭友たる三省歿してより己れが偏向する所に安んじ、屢〻功を立つることを恃んで、奢侈を長じ、樓門を高くし、池園を大にし、歌舞に耽り、歡樂を

極む、是に於てか之れを怨むもの愈〻多く、遂に諸大夫と隙を生じ、寛文三年貶黜せられ、尋いで病歿す、或は云ふ、死を賜ふと、又云ふ、自殺すと、何れにせよ、決して其終りを全うせしものにあらず、南學傳に兼山を以て病歿するものとすれども、然れども死後の狀況を敘して云く、

赴を聞いて遠近みな驚く、當時禮によるに宜しからず、速に潮江山に瘞む、

此れに由りて之れを觀れば、何等か怪しき秘密の其間に埋伏せしを察知するを得べきなり、果して然らば、三省の豫言、鑿々竅に中れりと謂ふべきなり、

三省兼山の二人に學ぶもの、長澤潛軒あり、潛軒名は虎、字は小貳、通稱は文藏、潛軒は其號なり、京師の人、父道壽、醫を以て業となす、是を以て潛軒も亦醫術に通じ、兼ねて曆算に長ず、久しく江城に寓し、又京師に住す、故に其名兩都に顯はれ、信從するもの少しとせず、喬松子〔卷之四〕の註に云く、

存々持敬、乾々不息、只是勤謹之功、無間斷而已、是長澤翁之說、

此れに由りて之れを觀れば、潛軒平生此の如きことを主張せしものと見ゆ、彼れ延寶四年五月を以て病歿す、年五十六、門人飯室與五右衛門、土岐重元等あり、

次ぎに三省の門人として尙ほ谷一齋あることを忘るべからず、一齋、名は松、字は宜貞、小字は三介、一齋は其號なり、又己千と號す、時中の子なり、一齋土佐を去りて京師に移り、後、又江戸に赴き、稻葉侯に遊事す、晩年に至りて之れを辭す、南學傳の跋に西都の高愼夫が來書を載す、云く、

谷己千子自少至老、終始如一、學問精切、踐履篤實、出處義既正、窮困操益堅、我儕之師表、南學之領會也、不幸不遇、牢落終身、眞可哀哉、

是れ蓋し一齋が平素の性行と處世の狀況とに就いて正確なる消息を洩らすものならん、一齋の門人に莊田琳菴、大高坂芝山、江木三壽、松田正則あり、一齋曾て芝山に謂つて曰く、

悅由忍後到、樂自苦中來、

洵に名言なりといふべし、

莊田琳菴、名は靜、字は子默、通稱は萬右衞門、琳菴は其號なり、武藏の人、丹波の龜山侯に仕ふ、琳菴資性特異にして、才識に富み、志を立てゝ自ら勗む、嘗て學者の志ありて行未だ果斷ならざるものに說いて曰く、

學は當に水を習ふが如くなるべし、之れを淺處に習ひて、而して後、深きに向ふ、沒溺、死せんと欲するもの數次、方に始めて功を見る、若し其溺るゝを懼れ、淺處を離れ得て了はらざれば、終身水にあつて亦數尺の水を游泳すること能はず、

琳菴本と溫柔の人たりと雖も、其得失を論ずるに當りては、直言敢語、利害いかんを顧みざるの槪あり、是を以て人に忌憚せらる、寛文十年君侯病逝し、群小志を得て、事を內に謀る、彼れ乃ち思へらく、默して止むべからずと、或は諫疏を捧げて之れを擯し、或は面折して之れを排す、群小深く之れを怨惡し、讒を構へ、死に抵して、遂に龜山城の獄中に幽囚す、彼れ乃ち獄中にあつて獄吏問答を著はす、其史書を引用するに當りて之れ

を諳記すること數千言、一字をたがへず、識者其企及すべからざるを稱せり、琳菴獄中にあること凡そ四年、延寶二年十月を以て死刑に處せらる、乃ち絶命の辭を朗吟して曰く、

迥慕胡忠簡、英名萬古流、浩然同正氣、一笑隕儇頭、

時に年僅に三十六、白刃、身に觸るゝに及んで、神色自若として變ぜず、蓋し平素の修養、然らしむるなり、

琳菴と同じく一齋門下出身の人として有名なるは大高坂芝山なり、芝山、名は季明、字は淸介、芝山と號し、又一峯と號し、黃軒と號す、（晩年平田黃軒と稱せしことは斯文源流に出づ、）土佐の人、弱冠にして巖城侯に仕へ、後、稻葉侯に仕ふ、芝山慷慨氣節あり、然れども自ら視ること甚だ高く、常に好んで時輩を排斥し、木下順菴、伊藤仁齋、山崎闇齋、僧元政及び陳元贇、朱舜水の如き、皆酷評を加へて罵倒せざるはなし、彼れ南學傳に於て仁齋を論じて曰く、

堀川有鬻材者、（姓伊藤名維楨）陰醉陸王之糟、陽嘗程朱之誨、造爲新奇之說、蠱惑黃吻輩、

又闇齋を論じて曰く、

口藉₂先聖之語₁、躬爲₂飽鷹之行₁、讀レ書如レ此不レ如レ不レ讀之愈₁也、云云、嘉也固讀レ書者之罪人也、

彼れが時輩を掊擊する、率ね此の如し、谷秦山彼れが著書を評して曰く、自稱許太過、然文格生硬、字法差謬、不レ堪レ看、南學傳事實多₂妄誕₁、蓋亦不レ足レ論也、(秦山集雜著)

然れども又一概に彼れが人格を侮蔑すべきにあらず、何んとなれば、彼れ亦一種得易からざるの才あればなり、殊に門人等は深く彼れを崇敬せしと見ゆ、河一澄が「跋喬松子」に云く、

先生幼より敏悟聰明、剛毅果決、壯歲に逮んで三侯に事へ、皆機務に關る、其國政に補あること、勝げて算ふべけんや、諫爭議論、誠を竭くし、心を盡くす、正言して諱まず、操節して屈せず、左右碌々たる群小、深く忌み妬み、言を造りて誣ひ譏る、故に久しく事を執ることを得ず、先生其幾を察し、其微を燭らし、速に辭し去る、是を以て籠絡してこれを禍患

に陷るゝこと能はず、先生耿介老いて益〻堅く、淸廉老いて益〻白し、其富貴を觀ること、猶ほ草芥のごとく、其死生を觀ること、猶ほ夜旦のごとし、前後九たび俸祿を辭して敢て撓まず、凡そ五たび死地に入りて敢て愳れず、仕を數邦に致して、遂に里巷の間に退休す、先生の如きは、眞の碩丈夫といふべし、云云、先生經を講ずる、縝密親貼す、精神を舒ぶるに迨んで、聽くものゝ感じて或は涙を墮す、歷史を語るに及んで始終本末、悉く審覈にして、恰も身親ら其間を履むが若し、聽くものゝ亦曉然として目に見るが若し、云云、

此れに由りて彼れが性行いかんを認識するを得べきなり、正德三年五月二日を以て歿す、年五十四、著はす所南學傳二卷の外、喬松子四卷、適從錄三卷、存一書六卷、餘花編二卷等あり、就中存一書と餘花編とは土佐群書類從中に收載せり、前者は芝山が文集にして、後者は其詩集なり、喬松子は單行本あり、是れ芝山が學說を叙述せしものにて、人以て我邦に於ける諸子の嚆矢となす、源有本が總叙に

本邦子類爲之魁、此後恐多出焉、

と、然れども之れに先ちて僧中巖が中正子あり、故に喬松子を以て我邦に於ける諸子の嚆矢とするを得ず、但喬松子に次いで世に出でたる子類は、原子、猗蘭子、水哉子、鷹起子、柳子等ありて其書に乏しからず、源有本が總叙に又喬松子の内容を論じて云く、

此書首卷所陳、據薛氏之語也多矣、第二卷黄祥問自論經傳之義以後、章句漸繁衍、大率皆造自家言語、第三卷自論禮樂文章以後、文之精神、詞之波瀾、悉攄發於此、至第四卷、乃眞爲學問之蘊奥、師傳之秘訣、讀者其可忽乎哉、

喬松子四卷共に芝山の學説たるに相違なきも、第四卷は其大骨頭とする所なり、因りて第四卷の要點を紹介せんに、彼れ先づ

道は天地公共底の理、固より一人一家の私にあらず、豈に敢て秘して藏せんや、

と喝破し、次いで心法と道體と一たることを斷言し、我心の道體と合一

して、一種言ふべからざるの妙處に到達し得たる境遇を論じて曰く、

天地一胸襟、今古一東流、斯心全體の弘き、大用の停りなき、元來恁地なり、存養功熟して、今にして其初めに復るなり、古の聖人斯心を以て斯心に傳ふ、後世の學者、斯心を得れば、乃ち聖人の心を知る、萬古一理、聖々同心なり、

彼れ又更に其旨意を敷衍して曰く、

夫れ心を存して忽にすることなく、理を窮めて舍つることなく、功を累ぬること久うして後、自ら本心の虛靈、明鑑止水の若くなるを觀る、此に到りて肇めて心境と天地と其大、隔てなく、性理と天道と其源、混一なるを識る、

尙ほ天命と人性と一貫して二致なきを說示して曰く、

天命は只是れ元なり、分ちて之れを言へば元亨利貞なり、人性は只是れ仁なり、分ちて之れを言へば仁義禮智なり、猶ほ一塊の玉の渾然なる中、溫潤堅確、瑩徹條理、粲然たる分あるがごとし、抑、中なり、極なり、一

なり、止なり、唯〻これ性の徳なり、命なり、天なり、神なり、帝なり、唯〻これ性の源なり、

此れに由りて之れを觀れば、彼れが人性を以て天に出づとすること、明かなり、彼れ此の如く人性を以て天に出づとするが故に、衆人の心、不善なしとは言はざれども、本然の性に復るを得ば何等の不善もなしとし、之れを論じて曰く、

君子學成りて至處に到れば、廓然として大公、物來たりて順應す、恁地なるに逮べば、心なり、性なり、情なり、渾然たる至善、明德瑩徹して、天德にあらざるなく、天理の流行にあらざるなし、大本體立ちて達道用行はる、又何の不善か之れあらん、

彼れ又天と性と心との三者を合して一理となして、論じて曰く、

天とは性の源、性とは心の體、心とは身の司、三者總べて是れ一理、各〻指す所ありて名を異にするのみ、

次ぎに彼れ天性と氣稟との同體不離を看破して曰く、

夫れ天性、氣禀の中にありて、混合して隔てなきこと、金玉の塊石に藏るゝが如し、金塊玉石、固より一物にあらず、復た分斷して兩箇とするにあらざるなり、

最後に道の何たるかを論じ、其廣大無邊なる所以を發揮して曰く、

所謂中なり、仁なり、只是れ道の大綱、其體段渾々洞々として元と是れ一なり、既に一なれば華夷なんぞ別たん、今古なんぞ隔てん、治亂共に關り、人我齊く具はる、故に唯仁者能く天地萬物を以て一體となして、間隔する所なし、是を以て四海を家となし、中國を一人となす、これ道の廣洪たる、六合に瀰りて、天下能く載するなき所以なり、

是れ殆んど今日の所謂人道を顯彰するものに似たり、次ぎに彼れ自ら道を體得せる次第を叙して曰く、

譬へばこの山に登るが如し、初めは余東南よりし、中ろは余西北よりし、終りは余其四隅より躋る、既にしてこの山を視れば、或は直、或は曲、或は逶邐、或は崎嶇、險夷廣隘、その徑同じからず、余歷過すること數十

年、勤苦して倦まず、漸く悉くこの徑を諳んず、始め行く時萬徑の皆殊なるが如し、登りて其巓に坐するに泊んで廼ち萬徑只是れ一道のみ、昔は猶ほ睡夢のごとく、今や恰も大寐の覺めたるが如し、昔は煩多にして今や簡易なり、昔は艱難にして今や安平なり、一本の渾々たるは固より道なり、萬殊の粲々たるも亦道なり、粲々碎々たるを窮盡して、乃ち渾々洞々たるものを曉る、既に曉れば、乃ち古今一理、千聖一心、云云、

是等の言、皆道の一元たるを論證せんとするものなり、然れども毫も分解的說明をなさずして、單に形容の文字を連綴するが如き看あるは、聊以て遺憾とすべきのみ、彼れ又巧に聖人と道との關係を說いて曰く

聖人既に生れては、道、聖人にあり、聖人既に往いては道、遺經にあり、聖人の靈、萬世滅びず、昭昭として遺經の中に存す、萬世の下、もし能く經を講じて得ることあらば、是れ聖人の道を曉るなり、

因りて尙ほ道を講ずるの法を叙して曰く

遺經を窮めて聖道を知るにあり、聖道は平かにして大路の如く、晒かにして日星の如し、經は道を載する所以なり、學者眞に經業を好まず、是を以て知り難く行ひ難きものゝ若し、道豈に然らんや、道は仁義に循つて之く、仁義は心の固有なり、故に經に由りて道を求め、道を求めて聖心を知るは、猶ほ門に入りて堂に升り、堂に升りて主人に逢ふがごとし、既に道を心に會して失はざれば、異端何によりてか之れを刧さん、諸子百家何によりてか之れを挐かん、卓爾として挺立して生より死に到るまで、終始一の如し、朝に道を聞いて夕に死すとも可なりとは此の謂ひなり、嗟乎後生未だ道、方寸の間に備りて、學、日用常行の外にあらざることを知らず、只記聞を以て業とせんことを恐る、故に其兩端を竭くしてこれを示す、

芝山の學說、畢竟心法と道體とを合一し、天命と人性とを一貫して徹上徹下、些の扞格もなく、全然融合調和せる一元論を立するを以て主眼となす。別に何等自家の創見ありといふにあらざるも、亦南學系統に於て

掉尾の勢をなすの看なしとせざるなり、蓋し南學は初め南村梅軒之を傳授し、尋いで谷時中之れを振興し、小倉三省、野中兼山等之れを繼承し、大高坂芝山其終結を成せり、闇齋は京師に赴いて別に一派を成し、悉皆是等諸氏を合するも、尚ほ未だ及ばざる底の大影響を生ぜしものなるが故に、本と南學より出でたるに相違なきも、亦新に系統を開くものと見るを得べし、芝山が時中以來の學說を消化し、自家の見識を以て之れを鎔鑄し、遂に之れを發揮して四卷の喬松子となしたるが如き、又彼れが梅軒時中以來南學の系統を敍述して、一篇の南學傳となしたるが如き、皆彼れが掉尾の勢を成せる所以にして、又彼れが學界に於ける功勞も、主として此にありて存するを知るべきなり、



第二章　山崎闇齋

第一　事蹟

南學系統より出でゝ、鬱然一家を成し、純然たる朱子學派を代表するものを山崎闇齋となす、闇齋、名は嘉、一の名は柯、字は敬義、通稱は嘉右衞門、闇齋は其號なり、又垂加(八)と號す、京師の人、闇齋が曾祖父を淨榮といふ、播磨國宍粟郡山崎村の人、祖父を淨泉といふ、淨泉、又左衞門と稱し、備の木下氏に仕ふ、祖母は多治比氏、父は淨因、三右衞門と稱す、本と泉州の人、後、京師に住し、鍼醫を以て業となす、母は佐久間氏、子四人あり、男女各〻二人、闇齋は其末子なり、闇齋自ら作る所の山崎家譜によれば、四人皆京師に生まる、就レ中闇齋は實に元和四年(卽ち紀元一六一八)十二月九日を以て始めて呱々の聲を揚ぐ、彼れ幼にして穎悟、祖母多治比氏常に之れに敎へて曰く、

(八)此垂加の二字は神垂冥加の略なり、垂加草の劈頭第一に「神垂以二祈禱一爲レ先、冥加以二正直一爲レ本」の語を揭ぐ、是れ鎭座傳記、寶基本記、倭姬世記に出づるもの、闇齋此語に本づいて垂加の別號を作れり、

諺に之れあり、身は一錢、目は百貫、汝等目を傷ふこと勿れ、而して善く字を習へ、字を識らざれば、目なきものと同じ、

母佐久間氏性嚴なり、甚だ兒曹を愛すと雖も、然れども飮食を恣にするが如きことあれば、未だ嘗て呵責せずんばあらず、常に誡めて曰く、

鷹饑ゑて穗を啄まず、士夫の子、當に志を尙うすべし、

此れに由りて之れを觀れば、彼れが性格を鎔鑄するに於て少時の家庭敎育、與りて力ありしを察知するに足る、

彼れ又嘗て群兒と戲る、人あり、菓子を擧げて之れを示して曰く、

汝曹各〻其能を奏せば、吾將に之れを與へんとす、

群兒是に於てか或は歌ひ、或は舞ふ、其人乃ち之れに菓子を與ふ、闇齋獨り何等の技をも演せざるを以て獲ること能はず、因りて大に號泣せり、其人之れを見て之れに菓子を與へんとす、闇齋敢て之れを受けずして曰く、

之れを獲んと欲するにあらず、人皆能くする所ありて、我れ獨り能く

する所なし、故に憤りに勝へざるのみ、

闇齋稍〻長じて狡悍無賴、常に堀川の橋上に遊び、長竿を持ちて行人の脛を打ち、水中に轉墜せしめ、以て戲となす、父淨因之れを憂ひ、乃ち之れを(三)比叡山に託し、將に以て僧となさんとす、闇齋比叡山にあるや、常に書卷を袖にし、客を延き、茶を供するの際と雖も、少間を得れば、乃ち出だして之れを讀み、已に其尋常兒子にあらざるの徵候を呈せり、後、妙心寺に移り、薙髮して僧となり、絕藏主と號す、彼れ一夜佛堂にありて經を誦し、哄然として笑ふ、人怪んで之れを問へば、乃ち答へて曰く、釋迦の虛誕を笑ふと、彼れ又一日儕輩と辯論し、理屈し、詞窮す、夜に入りて潛に其寢室に入り、火を紙帳に放ちて去る、衆乃ち彼れを逐はんと欲す、彼れ之れを聞き、大に號はりて曰く、

果して然らば吾れ火を堂宇に放たん、

其豪邁不羈、率ね此の如し、是時に當り、土佐の公子某妙心寺に居る、聰明

(三)山田思叔の闇齋年譜及び閑散餘錄等皆闇齋先づ比叡山に之き、後妙心寺に入るものとせり、

にして鑑識あり、嘗て闇齋を見て、歎じて曰く、

此兒神彩秀逸、後、當になすことあるべし、

と、乃ち之れをして土佐の吸江寺に學ばしむ、闇齋是に於て小倉三省、野中兼山二氏と相交はり、二氏の慫慂により、程朱の學を修め、谷時中を師として其學業を成し、遂に蓄髮して儒に歸す、時に年二十有五、然れども土佐侯悅びず、因りて復た京師に歸る、闇齋三十歲にして闢異一卷を著はし、終りに其佛を脫して儒に歸せし所以を論じて曰く、

吾れ幼年にして四書を讀み、成童にして佛徒たり、二十二三にして空谷の書に本づいて三敎一致の胡論を作る、二十五にして朱子の書を讀んで佛學の道にあらざるを覺る、則ち逃れて儒に歸す、今三十にして未だ立つこと能はず、深く吾れの早く辨ぜざるを悔い、又人の終に惑ふべきを懼る、

更に又一轉して道の何たるかを論じ、世の儒者の通弊を論じて曰く、

蓋し道とは綱常のみ、彼れ既に之れを廢すれば、其學の道にあらざる、

攻めずして知るべし、但〻綱常道昧うして、人之れを廢すべからざる所以を知らず、世の所謂儒者は、徒に記覽を務め、詞章を爲して、詩書、道を載するの文に託す、是を以て綱常の道、遂に明かならずして、佛氏の敎に化せざるものは、未だ之れあらざるなり、

萬治元年闇齋江戸に赴き、井上侯（河内守名は正利、）を主とす、初め彼れが江戸に來たりし時、貧窶にして儋石の儲なし、故に書商の鄰に住し、其書を借りて之れを閱讀せり、是時に當りて井上侯學を好み、書商を介して闇齋を見んと欲す、闇齋曰く、

侯、道を問はんと欲せば、先づ來たり見よ、

と、侯之れを聞き、嘆じて曰く、

方今自ら師儒と稱するもの、多くは道を行ふに意なく、東奔西走、其技の售れ易からんことを欲す、寡人之れを聞く、這に來たりて學ぶを聞く、往いて敎ふるを聞かず、山崎生能く之れを守る、此れ乃ち眞儒なり、

と、卽日駕を命じて之れを訪ひ、弟子の禮を執れり、闇齋是れより屢〻江都

に赴き、兩都の間に往來せり、

寛文五年會津侯(即ち保科正之)の聘に應じて之れに赴く、然れども仕へず、侯乃ち遇するに賓師の禮を以てす、會津侯嘗て闇齋に問うて曰く、

先生樂みありや、

答へて曰く、

臣三樂あり、凡そ天地の間、生あるもの何ぞ限らん、而して萬物の靈たるを得るは、一の樂みなり、天地の間、一治一亂、定數なし、而して右文の世に生れ、書を讀み、道を學び、古の聖賢と臂を一堂の上に把るを得るは、一の樂みなり、是れ臣の樂む所なり、

侯曰く、

二の樂みは既に之れを聞くことを得たり、請ふ亦其一の樂みを聞かん、

答へて曰く、

此れ其最も大なるもの、而して言ひ難き所以のものは、君侯必ず信ぜ

ずして、以て毀訾誹謗となさん、

侯曰く、

寡人不敏と雖も、先生の言を奉じ、孜々諫めを求めて忠言を渇聞す、何すれぞ今に至りて敎を終はらざるか、

曰く、

君の言此に及ばゞ、臣假令ひ戮辱に逢ふも、豈に言を盡くさゞらんや、所謂樂みの最も大なるものは、幸に卑賤に生れ、侯家に生れざること、是れなり、

侯曰く、

敢て問ふ、何の謂ひぞや、

曰く、

意ふに今の諸侯たるや、深宮の中に生れ、婦人の手に長じ、不學無術、聲色に徇ひ、遊戲に耽り、而して之れが臣たるもの、主意を迎合し、其爲す所は因りて之れを稱譽し、其爲さゞる所は因りて之れを誹毀し、遂に

本然の性をして梏亡消滅せしむ、其卑賤の幼にして辛苦を嘗め、長じて事務に習ひ、師敎へ、友輔け、以て其智慮を益すものに視ふれば、何如となすや、是れ臣の卑賤に生れ、侯家に生れざるを、樂みの最も大なるものとする所以なり、

是に於てか侯茫然自失し、嘆息して曰く

誠に先生の言の如し、

と、常山紀談〔卷之二十四〕には闇齋の言ひし所と殆んど同一の事を小櫃與五右衞門なるもの、會津侯に對して言へりとせり、其果して孰れか是なるを知らずと雖も、今は姑く先哲叢談〔卷之三〕に從ふ、井上侯會津侯の外加藤美作侯〔名は泰義〕も、亦禮を厚うして闇齋に師事す、然れども會津侯敬信最も深く、終始一の如し、闇齋亦感奮恩に答ふるを思ひ、知りて言はざるなく、眞に水魚の看なきを得ず、侯大に闇齋の學に得る所ありしと同時に闇齋の學は又侯の位地と名望とによりて、一層勢力を得るに至れり、此點より之れを言へば、蕃山の芳烈侯に於けると同じく、闇齋亦風雲

に際會せるものといふを得べし、然れども會津侯は闇齋に先ち寛文十二年十二月を以て歿す、翌年正月闇齋會津に赴き、侯の葬式に會し、祿を辭して歸る、闇齋が始めて會津侯に侍してより此に至るまで凡そ八年なりき、然れども其影響は決して尠少なりといふべからず、山田思叔が闇齋年譜に會津侯の事を論じて曰く、

侯懿德夙に成り、威嚴明斷、賢を禮し、士に下だる、其學たるや、誠敬に從事して、大學の道を知る、先生を得るに及んで、其德益〻進み、其邑を治むるや、儉を崇び、奢を抑へ、下情を達し、民苦を問ひ、社倉を建て、常平を行ひ、廢祀を興し、淫祠を毀ち、火化を禁じ、斫(せつ)子を止め、凡そ倡優異色の人、境に入ることを許さず、時人稱す、侯本と賢、然れども先生輔相の力、亦誣ふべからず、

闇齋天和二年九月十六日を以て病歿す、時に年六十五、黑谷山に葬り、碑を建て丶「山崎嘉右衞門敬義之墓」といふ、祠を下御靈に建て、垂加社といふ、後、之れを庚申祉に附す、若林語錄に云く、

垂加靈社下御靈の中にあり、前は小さき祠にてありたり、先年吉田殿より、尤められ、小社もたふされ、今は庚申の社のわきに相殿のやうに小さき札に垂加靈社と書付けてあり、已むを得ざるゆゑ、右の如くしたると見ゆるなり、

闇齋は一種精神的の教育家にして、門人頗る多く、其有用の材を出だせる點に於ては、木下順菴に讓らず、稻葉默齋が墨水一滴に云く、

人疑孔門三千、通者只七十人、闇齋門六千人、恐不至此、余云、不然、當時以禮相見者、門人籍記之、其員自有六千人、何必在弟子之列、闇齋師道至嚴、初見者皆厚禮以見、不則不得見、一面後不相見者、蓋亦多、其在洛下帷、天下書生、輻湊京師、恐無不見者、況又如會津藩中、時勢豈有不見闇齋者乎、一見記籍其員六千、何又疑之有、

若し默齋が傳ふる所を以て事實とせば、闇齋に師事するもの、凡そ六千人、之れを仁齋に比すれば、實に倍數の多きに及ぶ、就中有名なるものは、淺見絅齋、佐藤直方、三宅尙齋、三宅觀瀾、米川操軒、谷秦山、鵜飼錬齋、羽黑養

潜、桑名松雲、遊佐木齋、永田養菴、玉木葦齋等なり、又名門華胄としては、正親町一位、野々宮中將、及び會津侯、井上侯、加藤侯等あり、然れども崎門一派中最も卓絕せるものを淺見佐藤三宅の三氏となす、是れを崎門の三傑と稱す、

闇齋人となり傲慢嚴厲にして局量狹小なりしが如し、南學傳に闇齋が人物を論じて云く、

資質褊急亀厲、負才倨傲、凌忽人物、是以朋友故舊、或懟或慍、或鄙或憎、無始終全交之人、

是れ闇齋を貶することと差ゝ實に過ぐるが如しと雖も、亦全く否定するを得ざるなり、思ふに闇齋の性格たる、其師谷時中のそれに似て更に大なるものなり、時中本と傲慢不遜の人、朱子學を奉じ、力を修養に用ふるに及んで、動作云爲、悉く節に中らずといふことなし、闇齋亦朱子學を奉じ、力を修養に用ふること至れり盡せりと雖も、其倨傲尊大なる態度と口氣とは遂に之れを脫することと能はず、要するに、彼れは怒氣を帶びたる

圭角多き豪儒なりき、佐藤直方學話に云く、

山崎先生の生質は極めて豪强ゆゑに、其偏あつて、怒氣多し、李延平のやうなる師があらば、たしかに朱子の如くにならん人なり、智は誰れにも讓らぬと自らいへり、朱子も怒が自らの病といへり、

闇齋が子弟を敎ふる、儼として君臣の如く、少しく禮に背くものあれば、卽ち之れを叱罵し、貴卿巨公と雖も、之れを眼中に置かず、常に一箇の棒を持ち、講座を擊ちて以て諸生を敎授す、聽くもの凛然畏憚して、敢て其面を仰ぎ見るものなし、先達遺事に云く、

闇齋性急、特罵門人遲鈍者、及直方安正輩來談玄理始怡笑、

又云く、

書生每自垂加翁許還路見美色、或過娼家俳優肆、心動情移、恍忽見翁面貌在咫尺間、不覺存畏敬、

又云く、

佐藤子嘗云、昔師事闇齋、每到其家入戶、心緒惴々如下獄、及退出戶、則大

息似脫虎口、

又佐藤直方學話に云く、

永田養菴講釋歸りに直方とつれだち路にて云へるは、先生にしかられ、二度行くまいと思へど、色々親切なことを云はるればいとしいと、

此れに由りて之れを觀れば、闇齋が門人弟子に對せし態度のいかに嚴厲なりしかを想見するを得べきなり、先達遺事に又云く、

垂加翁師道至嚴、其接門人、雖細過不少假、一日鵜飼金平與諸人侍翁坐、翁方講談、金平在稠人席、偶弄剪刀磋爪、翁睨視、厲聲云、師席磋爪何禮、金平掉慄、諸人失色、

金平は錬齋が事なり、先達遺事に又云く、

後藤松軒侍垂加翁講筵、翁講畢、顧松軒云、坊亦會麽、松軒忿恚、終身手不執翁著述之籍、

松軒時俗に從ひて剃髮せり、故に彼れ之れを坊主と呼べり、其中多少輕侮の意を含めるにあらざるか、垂加草卷八に、世儒剃髮辨あり、世儒の剃

髮を非とし、「徒見₂浮居祝₁髮、癡₂坐人上₁、尤而效ㇾ之」と云ひ、「其不₃惟背₂孝經之訓₁、亦書所ㇾ謂亂ㇾ俗者也」と云へり、此心、自ら口頭に溢れたるを知るべきなり、闇齋の態度、極めて嚴厲なりしと雖も、又甚だ親切なる所ありしは、前に擧げたる永田養菴の言によりて之れを察するを得べし、殊に彼れが門人の上達を悦びて、深く之れに同情を寄せしは、稱揚せざるを得ず、佐藤直方學話に云く、

直方や養菴が學に精出すを悦び、落淚をなせり、

と、以て證とすべきなり、

闇齋は超凡の記憶力を有し居りしが如し、彼れ曾て妙心寺にありし時いかに能く中峰禪師の廣錄を諳記せしかは、文苑の一奇談として傳はれり、又先達遺事に

闇齋記性絕ㇾ人、一門生執ㇾ巾侍₂浴室₁、話偶及₂梅花₁、翁乃輒暗₂吟古人賦ㇾ梅詩無慮五十四首₁、

其他彼れが朱子語類中の事を能く記憶し、丁數行數迄も覺え居りしこ

と、亦門人等の一奇談として傳ふる所なり、

闇齋の人物學問に就いて古來種々の評論あり、先づ門人等の言を擧げんに、佐藤直方曰く、

朱書の我邦に來たる、已に數百年、之れを讀むもの、亦豈に少からんや、然れども未だ道學の正義を發明して、萬世不易の準則となすを識るものあるを聞かず、近世獨り山崎敬義先生其書を讀み、其人を尊び、其學を講ず、博文の富なる、議論の實なる、識見の高き、實に世儒の及ぶ所にあらず、蓋し我邦儒學正派の首唱なり、

其推尊至れりといふべし、三宅尚齋亦曰く、

闇齋先生世に功あること、勝げて言ふべからざるなり、今日の學者、邪徑を去りて、正路に赴くを知るもの、皆先生の功なり、

遊佐木齋亦室鳩巢に與ふる書に闇齋を論じて曰く、

闇齋先生人となり、平生他の嗜好なく、一味學に志し、未だ嘗て俗人と交はらず、溫和の氣象に足らずと雖も、志剛にして行を制すること苟

もせず、專ら此道を明かにするを以て己れが任となし、死して後止む、學んで厭はず、敎へて倦まざるにちかきものか、其志の如きは、藩國に仕へず、王侯に屈せず、後學を誘引して、此學を將來に傳へんと欲するのみ、實に本邦の一人にして、其程朱に功あること、世未だ其比を覩ざるなり、

是等は皆門人等が其師を賞讃するの言なり、其他賴春水尾藤二洲等皆賛を作りて大に闇齋が學德を稱揚せり、若し單に其長處の存する處より之れを觀れば、門人等の言ふ所の如し、然れども其短處に對して亦全く目を閉づべきにあらず、雨森芳洲が橘窻茶話(卷中)に云く、

還俗蓄髮、可謂丈夫、惜乎其未知佛意也、

澁井太室が讀書會意(卷中)に云く、

闇齋は精にして刻剝、

刻剝の評、闇齋の免れ難き所、又云く、

闇齋の徒曰く、學窮理にありと、而して窮理の何事たるを知らざるな

り。

室鳩巢亦遊佐木齋に與ふる書に論じて曰く、

山崎氏佛を逃れて儒に歸し、朱子を尊んで、百家を黜け、師道を嚴にして、後進を誘ひ、其斯道に裨あるが若きは、誣ゆべからざるものあり、亦近世豪傑の士なり、云云、然れども聞く山崎氏自ら處ること、太だ高く、人を待つこと、太だ嚴にして、含弘の度少なく、人の過失を容れず、其授受の間、能く心を平にし、懷を虛うし、從容委曲、以て彼我の情を盡くすことなしと、此れ其短とする所なり、

闇齋は本と卓犖不羈の人格にして、顯著なる特色を有するものなり、然れども一たび朱子學を奉ずるに及んで、宗敎的に之れを崇信し、行住坐臥、身を修むることを務め、僅に埒外に出づるの弊を少うするを得たり、是れ豈に彼れが如き人格に取りて多とすべき所ならざらんや、然れども彼れが汲々として身を修むるの結果、極めて窮窟となり、偏狹となり、固陋となり、全く克己制慾の一方に走り、遂に天性を桎梏し、頑冥を墨

守するの弊を生ずるに至れり、天空海濶の氣象の如き、毫も彼れが胸中に於て期待すべき所にあらざるなり、初め佐藤直方が闇齋に從學するや、淺見絅齋に謂つて曰く、

吾曹日喫翁（闇齋が事）怒罵、精力已罄、若久之、勢應至死、安正（絅齋が名）云、吾亦思之、然今海內此外豈有師乎、因相共堅苦、遂師事于翁、

乃ち闇齋が春風の薫ずるが如き仁愛の德なく、居る恒に嚴容厲聲を以て門人子弟に對せしこと推して知るべきなり、且つ闇齋は詩文を作らざるにあらざるも、本と道德を偏重して文藝を輕視す、故に學派としては興味索然たるものなり、日本詩史（卷之三）に云く、

山崎闇齋專講性理、如詩章非其本色、要之其所以不朽、在彼而不在此也、

と、誠に然り、然れども又時に佳作なきにあらず、其秋鶯と題する詩に云く、

居諸代謝四時中、花散葉濃復見紅、忽有金衣公子囀、秋風影裏聽春風、

以て詩的趣味の全く缺乏せるにあらざるを知るべし、摩島松南が娛語

〔卷之四〕に云く、

山崎闇齋九歲時、七月既望詩云、東嶺火成大、北山丹作舟、登游非我願、弄月坐南樓、此詩已見頭角、集中所載、如剔天狗鯨地藏、往々徑吐胸懷、不似韻語、然其漁村夕照詩云、淡々晩村雲、微風吹楊柳、立盡殘照前、漁艇橫浦口、亦楚々有致、

然れども闇齋にありては詩は固より緒餘に屬す、之れを要するに、闇齋の短處擧げて之れを論ずれば、實に著明なるものありて、何人も之れを否定すること能はずと雖も、彼れが精神的敎育家としての功勞は、吾人之れを認容せざるを得ず、彼れ卓として豪傑の姿勢を存せしを以て其人格の感化、決して尋常ならざるものあるを見るなり、

第二　著書

垂加草全集三十卷
同附錄二卷
垂加草全集及び附錄は、門人植田成章が編輯する所にして、闇齋が全集としては最も完備せるものなり、其編輯の次第は、成章が跋文に詳かなり、跋文は享保六年の作に係る、成章は藝州の人、

垂加文集七卷
同續五卷
同拾遺三卷
垂加文集、同續、同拾遺、凡そ十五卷は闇齋の學に私淑せる跡部良顯が編輯する所にして、良顯の門人伴部安崇が發行する所に係る、本集は正德四年を以て、續集は正德五年を以て、拾遺は享保九年を以て之れを世に公にせり、良顯は光海翁と稱し、垂加神道を奉信するものなり

此書は垂加草全集と異同あり、必ず倂せて參考すべきものなり、

文會筆錄二十卷

此書は垂加草全集中に編入せり、然れども單行本も亦之れあり、其內容は種々なる方面に涉れども、主として道學に關する宋明諸儒の議論を抄出せるものにて、著者自身の評論も亦間〻之れあり、蓋し闇齋の著書中最も勞力を費やしたるものならん、彼れが學力と識見との如きも、亦此書に於て之れを見るを得べし、第十九卷以下に朱子の弟子及び後世の朱子學派を叙述せしが如き、殊に第二十卷の末に朝鮮の道學派を叙述せしが如き、最も參考に資するの價値あるものとなす、

朱易衍義三卷

周子書一卷

此書は周濂溪の大極圖及び大極圖說並に通書及び遺文等を輯めて一卷となすものなり、闇齋後序を作りて曰く、

周子の書、朱子の集次する所、余未だ之れを見ず、度氏が濂溪集、謝氏

が濂溪誌、徐氏が周子全書、皆其舊にあらず、爰に自ら量らず、參攷編次して、以て異日、原本を得るを俟つといふ、と、此れに由りて彼れが此書を編次せる次第を知るべし、延寶八年の刊行に係る、

大家商量集二卷

此書は朱子の陸象山に對する言論文章を抄錄して以て編次するものなり、卷末に眞邊仲庵に寄する書二篇を附載せり、

闢異一卷

此書は程朱及び其他先儒の佛敎に對する破邪顯正の言論文章を輯錄せるものなり、

武銘一卷

武王の作と稱する諸銘及び之れに關する諸說を輯錄し、且つ考註を加ふるものなり、

仁說問答一卷

是れ亦朱子の仁說並に圖及び張南軒呂東萊と之れを論ずるものを集めて編次する所なり、

性論明備錄一卷

此書は程朱の性論性說を輯錄する所に係る、

感興考註一卷

此書は標題の示すが如く朱子の感興詩に考註を加へたるものなり、

經名考一卷

孝經外傳一卷

敬齋箴一卷

風水草八卷寫本

此書の內容は闇齋が神道に關する學說として最も重要なるものなり、

和漢問答一卷寫本

是れ亦神道に關する書なり、然れども其眞贋疑はし、

小學蒙養集三卷

此書は朱子の文集及び語類中より年少者に裨益ある箇條を抄錄して編次する所に係る、卷首に闇齋が自序あり、寛文九年の作に係る、

大學啓發集七卷

是れ亦朱子の文集及び語錄中より抄錄して編次する所に係る、此書と前の小學蒙養集とを併せて蒙養啓發集と稱せり、

白鹿洞學規集註一卷

朱子社倉法一卷

中和集說一卷

大和小學一卷

洪範全書六卷

沖漠無朕說一卷

此書は程子朱子及び黃勉齋、蔡九峯、薛敬軒、胡敬齋、李退溪の沖漠無朕に關する諸說を列記するものなり、

四書序考四卷

櫻之辨一卷

此書は甘雨亭叢書中に收載せり、

其他闇齋が著書と稱するもの、尙ほ少しとせず、然れども今は大抵散逸して悉く之れを獲ること難し、已に吾人の手に觸れたる彼れが十有餘種の著書によりて之れを考察するに、彼れ闇齋は單に程朱及び其他先儒の學說を抄出して之れを編次し、之れを解釋するに止まりて、自家の見解を敍述せるもの、幾んどあるなし、蓋し彼れは忠實なる繼承者にして、決して創始的の思想家と稱すべきものにあらざるなり、

第三　學風

闇齋は朱子學を奉ずと雖も、自ら朱子の如く學理を攻究せんとするものにあらず、單に朱子學を奉じ、此れを以て唯一の眞理となし、之れを實行するを以て日常の目的とするものなり、然れども朱子の著述極めて浩瀚にして、其要を得ること難し、故に自ら躬行に適切なりと思惟する部分を抄録し、以て金科玉條となす、彼れが著述と稱するものは、大抵皆抄録の類にして、眞に著述として見るべきものは、幾多もあるなし、彼れは忠實に朱子を崇信するものにして、己れが頭腦を以て別に考察する所あるなし、若し露骨に之れを言へば、彼れは朱子の言說を盲信する精神的奴隷なり、彼れ本と剃髮して僧たりしも、朱子學を奉ずるに及んで之れを崇信すること、猶ほ僧侶の釋迦を崇信するが如し、彼れの開始せる一派は、知的探究を主とする學派と異にして、寧ろ敎條を嚴守する宗敎の一派に似たり、故に彼れに就いて知的探究の結果を求めんとすれ

ば、得る所甚だ寡少なりと雖も、行的工夫の結果いかんを回顧すれば、亦決して度外視すべからざるものありて存するなり、年譜に云く、

先生學、研精を尚び、章句を守らず、所見超逸、居る常に風節を激勵し、百家を抑黜するを以て己れが任となす、云云、

果して此の如くなれば、彼れ闇齋は學究的に博く百家を渉獵し、洽聞彈見を務むるの意なくして、唯識見を養ひ、德行を修め、名敎を持するの意あるを見る、彼れは純然たる道德家にして敎育家を兼ぬるものなり、年譜に又云く、

先生、弟子に經を治むるを敎ふるに、專ら力を正文朱註の間に用ふ而して目を元明諸儒の末流に注がず、

彼れが經書を讀むの法も、亦朱子の註によりて其大意に通ずるにありしを知るべきなり、先達遺事に云く、

一書生或擧訓詁問之函丈、闇齋直云、在字書、

闇齋の尙ぶ所は精神義理にあるが故に、區々たる文字の如きは、其拘泥

する所にあらざるなり、彼れ曰く、

學は知と行とのみ、知、博うすべきなり、雜なるべからざるなり、精なるべきなり、鑿つべからざるなり、行、一なるべきなり、二なるべからざるなり、篤うすべきなり、薄うすべからざるなり、知行並び進んで上達すべし、(年譜)

彼れ此の如く知行並進を言へども、其所謂知は行に關する知にして博く知識をいふにあらず、其期する所の畢竟實踐躬行にあること復た疑なきなり、彼れ又曰く、

學の道は致知力行にあり、而して存養は此二を貫くものなり、漢唐の間、知者なきにあらざるなり、行者なきにあらざるなり、但未だ曾て存養の道を聞かざれば、其知る所の分域、行ふ所の氣象、終に聖人の徒にあらざるなり、

存養は今の所謂修養と同じ、彼れ朱子の白鹿洞掲示を以て敎學の法とし、敬齋箴を以て存養の要となせり、白鹿洞掲示は左の如し、

父子有親
君臣有義
夫婦有別
長幼有序
朋友有信

右五敎之目。堯舜使契爲司徒。敬敷五敎。卽此是也。學者學此而已。其所以學之之序。亦有五焉。其別如左。

博學之
審問之
愼思之
明辯之
篤行之

右爲學之序。學問思辨。四者所以究理也。若夫篤行之事。則自修身以至于處事接物。亦各有要。其別如左。

言忠信行篤敬

懲忿窒慾遷善改過

右修身之要

正其義不謀其利

明其道不計其功

右處事之要

己所不欲勿施於人

行有不得反求諸己

右接物之要

又敬齋箴は左の如し、

正其衣冠。尊其瞻視。潜心以居。對越上帝。足容必重。手容必恭。擇地而蹈。折旋蟻封。出門如賓。承事如祭。戰々兢々。罔敢或易。守口如瓶。防意如城。洞々屬々。罔敢或輕。不東以西。不南以北。當事而存。靡他其適。勿貳以二。勿參以三。惟精惟一。萬變是監。從事於斯。是曰持敬。動靜無違。表裏交正。須臾有間。

私欲萬端。不火而熱。不氷而寒。毫釐有差。天壤易處。三綱既淪。九灋亦斁。於乎小子。念哉敬哉。墨卿司戒。敢告靈臺。

今にして之れを觀れば、此箴の如きは頗る嚴肅の一方に失し、活動の氣象に乏し、闇齋が此れを以て存養の要とせるは、蓋し其形式に拘泥するの弊を免れざる所以なり、要するに、彼れは壯快なる積極的發展をなして、自我を社會に實現することを期するといふよりは、寧ろ消極的に身を修め、行を正うし、惴々焉として些の過失なからんことを期するものなり、

闇齋が純然たる朱子學派を代表し、儼然世の木鐸を以て自ら任ぜし時は、慶元以來已に數十年を經て世俗漸く太平に慣れ、紀綱頗る弛み、遊惰の風、將に社會の上下に普及せんとするの狀ありき、此時に當りて彼れが克己制慾を主とし、極めて嚴肅なる道學の一派を開きしは、當時の社會に取りて牽制補充の勢となり、一代の平衡を維持するが爲めに缺くべからざる行動なりき、此點より之れを言へば、闇齋が名敎上に於ける

功勞、豈に尠少なりとせんや、

闇齋は忠實に朱子の學を奉信し、隨喜渴仰、眞に宗敎の如きものありと雖も、亦全く日本人としての自立的精神を失ひたるものにあらず、彼れが晩年心を神道に寄せ、遂に垂加神道の一派を開くに至りしも、本と此精神に出づるものなること、復た疑なきなり、彼れ嘗て群弟子に問ひて曰く、

方今彼邦(支那の事)孔子を以て大將となし、孟子を副將となし、騎數萬を率ゐ、來たりて我邦を攻むるときは、吾黨孔孟の道を學ぶもの、之れを如何となす、

弟子みな答ふること能はず、彼れ乃ち曰く、

不幸にして若し此厄に逢はゞ、吾黨、身、堅を被り、手、鋭を執り、之れと一戰して孔孟を擒にし、以て國恩に報ぜん、此れ卽ち孔孟の道なり、(先哲叢談卷之三)

其國家的思想を道破するの大膽なる、當時陋儒の膽を破るに足るもの

ありしを知るべし、彼れが自立的精神、即ち彼れが國家的思想は永く彼れが學派の人によりて繼承せられ、遠く維新の大功業にさへ影響する所ありしは、亦實に豫想の外に出づるの感なしとせざるなり、

人の心に影響せんとすることは、心より出づる[1]ものならざるべからず。

グーテ

第四　學說

闇齋は純然たる朱子學派の人にして、孔子以後朱子を以て第一の人として尊崇するものなり、答眞邊仲菴書に云く、

孔子集めて大成して六經を垂る、云云、聖遠く樂亡び、經五を以て名づけ、禮の壞亂亦甚し、幸に朱先生出でゝ、易や、詩や、本義を明かにし、末失を攻め、書は蔡仲默をして傳を作らしめ、禮樂を正さんと欲して未だ成らず、然れども黃直卿儀禮經傳を續ぎ、蔡季通律呂新書を著はし、春秋は以て未だ學びずとなして筆を下ださず、其微意を通鑑綱目に寓せり、四書の解、小學の書、發明眞切、復た遺蘊なし、先生は實に夫子の後の一人なり、善く學ぶもの、小學に由りて大學に進み、而して論孟の精微を盡くし、中庸の歸趣を極めば、六經治めずして明かなるべし（垂加草附錄下）

彼れ此の如く秦漢以來の群儒を看過し、先づ朱子の鄒魯の學を發揮す

るに於て非常の功績あることを稱揚し、「先生は實に夫子の後の一人なり」と絕叫せり、其朱子を仰慕するの情、推して知るべきなり、又朱子抄略に題して曰く、

鄒魯の後、伊洛其傳に接し、朱子に至りて孔氏の書を解き、六經の道を明かにせり、是れ則ち述べて作らざるもの、嘉の願學する所なり、(垂加草第十)

又其嘗て文會筆錄を著はすや、門人に語げて曰く、

我學、朱子を宗とす、孔子を尊ぶ所以なり、孔子を尊ぶは、其天地と準ふるを以てなり、中庸に云く、仲尼堯舜を祖述し、文武を憲章す、吾れ孔子、朱子に於て亦竊に比す、而して朱子を宗とするも、亦苟も之れを尊信するにあらず、吾れ意ふ、朱子の學、居敬窮理、卽ち孔子を祖述して差はざるもの、故に朱子を學んで謬らば、朱子と與に共に謬るなり、何の遺憾か之れあらん、是れ吾が朱子を信じて、亦述べて作らざる所以なり、汝輩堅く此意を守りて失すること勿れ、(年譜)

闇齋が朱子及び其他宋儒の言說を抄錄して實行に資せんとせしが如き、眞に述べて作らざるものなり、朱子は固より鄒魯の學を祖述するものなりと雖も、亦一家の學說として見るべきもの少しとせず、闇齋は餘りに朱子を尊崇すること篤きが爲めに、一家の學說として見るべきもの極めて少し、然れども彼れも亦我邦に於て一學派を成せるもの、豈に彼れが學說を度外視するを得んや、

闇齋が學說として看過すべからざるものは、敬內義外の說なり、此說本と程子に出づ、程子曰く、

敬以直內、義以方外、合內外之道也、

又曰く、

敬義夾持、直上達天德自此、

と、闇齋此言に本づいて、敬內義外の說を立て、我內界を正直にするに敬を持するを以てし、我外界を方正にするに義に由るを以てし、內外兩界を併せて、之れを道德に歸せしめんとせり、換言すれば、彼れはカント氏

の如く道德に內部的のものと、外部的のものと兩者ありとするものなり、其內部的のもの、卽ち敬はカント氏の格法 Maxime に相當し、其外部的のもの、卽ち義はカント氏の道德的理法 Moralische Gesetze に相當するが如し、兎に角闇齋は敬と義とを以て道德の大骨頭となし、修身の要、之れが實行に外ならずとなせり、彼れが座右銘に云く、

懲忿窒欲、惟德惟力、敬義夾持、是仁之則。

又藏柱銘に云く、

敬以直內、義以方外、敬義夾持、出入無悖。

乃ち彼れが居る恒に敬と義とを以て己れを律することを務めたるを知るべし、彼れが字を敬義といふも、敬と義とを最も重んずるの意に出づること復た疑なきなり、彼れ朱書抄略の後に記して曰く、

敬以直內、義以方外の八箇の字、一生之れを用ひて窮まらず、朱子豈に我れを欺かんや、論語の君子己れを修むるに敬を以てすといふもの、敬以て內を直うするなり、己れを修めて以て人を安んじ、以て百姓を

安んずるもの、義以て外を方にするなり、孟子の身を守るは、守るの本といふもの、敬以て內を直うするなり、君子の守る、其身を修めて、而して天下平なりといふもの、義以て外を方にするなり、大學の修身以上は內を直うするの節目、齊家以下は、外を方にするの規模、明命赫然として、內外あることなし、故に明德を天下に明かにせんと欲するなり、中庸九經は、身を脩むるなり、賢を尊ぶなり、此れ內を直うするの事、其餘は外を方にするの事なり、誠は自ら己れを成すのみにあらざるなり、物を成す所以なり、己れを成すは、仁なり、物を成すは、知なり、性の德なり、內外を合するの道なり云云、夫れ己れを成すは、內なり、物を成すは、外なり、是故に程子の曰く、敬以て內を直うし、義以て外を方にするは內外を合するの道なりと、又曰く、敬義夾持して直に上り、天德に達すること此れよりすと、夫れ八字の用窮まらざること此の如し、朱子我れを欺かず、(垂加草第十一)

闇齋は此の如く敬と義とを以て己れを律し、我內界を正直にし、我外界

を方正にすることを務むるが故に、格法に泥み、形式に拘はるの弊多く變通の態度と活動の氣象とに乏し、是れ朱子の短處を承けて、更に之れを增大せるに因るなり、

鄒魯の學派の唱道する所は、主として道德にありと雖も、其道德に就いて主とする所は、多少異同なきにあらず、例へば、孔子は主として仁を說き、子思は誠に重きを置き、孟子は仁義を並べ稱し、周子は太極を根柢とし、邵子は數理を基礎とし、張子は太虛を原理とし、程朱は理氣を唱道し、陸象山は心を以て本となし、王陽明は良知を取りて說き來たれり、我邦にありても、仁齋は仁義を主張し、徂徠は禮樂を主張するが如く、各〻其本領として標榜する所あり、闇齋は此間に立ちて敬義の二者を以て道德の大骨頭として一派を成すものなり、然るに敬と義とを對照して之れを考察する時は、敬を以て先とし、義を以て後とせざるべからず、敬は我内界を正直にするの謂ひにして、卽ち修身正行の始めなり、敬によりて修身正行を成し得れば、更に進んで社交的に道德を實現し來たらざる

べからず、是に於てか義によりて我外界を方正にするの要あるなり、換言すれば、私徳先づ成りて、而して後、公徳の成るを期すべきなり、之れを要するに、敬は義に先ちて當に無かるべからざる所の心的情態なり、是を以て闇齋敬を以て修身正行の大根本、大本源となせり、彼れ蒙養啓發集の序に論じて曰く、

夫れ聖人の教、小大の序ありて、而して一以て之れを貫くものは、敬なり、小學の敬身、大學の敬止、以て見るべし、蓋し小大の教は、皆五倫を明かにする所以にして、而して五倫は一身に具はる、是故に小學は身を敬するを以て要となし、大學は身を修むるを以て本となす、君子己れを修むるに敬を以てして、親義別序信に止まれば、天下の能事畢はぬ、

(垂加草第十)

彼れが敬といふは我内界に於て端誠虔恭の態度を存する事にして、即ち天に對して之れを要するなり、故に殆んど英語に所謂devotionの如きものなり、彼れ又中和集説の序に曰く、

夫れ天命の性は、人心に具はる、故に心を存し、性を養ふは、天に事ふる所以にして、存養の要、他なし、敬のみ(同上)

と、以て其宗教的旨趣あるを知るべきなり、

闇齋は誠てふ天與の分子ありて、吾人々類の心裏に備はるものとし、之れを完うするものを聖人とせり、周書抄略の序に云く、

天地の心は誠のみ(同上)

又小學蒙養集の序に云く、

聖は誠のみ(同上)

其言極めて簡短なりと雖も、其旨意の存する所、乃ち知るべきなり、彼れ又文武を以て仁義を實行するの具として、論じて曰く、

文武は仁義の具なり、云云、仁以て之れを行ひ、行はれざる所ありて義以て之れを通せば、則ち人道斯に立つべし(垂加草第十一)

闇齋茲に文武と仁義との關係を說いて其要を得たり、彼れの旨意を敷衍して之れを言へば、文は仁を實行するの具にして、武は義を實行する」

の具なり、仁を實行するは、本來の目的なりと雖も、社會の不完全なるが爲めに、かゝる本來の目的を達すること必ずしも容易なりとせず、是れ種々なる障碍物の前路に橫はるものあればなり、種々なる障碍物は武力を以て之れを除去するより外之れなきなり、是れを義となす、蓋し種々なる障碍物は不善の動機に本づき、故意に之れを設けたるものなるが故に、武力を以て之れを排除するにあらざれば、人道てふもの、到底立ち難かるべし、何故なれば、若し然かせざれば、早晩不善の跋扈を來たすべければなり、是れ義以て之れを通ずるを要する所以なり、

闇齋の朱子を尊崇すること、殆んど神の如しと雖も、然れども全く支那的に感化されたるにあらず、彼れが孔孟攻め來たらば、之れを擒にして以て國恩に報ぜんと云ひしを以て之れを知るべし、彼れ又二程治敎錄の序に論じて曰く、

抑〻我神代の古や、猶ほ三皇の世のごときなり、神武の皇圖や、猶ほ唐堯の放勳のごときなり、

「此一語は彼れ闇齋が祖國と共に同化して、萬國の間に自立するの精神を有せしを證して餘りあり、是れ順菴が自ら東夷と稱し、徂徠が自ら夷」人と稱して、崇外の極、自尊の念を失せしと眞に雲泥の差ありといふべし、彼れが又文會筆錄(四之二)に晉書、太平御覽(魏志を引き)百川學海(魏略を引き)梁書、續文献通考、通鑑前編等に日本人を以て吳の泰伯の子孫とするを駁して曰く、

「他邦人曾て我書を知らず、其我事を記すもの、往々商船僧侶の口によりて年代を誤り、名實を失ふ、徵なうして言ふものといふべし、」

又或は東海姬氏國の名に泥んで天照大神は泰伯なり、其姬氏なるを以て誤りて之れを女體といふとの說もあり、又佛者中には大日孁(おほひるめ)の名に託して大日を牽いて之れに合せんとするものもあり(例へば空海の如き)、是を以て彼れ又之れを駁して曰く、

「是れ皆周禮造言の刑を犯し、國神正直の誨に違ふ、實に神聖の罪人なり」、

是等の言によりて之れを察するに、闇齋が我邦建國の精神を體し、國體の重んずべきを自覺せしことを復た疑なきなり、彼れ晩年神道の研究を始め、遂に垂加神道と稱する一家の神道を唱道するに至りしも、蓋し同一の動機に出づるならん、闇齋が神道の特色は宋儒理氣の說によりて神道を解釋せし處にあるなり、彼れ會津神社志の序を作りて曰く、

惟れ神は天地の心、惟れ人は天下の神物にして、其心は神明の舍なればなり(垂加草第十)

又神に正邪の二種あるを論じて曰く、

蓋し天地の間、唯理と氣とのみにして、神やは理の氣に乘りて出入するもの、是故に其氣正しければ、其神正し、其氣邪なれば、其神邪なり、人能く靜謐にして混沌の始めを守り、邪穢を祓ひ、清明を致して、正直にして祈禱すれば、正神福を申ね、邪神禍を息む、豈に敬まざるべけんや、

彼れ神道五部書中の鎮座傳記、寶基本記及び倭姬世記に出でたる

神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本、

の二句を神託として深く之れを崇信し、自賛を作りて曰く

神垂祈禱冥加正直、我願守之、終身勿惑、（垂加草第一）

彼れが神道を垂加と稱するも、亦神垂冥加の義に出でたるものにて之れを「シデマス」と讀むなり、彼れ尙ほ神道書中の名句を掲げて曰く、

一

日月廻四洲、雖照六合、須照正直頂、（倭姬世記）

二

吾唯一神道者、以天地爲書籍、以日月爲證明、（名法要集）

三

古語大道、而以理說事、以事說理、辭假嬰兒、心求神聖、（神代口訣）

四

渾沌未分處、立心者大象也、苟得其道、則先天地主造化、我國自神代此道炳焉、全非關內外之典籍、（東家秘傳）

彼れ闇齋は神道五部書を始めとして、凡そ神道書類を迎ふるに毫も批

評的精神を以てせずして、何れも深く之れを盲信し、之れを垂加草及び風水草の首めに列擧せり、闇齋は神道を出口延佳及び吉川惟足より傳へ、更に自ら研究して風水草(八卷)を著はせり、風水草は崎門の秘書にして遂に上木せられず、乃ち寫本の儘、之れを門人玉木葦齋に傳ふ、葦齋亦玉籤集、原根錄等を著はして、垂加神道を祖述せり、(委しくは闇齋學派の條を參看せよ、)年譜を見るに寛文五年の下に闇齋が心を神道に寄するに至りし次第を敘して云く、

先生吉川惟足に從ひ、卜部家の神道を受く、侯(會津侯)壯年專ら儒教を攻め、又所謂神道を究めんと欲す、未だ其人を得ず、後、吉川惟足なるものあり、其道に精しく、鎌倉に居ると聞き、服部安休を遣はして就學せしむ、既に大旨を得て歸る、侯其說を悅び、遂に惟足を江戶に招いて親ら學ぶ、先生亦嘗て本邦の教を信じ、粗〻其傳を得たり、此に至りて侯の意と謀らずして合す、是に於て侯其講說を聞く每に、先生をして侍坐して以て可否を定めしむ、先生其道を崇ぶこと特に甚だし、

此れに由りて之れを觀れば闇齋が始めて心を神道に向けしは寛文五年以後の事なるが如し、然れども其實決して然らず、伊勢太神宮儀式序を見るに、彼れが神道說の要領は、已に玆に明瞭に叙述せらる、而して最後に「明曆元年冬十二月九日」とあり、寛文五年に先つこと、實に十有一年なり、闇齋が吉川惟足より、神道說を傳へたるは、寛文五年以後の事なるべしと雖も、之れに先ちて出口延佳より神道說を傳へたるものゝ如し、闇齋又思へらく、本邦、支那と域を異にし、俗を殊にすと雖も、其道二致なしと、嘗て洪範全書の序を作りて、論じて曰く、

蓋し宇宙は唯、一理なれば、神聖の生まるゝ、日出處日沒處の異なると雖も、然れども其道、自ら妙契するものありて存す、是れ我邦人の當に敬んで以て思を致すべき所なり、

此の如く彼れが宇宙の間、唯一理ありて、道亦二致なしとするは、今日より、之れを見れば、卓見なりといはざるを得ず、闇齋本と佛者たりしも、一たび佛門を脫して儒敎に歸せしより佛敎を

以て異端として之れを排斥すること甚だ務む、闢異の一篇、以て證すべきなり、彼れが佛教に就いて非とする所は、其倫理綱常を知らずといふにあり、乃ち彼れが佛門を脱したる動機は、惺窩のそれと異なるなきを知るべきなり、其言に云く、

夫れ程朱の學、始め未だ其要を得ず、是を以て佛老に出入す、其反り求めてこれを六經に得るに及んで、豈に佛老を用ひんや、其之れを闢くや、綱常を廢するの罪あればなり、若し用ふべきの實あり、闢くべきの罪なうして、陰に用ひ、陽に闢かば、何を以て程朱とせん、(闢異)

是れ彼れが程朱の爲めに辯ずる所なれども、又程朱を尊崇する彼れ自身の立脚點に外ならざるなり、陸王の學に對しては彼れ又大家商量集を著はして之れを排斥せり、乃ち論じて曰く、

孟子云はずや、能く言うて楊墨を距ぐものは、聖人の徒なりと、是れ吾れの辭せざる所以なり、先生(朱子の事)力めて陸と辯じて廓如たり、先生沒して呉草廬、趙東山再び之れを倡へ、程篁墩、王陽明尋いで之れに和し、

其先生を外にして立ち難きを以てや、篁墩道一編を作り、心經に附註し、陽明晩年定論を爲り、朱陸を混じて、以て天下を易へんと欲す、陳清瀾が學蔀通辯、馮貞白が求是編正に之れを憂へて作れり、然れども陳馮未だ先生の室を窺はざれば、一酌の水を以て崑岡の火を救ふ勞すと雖も、奚の補かあらん、(答眞邊仲菴書)

又曰く、

張無垢の學、陽は儒にして陰は釋、先生雜學辨の中之れを論じ、又嘗て張氏が經解板行すと聞いて曰く、此禍甚だし、洪水夷狄猛獸の下にあらずと、夫れ先生未だ陸氏を見ざるや、既に其無垢を宗とすることを聞けり、鵝湖の會、其詳なること得て攷ふべからず、然れども其詞を誦して、以て槩見すべし、其後先生辯論して置かず、陸の死するに及んでや、告子に死了するの嘆あり、苟に此集を得て之れを讀まば、則ち朱陸同異の分、他說を待たずして明かならん、蔡介夫(名は清、字は虚齋、)言へるあり、朱子の正學精義を以てして、象山氏兄弟を一時の語次に折服するこ

と能はず、意ふに亦其雄辯の孟子に如かざるならんと、介夫が此言、吾れ之れを韙とせず、夫れ朱子の陸氏に於ける、猶ほ孟子の告子に於けるがごとし、孟子の夷之に於ける、猶ほ朱子の李伯諫に於けるがごとくなれば、則ち是れ服すると服せざるとは、彼れにあるのみ、豈に此れを以て孟朱の辯を方べんや、(同上)

彼れ此の如く朱陸の異同を明かにして、涇渭の混亂を防ぎ、其朱子を尊崇するに於て旗幟最も鮮明なり、決して惺窩の如く朱陸を併取るものにあらざるなり、其言に云く、

朱書の本朝に來たる、凡そ數百年、獨清軒玄惠法印始めて此れを以て正となして、未だ佛を免れず、藤太閤も亦以て程朱の新釋、肝心となすべしとなして、猶ほ佛に惑へり、遂に實に之れを尊信するものを聞かざるなり、慶長元和の際南浦自ら之れを信ずと謂うて、而して亦佛を尊び、惺窩自ら之れを尊ぶと謂うて、而して亦陸を信ず、陸が學たる、陽は儒にして陰は佛、儒は正にして、佛は邪、その懸隔すること、たゞ雲泥

のみならず、既に此れを尊んで彼れを信ずれば、則ち肯菴草廬の亞流のみ、豈に實に尊信するものといはんや、(同上)

彼れが如何に純粋なる朱子學派を以て自ら居りしかは、此言に徵して以て知るべきなり、彼れ又曰く、

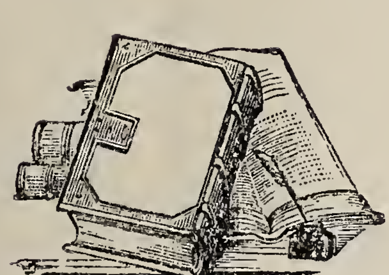
孟子の後、周程張子其學の絕えたるを繼いで、朱先生其傳を得て、以て天下を曉せり、時に陸氏自ら放心を求むと謂うて、學問を事とせず、先生此れが爲めに辯論せりと雖も、然れども己れが言を顧みず、人の言を察せず、而して告子が見に終はる、惜むべきのみ(垂加草第十)

陸象山と告子と何等の類似點もあるにあらず、然れども朱子嘗て象山を告子に比したることあるを以て闇齋亦之れに倣ひ、朱子を以て孟子に比して之れを論ずるものなり、闇齋は畢竟佛敎及び陸王の學を排斥し、獨り朱子をのみ尊崇して、此れに由りて鄒魯の學を繼承し、大中公正の見解に歸せんとせり、近思錄の序に論じて曰く、

竊に謂へらく、高卑を一にし、遠近を合したるものは、聖人の道なり、高

きに升るには、卑きよりし、遠きに行くには近きよりするものは、聖人の教なり、或は高遠に馳せ、或は卑近に滯るは、則ち道にあらず、教にあらざるなり、(垂加草第十)

彼れ若し此の如き見解を以て一生を貫くを得ば、醇儒として之れを稱揚するを得べかりしも、晩年心を神道に寄するの結果として、猿田彦を尊信し、庚申の日を神聖視し、甚しきは土と敬と和訓稍相近きを以て之れを同一視し、遂に荒誕無稽なる土金の教を唱道するに至る、迷信も亦甚しといふべし、佐藤直方、淺見絅齋等の高足弟子、之れが爲めに遂に闇齋に背くに至るもの、亦以なしとせざるなり、



第五　闇齋門人

(1) 保科正之、小字は幸松、會津侯なり、慶長十六年五月七日を以て江戸に生れ、寛文十二年十二月十八日を以て江戸に歿す、享年六十二、著はす所二程治教錄二卷、伊洛三子傳心錄三卷、及び會津風土記一卷あり、蓋し是等の書は、皆闇齋が編次する所ならん、闇齋が撰に係る土津靈神碑は垂加草第廿七に出で、會津中將源公壙誌は同第廿八に出づ、

(2) 淺見絅齋、名は安正、後に出だす、

(3) 佐藤直方、後に出だす、

(4) 三宅尚齋、名は重固、後に出だす、淺見絅齋、佐藤直方、三宅尚齋を山崎門の三傑と稱す、

(5) 米川操軒、名は一貞、字は幹叔、小字は儀平、操軒と號す、京師の人、初め三宅寄齋に學び、後闇齋に就いて學び、遂に性行篤學を以て世に名あり、操軒が友とする所、藤井懶齋、中村惕齋、貝原益軒の如き、皆一時知名の

士なり、其友を見て其人を知るべきなり、益軒嘗て「米川操軒實記」の後に書して曰く、

操軒の人となり、明敏にして志操あり、福を求むること回ならず、其人に接するや、嚴にして和、其事を處するや、敬畏にして苟もせず、其言を出だすや、辨にして序あり、聞くもの厭はず、其學をするや純正、專ら經術を好み、平日心を程朱の書に用ふること最も勤め、雜書を好まず、文中子に所謂雜學せず、故に明かなるもの、其れ此人を謂ふか、」（自娛集卷之七）

操軒又嘗て仁齋と相交はる、然れども仁齋が古學を唱道するに及んで之れに書を贈りて絕交するに至れり、操軒延寶六年八月十九日を以て歿す、享年五十三、一說に五十二（米川操軒實記、南學傳、先哲叢談、近世叢語、自娛集）

---

(6) 谷秦山、名は重遠、後に出だす、

(7) 遊佐木齋、名は好生、小字は次郎左衛門、木齋と號す、奥州仙臺の人、神儒

問答を著はす、(前篇鳩巣文集、鑒定便覽)木齋が門人に佐久間洞巖あり、

(8) 鵜飼錬齋、名は眞昌、字は子欽、通稱は金平、錬齋と號す、京師の人、水戸侯に事ふ、元祿六年四月廿一日を以て歿す、享年六十一、弟稱齋あり、(先哲叢談續編、鑒定便覽、耆舊得聞)

(9) 永田養菴、字號等皆詳ならず、能く易に通ずと云ふ、(先達遺事、佐藤直方學話、諸家人物誌)

(10) 玉木葦齋、名は正英、葦齋は其號なり、又五十緒翁と號す、元文元年七月八日を以て歿す、闇齋に從學して其神道を繼承し、終に一家を成せり著はす所玉籤集八卷、原根錄三卷及び其他十有餘種あり、玉籤集に就いては先達遺事に左の如き記事あり、云く、

玉木葦齋著玉籤集、本風水草而發揮之、若林云、何泄奧秘如此、後屢勸破之、葦齋遂焚之、

と、然れども玉籤集は寫本の儘今日に傳はれり、但寫本によりて多少の異同あるを見る、(國學者傳記集成)葦齋の門人に谷川士淸、松岡仲良、

若林强齋等あり、仲良の門人に竹内式部あり、

(11)矢野拙齋、名は義道、一說に義通、小字は理平、拙齋と號す、豫州西條の人、享保十七年正月十二日を以て江戶に歿す、享年七十一、品川海晏寺に葬る、(鑒定便覽、大日本人名辭書)

(12)淺井琳菴、名は重遠、小字は萬右衞門、琳菴と號す、近江の人、園部侯に仕ふ、著はす所名義詳說及び武要鈔ありといふ、(鑒定便覽、續諸家人物誌)

琳菴が門人に田邊晋齋あり、

(13)川井東村、名は與、字は正直、大阪の人、其父正次茶を賣るを以て業となし、家產頗る富む、寬永中生業を東村に傳へ、之れを戒めて曰く、

財幣失なくして可なり、必ずしも多きを欲する勿れ、多きを欲すれば、必ず人を欺く、

東村年五十に垂(なんな)んとして、始めて學に志し、業を闇齋に受く、東村闇齋より長ずること十四歲、闇齋之れに謂つて曰く、

道に入るは、敬に如くはなし、當に先づ敬を持すべし、子不幸にして

時を過ぐ、必ずしも書を讀まず、專ら實踐を務むべし、

東村是に於てか力を持敬の說に專にし、敢て少しも懈らず、闇齋屢〻其篤志を稱す、東村是に至つて常に往日の親に薄きを悔い、又來日の養を終へざるを懼れ、親に事ふるの道を竭くす、大高阪芝山嘗て進修の法を問ふ、東村曰く、

往日の蹤を追ふこと莫れ、來日の杳なるを逆ふること莫れ、唯〻一日目下善をなすを勉むるのみ、是の如くにして後積み、歲月を度ること久しければ、則ち自然に習慣し、善斯に性をなさん、

芝山嘗て東村を評して曰く、

翁が一味の誠實は、所謂獨り立ちて影に慙ぢず、獨り寢ねて衾に愧ぢざる人なり、

東村延寶五年十一月六日を以て歿す、享年七十七、(續近世叢語、事實文編)

(14) 五十嵐穆翁、名は浚明、字は方德、一に孤峯と號す、越後新潟の人、本姓は

佐野氏、故ありて五十嵐を冒す、壯年京に入り、道を闇齋に問ひ、又宇士新等と交はる、彼れ詩を善くし、又畫に長じ、遂に畫を以て一家を成す、其三子皆畫を學ぶ、嘗て之れを戒めて曰く、

畫は小道なりと雖も、因りて以て世敎を輔くべきなり、爾輩筆を執らば必ず賢哲の偉迹に於てせよ、謹んで誕謾婬褻の事をなして、以て人を敗ること勿れ、

穆翁頗る善行多し、今一々記するに遑あらず、彼れ天明元年を以て病歿す、享年八十二、(鑒定便覽、近世叢語、畫乘要畧、扶桑畫人傳、畫家人名詳傳)

(15) 深井秋水、名は政圓、一説に政國、字は得繇、通稱は主膳、秋水と號す、土佐の人、江戸に住す、劒客なり、兼ねて儒學に通ず、能く父母に事ふるを以て人皆其孝を稱す、享保八年六月を以て歿す、享年八十二、(鑒定便覽、續諸家人物誌、大日本人名辭書)

(16) 植田成章、字號詳ならず、(先達遺事に所謂植田玄節と同一人なるか、)藝州の人、垂加草全集

を編次し、且つ其跋文を作る、

(17)
羽黒養潜、名は成實、養潜は其字なり、字を以て行はる、牧野老人と號す、近江國彦根の人、初め彦根侯に仕ふ、中年志を得ざるを以て仕を致し、講說を業となす、後、加賀に遊び、金澤に寓居し、専ら性理の學を唱ふ、從學するもの頗る多く、養潜薰陶の及ぶ所少しとせず、抑〻金澤地方の文學に向ふ、養潜に起因すといふ、養潜本と闇齋に學び實踐躬行を以て主となす、嘗て論じて曰く、

古人云ふ、氣象好き時、百年是れ當ると、學者宜しく粗暴を防ぎ、慓悍を戒むべし、然して後、此等の病を去らんと欲せば、格物窮理に若くはなし、居る常に此心をして義理に涵泳せしめば、優游自得の久しき、則ち以て客氣を奪ひ、俗習を變すべし、而して易直慈良の心、油然として生じ、輕薄浮躁の念、漠然として消す、道を求むるもの此れより近きはなし、

養潜又嘗て病牀にあり、偶〻赤穗の遺臣大石良雄等の擧を聞き、嘆息し

て曰く、

嗚呼士風の振はざるや久し、獨り是等の輩ありて、同じく死を國難に決す、義烈凛々として以て頽風を激するに足る、

元祿十五年正月十一日を以て彥根に病歿す、時に年七十四、著はす所四書翼十卷、天道流行圖說二卷、講學筆記六卷あり、門人に室鳩巢、岡石梁等あり、（補遺鳩巢文集、先哲叢談續編）

(18) 黑岩慈雲、名は壽、別號は東峯、一の名は恒、字は震翁、土佐の人、高知藩に仕ふ、（先達遺事）

(19) 梨木祐之、桂齋と號す、姓は梨木氏、一に梨本と作る、下鴨の神官にして、國史に精はしく、兼ねて和歌を善くす、享保八年正月廿九日を以て歿す、著はす所日本逸史四十卷、大八洲記十二卷、祭事記八十二卷等あり、（古學小傳、國學者傳記集成、諸家人物誌）

(20) 松岡玄達、字は成章、恕菴と號す、別號は怡顏齋、京師の人、其事蹟は「古學派之哲學」仁齋門人の條に詳なり、

(21)大山葦水、通稱は佐兵衞、原姓は松本氏、京師の人、著はす所葦水草一卷、古語拾遺私考二卷等十有餘種あり(國學者傳記集成)

(22)桑名松雲、仙臺侯に仕ふ、門人栗山潛鋒あり(先達遺事)

(23)友松氏興、通稱は勘十郎、會津侯に仕へ、其家老となる、輔佐の功あり、延寶八年を以て歿す、時に年七十餘、著はす所孟浩錄一卷あり、闇齋嘗て曰く、今日列國にありて技倆あるもの、野中友松二人のみと、以て氏興が人となり如何を知るべきなり(先達遺事)

其他闇齋に從學するもの、正親町一位、野々宮中將、加藤美作守、井上河內守、板垣民部、山本源藏、高田未白、槇元眞、楢崎正員、春原民部、雲川治兵衞等勝げて數ふべからず、藤井懶齋も亦門人の列にあるが如し、垂加草の附錄に眞邊仲菴といふもの、是れなり、後藤松軒は名儒にして曾て一たび闇齋の講義を聞きしことあるも、其侮辱を受けて痛く之れが倨傲を惡み、再び闇齋を見ず、且つ終身手、闇齋の著書を取らず、故に之れを闇齋の門人中に列するを得ざるなり、

第六　闇齋關係書類

山崎家譜

此篇は闇齋の自撰にして垂加草第三十に收載せり、

山崎闇齋行實 水足安方撰

此篇は事實文編（卷之十七）に收載せり、

闇齋先生年譜

翠軒雜錄中に之れを收載せり、

闇齋先生年譜一卷 山田連著

此書は翠軒雜錄中收載する所の年譜と同じからず、著者山田連、字は思叔、京師の人、卷末に若州の人山口重昭の跋あり、天保九年の作に係る、

山崎闇齋言行錄一卷 大草公明撰

山崎闇齋先生事業大概一卷

左の書類を加ふ。垂加靈社編年紀事三卷（寫本）闇齋先生行狀圖解一卷（寫本）

史料叢書中にこれを收載せり。

若林語錄
遊佐木齋紀年錄
先達遺事
南學傳
佐藤直方學話
大日本史料原稿
墨水一滴
閑散餘錄
儒學源流
先哲叢談〔卷之三〕
近世叢語〔卷之三〕
野史〔第二百五十五卷〕
儒林傳　澁井太室著

日本諸家人物誌
鑒定便覽
事實文編〔卷之十七〕
近世大儒列傳〔上卷〕
學問源流　那波魯堂著
山崎闇齋派之學說一卷　法貴慶次郎著
大日本人名辭書
先哲像傳
近代名家著述目錄
日本詩史〔卷之三〕
讀書會意　澁井太室著
日本名家人名詳傳〔卷之下〕
斯文源流　河口靜齋著
茅窓漫錄　茅原定著

第七　闇齋學派

山崎闇齋の學派は闇齋歿後、分れて四派となれり、第一は淺見絅齋の學派、第二は佐藤直方の學派、第三は三宅尙齋の學派、第四は玉木葦齋の學派是れなり、此中前の三派は朱子學派にして後の一派は神道學派に屬す、絅齋には三宅觀瀾、鈴木貞齋、若林强齋、小出侗齋、山本復齋等の門人あり、强齋には又門人松岡仲良、西依成齋及び小野鶴山あり、成齋には又子墨山及び門人村井中漸、鈴木潤齋、古賀精里等あり、是れを絅齋の一派となす、直方には稻葉迂齋、跡部光海、三輪執齋等あり、迂齋には、子默齋及び門人村士玉水等あり、玉水には又門人服部栗齋及び岡田寒泉あり、栗齋には又門人賴杏坪及び宮原龍山あり、光海又絅齋尙齋にも學ぶもの、其門人に岡田盤齋あり、是れを直方の一派となす、尙齋には、久米訂齋、蟠養齋、石王塞軒、服部梅園、山宮雪樓、留守括囊、岩淵東山、井澤灌園、三木信成、唐崎彥明、加々美櫻塢、多田東溪等あり、櫻塢の門人に又山縣大貳あり是れ

を尙齋の一派となす、葦齋には、門人谷川士淸、若林强齋、松岡仲良等あり仲良には又門人竹內式部あり是れを葦齋の一派となす、遊佐木齋紀年錄に云く、

先生(闇齋が事)終焉以前三日、傳神道於正親町中納言公通卿、手授中臣祓風水草、許可於板垣信直、梨木祐之云云、

此れに由りて之れを觀れば、闇齋は神道を正親町中納言、及び板垣信直梨木祐之に傳へたり、然れども敎義としては寧ろ葦齋に傳はり、葦齋之れを發揮し、以て、後世に傳ふることを得たり、闇齋學派は此の如く四派に分ると雖も、概して左の如き共通の特色あるを見る、

第一、堅く師說を奉じて、新機軸を出だすことを務めざる事

第二、實踐躬行を重んじて、詞章記誦を務めざる事、

第三、多く筆記によりて師說を傳へ、以て秘傳とするの風ありし事、

那波魯堂が學問源流に闇齋學派の事を叙述し、論じて云く

其師說に至りては、講義講錄とて、其辭を一々國字を以て之れを記し、

互に寫し取りて秘本の如く之れを藏し、其說を信ぜざる者には、猥りに是れを示さず、是故に他の學者は、同じく程朱を學ぶと稱すれども、少しく異同なきこと能はず、其中詩文を好むあり、好まざるあり、博覽を志すあり、發明を專はらとするあり、敬義の說に從ふ人は、十人は十人、百人は百人、幾たび誰れに聞いても印し出だせる書畫の如く一樣なり、平生學談を以て他門の人には交らず、唯〻其同朋と交はるのみなり、

乃ち闇齋が門人子弟を同一の模型中に入れて鎔鑄陶冶せる畫一主義の結果いかんを見るべきなり、

尙ほ又闇齋學派の傾向に就いて注意すべきもの二三あり、何ぞや、第一に其水戶學派に影響せしこと、是れなり、水戶學派の根本主義は神道にして、之れを扶翼するに朱子學を以てせり、故に闇齋學派が之れと調和し得るもの、固より其自然の結果なりといふべし、闇齋學派の人にして水戶侯に仕へしもの三人あり、卽ち絅齋の門人三宅觀瀾、松雲の門人栗

山潛鋒及び闇齋直接の門人鵜飼錬齋、是れなり、更に之れに錬齋の子稱齋を加へて四人となす、此四人は皆大日本史の編纂に與れるものにして、殊に觀瀾潛鋒二氏の如きは、水戶學派中の錚々たるものなり、徂徠學派の人は水戶侯に仕ふる者殆ど之れなきに、闇齋學派の人が此の如く水戶學派の中堅をなしゝこと、豈に輕々に看過すべき所ならんや、第二に其結果竹內式部、山縣大貳の事變となりしこと、是れなり、式部名は敬持、通稱は式部、羞菴と號し、後、正菴と號す、越後國新潟の人、父を宗詮といふ、醫を業とす、式部享保十三四年の頃、京師に之き、德大寺家に仕へ、葦齋の門人松岡仲良に學び、後又葦齋に學び、神典有職に精はしく、又武術に長じ、廣く縉紳の間に出入す、當時の名卿鉅公、其門に入り、講說を聞くもの多し、寶曆九年罪を得て追放せられ、伊勢國宇治に赴く、明和四年又山縣大貳等の擧に連坐して、宇治より江戶に押送せられ、幾もなく、八丈島に流さる、然れども式部本と大貳等の擧に關係なく、無罪の事明かになれりと雖も、又他の罪を得て遂に十二月五日を以て三宅島に歿す、享年

五十六(星野博士撰竹内式部君事蹟考)式部が京師の名卿鉅公に注入したる神道思想隱然として一の潮流をなしゝこと看過すべからざる事實なり、山縣大貳は加々美櫻塢に學ぶ、櫻塢は尙齋に學ぶもの、故に式部と同じく闇齋學派に屬し、同氣相求むるの結果として、屢ゝ相往來せり、大貳は一種偉大の人格にして曾て古今の兵法、野戰の得失利害を論じ、之れを證するに江戶城を攻め、南風に乘じて、品川に火箭を放つべし等の語を以てす、此れに由りて遂に罪を得、大辟を以て處せらる連坐するもの甚だ衆し、實に明和四年八月廿二日なり、時に年四十有三、式部大貳二人は何れも勤王家にして、多少不穩の言論行爲ありし者の如し、大貳が江戶城を攻むるに、南風に乘じて火箭を放つべしと言ひしが如きは、眞にかゝる隱謀を懷きしにはあらざるべきも、幕府に對して無遠慮なる態度たりしに相違なし、是れ其難に遭ひし所以なり、第三に其維新の大功業に關係ありしこと、是れなり此事に就いては三方面より之れを考察するを要す、(一)先づ維新の大功業は、勤王家の戮力協心に由つて成遂

せられたるものなるが、抑處士としての勤王家は、初めて闇齋學派中に起れり、蓋し絅齋の如きは、勤王家の率先ならん、又絅齋が撰に係る靖獻遺言は、廣く學者間に講讀せられ、勤王の精神を喚起するに於て多大の影響を及ぼせる者の如し、(二)次ぎに水戸學派の維新の大功業に關係ありしは、顯著なる事實なるが、其中に栗山潜鋒、三宅觀瀾等を經て一大原動力となりし闇齋學派の勢力ありしこと、何人も之れを否定するを得ざるべきなり、(三)次ぎに闇齋學派は竹内式部を經て、京師の縉紳間に蟠屈し、維新の際勤王家を皇室の藩塀中より出だせり、蓋し東久世、岩倉等の諸家、皆式部の神道を崇信繼承せしものにて、維新の際に於ても、闇齋學派が多少の餘勢を有せしこと、復た疑なきなり、

此れに由りて之れを觀れば、闇齋の學説は、今日にありては、深く顧慮するに足らざるが如しと雖も、然れども其影響の多大なる、實に豫想の外に出づるものあるなり、是れ何に由りて然るか、闇齋の學説、本と何等の創見あるにあらず、畢竟程朱を祖述するものに過ぎず、是故に如何に之

れを考察するも、學說其物が此の如き多大の影響を生ずること殆んど理會し得られず、果して然らば何に由りて此の如き多大の影響を生ずるを得しか、思ふに此れに就いては二種の原因あり、第一に闇齋が人格的品性の偉大、第二に闇齋が學說の同化的傾向、是れなり、闇齋は博學若くは精通の學者といふよりは、寧ろ一種の敎育家にして其偉大なる人格的品性によりて後進の徒を鎔鑄陶冶せり、後進の徒、人格的品性に於て闇齋彼れ自身に及ばずと雖も、一々闇齋の所爲を模倣し、闇齋學派一般の特色を現出するに至れり、乃ち知るべし、闇齋學派の一般に蹈襲せる特色の如きも、闇齋彼れ自身の人格的品性より來たるものなるを、又闇齋が學說は、朱子學をして我邦の國體に同化せしむるの傾向を有す、是れ其幾多有爲の士を出だしゝ所以なり、蓋し朱子學を奉信するもの、慶元以來其人に乏しからずと雖も、國家の事に對して活動的態度に出づるもの少し、但〻闇齋學派の如く朱子學を借りて以て祖國の精神を發揮するもの眞に活動的態度に出づるを得るなり、是れ其國家の事に對

して立つべき主義方針を有すればなり、闇齋學派の外、朱子學をして我邦の國體に同化せしむるもの、亦水戸學派あり、水戸學派の闇齋學派と同じく幾多有爲の士を出だせるを見て、抑ゝ活動的態度の果して那邊より來たるかを知るべきなり、



第三章　淺見絅齋

第一　事蹟

崎門一派中最も氣節あるものを絅齋となす、絅齋名は安正、初めの名は順良、小字は重次郎、絅齋と號す、別號は望楠樓、近江高島の人、後、京師に徙りて居る、父本と豪富、子三人を生む、伯を道徹と稱し、仲を絅齋となす、倶に醫術を業とす、叔を吉兵衞と稱す、賈人たり、父道徹絅齋をして一世に名あらしめんと欲す、是に於て家産を破り、以て一時豪傑の態度を示す、絅齋年尙ほ少うして闇齋に學び、備に螢雪の苦を嘗む、彼れ嘗て咯血を患ひ、連日愈えず、闇齋尙ほ督責して、少しも假借せず、槇元眞なるもの之れが爲めに闇齋に諷して曰く、彼れが病狀、已に此の如し、姑く業を廢して以て保嗇せしめんと、闇齋聽かず、絅齋疾を力めて强ひて業に就くこと常の如し、未だ幾くならずして疾愈ゆ、闇齋乃ち曰く、死生は命なり、奈何ぞ之れをして其志を折かしめんと、絅齋忼慨自ら喜び、他の儒者の如

く諸侯に仕ふるを屑とせず、故に貧甚しと雖も、處士を以て自ら甘んじ、足、東士を踐まず、門人三宅觀瀾出でゝ水戸侯に仕ふ、彼れ以爲く、其志、道を行ふにあらずと、乃ち書を贈りて之れを絕つ、其狷介孤峭の狀、以て想見すべきなり、先達遺事に左の記事あり云く、

絅齋貧特に甚だし、一時乃ち嚴冬尙ほ一布袍なきに至る、會〻若林の母、一衣を新七に贈り、以て履端の服に充つ、新七拜受し、輙ち翁に獻ず、

又云く、

絅齋家破れて雨日ごとに漏天の如し、翁若林と親ら屋に升りて修葺す、翁體貌肥大にして、蹈む所多く破壞す、

此れに由りて之れを觀れば、絅齋の貧困なる、決して尋常にあらず、然れども彼れ毫も以て意に介せず、近世叢語〔卷之二〕に云く、

絅齋人となり、嚴毅にして威望あり、聞達を求めず、貧窶に安んじ、泊然として世に意なし、其父甚だこれを惜む、晚年錦小路に敎授す、生徒大に進む、其書を說くや、低聲に說き出だし、音調朗暢、一坐肅然、氣を屛け

て竦聽し、敢て噎咳欠伸するものなし、一截一章說き畢はる每に呼んで曰く、理會し去るや否やと、生徒皆稽首して曰く、唯と儀矩森嚴なること、官府の如く然り、

絅齋兼ねて武事を好み、馬に騎り、劒を帶ぶ、其劒方鐔にして觀瀾が篆せる赤心報國の四字を刻し、壯士の態度あり、絅齋晩年に至りて直方と交りを絕つ、是れ直方が親の喪に居りて猶ほ出でゝ仕ふるに因るなり、先達遺事に云く、

佐藤淺見晩絕交、京人傳說、絅齋詰佐藤云、居親喪而仕、何禮、自是不復相接、

三宅尚齋が默識錄(卷之三)に又云く、

絅齋先生與直方先生、初其交如兄弟、後不相通、無相絕之義可言者、亦是氣質之一癖、學問之大疵、甚可惜、直方先生後來思舊交、有將通問之意、絅齋先生終執而不肯、

絅齋が小廉細節に拘々として人と相容れざること、率ね此の如し、闇齋

が晩年神道を主張するに當りて門人中毅然として之れに惑はざるもの、絅齋、尙齋及び直方の三人あるのみ、殊に絅齋は啻に神道を喜ばざるのみならず、又闇齋が敬義內外の說にも從はざりき、默識錄(卷之三)に云く、

敬義先生絕絅齋先生直方先生、自劇論敬義內外之義而漸々如是、故二先生不會于敬義先生之葬、

と、然れども闇齋歿後に及んで絅齋其師に叛くを悔い、香を焚いて罪を謝せりといふ、又門人に神道學者の出でたるを以て之れを觀れば、絅齋も尙齋と同じく漸次に闇齋の神道說を容るゝに至りしが如し、

絅齋承應元年八月十三日を以て生れ、正德元年十月朔を以て歿す、享年六十、絅齋男子なし、乃ち兄道哲の子を養うて以て嗣となす、門人三宅觀瀾、若林强齋、(又寬齋と號す、)山本復齋、鈴木貞齋、小出侗齋等あり、强齋には門人西依成齋、小野鶴山等あり、成齋には子墨山及び門人古賀精里等あり、

絅齋著はす所靖獻遺言八卷、同講義二卷、六經編考一卷、父母存說考一卷、

程子論性諸說一卷、伊川先生四箴一卷、辨大學非孔氏之遺書辨一卷、聖學圖講義一卷、大學物說一卷、忠士筆記一卷、絅齋文集四卷等あり、就中靖獻遺言は、廣く世に行はれ、名敎上裨補する所少しとせず、

絅齋が人格及び事業に就いては三宅尚齋默識錄(卷之三)の中に之れを論じて曰く、

絅齋先生資質豪邁、見識徹微、終身勤苦於此學不已、所著書若干、可以見其大槩、時所憂者所傷於木强不少、嚴師道待門人甚刻、人惡其嚴、博學精義、所謂通儒全才者也、

是れ同門知己の言、以て絅齋が爲人いかんを徵すべきなり、

第二　學說

絅齋が學說として紹介すべきものは、聖學圖講義中に叙述せる一節なり、云く、

扨人の身の任は、我身を修むると、人を治むると、二つにきはまる、其我身と云ふ己れが、父子と云ふ己れ、君臣と云ふ己れ、夫婦と云ふ己れ、長幼と云ふ己れ、朋友と云ふ己れ、己れの一字が、五倫の身ぞ、どちらへどうしても、己れと云ふ字が、はづるゝことなし、己れがさうなれば、人もさうあるぞ、常人は本體あれども、生質のくるひと、生れて後のそこねと、是れ二つで、父子と云ふ己れが親を失ひ、君臣と云ふ己れが義を失ひ、夫婦と云ふ己れが別を失ひ、長幼と云ふ己れが序を失ひ、朋友と云ふ己れが信を失ひ、己れが身は離れずして、さうでない己れになるゆゑ、それを己れが本法の人のなりの樣にしなほすを修と云ふ、しなほさねば、本體の人倫の己れにてなし、水は流れ、火は燃ゆるが、水火のも

ちまへなれども、塞り燻ぼれば、其塞りを浚へ、燻ぼりを疏すが、水火の本法のもちまへに、しなほすと云ふものぞ、それと同じ事なり、其修めやうを學と云ふ、どう學ぶぞといへば、敬と知と行と、三つが修むる學のしやうぞ、學は此三つより外ない、其父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信のどうするがよい、かうするがよいと、其本然の義理、是非善惡、邪正得失差はざる様に明むるが知る、其知るなりに身のならざるを直して、本法の身にしてゆくが行ぞ、知は己れが身にする義理を知り、行は己れが身にする義理を行ふぞ、これも始めは致知力行としたれども、云云、知と云うて置けば、書では精になり、大學では致知になり、論語では博文になり、孟子では知言になり、中庸では明善になる、餘皆同じ、知らねば見えぬゆゑ、凡そ知りやうのことが云うてあるは、皆此れなり、行は其身になるやうにすることゆゑ、書では一になり、大學では誠意以下になり、論語では約禮になり、孟子では集義になり、中庸では誠身になる、餘皆然り、小學近思錄、凡そ孔孟周程張朱、學術を

說ける所、これを以て推し盡くすべし、言がかはらうと、詳略があらうと、此二つより外ない、大抵行はずして知るがよいと云ふは、實用なくして知ること、本法の知にあらず、知るを棄て行ひさへすればよいと云ふは、行ふ所實理に合はずして、本法の行にあらず、どちらへどうしても、此二つをはづさう樣もなく、一にかたづらう樣もない。されども知らんとする我心なければ、知らず、行はんとする我心なければ、行はぬ。何でも心でせざることなし、それで身をはなれて實知實行なければ、心をはなれて身もなし。さあれば其心が常住身に放れて存せざれば、知らう樣も行ふ樣もなし、故に平生此心の己れに失はぬ樣に守り養うて、知行の根本主宰とするを敬と云ふ。凡そ知らんとして理を吟味し、行はんとして理を踐へるも、心の身を離れて覺えなければ、知ることもうかとし、行ふことも、身につかず、庶人より天子に至るまで人倫日用の義理、知行の身に有るか無きかは、惟心の存亡にあることなれば、根本の守り、一心の死生、一身の得失、一息の間より萬事に應ずる

に至り、敬にはなるゝこととなし、それゆゑ心の守りを敬として、知るも行ふも、是れ一に根本要領となる、是れ固より心法の血脈、唐虞三代孔曾思孟、周程張朱、平生衣服飲食の如くに示すの方なり、云云、次ぎの人を治むると云ふは、人は人どうし立ちて居るゆゑ、我が既に善くなると、向きを善くするが、自然當然のもちまへぞ、一人より天下を盡くすに至りて皆然り、其人と云ふも、別はない、父子君臣夫婦長幼朋友ぞ、其父子のそこねたを善くしてやり、君臣のそこねたを善くしてやる、餘皆然り、其善くする道の全體を治と云ふ、凡そ亂れたるををさむるを治と云ふ、至極亂世に及ぶ時、始めて亂と云ふにあらず、直に父子君臣凡そ人倫それ〳〵の本法の道を失へば、則ち亂なり、其人のなりは、指當つては家、其次ぎは國、其十分一盃をいへば、天下ぞ、さて家國天下と立てたるなりにて、其實は家より外ない、國も天下も家の大なるなりぞ、其家は則ち人のなり、人と云ふは、人倫より外なし、云云、仁義禮智信は、天命の本體、父子君臣夫婦長幼朋友は、人道の當然、己れを修め、人を

治むるは、爲學の實功ぞ、大根本の上からいへば、天命の本體、人のせでかなはぬからいへば、人道の當然、其人道を盡くして、本體を全うするは、爲學の實功ぞ。云云 扨當然と云ふは、ひつしりとのつぴきない、いやでもをうでも、口は食を食はねばならず、食へば食ひ樣の道あり、身は衣を著ねばならず、著れば著樣の道あり、さしむきなりに、さうせで叶はぬ當りまへのしやうぞ、父子の親、君臣の義、五倫皆然り、云云、實功と云ふは、まじりなし、浮きたことなし、いらで叶はぬ、今云ふて今の用に立つ、正味の功夫ゆゑ、實功と云ふ、云云、實功は當然を盡くす爲めの實功、其當然が仁義禮智信の本體、人のなりは、天命の本體なりに生れ付きたるもののゆゑ、するわざも天命の本體なり、學も斯樣にせねばならぬが、學の天命の本體なり、此なりの無瑕なるを聖人の全と云ふ、此なりを無瑕なるやうに失はざるを守るの賢と云ふ、此なりの蔽はれて暗きを衆人と云ふ、此なりを無きものにして亡ぼすを惡人と云ふ、云云、

其他絅齋は湯武放伐を非とし、赤穗の四十六士を義士とし、楠公を賛美して「至忠大功」と稱し、足利尊氏二品親王を弑すとし、尊氏兄弟を指して、「亂臣之魁」となし、殊に靖獻遺言を著はして忠孝節義の精神を鼓舞せり、彼れが我名敎上に於ける功勞、決して看過すべからざるものあり、彼れ又嘗て「辨『大學非孔氏之遺書辨』」一篇を著はして伊藤仁齋が「大學非孔氏之遺書辨」を駁擊せり、

第四章　佐藤直方

第一　事蹟

崎門三傑の一人を佐藤直方となす、直方、小字は五郎左衞門、備後の人、年二十一にして京師に赴き、永田養菴を介して、始めて山崎闇齋に謁す、先達遺事に當時の事を記して左の如く言へり、云く、

佐藤直方、永田養菴によりて垂加翁に見ゆ、翁問ふ、汝嘗て何の書をか讀む、直方云く、且く五經を誦すと、翁乃ち問ふ、大夫四方に適くに、安車に乘ると、此れ記し得るや不や、直方答へ少しく凝滯す、翁直に云く、曲禮にあり、戴記の初卷尙ほ記し得ず、烏ぞ五經を誦すとせんと、因りて養菴を顧みて曰く、年少予に從學す、早きことはあり、且く退いて誦讀することを須ふと、直方大に耻慨を懷き、是れより憤りを發し、苦學、眠食を廢するに至る、後一年にして復た翁に詣る、時に鵜飼金平坐にあり、會〻書肆竹村漢本二程全書を携へ來る、翁輙ち直方をして之を誦せ

しむ、直方受け讀んで頗る滯澁す、翁叱して金平に投ず、金平卷を開いて序文を誦し、一字を蹉たず、讀み畢り、傲然として云く、明人文を作るも、亦復た浮靡と、翁直方に向つて言ふ、讀書他們の如くにして始めて是なり、何ぞ汝が滯澁するが若くならんと、直方益〻擢屈す、然れども亦資性英發、因りて徐に禀して云く、小子嘗て浮屠の一切經を誦し、堂塔を建立するものを見るに、未だ必ずしも佛界に至らず、小子精懇にして、志、成佛にあり、聖學に至りても亦此の如し、豈に該博を之れせんやと、翁大に其言を奇とし、寵異最も至る、

闇齋弟子を敎ふること極めて嚴なり、然れども直方之に事へて惰らず、遂に能く其旨を得るに至れり、後彼れ徒りて江戸に居る、

直方人となり、高邁逸宕、皓齒玲々として、眼彩人を射り、頗る口才あり、彼れ諸侯の坐にあるも、毫も之を意とせず、肆辯懸河、譬喩涌くが如く、一坐傾聽せざるなし、彼れ又平素自ら奉ずること豐麗、日に醇酒を飮み、快活脫酒、終身戚容なし、乃ち知るべし、彼れ本と濶達自在の人にして、闇齋及

び絅齋尙齋と大に同じからざるものあるを、蓋し彼れは三傑中にありて、最も磊落不羈なるものなり、

彼れ初め父の職を承けて、結城侯に仕へ、俸五十口を受く、元祿六年之を辭す、後又厩橋侯に仕へ、其邸に居ること二十年、侯年ごとに之に百金を餽る、然れども道合はざるを以て遂に之を辭す、時に年六十九、彦根侯賓師を以て之を招き、禮遇甚だ渥し、彼れ語次從容として其老臣に謂つて曰く、

凡そ天下の事、生れながらにして知るものにあらず、是を以て各、師を求めて業を受け、琢磨浸灌して、以て其道を得、今や古に據らず、師に學ばずして、これを裁制するものあり、天下慣れとなして、其非なるを知らず、諸君之を知るか、是れ他なし、政事なり、夫れ政の不善は、乃ち黎民の害となり、後世の憂を貽すなり、而して人皆これを臆に取り、愼重を知らず、猶ほ茶話をなすがごときなり、其れ可ならんや、

一時以て確言となす、彼れ享保四年八月十四日を以て唐津侯に進講す、

疾暴に作り、肩輿に駕して家に歸る、翌日永眠す、享年七十、門人三輪執齋倉皇として至る、至れば已に簀を易ふ、乃ち和歌を作りて之を哭す、先達遺事に云く、

闇齋性急にして特に門人の遲鈍なるものを罵る、直方安正輩來りて玄理を談ずるに及んで始めて怡笑す、

此れに由りて之を觀れば、直方の如き闇齋に親近して最も能く其道を得たる一人なり、然れども彼れ嘗て敬義內外考論を作りて闇齋が說を非とし、爲めに罪を闇齋に得、師門に出入せざるもの二年、殊に闇齋が晚年神道を唱ふるに及んで、直方之を疑ひ、毅然として從はず、是を以て竟に弟子の籍を削らる、先達遺事に云く、

淺見佐藤師門に絕たる、淺見晚に香を炷いて拜跪、罪を神靈に謝す、佐藤は否ず、

直方人に接するに、儀矩を設けず、師弟の間、禮法太だ簡なり、嘗て言ふ、

吾れ臭を逐ふ者の爲めに書籍を講說す、此れを友生となす、但〻從游日

久しければ、則ち呼ぶに爾汝を以てす、此輩亦竟に弟子の班に居るのみ、今の學者多くは其師を信ぜず、獨り師自ら尊大にす、其妄笑ふべし、

彼れ又嘗て論じて曰く、

博覧強記、能文善書、宋の蘇東坡に若くはなし、然れども道を得る者よりして之を視れば、東坡固より論ずるに足らざるなり、故に學者其識見、東坡を以て俗儒となすにあらざるよりは、聖賢の地位に至ることを得ず、今多識及び詩賦文章皆之を善くせんと欲する者、世を沒するまで眞儒たること能はざるなり、

彼れが如何に實行を尚びしかは、此言に由りて之を知るべきなり、

當時の學者、大抵皆字號あり、然るに直方獨り字もなく、號もなし、或人之に謂つて曰く、

山崎闇齋は、子の師なり、淺見絅齋、三宅尚齋は、子の友なり、而して皆號を以て稱す、子獨り尊稱すべきものなし、知らず何の說あるか、

直方答へて曰く、

余邦俗に從ふのみ、此邦古より字號なし、何ぞ必ずしも邦俗に背くことをせん、假令ひ余彼の西の邦に之くも、亦名は直方、通稱は五郎左衛門を以て居らん

是れ亦一見識なり、門人等稱して直方先生といへり、或は剛齋を以て直方の號とするものあれども、是れ全く誤れり、剛齋は門人野田德勝の號にして、直方の號にあらず、直方又嘗て其居る所の軒を峰松軒と名づけしことあるも、是れ亦自稱の號にあらざるなり、

三宅尚齋が、默識錄(卷之三)に直方を論じて曰く、

直方先生氣禀宏濶穎悟、故に其學苦まずして至る、中年學勤めず、進まず、屬續前十四五年、學を好むの篤き、手卷を釋かず、人と語れば、小近四子にあらざれば、未だ嘗て口舌に載せず、才の穎なる、辭の敏なる、終日人と學を談じ、譬諭百端、殆ど人をして踴躍自得せしむ、實に東方の一人のみ、憾む所のものは、其學、小學四子近思の間に止まりて近思錄致知篇に載する所の先賢の語に吻合せざるもの多し、而して其見識の

徹、未だ能く精微に入るや否やを知らず、其道を談ずる、所謂壁を隔てゝ聞くべきもの庶幾し、其天命本然の妙を發明するもの、今世に存せず、

又云く、

直方先生始め日向の大守水野某に仕ふ、之を辭して後、雅樂頭酒井某の餽を受く、中ごろ其邸に館し、前後二十餘年を歷、酒井某甚だ勢利に志し、己れが爲めにするの心なし、故を以て直方の力、分寸の効なし、余竊に其餽を辭するの速ならざるを惜む、幸に尙ほ簀を易ふるの前一年、餽を辭して邸を出づ、以て他人の譏を誘すべし、我輩當に戒むべし、

又云く、

直方先生極めて穎悟、其學苦まずして成る、其才辯快濶、儔すべきの人なし、故に其門人の學をなす、精微を探らず、直方先生書を讀むこと甚だ簡にして、六經に及ばず、唯〻之を談ずる、四書小學近思錄のみ、故に其徒の學、甚だ固陋なり、絅齋先生生質朴强、其學博うして極めて精し、故

に其徒の學亦觀るべし、因りて謂ふ、三千子の傳ふる、曾子にして子思孟子の學を生む、我輩須く後學を誤まらんことを慮かるべし、

尙齋が評、毀譽相半するものといふべし、長島侯淸曠秀邁、直方を一見して其玄談を聞き、衽を斂めて讃述す、直方沒するに及んで、便ち尙齋を延く、尙齋口談極めて周密にして、曾て淸言せず、侯是に於てか學を厭ふの意あり、乃ち尙齋の直方に及ばざる所あるを知るべきなり、

赤穗侯の遺臣大石良雄等吉良氏を襲うて之を殺す、明日跡部光海來りて謂つて曰く、

赤穗の義士復讎す、先生旣に之を聞くや否や、

直方曰く、

此れ復讎にあらず、何ぞ義士たるを得ん、

遂にこれを柳宗元が駁復讎議に徵し、論じて以て上を陵ぐものとなす、

直方が門人には、稻葉迂齋、三輪執齋、野田剛齋、天木時中、永井隱求、友部安宗、跡部光海、菅野兼山等あり、迂齋名は正義、十左衞門と稱す、寶曆十年十

一月を以て歿す、年七十七、執齋後陽明學に轉ず、迂齋子默齋あり、默齋名は正信、通稱は又三郎、著はす所迂齋行實、墨水一滴、先達遺事、孤松全稿等あり、迂齋の門人に服部栗齋、溝口浩齋、村士玉水等あり、默齋の門人に奥平栖遲菴、手塚坦齋等あり、栗齋の門人に宮原龍山、光海の門人に岡田盤齋あり、

直方著はす所排釋錄、鬼神集說、講學鞭策錄、道學標的、學話、韞藏錄等あり、就中韞藏錄は彼れ自身の學說を敍述せるものなり、

第二　學說

闇齋、程朱の說に本づき、敬義內外の說を立て、身を內となし、家國天下を外となせり、闇齋の此說に對して直方、絅齋と同じく異論を唱道せり、直方嘗て敬義內外考論を作る、載せて韞藏錄(卷之二)にあり、云く、

易の文言に敬義內外と、此れ乃ち心と身とを以て言ふもの、而して程朱の明說、移し易ふべからず、往年敬義先生近思錄爲學の敬義內外を講じ、身を內となし、家國天下を外となすの說あり、當時門人或は信じ、或は疑ひ、信疑相半し、辨論して學友の爭論となすに至る、予時に偶〻疾あり、講席に侍せざること日久し、同友の徒日に來りて內外の說を問ふもの衆し、予も亦先生の說を以て非となし、之を辨じて止まず、是れに由りて遂に罪を先生に得たり、師の門に出入せざるもの、幾ど二年、淺見安正已むを得ずして敬義內外說を著はし、以て程朱の正意を發明し、而して學者の疑惑を解釋せり、今孔孟程朱の書を讀んで其文義

を曉るもの、一たび之を觀れば、則ち辨詰を待たずして、以て自ら其旨を識るべし、何の疑か之あらん、

此の如く直方は闇齋が身を內となし、家國天下を外となすに反し、心を內となし、身を外となせり、直方の說是なり、然れども闇齋が謬見を持し、頑として變せざる極度の執拗に至りては、亦以て珍とするに足るものあるなり。

韞藏錄（卷之三）に學談雜錄あり、其中往々傾聽するに足るものあり、因りて左に之を擧げん、

一

天地之大德謂ㇾ生、生々謂ㇾ易、なれば人は生たものなり、近思錄の道體皆いきて流行するなり、人欲は死物なり、天地の流行にあらず、曾點の章の注「曾點之學、人欲盡處、天理流行、」見るべし、故に敬は人の心を生かすなり、放心は死なり、一陰一陽無二間斷一も生たものなり、死敬活敬見るべし、易に「君子終日乾々、不ㇾ息二於誠一、天行健、」（不ㇾ息二於誠一の一句は直方が加ふる所、）と、一息の

間斷なし、川上の歎も爰なり、（中略）中庸二十六章「至誠無息」より「文王之所以爲文也」迄、生々積累の意、誠は死物でなき所、看るべし、仁を動でかたる親切を考ふべし、周子の一者無欲の親切味ふべし、佛者は心を死ないしたものなり、うつとりとして居る人は放心なり、何程行儀がよくても此心が生きねば、やくに立たぬ、世の實學者と稱する人は、爰がすきと合點ゆかぬ故に心法と云ふことをしらず、（中略）かう見れば敬が始終の要、聖學の基本なりとは云ふなり、敬からゆかねば、仁も間斷あつて私欲あり、勇もとどかぬ、知もうはゞしりて根に入らぬ、「尊德性而道問學」とは爰を云ふなり、

二

道理を知らぬ人は、死んだ人を調法がる、（中略）生た人こそ調法なれ、死んだ後は何の調法もなし、聖賢を尊信するは、其言行を尊信したものなり、孔子程の聖人でも、言行が一つも殘らねば、調法はなし、異端の徒が佛神の力をたのみ、病を除き貨福を求むるは、かいしき愚なること

なり、生た人は妙薬でも覺えて、言うて聞かすることもあるべし、死んだる人が何とするものぞ、我死後に我子孫を人が打殺すことありても、なんとも仕方はなし、死んで後に子孫を守るべきこと笑ふべし、(中略)今孔孟の眞跡を持ちても、金銀にはなる、我心身の德、學問の益にはならず、楠が帶したる劍を持てば、武邊がなると思ひ、四十六人の鑓(やり)を所望する樣なことは、淺間敷きことなり、歷代聖賢の眞跡を揃へて所持しても、我志立たねば、學問はならぬ、世上の墨跡を好む人に賣つて、相應に生業をし、知音懇意の貧苦を救ふ迄のことなり、弓矢の守り神の談笑ふべし、盛久が千手觀音にたすけられたを見て、尊信する武士は、道理の場の用には立たぬ、爰をぬける人は學者にさへ稀なれば、況や無學の人は、論ずるに足らぬ事なり、(中略)人の忠信が我進德の爲めにはならず、忠信の人と語り、忠信の人の樣子を聞けば、それに化して、我心身が道に進む益ありと云へども、每日論孟の書を讀んでも、我志がなければ少しも化することはなし、況や論孟に及ばず、俗人の、少しば

かりの律義など云ふ分で、何として我進む益あるべきや、此様なる味を知る人でなければ、道學はかたられず、阿彌陀が我れを十萬億土へ迎へとらうと誓願を立てたとて、難有い辱い御佛様じやと云ふは、どうしたわけもなきことぞ、我志が立たねば、何程佛が思うても、ならぬと云ふことを知らぬ、佛も人々の志の立つと立たぬをわきまへずに我名を唱へたらば、決定極樂に往生させう、迎へとらうと云ふは、粗忽の至りなり、願ふものも卑怯なことなり、我れを極樂へやらふと云ふをうれしがるは、今國君でも貨福人でも、なんのこともなきに、我れに金を十萬兩やらふと云ふをうれしがる様なものなり、志ある人が我務もなく、大分の金を人に受くる筈はなし、是れで考へ見よ、今日師弟となつて講習するに、師が我れを君子にしてくれることがなるに、極まれば、孔門三千人、皆顔曾の様にならるゝ筈なり、兎角弟子の方からならねば、成就せず、ならうと思ふ人の勤の上に師が差引の差圖をするなり、師だのみをする學者は、たのみはない、兎に角にも己れが自立

でなければならず、故に學は自己の立志が第一なり、大學の傳皆自明也の意、中庸末章愼獨考ふべし、吾れ嘗て言ふ、師にきくは十にして二三なり、七八は皆弟子の力量にあることなり、小學に「夫指引。師之功也。決意而往。則須用己力。難仰他人矣」と、學者之を思へ、

三

天地の間理氣の二つなれば、常と變とある筈なり、常は理なり、變は氣なり、冬寒夏暑は、常なり、時あつて寒暑の不時は、變なり、吉凶禍福、壽夭貧富の異も皆同じ、常理で云へば、人は皆聖賢の筈なり、さて其氣がなければ、人物も生ぜぬ、其氣に淸濁ある故に、賢知愚不肖の別あり、平生云ふ樣に不の字が氣の變なり、父母に孝をするは、定理なり、不孝なるは、氣の變なり、性善は定理なり、不善は變なり、士のにげぬは理なり、にぐるは變なり、其變がある故に、學問がなければならぬ、朱子の所謂「反其同而變其異也」とは、爰を言ふ、其同とは、定理のことなり、其異とは、氣の變なり、聖人も氣を離れはせねども、理が主となつてある故に、不の

變はなし、氣を理からさしつかふ故に、氣にまげられず、凡そ人は理が立たぬ故に、氣にまげらるゝ、人心道心の義も爰にあり、聖人上に立てば、理からをさむる故に、下の風俗も、それに化して皆善なり、聖人の御代にもわるい人あるは、かの變氣がある故に、惡人もあり、凡人が上に位すると理がなき故に、下がわるうなつて、善はひたと減少して、世上一同に不の字になるなり、夫れが禽獸になつたと云ふものなり、故に衰世には、常理の人が稀にして、不の字多し、(中略)學者の見所あると云ふは、此常理をたしかに知ることなり、朝聞道の章考ふべし、異端俗人理を外にして、氣の變をありがたがる、神明と云うてかたじけながるは、皆氣にまかれたるなり、凡人は理に固有して居れども、氣がわるさ故に、不の字になつたものなり、故に學問は變化氣質でなければ、用に立たぬ、(中略)異端は理がなき故に、氣の妨をいやがるから捨身出家するなり、皆氣の方ばかりなり、仙人の術も氣を保つ計なり、吾儒の道は、五倫の中色々の苦勞なる事あつても、夫れをのがれうとはせず、其事

の當然の理の樣にするなり、苦勞を免れんとはせざるなり、世上の理をかまはぬ人を氣隨とは、よく云うたり、己れが一身のこゝろよい樣にとしたものなり、人事は人がする筈に定つたものなれば、のがれうとはせぬ筈なり、釋迦が生老病死の苦を厭ひて、雪山に遁れたは、理を知らぬ故なり、それから萬々世の毒を流したものなり、今病人の夜伽をするは、氣のつまることなれども、伽をする筈の人なれば、することをいやとは思はぬ筈なり、理をたしかにしらぬ人はいやがるなり、たゞ四書の文字の上で理と云ふことを知つた分では、用には立たず、己れが心に得ぬ人は、理を實に知つたとは云へぬなり、うはつらを知つた知り樣は知らぬと少しもちがはぬなり、（中略）今學者が祿を求め、身をこゝろよくしたきとて、出家をたのみて、祿仕するは、理を知らぬの甚しきなり、學者は獨立特行、何をも賴むことはなし、人を杖につくは腰ぬけなり、神を賴み、佛にねがひをするは、うろたへものと云ふべし、

論語の「苟志於仁矣、無惡也」の章、極めて言へば、孟子の「仰不愧於天、俯不怍於人」の意と同じ、學者天に對して愧ぢざると云ふは、大なることなり、鼷鼠の日をいやがる樣に天に對して恐れかゞむことあれば、人の人たる所はなきなり、聖賢に至らざるうちは、氣質の蔽、すきと去ることなければ、しそこないをすることはあるべし、けれども心中よりつくり出す惡事なく、苟に「志於仁矣」さへすれば天の咎にはあはざる筈なり、（中略）今日凡夫の上にても、主君に事ふるに、しそこない不調法はゆるさるゝが、心中より君をないがしろにするは、ゆるされず、何程の軍功事功あつても、心中に君をあなどる意あるは、にくきことなり、「爲人臣止於敬」は至極したることなり、然れば學者天に對してにげかくるゝ意なき程に一分の守あれば、天地人の人にして、令名を失はざるの人數に入るべし、（中略）今日の學者日用の間、心中の實不實に目をつけて其力を用ふる人なれば、慥に德に入る筈なり、數千卷の書を讀んでも、我れに省みて實不實を看るでなければ、君子の徒と云はれず、云云、

五

俗人は戰場でひろひ首をした樣なるものなり、自分の手柄はなく幸ばかりなり、富貴にして妻子病氣なし、仕官首尾がよい、火事に逢はぬ、終身氣の毒なことにあはぬ、御目出度あやかりたい、子孫繁昌、子供衆皆有付かれた、逆な憂にあはれぬなどゝ云ふ類、皆仕合せ幸なり、自分に克己して人欲を去り、道理を明かにしたと云ふこそ、高名手柄とは云ふべし、凡人のは、人欲のはゞをするを結構なことにする、あさまし、老子が功成名遂身退くと云ふは、人欲のはゞを云うたものなり、學者も爰の窟をまぬかれねば、孔孟程朱の徒ではなし、吾人はきと志をひきむくべきことなり、孟子の三樂を云はれた所を考ふべし、我一分が人の道を盡くしての上にあの三樂あることなり、朝聞道のことなしには、根がくさつたものなれば、樂のせんさくはない、父母兄弟息災でも、我一分がへぼくたなるには論はない、故に君子有三樂とは云はれた、小人三樂ありとは云はぬ、其身が君子でなければ、何程目出度こと

あつても、隣の寶をかぞふると云ふものなり、さて孟子の三樂を考へて見よ、君子有二三樂一而王二天下一不二與存一焉。とあり、君子なれば、あの筈なり、凡夫は天下國家を取るなれば、何もうれひ、氣の毒はなし、只己れが長命を願うて不義淫亂を永くしたいと思ふ外には、望みはない、秦の始皇が長生不死の藥を求めたも夫れなり、君子は我身の外のことは、何んでも是非かうしたいと望みはせぬ、君子素二其位一而行。不レ願二乎其外一。三樂の註に、林氏曰く「此三樂者。一係二於天一。一係二於人一。其可二以自致一者。惟不レ愧不レ怍而已。學者可レ不レ勉哉。」と、さて〳〵旨い哉、自致の二字、今日學者の二字符なり、右の處に志の立たぬ學者は太平記讀むも同じ事なり、（中略）我れに備つた仁義禮智の外は、何でも大切に是非とはせぬぞ、去るによつて此四德をば是非々々しやりむりに求むるなり、爰へ目のついた人が學者と云ふものなり、吾人深く心得べし、さて志を立て道に赴くことが、人を賴み、世上を見合せてすることでなし、一念せうと思ひ立てば、どこに障りもなくなることなり、己れが心次第になせばなら

るゝことなり、何の憚ることもなけれども、凡夫の哀しさは、うじついて居るなり、「いざかへりなんもとの都へ」と云ふ句に「思ひ立つ心の外に道もなし」と付けた意は、親切なり、さて此の如く道理をはきとすまして置いて見よ、武運長久を祈り、神佛の加護を頼み、惡事災難をはらひ、富貴を祝し、鬼神に求め、冥加を願ふの類、淺間敷ことに見ゆるなり、我一心志の外に何も頼むことはなし、君子の鬼神に祈るも、我身を祈ることはない、臣子迫切の情、天地山川五祀も人の爲めなり、民を新にすることはあり、人に新にしてもらふことは、聖賢の書になし、新民の新の字見るべし、自新の自の字は、民の力なり、軍陣には踏込む計なり、殺されぬ樣にして人に首を貰ふの、矢よけのと云ふことはない、一商人曰く、妻のしき金で、身を立てんと思ふは、腰ぬけなり、自分にかせぎ出すでなければ、用に立たぬ、人を頼んで商ひしては、のだつことはない、云云、奇特なとなり、儒學者が聖賢になり樣は、知りても志が立たねば、君父の敵と見付けて、得討たぬ樣なものなり、何程知りても、行はね

ばやくに立たぬ、然れば志の立つた人が仕樣を知らぬは又殘念なり、

六

一商人曰く、火事に逢うて迷惑せつなけれども、死なずに生きて居るので堪忍がなると云ふ、予云く、それ迄が俗情十分なり、其上は俗人の知らぬことなり、學者は其上を知らねばならぬ、商人曰く、命を棄つるより上のことが何かあらうぞ、予云く、學者のは命はすてゝも、義理があるので、堪忍がなると覺悟して居る筈なり、孟子の所レ欲有レ甚二於生一者と云うておかれたなり、（中略）人は死んでも、理は潰れぬ形なきゆゑなり、

七

學者は自己の理を信ずるでなければ、本のことでない、聖賢を信ずるは、善いは善いけれども、我理を信ずるには及ばぬ、（中略）神道者の神明を信じてあそこへ取付くは、本を失ふたものなり、人々有レ尊二於己一者。天理也。其尊無レ對。我心より外に頼み力にすることはない、

八

學者が師の説をきゝ、諫を受けて身を修むるは、先づよし、去りながら我れ自ら奮發して非を改むるには及ばぬ、學と云ふものは、我れ自ら合點して非を改むるでなければ、大益はない、ぴたと改めねば君子にはならぬ、吾人のは一年に一度改革があるかないか程、ない程なれば、埒の明かぬ筈なり、論語に曰く、過則勿憚改。改の一字、學者終身の符なり、太極は理なり、性即ち理なりなれば、本然に不善はない、不善は氣にわたつてから以後のこと、不善あれば太極の本然にあらず、學問は人欲を去りて天理に復るなれば、不善を改めぬと云ふことはない、氣質變化は、改むるなり、天地自然に改むると云ふことなければならぬ、(中略)今日學者が聖賢の書を講じ、聖賢に至ると云うて、我身の不善を改むることなきは、言語を絶したることなり、せめて一日に一度改むることあるかと云へば、一日に一度もなし、一年に一度もなき學者もあり、門人には改めさせたい心あるに、自己に改むるの意なきは、なんとし

たものぞ、たま〳〵改むる人あれども、たゞ輕き癖をなをす計りにて、性偏克ち難きを改むることはなし、人々自ら省みて平生改むる意があるかなきかを考ふべし、改むると云ふ心付なくば、程朱の學はせぬがよし、世上なべての人欲の助になる藝學をした方がわけが立つと云ふものなり、吾人兎角改むる合點のないで、學の進みがなきなり、自己の上で改むべきは、何であらうと氣のつかぬも遺恨なることなり、脇から見えても、自己には見えぬものなり、そこに學友の益は入ることなり、今時の學友は、夫れをいうてきかすることなし、兎角自から省察せねばならぬ、

是等の言によつて之を考察せば、如何に直方が講說に巧なるかを知るに足らん、

直方は痛く陽明が學を斥け、其論を以て妄論となし、其人を以て、聖人の罪人となし、甚しきは、鼠の性を得たるものとなして、論じて曰く、

鼠はくらがりに目が見えて物を齧みやぶる、小人の形なり、王陽明が

事理を外にするは、鼠の性を得たるか、

と、其言の餘りに皮肉に過ぎたるものあるは惜むべし、

彼れ又陽明が學を批評し、知行の必ずしも一致するものにあらざるを論證して曰く、

王陽明が格物の工夫は入らぬ、良知あれば自然に人欲は知るゝ、故に心のわるいをば、其良知でたゞし、まろくにする、是れが人欲を去りて天理に純なると云ふ、何のこともない、安いなれども、さうはならねばこそ、古聖賢の色々の教あり、人欲と知れば、其儘それが去らるゝなれば、大學の功夫は入らぬ、まさしう惡いと知つても人欲を得はらはぬは、知ることのつまらぬ故なり、能く知つたことは行ひもとゞくものなり、聖賢君子、惡人小人、色々あり、生知安行は、良知良能と云うてすむべし、其外は其分ではすまぬ、どうすれば聖賢になるぞと云へば、成り樣がある筈なり、其仕方かうすると云ふことを知らずになんと工夫が下さるゝぞ、其仕方を知るが知なり、其知る所が詰らねば、惡いと知

つても拂ふことがならぬ、故に致るの工夫が入るなり、譬へば火事は消すものと知つても消し様があり、父母はいとしがる筈と知つても、いとしがり様あり、それ〳〵の仕方は知らねばならぬはいやと云はれぬなり、譬へば祿仕を願ふは、學者の道でないと云ふことを知つた學者がすぢめもない祿仕を願ふを見よ、わるいと知つても、行には出ぬ所あり、夫れを致知のないとは云ふなり、あたまから願ひを惡いと知らぬは俗人なり、我弟や甥を出家にするをば學者たるものゝ善いとは思はぬけれども、人欲のある歷々の學者が子弟を出家にするを見よ、行と知とは別なり、此あやを知らずに人皆可以爲聖人と云ふはたはけなり、

其言鑿々餘姚の短處に中れるを見るべし、直方又排釋錄一卷を著はして、佛敎を排するに擬す、其跋文中に謂へるあり、云く、

嗚呼孟朱の言、此の如く之れ嚴且つ切にして、程子又佛老の害、楊墨より甚しといふ、則ち學者の佛氏に於けるや、豈に痛く辨じて猛く距が

ざるべけんや、

彼れ又伊藤仁齋が「送浮屠道香師序」を駁し、痛く其佛に佞するの態度あるを攻擊せり、

直方は靜坐集說の序を作りて靜坐の學者に必要なることを言へり、云く、

程朱の所謂靜坐は、乃ち學者、心を存するの術にして、德を積むの基なり、今聖賢を學ばんと欲するもの、力を此に用ふる能はざれば、則ち亦豈に己れに得る所あらんや、

彼れ又時に靜坐を存養の工夫として門弟子に講ぜしと見え、山崎諸彥筆錄中に靜坐說筆記一篇あり、靜坐の工夫を論ずること頗る精細なり、其他彼れは養子となつて他姓を冐することを非とし、赤穗の四十六士を義士にあらずとし、湯武放伐を不可ならずとし、楠公を尙ぶものを非議し、我邦未だ曾て聖賢あらずと論斷し、遂に皇統の萬世一系なるを定理にあらずとなし、專ら宋學を奉ずるの結果として種々國體に合はざ

る僻説を主張せり、



第五章　三宅尙齋

第一　事蹟

三宅尙齋、名は重固、小字は儀左衞門、後、丹治と改む、尙齋は其號なり、播磨の人、年十九にして京師に遊び、業を闇齋に受け、淺見絅齋、佐藤直方と友とし善し、遂に共に崎門三傑の稱を得るに至る、尙齋學成りて後江戶に來り、阿部侯に仕ふ、彼れ官に就くや忠直、務めて其職を盡くす、居る十年にして侯卒し、嗣侯封を襲ぐ、一二の同志と屢〻直諫すれども、其言行はれざるを以て疾に託して致仕を乞ふ、允されず、猶ほ屢〻乞うて止まず、是を以て罪を得、寶永四年忍に幽囚せらる、尙齋氣象豪爽、其獄にあるや凡そ三年、每旦水を乞うて沐浴し、布袍綻裂すれば、紙縷を以て之を補綴し、每食後必ず起きて行くこと數百匝、看守人怪んで戒嚴す、尙齋笑つて曰く、

丈夫義不レ苟脫、所二以然一者、恐下罹二脚疾一、膝行就レ刑、爲中人所上レ笑也、

侯又嘗て人をして尙齋が擧動を察せしむ、尙齋乃ち詩を作りて之に示

して云く

富貴壽夭不レ二レ心、但向二面前一養二誠心一、四十餘年學二何事一、笑坐二獄中一鋏石心、

其硬骨男兒たる、以て知るべし、尚齋獄中に於て偶々一鋏釘を得て、竊に喜んで以爲く、事若し不測あらば、以て死するに足ると、已にして又小木片を得たり、乃ち嚼んで以て筆となし、心に得る所あれば輙ち鋏釘を以て指を刺して血を出し、遂に此れを以て狼疐錄三卷白雀錄一卷を著はせり、世之を尚齋の血書と稱す、初め尚齋の獄に赴くや、金二十兩を妻田代氏に付し、以て母を養ひ、二子を育せしむ、田代氏以爲く、夫獄中にあり、艱苦必ず甚し、之が妻子たるもの、豈に晏然煖飽すべけんや、是れより冬、縕袍を襲ねず、夏、蚊幮を用ひず、定省の暇、人の爲めに裁縫洗濯し、以て奉養に供へ、一金を費やさず、尚齋獄を出づるに及んで悉く彼れが付する所の金を返す、尚齋怒りて曰く、此の如くなれば奉養必ず缺くる所あらんと、妻曰く、姑を養ふは、妾自ら之を辨ず、之を留むるもの、豫め君が今日の用に供ふるなりと、尚齋固く朱説を守り、深く已れに異なるものを疾むと

雖も、然れども三宅石菴、三輪執齋及び、玉木葦齋と相友たり、學派異なりと雖も、復た論辨せず、三氏皆尙齋を稱して溫厚長者となす、尙齋方直なりと雖も、性仁恕にして、物を傷づくるに忍びず、曾て童子の鼠を捕ふるあり、尙齋之に謂つて曰く、之を殺すも何の益かあらんと、乃ち之を放たしむ、又尙齋が案上飯粒あり、雀每に下りて之を啄む、門人相謂つて曰く、先生の仁、禽獸に及ぶと、元文六年正月廿九日を以て京師に病歿す、享年八十、門人久米訂齋、蟠養齋、石王塞軒、井澤灌園、多田東溪等あり、尙齋學規嚴密なりと雖も、師弟の間、情誼甚だ厚し、是を以て彼れが歿するや、門人哭泣、父母を喪ふが如し、尙齋著はす所默識錄四卷、狼疐錄三卷、白雀錄一卷、祭祀來格說一卷、太極圖說解筆記一卷等廿餘種あり、就中默識錄と狼疐錄とは彼れが學說を叙述せるものにて最も重要なる書類なり、祭祀來格說の如きは、本と狼疐錄中の一篇に過ぎざるなり、默識錄は倫理彙編中に收載し、狼疐錄は甘雨亭叢書中に收載せり、尙齋が事蹟は山宮維深の尙齋先生小傳、板倉勝明の尙齋三宅先生傳及び先哲叢談〔卷之五〕近

世業語〔卷之二〕先達遺事等に詳なり、

尙齋は崎門三傑の中年最も若くして最も長生なり、絅齋歿後三十一年、直方歿後廿三年生存せり、故に能く闇齋の學を大成するを得たり、且つ絅齋は狷介孤峭にして直方は圓轉滑脫、各〻一方に偏する所あり、此間に立ちて尙齋は比較的中正不偏の資質を有せり、然れども直方よりは寧ろ絅齋に近似せる處多きは否定すべからず、板倉勝明尙齋を論じて曰く、

闇齋之學、實至₂先生₁而全備、故其著書、皆爲₂後學之模範₁、所﹅謂三傑、先生雖₂晚出₁、豈居₂第二₁哉、

洵に確評といふべし、又三傑中尙齋は最も詳細に最も愼重に考察を試みたる者の如し、即ち默識錄、狼疐錄の二書、以て證すべきなり、

第二　學說

尚齋は獄中に於て婆羅門哲學に類する一種の神秘說を考出せり、彼れ固より朱子と同じく理氣二元を立すれども、理を以て大本となし、氣は理の生ずる所とす、故に畢竟唯理の一元に歸するなり、彼れ理氣を論じて曰く、

氣は理の體たり、理は氣の骨子、故に理に根して生じ、理に循つて聚まるものは、氣なり、氣は聚散ありて理は消散なし、(狼疐錄一)

乃ち彼れが根本原理とする所は、理に外ならざるを知るべきなり、尚ほ彼れが

蓋し天地萬物、理氣の二に過ぎずと雖も、然れども亦之を要するに理といふに過ぎざるなり、氣、理に本づいて生ず、亦理の形のみ、(默識錄卷之一)

といひ、又

天只是れ理と氣とのみ、而して其氣も亦理の質なり、之を要するに、只是れ一箇の理のみ（同卷之二）

といふに徵すれば、其一元論者たること復た疑なきなり、乃ち之を朱子に比すれば、一段の進步を成せるものといふべきなり、

彼れは又宇宙に本原一定の規矩あることを信じ、之を論じて曰く、

天地此の如く大にして、日月星辰、行度盈縮、千萬世を亘りて一毫の差繆なし、萬物此の如く多くして、而して飛潛動植、形狀氣味、千萬世を亘りて一毫の差繆なし、本原一定の規矩なるものあるにあらざれば、何すれぞ能く此の如くならん、所謂誠、所謂太極は、卽ち是れ本原一定の規矩なるものを指して言ふ、其一毫の差繆なきもの、其れ誰れか之をつかさどらん、亦造化の妙、知者之を知るのみ（同卷之一）

其所謂本原一定の規矩は卽ち宇宙を一貫せる秩序にして、初めより豫定せられたる意匠 Design あるを意味するものなり、彼れ又天地間に一定不易の天命あることを論じ、吉凶禍福天壽等總べて有生の初めに豫

定せらるゝ約束なることを言へり、曰く、
天地の間、只理と氣とのみ、而して理は則ち一定易ふべからず、氣或は變ずべし、故に君子惟理を守りて吉凶禍福遇ふ所に安んず、己れにあるものは、義理差はざれば則ち遇ふ所の吉凶、皆正命なり、我眞元の氣、若し百歲の壽を得るも、義死すべくして五十の時に死するも、是れ時運のみ、然れども亦是れ命なり、百歲の壽は、有生の初めに定まる、其時運は是れ張子の所謂遇なり、之を要するに、遇も亦有生の初めに定まる者のみ、故に程子朱子遇をいはず(同卷之二)

是れ卽ち一種の定命論にしてセントオーガスチンアクキナスカルヴキン諸氏の Predestination の說と頗る相類似する所あるが如し、彼れ尙齋は婆羅門哲學の如く最大の精神と特殊の精神とあることを考出し、後者を、各具の神と名づけ、前者を統體の神と名づけ、兩者の間に一種神秘的の關係あるものとせり、特に此一種神秘的の關係あるに因りて天地、祖考、及び自家三者の相互連絡ありて畢竟一箇の精神に歸すること

を發見し、自家獨得の天人合一論を主張せり、其言に云く、

祖考の精神は則ち天地の精神の理に根して、生々窮りなきものなり、自家の精神、又其形を主として、其形に局せられず、忽ち百里の外に往き、頓に百年前に至る、位を立て主を設け、必ず誠、必ず敬、祖考の精神を聚め、祖考の理を以て之を陽に求め、陰に求むれば、則ち自家の精神と與に二氣、位に合復す、主に靈あればなり、蓋し主を立てゝ在すが如きの敬を致せば、則ち我精神の向ふ所、必ず引いて聚むるものあり、卽ち是れ我精神の伸ぶるなり、二氣合復するなり、天神人鬼二ならず、人に驗して見るべし、十數年前、嘗て喜怒の事あり、事已み時過ぎ、我心亦停らず、十數年後、或は他人之を問ひ、或は自家之を求むるに因り、其事頓に復し、理に循つて聚まること此の如し、天地間祖考を生ず、是れ天地の一事、祖考已に死し、年月過度ると雖も、亦祖考の理滅せず、祖考の理を以て之を天地に求むれば、則ち必ず祖考なる者の復するあり、理に根して生じ、理に循つて聚まること此の如し、天地祖考自家、合一間な

し、只是れ一箇の精神、我精神、祖考の主に依れば、則ち天地の精神と此に聚り、祖考、天地の精神に復生す、而して我精神と主に依り、位に靈あり、我精神聚まる處、祖考此に洋々彷彿たり、卽ち是れ天地精神上に復生するなり(狼疐錄一)

彼れ此旨意を狼疐錄及び默識錄中に幾度となく反覆して説示せり、蓋し彼れが最も得意の見解ならん、竊に彼れが意中を揣摩するに、理は卽ち最大の精神にして天地、祖考、及び自家を一貫して永遠不滅なるものなり、然るに天地、祖考及び自家の差別を成すものは唯氣に由るのみ、氣は聚散あるを免れず、祖考曾て一たび世に生存せしは氣の聚まるものあるが爲めなり、其氣已に散して祖考已に生存せずと雖も、祖考の理は永遠不滅なり、此永遠不滅なる祖考の理を以て祖考を天地に求むれば、祖考乃ち復生し、祖考を代表する對象(卽ち位牌)に依るを得となす、若し我精神にしてかゝる對象に聚まらば、天地、祖考と同一體とならん、是れ彼れが根本思想なり、要するに、彼れは祖先を以て復活再生し得べきも

のとするなり、若し誠意誠心に祖考を崇拜し、我精神をして此一點に凝聚せしむれば、獨立特行せる我精神の自覺は一時停止し、殆んど我精神姑く彼對象に往いて祖考の精神と相合し、全く同一體となるが如きの感あり、是を以て彼れ尚齋神秘的に之を論じて曰く、

形あるもの、形々相會し、氣々相感じて、耳目口舌を以て相通ず、形なきもの、神々相感じて相合す、形あるもの、形々相會すること能はざれば、則ち亦神々相交通す、我れの神、彼れに至り、彼れの神、我れに至る、相通ずるの至り、我れ彼れの神を動かし、彼れ我れの神を動かす、(同上)

形ある者が、形々相會し、氣々相感ずることは、固より言ふまでもなきことなれども、形なき者が神々相感ずることは何によりて之を知るか、彼れは言語文字を以て神々相交るの機關とすれども、言語文字なき場合に於ては、如何して神々相感するを得るか、自家の自由意志によりて祖考の精神を聚めて之を致すとするも、是れ畢竟自家の想像に過ぎずして、何等の證明もなし得らるべきことにあらず、然れども彼れは斷じて

天地及び祖考の精神が自家の精神と一貫して實在することを信ずるもの、是れ其神々相感ずるの說ある所以なり、彼れ論じて曰く、

昨日の耳目、固より心と合一貫通す、今日の耳目、昨日の耳目と貫通一連す、而して今日の耳目、亦心と合一貫通す、祖考固より天と合一貫通し、自家、祖考と貫通一連す、而して自家亦天と合一貫通す、(同上)

此の如く彼れは天地、祖考及び自家の一貫統合を說き、絕對的眞理の如くに之を主張す、是れ蓋し彼れが世界及び人生に對する根本的信仰ならん、彼れ又往を藏し來を知るの說を立てゝ曰く、

往を藏し來を知るは、精神の妙なり、昨日の事、元と理に根して生ず、其事已に過ぎて、其理は則ち滅せず、滅せざる理を以て昨日の事を求むれば、則ち理に循つて生じ、往事我神上に洋々彷彿たり、是れ其理滅せざるなり、所謂「具衆理」、所謂「妙衆理」是れなり、事未だ來らずと雖も、亦一氣貫通、理は則ち已に定まる、已に定まるの理を以て之を推せば、則ち將來の吉凶、理に循つて我神上に著見す、此れ亦所謂「應萬事」所謂「裁衆

理なり、天神亦此の如し、去歲の春、梅花を生ず、是れ元と理に根して生ず、春過ぎ花落つると雖も、亦其理は則ち滅せず、而して今年陽氣發すれば、則ち復た花を生ず、是れ天神の往を藏し、所謂萬象森然として具はる者なり、後事未だ來らずと雖も、亦一氣貫通、理已に定まれば、則ち來日の千變萬化、今日天神の明なること知るべし、前日の祖考、元と理に根して生ず、祖考已に死すと雖も、其理は則ち滅せず、滅せざるの理を以て之を求むれば、則ち理に循つて生じ、祖考天神に洋々として、自家の精神と此に復す、已に定まるの理を以て之を求むれば、則ち吉凶理に循つて著見すと雖も、然れども常人は私欲を以て其神を蔽ひ、盡く將來の吉凶を知ること能はず、是に於て之を天神に問ふ、天神元と物蔽の間なく、龜策に依つて以て吉凶を告ぐ(同上)

是れ亦彼れが得意の見解なり、其往を藏すといふは、殆んど意識內容 Bewusstseinsinhalt の統一 Einheit を意味する者に似たり、其來を知るといふは、嚴密の意味に於て出來得べきことにあらず、若し將來の事變を生ず

べき現在の一切の原因を正確に測定し得るものと假定せば、或は來を知ることを得べきか、彼の天氣の豫報の如き、或程度迄來を知るものといふを得ん、然れども世界及び人生に於ける一切の事變に就いて來を知ることは、神にあらざるより尙ほ不可能の事に屬す、然りと雖も、彼れは自家の精神は、天地の精神卽ち天神と一體たるを得るものとせり、果して然らば其來を知るの結論は、其前提より來るものと見るを得べきなり、彼れ論じて曰く、

我神は、卽ち天神の形肉に依る、直に是れ天神、一念發動、以て之を天神に問ふ、一念發動、其れ亦天神の發動、故に天神に通じ、息を容るゝなきなり、神明方寸の間にありて、耳目手足に亘る、天神湊合の處ありて人物に亘る、其理一なり、只依る所の形肉、淸濁あり、濁器に依れば、光を發せざるのみ、(同上)

天地の精神卽ち天神其物が我精神ならば、我精神は、卽ち神なり、神としては、「ゴッド」の如く、「ブラーフマン」の如く全知全能ならざるべからず、是

故に前提を認容する以上は、來を知るの能力も、亦否定するを得ざるなり、然れども彼れが說く所に於て遂に徹底せざるものあり、何ぞや、彼れ天地、祖考及び自家の精神を以て一體となす、果して一體たらば、祖考及び自家の精神が如何して個體性を有するを得るか、又個體性を有する祖考及び自家の精神が如何して唯一絕對なる天地の精神と合一するを得るか、是れ尙ほ不可解の疑問として存す、次ぎに注意すべきは、彼れが天神とする所のものは、人格神に外ならざるを、彼れ論じて曰く、

天神無心にして靈なり、然れども無心の妙、有心の妙より妙なり、天地は是れ大底の人、天神も亦人神の大なるもの、大なるが故に、人の思慮計較あるに似ざるのみ、(同上)

是れ天神は、思慮計較を竢たずして直に知ることを得るをいふなり、卽ち來を知る能力の如きも、亦其自ら有する所なるを知るべきなり、其他彼れが氣不滅論を唱へ(狼疐錄一)又食肉論を唱ふる(默識錄一)が如き、皆學者の注意を拂ふべき所となす、彼れ又博愛人道の主義を鼓吹して曰

く、

人は是れ天の生ずる所なり、天、物を生ずるを以て心となす、則ち人心の德、亦只生々慈愛底の者なるのみ、全く此生々の心を體せば、則ち我心萬物を貫いて間隔なし、天下一家、中國一人、孔子間なきの心を指示して曰く、己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す、至親至切至著至明なりといふべきなり、特に此赤肉團の爲めに生々の本心を害す、故に父子已に胡越たり、己れに克つは其害を去る所以なり、忠恕は其間隔を通ずる所以なり、（默識錄卷之一）

其天下一家、中國一人といふが如き、實に公明正大の議論なりといふべし、殊に彼れは博愛を敵人に及ぼして、論じて曰く、

凡敵人之降、無㆑可㆑殺之理、（同卷之三）

當時已に此論あり、洵に卓見なりといはざるを得ず、彼れ又良心の錯誤あることを論じて曰く、

良心の發、人皆之あり、然れども氣質人欲の中より發出し來る、故に過

不及の差あるを免れず、異學の徒之を尊ぶこと寶珠の如し、此れを以て準則となす、亦殆いかな(同巻之四)

是れ蓋し王學者に對して言ふものならん、尙ほ正面より王學を破して曰く、

王學者謂へらく、程朱格物の訓、是れ外面より種子を下す、萬物我れに備はる、豈に外に待たんやと、此言似たり、然れども內外間なきの理を知らずして言ふ、此理內外なし、物にあるもの便ち是れ我れにあるの理、況や之を求め、之に格るもの、我れなるをや、(同巻之三)

又曰く、

知りて後行ふ、知は先きにして行は後、王氏の辨、亦破る能はず、此れ自然の理なり、渠れ良知を致すを以て學術の大端となす、亦是れ知は先きにして行は後なるなり、特に渠れ自然の知を主とし、我れは工夫の知を主とす、自然工夫の別あり、而して自然の知を以て言ふもの、我れ亦之あり、小學の敎の如きは、固より是れ良知を導くの學、然れども之

を導くといふ、則ち已に工夫あり了る、況や大學をや、渠れの徒曰く、知上工夫なしと、此れ大なる差繆、終に後學を欺き、程朱格物の訓を抵排す、其罪大なり、（同上）

又曰く、

學の言たる、效なり、先覺に效ふの謂なり、故に學は之を人に取りて、之を己れに取らず、是を以て後世書を讀むは、法を古に取るを急務となす、王氏の學、良知を以て主となす、故に法を己れに取りて、蔽はるゝ所の心の法となし難きを知らず、彼の徒動もすれば良知を言ふ、故に美質の人を稱揚し、以て聖賢の學、此にありとなす、而して復た學の貴ぶべく、忠信の人の取るに足らざるを知らざるなり、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、十五學に志す時より力を用ひ、心を勞し、求索尋討、四十五十の時に至り、方に始めて其成功を得るのみ、云云、王氏の徒此れを知らず、徒に小學底に事とし、大學の道を知らず、亦哀むべきかな、（同上）

又王學の獨り自己天然の良知を主として、博く客觀的認識を求むるの要を知らざるを難じて曰く、

譬へば堂屋の如く、四面皆牆壁、一空隙處に就き、一箇燈を以て之を照らせば、則ち我眼に映じ、戸樞のある處を知るを得て、徐に歩履を進むべし、徒に暗室に坐し、眼を閉ぢ、門を探り、戸を尋ぬるも、豈に能く出去らんや、(同上)

陽明學派の人は是等の駁論に對して必ず辨ずべきものあるべしと雖も、亦能く其弊に適中せる所あるは、疑を容るゝ能はざるなり、

以上紹介せる所の要領によりて十分認容すべきが如く尙齋は闇齋學派中にありて最も考察に長じ、最も思想に富めるものなり、然れども彼れ我國體に關しては一種の謬見を懷けり、嘗て論じて曰く、

我邦君臣之義、其明過於萬國、蝦夷夫婦之別、其正亦非他國所及、此皆偏國之所致、狐能使己神、螢能自照、人反不可及、蓋失中和者、反一路明、有偏長者、(默識錄卷之二)

彼れ我邦君臣の義を以て正道に合するものとせずして、反りて中和を失するものとなす、何等の僻論ぞや、其他彼れが屢〻甚しき迷信を主張し、荒誕無稽の言をなして敢て意とせざるが如き、當時の事とはいへ、眞に彼れが爲めに惜むべしとなす、



第六章　谷秦山

谷秦山、名は重遠、通稱は丹三郎、小字は小三次、秦山と號す、土佐の人、闇齋に學び、後土佐侯に仕ふ、享保三年六月三十日を以て歿す、享年五十六、谷干城氏の祖先なり、著はす所神代卷鹽土傳、中臣祓鹽土傳、保建大記打聞、秦山集、秦山隨筆等あり、秦山集は土佐國群書類從卷百二十に收載せり、秦山の事蹟は日本敎育史資料〔五〕國學者傳記集成及び事實文編〔卷之廿四〕等に詳かなり

秦山著はす所の隨筆は秦山集中の雜著を單行本として傳ふるものにして凡そ五卷あり、其中散見する所の名言を摘記して彼れが學說の一斑を示さん、

一

禮は人事の儀則、之を失へば便ち禽獸なり、

二

大丈夫の人に於ける、豈に畦町を存せんや、

三

無形の處卽ち天なり、方寸の內天地に流通す、所謂莫見乎隱、莫顯乎微、ものゝ此れを以てか、

四

理明かなれば、便ち取舍の輕きを覺ゆ、

五

敬に居て簡を行ふ、尤も妙、

六

言を聽いて養を見る、

七

世間萬事、百起百滅、靈臺を累はすに足らず、但不善をなすの實あらば、心の全體、虧けて復せず、其鉅細今昔、或は同じからずと雖も、一念此に及ぶ每に未だ嘗て惕然として慙怍し、欿然として自失せずんばあら

ず、則ち初めより異あらざるなり、所謂雖有天下不能一朝居ものゝ此れを以てなるか、懼れざるべけんや、懼れざるべけんや、

八

心の本體は善のみ、故に不善をなすの實あれば、至りて細微なりと雖も、此本體虧けて復するなし、復た全きに歸するの子たること能はず、哀いかな、

九

心を立つる、青天白日、身を守る、臨淵履氷、

十

夙に興き夜に寐ねて、今日の志を忘るゝ勿れ、

十一

人心危險なること甚し、一目の偸視、一言の淫語、乃ち德を戕ふの斧斤、當に細微となして忽略すべからず、

十二

人欲を去る、他の法なし、譬へば孤軍の乍ち敵に遇ふが如し、只軀を捐て、以て前に向ふを得るのみ、若し靜にして以て之を制せんと欲せば、天理人欲、並び立つべからず、彼れの勢已に主たらば、些少の功力の、豈に能く及ぶ所ならんや、

十三

一念の欲、制する能はざれば、其罪天を欺くに至る、懼るべきかな、

十四

性の善なる、多く論ずるを須ひず、善をなせば必ず快く、惡をなせば必ず慊からず、天下の同情なり、只此一端亦決すべし、

十五

徳の修まらざるは、不仁なり、學の講ぜざるは不知なり、義を聞いて徙る能はざるは、不勇なり、不善にして改むる能はざるは、不實なり、

十六

天地の間、只是れ方に生ずるの氣、

十七、

心是にあらざるを知りて、冒昧之をなすものは、天なきなり、天なきものは滅ぶ、

秦山、随筆の中に明人の往々程朱を詆ることを叙し、論じて曰く、

至明末此風益熾、實明朝一代大病也、至我邦若伊藤氏山鹿氏、亦尤而效之、可謂鴟梟笑鳳凰之一按也、

乃ち彼れが洛閩の忠臣たるを知るべきなり、

秦山闇齋が學を傳へて之を海南に扶殖し、自ら一派を成せり、闇齋本と海南に學ぶもの、故に闇齋に取りては、秦山を經て報本の實を擧げしものといふべきなり、

我田地は法なり、我拔く所の莠は我欲なり、我用ふる所の鋤は智識なり、我播く所の種は無垢なり、我爲す所の業は戒を守ることなり、我獲る所の結果は涅槃なり、

釋迦

第四篇　寛政以後の朱子學派

第一章　柴野栗山及び異學の禁

柴野栗山、名は邦彥、字は彥輔、栗山は其號なり、讃岐高松の人、幕府に仕へ、昌平黌の敎官となる、文化四年十二月一日を以て歿す、享年七十二、著はす所栗山文集及び其他數種あり、栗山が學說として一も紹介すべきものあるなし、然れども彼れは異學を壓迫して、朱子學を復興するに與りて力あるものなり、實に彼れは德川時代に於ける各學派の盛衰に少なからざる關係を有し、殊に朱子學の系統に於ては一新紀元を開きしものなり、此れ吾人が彼れを看過する能はざる所以なり、

元祿享保以來仁齋徂徠の徒、各〻門戶を張り、其師說を主張し、又別に折衷學派なるものも起り、安永天明の頃に至り、朱子學は殆んど之が爲めに壓倒せらるゝの看あり、當時江戶には紀平洲、塚田大峯、山本北山、龜田鵬齋、吉田篁墩、市川鶴鳴、伊東藍田、戶崎淡園、豐島豐洲、岳東海、古屋昔陽の徒

あり、京阪地方には皆川淇園、片山北海、赤松滄洲、中井履軒、村瀨栲亭、巖垣龍溪、伊藤東所、佐野山陰等あり、其他熊本には齋藤芝山あり、筑前には龜井南冥あり、是等は皆朱子學派の人にあらず、朱子學派の人は、日本全國に於て屈指すべきものは栗山を筆頭として尾藤二洲、古賀精里、岡田寒泉、西山拙齋、頼春水、藪孤山、中井竹山等數人に過ぎず、朱子學の衰退も亦甚しといふべし、是を以て寛政二年五月に至り、異學の禁あり、異學とは總べて朱子學にあらざる學をいふ、朱子學を以て正學として、其他の學を壓迫するの意に出づるものなり、寛政二年の禁令は林大學頭に達せしものにて左の如し、

寛政二年庚戌五月　　林大學頭　江〇林信敬

朱學の儀は、慶長以來御代々御信用の事にて、已に其方代代、右學風維持の事被仰付置候得ば、無油斷正學相勵、門人共取立可申筈に候、然處近頃種々新規の說をなし、異學流行、風俗を破候類有之、全く正學衰微の故に候哉、甚不相濟事に候、其方門人共の內にも、右體學術純正なら

ざるもの、折節有之樣相聞如何に候、此度聖堂取締嚴重被仰付、柴野彦助岡田淸助儀右御用被仰付候事に候得ば、能々此旨申談、急度門人共異學相禁、猶又不限自門他門申合、正學講究致、人材取立候樣相心掛可申候

此の如く異學を官府に於て禁ずる事となりたる重なる理由は、畢竟左の二種に歸するならん、

(一)幕府は羅山以來朱子學を以て其敎育主義となし來れるが故に朱子學衰退の際に當りて之を刷新するの必要ありし事、

(二)蘐園を始めとし異學の學風、多く檢束を加へざる所より其弊次第に甚しく、何等か振肅する所あるにあらざれば、國民敎育を蠹毒するの恐れありし事、

是れなり、此時に當りて松平越中守定信白河樂翁幕府の執政たり、此人は天明七年に老中の上座卽ち御大老となり、寛政五年に至り、願に依り老中を免ぜらる、故に在職七箇年なり、老中を罷めてより三十六年を經

文政十二年に至りて歿す、享年七十二、樂翁人となり學を好み、賢を尙ぶ就職の後、幾もなく栗山を登用し、又尾藤二洲と岡田寒泉とを拔擢し、共に昌平黌の敎官として、朱子學を擴張し、異學を排斥せしむ、世是れを寛政異學の禁といふ、此事たる本と栗山の建議に出づと云ふ、當時博士の稱號ありしにあらずと雖も、栗山二洲寒泉三氏相並んで敎鞭を昌平黌に執りしを以て世是れを寛政の三博士といふ、又栗山の名は彥輔、二洲の名は良佐、寒泉の名は修助なるを以て世是れを三助ともいふ、後古賀精里、賴春水、赤崎海門等も亦召出されて昌平黌の敎官となる、精里以下の諸氏は樂翁老中を罷めたるの後に登用せられたれども、亦其意志を遂行するの結果に出でたること疑なきが如し、殊に樂翁は退職後も依然幕府の學政に少からざる勢力を有せしを以て之を觀れば、此邊の消息、畧〻揣摩するに難からずとなす、

此の如き異學の禁は實際學術界に如何なる影響を及ぼしゝか、異學の徒、之が爲めに大打擊を受けて一時喧騷を極めしが如し、就中塚田大峯

の如きは、樂翁に上書して大に其非なるを論ぜり、又赤松滄洲の如きは、書を栗山に送りて切に其反省を促せり、栗山措いて答へず、西山拙齋栗山に代り、書を滄洲に送りて其說を反駁せり、此の如くにして爭論一時囂々たり、然れども朱子學が幕府の敎育主義として再び勢力を得るに及んで、地方各藩中に之に倣ひ、學制を釐革するもの少からざるを以て海內の學風、頓に面目を一新せしこと推して知るべきなり、之に反して異學は仕官の爲めに不利なるを以て從學者著しく減少し、次第に其勢力を失墜せり、殊に鵬齋の如く憤慨甚しく、生を酒盃に託して、放浪醉倒、以て身を終はれり、芳野金陵彼れが窮狀を叙して曰く、

> 窮特甚。夏夜應招。赤裸而還。孺人怪問。曰。失脚落溝。孺人曰。盍提衣來。曰。臭穢。手何可觸。曰。別無可更者。先生笑曰。好矣。裸而生。裸而居。不妨也。（金陵遺稿卷七）

以て其狀況いかんを察知すべきなり、蓋し異學の禁は一種の迫害なり、殊に都下に於ける異學の巨魁某々を指して、五鬼と稱し、惡名を以て之

を烙印するに至りては、學派の爭も、亦其弊を極むるものといふべし寛政異學の禁より幕末に至る迄卓絶せる精神的巨儒の出でざるは主として自由思想を絞殺したるに因由する者の如し、重野博士嘗て之を論じて曰く、

程朱學の嚴重に定まつて以後、幕府や諸藩の學校で成長した學者は、概して律義一邊を本として、先づ言はゞ無用の人物が多い、品行は謹愼篤實であるから、誠に無事な人であるけれども、進んで爲す所の技倆のある學者は、學校中から養ひ出したものは少ない、全く無いと言つても宜い位で、大抵は律義かたまりの人間を生じなすと云ふことになつて居ります、(東京學士會院雜誌第十六編之二)

誠に其言の如し、不世出の英雄豪傑は朱子學派中に求むるを得ず、然れども朱子學派の人は謹愼篤實にして危險なる處なし、之を要するに、道學先生の徒なり、寛政の頃、蘐園及び其他の學派の弊風、愈〻甚しく、一世の名敎將に地に墜ちんとするに當りて、栗山二洲の徒か惺窩、羅山、順菴、鳩

巢の跡を紹ぎ、更に洛閩の學脈を標榜して海內の敎育主義を統一せしもの、蓋し亦時勢の要求に應ぜる所爲ならん、是故に此れに對して固より非難すべき所なきにあらずと雖も、其敎育上に於ける多大の效果に至りては、決して之を埋沒し了るを得ざるなり、

栗山の事は大日本敎育史資料、續近世叢語、事實文編、家世紀聞、近世先哲叢談、續諸家人物志及び栗山先生の面影等に出づ。



第二章　尾藤二洲

寛政三博士の一人を尾藤二洲となす、二洲、名は孝肇、字は志尹、通稱は良佐、二洲と號す、別號は約山、伊豫川上の人、父舟を操るを業とす、二洲少うして足疾あり、年廿六にして大坂に來り、片山北海に就いて書を讀み、物徂徠が復古學を喜ぶ、彼れ自ら當時の事を叙して曰く、

好んで物氏復古の學をなす、當時以爲く、聖人の道、此に求めて備はる、詩を作り、文を作るは、唯〻李攀龍王世貞の及ぶべからざるを以て憂戚となす、歲の庚寅、大坂に來り、病を醫古林氏に養ひ、偶〻蘐園隨筆を讀む、是に於て始めて物氏の說に疑あり、乃ち文一篇を著はして、以て之を片山北海に質す、北海乃ち敎ふるに孟子を熟讀するを以てす、因りて其敎の如くするもの數月、稍〻物氏の古の古ならざるを覺ゆ、然うして後中庸を讀み、又溯りて易を讀む、是に於て疑ふもの、日に解く、（與藤村合田二老人書）

此時頼春水亦大坂にあり、北海の社友たり、因りて二洲と相知る、春水程朱の書を得て之を喜び、二洲に勸めて之を讀ましむ、二洲亦甚だ之を喜び、以て正學となし、相共に斯に從事す、彼れ又中井竹山兄弟と親み善し、安永元年偶〻駿臺雜話を讀み、其中に世善く濂洛の書を讀むものなしとの言あるに至り、手の舞ひ、足の踏むを知らず、遂に鳩巢を尊信すること甚だ深きに至れり、寛政中幕府の命を受けて昌平黌の教官となり、柴野栗山岡田寒泉と朱子學の中堅を成す、世是れを寛政の三博士と稱す、二洲文化十年十二月十四日を以て歿す、年六十九、儒者捨場に葬る、著はす所正學指掌一卷、素餐錄一卷、冬讀書餘二卷、靜寄餘筆二卷、稱謂私言一卷、中庸首章圖解一卷、靜寄軒文集十二卷等あり、門人長野豐山最も世に顯はる、二洲人となり、恬淡簡易にして、音吐爽亮、又喜んで酒を飮む、嘗て古人の句に「白髮書生無伎倆、滿窓紅日醉如泥」とあるを讀んで、是れ實に余の寫眞なりと云へり、（冬讀書餘卷一）

彼れ嘗て座右八戒を作る、云く、

一心主一事、不可二三、
一行取衆善、不可偏執、
一坐作常要畏謹、不可傲慢、
一言語每要簡明、不可躁妄、
一應事必辨其是非、
一接物必擇其邪正、
一羣居之時、須禁雷同、
一獨知之地、最加謹愼、

二洲は純然たる朱子學派の人にして朱子を尊信すること極めて篤し、其言に曰く、

自有儒者以來、未有斯書、自有儒者以來、未有斯人、百世之下、誰不欽仰、（文集卷五）

又云く、

德、伯子に至りて、其盛を極む、而して學術識見、自ら千古に超出す、學、朱

子に至りて其大を極む、而して德行言辭、皆百世に師表たり、（素餐錄）

又云く、

聖人あつてより以來、未だ孔子あらず、儒者あつてより以來、未だ朱子あらず、（同上）

推尊至れりといふべし、乃ち彼れが學の紫陽に本づくこと亦推して知るべきなり、彼れ嘗て「發蒙十二說」を作る、載せて中庸首章圖解の卷末及び文集の卷二にあり、是れ彼れが自得する所を敍述するものに似たり、固より程朱の見解以外に別に發明する所あるにあらずと雖も、彼れ文章の技に長ぜるを以て說破し得て頗る巧なる所なきにあらず、今左に「天說」と「理氣說」とを譯出して之を紹介せん、「天說」に云く、

天の名大なり、該ぬる所其れ廣し、其理之を太極といひ、其氣之を陰陽といひ、其主宰之を帝といひ、其賦予之を命といひ、其功用之を鬼神といふ、析つて之を言へば、卽ち猶ほ數ふべきなり、專らにして之を名づくれば、則ち天にして足るなり、今夫れ蒼々たるものを指して之を天

といふ、人誰れか然らずといはん、然るを以て然りとなすもの、人の庸なるものなり、其理を指して之を天といふ、人或は之を然りとせず、然らざるを以て然りとなすもの、人の智なるものなり、而して庸なるもの、徒に其蒼々を識りて、而して理の即ち天なるを知らず、智なるもの、乃ち其蒼々を舍てゝ、而して獨り理を指して天となす、皆古人天を言ふの義にあらざるなり、夫れ天の名大なり、該ぬる所其れ廣し、是故に太極を知らざるものは、天の理を識らざるなり、陰陽を知らざるものは、天の氣を識らざるなり、帝を知らざるものは、天の主宰を識らざるなり、命を知らざるものは、天の賦予を識らざるなり、鬼神を知らざるものは、天の功用を識らざるなり、太極なり、陰陽なり、帝なり、命なり、鬼神なり、皆其然る所以を知りて、而して又默會神融、其一たる所以を知りて、然うして後仰いで之を觀れば、依然として是れ蒼々の天なり、乃ち與に天を言ふべきのみ、云云、

近くこれを人に取れば、太極は其性なり、帝は其心なり、命は其情なり、

陰陽は其氣息なり、鬼神は其魂魄なり、夫れ人に性情心氣魂魄あれば乃ち耳目口鼻の用あり、性情心氣魂魄は本なり、耳目口鼻の用は末なり、徒に其末に循つて、而して其本を問はざるが若き、其れ之を知ありと謂うて可ならんや、故に屑々として日月星辰の行を察して、而して其理を明かにせざるもの、亦是れ蚩々の類のみ、夫れ日月星辰は天の象なり、耳目口鼻は人の形なり、形象あれば斯に然る所以の理あり、其然る所以を窮めて之に格る、太極陰陽鬼神の說、得て聞くべきなり、性情心氣魂魄の義、得て明かにすべきなり、云云、

「理氣の說」に云く、

寒暑風雨は氣なり、寒暑風雨する所以は理なり、而して其時を得るもの、理の自然なり、喜怒愛惡は氣なり、喜怒愛惡する所以は理なり、而して、其節に中るもの、乃ち理の自然なり、理卽ち太極、人にありては天命の性たり、理の自然は卽ち命、人にありては性に率ふの道たり、古昔聖人、因りて之を脩め、以て敎となし、之を天下に敷く、故に五禮、六樂より

以て一揖讓一舞蹈の微に至るまで、適くとして理の寓する所にあらざるはなきなり、是を以て洛閩の學、窮理を貴ぶ、而して窮理の要は、理と氣との分を辨ずるにあり、此れを明かにせざれば、則ち見る所差うて、而して趨く所背く、是に於て或は直に寒暑風雨を以て卽ち理の自然となして、而して其時を得ると否とを問はず、或は直に喜怒愛惡を以て卽ち理の自然となして、而して其節に中ると否とを問はず、其究、視聽辭氣一切の動作に至るまで、皆以て全體の妙用となし、一に其心の發する所に隨つて、肆然として顧みず、悍然として自ら信じ、聖言を侮慢し、聖人を蔑視し、乃ち曰ふ、己れ獨り造ることありと、是れ所謂差ふに毫釐を以てし、謬るに千里を以てするもの、乃ちこれを始めに審にせざるの罪なり、豈に速に之を辨ぜざるべけんや、余故に曰く、窮理の要は、理氣の分を辨ずるにありと、然れども理氣の分、亦知り易からず、これを天地に觀、これを人身に觀、事に就いて之を分ち、物に卽いて之を析ち、必ず此理の形氣にありて、形氣に雜はらず、事物にありて事

物に雜はらず、粲乎として城邑の街衢あるが如きを見て、然うして後得べきのみ、云云、

二洲朱子の堡壘により古學派及び其他の學派に對し、辛辣なる批評をなせり、其言に云く、

伊物諸子の說、皆明儒の唾餘のみ、（素餐錄）

又云く、

陸王は告子の流にして、而して精妙啻に一層のみならず、原佐茂卿は荀子の流にして、而して狂妄啻に百倍のみならず、（同上）

又云く、

仁齋徂徠謬論自得、往いて返らず、敢て先賢を誹謗し、斯道を蛆蠧す、所謂桀犬堯に吠ゆるもののみ、

又云く、

宋儒知を貴ぶ、故に知明かにして行亦脩まる、徂徠知を賤む、故に知昏うして行亦汚る、

又云く、

世に古學と稱するものあり、説、異を立つるを以て自ら喜ぶ、古文辭なるものあり、文、讀み難きを以て自負す、是れを以ていして古と稱せば、古も亦瑣々たり、卑々たり、（冬讀書餘拾遺）

又殊に蘐園一派に打擊を加へて云く、

今の學者往々自ら以て一家を成すもの、皆物氏の餘毒に醉ふものなり、東土最も甚し、其弊學者皆放縱を喜んで、而して名撿を厭ふ、俗士視て以て達なりとなして之に倣ふ、嗚呼是れ風俗を害し、敎化を傷ふの大なるもの、（冬讀書餘卷二）

二洲仁齋が唯氣論に對して理氣併存説を主張し、論じて曰く、

父子といふは氣なり、父の慈、子の孝といふは理なり、君臣といふは氣なり、君の仁、臣の敬といふは理なり、推して萬事萬物みな然からざるはなし、もし孝慈仁敬を捨て、父子君臣を直に道といはゞ可ならんや、凡そ天地陰陽風雨寒暑の形象ある者は、皆氣なり、この氣あれば、こ

の理あり、たゞ氣は形象あるゆゑ知り易し、理は無聲無臭なるゆゑ言ひ難し、故に衆人は父子君臣を知れども、父子君臣の道を知らず、天地陰陽を知れども、天地陰陽の道を知らず、聖人それを憂ひたまひて、元亨利貞、仁義禮智、色々の名を立て、其道を敎へたまふ、皆この理の名なり、易に道器と說き、宋賢の理氣と說ける、其意明かなりといふべし、彼れ其意を得ずして、却て宋賢を謗りて、氣の外に理を立てたりといふ、その疎謬甚しからずや、云云、物は氣なり、則は理なり、天下物なきの則なく、則なきの物なし、二つの者離れて立つことなし、物は氣なる故に形象あり、則は理なる故に聲臭なし、天の日月星晨地の山川草木人の父子君臣夫婦昆弟、みな物にして則なきはなし、宋賢の所謂理は、この則を指したるにて、氣の外別に一物ありといふにはあらず、是れ曉り難きことにあらず、學者此處を會得して、彼の徒が書を讀みなば、其謬見明かに見ゆべし、(正學指掌附錄)

是等解說の文を讀むに、二洲朱子の理氣說を敍述して頗る其肯綮を得

たるが如し、朱子も「氣以成形、而理亦賦焉」（語類卷一）といふを以て之を觀れば、理は氣に依存するものにて、氣を離れて自存するものにあらず、故に又「理未嘗離乎氣」（同上）といひ、「有此氣則理便在其中」（同上）といへり、然れども朱子は理氣の二元を立て、氣は理より出づるにあらずとし、理は氣より出づるにあらずとせり、是故に理と氣とは其類を異にするものにして、決して同一物にあらず、是れ仁齋が朱子の二元論を否定して、別に唯氣の一元論を建設する所以なり、二洲の仁齋に對する評論、未だ其委曲を盡くせりといふべからず、彼れ又徂徠が學を排斥して曰く、

其學たゞ理民の術のみにて、自己の身心は置いて問はざるなり、故に身に非法の事をすれども恥とせず、其徒みな先王の禮、先王の義などといふことを口實とすれども、其志は蘇張に過ぎず、或は嵆阮が放蕩にならひて、一世を傲睨せんとす、もしそれに向ひて義理を說く者あれば、耳を掩ひて腐儒の陋見と嘲り笑ふ、かゝる輩世に多くなりて、淫縱奇怪の行をする者、往々に蔓れり（同上）

又曰く

禮樂の事は今已に亡びて且つ此方に行ひ難きことなれば、姑くこの說をなして緣飾せるまでにて、實は唯〻功利の事のみを心懸くることなるを、吠聲の徒辨へ知らずして、禮樂々々といひて、一生を送り過すこと、返す〲も怪むべきことなり、是れは彼れが徒たる者、たゞ詩文のみを一生の事業として、年月を暮すゆゑ、心つかずと見ゆ、もし道といふ者に心つきなば、道は禮樂のみ、禮樂は今亡びぬ、こはいかに先生は何をか道とせられしと、始めて驚き思ふべきか、誠に淺き丈夫といふべし、(同上)

其言蘐園一派の弊に適中する所あるを見るべし、又陽明學を禪學の餘習として之を駁して曰く、

是れ氣を謬りて理となし、道は人の理なることを知らぬより起りたる者なり、云云、本來道は理なることを知らぬゆゑ、理學に從事せず、理學に從事せぬゆゑ、道心人心の分を辨へず、たゞ其心より作爲なしに

出づれば、それを道とも理ともいひて猖狂妄行す、嗚呼聖人の門、何ぞかゝる率易無稽の談あらんや、志あらん者は、必ずかの本心等の説を聽くべからず、道は人の理なり、父子君臣夫婦長幼朋友の則なり、その則を明かにして、それに順ひて行ふべし、是れ眞の實學なり、(同上)

又折衷派を排して曰く、

明かに道を見るものあり、篤く古を信ずるものあり、各〻其性の近き所を以てして入るのみ、今世に一種の學者あり、道に於て見る所なく、古に於て信ずる所なく、一己の私意を以て諸家の得失を擇ばんと欲す、夏蟲の見、憫むべきかな、(素餐錄)

二洲此の如く朱子學にあらざる各學派を攻擊するに於て復た餘力を遺さず、實に勤めたりといふべし、然れども遂に小家數たるを免れざるものなり

第三章　佐藤一齋

（日本陽明學派之哲學第二篇第八章に揭ぐ、故に玆に之を畧す、）

第四章　安積艮齋

艮齋、名は信、字は思順、通稱は祐助、姓は安積氏、艮齋は其號なり、別號は見山樓、奧州の人、年十七にして江戸に來り、佐藤一齋に從つて學び、後、昌平黌の敎官となり、名聲鬱然都下に振ふ、萬延元年十一月廿一日を以て歿す、享年七十六、著はす所艮齋文畧、艮齋閒話等あり、事蹟は續近世先哲叢談（卷下）及び大日本人名辭書等に出づ、大日本人名辭書に左の一節あり、云く、

幼より讀書を好み、二本松藩儒今泉八木諸氏に從學して頭角を露はす、十六歲の時出でゝ近村の里正今泉氏の婿となり、其妻に嫌はる、祐助大に發憤し、翌年單身出奔し、江戸に向ふ、旅費乏しく艱楚を嘗め、法華僧日明の拯ふ所となり、遂に其紹介に依りて佐藤一齋の僕と爲ることを得たり、祐助刻苦勉勵、且つ薪水の勞に服し、且つ讀書し、夜間睡眠を催すに逢へば、煙草の脂を眼に塗りて自警す、

其壯年の苦學、推して知るべきなり、彼れが學說は往々艮齋閒話中に見ゆ、蓋し閒話は彼れが躬行心得の餘に成るものにて、學者の精讀を價する有益なる隨筆なり、其內容略〻駿臺雜話の趣あり、今其一二節を擧げて彼れが見解の一斑を示さん、云く、

道は天下の公道なり、學は天下の公學なり、孔子孟子の得て私する所に非ず、博く天下の善を取るべし、書經に德無₂常師₁、主₂善爲₁レ師、とあれば、善の有る所は皆吾師なり、舜は大聖なり、猶ほ邇言を察せり、孔子は大聖なり、三人行、必有₂吾師₁、と云ふ、然れば學は一家を墨守するに及ばず、道の存するは皆學と思ふべし、程朱の諸賢は勿論なり、陸象山王陽明諸公の言も其善なるは皆從ふべし、漢唐諸儒の說も取るべし、老莊申韓佛氏の言も善なるは皆取るべし、愚夫愚婦の言も亦取るべし、かくの如く胸襟豁大、古今を包括する勢にて、志の高大とも云ふべし、朱舜水云く、學問之道、如₂治₁裘、遴₂其粹然者₁而取₁之、若曰₂吾某氏學吾某氏學₁、則非₂所₁謂博學審問之道₁也、此語通會の論と謂ふべし、今の學者は門を別

ち、戸を分ち、各〻其識見を守り、朱子學と云へば、陸王の學は異端邪說と號し、其善なる所を概棄す、漢學と云へば、程朱の學を老佛の如くに排斥するは、各〻其學を主張せんと思ふより起り、天下に幾許もなき儒者の中にて門戸の見を爭ひ、仇讐の如く思ふは、公平の道に非ざるに似たり、朱子は嚴毅方正の人にて、陸象山と太極の辨、鵝湖の論は合はざれども、象山を白鹿洞に招き、門人を集め、講義を聽き、又象山に請うて講義を文に綴りしは、人の善を取る公平の道なり、象山も其門人朱子を議する者ある時、大に辨責せしこと文集に見えたり、されば學問の道は博く善を取るべし、然し實學に志篤き人の爲めに云ふなり、志篤き人は人の善を取りて我善と成し活用するなり、故に申韓老佛の言にても、愚夫愚婦の言も、其善なる處皆我修省の資となるなり、上手の冶工は、銅中より金を取るが如し、聖賢の言にても活用なき者は、下手の冶工精金を用ひ損し、鉛も同樣にするなり、（艮齋閑話卷之一）

艮齋は固より朱子學派の人にして、朱子を尊崇すること深し、嘗て朱子

を稱揚して曰く、

朱晦菴氣魄極大、天才極高、承濂洛諸賢之統、而更昭廓之、以明斯道於天下、實孔孟以來一人而已、(答安井伯恭書)

然れども彼れが如何に豁大なる見解を有せしかは如上の文によりて明かなり、彼れ又孔子の學の要點、畢竟忠信の二字にあることを論じて曰く、

古の聖人孔子より盛なるはなし、孔子の書、論語より貴きはなし、論語中忠信の二字、尤も多く見えたり、されば學者の力を用ひ、身を脩むるの樞要と知るべし、集註に盡己爲忠以實爲信とあり、人は天品の性質、智愚賢不肖種々の異なるあり、譬へば金の内に黄金もあり、白銀もあり、銅鐵もあり、鉛錫もあり、是れは自然の生質なり、鉛は鐵になるべからず、銅は黄金になるべからず、聖賢の人を敎ふる、君父の臣子を責むる、鉛を鐵にせよとはいはず、銅を黄金にせよとは云はず、只鉛は鉛の用あり、銅は銅の用あり、其天質の分を盡し、其用を達するを忠信と云

ふなり、人臣の君に事へ、人子の父に事ふるも、心力を盡し、毫髪怠惰の心なく、吾十分を盡すなり、吾心力已に盡すならば、聖賢も分外の事は責めざるなり、但銅鐵は其良なる所あり、又あしき所あり、其あしき所を鍛錬して除き去り、其良なる所を存する如く、吾心身を鍊磨して其分量を盡すより外なし、もし鉛の質にて鐵の用をなさんとし、銅の質にて黄金の用をなさんとすれば、鉛と鐵と雜はり、銅と黄金と雜はり贋物となる、表裏の違ひありて、忠信に非ざるなり、忠信は白きは白く、赤きは赤く、黑きは黑く、内より外に至り、本より末に至るまで、洞然として毛髮の雜はり無きを忠信と云ふなり、若し鉛の身にて鉛の用を盡さず、銅の身にて銅の用を盡さず、怠慢するは忠信の道に非ず、唯吾心力を盡すべし、此工夫純熟すれば、誠の德に至るべし、(艮齋閒話續上)

是れ亦儒敎に對する一種の見解といふを得べし、彼れは又古今學術の變遷を論じて、左の如く言へり、云く、

三代は姑く置き、兩漢より李唐に至るまで、鄭玄、何晏、馬融、王肅等の註

にてすまし置き、格別の異同なし、唐の孔穎達、賈公彥等註疏を作り、古人の註を主とし、一毫出入無く、誤謬の處も回護して置くなり、此の如くにては學問に精神無く、卑陋の說多く、聖人の蘊奧は晦塞するゆゑ、趙宋に至り劉原父出で始めて古人を辯駁して、一家の言を立つ、歐陽永叔、蘇子瞻兄弟、王介甫等群起して、漢唐諸儒の外に各〻其一家の說を成す、程子兄弟出て始めて性命の學を唱へ、朱子に至り集大成す、是れに因りて漢唐の學風大に變ず、宋末より元明に至り、朱子の學を奉じ、性命の說盛に行はる、然れども學者朱子の本意を失ひ、讀書のみを格物と心得て、支離に流れ、實行無き者多しと見えたり、故に王陽明出て知行合一の說を揭げ、其支離蔓衍の弊を矯む、天下學者翕然として從ひ、盛に行はる、然し陽明の說はつまり宋學より出でし者にて、朱子の學と天地の異あるに非ず、專ら內に求め、知行を合一にし、事物に就きて窮理せざる所は朱子と相違あれども、やはり性命の學にて陸象山に本づきたる者なり、明末に至るまで此學盛にして其流弊の甚しき

は朱子の學に過ぎたり、然し陸稼書呂晩村の徒陽明を掊擊し明の天下を滅す者陽明の學と云ふは餘り甚しき激論にて、陽明自得の妙は後學の輕議すべき所に非ず、是れ又宋學の一變なり、淸に至り顧炎武、毛奇齡、朱彝尊、閻若璩、胡渭、江永、萬斯同の徒起り、攷證の學を唱へて學風又一變す、是れも自然の勢あるに似たり、朱子は千古の大儒なれども、其學を奉ずる宋季以來の諸儒陳北溪、許白雲、饒雙峰より蔡虛齋、林希元、呂晩村の徒に至るまで、朱子註解の書には精詳といへども、漢唐諸儒の註疏老莊申韓の諸子班馬已來の歷史などは深く涉獵せざると見えて、其著せる所の書を讀むに、手近き出典攷據を知らず、强ひてこれが說を爲し、往々一笑を發するともあれば、豪傑の士は其下に屈するを甘んせず、更に一赤幟を立てんと思ふも、一槪に無理と謂ひがたし、故に顧炎武、閻若璩、毛奇齡、朱彝尊の徒、朱學の力及ばざる所を精究し、考證を主とするも、自然の勢に非ずや、近世は攷證の學又小變して爾雅說文學を唱ふ、惠棟、戴東原、段玉裁の徒其魁なり、漢、唐、より淸に

至るまで二千餘年の間學術屢〻變ずる、四時の運轉する如く、人に倦まざらしむ、是れも亦天地造化の一大戲場と見えたり、聖人の道は日月の如く、四時變化すれども、日月の光は萬古易ることなし、風雨煙雲晦明の變はあれども、日月の光に增損無し、何れの學にても倫理綱常を扶持し、家國天下の實用あらば、孔子の意に叶ふべし（艮齋閑話卷之下）

彼れが古今學術の變遷に拘はらず、聖人の道を以て萬古不易とするの見解、區々たる學派の爭論を超脫して、痛快限りなきの感あるを覺ゆ、其他彼れは其豁大なる見解を述べて、

道は天下の公道なり、學は天下の公學なり、孔子孟子の得て私する所に非ず、博く天下の善を取るべし（艮齋閑話卷之上）

と云ひ、又事を成すの工夫を論じて、

凡そ物事は成る樣にても、成り難きものなり、油斷すべからず、且つ妄に人に語るべからず、事の成るは吾精神の氣の爲す所なり、秋冬の間天地の氣收藏して外へ漏れざるゆゑ、春に至り萬物發生す、若し漏洩

すれば、氣堅からずして發生の功薄し、人も妄に漏らすときは、氣薄うして成就する難し、易に機事不密則害成るとあり、(同上)

と云ひ、又誠意の重んずべきを論じて、

凡そ天下の事、智力の及ばざる所あり、智力のみ頼むときは、意外の憂あるべし、誠を主とするときは、天地鬼神も擁護し、人心も服從するなり、云云、聖人は智力の頼み難きを知り、誠を推し、仁を施し、天下の心を服するゆゑ、自然と背叛するに忍びざる處あり、(艮齋閒話卷之下)

と云ひ、又人は豫ねて心に覺悟あるべきを論じて、

覺悟ある人は事變に臨んで驚かず、覺悟なき人は狼狽して度を失ふなり、云云、古人の書を讀み、人物の邪正得失を辨じ、治亂興廢の迹を觀るは、皆我覺悟する工夫なり、道に古今なく、理に内外なし、事迹は同じからざれども、道理は一に歸するなり、(同上)

と云ひ、又更に學者の覺悟を述べて、

今より百年前を視れば、古なり、今より百年後を視れば、今は古となる、

今の學者は生きたる古人なり、(同上)

と云ふの類皆名言にして傾聽を價するに足る、彼れ又大丈夫は貧富窮達盛衰榮辱等の外に超然たらざるべからざる旨意を論じて、

凡そ人間一生の事は、貧富窮達盛衰榮辱種々變化すること浮雲の定姿なき如くなり、是れは境遇にて外より來る者なれば、眞の我は自若として、富貴にても加へず、貧賤にても損せず、我れに輕重はなし、されば吾心の持ちやうにて、好しと思へば、往くとしてよからざるなし、富貴の位にあれば、道を世に行ふ樂みあり、是れも亦好し、貧賤となれば、身閑にして心の累なく、琴を鼓して書を讀みて、一身優遊の樂みあり、是も亦好し、禍患來れば天命に安んじ、心を動かさず、吾生平進修の力を試むれば是も亦好し、かくの如く看破すれば、何事も好し、憂ふるに足らず、丈夫七尺の軀、落々天地の間に生れ、六七十年短夢の如き世に吉凶禍福種々紛綸して競ひ來れども、眞の我はいつも自若なれば、其變化推遷するも亦好し、(艮齋閒話續上)

と云ひ、又憂苦患難に處する工夫を論じて、

人世の中に憂苦患難の事あるは、盛衰自然の理なり、孔顏の樂地に及ばざる者、此時に至り己れ一人のみ薄倖と思へば、憂苦更に深し、古人の大難に遇ひし事を思ふて、我身と比較すれば、古人の萬分一に足らざることなれば、憂患にても少しく安かるべし、（同上）

と云へり、是れ亦一種の處世的悟道と見るを得べし、彼れ嘗て巧に屈辱の反りて藥石たることを說破して、左の如く言へり、云く、

朋友講論の益は尤も大なり、然るに人は恥を受くるを嫌ひ、我れにしかざる者を友とし、自ら是とするゆゑ長進せず、獨り講學のみならず今日の事屈折に遇ひ、恥辱を受くる多ければ、事理純熟し、世故事變に通ずべし、いか程も屈辱に遇へば、忍耐も強きなり、精神も磨錬し、事理にも通じ、多少の德義を增益するなり、程子の若要熟須從此裏過と云ふは滋味ある語なり、古人の句に成功每在阨窮日、敗事多存得意時とあり、人は屈辱に遇ふは身の藥石なり、貧賤の士は屈辱に遇ふこと多

し故に道藝長進すれども、高貴の人は屈折に遇ふことなく、虚美耳な薫じ、容悦の言のみ聞き玉ふゆゑ、自然と怠慢に流れ易く、縱令ひ天品才力ある人も、道藝長進すること難し、新井白石の言に總身に耻肬出來るやうに修業いたせば長進すとあり(同上)

是れ蓋し彼れが苦境中に於て自得する所ならん、詩に就いては彼れ左の如く論ぜり、云く、

吾性情を主とすれば、世好を逐ふべからず、人の心に叶はんと思ふて作れば、却て性情の天眞を失ふて自然にあらず、昔唐の皎然と云ふ詩僧の韋蘇州の詩風を擬し、其悦を得んと思ひ、數首を作りて示されたり、韋蘇州賞せず、因つて平生作りし詩を示せり、韋蘇州大に賞歎してり、凡そ詩は各〻其風あり、强ひて人を學んで其心を悅ばしめんとすれば、本色を失ふて精巧ならず、と誡められたり、和歌も右に準するものならん、著作文章も吾胸懷より發出すべし、世の人に譽められんと思ひ、又悅ばれんとすれば、吾心情を盡さず、却て故步を失ふに至る、人の毁

譽好惡に拘はらず、我中心の誠を盡すにしかず、安永の頃藤村檢校と云ふ瞽師あり、毎に人に語りしは人の前にて三絃を彈くに、其座の聽く人に色々の心あれば、面白く彈いて譽められんとするに、かなたの人の心に叶へば、こなたの人の心に叶はず、我れはいつも何人の聽き玉ふ前にても、我持前の器量一ぱいに彈いて、其座の人に聽かせんと思はず、唯神明へ奉納するなりと心得て彈くなりと語られしは、眞實の心にて、名手の譽、世に高かりしも宜ならずや、是れに同じく詩文著述の類も、我心の眞誠を盡すまでにて、世の毀譽に拘はるべからず、芻蕘の言も聖人は詢るとあれば、其人の採用により、一寸の草も、丈六の金身と化することも有るべし、其人にあらざれば、聖人のことばも、馬耳東風なるべし、（艮齋閒話續下）

誠に名論と謂ふべし、宇宙及び實在等に關しては彼れに就いて何等の聽くべきものなしと雖も、人生に於ける安心立命の工夫に至りては、趣味の掬すべきもの、多々之あるを知るべきなり、

第五章　元田東野

元田東野、名は永孚、通稱は三左衛門、東野は其號なり、熊本の人、嘗て横井小楠を師友として、其感化を受く、明治四年五月侍講となり、聖天子の知遇を辱うし、宮廷に出入するもの、實に二十年、明治廿四年一月を以て歿す、享年七十四、著はす所經筵進講錄一卷あり、是れ最も名敎に關係あるもの、其他東野雜錄、幼學綱要等あり、彼れ自ら己れが爲人を叙して曰く、

余性柔軟乏剛健氣象、唯無悖戾意志、是性之好處、六十年來所經歷、總以順得之、

此れに由りて其人物性行を察すべきなり、

東野が其自得せる所を斷片的に言表はせるもの、大抵皆後人の服膺すべき金玉の如き格言を成せり、今左に其最も佳なるものを擧げんに、

一

人臣之道、進而不喜、退而不怨、無貴無賤、無大無小、所在當致忠、

二

臣之事君、不見君之明暗賢否、唯盡誠而已、

三

臣之諫君、要愛勝於敬、故當諫奏之時、先以吾愛心洒到於君心、愛至而後循々說出、至其立言、則唯欲理之明白耳、不毫有成敗之見、

四

唯愛之一心、徹頭徹尾、無所不懇到、剛斷勇決、皆自愛之一念湧出來、而活潑無窮、

五

唯自愛之一念推持去、

六

愛之一念、包含天地、

七

識大則量弘、量弘則德充、

八

韓琦言ふ吾れ孤忠を以て進む、李綱も亦言ふ吾れ孤忠を以て上の信用に由ると、人臣は當に孤忠なるべし、決して他に憑依すべからず、他に憑依するは、假令ひ君子の交にても、自から黨意を免れず、これ人臣の愼むべき所なり、余が侍講に出身せしより、亦只孤忠を以て自から進む、凡べて進講すること、諫奏する事、決して朋友と語らず、只一己の誠實を主とし、義理の已むべからざるを見て、其成否を計らず、進言の後は、直に己れを忘れて、未だ曾て進言せざるが如く、泰然として君上の納否を質さず、愛心を以て言を獻ず、然して後直に愛心に反る、多年の間此の如くす、

九

人臣は陽なり、功を貴ばずして忠を主とすべし、君前に言を奏するには、居家の時の誠意を以てすべし、家に在りて君上を思はず、世間の憂喜、鬧閑、是非、愉快、放蕩等の事を思議して、君前に至りて直ちに忠義を

盡さんとするは、皆是れ詐僞なり、人臣豈に詐僞を用ふべけんや、

十

道理には秘すべきことなし、事には秘すべきことあり、秘すべからざることあり、蓋し道理は天下公共底のもの、豈に之を秘すべけんや、閫中の事は、君前に言ふべからず、朝廷の機事は、父子の間にも言ふべからず、父は子の爲めに隱し、子は父の爲めにかくす、是れ事の秘すべきなり、道理と事とを分別せずして、妄に天下に秘すべき事なし、秘すべきは私意なりとし、或は機事洩すべからずとして、一概に秘密にするは、二ながら義理を洞見せざる過ちなり、人臣はこの道理と、事とを分別して、君上に事へざれば、或は私意に陷り、或は機事を洩す罪に陷る、

十一

人臣は當に白直なるべしと、朱子言へり、白直最も好しといへども、僅に白直ならんと欲するは、私意を免れず、只愛心の切なれば自から好し、

經筵進講錄は東野が聖天子に進講せし所にして、鐵華書院の發行に係る、其中彼れが學說の一斑を窺ふに足るものあり、論語開卷第一の「學而時習之、不亦說乎」の章を講じて曰く、

凡そ人、天地の間に生れ、自天子至庶人、畢生の事業、只此の學の始めを爲し、終りを爲す者なり、故に此の學あれば、其天職を全うす、此の學なければ、其の天職を失ふ、此の學達すれば聖人となり、此學達せざれば、庸愚となる、此の學明かなれば、天下平かに、此の學明かならざれば、天下亂る、人間天下萬事の成敗、只此學の明暗にあるのみ、故に孔子の人に敎ふる、只此の學の一字にて、論語開卷學而時習之と云ふ、一言一行、學の事に非ざるはなし、然るに學に正あり偏あり、大小本末あり、孔子の所謂學は至中至正の大本達道にして、修身平天下の道德學なり、當世の所謂學は、一科々々の學、異端末技の謂ひにして、大本達道の學に非ず、是れ此章、學の字を講ずるに於て、始めに辨ぜざるを得ざるなり、古來より之を辨ずれば、彼の管晏の覇術を始め、種々の異端俗儒、訓詁

文詞の學、佛法、耶蘇敎、西洋百科の學、皆一偏一派の學にして、孔子の所謂學に非ず、且つ當世にて、支那の文學を學ぶを概して漢學と稱して、孔子の學を爲す者も同一視すと雖も、是れ亦大に分析せざるを得ず、漢學と云ふは、支那の歷史、古今の制度文物を知り、漢文漢語に通ずるの文學なり、孔子の學は、我德性を盡し、眞理に達し、天下に大道を行ふの學なる故に、支那にて云へば、堯舜の道孔孟の學と云ふと雖も、本邦にて云へば、我神聖の道、我道德學と云ふべきなり、又國學神道と云ふも、古典故事を考證し、敬神尊王を主とすと雖も、多くは一偏に局して、先皇の至德大道を實踐するに足らざれば、我神聖の道、孔子の學と同じからず、抑、孔子の學は我本然天良の心性を發覺し、人倫日用の道を盡して、天理の極に達し、身を修めて、以て天下を平かにするの道學なり、其人と爲り、周靈王の末、魯襄公二十二年に生れ、生知の資を以て、篤く聖人の學を好み、人道を盡して、天理に達し、剛健中正、純粹明快の德を備へ、天の四時あるが如く、一毫の偏倚なく、堯舜以來の大道を祖述

し、易を演べ、詩書を刪り、禮學を修め、春秋を作り、其學問德行、人を敎へ、國を治むるの道は、此「論語」「大學」「中庸」「易傳」等の書に具載して漏るゝ處なく、輓近西洋の理學、修身學、法律、政治、經濟の學等、其精細を說くと雖も、皆其全體大用を備へ、一本を以て萬殊を貫くに至つては、實に宇內古今の一人、萬世の師と云ふ可し、故に孔子の學を學びて、根本已に定まりたる後は、法律經濟等、西洋の科學をも學び、識見を博するは可なりと雖も、孔子の學を後にする時は、根本立たず、遂に道德を損し、人倫に悖り、身修まらず、家齊はずして國治まらざるなり其他前に辨ずる處の異端俗學に於ては、外、仁義を假りて內、詐力を專らにし、或は智術權謀、互に相軋し、或は高妙の理を說て、人倫日用の道に背き、或は口に法律を說いて、內行修まらず、或は文辭技藝の末に馳せて實用に乏しく、是れ皆古來の學弊、現今西洋自ら文明國と誇るも、其實は心術正しからず、風俗善良ならず、利を貪り、力を爭ひ、其害一にして足らず、學藝は、益々開明して、人心は、益々狡黠なる者、皆學路中正ならざるの致

す處、其大害を見るべきなり、今日苟も學を爲す始めに、先づ其取捨先後を審にせざるべからず、況や人君の學、其學ぶ處、卽ち天下の法則となる、故に人君の學は、孔子の學を學ぶより外なし、

人生萬事を擧げて悉く之を學に歸し、學と云へば悉く之を孔子に歸す其論固より未だ公平ならざる所ありと雖も、儒者の言として之を見れば、亦痲姑痒處を搔くの快なしとせざるなり、彼れ又「君子務本、本立而道生、孝弟也者、其爲仁之本歟」の章を講じて曰く、

方今文明日に進み、事業大に開く、人或は臣に向つて論ずる者あり「今汽船之用、瞬息千里、可以極海外、鐵道之便、山谷平地、天涯爲比隣、加之法律精密、經濟博大、凡政治之術、無所不全備、而獨曰仁曰孝弟、皆是一個人事、父兄愛人之事、抑亦狹隘而已、何足爲文明資哉」と、維新以來朝野の論、皆な此の如し、蓋し歐洲の文明を耳聞目擊する者、其の事業の末にのみ瞑眩して本に反ることを知らざるなり、凡そ天下の事本を棄てゝ末の大ならんことを望む、決して其の理なし、今孝弟仁愛の本なくし

て、徒らに事業功利の末を盛大にするときは、天下皆功を競ひ、利を爭ひ、事を好み、業に趨り、家に孝弟和順の子弟無く、國に忠愛純良の臣民無からしむるに至る者、目を刮りて待つべきなり、豈に慄々乎として危懼せざるべけんや、苟も孝弟の本立て末に及べば、則ち天下の大なるも、家家孝弟の風に靡き、國々忠純の俗に化し、法律の精密は、生を好むの至り、刑は以て刑無きに期し、經濟の博大は、忠恕の道、絜矩の極、人々其の分願を得て、家給り、人足るに至り、汽船鐵道の便は、四方相通じ、内外交易し、父子隔居の恨無く、上下睽離の患なくして、凡べての政術、其精細文明を極むるに至るほど、皆孝弟仁愛の性情の流注する所に非ざるはなし、是れ則ち其本を務めて、其末自から充大なる所以、人君となり、君子となり、其務むる所の要領、豈に此孝弟に在るに非ざらんや、蓋し天下の事、善惡二つにして、其極は只治と亂とのみ、苟も天下治まらざれば、其餘の功德事業ありと雖も、言ふに足らざるなり、故に人として智能あり、才力あるは、最も重んずべく、國として富强といひ、開

明といふは、素より貴ぶ所と雖も、然れども、智能才力の人、其心孝弟ならざるより、必ず爭鬪橫逆を免れず、富强開明の國、其風俗仁讓ならざるより、動もすれば掠奪競爭の患あり、是を以て天下古今、治日は常に少くして、亂日は常に多く、其本を論ずれば、人皆智能才力を崇び、國皆富强開明に走り、其不孝不順、一念の愆り、遂に天下の亂となる者なり、唯孝弟の人、其心到底和順にして、天地飜覆すと雖も、悖逆爭亂の事を爲さず、故に苟くも治平を欲せんか、天下の人をして、悉く孝弟の德を知り、智能才力あるの人々も、皆孝弟の本を務め、富强開明の國も、皆仁讓の道に由らしめ、萬事此孝弟仁讓上より發出し來らば、天下古今、常に治りて、曾て亂あることを知らざるに至る可し、故に天下の治平ならんことを欲せば、一つの孝弟の德あるのみ、

彼れが孝弟を以て名敎の大根本となし、是れを骨子となせる儒敎の廢すべからざるを示す處、大に其手腕を見るべし、彼れ又更に仁の義を講じて左の如く言へり、曰く、

蓋し仁の理は、生々不息、只だ是れ一個の愛、充滿して滲漏なく、六合四海を包含して、猶ほ盡くることとなし、天地も之に由て剖判し、日月も之に由て照明し、山川草木も之に由て峙流蕃茂し、人物、鳥獸、魚蟲も之に由て生殖し、宇宙間一物も仁德の支配する所に非ざるはなし、吾が此の一身も亦此仁德中より孕生し來りて天地の間に居る、一動一靜、一呼、一吸、悉く仁の發揮に非ざるはなし、然れども徒らに之を高遠に求むるときは、終に之を己れに有すること能はず、孔子の「博施於民而能濟衆、堯舜其猶病諸」と云ふ如く、故に先づ近く譬を取て、諸れを身に驗するに若かず、今、一縷の髮も之を拔かんとすれば、總身股栗す、一針の微なるも膚を刺せば、忽ち痛楚を覺ゆ、是れ愛心の惻怛する所なり其顚いて倒れんとすれば、忽ち手を以て面膚の土石に觸るゝを扞ぐ、纖塵も眼に入らんとすれば、睫を塞いで、之を拒ぐ、是れ皆な愛心の身を保つ、其働き到らざる所なし、此滿腔の愛心、己れに發して人に及ぶや、其親近なるより先づ父母を愛し、妻子を愛し、兄弟に至り、其尊敬する

より君上を愛し、國家を愛し、天下衆民に及び、鳥獸器物に及び、其大小、親疎、本末、前後の等差ありと雖も、只一個の仁愛貫穿して洩らさゞるなり、故に匹夫匹婦も此仁あらざれば身修らず、一家を保つこと能はず、人君大人も此仁を離れて天下を保ち、衆民を治むること能はず、其始めは、只一滴の愛心、惻然靄然と發して、其極點を云へば、宇內古今、內外上下、悉く此愛心を以て、旺溺覆幬するに至りて猶ほ足らずとす、

彼れが茲に仁愛の普遍的性質を說いて、能く其肯綮を得るの一點に至りては、決して仁齋、益軒、鳩巢等の下にあらず、此れに由りて之を觀れば、彼れが如きは、粹然たる儒敎の代表者といふを得べきなり、彼れ又敎育の國民的ならざるべからざることを論破して曰く、

凡そ敎育は、本國人を養成するを主とす、日本國にては、日本人の魂性を養成するを主眼とせざれは、敎育は無きにしかず、

世間滔々として洋學に心醉するの秋に際し、天涯孤鶴の如く、獨り高聲に大和魂の養成を說く、眞に中流砥柱の槪あるを知るべきなり、彼れは

又德を廣義に解して智を含有するものとなし、論じて曰く、

當世、智と德とを分ちて智育德育と云ふ、文明論には智の區域は廣大にして窮りなく、德の範圍は狹少にして限りありと說き、全く「德」の本意を謬りたるものなり、元來「德」と云へば萬善を包ね有したる名にて、智は德中の一にして、德の外に智の區域なく、又智にして德を離れたる日には、狡黠姦佞の智となり、智より惡むべきものはなきなり、

此論の如き、之を今日の倫理學に徵するも、亦否定するを得ざる所なり、何んとなれば、社會の進歩に資する所の一切の智識は、廣義の德中に屬するものなればなり、彼れ又平生進講の際、儒敎を我神道に附會して巧に說去れり、其用意の決して尋凡ならざるものあるを知るべきなり、

第六章　中村敬宇

中村敬宇、名は正直、敬輔と稱す、敬宇は其號なり、江戸の人、佐藤一齋に學ぶ、慶應二年英國に留學し、明治元年歸朝し、東京大學教授となる、明治廿四年六月七日を以て病歿す、享年六十、著はす所敬宇文集及び演說集等あり、外に又西國立志編、西洋品行論等の譯書あり、一時大に世に行はる其事蹟は自敍千字文及び東京學士會院雜誌（第十二編之五）等に詳なり、先生は純然たる朱子學派の人とはいふべからざるも、朱子學の系統に屬する人たるは疑ふべからず、故に遂に此に附載することゝせり、

先生嘗て愛敬歌を作りて子弟を戒む、云く、

致愛敬、盡愛敬、順境何足言、逆境可鍊性、使親非頑嚚、何見舜德盛、使君非般紂、何見三仁行、西聖瑣刺底、其妻性頑硬、拂意動輙怒、萬事悖命令、他人娶若婦、其必謀再娉、瑣謂此乃福、幸受此暴橫、理學根脚堅、試驗要風勁、妻氣百變動、瑣性一泰定、妻躁情如火、瑣靜心如鏡、祇因愛敬深、後世稱爲聖、

呼嗟此二字、勢力存百勝、愈銕艦巨砲、超千軍萬乘、况且似鏈鎖、操執合一柄、能懷柔携貳、能馴化梟獍、構兵息秦楚、交惡和周鄭、四海可一家、六合可同性、嗟々今世人、子弟缺溫凊、夫妻相反目、朋友互詬病、至邦國交際、耑以兵力競、妖氛滿神州、何時得洗淨、愛敬盡事親、德敎四海亘、千年口徒誦、今日未見應、致愛敬盡愛敬、一人德、兆民慶、小家法、大國政、勿怠忽、宜敬聽、此二字、神攸命、

先生晩年力を文藝に用ひ、義理に關する理論的研究を務めず、故に一家の學說として後世に傳ふべきもの殆んどあるなし、然れども先生人となり溫厚篤實にして、些の圭角なく、粹然たる君子人の標本なり、故に其言傾聽するに足るものなしとせず、例へば、古今東西一致道德の說、堪忍世界の說、(以上東京學士會院雜誌)我は造物主あるを信ず、德福合一の說(以上敬宇中村先生演說集)の如き、是れなり、今左に德福合一の說を擧げ、以て先生得道の一斑を示さん、

道德學は人生を福祉に導く所以の者なり、禍を消し福を增さしむる

者なり、人をして日用當然の道を先づ知りて而して後に行ふことを得せしめ、情感慾念を節適して中正を得せしめ、戒愼恐懼の心を崇うして、放僻邪肆の念を生ぜざらしめ、又少年の心を養ひ、艱難の事業に耐へ、或は心思或は身體の力を用ひて、天賦の職分に勉强從事せしむる者なり、故に此學の指敎する所に從ひ、勉めて道德を行へば、福運隨つて來ること、猶ほ影の形に隨ふが如くなるべし、蓋し道德福運、この二者相離る可からざる者なり、相離るゝ能はざる者なり、昔し希臘に於て道德學の開祖ともいはるゝ瑣格剌底は道德學の根理卽ち人生當に守るべき道理卽ち日用常行の道は、人の作りたる者に非ず、卽ち「ロースオブゴッド」(上帝の律法)なりとなせり、其言に曰く、人、罪を犯して刑法を受くべきを、或は遁れて受けざることあり、然れども其人は不正に陷るを覺り、その心中に罪過を痛念せり、故に予は斷じて以爲らく、人の作りたる律法と雖も、凡そ此の如き者は、その根源は人より勝れて良善なる立法者より出でたることと明なり、又曰く、眞正の福祉

は外部の受領する者より生ずるに非ず、道德の智識と道德の慣習より生じ出づるなり、又曰く、德行を崇うすれば、必ず快樂と利益と隨從せざるを得ず、又曰く、唯有德者のみ福ありとす、又曰く、德行と利益と其性相合す、此二者を離さんと欲するは妄なりと、これ等の言に據り、余は今日の演題に德福合一論と掲げ出したるなり、この主意を敷衍し、又之を支那の聖賢の言に徵し、道德を修むる者は、必ず福利あることの旨義を明かにし、以て世の少年を勸奬せんと欲す、書經に作德心逸日休、作僞心勞日拙、と、これ誠に面白き金言なり、この上の二句は瑣氏の德行を崇うすれば快樂を生ず」といふと符を合す、下の二句は西國の諺語と轍を同うす、曰く、人若し一詐僞を言はゞ、必ず二十の詐僞を造り、以てその破綻を緝補せざるべからずと、これ即ち心勞日拙なるものに非ずや、作德心逸日休は德者福也といふに同じく、作僞心勞日拙は僞者禍也といふに均しかるべし、周易に利用安身、以崇德也。と蓋し人萬事に不足なく、身心安寧なるは、德行を積み崇ねたるが故な

りと言へる事にして、卽ち福あるは德あるに因ると言ふと同じきなり、書經に正德利用厚生といへるは、利用厚生の福は、必ず正德の基礎に因ることを徵すべし、鮑昭河淸頌序に影從表。瑞從德。とあり、瑞は卽ち福なり、余嘗て一聯を作る、大學中庸の語より采たり、曰く、君子有人士財用。大德得位祿名壽。と、試に觀よ周家八百載の基業を始むるは、后稷公劉大王王季文王の積德累仁に由り、武王の時に至り、始めて殷に代り、天下を有てり、天下は豈に人士財用の大なる者に非ずや、舜の耕稼陶漁より、以て帝と爲るに至るまで、人より資りて以て善を爲すに非ざる者なし、かゝる大德を積まれしが故に、天命を受けて、天子となられたり、故に大德必受命と言へり、夫れ人士財用は福なり、位祿名壽は福なり、人士財用の福あるは、君子先愼乎德に由れり、位祿名壽の福あるは舜の如き大德あるに由れり、由是觀之、人の一身を立つるの福及び一家を立つるの福及び天下を統ぶるの福、悉く皆德あるに由るに非ざる者なし、之を樹木に譬ふるに德は本根なり、福は枝葉華實なり、

君子たるの本根あれば、必ず人士財用の枝葉華實あり、大徳の本根あれば、必ず位祿名壽の枝葉華實あり、本根なくして、枝葉華實ある者は、未だ之れあらざるなり、道徳なくして一身を立つる者は、未だ之れ有らざるなり、道徳なくして天下を統ぶる者は、未だ之れ有らざるなり、左傳に舟之僑曰。無徳而祿。殃也。といへる語あり、卽ち今日の本題に反したる場合なり、世に或は道徳なくして福祿を受くる者あるべし、然れども決して久しかるべからず、竹には實のならぬものなり、竹若し實を結べば必ず枯ると云へり、それと同じく徳なくして祿を獲れば、その祿は福とならずして、反つて殃と爲る、是故に晉の范文子は楚に勝ちたるを喜ばずして、反つて以て憂となせり、徐の偃王は小國を以て屢々敵に勝ちて後忽ち亡滅せり、苟も徳なければ戰勝つと雖も、利とならずして却て亡滅を促す所以となる、舟之僑の言、豈に信然ならずや、戰は國の大事なり、その勝負を致す所以のもの、決して偶然に非ず、勝つは必ず勝つ所以の因あり、その負くるは必ず負くる所以の因

あり、その因に種々あるべけれども、徳あると徳なきとを以て勝負の大原因とするなり、云云、推して之を論ずれば、人間萬の本は徳に在りと謂ふも可なるべし、論語に爲政以德。譬如北辰居其所。而衆星共之。とあり、大學に理財を論して徳者本也。財者末也。とあり、推して之を下にすれば、盜賊と雖も亦幾分の道徳なかるべからず、莊子に曰く、跖之徒問於跖曰。盜亦有道乎。跖曰。何適而無有道邪。夫妄意室中之藏。聖也。入先。勇也。出後。義也。知可否。知也。分均。仁也。五者不備。而能成大盜者。天下未之有也。嗚呼盜賊すら仁義智勇なる者を存せざるべからず、況んや一身一家を有つ者に於て徳なくして豈に其れ可ならんや、

然るに世に許多の人ありて道徳未だ必ずしも福利を得ず、道徳は反て患禍を受くと疑ふ者あり、余この人の疑を解かんとするには、先づ禍福の二字を子細に講明せざるべからず、俗諺に猫に小判といふとあり、小判は人に於て貴重なる通寳なれども、猫には殆んど關係なし、猫より之を觀れば、腐鼠の一頭にも若かざるべし、これと同じ道理に

して、道德ある人の德は、愚人に在りては猶の小判の如し、最下の愚人は、飲食情慾の外に福あるを覺えず、中人に在りては、富貴功名の外に福あるを覺えず、蓋し福に眞假あり、久暫あり、內外あり、若し福に眞假久暫あることを論ずれば、佛敎又は外敎の分內に入ることなれば、今こゝに於ては默々に付し、姑く福に內外あることのみに就き之を論ずるを得るのみ、何をか外に在るの福といふ、曰く、外物の福なり、世上の福なり、顯榮なる富貴の如き、赫灼たる功名の如き、嗜慾玩好の具に足り、耳目四肢の樂を好むが如き、皆是れなり、何をか內に在るの福といふ、曰く、在我の福なり、自心の福なり、天道を欽崇し、懿德を好み、良心の命令を聽き、正直誠實の行を務め、忠厚仁善の事を行ひ、理義を味ふこと芻豢の口を悅ばすが如く、學問を嗜むこと天女の羽翼の疲れざるが如くなるの類、皆是れなり、內福を享くることを得る者は、多くは兼て外福を享くることを得、外福を享くるを得る者は、未だ必ずしも內福を享くることを得ず、是故に內福を得る者は、外福なしと雖も、中

に憾むる所なし、外福を得る者は、內福なければ、常に缺乏の恨無くば非ず、蓋し道德ある人に於ては、その最も重要なる福祉安寧は、その自己より生じ、その自己の行實に根ざし來れり、道德なき人は、全く斯世の生物にして、外境に隨つて憂樂を感じ、他人に因つて禍福を變ぜざるを得ず、有德者は塵世の利運を得ると雖も、第二の事と爲し、更に一層の大なるものあり、卽ちその自己に屬する性分の固有する所の者、その地位職分の責任ありて當に盡すべき者は、心力を極めて之を爲し、夫れ然り然して後、其心に滿足するなり、これより以上は天命に委して復た問はず、諸葛孔明が出師の表にいへるが如く、如此如此くするは、臣之職分也。至於成敗利鈍。非臣之所逆覩也。といへるは、漢賊兩立せざる場合に在り、忠臣心事。千載如見。人をして流涕して已む能はざらしむ、蓋し有德の人は若し人倫の變に逢ふことあれば、寧ろ外福を拋棄して、內福を全うし、鼎鑊を甘んずる蜜の如く、死を視る歸るが如くなるべし、他人より之を視れば、慘禍にして悼むべしと雖も、有德者

に在つては自らはその死所を得るを以て福と爲して復た疑はざるべし、羅馬の加篤は德行の名ある人なり、有司に殺さるゝに臨み、傍人に謂て曰く、我を殺す人は心苦しかるべし、我は死を以て甘しと爲すと、禍福の見解は人々殊なることとなり、孔明と加篤との福の如きは常人に在つては猶の小判と知るべし、

禍福の見解につき吉田松陰先生の書翰を引くべし、その書翰の大略に曰く、此間は御文下され、觀音さまの御せん米いたゞき、御深切之御志、感入申候、抑々觀音信仰せよとの事は、定めて禍をよけるためにあるべく、是には大きに論ある事に候、佛の敎は奇妙な仕懸て、大乘小乘と二つ分ちて、小乘は下根の人への敎、大乘は上根の人への敎と定め有之候、小乘にて申候へば、觀音は古の敎文の通の者と心得、ひたもの信仰さするにて御座候、是れは人に信を起さするとは、一心に難有事じやとのみ思込み、餘念他慮なき事にて、一心不亂と申も此事なり、人は一心不亂になりさへすれば、何事へ臨み候ても、ちつとも頓着はなく、

縄目も人屋も首の座も平氣になれ候から、世の中に如何に難題苦患の候ても、それは忽轉して、不忠不孝、無禮無道等仕る氣遣はない、されど初めから凡夫に一心不亂じやの不忽轉じやのと申聞せても、さつぱり耳に入らぬもの故に、觀音樣を拵へて、人の信を起させ候致に御座候、是を方便共申し候、扨又大乘と申候時は、出世法と申事が肝要に御座候、釋迦が天竺王の若殿に候處、若き時から感のつよき人にて、老人を見ては、吾が身も往先は老人に成うかと悲しみ、死人を見ては、吾が身も往先は死なうかと悲しみ、生老病死を免かれる修行もしに參られ、三十出山とて、僅か五年の間に生もせねば老もせず病も死もせぬ事を悟て、夫から世の人を敎化せられた、是が出世法じや、扨其死なぬと申は近く申さば、釋迦の孔子のと申御方には今日まで生きて御座る故、人が尊みもすれば難有がりする、おそれもする、果して死なぬではないか、死なぬ人なれば縄目も人屋も首の座も前に申す觀音經の通りにはござらぬか、楠正成公じやの大石良雄じやのと申人々は、

刄ものに身を失はれ候へども、今以て生きてござる、乃ち刀のちんぢんに折れた證據でござる、又禍福如纒といふ事を御さとりがよろしく候、禍は福の種、福は禍の種に候、人間萬事塞翁馬に御坐候、拙者なんど人屋にて死候得ば、禍のやうなものに候へ共、又一方には學問も出來、己のため人のため、後の世へも殘り死なぬ人々の仲間入も出來候得ば、福此上もない事にて、人屋を出候得ば、又如何なる禍のこようやら知れ申さず、勿論其禍の中には又福も交り候へ共、所せん、生の間難儀さへすれば、先の福があるなり、何の效げんもない事に、觀音へ願つて福を求める樣の事は本に無益に存候、松陰先生の慘禍に罹り、刑死を受けられば、他人より之を觀れば悲憤何如と察せらるゝに、其獄中の書翰を讀めば、文天祥正氣歌に哀哉沮洳場。爲我安樂國。といへるにも勝るべく、その死なぬ人々の仲間入りも出來たれば、福此上もないと言ふに至りては、最も高尚なる禍福論と爲して讀むべく、吾が今日演題德福合一の說に對し、絶好の左證を與へられたり、之を要する

に、道德ある人は境遇何如を問はず、眞福その身を離る能はず、刀山劍樹の中を步み、猛火烈焰を蹈み、掉臂して入り、掉臂して出で、所謂富貴貧賤。患難夷狄。君子無入而不自得。ものなり、以上論ずる所にて有德者必有福、この事昭然として明かなるべく、又德と福とは影の形に從ふが如く、相伴ふて離るべからず、又有德者の福は內に在る者を重んじ、外に在る者を重んぜず、故に塲合に因つては外福を棄て、內福を全うし、他人より觀て禍とするも、自ら以て福と爲すこと、又人の品位に由つて禍福の見解大に異にして、有德者の福は愚人の夢見せざる者にして、最も惡人の得べき者に非ざること、灼然として復た疑ふべからず、故にこの演說を終るに臨み、禍福に定物なく、定形なく、唯人の之を取る所以に在ることを言んと欲す、金屬の中に在つて、金より貴重なるは莫し、以て通寶と爲せば、百貨を通するの大用を爲し、以て器物を飾れば、盛美の觀を爲す、然れどもその金屑若し眼中に入れば、人その障礙に堪ふる能はず、必ず之を出だして然して後に已む、故に人の物を

用ふる、其當を得ざれば、貴重なる物も、その貴重を失ふ、獨り貴重を失ふのみならず、變じて障害の物となること此の如し、酒の用たる、氣血を廻らし、腸胃を開き、性情を怡ばしめ、風寒を防ぎ、勞疲を癒す、其功効甚だ多し、然れども之を飮む、其度に踰ゆれば、病患を醸し、生命を縮め、遺傳して子孫に禍を貽すに至る、是れ知る、酒は一物なれども、用ふる人に在りて、或は藥と爲り、或は毒となり、或は禍となり、或は福となる、是れ豈に禍福定物なきの一證に非ずや、富貴は福なり、然れども生れて富貴なる者は、身體の養に慣れ、百度の具を備へ、婢僕の使用に足るを以て身體の發達、それが爲に妨礙せられ、手足纖細、顏色青白、容易に風寒に犯され、動もすれば、病患に罹る、又地位崇高に居るを以て、人の諛言耳に慣れ、曾て苦言を聽かず、故に聰明蔽塞し、智識開拓するに由なし、或は世變に逢ひ、身泥塗に落つるときは、殆んど自立する能はざるに至る、是に知る、富貴未だ必ずしも常に福に非ざることを、是れ豈に禍福定形なきの一證にあらずや、由是觀之智德ある者は、遭遇する

所の事物、皆之が爲に福となる、愚不肖なる者は遭遇する所の事物、皆之が爲に禍となる、蓋し福は人に在りて事物に在らざるなり、禍も亦人に在りて事物に非ざるなり、彼の仙人なる呂祖はその手指を以て物を指させば、その物皆化して黄金となると云へり、智德ある者は禍を化して福と爲し、敗を轉じて功と爲す、其れ猶ほ呂祖の指の如き乎、

如何なる有德者と雖も、遭遇する處の事物が悉く福となるとは言ひ難し、殊に一切の禍を化して福となすこと、如何して之を能くするを得ん、例へば、疫病、饑饉、旱魃、海嘯、地震、洪水、暴風等の天災及び其他火事、盜難若くは滊車の衝突等によりて身上に來れる禍の如き、果して悉く之を化して福と爲すを得るや否や、若し具體的に之を言はゞ、茲に一個の有德者ありてペストに罹り、氣息奄々、半死半生の情態にありとせんか、果して此禍を或種の福に轉ずるの法ありや否や、頗る疑なき能はず、然れども惡人の禍とする所、有德者之を化して福となし得ることあるは、復た疑を容れざるなり、人生一切の福は總べて德の結果なりとは、未だ遽に

斷言するを得ずと雖も、惡が禍の結果を來たし、德が福の結果を來たすといふ事 Wohlverhalten hat Wohlergehen, Übelverhalten hat Übelergehen zu seiner natürlichen Wirkung. は、一般の法則として之を認容せざるを得ざるなり、イエスの「總べて善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結ぶ」といへるは、此意味を道破せるものに外ならず、乃ち知る先生の所謂「德福合一」も、已にソクラーテススピッアライブニッツ諸氏の主張せるが如く、或意味に於て永遠の眞理たるを失はざるものなるを



日晷一たび移れば、千歲再來の今なし、形神既に離るれば、萬古再生の我なし、學藝事業、豈に悠々なるべけんや、

佐久間象山

第五篇　水戸學派

我邦に於ける朱子學派を歷史的に叙述するに當りて、水戸學派の起原、主義及び結果等を論ずるにあらざれば、未だ整備せりといふを得ず、何となれば、水戸學派に屬する人は大抵皆朱子學を崇奉せるものにて、又其集合せる影響は、決して洪大ならずとせざればなり、然れども吾人は茲に水戸學派に關する精細なる研究を遂ぐるの餘裕を有せず、其理由は畢竟左の二點に歸す、

第一、水戸學派は朱子學の着色あるものに相違なきも、朱子學の主張は、決して其主眼にあらずして、其目的は寧ろ皇道を本領として、大義名分を明かにするにあるなり、

第二、水戸學派は大日本史編纂の大事業を中心とし、皇統の是非し、人臣を褒貶するを以て其共同的企圖とするが故に、哲學若くは倫理學等に關する普遍なる理論は、殆んど之れあるを見ざるなり、

是故に吾人は水戸學派に就いては單に其梗槩を一瞥するに止めん、水戸學派は水戸の義公より始まり、餘勢延いて維新以後に至りて終はる、其間實に二百三十餘年、義公の精神的感化亦之れに由りて想見するを得べきなり、

義公は卽ち德川光圀、字は子龍、梅里と號す、水戸威公の第三子にして、家康の孫なり、威公を紹いて水戸の城主となる、頗る治績あり、元祿三年國を兄の子に讓り、西山に退隱し、元祿十三年十二月六日を以て歿す、享年七十三、謚して義公といふ、義公蚤に修史の志あり、遂に明曆三年を以て始めて彰考館を設け、大日本史を編纂するの計畫をなし、多く世の儒臣を招いて此事に當らしむ、栗山潛鋒、三宅觀瀾、安積澹泊及び明國の遺臣朱舜水等皆公に事へて大に助成する所あり、抑〻大日本史の編纂は、本と修史の事業に相違なきも、其目的は史的事實の硏覈を主とすといふよりは、寧ろ大義名分を明かにするにあり、換言すれば、史的事實を叙述するに隨つて君臣間の本務の如き國家的道德を闡明するにあり、義公自

撰の梅里先生碑陰並銘に云く、

正閏皇統、是非人臣、輯成一家之言、

と、乃ち公修史の目的の果して那邊にあるかを知るべし、此の如き目的は果して事實として大日本史の編纂上に現はれ來たれり、例へば、神功皇后を后妃傳に列し、大友皇子を本紀に揭げ、南朝を以て正統となし、神器の京師に入るに及んで始めて皇統を後小松帝に歸するが如き、皆其識見の存する所なり、此の如き結果を生ずる迄には、儒臣間にも國體上に關し、幾多の異見を發表するものありしは、固より當然の事なりとなす、例へば、栗山潛鋒の保建大記に對して三宅觀瀾が中興鑑言を著はすが如き、是れなり、保建大記は潛鋒が水戶侯に仕ふるに先ちて著はす所なりと雖も、生前には遂に之を上木せず、水戶侯に仕ふるに及んで之を觀瀾及び澹泊に示して、屢〻其內容を討議せり、保建大記は保元より建久に至る迄凡そ三十餘年間の史的事實を叙述し、之に自家の見解を付し、大義名分を論ぜしものなり、行文明晰にして、立言力あり、蓋し史筆の上

大日本史は明治三十九年に至りて始めて完結を告ぐ。思ふに、義公三十歳にして史局を江戸の邸に創してより代を替ること實に十三世にして二百五十年の久しきを經たり。其規模の大なる其事業の偉なる以て知るべきなり。

乘なるものなり、潛鋒の主張の要點は三種の神器の在否を以て人臣の向背を定むべしとするにあり、乃ち斷言して曰く、

至以躳擁三器爲我眞主、則臣要質鬼神而無疑、百世以俟其人而不惑、

觀瀾は必ずしも三種の神器の在否いかんに拘泥せず、寧ろ斷言して

正統在義、不在器、

と云へり、且つ保建大記の序を作りて潛鋒と相違せる點を明かにして曰く、

其所謂以神器之在否、而卜人臣之向背者、議竟不合、

觀瀾の中興鑑言、之を潛鋒の保建大記に比すれば、一讀の際、其文章の著しく劣れるを覺ゆ、然れども其論旨は多少斟酌すべきものなしとせず、之に反して潛鋒の論旨は、餘りに嚴密に過ぐるを以て此れに由りて史的事實を律せんと欲せば、時に普遍なる公正的觀念と支吾せざるを必とせず、然れども大日本史編纂の際大義名分を確定するに當りて潛鋒の說、採用せられたるが如し、是れ亦固より一種の見解なるに相違なし、

何れにせよ、潜鋒の保建大記は水戸學派の中堅とも稱すべき重要なる地位を占むるものなること、決して否定すべからざる所なり、

義公歿後五六十年を經て寶暦明和の頃に至り、潜鋒、觀瀾、澹泊等皆故人となり、修史の事業は尙ほ繼續されたりと雖も、甚だ振はず、確に一大頓挫を來たせり此時に當りて立原翠軒と云ふものあり、其父蘭溪史館の管庫たり、常に史館學衰え、復た大日本史を校勘するもののなきを憂ひ、翠軒に謂つて曰く、

吾れ衰えたり、能くなすなし、汝吾志を繼ぎ、謹んで義公の業を卒へよ、

と、翠軒江戸に遊學し、後、歸りて水戸侯に仕へ、史館總裁となり、力を大日本史の校勘に用ふること年あり、翠軒古學を好みしと雖も、嚴密に古學に拘はりしにあらずして、朱子學をも併せて容るゝが如き態度ありしを見る、翠軒の門下に藤田幽谷及び青山延于あり、延于の子に延光あり幽谷名は一正、字は子定、通稱は次郎左衛門、嘗て潜鋒の保建大記を讀んで、發憤興起し、遂に一家を成すに至れり、會澤安が撰ぶ所の幽谷藤田先

生墓誌銘に謂へるあり、云く、

其教子弟、務在勵名節振風俗。

又彼れが及門遺範に

先生教人、專在忠孝、

と云ひ、又

先生尤重君臣之義、

と云ひ、又

先生教人、後虛文而先實行、

と云ひ、又

先生於文學、網羅古今、會萃衆說、斷之以聖經、

と云へり、此れに由りて彼れが教育と學術のいかんを推測すべきなり

文政九年十二月朔を以て歿す、享年五十三、幽谷の子に東湖あり、又門人に會澤安あり、豐田天功あり、東湖、名は彪、字は斌卿、東湖は其號なり、會澤安、字は伯民、通稱は恒藏、正志齋と號し、後又憩齋と號す、此二人は尊皇愛

國の精神を鼓吹し、當時の世教人心に影響する所少しとせず、殊に東湖は烈公を輔佐して百方努力し、維新の政治的變動に助成する所多大なりとなす、烈公は卽ち德川齊昭、字は子信、景山と號し、又潛龍閣と號す、萬延元年八月十五日を以て歿す、享年六十一、公嘗て弘道館記を作り、國體の尊嚴を明かにす、其中言へるあり、云く、

乃若西土唐虞三代之治敎、資以贊皇猷、

と、其我日本を主とする大精神を見るべし、又云く、

忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其效、敬神崇儒、無有偏黨、

是れ實に水戶學の主義綱領なり、東湖更に弘道館記述義を作りて、烈公の旨意を敷衍し、大に國體の尊嚴を世に鼓吹することを務めたり、其後水戶學の餘勢は延いて明治年間に及びしも、栗田寬、內藤恥叟二氏の死去によりて全く終結を告ぐるに至れり、

今にして水戶學派を瞥見するに、自ら前期と後期の二期に分る、前期は義公を中心として潛鋒、觀瀾、澹泊及び朱舜水等の群儒相集りて修史の

事業を經營せり、後期は烈公を中心として延于、延光、東湖、憇齋等の群儒相集りて或は修史の事業を經營し、或は政治的活動を扶翼せり、若し前期と後期との相違點を擧ぐれば、前期は修史の事業によりて大義名分を明かにし、以て國家的道德を確定するを主とせり、後期は前期の事業を繼續すと雖も、更に又應用的の方面を增加し來たれり、卽ち前期の如く單に國家的道德を確定すといふにあらずして、已に確定せられたる國家的道德の實行となれり、固より當時の境遇然らしむと雖も、已に內に在るもの、反應として起來たり、前期に於て未だ曾て有らざる所の政治的活動となれり、抑ゝ此の如き結果の此の如き境遇に應じて生ずるもの、其因由する所なくんばあらず、蓋し義公によりて蒔かれたる種子が烈公によりて其發達を遂げたるものと見るを得べきなり、

水戸學派は大日本史の編纂を骨節として大義名分を明かにし、以て國家的道德を確定せんとするものにて、專ら史的事實の確否いかんを闡明するを以て目的とするものにあらざるなり、故に純粹なる史的研究

の精神より之を言へば、決して其方法を得たるものにあらず、此れ史學專門家の往々水戶學派に對して慊焉たらざるものある所以なり、然れども凡そ史的事實の研究は、何等の必要に出づるものなるか、是れ單に吾人の知欲を充たすが爲めと云ふのみならず、又過去の史的認識によりて將來の事變を律する所あらんが爲めなり、換言すれば、人生に裨益する所あらんが爲めなり、若し史的事實の研究にして、絕えて人生に裨益する所なしとせば、是れ唯一私人の道樂に過ぎず、物好的遊戲に過ぎず、此の如くなれば、茶人の茶を嗜み、閑人の書畫を翫び、好事者の兎若くは萬年青を愛すると何を以て異ならんや、此點より之れを觀れば、水戶學派が史學の活用的方面に着眼せしが如きは、亦一見識といはざるべからず、殊に南北朝の何れを正統となすべきかと云ふが如き問題に遭遇するときは、何を標準として之を決定すべきか、是れ單に赤裸々の史的事實によりてのみ決定すべからざるが故に、民族發展上最も有益なる國家的道德の立脚點より之を決定せんとするが如きは、則ち水戶學

派の見解の區々たる史的事實を超脱し、迥に豁大なる處ある所以なり、水戸學派は蠢々たる世の煩瑣的史學家の如く、死せる史的事實に埋沒せらるゝものにあらずして、死せる史的事實を民族の健全なる發展上に活用せんとするものなり、之れを要するに、水戸學派は、主として史的事實の活用的方面に着眼せしものなり、若し史的事實の活用的方面を言へば國家的道德の發揮の如き、殊に其重大なるものなり、是を以て孔子の春秋及び朱子の綱目に倣ひ、過去の史的事實を執へて、是非正邪の判斷を下だし、以て國家的道德を確定する所の的例となせり、是れ亦東洋に特異なる一種の史的研究にして、其世敎人心に裨益する所あるや疑なし、若し之を夫の零碎なる史的事實をのみ記憶するを以て一生の能事となし、何等の統一的認識もなく、何等の概括的見解もなき、無精神沒趣味の骨董的史學に比すれば、其優ること萬々なるを知るべきなり、

結論

日本に於ける朱子學派の哲學を叙し了りて、更に又一括して之を回顧するに、左の諸點は學者の特に注目すべき所なりとなす、

第一、日本の朱子學は、僧侶が佛敎を脫して率先して唱道しだる所に係る、京學の祖たる藤原惺窩は本と禪宗の僧にして相國寺にありしも、自ら還俗して朱子學を唱道するに至れり、南學の祖たる谷時中も、亦本と圓頂緇衣の人にして、高知の眞常寺に住せしも、自ら還俗して朱子學を唱道するに至れり、山崎闇齋の如きも、亦嘗て薙髮して妙心寺にありしもの、一朝佛敎の非なるを悟りて、儒敎に一變し、朱子學の發達に多大の貢献をなすに至れり、此の如く僧侶自ら佛敎を擲ちて朱子學に化宗し、生前死後に關する奇怪なる古傳說に目を閉ぢて、單に吾人々類相互の交際上缺くべからざる日常彝倫をのみ講說し、以て國民敎育に資する所あるに至りしは、卽ち僧俗の懸隔を打破し、心機を一轉して、世俗に接

近し、常識と妥協し來たりし一徴候と見るを得べし、換言すれば、世俗化Secularizationの痕迹顯著にして、蔽ふべからざるものあり、殊に此の如く僧侶によりて唱道せられたる朱子學が漸く勢力を得るに隨つて古學、陽明學等も、亦其間に唱道せられ、儒敎は遂に佛敎に代はりて天下を風靡するの氣勢を示し、德川氏三百年の治世に於て學問德行を以て卓絕せる大儒彬々として輩出せるに反し、緇林に於ては慶元以來空海、傳敎、法然、日蓮、眞鸞と比肩すべきもの、復た出現することなし、乃ち精神界に於ける勢力の潜移默奪、以て察知すべきなり、

次ぎに我邦に於ける朱子學の發達は、自ら三期に分る、第一期は虎關玄惠より藤原惺窩に至る迄凡そ二百七八十年の間にして、是れを準備の時代となす、(附錄の一、朱子學起原を參考せよ、)第二期は藤原惺窩より寬政の三博士に至る迄凡そ一百九十餘年の間にして、是れを興隆の時代となす、第三期は寬政の三博士より王政維新に至る迄凡そ七十餘年間にして、是れを復興の時代となす、維新以後の朱子學は第三期の餘勢に過

ぎざるなり、第二期の興隆時代は二種の源頭を有するが爲めに、自ら二大系統に分る、卽ち惺窩の京學系統と時中の南學系統と是れなり、後者は甚しく偏狹固陋に陷りしも、前者は比較的寛容の態度ありしを見る、此二大系統の外に中村惕齋、貝原益軒の徒あれども、是等は惺窩の京學系統と同一の性質を有するものなり、第三期に於ては第二期の二大系統は合一して復興時代の朱子學となれり、復興時代の朱子學は總べて他の異學を排斥して、唯一の敎育主義とせられたるが故に、其實際に於ける勢力はなか〳〵に多大なりしに相違なしと雖も、學問としては單に第二期の薄弱なる反響にして、何等の雄大なる痕迹をも留めざりき、之を要するに、我邦に於ける朱子學は第一期に於て其萌芽を發し、第二期に於て其春花を開き、第三期に於て其果實を結べり、其果實も維新の暴風雨に逢ふて其之く所を知らず、然れども朱子學てふものが、決して全然誤謬なるにあらず、殊に其倫理說中に於ては永遠不滅の眞理ありて存することを否定すべからず、是を以て其隱然人心に影響し、國民的道

德を養成する上に於て少からざる關係ありしを想見すべきなり

次ぎに吾人は朱子學派其物の特質に就いて之を考察せんに、朱子學派は其中に尙ほ幾多の分派あるに拘らず、洵に單調なり、「ホモヂニオス」なり、朱子の學說を敍述若し敷衍するの外復たなす所なきなり、若し大膽に朱子の學說を批評し、若くは其れ以外に自己の創見を開くが如き態度に出づとせば、最早朱子學派の人にあらざるなり、苟も朱子學派の人たらんには、唯〻忠實に朱子の學說を崇奉せざるべからず、換言すれば、朱子の精神的奴隸たらざるべからず、是故に朱子學派の學說は殆んど千篇一律の感あるを免れず、殊に人目を豁にし、人耳を驚かすが如き壯絕快絕の大議論大識見に至りては、朱子學派中に覓むべきにあらず、此點に於ては朱子學派の古學派及び陽明學派に及ばざること遠し、我邦に於ける古學派の多色多様なるは言ふ迄もなく、陽明學派と雖も、決して朱子學派の如く單調なるものにあらず、陽明學派は少くも二種の相反せる傾向を有す、一は省察的方面にして、一は事功的方面なり、力を省察

的方面に用ふるものは、自反愼獨を主とする道學者の態度を取り、或るものは、禪僧の如き枯淡なる狀態に陷れり、之に反して力を事功的方面に用ふるものは、政治家、經濟家若くは社會改良家として現はれ來れり、是等は假令ひ功利主義を主張せざるも、功利主義の實行者に外ならざるなり、陽明學派には、此の如き異種の傾向ありて自然に對比を成すに、朱子學派には異種の元素、比較的に少し、殊に人數の多き割合より之を言へば、其單調にして變化に乏しき、實に豫想の外に出づるものあるなり、固より朱子學派にも竹內式部、山縣大貳、藤田東湖等あれども、是等は朱子學の精神に因りて活動せしにあらずして、寧ろ神道若くは國體の觀念に驅られて活動せしものなり、要するに、朱子學派は當初より最後まで大波瀾なく、大抑揚なく、曾て軌道を離れざる常識的文章の如き形迹を描出し、悉く其徒を同一模型に入れて、之を鎔鑄陶冶し、復た個人をして一種異彩を放つの自由を有せざらしむるものなり、乃ち敎育上に於ける畫一主義の結果いかんは、我邦に於ける朱子學派の歷史、之を證

明して餘りありといふべきなり。

次ぎに朱子學派の倫理説に就いて之を考察するに、是れ今日と雖も決して價値なきものにあらず、何んとなれば、種々なる點に於て西洋理想派の倫理説と共通的の處あればなり、殊に今日の所謂完己説の如きは、人以て舶來の新説とすれども、是れ古來朱子學派の唱道する所に係るなり、抑東西の倫理説が此の如く自然に暗合するは、其普遍的價値あるを證するものにあらずして何ぞや、朱子學派の倫理説中に普遍的價價を有するものあるが故に、非常なる時勢の變遷を經たる後に於て之を講究するも、尚ほ依然として人格修養上に極めて適切なるものあるを見る、但朱子學派の唱道する所、古今不變東西一貫の常識的道德にあるが故に、何等の人目を眩すべきものもなく、單に平生人の當に辿るべき軌道の果して那邊にあるかを示すに外ならざるなり、孔孟の嫡派を以て自ら任ずる朱子學派が奇を衒ひ異を燿かし、以て世の視線を惹くことを敢てせざるは、固より其然るべき所なりといふべし、要するに、朱子

學派は性僻を矯正し、人格を修養し、粹然たる君子人の地位に達するを以て其目的となすものなり、故に朱子學派の人は概して謹厚篤實なり、おとなしきなり、ぢみなり、豪傑と才人とを朱子學派中に覓むるも得がたし、殊に震天動地の大事業をなすが如き經世的偉人を朱子學派の人に期待するは、眞に木によりて魚を求むるが如きの感あり、朱子學派の人は誠に無難なり、先づ大概は恭謙なる態度を取りて、危險なることなきものなり、可もなく不可もなき道學先生なり、溫順にして使ひ易きも、多く用を成さゞるものなり、若し其甚しきものを擧ぐれば、世事に迂濶にして、蠹魚の如く讀書に耽り、遂に腐儒の誉を免れざるものあり、此點より之を觀れば、朱子學派の弊も亦少しとせず、然れども朱子學が儒敎の諸派中に於て最も安全にして穩健なる敎育主義たることは、吾人之を認容せざるを得ざるなり。

尙ほ最後に朱子學派の宇宙論に就いて少しく述ぶる所あらん、朱子は理氣の二元を立てゝ宇宙を解釋せり、理は氣の生ずる所にあらず、氣も

亦理の生ずる所にあらず、兩者は相互に演繹すべからざる世界の根本主義なり、彼れ是を以て「理と氣と此れ決して是れ二物」といへり、是故に朱子の世界觀はデカルト若くはカピラのそれの如く、全く二元論なり、朱子又太極を言へども、太極は理なり、氣にあらざるなり、故に其二元論たることは、到底否定すべからざるなり、然るに我邦の朱子學派の人は、往々二元論を以て滿足せず、理氣の二元をして理若くは氣の一元に歸せしめんとせり、例へば、羅山は王陽明に從ひ、省菴と益軒とは羅整菴に從ひ、理氣合一論を是とし、理を以て氣の屬性の如くに見做し、其結果唯氣論に傾向せり、之に反して尙齋は理を以て主となし、氣は理の生ずる所と斷言し、遂に唯理論を唱道せり、單調なる朱子學派中に於て聊變化とも見るべきは、唯氣と唯理と、二種の相反せる一元論を生じたるの一事あるのみ、抑〻二元論は哲學としては、決して終局の地位にあらず、若し二元を立すれば、其中何れにか還元せんとし、若くは何れかを演繹せんとして、必ず一元に歸せんとする傾向を生ずるものなり、是れ吾人の認

識的統一 Erkenntniseinheit の然らしむる所にして、又吾人の精神的需用 Geistesbedürfnis を充たす所以なり、是故に我邦の朱子學派中に於て朱子の二元論を一變して一元論となさんとする傾向ありしは、哲學上に於ける進歩の徵候なりしに相違なし、然れども惜いかな宇宙論に於ては遂に何等の顯著なる進歩をもなさずして已みき、吾人の今日尙ほ我邦の朱子學派に就いて學ぶべき所は、其躬行實踐の餘に成れる崇高淸健なる倫理說にあるなり、否、倫理說より一層學ぶべきは、其崇高淸健なる德行にあるなり、學說は時代によりて消長あるを免れざれども、德行は永遠に光を放つて易はらざるものなり、其宇宙論の如きは單に史的事實として時に比較對照の爲めに回顧するの價値あるに過ぎざるのみ。

日本朱子學派之哲學 終

節操を守る士は、困窮するは固より覺悟の前にて、早晩も飢餓して溝谷へ轉死することを念ふて忘れず、勇士は戰場にて擊死するは、固より望む所なれば、早晩も首を取らるゝとも顧みざることを念ふて忘れず苟も士と生れたらん者は、志士勇士とならずんば、恥づべきの甚しきものなり、云云、此志一たび立ちて、人に求むることなく、世に願ふことなく、昂然として天地古今を一視すべし豈に愉快ならずや、

吉田松陰

附錄の一

朱子學起原　附朱子學起原畧系

第一章　總說

我邦にありては鎌倉時代より室町時代に至るまで文敎の權は殆んど全く僧侶の手に歸せり、殊に室町時代の狀況を考察するに、社會一般戰亂の盤渦中に捲き去られ、學問文章を以て身を立つるもの丶如きは、復た世間に隻影だも見るを得ず、是れ其暗黑時代と稱せらる丶所以なり、此時に當りて一點耿々として社會的良心となりしものは、僧侶なりき就中五山の僧を以て其最大なるものとなす、驍將勇士、干戈の間に相見えつ丶あるに當つて、僧侶は內典外典を講究し、人類精神の需用する永遠不滅の道を發揮しつ丶ありしなり、殊に注意すべきは、彼我の僧侶の往來、頗る頻繁なりしこと、是れなり、我邦より支那に入りしものには、榮西、道元、俊芿、覺心、聖一、大明、大應、月林、北山、嵩山、紹明、龍山、元選、周及、絕海、汝

霖、觀中、仲方等あり、本朝高僧傳(第二十七)の師錬が傳に

今時此方庸流奔波入宋、

といへるは、蓋し此邊の消息を洩すものなり、支那より我邦に入りしものには、道隆、普寧、正念、祖元、一寧、子曇、正澄、楚俊、道彜等あり、日本名僧傳を見るに、入朝の支那僧十四人を擧ぐ、此れに由りて之れを觀れば、圓頂緇衣の人は、彼我の別なく、思想の交換に忙はしかりしなり、支那より來たれる僧侶は數多の書籍を携へ來たりしなるべく、我邦の僧侶にして彼國より歸朝せしものは、尚ほ更に新規の書籍を輸入するを怠らざりしならん、例へば、肥後の僧俊芿(しよう)(字は我禪)の如きは建久十年を以て入宋し、居ること十二年にして建暦元年を以て歸朝す、其歸朝するや、二千百三卷の書を携帶せり、其中儒書二百五十六卷ありきといふ、建暦元年は宋の嘉定四年にして朱子の門人劉爚が四書集註を刊行せし歳なり、故に四書集註の我邦に入る、或は俊芿に始まるやも未だ知るべからず、然れども固より確證とすべきもの、一もあるなし、唯〻「蓋然」といふべきのみ、然れ

ども祖元一山等が入朝の時、必ず多く宋儒の書類を携帶せしならんと思はる、是等皆宋末元初の人にして、宋學盛に世に行はれたる後に出でたり、祖元、字は、子元、俗姓は許氏、無學と號す、明州慶元府鄞縣の人、弘安二年を以て入朝し、相州鎌倉に赴き、圓覺寺の祖となる、弘安六年を以て寂す、享年六十一、追贈して佛光禪師といふ、語錄十巻あり、是れを佛光禪師語錄といふ、塔錄に云く、

邈矣前聖、萬化之宗、孔釋雖異、忠孝則同、孰知我元、參天配地、孔釋並隆、無遠弗至、云云、

此れに由りて之れを觀れば、祖元が身、佛門にありと雖も、亦儒敎をも併せて尊崇せしを知る、彼れが果して宋學を傳へしや否やは、未だ斷言すべからざるも、殆んど人をして然く揣摩せしめんとす、今語錄を繙閱するに、宋學に就いて云爲せしものは、一も發見すること能はざるなり、然れども一山が多く宋儒の書類を携へ來たりて、朱子學の輸入に便宜を與へたることは、殆んど疑を容るべからざるに似たり、一山名は一寧、宋

の台州臨海縣の人、正安元年を以て入朝し、初め豆州修善寺に居り、後、相州鎌倉に移り、終りに京都に至り、文保元年を以て寂す、享年七十一、著はす所寧一山語錄二卷あり、一山が入朝せるは、本と元の國主が間諜として送りしに由る、然れども彼れ遂に歸化して專ら佛敎の敎義を傳ふることに從事せり、彼れの門下に虎關あり、夢窓あり、中巖あり、龍山あり、皆當時の名僧にして、殊に虎關は宋學に通じ、程朱の說を駁擊せり、中巖、朱子の名を言はずと雖も、伊洛(卽ち程子)の事を論ぜり、夢窓には語錄二卷あり、是れを夢窓國師語錄といふ、其中言の宋學に及ぶものなし、然れども其門に出でたる義堂は宋學に通じ、宋學の見解、漢唐訓詁の學のそれに比して一層高尙なることを道破せり、義堂或は宋學を夢窓より傳承せるにあらざるか、兎に角宋學の硏究は一山門下に其端緒を開きしこと疑なし、之れを要するに、一山は宋學を我邦に紹介せし遠祖なりといふべき者の如し、

南山編年錄元應元年十月の下に

四書集註始來、

とあり、元應元年は後醍醐帝卽位の歳なり、一山の來朝は之れに先つこと二十年なり、故に宋學の輸入は元應元年に始まりしにあらざるべし、但、四書集註は此時始めて輸入せられしものと思はる、何れにせよ朱子學の研究は確に此頃より顯著なる史的事實となれり、花園院御記に云く、

元亨二年七月廿七日癸亥、談㆓尙書㆒、人數同㆓先々㆒、其義等不㆑能㆓具記㆒、行親義其意涉㆓佛敎㆒、其詞似㆓禪家㆒、近日禁裏之風也、卽是宋朝之義也、或有㆓不㆑可㆑取事㆒、於㆓大體㆒非㆑無㆓其謂㆒者也、凡近代儒風衰微、但以㆓文華風月㆒爲㆑先、不㆑知㆓其實㆒、文之弊以㆑質可㆑救㆑之、然者近日禁裏有㆓此義㆒歟、尤可㆑然事也、但涉㆓佛敎㆒猶不㆑可㆑然乎、

是れ後醍醐帝卽位後四年目の事なり、其「宋朝之義」といふは、宋儒の理學を意味すること疑なし、又其「涉㆓佛敎㆒猶不㆑可㆑然乎」といふは、宋儒の佛敎を排斥するに同意し難きを意味するものに似たり、又云く、

元亨三年七月十九日己酉、凡近日朝臣多以儒敎立身、尤可然、政道之中興、又因茲歟、而上下合體、所被立之道、是近代中絕之故、都無知實儀、只依周易論孟大學中庸立義、無口傳之間、面々立自己之風、依是或有難謗等歟、然而於大體者、豈有疑殆乎、但近日風體以理學爲先、不拘禮義之間、頗有隱士放逸之風、於朝臣者、不可然乎、此是則近日之弊也、君子可愼之、況至于道之玄微、有未盡耳、君子深可知之、

是れ後醍醐帝卽位後五年目の事に係る、其中「論孟大學中庸」とあるを以て之れを觀れば、四書集註の輸入は動かすべからざる史的事實なり、又「近日風體以理學爲先」とあるからには、宋學の京都上流の間に行はれしを想見すべきなり、殊に後醍醐帝の侍讀たりし玄惠は宮中に於て四書集註を開講せり、是れ或は元應元年舶來のものにあらざるか、兎に角彼れは虎關と同時に朱子學を攻究せしものにて、殊に宮中に於て朱子學を鼓吹したるの功は、彼れ一人に歸せざるを得ざるなり、

玄惠虎關以後朱子學は次第に傳播せり、建內記、嘉吉元年四月十五日の

下に云く、

晦翁集(朱子文集の事なり)三十冊賣本被㆑召㆓置禁裏、代價八百匹、自㆓長橋局㆒到來、送㆓清大外記許㆒了、彼請取遣㆑局了、後日本人了淳請取、外史見㆑送㆑之、加㆓一見、返遣了、

朱子文集は百卷以上のものなるに三十冊とあるは、恐くは零本ならん、零本の朱子文集と雖も、當時にありては新奇の珍書なりしを以て宮中に召し置かれしなり、好古小錄(下)に建內記の此文を揭げて論じて云く、

先輩此れを以て朱子文集の本邦にわたりし始めとす、然るに享保中伊賀國の僧兆藏主といふもの、京師の骨董店にして朱子文集の零本を得、卷尾に永和四年戊午九月讀了(下略)嘉吉の前六十餘年也、

永和四年は後醍醐帝元應元年より六十年も後れたるが故に、朱子文集の世に行はれたるは、毫も怪むに足らざるなり、後花園帝の時に至つては、藤原兼良尺素往來を著はし、

程朱二公之新釋、可㆑爲㆓肝心㆒候也、

といひ、又朱註によりて四書童子訓を著はせり、兼良は應永九年に生れ、文明十三年に歿せり、惺窩は彼れが歿して後、八十年にして生る、此れに由りて之れを觀れば、朱子學が惺窩に始まるが如くに思惟することの如何に事實に背反せるかを知るべきなり、

朱子學起原に關する書類は左の如し

花園院御記三卷　寫本

建內記〔卷十四〕寫本

尺素往來一卷　藤原兼良著

此書は群書類從卷第百四十一に收載せり、

臥雲日件錄〔乾〕寫本

佛光禪師語錄十卷　祖元著

海藏和尙紀年錄一卷　令淬編纂

日本名僧傳一卷

此書は續群書類從卷第二百三に收載せり、

南山編年錄一卷 寫本〇跡部良顯著

本朝高僧傳七十五卷 師蠻著

大日本史〔卷之二百十七〕

垂加草全集〔附錄下〕

國朝賢臣諫諍錄〔卷下〕藤井懶齋著

懶齋垂水廣信を以て始めて朱子學を尊信するものとす、然れども此說の瞽者佐々木玄信の揑造に出づること、先哲叢談〔卷之三〕二山義長の下に詳なり、長井定宗が本朝通紀、寺島良安が和漢三才圖繪に垂井廣信が始めて朱註を讀むことを載するは、蓋し皆諫諍錄に本づくならん、

好古日錄〔乾〕藤井貞幹著

好古小錄〔下〕同上

好古餘錄〔卷之上〕山崎美成著

續本朝通鑑

四書大全鼇頭

茅窓漫錄　茅原定著

此書は百家說林卷五に收載せり、其中「朱子學四書來由幷二先生像」と題せる一項は、最も參考に資すべきものなり、

朱學傳來記　谷秦山著

日本儒學傳　跡部良顯著

右二篇は日本敎育史資料卷十五に收載せり、

漢學紀源五卷　寫本〇伊地知季安撰

此書は薩摩の伊地知季安(字は子靜)の著はす所にして、主として朱子學の起原を闡明するものなり、凡そ朱子學の起原に關する史料としては、此書の右に出づるものあるなし、

隱逸全傳〔卷下〕細川十洲著

朱子學の由來　花岡安見

國學院雜誌第六卷の第八第九及び第十一の三號にあり、

朱子學の傳來と其學派 足利衍述
東洋哲學第八編第十一號及び第十三號にあり
日本儒學史〔上卷〕久保得二著
正齋書籍考〔卷二〕近藤重藏著



第二章　京師朱子學の起原

第一　玄惠附北畠親房及び楠正成

玄惠の事、唯、天台霞標（六編卷之二）に出づるのみにて、其他各種僧傳に見えず、反りて太平記、尺素往來等に見え、又大日本史（卷之二百十七）に本傳あり、玄惠は京都の北小路に居り、獨淸軒と號し、又健叟と號す、權大僧都に任ぜらる、天台霞標に彼れが事を記するを以て之れを觀れば、天台の僧たりしと見えたり、蓋し彼れ多少文學の素養あるを以て世の稱する所となる、彼れ常に宋の司馬光が資治通鑑を讀み、又程朱の學を尊信す、後醍醐帝に召されて侍讀となるに及んで朱註によりて經書を宮中に講ず、尺素往來に云く、

近代獨淸軒玄惠法印、宋朝濂洛之義爲正、開講席於朝廷以來、程朱二公之新釋、可爲肝心候也、

乃ち知るべし、玄惠は始めて朱子學を唱道せるものなるを、大日本史に

群書一覽第二卷庭訓往來の下に玄惠を論じ、更に一說を擧げて云く、東福寺の虎關禪師と兄弟なりと云云。

玄惠始唱二程朱之說一と云へるは、是れ吾人が事實として認容せざるを得ざる所なり、玄惠は正平五年を以て逝く、佛家人名辭書玄惠の下に左の如く言へり、云く、

俗兄出家し虎關師錬と云ふ、師亦出家し、比叡山に登り、天台宗を學び、後、臨濟宗に意を傾く、京師北小路に寓居し、佛儒の書を讀む、殊に儒書は宋の新註を講ず、一寧一山、虎關師錬等宋の新註を用ゐたるも、其宮中に講じたるは師を以て始めとす、

若し此記事をして事實ならしめば、未だ嘗て知られざる朱子學の系統を揣摩することを得、虎關は朱子學を一山より傳承したるの形迹あるが故に之を玄惠に比すれば、朱子學の系統に接すること一層早かりしならん、然れども宮中に於て朱子學を講じたるは、玄惠を以て嚆矢となす、然らば玄惠は那邊より朱子學を傳承せるか、若し果して虎關と同胞兄弟の關係ありしならば、之れを俗兄たる虎關より傳承せるものとするを得ん、然れども玄惠が虎關と兄弟たること、其果して何の據る所あ

るを知らず、之を佛家人名辭書の著書鷲尾順敬氏に問ふも、氏自ら其出處を忘る、眞に惜むべしとなす、尺素往來に云く、

當世付二玄惠之議一資治通鑑、宋朝通鑑等、人々傳二受之一特北畠入道准后被レ得二蘊奥一云云、

其宋朝通鑑といふは、蓋し宋元通鑑の一部分を意味するならん、此れに由りて之れを觀れば、北畠親房は玄惠の門人にして、頗る程朱の學にも通曉したるものと推察せらるゝなり、彼れが著書と稱する元元集には一ケ處周子の太極圖說の文を引用せり、若し元元集が果して親房の手に成りしものならば、是れ亦彼れが宋學に通曉せし一證となすを得べきなり、漢學紀源（卷一）に云く、

親房特に朱子の學風を欽し、四書五經宋朝通鑑等を讀み、當時博識肩を比するものなし、云云、而して其元元集は、太極圖を引いて神道の秘蘊を述ぶといふ

元元集は荒誕無稽の說多く、神道の祕蘊を述ぶといふべき程のものに

あらず、且つ其書果して親房の手に成りしや否や、多少の疑なきにあらざるなり、漢學紀源には楠公を以て親房と同じく朱子學を崇奉せしものと斷定し、論じて云く、

楠正成の如き、親房等と偕に慷慨義に奮ひ、身を殺して王に勤む、其將に死せんとするや、子に訣書を貽して曰く、死期迫れり、汝が成るを覩んと欲するも、義の重んずる所を抱いて、更に亦遁れ難し、汝に戒しむ、學を勵んで以て吾志を繼せよ、今愚竊に謂へらく、其義の重んずる所を知るは、宋學にあらざるよりは、恐くば未だ言ふを得ず、是れを以て之れを觀れば、未だ世、楠氏の學を謂ふを聞かずと雖も、吾れ必ず之れを學びたりといはん、

是れ强ひて楠公を執へ來たりて朱子に黨せしむるものなり、楠公が親房と共に南帝に吉野に仕へ、柱石の臣たりしは、事實なりと雖も、未だ朱子學を親房より傳承せりといふを得ず、假令ひ櫻井の驛の訣別に命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし、

と、あるも、此れを以て楠公が朱子を崇奉せし證據とするを得ず、何んとなれば、義の敎は已に孟子の中にも之れあればなり、楠公がいかに忠臣なればとて、牽合附屬の說を立てゝ、之れを朱子學の味方にせんとすること、甚しく誇張に失するの所爲といふべきなり、

第二　虎關

虎關、名は師錬、平城の人、幼にして書を讀むことを好む、是を以て文殊童子の號あり、然れども性多病なり、彼れ自ら曰く、

某生素より多病、一歲の中、其疢む所の居諸過半なり、其疢まざるの時と雖も、喘々焉羸々焉として常人の强健に似ざるのみ、（上二一山和尙一書）

彼れが如何に弱質蒲柳の人なりしかは推して知るべきなり、彼れ壯なるに及んで一山寧公に學ぶ、貞和二年を以て寂す、享年六十九、著はす所元亨釋書三十卷、濟北集二十卷等あり、彼れが事蹟は本朝高僧傳（卷第二十七）に詳なり、師蠻が賛に

夫山有富士、僧有錬公、是吾之所瞻卬也矣。

といひ、又

凡佛法東漸已來、集大成者、無盛於錬公也、

といへり、其推尊亦至れりといふべし、兎に角虎關が當時佛門の龍象たりしは疑なし、門人靈源寺の令淬、彼れが紀年錄一卷を著はす、題して海藏和尚紀年錄といふ、續群書類從中に收載せり、高僧傳に云く、

錬比壯、逢一山寧公于建長、雜儒釋古今書、細繹審詢、

乃ち彼れが佛書の外博く儒敎の書をも涉獵せしを知る、紀年錄を覽るに、虎關嘗て一山に問うて曰く、

某智薄識譾、每見程楊之易說、不能盡解、老師宏材博學、賴以愚所疑、合程楊之說、深考靜究、必有所解、云云、

茲に程楊と云ふは程子と楊誠齋とを意味するならん、已に程子の書に接するものとせば、朱子の書も亦當時之と共に接する所なりしならん、

高僧傳に又云く

自今諸人行住坐臥、覺得火星痛痒上也、得從前諸火雖儒釋禪敎之異、皆一火也、

彼れは儒佛の一致を信ぜし者の如し、元亨釋書の卷末に附載せる智通論の如きも、亦儒佛二敎の必ずしも相戾らざるを辨ずるものなり、彼れ此の如き見解を有しゝが故に、儒敎をも併せて之れを究明し、其造詣、決して淺しといふべからず、宋儒の學の如きも、蚤に之れを攻究し、殊に程朱の學に及べり、通衡の二に云く、

夫程氏主道學排吾敎、其言不足攻矣、（濟北集第十七）

又通衡の五に司馬光が「如佛老之言、則失中而遠道矣」と云へるを辨駁し、最後に論じて云く、

我常惡儒者不學佛法、謾爲議、光之朴眞、猶如此、況餘浮矯類乎、降至晦庵益張、故我合朱氏而排之云、（濟北集卷第二十）

又一層甚しく朱子を攻擊して云く、

晦菴語錄云、釋氏只四十二章經、是他古書、其餘皆中國文士、潤色成之、維

摩經、亦南北朝時作、朱氏當晩宋稱巨儒、故語錄中品藻百家乖理者多矣、釋門尤甚、云云(同上)

此れに由りて之れを觀れば、虎關が程朱の學に通曉せしこと、復た疑を容れず、但だ茲に注意すべきは、彼れ程朱の學に通曉せしも、程朱を尊崇するものにあらず、反りて程朱に對し、佛教を辯護し、痛く彼等を排斥するものなり、此點に於て虎關は玄惠と大に其態度を異にするものあるを知るべきなり、

第三　中巖

中巖、名は圓月、相州鎌倉の人、正中元年を以て入元し、元弘二年を以て歸朝し、永和元年を以て寂す、春秋七十六、著はす所中正子一卷、東海一漚集五卷あり、中正子單行本ありと雖も、亦一漚集の第四卷に編入せり、事蹟は本朝高僧傳(卷第三十三)に見ゆ、又一漚集卷之五に自歷譜を載す、今の所謂自傳 Autobiography なり、彼れが師とする所數多にして一定せず、然

れども頗る虎關に得る所ありし者の如し、高僧傳に云く、

元亨初上京、見闡提具公、寄錫南禪、旹虎關和尚退濟北菴、撰元亨釋書、掩關謝客、獨許月參敲、

又自歷譜の元亨元年辛酉の下に云く、

往來濟北菴、親虎關和尚、關時撰釋書、不容諸客、獨許予與不聞來控、以見愛也、話及本朝高僧事迹、予甚服博識、

虎關、中岩を愛し、中巖亦虎關に服せしこと此の如し、是故に中巖を以て虎關の弟子とすること決して不當にあらざるべし、師蠻が中巖の贊に云く、

此方傳大慧之派者、唯禪師一人而已、

と、然り中巖は大慧を尊崇せしものにて、常に大慧と年を同うして逝かんといへりしに、果して大慧と年を同うして逝けり、一漚集卷之一に寄藤刑部の古詩あり、云く、

先生業成悉衆藝、先生名高蓋一世、秖今年已七十餘、從心所欲應無滯、尙

自進修志益勤、夜讀達旦未嘗替、家乏儲粟兒童饑、不肯炙手向權勢、昨日訪我過淡齋、相忘爾汝論文細、學尙漢唐不言今、奮然欲救伊洛弊、休訝往往搪挨多、我本浮雲無根帶、作詩預先粗謝愆、更期蓮社重交際、

又卷之三に「與虎關和尙」の書あり、其中にも「伊洛之學」に論及せる所あり、又中正子問禪篇に云く、

伊洛之學、張程之徒、夾註孔孟之書、而設或問辨難之辭、云云、

中巖曾て朱子を擧げて論せずと雖も、此の如く、伊洛の學といひ、張程の徒といひ、已に宋學の何たるかを知り居りしは言ふまでもなく、虎關と同じく宋學を排斥し、禪宗を辯護するの口吻をなせり、是れ宋儒が佛教に向つて打擊を加ふること實に甚しきものあるが爲めなり、

第四　義堂

夢窓國師の門下に二人の秀才あり、義堂と絕海、是れなり、絕海は詩を以て勝れ、義堂は文を以て勝れ、各〻其特長あり、絕海著はす所絕海錄二卷あ

り、別に單行本の蕉堅稿ありと雖も、是れ亦其下卷に收載せり、絕海が果して朱子學を攻究したりしや否やは、毫も確定し難し、絕海錄の中にも、言、朱子に及ぶものあるを見ざるなり、然れども義堂に至りては、其朱子學を攻究したること、復た疑を容るべからざるなり、義堂、名は周信、空華道人と號す、義堂は其字なり、土州長岡の人、南禪寺慈氏菴の開山なり、嘉慶二年を以て寂す、享年六十四、著はす所空華集二十卷、空華日工集（委しくは空華日用工夫集）若干卷あり、惜むらくは日工集の全書傳はらざるを、唯〻續史籍集覽に空華日工集の抄錄三卷を收載せるのみ、彼れが事蹟は、本朝高僧傳（卷第三十四）に見ゆ、義堂が朱子學を攻究したることは、日工集の記事によりて明かなり、彼れ嘗て足利義滿に謁見せしに、義滿之れに問ふに孟子の解釋に就いて何故に儒者の說、各〻同じからざるやを以てす、彼れ乃ち儒書の解釋に新舊の二義あることを說明せり、日工集康暦三年（卽ち永德元年）の條に云く、

九月廿二日、余以事謁上府、（義滿の事）府君出接、云云、君又曰、昨日儒學者講孟

子書、其義名々不同如何、余曰、所見不同也、近世儒書有新舊二義、程朱等新義也、宋朝以來、儒學者皆參吾禪宗、一分發明心地、故註書與章句學迥然別矣、四書盡於朱晦菴、々及第以大惠書一卷爲理性學本、

又云く、

廿五日、過二條准后、云云、又所問儒書新舊二學不同如何、曰、漢以來及唐儒者、皆拘章句者也、宋儒乃理性達、故釋義太高、其故何、則皆以參吾禪也、

此れに由りて之れを觀れば、義堂は啻に朱子學を攻究したるのみならず、又其漢唐訓詁の學よりは一層深遠にして且つ高尚なるを認容するものに似たり、

第五　岐陽　附大椿

義堂門下岐陽及び大椿あり、岐陽、名は方秀、不二道人と號す、岐陽は其字なり、佐伯氏、讃州の人、東福寺不二菴の開山にして、又曾て南禪寺の沙門たり、應永三十一年を以て寂す、春秋六十二、著はす所琴川錄及び不二遺

稿あり、岐陽和尚自讃（續群書類從卷第二百四十に收載する所、）に云く、

今追憶六十年間事、如幻虚妄、無一可把玩、一侍者繪像求贊、似非幻者、一日幻與非幻、至是不二、余於是乎贊曰、一則不二、不二則一、性相平等、匪影匪質、

此れ彼れが何故に不二と號せしかを叙述するものなり、日本名僧傳に云く、

岐陽和尚初講四書朱熹集註、

又漢學紀源（卷二）に云く、

至德三年堂周信陞董南禪、頗信程朱書、初陽少學詩書、後崇宋學、亦蓋有資焉、由是大小經論、靡不探頤云、

岐陽が朱子學を傳承したるは、義堂其人なるべしと雖も、亦偶然にも船來の朱子の書類を得て、一層深く之れを攻究するの便を得たりと見え、茅窓漫錄に中村惕齋が言を引いて曰く、

後小松帝應永十年癸未、南都歸船載四書集註詩經集傳來、同年八月三

日、達二之洛陽一、於レ是東福寺不二岐陽和尙始講レ之、

又新書籍目錄を引いて不二岐陽が始めて朱子の註を以て講談せることを記載せり、云く、

朱子の新註本朝へ渡る事は、後花園院御宇、普廣院御治世、東福寺不二庵岐陽和尙、始以二朱子註一講談したまへり、

此說、前說と四書集註舶來の時日に就いては大差ありと雖も、岐陽を以て始めて四書集註を講ずるものとするは一なり、四書集註の始めて輸入せられしは、後醍醐帝卽位の年にて、卽ち元應元年なり、南山編年錄以て證すべきなり、岐陽の時に於ける四書集註の舶來は始めての舶來にはあらざるなり、又始めて四書集註を講ぜしは、玄惠なるべし、岐陽を以て始めて四書集註を講ずるものとするは、恐くば誤ならん、但岐陽が朱子學を攻究せしといふことは事實として認容せざるを得ざるなり、

岐陽と同門の弟子周亨、字は大椿、南禪寺の沙門たり、亦朱子學を喜べり、臥雲日件錄第十冊寶德元年閏十月の條に云く、

三日、長照院竺華來過、云云、竺華曰、吾翁大椿、筑紫人也、少年東遊、就常州師學四書五經、始聞孟子講、時食不足、就人求豆一斗、掛之座隅、日歎一握、以療飢耳、如是者凡五旬、

茲に四書とあるを以て之れを觀れば、四書集註と思はる、又其孟子の講を聞くといふは、朱子の註によりて始めて興味を感ぜしものなること推して知るべきなり、

第六　一慶

岐陽の門下に一慶と惟肖とあり、一慶、字は雲章、寳淸老人と號す、平安の人、至德三年を以て生る、南禪寺の沙門たり、寛正四年を以て寂す、享年七十八、其事蹟は本朝高僧傳〔卷第四十二〕に見ゆ、又續群書類從〔卷第二百四十一〕に釋惠鳳が撰に係る雲章和尚行狀を收載せり、一慶身を律すること甚だ嚴なり、永享七年より寳德三年に至るまで脇席を沾さゞるもの十有七年の久しきに及ぶ、彼れ程朱の學を岐陽より傳承せり、日本名僧

國史眼卷四に足利義政の時、僧清啓程朱の學を崇信することを載す。恐くば桂菴の誤ならん。

傳に云く、

讀周易程朱傳義、

又本朝高僧傳〔第四十二〕に云く、

往城北聖壽寺、參岐陽秀公、朝昏辛勤、綜究內外、

又云く、

毎喜誦程朱說、製理氣性情圖、一性五性例儒圖、

此れに由りて之れを觀れば、彼れ啻に朱子學に通曉せしといふのみならず、又深く之れを崇信せしものとするを得べきなり、

第七　惟肖

惟肖、名は得巖、雙桂と號し、又蕉雪と號す、惟肖も亦其號なり、南禪寺の沙門たり、其逝去の年、及び壽命等今得て詳にし難し、著はす所文集七卷あり、是れを東海璚華集といふ、其事蹟は本朝高僧傳〔卷第四十〕に見ゆ、漢學紀源〔卷二〕に惟肖が事を敍して云く、

參祖應於東福、與秀岐陽等、雖爲同門、如程朱學、受之岐陽、經史子集、無不探抉、以文鳴世、與仲方太白岐陽齊名、

此事實の出處は、未だ確め得ずと雖も、惟肖が三教一致の說を懷抱し、孔老釋に對し、不偏不黨の見解を有せしは事實なり、三教合面圖贊の序に、

夫三聖人設教之跡弗同、而治心之方歸一者、

と云ひ、又贊に

合歸于一、劈成三唐、

と云へるを以て之れを見れば、儒教道教の如きも、決して其排斥せし所にあらざるを知るべきなり、

岐陽門下の惠鳳亦朱子學に通ず。頃ろ其著「竹居淸事」を觀るに「晦菴序」一篇あり。口を極めて朱子を贊嘆す。「竹居淸事」載せて「五山文學全集」〔第三輯〕にあり。

第八　景徐

惟肖の門に景徐、竹居、蘭坡、桂悟、桂菴等あり、竹居と蘭坡とは、果して朱子學に通曉せしや否や未だ詳ならず、竹居の事蹟は本朝高僧傳〔卷第四十一〕及び日域洞上諸祖傳〔卷之下〕に出づ、高僧傳に謂へるあり、云く、

依㆓惟肖巖公三載㆒、肖鄭重誨奘、與㆓竹居號㆒、

と、唯ゞ彼れが朱子學をも惟肖より傳承せるならんと臆測せらるゝのみ、蘭坡の事蹟は、本朝高僧傳(卷第四十三)に出づ、夢窓國師四世の孫なりといふ、是れ亦果して朱子學に通曉せしや否や、史的事蹟の以て徵すべきものなし、若し夫れ景徐、桂悟及び桂菴は皆朱子學の傳播に關係あること少しとせざるなり、

景徐、名は周麟、宜竹と號す、南禪寺の沙門たり、年七十有餘にして寂す、著はす所翰林葫蘆集十三卷(詩集四卷、文集九卷、合して十三卷、別本は詩文を併せて六卷、何れも寫本、)あり、中岳字說に云く、

子程子曰、中心爲㆑忠、夫子告㆓參乎、以㆓一貫之道㆒、參以㆓忠恕二字㆒釋㆑之、子朱子曰、一是忠、貫是恕、又曰、一是一心、貫是萬事、是乃儒家者之就㆑心以論㆓中字㆒者也、

と、又伯春字說に云く、

一月坐㆓春風㆒者、非㆓程子㆒耶、

と、是も亦明道を指すものに似たり、此れに由りて之れを觀れば、其程朱の學に通曉せしこと、以て知るべきなり、其事蹟は本朝高僧傳〔卷第四十三〕及び漢學紀源〔卷二〕に出づ、慶長十五年僧文之が僧恭畏に與ふる書に云く、

應永年間、南渡の歸船、四書集註と詩經集傳とを載せ、來りて之れを洛陽に達す、是に於て不二岐陽始めて此書を講じ、之れが和訓をつくる、時に東山に惟召あり、東福に景召あり、二老名衲にして、同じく不二の間に出づ、翅(たゞ)此二書に精しきのみならず、博學多聞を以て天下に籍甚す、我桂菴、二老に從つて程朱の學を受く、明に遊ぶこと七年、遂に之れを研究して歸り、西藩に敎授し、之れを月渚に傳ふ、月渚之れを一翁に傳へ、以て文之に至る、

此書南浦文集中に見當らず、故に姑く漢學紀源による、伊地知季安も辨明せるが如く、書中に云へる惟召は惟肖の誤りにて、景召は景徐の誤りなること疑なし、中村惕齋及び細川十洲等皆文之の說に本づいて朱子

學の起原を論ぜり、故に其誤りを蹈襲することを免れざりき

第九　桂悟

桂悟、字は了菴、東福寺の惠日堂に居る、未だ其何國の人なるを知らず、應永三十一年を以て生る、卽ち岐陽寂するの歲に當る、彼れ桂菴と共に宋學を惟肖の門に受く、桂菴より長ずること三年なり、永正三年桂悟年八十三、使を奉じて明に入る、時に同門の景徐送序を作りて曰く、

禪師居于惠日也、萬衲隨其指揮、叢規肅爾、而殿堂廊廡、一有踈漏、卽修治焉、以故隆樓傑閣、萬瓦翼々、吾國千億代之眉目也、非惟一門被其福澤、而都下諸刹、一律嚮風焉、實五山大老也、（翰林葫蘆集卷五）

乃ち桂悟の德望決して尋常ならざるものありしを知るべし、入明の後、明帝詔して育王山に居らしむ、正德八年（卽ち我永正十年）に至りて歸朝す、時に年九十歲、彼れが歸朝するに當りて明の諸儒、詩文を作りて之を送る、就中最も注意を惹くに足るものは、王陽明が贈序なり、云く、

世之惡奔競而厭煩拏者、多遯而之釋焉、爲釋有道、不曰清乎、撓而不濁、不曰潔乎、狎而不染、故必息慮以浣塵、獨行以離偶、斯爲不詭於其道也、苟不如是、則雖皓其髮、緇其衣、梵其書、亦逃租繇而已耳、樂縱誕而已耳、其於道何如耶、今有日本正使堆雲桂悟字了菴者、年踰上壽、不倦爲學、領彼國王之命、來貢珍於大明、舟抵鄞江之滸、寓館於驛、予嘗過焉、見其法容潔脩、律行堅確、坐一室、左右經書、鉛采(采一作朱)自陶、皆楚楚可觀愛、非清然乎、與之辨空、則出所謂預修諸殿院之文、論教異同、以竝吾聖人、遂性閑情安、不譁以肆、非淨然乎、且來得名山水而遊、賢士大夫而從、靡曼之色、不接于目、淫哇之聲、不入于耳、而奇邪之行、不作于身、故其心日益清、志日益淨、偶不期離而自異、塵不待浣而已絕矣、茲有歸思、吾國與之文字交者、若太宰公及諸縉紳輩、皆文儒之擇也、咸惜其去、各爲詩章、以艷飾迥躅、固非貸而濫者、吾安得不序、

此文の眞蹟一幅、伊勢山田の祠官正住隼人なるもの、之を藏すること拙堂文話(卷二)に出づ、陽明は明代に於て最も傑出せる人物なり、然るに桂

悟の學問德行に於て深く感佩する所あり、此れに由りて之を觀れば、桂悟の人となり、推して知るべきなり、桂悟歸朝の時は陽明年四十二なり、陽明が年譜を見るに、彼れが始めて良知の說を了悟せしは、三十七八歲の時にあり、果して然らば、桂悟已に致良知の說を彼れより聽取するを得しにあらざるか、陽明亦桂悟の擧措を見て心中感發する所ありしにあらざるか、是等の點に就いて唯臆測揣摩の外之なしと雖も、陽明が贈序によれば、二氏の間に儒佛の敎義に就いて論難する所ありしは疑なし、兎に角桂悟が親しく陽明其人と相接せしことゝ哲學史上決して看過すべからざる事實なりといふべし、桂悟歸朝の後、帝敕して南禪寺に住せしむ、竟に東福寺の大慈院に歿す、年月未だ詳ならず、春秋亦未だ考へずと雖も、其高壽なりしは、其歸朝の時已に九十歲なりしを以て知るべきなり、特に佛日禪師の法號を賜ふ、著はす所、語錄二卷あり、題して了菴悟禪師語錄といふ、其事蹟は本朝高僧傳〔卷第四十三〕及び漢學紀源〔卷二〕に見ゆ、

第十　桂菴

桂菴が事蹟、本朝高僧傳、日本名僧傳及び其他僧傳の類に見えず、唯〻漢學紀源(卷二)及び日本敎育史資料(卷五)最も詳細に之れを敍述せり、今主として漢學紀源に據る、桂菴、字は玄樹、後、島陰と號す、本と周防山口の人、姓氏の出づる所を詳にす、應永三十四年(西暦紀元一四二七)を以て生る、永享七年、彼れ年九歲、乃ち洛に遊び、南禪寺に赴き、惟肖に師事し、四書新註等を學ぶ、嘉吉二年、彼れ年十六、髮を削りて僧となり、始めて戒壇に登る、惟肖既に老いて居を山中に構へ、雙桂院といふ、因りて彼れ亦取りて以て名字を選び、桂菴といふ、當時學を談ずるもの、往いて彼れが門を叩かずといふことなし、彼れ最も力を攻學に用ひ、景徐、桂悟、蘭坡等と友とし善し、是等は皆一時の名僧なり、彼れ業成りて長州に歸り、赤間關の永福寺を領す、此れより愈〻宋學を崇信し、倪士毅(字は仲弘、元人、)が四書輯釋及び四書大全等を讀み、以て其精微を究めんと欲すと雖も、猶ほ未だ彼れが先師岐陽點す

る所の四書悉く註意に適ふや否やを知らず、是に於て慨然として眞學を求むるの志あり、文正元年朝廷遣明使を五山僧中に選ぶに當りて、惟肖之れが任を負ひ、乃ち知名の衲子八十餘人を徴し、之れを南禪寺に集め、大梅々子の題を課し、鳴磬一聲、各自をして詩を作り、以て其才を鬪はしむ、時に桂菴亦試場に就き、響に應じて之れを賦して曰く、

大梅々子鐵團々、八十餘人下觜難、今日當機百雜碎、那邊一核與他看、

惟肖大に感じ、乃ち彼れを擧ぐ、應仁元年桂菴明に使し、燕都(今の北京)に至り、入りて憲宗に見ゆ、憲宗燕を設けて特に彼れを饗し、之れに幣帛を賜ふ、使事既に竣りて蘇杭の間に游び、學校に出入し、朱子學を受け、博く曹端が四書詳説及び其他註釋の粹なるものを窺ひ、心を潛め理を玩び、得ざる所あれば、輙ち鉅儒に就いて、審に詢ふて研究し、居ること七年にして、業大に進み、內外の精蘊、通曉せずといふことなし、然れども最も書經に深く、又詩騷に長ぜり、其明にあるや、禹穴を探り、西湖に泛び、名山大澤、渉觀せざるなし、而して懷を興し、感に觸るゝ毎に、必ず詩を作る、特に紀夢

遇舊の作の如きは、明人亦往々競ひ傳へ、皆稱して唐人の風ありとなす、其紀夢の詩に云く、

歸夢飄然落海東、赤城舊院杏花紅、坐迎諸友一樽酒、似慰多年離別中、

又遇舊の作に云く、

途中適遇四明人、一笑如同骨肉親、可有扶桑新到客、報言東魯送殘春、

文明五年歸りて使事を報ず、時に京師亂あり、南禪の諸刹悉く灰燼となり、學を講ずること能はず、乃ち避けて石州に寓す、八年、豐筑肥の諸州を歷游す、至る所一時の老師宿儒、彼れを推尊せずといふことなし、就中肥の菊府特に聖學を崇び、泮宮（學校の事）を置く、桂菴乃ち往いて之れに客たり、薩の龍雲玉洞等彼れが碩德あるを聞き、國老等と之れを圓室公（初め武久、後に忠昌、）に薦め、人をして肥に如いて聘を厚うして彼れを招かしむ、彼れ乃ち往かんと欲す、既にして薩隅事あるを聞いて果たさず、九年正月又適かんと欲し、且つ詩を作りて曰く、

肥陽城外薩陽城、聞說今年收甲兵、萬里雲飛駕言邁、風流太守愛僧情、

二月猶ほ菊府にあり、釋菜を泮宮に觀る、詩を作りて獻じて曰く

太平奇策至誠中、春奠賁筵陪泮宮、泗水吹添菊潭碧、寒雲染出杏壇紅、一家有政九州化、萬古斯文四海同、絃誦未終花欲暮、香烟撲袂畫簾風、

時に菊府に源基盛といふものあり、別號は朶雲、桂菴に就いて學び、尤も書を善くす、乃ち其子の爲めに四書の本文を寫し、師の口授を受け、旁ら和點を加ふ、十二月桂菴自ら校正して之れが跋を作る、是れに由りて世多く四書を敬信するを知るといふ、十年二月遂に薩藩に抵り、始めて公に市來に謁し、特に寵遇せらる、明年二月公命じて寺を麑府の海涯に創せしめ、桂樹院と號し、又島陰寺と名づく、蓋し其地向島の陰にあるに因り、以て斯寺に名づけ、亦自ら號となす、皆其撰ぶ所なりといふ、是に於て彼れ公の恩遇日に厚うして與に爲す所あるを感じ、遂に身を委ねて復た移錫の意なし、乃ち國老伊地知重貞と相謀りて大學章句を麑府に刊し、十三年六月世に板行す、實に本邦章句印行の嚆矢なりといふ、是れより桂菴首として宋學を講じ、國中に敎授し、斯道を弘むるを以て務めて己

れが任となす、公族大夫より群士浮屠の屬に至るまで、上下靡然として之れを嚮慕し、其學業を受けざるはなし、是に於てか徒衆益盛に、名聲世に鳴る、隣國の人往々歆望して、以て薩都新に仲尼の道を興し、東魯の風を移すといふに至る、實に西藩宋學を唱ふるの開祖なり、長亨二年寺を城西に移す、蓋し初め創する所の地、海涯に臨み、風潮の爲めに破壞せられて、營治に遑あらざるが故なり、其地清泉あり、因りて是れを泉菴と呼ぶ、院號は舊の如し、十二月、桂菴錫を日州飫肥の安國寺に轉じ、之れが主席たり、是れより先き公族人島津忠廉を飫肥城に遷し、邊疆を鎭せしめ、兼ねて渡唐船を掌らしむ、桂菴の召さるゝ、蓋し箇牘の用に備へんが爲めなり、延德四年(即ち明應元年)桂菴日州の飫肥より薩州の島陰寺に歸る、初め重貞が麑府に刊する所の大學章句盛に海內に行はれ、僅に一紀(即ち十二年)を經て版已に播す、是に於て十月桂菴再び之れを桂樹院に刊し、復た世に行はる、是れ實に格龍が西印度を發見せるの歲なり、明應二年、復た飫肥に如き、安國寺に居る、往來兩寺を兼ねて常居なきが如し、此時忠廉の

嗣子忠朝渡唐船の事を掌る、故に明に入るもの、多く飫肥を過ぐ、近江の人佐々木永春(東林居士と號す、)亦將に明に入らんとして、飫肥を過ぎ、留りて桂菴に學ぶ、三年、桂菴島陰寺に歸る、永春亦從ふ、四年永春明に入る、桂菴詩を作りて之れを送る、六年永春明より歸り、直に桂菴を島陰寺に訪ひ、明儒の次韻及び島陰寺集序を示す、桂菴之を見て大に喜ぶ、十年桂菴年七十五、之れより先き我邦儒書を讀むものは、必ず漢音を用ひ、佛書を讀むものは、必ず呉音を用ふるを以て法となす、桂菴の嘗て明にあるや、之れを明儒に問ふ、明儒の曰く、曷ぞ呉漢に泥まんや、便に從つて可なりと、是を以て彼れが會得する所を以て岐陽が嘗て點する所の四書を規し、多く乖誤を改め、別に和訓を註し、以て子弟に授く、然れども斯時に當りて文運猶ほ草昧に屬し、敎導未だ開けず、世の學者、往々句讀を知らず、又註に新古あるを辨せざるなり、是を以て彼れ一篇の書を著はして、四書五經の註に新古の別あるを論じ、且つ國字を以て句讀法を解し、倭點式を述べ、後の學者をして學必ず宋說を崇び、先づ能く其句讀を辨すべき所

以を知らしむ、今世稀に傳ふる所の「桂菴和尚家法和訓」是れなり、又是れを「家法和點」ともいふ、其全文は載せて日本敎育史資料卷十二にあり、文龜二年桂菴、丈室を伊敷村に構へ、是れを歸隱の所となし、名づけて東歸菴といふ、三年日州市來の龍源寺に擧げらる、然れども尙ほ留りて菴にあり、五年六月十五日、東歸菴に卒す、享年八十二、菴地に葬る、著す所島陰漁唱三卷、島陰漁唱文集一卷、島陰雜著一卷、家法和訓一卷あり、桂菴、釋門に居ると雖も、宋學を崇奉し、四書を敬信すること神明の如し、彼れ曰く「仁は吾儒の宗とする所にして、我佛の大慈なり」と、其儒佛一致の說を懷抱せしこと、以て知るべきなり、又彼れが「釋門の學は心君を敬するにあり」と云ひ「人、正心あらば焉ぞ天に愧ぢん」と云ひ、「胸中自ら不傳の書あり」と云ひ、「孔孟何人ぞ、情を用ふるにあり」と云ふの類、皆其見解の果して那邊にありしやを窺ふるに足るなり、

第十一　月渚

月渚、名は永乘（或は英乘に作る、）一の名は玄得、宿蘆と號す、薩州牛山の人、（牛山は即ち今の大口、）人となり聰悟、幼にして脫塵を志し、緇服して肥の高瀨に游び、棲碧に清源寺に隨侍す、時に僧一枝といふもの、軒を山中に構へ、詩を賦し、書を善くし、名聲、藝林に聞ゆ、月渚乃ち之れに從つて學び、業將に成らんとするに迨んで一枝歿せり、然れども猶ほ遺軒に留まること凡そ五六年、一枝嘗て桂菴と友とし善し、故に桂菴、月渚が事を聞知し、其端厚衆に超ゆることを嘆嗟して曰く、

昔し仲尼沒して子貢六年冢上に廬す、月渚亦心喪を盡すに於て豈に之れに減ぜんや、

明應六年九月菊府月渚をして薩に之いて僧雪溪を迎へ來らしむ、雪溪は菊府の僧なり、嘗て笈を負ふて薩に赴き、學を桂菴に受け、文藻宏識ありて、譽を遐邇に馳す、雪溪回りて清源寺を董す、月渚、雪溪を介して桂菴に見ゆることを得たり、桂菴乃ち大に喜び、詩を作りて之を送る、云く、

孤錫飄然報遠來、開門掃葉小嵐隈、牛山有才古今美、桐瀨禪林用楚材、

國史眼卷五を參看せよ。

師門業在壯年時、好寄書巢借一枝、人逝筆亡無限恨、爲君不說又憑誰、

其後未だ幾ならずして月渚肥を辭して薩に還り、桂菴に師事し、學を嗜んで研精し、胸襟高潔にして、殊に吟詠を好む、桂門弟子多しと雖も、皆月渚を推して巨擘となす、凡そ我邦の遣唐船多く日州の諸港に泊す、鹿藩古より之が出入を掌る、斯時に當りて福島は公の族島津忠朝の倉邑に屬するを以て儒僧を擇んで之が簡牘に備ふるの要あり、是に於て月渚を薦めて龍源寺を董さしめ、特に寵眷を加ふ、後、安國寺に轉じ、子弟を聚めて學を講ずるに及んで、悉く師說に根據し、朱子の註に依る、門人日に益〻衆し、大永三年管領細川高國、幕府の旨を承けて、相國寺の僧鸞岡（名は瑞佐）及び宋素卿（歸化明人）を遣はして、正副使となし、明國に使ひし、兼ねて通商を啓かしむ、三月薩の山川（港名）に泊す、大內義興亦月渚及び宗設を遣はして、同じく明に使ひす、宗設等が駕する所の船、先づ寧波府（一に四明に作る、）に至り、船を繫ぐこと十日、素卿等が船後れて至る、然れども府吏を買收して先づ進謁することを得たり、宗設乃ち怒りて府吏を刺殺す、時に明の世宗

嘉靖二年なり、乃ち素卿を捕へて獄に下す、是を以て月渚及び宗設、累の其身に及ばんことを恐れ、急に歸航の途に就き、便ち風に任せて還る、（其事明史三百二十二卷日本傳、明朝紀事本末五十五、圖書卷百四十六、及び籌海圖編卷二に詳なり、）還りて後、月渚、安國寺に主たること故の如し、此行や月渚不虞の難に遇ひ、急に解纜せるを以て西湖を見るを得ず、乃ち以て終身の恨となす、且つ學術の如きも、亦親しく明儒に就いて以て其造詣を研くに至らずと雖も、明より歸るに迨んで徒衆愈盛なり、是に於てか幕府特に鈞帖を賜ひ、建仁寺に補す、凡そ安國を董するもの二十年、後、老いて飫肥の西光寺に退隱し、天文十年二月九日を以て隱居に歿す、弟子業を受くるもの少からずと雖も、獨り一翁其宗を得たり。

第十二　一翁

僧一翁は、或は二洲と號す、薩州大迫の人、俗姓は鹿屋氏、永正四年を以て生る、兄を鄂渚といふ、龍源寺を董す、一翁も亦幼にして髮を削りて僧と

なる、亰賦穎敏にして、月渚に日州の安國寺に師事す、月渚は桂門の高弟なり、故に内外を研覈し、最も宋學に精し、京師に游び、錫を眞如寺に掛け、後、建仁寺を董す、未だ幾ならずして復た日州に歸り、安國寺に補す、永祿三年明國福建省連江縣の人黄友賢なるもの、賊の爲めに捉へられて薩州に寓す、其明にあるや、夙に家學を受け、周易程傳朱義、曉悉せざるなく筮驗神の如し一翁之と相交り、經義を討論し、疑ふ所を解決し、與に輔くる所多く、遂に莫逆の交をなすといふ、十年正月日州目井延命寺の天澤和尚、偶〻玄昌を託す、玄昌年僅に十三にして歲旦の詩を賦す、天澤之を奇とし、以爲く、英物にして吾が能く育する所にあらずと、乃ち之をして學を一翁の門に受けしむ、世の所謂文之和尚是れなり、時に一翁旣に安國寺を謝して龍源寺に退憩し、專ら敎授を以て暮齡を樂む、故に其文之等を導くに一として其材に隨つて以て之が敎授を施さゞるなし、常に之に誨へて曰く、

人の學をなす、汝其要を知るか、蓋し但〻文辭に通じて世用を辨ずる爲

めのみならず、又其人たるの道を學ぶ所以なり、其之を學ぶもの、父に事ふるの孝を以て之を君に移せば、則ち之が忠たり、兄に事ふるの弟を以て之を長者と朋友とに移せば、則ち之が順たり、之が信たり、皆省みて之を吾心に求め、德性を涵養するにあるのみ、若し其れ之を舍て、徒に外に求むと雖も、豈に復た何ぞ得るあらんや、

其後進を誘掖する、丁寧親切、至らざる所なきなり、天正元年錫を隅州に飛ばし、加治木の神護に栖居す、三四年文之之に從ふ、九年一翁文之を薦めて龍源寺を監せしめ、自ら閑散に就く、文祿元年十月五日を以て歿す、年八十六、業を受くるの弟子、少からずと雖も、亦文之の右に出づるものなし、文之乃ち終身其師德を欽慕し、詩を作りて其情の存する所を敍述せり、其詩に云く、

白髮殘僧掃影堂、師翁去後幾星霜、信言久遠猶今日、德與梅花一樣香、
吾師敎授幾春秋、刮垢磨光恩義淳、訓導遺言如在耳、不通古今不成人、

第十三　南浦

僧南浦、名は玄昌、字は文之、軒を雲興と號し、齋を時習と名づく、南浦は其號なり、又別に懶雲、狂雲等の號あり、俗姓は湯佐氏、薩州の人、父名傳ふるなし、本と河内の人、亂を避けて漂泊し、日州の福島に抵り、里人の女を娶り、弘治元年文之を州の外浦に生む、文之の南浦を號する、是れが爲めの故なり、彼れ一翁より少きこと四十八年、天資穎敏、幼にして群童に異なり、夙に脫塵の志あり、父其法器あるを知り、永祿三年之を延命寺の天澤和尚に囑す、此時文之年僅に六歲なり、父河内に還りて後復た逢はず、故に文之唯〻其母あるを知りて、其父あるを知らずといふ、天澤之に法華を授くるに、眼に觸れて誦をなし、頗る其意に通ず、且つ地を指して誦する所の文を書するに、一字を差へず、楷正觀るべし、是を以て隣里之を稱して文珠童といふ、永祿十年正月年僅に十三にして歲旦の詩を作る、天澤乃ち之を奇とし、以爲く、實に是れ神童にして吾駑材の能く育する所に

あらずと、乃ち之をして市來の龍源寺に之き、一翁に就いて學ばしむ、一翁は月渚門下の巨擘なり、文之是れより一翁に師事し、薙髪して戒を受け、名を玄昌といふ、其作る所の詩、往々競ふて詞林に傳へ、人口に膾炙し、竟に京師に至る、相國寺の仁如等大に其材を賞し、且つ賽韻及び序を作りて之を返す、其序に「少年其諱玄昌、予雅二其號一以二文之二字一稱焉」の句あり、是れによりて一翁之を字して文之といふ、文之の名乃ち藝林に聞ゆ、文之、一翁に就き、四書及び三體詩等を學ぶ、一翁の親交黄友賢亦文之の英才を異とし、特に訓導を加へ、學必ず孔孟濂洛の道あるを以てすといふ、文祿十二年文之年十五、笈を負ふて、洛に遊び、僧淵春に慧山の龍吟菴に謁す、淵春一たび彼れが器宇の俊爽なるを見て、深く之れを敬重し、乃ち室に入るを許す、論難あるごとに徵して以て詰ると雖も、應對すること響の如く、秋毫も滯ることなし、淵春喟然として歎じて曰く、「汝は眞の英物、他日能く吾道を弘めん、必ず克く勉めよ」と、文之乃ち博く內外を綜べ、深く蘊奥を究む、既にして西藩に歸れり、天正元年一翁に從つて錫を隅

州に移し、神護に居るもの三四年、同九年一翁、文之を薦めて龍源寺を領せしむ、時に一翁年已に七十五なるを以て閑散に就かんと欲し、文之をして己れに代はらしむるものなり、後、文之錫を隅州高山の少林寺、日州財部の正壽寺に轉ず、此時に當りて薩州の貫明公（初め忠良、又は義辰、後に義久、）文之儒學を以て名を世に振ふを聞き、乃ち招いて隅州の正興安國の兩刹を董さしむ、後、又顧問に充て、寵遇日に渥く、政策敎令、裨益する所多し、慶長四年文之松齡公（初め忠平、又義珍、後に義弘、）に從つて伏見邸に上り、嘗て大學章句を洛の東福寺に講ず、聽衆多く聚まる、是に於て後水尾帝亦其學識の卓絶せるを聞き、詔して新註を禁廷に講せしむ、其說く所皇旨に愜ふといふ、會〻廷臣の事を言ふものあり、曰く「惜いかな師博識宏才と雖も、亦西陲に生まれ、詞辨鄙陋にして、頗る文飾少し」と、彼れが薩州の土音を以て經書を宮中に講じたるを想見すべきなり、旣にして又薩州に歸り、暫く隅州の正興寺に寓す、慶長八年德川家康鈞帖を與へて筑前の禪光寺に補す、幾もなく復た隅州の正興寺に轉じ、煕春の嗣となる、幾もなく又鈞帖を拜

して相州建長寺の住職となり、堂に昇りて提唱するに、詞海辨河、滂湃として竭きず、丕に祖道を振ひ、殆んど古に踰えんとするの勢あり、同九年薩州の慈眼公（初め忠恆、後に家久、）文之を召して學を麑府に講せしむ、同十六年大龍寺を創し、文之をして之れが開山たらしむ、是れより府下翕然業を受くるもの多し、元和六年九月中旬、微疾を示し、晦日門人を聚め、之れに後事を囑し、趺坐して歿す、享年六十七（或は六十五と云ふ）惺窩の卒去に後るゝこと一年なり、加治木の安國寺に葬る、著はす所南浦文集六卷あり、其他聖績圖和鈔、日州平治記、砭愚論、決勝記等あり、門人業を受くるもの、少しとせず、就中如竹、學之の徒最も世に聞ゆ、學之名は玄碩、嗣いで大龍寺を董す、學之歿して門人一溪、名は守榮、代はりて之れを嗣ぐ、一溪歿して門人日東之れを嗣ぐ、日東歿して不門、名は慈宣代はりて之れを嗣ぐ、日東以上は世々祖業を繼ぎ、程朱の學を講じ、聽徒連綿として絶えず、是れ其形を僧にして、其心を儒にするものにて、即ち所謂儒僧なるものなり、獨り慈宣は曾て備前に遊び、法を松琴寺の無聊に受く、是を以て文之の法脈、慈

宣に至りて始めて其流を異にすることゝなれり、

室町時代以來我邦の遣唐船の山川港に碇泊し、是れより寧波地方に向ふもの少しとせざるを以て、儒僧を擇んで正龍寺の席を董さしめ、以て之れが簡牘の要に備ふるを常とす、然るに當時桂門の郁芳以下月溪問得の徒、皆儒學に精はしく、天正の頃問得正龍寺にあり、文祿元年豐太閤、細川幽齋をして來たりて薩州の封内を巡視し、寺社所屬の田を減ぜしむ、然れども天龍寺の如きは、簡牘の功を以て特に寺田を賜ふこと故の如し、而して問得等益〻儒學を勵み、子弟を教授するに、四書等を以てす、曾て四書の我邦に入るや、洛の東福寺の不二岐陽首めて和點を施す、後桂菴明より歸るに及んで頗る之れに修正を加へ、相傳へて以て文之に至る、文之亦間〻之れに改正を加へて以て徒弟に授く、故に當時薩州に於て句讀を授くるもの、皆文之が桂菴より傳へて之れに改正を加ふる所の本を以てせり、文祿二年妙壽院惺窩宋儒性理の書を讀み、四書新註の未だ和訓あらざるを慨し、忽ち明に入りて之を學び、之れが和訓を作らん

と欲し、筑陽（筑前博多ならん、）より出發せしに、海上暴風に遭ひ、漂流して鬼界が島に至る、鬼界が島は今の硫黃島にして薩摩の河邊郡に屬す、冬、鬼界が島より出て丶、山川港に泊し、偶〻問得を正龍寺に見、其新註の和訓を徒弟に授くるを聞き、大に心に異しみ、試みに假りて之を誦玩するに、和訓を施す所、其義に稱はざるなし、因りて其本づく所を問ふに、問得を始め、僧等皆答へて曰く、「吾文之和尚の點する所の本なり」と、是に於て惺窩歎じて曰く、「今將に明に渡らんとするも、亦他なし、惟〻之れを求むるのみ」と、乃ち問得に請ふて悉く寫して去る、惺窩の遂に京學の鼻祖たるもの實に此に始まる、薩州に於ては貫明公及び士大夫等、文之の門に遊ぶもの禪を問ふこと少にして、皆朱註によりて宋學を修む、

第十四　如竹

僧如竹、名は日章、如竹は其號なり、又養善院、又は顧天菴と號す、隅州掖玖島（或は役島、又は屋久島に作る、）安房村の人にして、姓は泊氏、父は舵工たり、（地理纂考には如竹を以

て慶民の子とせり、)元龜元年を以て生れ、文之より少きこと十五年、少小にして安房村の本佛寺に入り、日蓮宗の僧となり、日章と號す、長じて京師に遊び、本能寺に入りて法華を學ぶ、然れども心未だ樂まず、此時に當りて藤原惺窩、西海より歸り、四書新註に訓點を付して、之れを京師に講ず、京師の僧俗、業を受くるもの多し、如竹が同寮の僧、共に惺窩に就いて學ばんことを勸む、如竹以爲く、此學本と薩州に出づ、流を遠きに挹むは、國に歸りて近く其源を尋ぬるに如かずと、乃ち京師を辭し、還りて文之に就いて程朱の學を受け、居ること八年にして、學大に進む、如竹人となり、質直にして文少く、妄に笑語せず、學必ずしも博きを務めず、詩賦の如きも亦其好む所にあらず、主として四書新註を研精して、以て理學の要旨を得たり、慶長中浪華に遊び、有馬の溫泉に浴す、時に藤堂高虎亦來りて溫泉に浴す、偶〻如竹を見て之れを勢州に招く(漢學紀源には藤堂侯の相、如竹を推薦すとせり、未だ其何れか是なるを知らず、)如竹高虎に謂つて曰く「吾れ平素忌諱を知らず、今侯の招に應ず、言を盡くさずばあるべからず、願くは請ふ之れを容れよ」と、高虎之れに

答へて曰く、「佞諛の徒に至りては、吾れ其人に乏しからず、翁の直言をなす、是れ吾れの翁を聘する所以なり」と、遂に爲めに一箇の寺を創立して、如竹をして之れに居らしむ、是れより如竹、常に左右に侍し、裨益する所多し、如竹曾て高虎に謂つて曰く「人の禽獸に異なるは、能く人の道を行ふが故なり、其道を行はざれば、人たることを得ず、禽獸を以て譬へんに、君は虎狼なり、人實に畏る、臣等は狐犬なり、人侮る、其畏るゝと侮るとは異なれども、其獸なるは一なり」と、如竹此間に於て桂菴及び文之の書類を上梓し、大に朱子學の傳播を助成せり、寛永元年には桂菴著はす所の家法和點を梓行し、寛永二年には文之和訓の四書新註を梓行し、寛永四年には文之和訓の周易程傳本義を梓行し、寛永六年には南浦文集を梓行し、其他砭愚論、恭畏問答等の書も亦自ら跋を作りて之を梓行せり、我邦四書新註、周易傳義の刻本は是れを以て嚆矢となす、寛永七年高虎卒し、嗣子高次學を好まず、如竹乃ち辭して京師に上り、既にして掖玖島に歸り、俸祿の餘りを親族村民の貧しきものに分ち與へ、寛永九年琉球に

渡れり、時に年六十、翌年明國の使者來たり、明人梁澤民、如竹と經義を論議し、深く之れを敬重して、其家號を顧天菴と名づく、琉球國王亦如竹を敬重して之れを師とす、此時其地文教未だ開けず、經書を讀むこと漢音にして、未だ和訓を知らず、如竹乃ち文之點の四書を與へしによりて始めて和訓を知るといふ、之れに居ること三年にして、屋久島に歸り、餘祿を施すこと始めの如し、彼れが慈善家なりしことを推して知るべきなり、寛永十七年島津光久如竹を城下に招き、祿三百石を與へて、自ら其講義を聽けり、如竹麑府に留まること多年にして、又屋久島に歸り、明暦元年五月十五日を以て卒す、享年八十六、安房村の本佛寺に葬る、如竹晩年近思錄を得て曰く「我れに數年を假し、卒に以て之れを學はゞ、將に亦至處に到らんとす、惜いかな吾れ既に老いたり」と、又嘗て曰く「君子己れの長を以て人の短を露はすべからず、然れども天地の間長短齊しからざるは、物の自然なり、蕞爾の軀、豈に事々にして長ぜんや、必ず己れが長を炫せんと欲せば、人の短を露はす、則ち跬歩にして仇を成す、何ぞや、諱はし

きは、己れの長を炫するより諱はしきはなし、樂しきは人の短を掩ふよ
り樂しきはなし、彼の既に吾れの短を揚げて惑はざるは、千百人に一人
のみ、然らば則ち人の短を言ふもの之れを禍を種ゆといふべし」と如竹
の事蹟は漢學紀源〔卷四〕地理纂考〔廿四之卷〕補遺鳩巢文集〔卷八〕及び隱逸
全傳等に見ゆ、

第十五　京學起原關係書類

濟北集二十卷　虎關著

海藏和尚紀年錄一卷　令淬編纂

此書は續群書類從卷第二百三十二に收載せり

中正子六卷　中巖著

東海一漚集五卷　同上

中岩和尚自歷譜一卷

此書は續群書類從卷第二百三十六に收載せり

空華集二十卷 義堂著

空華日用工夫集 仝上

此書の抄錄三卷續史籍集覽中に收載せり、

岐陽和尚自贊一卷

此書は續群書類從卷第二百四十に收載せり、

東海璚華集七卷 寫本〇惟肖著

翰林葫蘆集十三卷 寫本〇景徐著

日本名僧傳一卷

此書は續群書類從卷二百三に收載せり、

雲章和尚行狀一卷 釋惠鳳著

此書は續群書類從卷第二百四十一に收載せり、

桂菴和尚道學傳來記一卷 寫本

本朝高僧傳七十五卷 師蠻著

日域洞上諸祖傳〔卷下〕 自澄撰

天台霞標〔六編卷之二〕寫本

延寶傳燈錄

正誤宗派五卷

康富記

南浦文集三卷 南浦著

島津國史

西藩野史

麑藩名勝考

地理纂考

大日本史〔卷之二百十七〕

垂加草〔附錄下〕

漢學紀源五卷 寫本○伊地知季安撰

此書は薩摩の伊地知季安（字は子靜）の著はす所にして、主として朱子學の起原を闡明するものなり、凡そ朱子學の起原に關する史料とし

ては此書の右に出づるものあるなし、

朱學傳來記

日本儒學傳　跡部良顯著

右二篇は日本教育史資料卷十五に收載せり、

茅窓漫錄　茅原定著

此書は百家說林卷五に收載せり、其中「朱子學四書來由並二先生像」と題せる一項は、最も參考に資すべきものなり、

補遺鳩巢文集〔卷八〕

好古餘錄〔卷之上〕　山崎美成著

好古日錄〔乾〕　藤原貞幹著

好古小錄〔下〕　仝上

續本朝通鑑

四書大全鼇頭

隱逸全傳〔卷下〕　細川十洲著

朱子學の由來　花岡安見
國學院雜誌第六卷の第八第九及び第十一の三號にあり、
朱子學の傳來と其學派　足利衍述
東洋哲學第八編第十一號及び第十二號にあり、
日本程朱學派に於ける桂菴和尙　川田鐵彌
帝國文學第五卷第十號にあり、
國史眼(卷之五)
日本佛家人名辭書　鷲尾順敬著
日本敎育史資料(卷十二)
大日本人名辭書
五山文學全集　上村觀光編輯
日本儒學史　久保得二著

第三章　海南朱子學の起原

第一　南村梅軒

朱子學が一たび桂菴によりて西南の一隅（即ち薩州）に傳播せられてより、其脈絡縣々として絕えず、自ら一派を成せり、藤原惺窩遂に其餘流を酌み、京師に歸りて京師學の基礎を成すに至れり、朱子學が一方に於ては此の如き系統を成しつゝある間に、又意外の邊に別派の系統を成しつゝありしなり、是れを海南學となす、海南學は普通に之れを省略して單に南學といふ、古來谷時中を以て南學の祖とすれども、時中の學亦由りて來たる所あるなり、其遠祖を南村梅軒となす、梅軒の名字未だ詳ならず、梅軒は其號なり、又離明翁と號す、大內氏の家臣なり、周防國吉敷郡上宇野令白石に居る、大內氏實錄卷第二十四列傳第十文苑の處に南村梅軒が傳を載せ、又其附錄として附載する所の大內氏の家臣の名簿を見るに、御伽衆の中に有梅軒なるものあり、是れ即ち南村梅軒なるが如し、或

は云ふ防州の產ならんと、或は云ふ土佐の人なりと、未だ其何れか是なるを知らず、天文年中彼れ漂泊周流して土佐に來たり、當時の豪族吉良宣經の客たり、人となり、沖澹恬靜にして人の榮華を羨まず、菜根を咬んで以て食となし、簞瓢の貧に處して猶ほ且つ晏如たり、而して心を聖經に潛め、常に孝經四書を讀み、旁ら孫吳を講じ、深く道義を尊んで、淵默躬行す、彼れ初め宣經を見るや、世子宣直及び老臣吉良宣義侍坐す、宣經儒者の學を問ふ、梅軒答へて曰く、

夫れ儒とは學者の總稱なり、而して小人儒君子儒の分あり、或は達儒腐儒直儒曲儒等の目あり、記誦の末を務めて、義理の源に昏く、徒に名を賣り、祿を買ひ、利習に牽かれ、私欲是れ計る、是れ即ち小人儒なり、文章字句の迹に拘泥して、一般の事務を辨ぜず、當世の用に適せざるもの、是れを腐儒となす、其心頑曲偏頗にして、專ら古道を引いて今政を謗り、己れを責めずして人を尤め、筆舌を巧にして、是非善惡を顚倒するもの、是れを曲儒となす、君子儒は則ち然らず、仁義の道を講習し、心

に得て躬に行ひ、綱常彝倫の大より起居飲食の細に至り、幽にして鬼神の道、顯にして天地の理に迄るまで、周く通じて遺すことなく、其心活動、左右自在、事に當り、物に接はり、機に應じ、變に從ひ、滋滯する所なく、言行一致、心貌和同して、君父に事ふるも、此道を以てし、臣妾を使ふも、此道を以てし、推して治國平天下に至り、皆此道にあらざるなし、概して是れを道義の學といふ、君問ふ所の儒は何の儒ぞや、

宣經曰く、

願くば道義の學を聞かん、

梅軒曰く、

備さに四書に具はりて、缺くることなし、君就いて習ふべし、臣又何をか說かん、

宣經曰く

每日身に切なるの工夫いかん、

梅軒曰く、

身に反り獨を愼み人を尤むるに薄く、怨に遠ざかるにあり、

其他問答數回に及ぶ、最後に宣經容を改め、謝して曰く、

幸に明論を聞くを得て余が茅塞を開く、願くば今に繼いで日々に誨を受けん、

と、是れより禮遇太だ優なり、梅軒嘗て吉良宣義に謂つて曰く、

學に進むに漸あり、速に成らんと欲すること勿れ、唯當に循々として已まざるべし、已まざれば、則ち遂に必ず得ることあり、旣に得ることあれば、則ち又自ら已むこと能はず、故に學んで三年間斷なくんば、則ち君に許す、必ず得る所あらんことを、

學問の法種々ありと雖も、畢竟他の秘訣なし、唯決して已まざるの努力、是れを秘訣となすのみ、梅軒が此秘訣を道破せると、洵に卓見といふべし、彼れ平生學者に敎ふるに必ず存心謹言篤行の三事を以てして曰く、

三事は修爲の基たり、道、廣邈と雖も、其實は已れに備はる、己れたることを認め得ば、則ち貧富によりて添減せず、利害によりて浮沈せず、確

乎として操定す、是れ學問の効驗なり、

其己れたることを認め得るは、即ち己れの己れたるを知るなり、是故にソクラーテスの己れを知れ γνῶθι σαυτόν と其揆を一にするものといふべきなり、彼れ又三十六策問を作れり、然れども其內容いかんを知らず、實に惜むべしとなす、其豫州刺史を挽するの詩に云く、

昊天不憫奪元勳、恰若妖星阨蜀軍、滿目潛然明未滅、丹心願染素絲君、

後其適く所を知らず、故に生卒の年月等皆詳ならず、大高坂芝山、梅軒の贊を作る、云く、

南村有梅、幽芳絕姸、孤立萬花之頭上、獨步天下之春先、

梅軒の事蹟は南學傳（上卷）吉良物語（上卷）及び日本敎育史資料（卷十二）に見ゆ、其名字によりて之れを察するに、儒者にして僧侶にあらざるに似たり、又其四書を讀むを以て之れを見れば、朱子學の系統に屬するものなること疑なし、然らば彼れは如何にして朱子學を修むるを得しか、國史を考ふるに、天文年間周防の大內義隆武事を輕んじて、文學を尙び、曾

て書を朝鮮の禮曹參判に寄せ、大藏經を請ひ、尋いで朱註五經書及び刻漏の器を請ふ、是れより彼此海船相往來して外交をなし、遂に彼れ自身支那服を着くるに至れり、一時山口に於ける文學の勃興は、即ち彼れが惹起する所に係るなり、桂菴本と周防山口の人にして、文明五年乃至七年の頃石州に寓す、梅軒或は此時を以て桂菴に師事し、朱子學を修むるを得しか、殊に梅軒曾て宣義に禪を說いて曰く、

夫れ禪家の大旨は直に心を指示す、文字を立つるを藉らずといへり、入定兀坐すれば、塵を拂ひ、相を離れ、念を絶ち、情を忘れ、心靈に、氣醒に、萬事了々、風月洒々たり、塵緣尙ほ頓に起るあるも、手に隨つて即ち滅す、大明依然、昭曜虧くることなし、予固陋にして、眞儒の域跂及すること能はずと雖も、叨りに自ら謂へらく、三綱五常の道は、眞に天地を維持するに足る、諸子百家、是れを更(あらた)め變ふること能はず、但し明に此心を曉るは禪法に若くはなし、心は身の主にして萬事の根なり、心定靜なるにあらずんば、何を以てか事を辨ぜん、

と、此れに由りて之れを觀れば、桂菴の如き禪僧より學び來たれるにあらざるか、果して然らば南學も亦遠く桂菴に淵源するものなり、然れども此の如き系統的連絡に就いて何等の正確なる史的事實をも執ふることの能はず、且つ南學傳に梅軒が事蹟を記し了はりて「事在天文辛亥秋九月」とあり、文明五年より天文二十年(即ち辛亥)まで七十九年の久しきを經たり、假令ひ梅軒が十六七歲にして桂菴に石州に及ぶとするも、其齡は九十有餘歲となるなり、是故に梅軒が桂菴に就いて學びたりとすること甚だ疑ふべしとなす、大內氏實錄の梅軒が傳の割注に「義隆朱氏新注五經を朝鮮に求むる、蓋し梅軒が誘導せしなるべし」とあり、此れに由りて之れを觀れば、梅軒は舶來の書類によりて朱子學の系統に接せしにあらざるか、之を要するに、梅軒は山口に於ける文學勃興の結果として出でたる一人にして其學は自修に本づくものとすること、反りて妥當なる見解といふべきなり、

第二　吉良宣經

吉良宣經、姓は源氏、伊豫守と稱す、源賴朝の弟土佐冠者希義の后裔なり、土州吾川郡弘岡城に居る、彼れ人となり、溫和にして聰敏、義に屈し、諫に從ふ、文にして委靡ならず、質にして鄙野ならず、親に事ふること孝に、下を撫すること慈なり、是を以て國郡善く治まり、諸士心服す、彼れ南村梅軒に學んで、夙夜黽勉して、以て經義に通ず、嘗て其子に訓へて曰く、

明主に四得あり、己れを得て後、人を取ることを得、時を得て後、敵に勝つことを得、智遠く敵を制するに到る、故に克く永く其邦家を保てり、暗主に四失あり、時を失ふて後、敵に勝つことを失ひ、人を失ふて後、己れを失ふ、惛うして近く己れを忘るゝに到れば、則ち戮辱を後昆に貽す、明暗の分、辨せざるべからざるなり、

彼れ又軍律を撰制し、法令を議定す、此時天下大に亂れ、群雄相爭ふ、彼れ乃ち四國を幷呑して、亂に戡つの志あり、天文十八年冬深雪の夜、老臣谷

將監か家に就き、謀臣を集めて四國を取るの策を議す、同二十年秋九月長曾我部元國を伐つ、軍中疾に嬰りて歸り、其十二日を以て卒す、年三十有八、梅軒が挽詩に云く

昊天不㆑憫奪㆓元勳㆒、恰若㆓妖星死㆒蜀軍、滿目潸然明未㆑滅、丹心願染素絲裙、

第三　吉良宣義

吉良宣義、右近と稱す、吉良宣經の從弟にして老臣の列に班す、人となり木强方正にして、道を崇び、學を好み、南村梅軒に從つて經義を講究す、宣經に仕へて、君臣相儆誡し、良朋の切偲するが如く、水魚の相親むが如し既にして宣經卒し、子宣直嗣ぐ、宣直禪空を嗜み、閑散に耽りて、意を政に留めず、遂に薙髮して持戒せんと欲するに至る、宣義切に之れを諫止す、然れども尙ほ以爲く、嗣君の不肖なる、恐くば其社稷を覆さんと、日夜之れを憂慮し、直諫して休まず、宣直稍〻之れを疏んず、小臣輩乃ち意を迎へ、譖して曰く、

先君病革なる時、長を廢し、幼を立てんことを勸む、其意自ら擅にせんと欲す、國の爲めに計るにあらざるなり、

と、宣直乃ち使者二人を遣はし、宣義の五罪を列擧して、之れを責む、宣義曰く、

謹んで命を受く、但〻條中の四事は、乃ち造言にして虚僞なり、世子を立つるの一事に至りては眞なり、臣當時先君に勸むる所以のもの、豈に他あらんや、顧ふに君常に閑居して坐禪を好む、封域の政、恐くば其煩しきに耐へざらんことを、故に位を幼君に讓りて、各〻其好む所に適せしめば、亦可ならずや、是れ則ち臣が公室に忠なる所以なり、先君在天の靈、應に臣が丹心を照鑑すべし、若し是れによりて譴を受け、宗族を夷滅せらるゝも、敢て辭せざる所なり、

二使之れに

四事は微罪なり、建儲は大事なり、君宜しく姑く之れを隱諱すべし、

といひしに、宣義之れに答へて曰く、

是れ君を欺くなり、刀鋸鼎鑊、何ぞ懼るゝに足らんや、信を捨て義に違ひ、詐を以て君に答ふるは、士の愧づる所なり、公等我が爲めに實を以て君に白ふせ、

二使尙ほ之れを庇護せんと欲し、再三懇諭す、然れども宣義遂に肯せず、是を以て二使乃ち復命す、宣直忿りて之れを其家に禁錮すること凡そ半年餘、宣義悒鬱して病を發す、然れども醫藥を却け、飮食を斷ち、絕命の詩を賦して曰く、

丹心一片斷無私、幾度朗吟正氣詩、沒後雙瞳先欲禀、勿看勾踐破呉時、

宣經の畫像を壁間に揭け、香を燒き、衣を更め、三拜して死す、實に永祿五年の春なり、宣義卒して未だ幾くならずして宣直果して本山梅慶が爲めに滅さる、宣義の子求馬時に麗城にあり、城陷るに及び、力戰して之れに死す、別に女子あり、亦貞烈の名を播くといふ、南學傳に、

宣義父子之死、忠孝兼成一家之風、宣千古之赤心、不負所學者也、

と、洵に當れり、南學の系統には忠勇義烈の人を出だすこと少しとせず、

宣義の如きは、其率先といふべきなり、

第四　吉良親實

吉良親實、姓は秦氏、左京進と稱す、長曾我部元親の弟、親貞の子なり、初め吉良宣直既に滅ぶ、元親乃ち親貞をして吉良氏の古壘に據り、吉良氏を冒せしむ、親實嗣ぐに及んで、高岡郡蓮池城に移る、因りて又蓮池を以て氏となす、親實人となり、直截にして回らず、驍勇多力、堅を蒙り鋭を秉り、攻城野戰の術、當時之れに匹敵するものあるなし、此時能く儒學に通ずる僧如淵といふものあり、親實乃ち同志の士比江山親興等と之れを師とし、士大夫の氣節あるものを招き、文交を結び、課程を立て、日に相集まりて共に勉勵す、是に於て元親亦儒敎を尙び、郭內に校舍を設け、如淵及び僧忍性を以て師となす、一月六回、諸士を集め、書を讀み、武を講じ、學術漸く興る、而して親實の徒、直を以て自ら矜り、當時の嬖倖を惡み、與に交はることを肯んせず、是を以て其能を嫉むの輩、之れを目するに、朋黨を

以てして相容れざるに至る、是時に當り元親の嬖妾季子盛親を生む、嬖妾は老臣久武氏の妹なり、天正十四年の冬、元親豐臣秀吉の命を受け、島津氏を伐つ、十二月豐後の戸次川にあり、水を涉りて挑み戰ふて敗績し、長子信親之れに死す、其後儲嗣未だ定まらず、正統の順序より之を言へば、元親の三子親忠當に後繼たるべきなり、然るに元親諸老臣を會し問ふて曰く、

戸次川の役、信親死して嗣なし、故に今季子盛親を立てゝ、嗣子となし、信親の女を以て之れに配し、以て嫡統を存せんと欲す、卿等以て如何となす、

衆相見て一言を發せず、親實獨り進んで曰く、

信親既に戰に死し、親和(元親の二子、)亦病んで歿す、其次を以てせんか、則ち親忠(元親の三子、)あり、且つ其人や勇にして才あり、君嗣を定めんと欲せば、何ぞ他に求めんや、而して盛親を立つるは、次を超ゆるなり、且つ姪を以て叔に妻はす、人倫をいかん、臣斷じて其不可なるを知る、故に敢て

言はずんばあらず、

と、言貌凛然として畏憚する所なし、然れども諸老臣尙ほ默然として語なし、獨り比江山親興左右を顧みて曰く、

親實の言、正しといふべし、諸君以て是となすや否や、

諸老臣咳して答へず、元親乃ち起ちて內に入り、議遂に決せずして止む、是に於てか浮言沸騰、譖愬蜂起す、元親卒に之れを信じ、天正十六年十二月某日使を遣はし、親實に死を賜ふ、時に親實客と碁を打つ、使者の來たるに及んで、徐に局を收め、之れに謂つて曰く、

吾れ不肖と雖も、家門の列にあり、君過ちある時は、道を以て諫諍せずんばあらず、苟合曲從して、君を不義に陷るゝに忍びず、然るに阿順の徒、君側にあり、親實が誠忠反りて罪を獲るに至る、然りと雖も死して古人に比す、猶ほ餘榮あり、只恨らくば今より後諫臣口を緘し、諂諛の徒、志を得て秦氏の社稷、終に墟とならんことを、

言ひ畢はりて自ら腹を割いて死す、親實と同時に親興にも死を賜ふ、其

他親實と與に交はる所の諸士相尋いで誅せられ、言の連なる所ありて如淵も亦殺さる、後元親、親實の寃を覺り、深く之れを悔愧して、彼れが爲めに廟を建て蓮池大明神と號す、其祀今に至りて尙ほ存し、其社を木塚神社と稱す、

親實が友人比江山親興は長曾我部國康の二子なり、初め比江山城に居る、因りて以て氏とす、人となり篤實にして戲談妄語せず、秦氏創業の初めより武功最も多し、親實と與に如淵を師として經義を講ず、然るに圖らず、嗣子の事に關し、親實と共に直言して、讒者の爲めに構陷せられ、亦寃死するの不幸に遭遇せり、

第五　忍性、如淵、天室

忍性、如淵、天室の三人は皆緇徒にして梅軒に親炙せしものなり、忍性は初め忍藏主と稱し、長岡郡の吸江寺に居る、性敏慧にして儒を好み、曾て南村梅軒に學び、能く經書を講ず、

如淵又信西堂と號す、吉良宣義の甥にして、吉良親實の異父兄なり、性靈利惺憁なり、初め京師の妙心寺（一説に東福寺）に學び、後、故山に還り、梅軒が敎を受けて、遂に儒に歸し、親實が家に寓居し、僧忍性と交誼太だ厚し、彼れ善く孝經論孟を講じて以て士風を助成し、常に靜坐を好んで內省の工夫をなし、學生に訓へて曰く、

靜に本心の虛明、夜氣の湛清なるを觀て、應事接物の柢を植てよ、

と、又曰く、

古人曰く、言行は身を立つるの基なり、三思して言ひ、九慮して行ふは、乃ち其忠信篤敬ならんことを欲してなり、是れ梅軒が所謂修爲の三事なり、

忍性曾て長曾我部元親の招に應じて講席を岡豊城內に開き、一月六回經書を講說するに當りて如淵亦與る、秦氏の公族より士大夫の子弟に至るまで、皆師事して之れを崇敬せり、然るに親實讒死するに及び、如淵亦連坐して殺さる、彼れが辭世の詞に曰く、

五蘊聚散處、人間作古今、不生還何滅、洞然常法心、

如淵元と前吉良氏の胤にして、後吉良氏に於ても亦姻あり、是を以て舊記を考へ、旁ら親賓に問ひて、元親が四國の戰を畧記し、合せ叙して吉良物語の草を起せりといふ、今傳ふる所の吉良物語は恐くば如淵が作にあらざるべし、如淵死して忍性も亦漸く疎斥せられて死す、二人既に死して儒學の系統殆んど將に絕えんとす、此時に當りて幸に天室てふもの獨り存して能く其墜緒を一髮の危きに續くを得たり、

天室は其鄉貫等詳ならず、幼より僧となりて、土佐國吾川郡長濱村雪蹊寺に居る、嘗て梅軒が經書を講ずるを聞き、大に之れを喜び、乃ち弟子の禮を執りて、業を彼れに受け、遂に能く其旨意に通曉するを得たり、慶長元和の際、程朱の學を唱へ、以て生徒に敎授す、其門下に慈沖あり、沖後還俗して谷時中といふ、時中天室が敎を受けて南學の鼻祖たるを得たり、寛永正保の間に至り、小倉三省、野中兼山、谷一齋、山崎闇齋等輩出して、南學遂に大に興り、德川時代に於ける一大潮流となりし者、天室與りて力

ありといふべし、如淵、忍性、天室の三人は南學傳に是れを三叟と稱せり、

第六　南學起原關係書類

南學傳二卷 寫本〇大高坂芝山著

此書は土佐國群書類從〔卷第五十二〕中に收載せり、

野史〔第二百三十一〕

日本諸家人物誌

儒林傳 澁井太室著

大日本敎育史資料〔卷十二〕

吉良物語

大內氏實錄 近藤清石著

大日本人名辭書

佛家人名辭書

日本儒學史 久保得二著

南學史 足利衍述

東洋哲學第九編第七號第八號第十一號及び第十二號にあり、

朱子學起原畧系

- 玄惠—北畠親房
- 一山
  - 虎關—中巖
  - 夢窗
    - 義堂
      - 岐陽
        - 一慶
        - 惟肖
          - 景徐
          - 竹居
          - 蘭坡
          - 桂梧
          - 桂菴—月渚—一翁—
        - 惠鳳
      - 大椿
    - 絕海

- 南浦
  - 如竹
  - 惺窩（京師學之祖）

- 南村梅軒
  - 吉良宣經
  - 吉良宣義
  - 如淵
  - 忍性
    - （如淵・忍性）吉良親實、比江山親與等
  - 天室
    - 谷時中（海南學之祖）

學者其身を奉ず、當に金玉の如く然るべし、微に闕失あらば、以て天下の至寶となすに足らず、

池田草菴

附錄の二

朱子學派系統（其重なるものを記す）

（一）惺窩系統畧圖

藤原惺窩
- 林羅山 ― 春齋（號鵞峯） ― 鳳岡（號整宇）
- 松永尺五
  - 木下順菴
  - 宇都宮遯菴
- 那波活所 ― 木菴
- 堀杏菴 ― 立菴 ― 景山
- 菅得菴
- 三宅寄齋 ― 鞏革齋
- 石川丈山
- 吉田素菴

(二) 順菴學系畧圖

- 藤原惺窩—松永尺五
  - 木下順菴
    - 木下敬簡(早世)
    - 木下菊潭
    - 柳川震澤
    - 雨森芳洲
    - 新井白石
      - 益田鶴樓
      - 土井霞洲
    - 西山西山
      - 大地奚疑
      - 中村蘭林
      - 綾部絅齋—三浦梅園
        - 植木筑峰
        - 近藤西涯
    - 三宅觀瀾
  - 宇都宮遯菴—宇都宮圭齋(學于仁齋)
  - 松永昌易—森儼塾
  - 松永永三
  - 野間靜軒(丈山詩友)

- 室鳩巣
  - 河口静齋
    - 岩瀬華沼
    - 伊東好義齋
  - 淺岡芳所
  - 中根東里（後奉二陽明學一）
- 服部寛齋
- 安東省菴
- 南部南山
  - 南部景春
  - 南部子壽
- 松浦霞沼—松浦權允
- 祇園南海—祇園鐵船
- 榊原篁洲—榊原延壽—榊原良顯
- 向井滄洲
  - 宇明霞
  - 石川麟
  - 上柳四明
  - 渡守時
- 青木東菴
- 岡島石梁
- 岡田竹圃

―堀山輔
―板倉復軒（後歸二于復古學一）
―圓田雲鵬
―石原鼎菴

（三）鳩巢學系圖

木下順菴
羽黒牧野
→ 室鳩巢
- 室勿軒
- 大地奚疑
- 中村蘭林
- 綾部絅齋 ― 三浦梅園
- 河口靜齋
  - 植木筑峯
  - 近藤西涯
  - 岩瀨華沼
  - 伊東好義齋
- 伊東澹齋
- 淺岡芳所
- 奧村修運

- 青地齊賢
- 青地禮幹
- 小谷繼成
- 河口仲賓
- 兒玉圖南
- 中根東里

（四）南學學系畧圖

南村梅軒—天室—谷時中

- 谷時中
  - 野中兼山
  - 小倉三省
  - 山崎闇齋

- 野中兼山・小倉三省
  - 長澤潛軒
    - 飯室與五右衛門
    - 土岐重元
  - 谷一齋
    - 大高坂芝山
    - 莊田琳菴
    - 江木三壽
    - 松田正則

（五）闇齋學系畧圖

- 山崎闇齋
  - 保科正之
  - 米川操軒
  - 永田養菴
  - 矢野拙齋
  - 淺見絅齋
    - 三宅觀瀾
    - 鈴木貞齋
    - 若林強齋
      - 松岡仲良
      - 西依成齋
        - 古賀精里
        - 村井中漸
        - 鈴木潤齋
        - 西依墨山
      - 小野鶴山
        - 山口風簷
    - 小出侗齋
      - 須賀精齋
    - 山本復齋
  - 羽黒養潜
    - 室鳩巣
  - 遊佐木齋
    - 佐久間洞巌
  - 鵜飼錬齋
    - 鵜飼稱齋
  - 淺井琳菴
    - 田邊晋齋
  - 川井東村
  - 五十嵐穆齋

- 服部栗齋
- 板倉震齋

- 三宅尚齋
  - 久米訂齋
    - 宇井默齋
      - 千手廉齋
  - 盤養齋
    - 中村習齋
  - 石王塞軒
    - 山田靜齋
  - 服部梅園
  - 山宮雪樓
    - 村士玉水（據手鑑定便覽）
  - 岩淵東山
  - 井澤灌園
  - 三木信成
  - 留守括嚢
  - 唐崎彥明
  - 村士淡齋
  - 多田東溪
  - 加々美櫻塢
    - 山縣大貳
  - 北澤遜齋
- 黑岩慈雲
- 梨木祐之
- 松岡玄達
- 大山葦水
- 友部氏興
- 植田成章
- 深井秋水
- 藤井懶齋
- 谷秦山

- 桑名松雲
  - 栗山潜鋒
- 佐藤直方
  - 天木時中
  - 跡部光海（又學二于絅齋尙齋一）
    - 岡田盤齋
  - 永井隱求
  - 稻葉迂齋
    - 稻葉默齋
      - 奧平栖遲菴
      - 手塚坦齋
    - 溝口浩齋
    - 村士玉水
      - 岡田寒泉
      - 服部栗齋
        - 賴杏坪
        - 宮原龍山
  - 野田剛齋
  - 三輪執齋（後入二于陽明學一）
  - 友部安崇
  - 菅野兼山
    - 新井白蛾
- 玉木葦齋
  - 谷川士清
  - 松岡仲良
    - 竹内式部
    - 谷川士清
  - 若林強齋

附錄の三

朱子學派生卒年表（西暦による）

	生	卒
藤原惺窩	一五六一	一六一九
吉田素菴	一五七〇	一六三二
三宅寄齋	一五八〇	一六四九
菅得菴	一五八一	一六二八
石川丈山	一五八三	一六七二
林羅山	一五八三	一六五七
松永尺五	一五九〇	一六五五
那波活所	一五九五	一六四八
谷時中	一五九八	一六四九
友松氏興	？	一六八〇

川井東村	一六〇一	一六七七
小倉三省	一六〇四	一六五四
野中兼山	一六〇五	一六六三
保科正之	一六一一	一六七二
山崎闇齋	一六一八	一六八二
林春齋	一六一八	一六八〇
木下順菴	一六二一	一六九八
雨森芳洲	一六二一	一七〇八
長澤潜軒	一六二一	一六七六
安東省菴	一六二二	一七〇一
林春德	一六二四	一六六一
谷一齋	一六二五	一六九五
米川操軒	一六二六	一六七八
藤井懶齋	?	?

徳川光圀	一六二八	一七〇〇
中村惕齋	一六二九	一七〇二
羽黒養潜	一六二九	一七〇二
貝原益軒	一六三〇	一七一四
後藤松軒	一六三二	一七一七
鵜飼錬齋	一六三三	一六九三
莊田琳菴	一六三九	一六七四
深井秋水	一六四二	一七二三
林鳳岡	一六四四	一七三二
佐藤直方	一六五〇	一七一九
淺見絅齋	一六五二	一七一一
安積澹泊	一六五六	一七三七
榊原篁洲	一六五六	一七〇六
新井白石	一六五七	一七二五

室鳩巢	一六五八	一七三四
南部南山	一六五八	一七一二
大高坂芝山	一六六〇	一七一三
三宅尙齋	一六六二	一七四一
西山西山	一六六二	一六八八
矢野拙齋	一六六二	一七三二
谷秦山	一六六三	一七一八
淺井琳菴	?	?
向井滄洲	一六六六	一七三一
服部寬齋	一六六七	一七二一
栗山錯鋒	一六七一	一七〇六
遊佐木齋	?	?
三宅觀瀾	一六七五	一七一二
鈴木貞齋	?	?

松浦霞沼	一六七六	一七二八
綾部絅齋	一六七六	一七五〇
菅野兼山	一六七八	一七四八
若林强齋	一六七九	一七二三
稻葉迂齋	一六八四	一七六〇
服部梅園	一六八六	一七五五
祇園南海	一六八七	一七六一
野田剛齋	一六九〇	一七六八
田邊晉齋	一六九二	一七七一
大地奚疑	一六九三	一七五二
岩淵東山	一六九六	一七七六
中村蘭林	一六九七	一七六一
唐崎彥明	?	?
伊東澹齋	一六九九	一七六四

五十嵐穆翁	一七〇〇	一七八一
石王塞軒	一七〇一	一七八〇
西依成齋	一七〇二	一七九七
小野鶴山	？	？
河口靜齋	一七〇三	一七五四
蟹養齋	一七〇五	一七七八
久米訂齋	？	？
竹內式部	一七一二	一七六七
新井白蛾	一七一五	一七九二
山縣大貳	一七二五	一七六七
中井竹山	一七三〇	一八〇四
稲葉默齋	一七三二	一七九九
村士玉水	一七三三	一七七六
柴野栗山	一七三四	一八〇七

西山拙齋	一七三五	一七九八
藪孤山	一七三五	一八〇二
西依墨山	一七四一	一七九八
立原翠軒	一七四四	一八二三
尾藤二洲	一七四五	一八一三
服部栗齋	一七四六	一八〇〇
賴春水	一七四六	一八一六
岡田寒泉	一七四七	一八一七
賴杏坪	一七五六	一八三四
林述齋	一七六八	一八四一
佐藤一齋	一七七二	一八五九
藤田幽谷	一七七四	一八二六
青山延于	一七七六	一八四三
會澤正志齋	一七八二	一八六三

安積艮齋	一七八五	一八六〇
德川齊昭	一八〇〇	一八六〇
青山延光	一八〇六	一八六九
藤田東湖	一八〇六	一八五五
元田東野	一八一八	一八九一
中村敬宇	一八三二	一八九一

附錄の四

孔子の人格に就いて（孔子祭典會講演）

今日は孔子の人格に付て御話を致す積りであります。何分孔子の人格は非常に偉大でありまして各方面から觀察することが出來るのであります。今日はその各方面から御話するといふことは迚も出來ないことであります。併しながらその人格の最も重要なる點と思ふところを一つ御話して諸君の御批評を願ひたいと思ふのであります。

孔子の人格は今日に至つて大に研究を値することであると考へます。何分孔子の人格を研究する人は甚だ少いのでありまして誠に遺憾に感ずる次第であります。併しながら今日の如く孔子祭典を行ひまして世の學者の注意を惹起しますならば、その中に段々孔子の人格を研究する人も出來やうかと竊かに希望して居ります。孔子は支那人中より出ました偉人であります。處が日清戰爭以來一體に支那を輕蔑する傾

きが生じて來まして孔子も併せて疎外するやうな風が多くなつたかと考へます。併しながら孔子といふ人は支那民族の專有物では無い。支那から出た偉人であつて支那の一小區域に限らるべき人物では無いのであります。是れは矢張り我々世界の人類中より出でたるところの一の最も靈なる人格であると考へます。矢張り佛陀や基督を一民族が私することの出來ない樣に孔子も世界人類中の一大人格である。是れが矢張り世界の人類を長く敎へて行く所の偉大なる一の人格であると考へます。斯かる偉人は決して一民族が私することは出來ませぬ。佛陀は印度から出ましたけれ共印度民族の範圍内に限らるべき人格では無い。廣く世界に敎訓を與へた所の傑出したる一大人格であります。基督も猶太に出ましたけれども、廣く歐米諸國の尊信する所となつて居ります。丁度佛陀や基督の如く孔子も矢張り我々人類の歷史に於て最も赫々の光を揚げて居るところの一大人格であると考へます。斯かる偉人は人間の歷史に澤山は無い。數へ來れば僅々數人ほかありませ

ぬ。その數人の偉人中に於て孔子も亦一種の特色があります。孔子は青年の模範として又教育家の模範として最も穩健にして適切なる人格であると考へます。孔子は他の偉人と違ひまして普通の學生が段々勉强して成上つたやうな所があります。孔子は別にえらい大家に生れたといふ譯ではありませぬ。何等の特別の助を得たといふ譯ではありませぬ。試に史記を見まするど「孔子貧且賤」とある。孔子自らも「吾少也賤」と斯う言つて居りまする樣に誠に貧賤の身から段々に勉强をして鍛上げて一大人格となつたのでありまして、別段奇蹟といふは無い。一の奇蹟だも無く、唯々普通の學生の段々鍛上げて遂に非常な偉人となつた有樣であります。その非常な偉人となることは容易で無いけれ共孔子は此段階を歷て上つて來たのであります。別に不思議と言ふは少しも無い。孔子は今日の所謂苦學生のやうなもので、誠に能く勉强をしたのでありますミーンスを充分持つたといふ譯では無い。固より不自由なる家庭に生まれて而も自分の父は早う歿くなりまして眞に零丁孤苦

の身を以て勉强して非常な人物になつたのであります。それから孔子は一體に圓滿であります。危險なるところが無い。非常な危いやうな埒外に出たやうな所が無い。誠に穩がであります。それが宗教家やその他の偉人と違ふ所であります。古今の偉人の事蹟を研究して見まずると災難に遭つたやうな人があります。ナカ〳〵危險な所を經て來た人が多い。併しながら古今の偉人はそれ〴〵その特色があつてさう云ふ危險な目に遭つた人は又その方面に於て非常な感化力がありますけれ共それは別として兎に角孔子は危險なとが無い。恐ろしいやうな危い所がありませぬ。唯々尋常の道を踏むで次第〳〵に大きくなつて來たのであります。から一體に人格が圓滿で疵が少いのであります。捜しても疵の見えない程に圓滿に見える人格であります。そこで四書の中にも中庸がありて中庸の德が說いてありますが。そればかりで無く、論語の中にも孔子は旣に中庸の德を說いて居ります。「中庸之爲」德也。其至矣乎。」といつてあります。孔子は道の兩極端を經ずして眞中を經て行きま

して、さうして非常な所までそれをやり上げた。その實例を後世に示したのでありまする殆ど苦學生のやうな有樣から段々〳〵鍛上げて非常な聖人即ち普通の人間以上靈的の人格とまでなつたので別段奇蹟といふは無く、唯々尋常の徑路を辿つてそこに到つたのでありまする行けば行かれるといふ手本を示したのは、後世の靑年又は敎育家に對して非常な恩惠であると思ひます。

孔子の人格が圓滿であるといふのはどう云ふ所から言ひまするかと言へば、人間の性質は一方に傾き易い所がありまする今日の心理學上から言へば我々は知情意の三方面を持つて居りまして此三方面が全く分離して居る譯ではないけれども三方面に分つて考へることが出來ます。さうして又倫理學上から言つても我々の良心は此三方面に働くものでありまする所が孔子の人格は此知情意の三方面から觀察して見まするると如何なる方面に於ても非常な所迄達して居つたといふことが見えるのでございます。そこで先づ知的方面からどれ程孔子が努力

發展して居たものであるかといふことを見て見ませう。知的方面から觀察して見まするると孔子は知識を磨くに幼少の時より晩年に至るまで寸毫も怠りは無い。絶間なく勉强努力して進んで行つた痕跡が見えるのであります。孔子は誰も是といふ極つた先生は無い。常の師なし。それでありますから聖人と言はれる程に人格を鍛上げたのは尋常でないといふ事が考へられる。人から導かれてさへもナカ〳〵出來ることで無いのに獨力で以てさう云ふ非常な所までやり上げたのであります。マア全く獨學でやり上げたものと考へられる。極く幼少の時は自分で當時の禮法を覺へる位のことでありましたが、十五歳の時から大に學問に興味を持つたものと見えまして「吾十有五而志于學」と論語に明かに記載してあります。その十五歳の時から絶えず努力勉强して進んで行きました。その一貫して向上する勢といふものはナカ〳〵尋常で無い。その尋常で無いものが無ければ斯かる偉大なる結果が起つて來やう筈が無いのであります。孔子は誰にでも機會があれば物事を尋ね

たのであります。所謂下問を耻ぢずといふ考があつたのみならず、實際それをやりました。況や先輩とも見る人には決して恐るゝ處なく問を發したのであります。例へば齊に在る時に齊の大師と音樂のことを話しました。さうして韶樂即ち舜の音樂を聞いたところが非常に優美であつたが爲に大師に就いてそれを學んだといふことがあります。又左傳の昭公十七年を見まするとＸ子といふ人が來まして色々な昔の歷史上の話をしたことがあります。さうすると孔子が忽ち此郯子に就いてそれを學んだといふことが見えて居ります。「仲尼聞レ之。見二於郯子一而學レ之。」とある。それから孔子が周に適いて禮を老子に問ふたことが史記の中に見えて居りますが、之に付ては色々な異說がありまするけれども、多分事實であつたらうと考へられます。老子といふやうな昔の事をよく知つて居る老人が周に居つたからして孔子がそこに行つて禮を尋ねたといふことは有りさうなことであります。他の方面を考へまするといふと孔子は何時でも機會があれば人に問レふことを耻ぢないのであります。さ

う云ふやうに自分の知識見聞を擴むることに於ては少しも怠りはなかつたのであります。それからして論語の中に散見して居る言葉を見ますといふと非常に勉强したことが見へます。例へば「不怨天。不尤人。下學而上達。知我者。其天乎。」とあるでせう。段々低い所から學んで次第に上に昇つて大成したといふ所が此處で見えます。何等の不思議も無い。それから「十室之邑。必有忠信如丘者焉。不如丘之好學也。」孔子は非常な謙遜な人であります。總ての事に於て謙遜なる心のあつた人でありましたが唯々此學を好むといふ一點に於ては謙遜して居らぬ。人に負けない、何人にも讓らないといふ口氣が見えるのであります。又「學如不及。猶恐失之。」斯う云ふ事が言つてあります。幾ら勉强しても迚も追付かない樣な感じがする。その上どうも學んだ所を失ふ氣遣が多いといふやうな趣意を述べたのでありまするが之に依つて考へるといふとナカ〳〵平素勉强して居られた所が見えるのでございます。又斯う云ふとも言つてあります。「君子食無求飽。居無求安。敏於事而愼於言。就有道而正焉。可謂

レ好レ學也已。此句を見ると食物であるとか又は居處であるとかさう云ふやうなことに氣を揉むやうな考は無かつたのであります。モウさう云ふ餘裕は無い。何か自分より優れた先輩であり、えらい所のある人であればその誰であるといふことは問はない。直ぐその人に就いて學ぶといふ樣な考であります。それから又斯う云ふことも見えます。「德之不レ修。學之不レ講。聞レ義不レ能レ徙。不善不レ能レ改。是吾憂也。」學德ともに磨き上げて休む時の無かつた精神は充分此句の中に現はれて居ります。又他の處に斯う云ふ事が言つてあります。「我非二生而知レ之者一。好レ古敏以求レ之者也。」或は聖人は生れながらに知る者であるなどゝ言つたものでありますけれ共孔子はナカ／＼自分は生れながら知つて居るやうな者で無い。只油斷なく古代の事を究明してさうして知識を求めて行き居るのであると申すので、何も奇蹟といふは無い。勉强の結果此に至つたのであると云ふことが明かであります。所が孔子は平素さう云ふ工合に努力して進む有樣でありまするが、晩年になつて益々壯んで年を取るに隨つて決

して志の撓むといふことが無い。その志益々壯である。そこが尋常の人と違ふところであります。年を取ると氣象が次第に衰へて何となく弱くなり行く者でありまするが孔子はさうで無い。愈々益々努力して進んで行く形跡が現はれて居ります。孔子は史記に據りますれば七十三歲まで生きて居ります。一說に七十二歲、又一說に七十四歲であります。姑く史記に據つて七十三と見ますと七十三歲まで休むことなきの努力であります。或處に斯う言つてあります「學道不倦。誨人不厭。發憤忘食。樂以忘憂。不知老之將至云爾。」是は大分年取つてからの事であります。是は孔子自ら自分の事を斯樣に形容して申しました。此「發憤忘食。樂以忘憂。」迚も尋常の人では出來ませぬ。食物を忘れる程發憤したのであります。又平生精神上愉快に感ずるところがあつたといふその痕跡が見えるのであります。如何程憂があつても我心の中に何となく愉快に感ずるところがあつたものでそれで以て憂を忘れることが出來た。年を取るといふとは氣が附かない。他にズッとえらい氣象が内に鬱勃として發

展して行き居るからであります。ナカ〲熱心が一方にあつたことが是で見えるのであります。さうして史記に據りまするど「晩而喜」易。云云讀易韋編三絶。」とある。此事に付て故根本先生は面白い說を立てゝ居られますが、その事は姑く措いて兎に角孔子が晩年易を大變に硏究したといふ事は是はモウ疑はれぬ事實であります。さうして易の解釋を附けた。彼十翼は悉く孔子の作であるか否やは疑問に屬すとしましても兎に角あの中に幾らか孔子の思想があるのであらうと思ひます。孔子が晩年に至つて易に趣味を懷いて大に硏究し初めたといふとは論語の中に斯う云ふ句のあるので分ります。「加二我數年一。五十以學」易。可三以無二大過一矣。」此五十といふことに付ても朱子などは說を立てゝ是は卒の間違であるといふことを言つて居ります。色々異說はあるが、それは今日の論で無い。兎に角孔子は晩年に易の如き支那の一種の哲學に趣味を懷いて硏究し初めた。それ以前哲學にはそれ程趣味はなかつたのであります。それで「未」知」生。焉知」死。」などゝ言つてあります。鬼神の樣な事は餘り言

はない。總て哲理に渉るやうな事は元來避けて來たのでありますけれ共晩年に至つてはそれで滿足が出來ない。大に宇宙の此哲理に頭を傾けて來たので易の繫辭を見ると論語に無い哲理が說いてあります。どうしても易の繫辭は孔子の筆であらうと思ふ。固よりあの中には色々後世文字の攙入があらうけれ共繫辭は大體に於て孔子の筆であらうと考へられます。さうして六經といふものは孔子の晩年の作である。孔子が大に社會の爲に經營したけれ共充分に志を遂げることが出來なかつたのでありますから晩年は專ら此六經を著はすことに從事しましてさうして之を後昆に傳へた次第であります。その十五歲から死する日に至るまで斷えざるの勉强努力であつたのであります。知識を磨くが爲には出來得る丈けの手段を取り、空しく歲月を費すなどゝいふ事は少しもなかつたのであります。

それから情的方面から見まするに斯う云ふ事があります。知的方面に於て大に發展した人が情に於て餘程缺乏して居ること抔は隨分ある

のであります。知はナカ〳〵高い所まで達して居つても情の非常に冷かであるといふ人が随分あります。冷淡冷酷といふことは免かれぬことがありますけれ共孔子は左樣に知的方面に努力して居りながら情といふものも亦能く發達して居りました。ナカ〳〵尋常でなかつたのであります。或場合に於ては餘程神經的では無いかと思はれるやうなこともあります。論語の鄉黨篇を見ると總ての小さな事にナカ〳〵鋭敏なる感じを持つて居られたのであります。さうして何か事があるとその顏色を變ずるなど〻いふ事が折々ある。例へば鄉黨篇を見ますると「有盛饌必變色而作。」人がタンと御馳走をした時に色を變じて起つ。又「迅雷風烈必變。」非常に風が吹いたり雷が鳴つたりする時に顏色を變ずる「過位色勃如也。」とか又は「勃如戰色」といふ樣にビク〳〵するやうな時もあつたといふ事でありまして、ナカ〳〵事に鋭く感ずる。ナカ〳〵feelingの力が尋常でなかつたのであります。それのみでは無く、又門弟子などの死んだ時には充分悲みを表はし慟哭して居ります。「顏淵死。子哭之慟。」

ナカ〳〵非常な嘆きでありました。尤も顏回は第一の弟子でありまして殊にそれが早死した場合であるから孔子が大に悲まれたといふのは當然の樣でありますが、一方に知的發展をなして一方に於て又左樣に情の優美なる所がある。即ち血あり涙ある人であつた。それから又斯う云ふ事が見えて居ります。定公十四年が孔子五十六でありますⅰ大司寇より攝相の事を行ふことゝなりました。殆んどマア今日で言へば宰相のやる樣な事を行はれたのであります。その時に喜色あり眞に喜ばれた。そこで門人が尋ねますには、「聞君子禍至不懼。福至不喜。」君子といふ者には大難が來たからと言つて懼れてはならぬ。又福が來たからと言つて喜んではならぬものであると斯う言つた。即ち孔子の喜んで居られるのを甚だ面白く無いと感じた。所が孔子は斯う言はれた。「有是言也。不曰樂其以貴下人乎。」自分は今は攝政の事を行つて居る。一國に於ては最も貴い地位に居るのである。その貴い位に居ると共に卑い人に謙遜ることが出來ることを自分は喜んで居る。それから孔子が仁を說き又

孝を説くといふものは皆情から來て居る。即ち人情を重んずる所から來て居りますからそれは言ふまでも無い事であります。それから孔子は又能く趣味を解した人であります。文學美術の味といふものを充分知つて居られた。知つて居られたのみならず、實にそれを樂んで又其或物は人に傳へることを努められたのであつた。是が亦普通の人のナカ〳〵及び難い所であります。知的方面に發達した人はナカ〳〵斯う云ふ方面には缺乏して居る者が多い。又道德の高い人であるといふと往々文學美術などゝいふ者を顧みないことがある。又宗教家などにはさう云ふのが隨分多うございます。昔から非常にえらい宗教家であつて文學美術などに於て興味索然として居る場合が少く無い。宗教家などに文學美術のことを一向言つて居らぬといふ者が少く無いのでありまするが、孔子は此方面には多大の趣味を持つてをつたのであります。論語の中に斯う云ふ事が見えます「志於道。據於德。依於仁。游於藝。」この「游於藝」といふことがナカ〳〵孔子の學問の良い處であります。唯々道德

といふ一方に拘泥して所謂道學先生といふ樣な工合に興味索然として居つたといふ譯では無い。藝に游ぶと言うて綽々然として餘裕があつたのであります。藝はマア六藝と此處で見て差支ありますまい。その中に、純文學で無いものもありますけれ共矢張文學美術がその中に這入つて居るものと見て差支ない。それから「小子何莫學夫詩」といふ樣に詩の研究を勸めて居ります。それのみならず孔子の編纂して後世に傳へました六經は唯々道德の書物ばかりで無い。歷史もあり文學もあるのであります。決して單調で無かつたといふことが見える。又大師の官であつて魯の國の有名な音樂師があつたものと見えます。その人に逢つた時に斯う言つて居られる。「樂其可知也。始作翕如也。從之純如也。皦如也。繹如也。以成。」是は論語の言葉であります。極めて簡單に言顯はしてありますが、詰り音樂の評論であります。當時の有名な魯の國の音樂師に對して自分は斯う思ふ、音樂といふものは斯う云ふ工合にやるもので あると評論された。それで音樂に明るい人であつたと考へられます。ナ

カ〱音樂の趣味を懷いて居られたことが分る。又斯う云ふ事があります。「子在齊聞韶。三月不知肉味。曰。不圖爲樂之至於斯也。」齊の國に居る時に韶は舜の音樂でありますが、それを聞いた所が三月肉の味を知らぬ。食物の味を忘れて仕舞つた。どう云ふ味であるか少しも覺えない。而も三ヶ月の長い間音樂に凝つて仕舞つた。そこで自分も亦嘆息して音樂といふものゝ愉快は此處まで至ることが出來るかと言はれた。非常に音樂に熱心であつてスッカリ他の事を忘れるまでに至つたのであります。又淮南子の主術訓に斯う云ふ事があります。「榮啓期一彈。而孔子三日樂。」榮啓期といふ音樂師が何か樂器を彈ずると孔子三日間も樂むとあります。又論語の中に「興於詩。立於禮。成於樂。」とある。此れに由つて之を觀れば孔子の學問の結末を附けるものは音樂であります。それから孔子は人の音樂を聞いて樂むばかりで無く、自分でも音樂をやられた。自分でも琴を彈ずることが出來た。又孔子擊磬といふことがある。磬といふ樂器を鳴して居られた。アレも稽古しなければ出來ない事であらう

と思はれます。それから又「取レ瑟而歌」といふことがあります。それを彈ずると同時に又歌つた。孔子が瑟を執つて歌はれたといふことは他の處にも見えます。例へば「孺悲欲レ見二孔子一。孔子辭以レ疾。將レ命者出レ戸。取レ瑟而歌。使二之聞一レ之。」といふ事が論語に見えて居る。孺悲といふ者が逢ひに來たけれ共少し逢はれない理由があつて孔子は病氣であると言つて逢はなかつた。が本當の病氣でも無いけれ共逢ふことが出來ないといふ事を知らしむる爲に瑟を執つて孔子が歌つた次第であります。又禮記の檀弓に斯う云ふことも見えます。「孔子既祥。五日彈レ瑟而不レ成レ聲。十日而成二笙歌一。」斯う云ふことが見えます。淮南子主術訓に「孔子學二鼓レ琴於師襄一。」此れに由つて之を觀れば、孔子の琴を習つた師匠があつたのであります。又孔子は左樣に瑟を彈し琴を鼓することが出來たのみならず、さう云ふ樂器を鳴らして歌うことも出來たのであります。論語の中に「子與レ人歌而善。必使レ反レ之。而後和レ之。」とある。歌の上手な人があればモウ一遍歌はして置いて次に自分で歌つたのであります。歌の一つもうたへるといふ樣なこ

とで決して無風流殺風景の人では無かつたのであります。それから門人等をして各志を述べさせた時に二三の門人が其志を述べたが皆孔子の氣に入りませぬ。最後に曾點が述べた。「莫春者。春服既成。冠者五六人。童子六七人。浴乎沂。風乎舞雩。詠而歸。」沂といふは多分温泉場でありませう。其温泉に這入り舞雩といふ所で涼い風にあてられて、詩でも吟じて歸つて來るといふ樣な此曾點の物に拘泥しない極めて粋な情態に孔子は寧ろ贊成したのでありまして、孔子は決して窮屈なる道學先生であるとか又は窮屈なる學究であるとかいふ樣な人では無かつた。却て綽々然として餘裕ある趣味多き人であつたのであります。

それから之を意志の方面から見まするに孔子の意志はナカ〳〵强大であります。意志力が餘程衆に優れて强大であつたことが見えます。先づ第一に孔子が幼少の時より最後に至るまで絶えず努力して已む事の無いといふのは意志の一貫して居る證據であります。それで其意志は決して尋常の意志で無かつたことゝ考へられます。孔子は平素言論

よりも實行を貴んで居られた。言葉の方は寧ろ訥であつたかと思はれる。餘り言葉は多く無い。始終行ひの方を先きにしたものと見える。その行ひを先きにしたといふのが意志の强い所であります。言葉丈け盛んでさうして行ひがそれに副はぬといふ事は孔子の非常に懼れたところであります。孔子は斯う云つて居ります。「予欲無言。天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。」自分は何も言はない積りである。物を言ふのは已むを得ずして言ふのである。斯う言はんばかりの言葉であります。又「君子耻其言。而過其行。」と斯うある。是も言葉ばかり仰山であるといふと實に恥しいことであるから行ひの方を先きにやる。言葉よりも行ひが過ぎる樣にして行くべきであると斯う考へた。又「古者言之不出。耻躬之不逮也。」昔の人が餘り仰々しく言葉を出さないといふのは何處から來るかといふと、自分の身の行ひがその言葉通りに行かないであらうといふ事を恐れるからである。それから又「以約失之者鮮矣。」といふやうな事がありまするのも同じ意味であります。約かに是は唯々金の儉約ばかり

で無い。一體に言葉でも何でも總て約かにやつて行けば失策は少い。成るべく約かにするが宜しい。斯う云ふ敎であります。又「君子欲訥於言而敏於行。」言葉の方は訥で宜しい。行ひの方は言葉よりも遥かに鋭くやらなければならぬ。斯う云ふ樣に述べてありまするので孔子の精神は言葉よりは行ひを先きにするにあるのです。それから又斯う云ふ事もあります。「君子之爲之。必可名。言之必可行。君子於其言。無所苟而已矣。」言ふ事は決して無駄になつてはならぬ。言ふことを愼まねばならぬ。畢竟その行ひと相待たなければならぬからの事である。その實行を期する爲にナカ〳〵强大なる意志が働いて居る。實際やつて行くといふことは强大なる意志を俟たざれば出來ぬものであります。それで言葉の多いことを忌み嫌つたのであります。そこで巧言令色といふものを戒めた。「巧言令色。鮮矣仁。」といふ言葉が論語の中に二ヶ所出て居つたかと思ひます。巧みに言葉を飾り巧みなる樣子を以て人に接するといふことは決して宜しく無い。其本心を問へば仁は殆ど無い。孔子は何處までも實行

の人であつて意志力のナカ〳〵强大であつたといふ事は是等の點で分ります。又孔子は非常な勇氣を持つて居られた。それは意志力の强大であつた一の證據であると考へられます。勇氣の點に於ては斯う云ふことを以て證すべきであります。「見義不爲。無勇也。」義といふ者の在る所には全力を捧げて進まぬければならぬ。躊躇してはならぬ。卽ち生命を賭してやるといふ考。さふ云ふ獻身的の考は孔子には充分あつたのでありまます。それで「志士仁人。無求生以害仁。有殺身以成仁。」斯う言つてあります。我々の身命よりは仁といふ樣なさう云ふ德の方が貴い。德の爲には如何なるものをも犧牲にして仕舞ふといふ考であります。德を害して身を全うするといふやうな考は寸毫も無い。斯う云ふ考であります。それから又「不憤不啓。不悱不發。」抔と云つてあるのでナカ〳〵勢のあることが見えますが、それは姑く措いて、宋の桓魋が孔子を害しやうとした。その時に孔子が言はれた言葉はナカ〳〵雄壯で、決して尋常で無い。モウ此處に至つては普通の人の考を超越して居つたのであります。「天生

德於予。桓魋其如予何。」モウ運命を天に任せて懼るゝなしといふ勇氣。それは普通の人の勇氣以上に迴かに出でゝ居つたのであります。さうして又自ら大抱負を懷いて居つたといふことも見えるのであります。匡人が孔子を捕へた時に弟子達は懼れてビックリ致しました。「弟子懼」と史記の世家に出て居ります。所が孔子は懼るゝ所では無い。ナカ〳〵さう云ふ有樣では無い。斯かる時に孔子と弟子との違ひが明かに見えて來る。孔子は「天之將喪斯文也。後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也。匡人其如予何。」斯文といふのは此時の意味では道といふのと殆ど同じであります。希臘の言葉で申せば、ロゴスのやうなものであります。人間社會に古今を貫いて傳はつて行き居る原理であります。ロゴスといふ言葉に殆ど當るのであります。斯文といふものを天が喪さない以上は匡人が自分をどうする事も出來ない。天が斯文を喪すならば自分が斯文に與る筈がない。天が斯文を喪さない間は匡人がどうしやうと言つてもどうすることも出來ない。一に天に任せて行くといふその抱負の大

なるその意志の壯なることナカ〲尋常では無いのであります。所がその氣象といふものは孔子の一生を貫いて居ります。一時の事ぢや無い。孔子川上の嘆に斯うある。「逝者如斯夫。不舍晝夜。」川の水が滔々と流れて居るのを見て深く感じた。これを宋儒は道の流行として說いて居りますが、さう云ふ意味ではない。世の中の變遷して行くのは川の絕間なく流れて行くやうな有樣である。そこに深く感じたものと見える。ナカ〲人生の變遷暫くも止む時なきの有樣は川の水の流れるやうな有樣である。ナカ〲油斷は出來ない。絕間なく勉强努力して行かぬければならぬといふ感じがあつたものであります。孔子の一生の事蹟を考へて見ると此點に於て孔子も深く感じたものであらうと思ふ。孔子が晩年に至つて愈々壯んであつたことは、易の象に、「天行健。君子以自彊不息」とあるので分是る。れは孔子の晩年の精神であります。どうも此天地の運行といふものはナカ〲休む時は無い有樣であります。そこで君子といふ者は自から彊めて矢張り天地の運行と共に進んで行かぬけれ

ばならぬ、と云ふ非常に壯大なる思想であります。
斯様に考へて見ると孔子の頭腦中には心理的三方面が共同して調和して働いて居つたのであります。即ち知的方面、情的方面、意的方面といふ三方面が一様に働いたので一様に非常な發展をなして孔子の如き偉大なる人格を作り出した次第であります。此知情意の三方面が調和して居るといふことは是はマア普通の場合に在つて大事であります。片寄つてはいかぬ。知が發達しても情が足らぬといふのは矢張り精神上の片輪であります。又知が幾らあつてもそれを決行して行く意が欠乏して居ると薄志弱行であつて何事も出來ない。そこで知情意の三つのものが揃はなければいかぬ。三つ揃うて圓滿に發達せぬければならぬのであります。完人とならうといふにはどうしてもさうである。併ながらその知情意の三つが圓滿に揃うても平凡に終る恐がある。どうも普通の人に於て此三つが揃うた丈けでは極めて平凡だ。普通の者では寧ろ知か意かどつちかズッとも拔けた方がましである。例へば、情は餘

程缺乏して居つて隨分冷淡であるけれ共、知が多いとか意が強いとかいふその方で世の中に傑出する。何か一方面に於て傑出して來るといふと片輪であるけれ共ナカ〳〵棄てられない人物となつて來るのであります。普通の者でも三つが圓滿に揃うてズッとヅ拔けて進んで來れば遂に孔子の樣なものになる。けれども或程度に止まれば平凡だ。片輪は決して我々人間の理想では無いが已むを得ず片輪になつて居る。どうも三つのものを圓滿に揃へて偉大なるところまでやつて行けぬならば寧ろどつちか一方にヅ拔けてやつて行く。それでさう云ふ場合には一方面にはなか〳〵も拔けて居るけれ共、他方面には非常な弱點がある。誰でも缺點があるといふのはそれであります。孔子の人格を見ると何處か果して孔子の缺點といふ所でありませうか。私は色々考へて見たが孔子の缺點を擧げるといふことは餘程困難であります。孔子でも絕對的に完全なりといふことは無論言へませぬ。けれ共孔子は人間中最も缺點の少ない人でありますず。是が孔子のいけない點だといふ著し

い所を擧げて言ふことは餘程六つかしい。さう云ふ樣な譯で、孔子はあらゆる方面を揃へてズッとヅ拔けて大きくなつた。即ち平凡が非凡になつた。平凡の非凡。そこが一番六つかしい。マア孔子の經て來た所の道筋は能く分つて居ります。貧賤なる學生からやり上げた。何でも無い樣であるがそれならばどの學生でも孔子の樣になれる。なれる譯だがさてやつて見るとナカ〳〵大變なものであります。そこで益々孔子の偉大な所が分る。大變な六つかしい所をズッと高い所までやつた。併しナカ〳〵入り易い所があるからして誰でもやればやれる筈であります。困難中の困難な知的情的意的の三方面を圓滿に揃へてさうしても拔けて大きくなる事でありますそれはどうも困難な事である。それがやり遂げられるといふことの實例を孔子は後昆に示したのであります。そこで孔子はその生存中にどう云ふ工合に人が見たであらうか、後世の人は段々想像して餘り大きくなして居ります。それだから後の人のは姑く措いて孔子の生存中に人が孔子をどう見たかといふと色々に

見て居りまするが、門人が見た孔子は非常な者である。非常な人格と見た。論語の中にアチコチ門人の言つたことがあります。例へば子貢が斯う云ふ事を言つた。「仲尼日月也。無得而踰焉。」云云。孔子は日や月のやうな者でそれ以上に出ることはどうしても出來ない。子貢は孔門の弟子としては優れた人であるけれ共其目から見てもどうしても孔子の人格は、日月の如く見えた。親しく孔子に接して居る人にさう見えた。又子貢は斯う言つて居ります。「夫子之不可及也。猶天之不可階而升也。」孔子に追附くことの出來ぬのは天に梯して升ることの出來ないやうなもので是れは到底駄目であると斷念して仕舞つた。所が子貢等は姑く措きまして一番孔子に近かつたのは顏回であります。顏回は正直な人だから非常に勉强して孔子の眞似をした。孔子の通りにやらうと試みた。けれども早く頭の毛が白くなつて早死して仕舞ひました。其顏回が孔子を形容した言葉は最も注意すべきであります。「顏淵喟然嘆曰。仰之彌高。鑽之彌堅。瞻之在前。忽焉在後。」どうも孔子は高い人であると思ふて仰いで

見ると彌高く見えて、何處まで聳えて居るか分らぬ。又孔子を物に喩へて及物で鑽るやうにして見ると、鑽れば鑽る程堅い。迚も鑽れるやうなもので無い。又之を見て前に居るかと思うて之を眞似すれば却て後ろの方に在る、又後ろに在るかと思ふと忽ち又前に在るといふ風で迚も端倪すべからざる人格であります。顏回は餘程孔子に近い所があつたと見えて孔子は屡々顏回を批評してさう云ふ意味を言ひ表はして居る。顏回は一定の時期間殆ど過ちなくして聖人の境遇に在るかと思ふけれ共到底聖人には及ばぬ。けれ共孔子の弟子中一番孔子に近かつた者は此顏回に相違ない。それで此顏回の批評は諸弟子の批評中でも最も價のある批評であります。顏回から見ても孔子は迚も寄附かれない。實に端倪すべからざる人格である。その筈だ孔子は絶えず努力して進み居るから一生涯孔子を捉まへることは出來ない。一生涯のみならず孔子は無限に發達して行く有樣である。それで迚も追附かれない。孔子に較ぶれば、顏回などは眇たる匹夫であります。そこになると迚も比較に

ならぬ。

孔子はさう云ふ人でありましたが併し非常に謙遜。……一方に於て孔子の大抱負の在る所が見えます。即ち一代の道を以て自ら任じ、一代の文運を以て自ら任ずるといふ大抱負があつた。さう云ふ大抱負があると同時に非常に謙遜であつたことが見えます。例へば孔子は「文莫吾猶人也。躬行君子。則吾未之有得。」君子と云ふ程に自分は未だ實行が出來て居らぬ。自分は君子の境遇まで達して居らぬと斯樣に謙遜して居られる。況や聖人などゝいふことは尙更謙遜して居られる。「若聖與仁。則吾豈敢。」聖人と仁を行ふといふことは到底我等の及ぶところでは無いと言つて居られます。此外謙遜して居られる言葉を擧げましたならば幾らもありますがそれは姑く措きまして論語の中に孔子を形容して「溫良恭謙讓」といふ五字を用ゐて居る。此五字は能く孔子の人格を形容したものと言つて差支ありませぬ。其謙讓といふ最後の二字は無かるべからざる文字であります。一方に大抱負がありますけれ共決して傲慢な

る人では無い。孔子の人格は概略今御話した積りでありますが、併し最後に少し附け加へて申上げて置かねければならぬ。孔子の人格は偉大であつたが孔子の感化力といふものも亦非常なんである。孔子は三千人の弟子が有つたと史記にあります。三千は成數を擧げた譯でありませうけれ共大勢あつたに違ひない。その中の七十人ばかりは最も優れて居りましたもので隨分マア當時に在つては弟子が多かつた方でありますが。併ながらその弟子といふ者は皆孔子の感化を受けたことが甚しかつたのでありますから到底孔子の弟子は獨立の思想を述べることは出來ない。自分の行きたい道を行くことは出來ない。又中には隨分粗暴な人も居つた。例へば子路などといふ樣な粗暴なことをやり兼ねまじき人が居つた。子路はナカ〳〵膂力もあり、或時は怒つたこともあるけれ共、孔子に逢つてはどうも仕方が無い。孔子の弟子は皆孔子風に感化されておとなしくなつた。そこで獨立の思想を述べて世に現はれて來るといふことは出來ない。皆孔子の範圍內にスツカリ薰陶されて

仕舞つた。薫陶が餘りに能く行屆いたといふ程行渉りました。それで孔子の門下には自分の思想を大に鼓吹して出るなどといふすばらしい勢ひの者は出て居らぬ。顏回と雖も唯々論語の中にアチコチ其言つたことが現れて居る位でア丶云ふ斷片的の訓言が諸處にある位でありまず。決して之といふ主張は無い。皆孔子の眞似であります。餘りに孔子に感化せられて仕舞つた。それでソクラテースに比べて考へると大變違ひます。ソクラテースの弟子は思ひ〳〵に頭角を露はして來た。色々な哲學派が出來て來ました。孔子の後にも學派は出來たけれ共ソクラテースの後に出た學派など丶は餘程違ふ。此處に抑々西洋と東洋との學問の違ひが萠して居る。孔子の敎は其後子思と孟子とを得たので大に後世に勢力を發展した次第であります。

孔子の孫に當る子思が中庸を著はし、それから孔子より百年を隔て丶子思の系統を傳へた孟子が孔子の學問を繼續して主張した。それで子思と孟子を得て孔子の學問が一層勢力を發展した次第であります。所

が孟子でも孔子より百年を隔てゝ居つたからアレ丈けになつたので孔子に逢つたならば「軻也非爾所及也。」と一言の下に斥けられたに違ひない。孔子は言に訥にして行に敏ならんを欲するのでありますから孟子の樣に盛んな議論をして居つたら忽ち一喝されて小さくなつて仕舞ふでありませう。孔子はナカ〳〵强い言葉を用ゐて門弟子を批評して居られます。「柴也愚。參也魯。師也辟。由也喭。」といふ樣に一言で以て酷評を下したのであります。それに對して誰も何とも言は無い。どうも孔子の道德の盛んなる、その人格の大なるが爲に何とも言ひ樣が無い。單に敬服するより外無い。孟子は百年を隔てゝ孔子の叱を受けることが無いから氣隨氣儘に大氣焔を吐いた。けれ共それは無る可らざる者であります。孟子が獨り孔子の學派として大に氣焔を揚げたのであります。彼の著書が後に至つて四書の中に加へられたといふ事は非常な光榮である。又孔子の敎を發揚する爲にもなつたのであります。

孔子に付て考へまするといふと、まだ色々御話したい事もありまする

けれ共餘り長くなりますからもう御話をしませぬが孔子は第一是まで述べました所でも分りますする樣にどうしても、世界の偉人中に於て敎育家の模範として最も傷の少い人ぢや無いかと思ふ。先刻加藤さんが孔子をソクラテースに比較なすつた樣であります。大體加藤博士は孔子に付て穩健なる說を述べられましたが、ソクラテースと比べてもソクラテースの方はどうもナカ〳〵主角が多い。ソクラテースはナカナカ議論で以て人をやり込めた人であります。市場へ行つて誰でも捕まへて議論をして、何處迄も窮追した。それで怨を買いました。孔子はさう云ふ事はやらぬ。孔子は誠に中庸を得て居る。孔子の門下にあつては皆安んじて樂んで學に就くことが出來る。極端まで窮追して精神上殺さずんば止まずと云ふところまで行かない。ナカ〳〵綽々然として餘裕を存して春風の如くに薰陶して行くところ實に尋常ならざる處がありました。さうして多くの古今の偉人は非常な並外づれたことをして居る。例へば此世の中の血緣を絕つて出家するとか、或は毒を服ませら

れて牢獄の内に死んだとか、或は磔殺されて非命に斃れたとかいふ事があるが孔子にはさう云ふ事はない。孔子は一生が誠に穩かで一家の父として而も妻もあり、子もあり、それに子思の如き優れた孫が出來た。決して世の中を忘れた人で無い。世の中を脫離した人で無い。世の中に居つて普通の人より逈に脫出して居りながら矢張世の中の爲に働いてさうして千載道德の師となつた。さう云ふ人を求めると非常に少い。マア孔子の如く偉大なる人物で以てさう圓滿に近いものはどうもチヨツと捜し當てることが出來ませぬ。マア孔子は最も圓滿に近い人で世界の人間の歷史に於て、聖人とも言はれる程傑出したる人格であります。眞に敎育家の模範でありますす。今日の學校の敎員はその人格を模範とするが最も宜い。敎員は妻子を棄てゝ山に這入る方が宜しいといふのぢや無い。立派に此世の中を經營して行くが宜しい。孔子が手本を示して居る。どうも其點から言ふと孔子はナカ〳〵立派な手本を示したと言はぬければならぬ。

それで孔子の敎に依つて起つて來ました儒敎といふものは先刻も加藤博士が宗敎で無いと言はれました。固より宗敎とは違つて居ります。併ながら形は宗敎のやうな形をなして居ります。是はマア德敎と言つたならば宜しうございませう。孔子の此道德の敎から大なる德敎といふものが支那朝鮮日本その他の國土に起つて來たのであります。斯う云ふ德敎といふものはどうも廣い世界の歷史に無い樣であります。どうも斯かるものは無い。カントの哲學からカント一派の學派が起つて居りますけれ共德敎といふのとは違ふ。それは哲學派であります。その哲學派の中には倫理學者もありますけれ共儒敎のやうな工合に發達して來て居るのでは無い。矢張り哲學であります。哲學は又孔子の德敎とは自ら區別せぬければならぬ。孔子は全く一の大なる宗敎の如き德敎を產み出した。さう云ふものは何處にも無い。

尙進んで考へて見ますと斯う云ふ事があると思ふ。今日の世の中はマア非常な變動を來して居りまするが、殊に大なる變動の一つは東西洋

の文明が次第に接觸して融合調和しやうとして居る。さうして幾らか融合調和されつゝある。其融合調和を日露戰爭が更に大に促したやうであります。アレから又一生面を開いて此世界の文明國の種々なる思想を渾一して文明社會全體の統一的思想を作らうとして居る樣であります。所が此間に於て我々の注目すべきものが一つあると考へる。それは彼日露戰爭の際に我邦が戰爭の方に於て赫々の功を奏したばかりで無くして戰爭の副產物として日本民族の實に濶大なる人道の精神を世界に發揚したのであります。その世界に發揚した濶大なる人道の精神は何處から來たかと言ふと實は從來日本に伏在して居る者が斯かる機會を經て顯現したのである。斯かる人間の行ひに關することは必ずしも宗敎の名に拘はらず、必ずしもそれ以上のものによつて勝敗が決せらるゝのである。即ち露國が基督敎國を標榜して日本を攻めたにも拘らず、日本が勝つた。日本は此正義人道をかざして戰を宣して敵國の基督敎を標榜して來るに拘らず我の方が勝を制した。その宗敎の

名といふものは抑々末である。キシネフに於て露國の基督教徒が猶太人を虐殺した時にそれが基督教徒たるの故を以て之を寛恕する譯にはいかぬ。基督教徒であらうが、何であらうが、猶太人を虐殺するといふ様な斯かる人道に反したことは矢張り世界の人類が均しく非難する所であります。又亞米利加のカリフォルニヤ人が日本人を虐待するやうな事があれば矢張り人道が許さぬ。その一局部の利害の爲に人道を曲げる譯にはいかぬ。それが基督教徒の所爲であると言つて之を寛恕する譯にはいかぬ。佛教徒が如何に高尚なる哲理を持つて居らうが今日の人道に適はない事をすれば矢張り非難を免かれない。さう云ふ工合に如何なる宗教であらうが何であらうが、その名目に拘らない。それ以上に人間の目的がある。人道は一宗一教の私すべきもので無い。總ての人類に共通すべき人道は東西洋の文明の融合調合される間に發展して來居ると思ふ。その實を言へば我は何宗何教を奉じて居るから正しいとかいふ事は無い。歸する所は其何宗何教に拘らずその實行して

居るところが人類全體の目的に合して居るや否といふ事實がその名目よりも逈かに貴いものであると考へます。

所が孔子の仁といふものは今日の人道の考に合して居る。孔子の仁は今の如何なる特殊の宗敎宗派よりも以上に出て居るものであります。

そこで此講堂でありますが、此高等商業學校の學生が精神上に關する說を聽きたいといふので、村上專精、海老名彈正二氏と私と三人此處で演說したことがあります。其時私は斯う云ふ事を言ひました。佛敎と基督敎とは譬へば餅と酒のやうなものだ。佛敎が餅であれば基督敎は酒である。餅を喫べたい者は村上さんの所へ行つたら宜からう。酒の好きな者は海老名さんの所へ行つたら宜からう。それは勝手である。但此人間の守るべき日常の道德といふものは日本で言へば御飯のやうな物である。是は每日無かる可らざるものであると斯う言ひました。それで今日の日本の敎育に照し合はせると、孔子の敎が大なる關係を持つて居る。孔子の說かれた敎といふものは今日から見れば勿論加藤博士の

言はれた樣に完全無缺といふやうなことは無い。それは孔子も充分に知つて居られたので「後生可ㇾ畏」と言はれた。若しも後世の人が時勢が變つて居るのに矢張り孔子の說いた通りに說いたならばそれは畏る可きぢや無い。「後生不ㇾ足ㇾ畏。」だけれ共時勢が次第に變つて行くのみならず。「逝者如ㇾ斯夫。不ㇾ舍二晝夜一。」ズン〳〵此世の中は變遷して行き居る。先き〳〵を見ると如何なることになるやら分らぬ。それで「後生可ㇾ畏。」の嘆がある次第であります。孔子も固より今日に在ればその時の樣な事は說かない筈だ。さうして易の繫辭に變通と云ふことがある。人は變通を知らなければ行かぬ。時勢境遇が變ればその變つた時勢境遇に適應する樣に德敎を立てゝ來なければならぬ。易の繫辭に所謂變通はそれを意味して居るのであります。處が今日では日本の敎育界の道德といふものは敎育勅語に依つて大方針が示されてありますが、それは孔子の德敎と親密なる關係を持つて居ります。孔子が說いた通りでは無いけれ共孔子のやり方と餘程似た所があるのであります。それで孔子を祭る

といふ事は日本の教育上重大な意味を持つて居る。それで今日でも斯う云ふ事があります。歐羅巴の形勢を見るに教育は次第に宗教の關係を離れて來居る。即ち英國で見まするど教育法案が出て屢々教育を宗教の手から離すことを試みて居る。未だ充分に成功しないけれ共いつかは是が成功するに違いない。又佛蘭西の如きは疾くに宗教を離れた德育を施して居りますが、尚カトリックの坊さんが干涉して居る學校がありましたが是等の學校も又坊さんの手から離すことを試みて已に成功したのであります。さう云ふ傾きはその他の歐羅巴の諸國にも餘程あるので丁度先月でありました。佛蘭西のヴアレットと云ふ人が手紙をよこして、メルキユリーといふ雜誌を發行すると云ふことであるが、それは斯かる思想の傾向を代表するものであるさうであります。さう云ふ工合に歐米、マア重もに歐羅巴では教育を宗教の手から離す傾向が起つて來て居る。それで全體の社會の有樣がセキユラリゼーションをやつて世間に近寄つて來た。それは獨り教育のみでは無い。總ての事

が古代の宗教の關係を離れ、殊に教派の關係を離れてさうして發展して行く有樣が見ゆるのであります。教育も矢張り全體の潮流と伴つて次第に寺院からして獨立する傾きがあります。その上に又近世に至つては歐米諸國に倫理運動といふ者が起つて居ります。即ちエーチッセベヴェーグングといふのであります。倫理を以て宗教に代る樣な地位を取つて居るものであります。さう云ふ倫理運動なども歐米諸國に在るのであります。倫理運動の精神と孔子の教といふものは大變似たものであります。倫理運動も德教を立つる爲めの運動でありまするが、孔子はさう云ふ運動に先つて二千四百餘年前に既に德教を開いたのであります。それで此支那日本に限らず總て東洋諸國は他の宗教もあるけれ共斯う云ふ德教に對して長い間の習慣を作つて來たのでありまず。それで今日並に今日以後の日本の教育といふものは大體孔子の人格といふものが教育家の手本となるであらう。教育家の手本としては最も完全に近いものであると考へます。固より其他の古今の偉人とい

ふものも矢張り思ひ〳〵の手本として差支ない。總ての偉人傑士の長所を學んでも差支ない。又誰にもそれを勸めるのでありますするが、靑年の爲に又敎育家の爲に孔子は最も模倣し易い手本を示したと考へまするから聊か今日此所感を述べて置く次第であります。（拍手）

（明治四十年四月二十八日）

前乎我者。千古萬古。後乎我者。千世萬世。假令我保壽百年。亦一呼吸間耳。今幸生爲人。庶幾成爲人而終。斯已矣。本願在此。

佐藤一齋

附錄の五

儒教の長處短處（哲學會講演）

私は今日儒教の長處短處といふ事を演題として演説をする積りであります。初、宗教と德教と云ふ題にして置きましたが私は矢張り儒教の長處短處を神髓骨子として宗教と德教の關係を述ぶる積りでありましたからアヽ云ふ題では少し私の趣意が分り兼ぬると思うて後から斯う云ふ風に演題を變更いたしました。此演題を擇びました趣意を劈頭第一に述べて置きたいのであります。それは近來儒教復活論を唱へる人が往々有りまするからして其儒教といふものは何う云うものであるか、私の研究した立場からして御話をしようと思ふのであります。

儒教復活論といふものがどうして我日本に於て近頃唱へられて來たのか、それを考へて見ました所が種々なる原因が有るやうでありま

す。是は全く人に依つて違ひますので或人は子供の時に經書などを讀んで置いたのが久しくさう云ふ事はモウ打忘れて仕舞つて居つた所が近頃になつてどうも舊との經書が面白い樣になり、丁度鄕里を久しく離れて東京などに來て居る者がどうやら鄕里にマ一遍歸つて見たいといふやうな感じを生ずるのと同じ譯で、幼さなき時に大學中庸論語などを讀んで居つたのでマ一遍そこに立返つて見たいといふ感じの人が有る樣である。さう云ふ人が儒敎復活論を唱へて居るとがあります。是は確かに其人がありますが名は姑く御預りに致して置きます。又中には斯う云ふ考の人が有ります、敎育勅語が日本の敎育の大方針となつて貴ばれて居るが敎育勅語丈けでは何だか物足らぬ。何か敎育勅語の根柢ともなるべき樣なモ少し廣汎なる原理と言ふか、敎理と言ふか、さう云ふものが必要であるといふ事からして丁度それには儒敎が天を說いて居るからアレを持つて來れば勅語にも相戻らぬ。勅語の足らざる所を補充して行くのに非常に都合が好いといふ

やうな考で儒教復活を唱へて居る人もあります。又中には單に古典を貴ぶ精神からして經書を大に讀まぬければならぬ。今日の青年は經書を讀まない。どうか今日は儒教を復活させて青年に古典を讀む習慣を附けさせたいといふ樣な考から儒教復活を唱へて居る人もあります。此場合には古典崇拜の念が主となつて居ります。それから又斯う云ふ人があります。どうも佛教だの基督教だのといふ宗教がありまするけれ共亦宗教に賴らないと云ふ考の人がある。さう云ふ考の人は佛教にも基督教にも賴らないけれ共何か矢張り據ろが無くては寂しくて困るからして、それには丁度儒教といふ者があるから之に賴らうと斯う云ふ考。此考の人に又二通りある。元來宗教なんといふものは少しも取らないで、宗教は無用だけれ共儒教の樣な德教は大事なものである、儒教は立てゝ置くが宜いと言つて儒教復活論を唱へて居る人が有ります。モウ一つの種類は元來佛教若くは基督教の樣な宗教を信じて居つた人だけれ共其宗教心は次第に冷却して仕舞

つてもう宗教に立返るやうな考が無い。宗教は嫌になつて變化して仕舞つた。それで茲に唯一の賴るべきものは儒教である、と云ふ考を起して儒教復活論を唱へて居るのであります。甚だしきは以前牧師をして盛んに說教をして居つたやうな人が今は儒教復活論を唱へて居る。實に變れば變る世の中だと思ひます。色々私は考へて見ましたが、此四つの動機が有つてさうして此儒教復活論といふものが唱へられて居る樣であります。

付きましては此儒教といふものはどう云ふものであるか、それを先づ明かにせぬければなりませぬが何分儒教のことをさう今日私が此處で詳しく御話することも出來ませぬのであります。唯〻茲に儒教といふものはどう云ふものであるかと云ふ事を始に簡單に述べぬと先きの長處短處が辨せられませぬから極く簡單に述べて置きませうが、儒教といふことは極く漠然たる言葉で儒教は何であるかといふと其答は決して一言には出來ないことになつて居ります。矢張り基督

教でもそれが何であるといふことは決して一言ではナカ〳〵答へ難いものである。佛教でもその通りであります。そこで儒教も矢張りその通りで儒教は何であるかといふとチョト簡單に答へることは出來ない。儒といふとは天地人に通ずる之を儒と謂ふなどゝ言つて漢の頃の人が定義を下しました。甚だ漠とした定義でありまするがさう云ふ事を言つて居る者もあります。儒といふことは詰り支那ではまあ學者の事であると極く平たく解釋して置いて宜からうと思ひますが併し學者と言つても色々ありますので、儒教は支那の或種類の學者丈けに附けた名であります。然らばどう云ふ種類の學者を言つたかといふと是は誰でも孔子の學説を奉じて居る人々であると斯う云ふ考が附くでありませう。成程それに相違ないけれ共それでも未だ儒教といふ意味は盡きて居らぬ。孔子はどう言つて居られるか、述而不作。信而好古。とある。矢張り昔から在り來つた教を自分が紹いで居るといふ考でありますので、又孔子の系統を紹いで行つた人は孔子の

教を紹いで段々先きへ行つたのである。どれが儒教であるかといふと餘程それは言い惡いのであります。併ながら儒教といふ者は支那の古來から發達して來た德教。その德教は主として孔子に依つて建設されたのでありますけれ共孔子が全く一人で作り出した者ぢや無い。孔子の創意に出でたとは言へない。孔子は昔から在り來つた者を傳へた。勿論自分がそれに餘程附加へた處があるとは思はれますけれ共全く自分の一家の見解といふやうな考では無いのであります。述而不作の意味は何處までもある。どう云ふ人の教を傳へたかといふと堯舜禹湯文武周公といふのが孔子の教の本づく所でありますす。堯舜より前にも支那に帝王は有りましたけれ共それらの人は孔子の餘り尊崇する所で無い。それでありまするからしてそれらの人は論語の中に一ヶ所も出て來ませぬ。例へば伏羲神農、黃帝といふやうな人は堯舜の前にありますけれ共一ヶ所も論語の中に出て來ませぬ。大學中庸孟子抔にも殆ど出ませせぬ。神農といふとは一ヶ所孟子

の中に見えますけれ共別段神農の教を引用した譯でも無い。重もに堯舜禹湯文武周公を稱賛して悉く之を尊崇して居ります。隨つて孔子の教を紹いだ人、例へば、孟子の如きも矢張りさう云ふ人を尊崇しました。さうして教は矢張り堯舜の教である。堯舜の教が段々傳はつて孔子に至つて大成したのであります。孔子がそれを大成して門弟子に傳へました。門弟子の中で重もに孔子の教を翼賛して擴げたものが四人あります。孔子自ら左樣に認めた弟子が四人あります。それは子貢が一人、子路が一人、子張が一人、モウ一人は顏回、この四人が孔子の教を翼賛して大に發展を助けた。そこで孔子は此四人を自分の四友と言つて此四人の助を受けたことを孔子自ら述べて居る。漢の伏勝が尚書大傳に出て居ります。顏回は孔子の弟子中で德行第一であつた。それで能く孔門の諸弟子を親和させたのである。それから子貢といふ人は論語にも言語には宰我子貢とあるやうに辯舌の達者な人でありました。此人が孔子の德をアチコチ吹聽して廻はつた。

游說に長けた人であります。殆ど蘇秦張儀の如き人でありましてナカ／＼辯舌が達者であつた。それから子張といふ人は禮義に長じて居つた人で是は人が孔子に逢ひに來れば孔子が禮義正しい上に更に子張なるものがその間に立つて一層威儀を形づくつたのであります。人が來てもナカ／＼禮義正しくして秩序を紊さぬ樣に努めたのは子張の力に依る。即ち大いに孔子の威嚴を高めるに與つて力あつた人であります。子路と云ふ人は壯士のやうな人で孔子の多くの門弟中一番腕力のあつた人であります。子路は孔子と雖も直言憚らぬと云ふやうなことが有つた位であります。それはどうも度々であります。子路が一番直言憚らずして孔子に向つて何や角や言つて居る。又孔子もそれに依つて大に啓發されて子路の言つたのを採用したこともある。又採用しないで一言の下に子路を斥けたこともある。或時子路が政を問うた時に必也正レ名乎と孔子が言つたことがある。さうした所が子路が言ふに有レ是哉、子之迂也。奚其正。さう云ふ迂濶な事を先生

仰しやつちやいけませぬ、名なんぞ正して居つちや間に合はぬと言つた所が、孔子は甚だ強い言葉を以て答へて曰く、野哉由也。君子於其所不知。蓋闕如也。鄙しい性質の者である。さう云ふ知らない事を言うてはいかぬ、知らない事は知らぬとして默つて居るべきであると言つて一言の下に斥けて居ります。矢張り孔子の言はれたのは意味がありますす。名を正すなんどといふのは何でも無い樣な事でありますが、その時の國情に照すといふと大に意味が有ることであつた。さう云ふ工合に子路といふ人は構はずやつて居る。陳蔡の間に孔子が大に困難した時も子路が頻に孔子に詰問をしたことがあります。その時に顏回は食物が無いから默つて大人しく草を拾うて居つた。孔子は琴を彈じて居られたといふことであります。處がどうも食物が無くて堪へられぬ樣になつた。あの時論語にどう事ふ事が書いてありますかといふと子路は孔子に向つて君子亦有窮乎と言つた。他の人は決して言はぬ。子路は始終斯う云ふ事を言ふ。君子のやうな人でも斯う云ふ

阨に困ることがありますかといふ質問をして居る。そこで孔子の答に君子だつても困ることはある。君子は尙更困る。何故ならば君子は道を行はんが爲にはどんな艱難でも經て行かぬければならぬから尙更困るが小人窮斯濫矣であつて小人は窮すると亂暴をやる、泥坊などをやる。君子はそれはやらないといふことを答へてあります。何時でも孔子の答が立派であるから如何に子路が勇氣が有つても孔子に向つてはどうすることも出來ない。一體子路は初、孔子の門弟子にならぬ時には孔子を侮つて居つた。アレは史記の仲尼弟子傳にありますす。子路は腕力が有りますから孔子なんて何物かと思つて居た處が孔子はナカ〳〵恭しくて正しい。さうして禮義を以て接せられるから閉口して門人になつた。子路はさう云ふ人でナカ〳〵勇氣がある。さうして孔子の側に始終附いて居る。失敬な奴が來ると腕力でやつつける。そこで孔子を侮ることが出來ない。孔子の威嚴を添へた。どうも色々な奴が孔子の處へ來るけれ共滅多なことは出來ない。側

に子路のやうな腕力の有る人が居つて壯士などが來ると直ぐやつつけさうに見えるから迚も侮ることは出來ない。そこで孔子も大に其の勢力を發展することが出來た。それで顏回、子貢、子張、子路の都合四人を四友とするといふことを述べて居る。所が此外に孔子の學問を後に傳へた人がある。それは曾子です。曾子は十哲の中に這入つて居らぬ。それから子夏であります。子夏は文學には子游子夏とあつて十哲の中に入れてある。あの子夏は曾子と同じく儒敎の系統に多大の關係がある。子夏と曾子とは儒敎發展に最影響を及ぼした。就中曾子は孔子の學問の最大事な所即ち神髓骨子とも言ふべき方面を傳へた。孔子が一番大事な所を曾子に語つて居られる。參乎。吾道一以貫之。と言はれた。此時に曾子は直ぐに悟つたから何とも質問しないで唯、ハイと言つた。或人が曾子にアレは何の事かと尋ねた所が曾子は夫子之道。忠恕而已矣。と言つて答へた。疾くに呑込んで居つたものと見える。さう云ふ工合に曾子は孔子の大事な處を呑込んで居る。

さうして曾子の言つた言葉は殆ど孔子の言葉に匹敵して居る。論語や孟子に出てゝ居る曾子の言葉はナカ〳〵善うございます。實に卓絕して居ります。勇氣が盛んであります。論語には臨大節而不可奪也。とあり、又孟子には自反而縮。雖千萬人吾往矣。とある。さう云ふ處を考へて見ると曾子といふ人は餘程偉い人であります。そこで曾子が孔子の道を傳へてさうして大學が出來た。大學はどうしても朱子の云ふやうに曾子の傳ふる所と見える。大學には他の孔門諸弟子の言は一ケ所も引いて無い。唯、曾子曰といふとが一ケ所あります。是は曾子の門人が書いたものと見える。或は始の經一章といふものは曾子が書いたので後は曾子の門人が書いたものであらうかと思はれます。兎に角大學は曾子の書と見て差支ない。孔子の學問の大事なところが大學に書いてある。此大學に書いてある事を又子思が中庸に一層敷衍して書いて居る。子思はどうも曾子の學問を傳へたものと見えるといふものは大學にあることと中庸にあることと思想の系統

上立派な聯絡が見える。大學の始に誠其意といふことがあつて傳にそれが說明してありますが、此誠の字を子思は中庸の根本原理として大に敷衍して說いて來たのであります。處が孟子が又それを敷衍して居ります。さうして中庸と殆ど同じ言葉が孟子に見える。中庸にある言葉が孟子に繰返つて出て居ります。例へば中庸に誠者。天之道也。誠之者。人之道也。といふことがありまするが、孟子の方には誠者。天之道也。思誠者。人之道也。至誠而不動者。未之有也。といふ樣な工合に思想の系統が立派に見える。さうして又孟子の中には曾子と子思の事が同じ樣に稱揚してあります。どうしても孟子の學問は子思から出た者であります。此思想の系統は疑はれぬのであります。そこで四書に孔子の書物として論語あり、曾子の書物として大學あり、子思の書物として中庸あり、孟子の書物として孟子あり、此四つが大事な儒教の經典でありますが、是は四人の教を載せた者である。是が鄒魯の學問の基礎的の者であると考へます。此後儒教を繼いで起つた者がありま す

けれ共原始儒教とも見るべき者は四書に過ぎるは無し。論語大學中庸孟子の此四つの書物が原始儒教の眞面目を存して居る者と見なければならぬ。固より此孔子、曾子、子思、孟子といふ四人の間には思想の變遷があります。幾らか變遷した所があるけれ共併しナカ〳〵此間の關係が又緻密である。是は一つの塊りと見て差支ないのでありま す。子夏の系統は別にある。子夏の學は曾子とは餘程違つて居りま す。子夏は文學の方の人で文學には子游子夏とあります樣に曾子とは餘程違ふ。曾子は餘りに文學に長じて居つたとは見えないが、德行家で誠に立派な人格の人。子夏は文學者だ。此人の事に付て色々面白いことがありますが横道に這入るから申しませぬが子夏の系統を紹いだのが荀子であります。荀子と孟子とは後に正反對になつて來ましたが何れも其淵源する所は孔子であります。孔子でありますけれ共孔子の學問の違つた方面をそれ〳〵傳へたのであります。荀子の學問の系統は孔子の學問の神髓骨子を得たといふ譯にはいかぬ。

孔子の學問の神髓骨子は曾子、子思、孟子に傳はつたのである。さうして荀子は與つて居らぬ。宋學といふものは日本の古學者が頻に攻擊した樣に佛敎の敎理が餘程這入つて居るから純粹な儒敎では無い。それで山鹿素行、伊藤仁齋、物徂徠などが盛んに攻擊した譯であります。日本の古學派の人は悉く原始儒敎に返らうとした。直ちに孔子の敎を紹いで起らうといふ考であります。さう云ふ譯でありますから、儒敎の長處短處といふものを論じまするに付ては原始儒敎の長處短處として此處で論ずるのであります。宋學などは姑く此處の問題の中には入れない積りでありますからどうぞその御積りで御聽き下さる樣に願いたい。

その次に此儒敎といふものは宗敎とどう云ふ工合に違つて居るか、大體の處を先づ述べて置きたい。儒敎は他の宗敎に比べまするとその形式の上に於て幾らか似て居る所もある。まるで違ふところもあります。るが能く似て居るところもある。先づ其似た方を言ひまする

と宗敎が各……佛敎でも基督敎でも……それ〴〵一大派をなして居る樣に儒敎もチャンと一大派をなして居る。儒敎を尊奉する人が極東諸國には古來多數ありましたので、その形式の上から言ふと矢張り宗敎に似た所がある。カントの哲學派といふのとは大分違ふ。哲學と云ふより寧ろ日常の敎として遵奉して立てゝ居るのであるが、或場合に於ては儒葬をやつたこともあります。儒敎で葬式をやり他の宗敎の手を假らぬといふこともあつた位であります。さう云ふ處が似て居る。それからモウ一つは儒敎では人間以上の物を信じて居る。即ち孔子などは天といふものを信じて居る。天といふことは嚴密に今日から分析する譯にはいきませぬ。少し茫漠として居るけれ共さう云ふ人間以上の天といふやうな偉大なものを孔子が尊信して居つたことは明かであります。非常な大難に出喰はしたやうな時には必ず天之未ㇾ喪㆓斯文㆒也と云ふやうなことを言つて何時でも天どいふことを出して來て居ります。その天といふものは果して西洋の宗敎家の

考へて居るゴッドのやうなもので有るか無いかといふことはさう明瞭ではない。そんなに精細に解釋が與へて無い。與へて無いけれ共その人格的ゴッドのやうな處も幾らか見ゆる。けれ共さう明確なる概念は見えないのであります。さう云ふことは姑く措いて兎に角人間以上の物を孔子は信仰して居られる。又孔子一派の人は悉くさう云ふ信念が有つたといふことは事實であります。そこが宗敎と似て居る。けれ共宗敎と違ふところがある。玆に宗敎といふのは私は重もに佛敎と基督敎とを意味して言ふのであります。宗敎と違ふ點は第一は宗敎的儀式が無い。色々な寺院會堂の如きものが無い。又祈禱をすると云ふことも無い。孔子も禱るといふことはあつた。丘之禱久矣といふことがありますけれ共別段會堂などに集つて天を禱る儀式は無い。誠に單純なるものである。セレモニーといふものが殆ど無い。第二に現世を超越した未來世界といふものを信じて居らぬ。さう云ふことは丸で問はない。度外視して居る。是迄の宗敎ではさ

う云ふことは大事なことになつて居る。未來世界といふものは宗教に取つて非常に重大なものでありまするが儒教ではさう云ふことは頓着しないのであります。さう云ふことが違ひます。それでありますから儒教は寧ろ宗教といふよりは德教と言ふべきものであらう。固より宗教といふ意味を是迄普通に用ひられた意味より廣くする時には德教も宗教と言つて差支ないけれ共今日世間で佛教基督教抔を指して宗教といふやうな意味では言へないのであります。

此儒教の長處といふ點を一つ擧げて見ませう。儒教には確かに一種の長處と見るべき點が幾つか有ります。第一には儒教には神怪不思議といふことが無い、簡單に言ひますれば迷信が無い。論語の中を見まするとそれは明かなことで子不語怪力亂神とあります。總て妖怪抔に關することは、孔子は說かない。又敬鬼神而遠之とあります。人が鬼神のことを言つた時に鬼神は尊敬して遠ざけて置く丈けで、餘り其の方に接近してはいかぬといふやうな工合に言つてあります。

さう云ふ處でも分る。それから未レ能レ事レ人。焉能事レ鬼。とか、又は未レ知レ生。焉知レ死。我々の生命さへ分らぬのに死んだ後のことがどうして分るものかといふやうな工合で、總てさう云ふ幽冥界に關するやうなことは問題とはならぬ。さうして論語に見ゆるところでは唯、此人間世界の道德の事を語るのみである。其道德は廣い意味の道德で政治經濟等を含んで居ります。さう云ふ工合に人間世界の問題にのみ止つてそれ以上に行かない樣にしてある。時々鬼神とか何とかいふことに關係することがあつても、それは決して重もなる問題では無い。折々當時世俗の信仰して居る鬼神のやうな物に觸れることもあるけれ共孔子は決してさう云ふ物を重んじて居らぬ。孔子の最重大視するところはさう云ふものでは無かつた、寧ろ道德政治經濟のやうなものであります。さうして政治經濟は皆道德と調和してあります。マア推詰めて言へば、廣い意味の道德であります。それ以外には餘り出でない。

それで孔子の敎即ち原始儒敎といふものは今日の自然科學と併立つ

て少しも撞着するところが無い。さう云ふ點が儒教の好い處であります。佛教だの基督教だのといふ宗教は皆無數の迷信を伴つて居ります。それで科學と撞着して屢々面倒が起つて來るのであります。さうしてその迷信がそれら宗教の大事なところになつて居るが儒教ではさう云ふことは少しも無い。折々當時世俗に言ふところの鬼神といふものが出て來ても孔子の重要な教には殆ど無關係のものであります。さう云ふことは儒教の神髓骨子で無い。此の點は確かに儒教の顯著なる長處であると考へます。

それから第二に儒教は健全なる常識に基くので始終中庸を離れないといふ點があります。中庸といふことは矢張り常識の異名と見ても宜い。中は極端に走らない。物の程好い處、庸といふのは平素守るべきことで、庸はツネといふことであります。極端で無い。眞中の平常守るべき所といふ意味でありますから矢張り常識の異名である。決して極端な變なことをやるといふことで無い。老莊學派などは中

庸を逸して居ると見られることが隨分ありますけれ共儒教の側ではそれはない。孔子は寧ろ中庸を貴んで居ります。子思の著はしました中庸に中庸の德の說いてあることは言ふ迄も無いから玆に引かないが論語にも斯うある。中庸之爲德也。其至矣乎。民鮮久矣。中庸の德といふ者は偉大な者である。所が之を實行して居る者は非常に少い、久しい間怠られて居ると慨嘆して言つたものと見えます。又過猶不及といふことを門弟子に言はれたことがあります。是も中庸の意味で過ぎてもいかぬ、及ばずでもいかぬ。矢張人間は程好い處を執らぬければならぬ。斯う云ふ意味でありまして全く語を換へて中庸を說いた者に過ぎない。又或場合には不得中行而與之。必也狂狷乎。この中行は中庸の行、即ち極くモデレートな行、極端な行ひで無い、適宜な行を中行といふ。中行の人が得られぬければその次には狂狷な人に與するより外ない。又人而不仁。疾之已甚。亂也。假令ひ不仁なる者が居つても、それを極端まで惡むといふことは亂である。さう云ふ工合に孔子

は極端までやらない。矢張り中庸の意味から來て居ります。孟子の中に一ヶ所孔子を形容して言つたことがあります。仲尼不レ爲ニ已甚一者、即ち極端なことをしない。例へば惡い奴を憎むことは憎むけれ共極端まで憎まぬ。それが不レ爲ニ已甚一者、であります。餘程よく孔子を形容して言つてあります。是れは孔子が中庸の德を履んだ證據であります。此中庸の中といふことは矢張り儒教の起りと關係して居ります。堯が舜に位を禪つた時の教は何であるかといふと允執ニ其中一と云ふのであります。舜が禹に位を讓つた時の教は人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執ニ其中一であります。允執ニ其中一といふことが一層精しくなつて居るけれ共堯の舜に教へられたことゝ同じ精神であります。さう云ふやうな工合に代々中といふ教が傳はつて居る。是れが遂に孔子に至つて中庸の中となりました。中庸の教といふ者は大事な教であります。所が中庸の教といふ者は詰り健全な常識を基礎としたる道德に外ならぬのであります。それで孔子は極端に馳せない。さう云ふ點

から見ると佛陀だの基督の教はそれ〳〵其偉い處がありますけれ共孔子の教に比べると隨分埓外に出た處があります、極端に行つたところが確かにあります。基督は餘程時勢に激昂して言つたことがある。一例を擧げると金持の極樂に行くに較ぶれば駱駝が針の穴を通るは却て易いといふ教がありまするがそれは何うも時勢に激昂して述べたものに相違ない。何故ならば金持にも間々善い人がありまするし、貧乏な者が何時でも善い人と限つた譯では無い。貧民の中に惡い者もあり富者の中に善い者もあるから必ずしも富者なら何時でも惡い者と限つた譯では無い。それは必ず時勢に激昂して言つたものでありませう。佛陀にしても矢張り孔子に比ぶればズーッと尋常の軌道を脱したやうな教がありまするが、孔子の方はさう云ふことは無い。何時もモデレートで、コンモンセンスで、中庸を離れないやうな教を立つるのであります。さう云ふ中庸の教は段々世の中が開けて學問が進んで來てさうして社會が昔のやうに所在バラ〳〵で無くして世界

的となつて來るに隨つて、最も效用が多くなつて來ると考へます。

第三に孔子の教は世間的であつて出世間的で無い。遂に此世間以上の幽玄の世界を說いて來ない。さうして大理想が矢張有る、非常な大理想がその中に在る。詰り孔子の教は差別を離れざる平等であります。差別と平等と倶に存して居りますが、能く調和されてあります。片寄つて居らぬ。矢張り前の中庸の教と相待つて斯う云ふ程好い所を得て居るのであります。言換へて見れば、實際的であつて、さうして又理想的である。一方に於ては極めて實際的でありますけれども、その實際を通じて理想が有るのであります。兩者が餘程よく調和されて居るのであります。又孔子は仁といふことを說いて居りますけれ共その仁は必ず順序がある。今日から言へば仁は博愛人道でありますけれ共その仁といふことが順序が無いと社會の秩序が紊れて來るからしてそれは孔子が明かに敎へて居ります。例へば君子篤二於親一則民興二於仁一とありましで仁を行はふと云ふには、孝より始めなければ

ならぬ。それで有若も孝弟也者。其爲仁之本與。と云つて居ります。それから孝經に不愛其親而愛他人者。謂之悖德。不敬其親而敬他人者。謂之悖禮。といふのは矢張り秩序を附けたのであります。それならばと言つて世界の人を皆差別の點からばかり見たかといふとさうでも無い。子夏の言つた言葉に四海之内皆兄弟也。是は商聞之矣といふのでありますから孔子に聽いたのでありませう。孔子の門弟子が之を聽く云ふのは孔子に敎つたと見て差支ないのであります。それで孔子はフラトリニチーと云ふやうな廣大な觀念を有つて居りました。必ずしも世界の人類を差別するといふやうな考で無い、であるから夷狄の者でさへ決して侮つては居らぬ。夷狄の國でも孔子はナカ／＼貴んで居られる。或時は夷狄之有君。不如諸夏之亡也。と云つてあります。又吾欲居九夷。といふこともあります。或人が夷狄の國は陋しい國でありますが、何うしますかと言つた所が、君子居之。何陋之有。君子が九夷に居る以上は決して陋しいことは無いと答へました。あの九夷といふ

のは日本の事であるといふ說があります。是は仁齋の論語古義にも充分辯じてあります。君子居ㇾ之といふのは是は大學の敎授であつた故根本博士などは日本人の事である。日本は君子國と言はれて君子が居るから決して陋しいことは無いと斯う論語講義に言はれたのである。朱子の注で見ると君子居ㇾ之ラバ、何陋之有、で君子が行つて居つたならば九夷の國と雖も決して陋しいことは無いと斯う云ふ工合に見えますがそれは孔子の意味ぢや無い。孔子自ら君子などゝ言つたことは無い。君子と言ふことは自分でも深く辭退されて居ります。自分で君子抔と言ふことは決して無い。根本博士のこの見解は或は當つて居るかも分らぬ。さう云ふ工合に孔子は夷狄の國と雖も侮らぬ位でありまして實に四海兄弟の廣大なる博愛人道の考があつたのであります。その廣大なる博愛人道の考が有るに拘らず社會の秩序を紊さぬ様に敎を立てて居ります。そこで出世間に偏して國家を無視するといふやうな弊は孔子の敎に決して無い。世の宗敎家抔は出世間

の敎に偏して時に或は國家を無視し、又世間的の道德を侮るといふやうな事が往々有るのでありますが、孔子の側に於ては決してさう云ふことは無い。國家を立てる點に於ては孔子の敎は最も適切な敎であります。さうして又現世の日常の道德を最も重んじて立てゝあります。

その次には孔子の儒敎といふものは經濟政治と一致する樣に立てゝあります。孔子が既に其事を充分努めたのであります。佛敎だとか基督敎だとかいふやうな宗敎は經濟政治といふ側に於ては甚だ闕焉として居る。社會經營に關する方面の敎が缺乏して居るのであります。所が孔子の敎は此側に於ては餘程今日の時勢にも合ふ樣に說いてあります。孔子はどう云ふ工合に說いたかといふと富而可レ求、雖ニ執鞭之士一。吾亦爲レ之。如不レ可レ求。從ニ吾所レ好。といふ樣に執鞭と言へば鞭を執る役目でありますから餘程低い役目でありませう、或は周禮によつて巡査のやうな役目だと云ひます。兎に角執鞭の士といふのは實に賤

しい役目であるけれ共若しさう云ふ役目でも富といふものが求められるものならばやつても宜い。それで何だかチョット賤いやうに思はれるが決してさうで無い。孔子は又一方に於ては如何なる富貴と雖も、決して構はぬ。義に合つて居らぬ富貴は如何なる富貴と雖も塵芥の如く輕んずる。そこが孔子の非常に偉い處であります。飯疏食。飮水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴。於我如浮雲。といふ處が孔子の人格の實に偉大なところであります。一方に於ては富が求められるならば執鞭の士でもやると言ひながら他の方面に於ては不義にして富が得られてもそんな事は一向平氣なものだ。それより寧ろ詰らぬ麥飯でも食つて晝寢でもして居つた方が増しだと言ふやうな極く超然とした處が見ゆる。又邦有道。貧且賤焉。恥也。邦無道。富且貴焉。耻也。斯う云ふことがあります、國家がチャンと道に適つて榮えて居る時に貧乏して賤しい有樣をして居るは恥である。さう云ふ時はチャンと相當の地位に立つて富み榮ゆべきである。併ながら國が亂れて居

る時に富貴の地位に立つて居ることは非常な耻であると斯う言つて居る。君子憂レ道。不レ憂レ貧。君子の憂ふるところは自分の功業如何とか道の如何とか云ふ事に在るので貧乏であるとか何とかいふことは決して念頭に置くに足らぬ。さう云ふ處を觀ると非常に强固なる品性が見ゆるのであります。又富與レ貴。是人之所レ欲也。不レ以二其道一得レ之不レ處也。貧與レ賤。是人之所レ惡也。不レ以二其道一得レ之不レ去也。君子去レ仁。惡乎成レ名。斯う云ふ處を見ましても富貴だの貧賤の爲に決して動かされないやうな鞏固なる性格の有つたことが分る。けれども如何なる事情の下にも富貴の地位を避けやうと云ふ考でない。要するに、決して經濟政治などゝいふことを怠つたのでは無い。道德と經濟政治とを餘程よく調和して出で來た人は孔子であります。此點は佛陀や基督のやうな宗敎の祖師には希望の出來ない處であると考へます。併ながら何處まで行つても孔子の敎の精神では道德の方が貴いのである。で德者本也。財者末也。と大學にありますのは孔子の精神であります。經濟と道德とど

ちらが大事かといふと勿論道德の方が大事だ。道德は第一、經濟は其次と斯う云ふ精神があるのであります。そこで今日のやうに段々實業が盛んになつて來る場合には此儒教といふものは餘程能く之に合ふのであります。抑〻儒教といふものは元來實業などゝ逆ふ譯のものでは無い。實業などゝ兩立しない樣に解釋したのは後世の儒者が惡いのであります。

それから次に儒教といふものは教育と相伴ふことが出來るのであります。是が一番儒教の長處であらうと思ひます。儒教は殊に日本のやうな國では長く教育と關係を保つことだらうと考へます。支那では今日でも是が丁度國教のやうになつて居りまするが、日本では決して支那のやうな事は今後無からうけれ共、併ながら其教育との關係は實に密着不離で、容易に絕つべからざるものだらうと考へる。その譯は此孔子の人格が非常に偉大であるからである。孔子のやうな偉大の人格を立てるといふことが教育の上では必要なことで教育は學

問丈けではいかぬ。どうしても何處かに人間の則るべき標準として偉大の人格が無くてはならぬが、此要求を充たす爲に丁度孔子の如く偉大な人格があるのであります。此點に於てはどうも孔子の人格が最も適切であります。孔子と並ぶやうな人格又孔子より優つた人格が出ることになつたならば、多少變化が起るかも分らぬけれ共、併ながらさう云ふことは滅多に無いことであります。孔子のやうな人格は實に人間の歷史に於て稀なる場合であります。佛陀や基督やソクラテースに比較するやうな偉大な人格であつて滅多に世の中に出る人格で無い。さう云ふ偉大なる人格が東洋に於て純粹な德敎を開いたのである。孔子の人格がさう云ふ偉大な人格であるといふ點からして長く我邦の敎育に關係を有たねばならぬ。此點は儒敎の最大なる長處であります。迚も他の宗敎抔の得られぬ長處であります。何故なれば佛陀や基督は又それ〴〵其方で偉いけれ共、敎育といふ側から見ると餘程違ふ。詰り現今の敎育と關係が薄い。佛陀や基督は普通

の人の眞似すべき者で無い。それは眞似の出來る側は眞似するも宜いが到底眞似の出來ぬことが多い。孔子は一番眞似が出來る。孔子は普通の學生からやり上げて段々勉强し、發展してやり上げた。吾少也賤と孔子は明かに言つて居られる。努力勉勵して幾重にも鍛上げて遂に孔子の如き偉大な人格が出來たのである。所が佛陀や基督の如き人はそこが非常に違ふ。さうして徹頭徹尾ノルマールで曾て普通の軌道を脱したことがない。佛陀や基督の如き人は尋常の學生又敎育家の模範としては餘程六づかしい點が有る。第一、佛陀は一家を作つたものであるけれ共、其家族の關係を斷切つて妻子を見棄てゝ仕舞つた。さう云ふことは普通の人には出來ませぬ。それは餘程偉い人で無ければ出來ない。出來ない證據には第一坊さんが獨身で居らない。家庭を作り初めた。維新以來坊さんが獨身生活をやつて居るかといふと、さう云ふことはやらないやうになつて來た。又それが實行された時には人口が減つて仕舞ふ。人口が減ると國力が弱くなる

ことは分り切つたことであります。さう云ふやうに出家して獨身で居ることは普通の場合には出來ない。世の中が開けて進んで行くに隨つて益〻應用が利かない。尤も釋迦のやうな偉大な人格であるといふとそれは別であります。あの時代に釋迦がアレ丈けの事をやつたといふことは非常なものであります。又佛敎の如き宗敎の出來たのもさう云ふ非常な英斷をやつて世間の血緣を斷つて出世間の人となつて一身を道のために捧げたからでありますけれ共普通の學生又は敎育家の手本とするには餘程困る。どうも實行し難い。さう云ふことは困る。第一基督は獨身であるが人は長く獨身で居ることは難い。矢張り早晩結婚をしてファミリーを作るといふのが普通の人の場合である。孔子は其點に於ては誠に健全でチャンとしたファミリーが有つて子供もある。又其孫に至つては子思の如き賢人が出て居る。一家の父として其終を全うして居る。七十三か七十四歳で孔子は天壽を全うして居る。基督は非命に斃れて、天年を終へて居らぬ。

礫刑に遭つた。それも人々希望してもナカ〳〵出來ないことであります。諸君が希望するならばそれでも宜いけれ共、ナカナカ希望者は少いだらうと思ひます。假令ひ希望者があつたとしても礫刑にする者がない。それで他の事は兎も角、それは出來ないでせう。尋常で無い。實に非常な激變に際して基督は礫刑に遭つて居るけれども、アヽ云ふ殘酷な方法に由つて基督を殺したといふので後のシムパシーがズーッと多くなつて居るに相違ない。基督が礫刑に遭はなかつたならば、基督教もアレ程にならなかつたかも知れぬ。礫刑に處したといふのがどうも偉い結果を生じた一原因に相違ない。それからしてソクラテースのやうな人も非常に偉大な人で孔子と比べられる程の人であるが、是も天年を全うして居らぬ。毒殺されました。けれども學生や教育家が必しも毒殺されるやうなことをやるべきでもない。處が孔子の一生は一番安全に行つて居る。孔子は最も圓滿なカラクテルでさうして普通の學生からやり上げて大きくなつた。さうして天

年を終つて居る。此處が普通の學生及び教育家の手本とすべき所で、殊に孔子は學生を教育したことが多い。一體孔子は弟子三千人としてありますが能く分りませぬ。マア三千人近くもあつたでありませう。その中で勝れた者が七十二人。尚ほ傑れた者が十數人あつたのでであります。兎に角多く弟子を教育して居る方で、まだ若い時から習ひに來た人がある。孟懿子南宮适などは餘程早くから來た。それから周に適いて禮を老子に問ふといふことがあります。あの周に行つてそこで姑く滯在して魯の國へ歸りて來た時には尚ほ一層弟子が殖えた。矢張り今日なら洋行歸りの人の處へ人が習ひに行くやうな工合に周の都へ留學したといふので續々門弟子が習ひに行つた。それから天下を周游するに方つて弟子を連れて廻はつて居る。此弟子が皆大變に能く孔子に教化されて居る。さうして基督の徒弟中には、基督に背いたユダス、イシヤリオトがあつたけれども孔子の弟子中には斯る兇徒は一人もない。孔子の教育といふものは實に立派な教育で

あつた。其感化力の如何に偉大なるかは孔子の事蹟を見ると餘程よく分ります。固より佛陀でも基督でも皆徒弟はありましたが、孔子は餘程今日の敎師に近い。孔子は一番純儒の態度がある。晩年になつて益〻子弟を敎育し又著述をして後世に遺して居る。即ち六經を編纂して後世に道を傳へて居る。さういふやうな處は普通の學者に近い。さうして又著述をしたのは孔子ばかりでソクラテースでも佛陀でも基督でも著述は一つも無い。孔子丈けが著述がある。それで其やり方が最も敎師のやり方に近い。昔の聖人の中で一番學生及び敎師の手本とするに近いのは孔子である。此點から見ると孔子は敎育上にナカ〳〵多大の關係がある。孔子の說いたことは或は時勢に依つて多少の變化を來すことを免れないのでありませう。多少ぢや無い。或は多大の變化を來すかも分りませぬが、併ながら孔子の人格の偉大といふことは學問の進歩に依つて少しも變化する譯のもので無い。そこで孔子は日本の敎育の上には長く關係を有つべき偉大なる

人格である。孔子が斯かる人格である所を見まするとどうも日本の教育と到底關係を絕つことは出來ない。維新以來歐米の學術を輸入するに隨つて殆ど孔子の人格の偉大なることを忘れて來たことはいけない事でありみます。孔子は其人格の點に於て深く顧みなければならぬ。特に德育上孔子の人格の偉大を學ばぬければならぬ。孔子の人格の偉大を學んで毫も差支ない。是は儒敎の一大長所として見るべき所と思ふ。

次に儒敎の短處を少しばかり擧げて見ませう。固より短處といふものに就いては色々辯解の仕樣もありますけれ共、それに拘らず先づ短處は短處として論じて見ませう。儒敎の短處と見るべきは人格的個體の槪念が明瞭で無い。ペルソナル、インディビデュアリティーの考が不明瞭である。固より人格といふことは儒敎では大事なことになつて居る。儒敎は徹頭徹尾人格敎育で、敎育上人格といふことは儒敎程之を重んじたものは無いと言つて宜い。儒敎は餘りに人格敎育を

重んじ過ぎた爲に却つて種々なる弊が有つたであらうかと思ふ位でありますず儒敎は全く人格敎育であるけれ共人格の概念は明確ぢや無い。それは西洋から這入つて初て明確になつて來た。併ながら斯う云ふ點は儒敎にもある。個人はナカ〳〵剛强なる態度を執つて立たぬければならぬ。獨立自尊といふやうな事は孔子に充分ある。非常に有る。福澤翁は獨立自尊を新道德と唱へ出したけれ共豈に圖らんや孔子は旣に二千四百餘年前に盛んに說いて居る。そこに至ると孔子は實に偉大だ。孔子の一生を見ると獨立自尊此上なし。支那當時の精神界に於て何人も孔子に匹敵する者は無い。全く獨立自尊をやり遂げたのであります。孔子の偉大なのはその精神とその事業に在ります。孔子は實際其行つたことを述べて居るので、空言ではない。三軍可ㇾ奪ㇾ帥也。匹夫不ㇾ可ㇾ奪ㇾ志也。三軍といふえらい大軍隊の大將を奪ふことは出來るけれ共眇たる匹夫でも他人が其志を奪ふことは出來ぬ。况や眇たる匹夫にあらざる孔子の如き大聖人であればどうして脇か

ら志を奪ふことが出來ませうぞ。獨立自尊此上なし。釋迦の言葉に天上天下唯我獨尊といふことがあるが、アレは俗説であります。俗説だけれ共釋迦に言はして宜い。釋迦の考はア、云ふ考であつたに相違ない。天上天下唯我獨尊で以て婆羅門の最上の佛でも下に視て仕舞つた。孔子が矢張り唯我獨尊であります。匹夫不可奪志也といふ趣意はアチコチに見えて居ります。君子可欺也。不可罔也。なども同じことであります。決して無理にさせやうとしても出來ない。君子で無い人は出來るけれ共君子は出來ない。又孟子が孔子の精神を紹いで尚ほ一層明に言つて居られる。富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。又曾子は臨大節。而不可奪也。と言つて居ります。此處が大事なところであります。又孟子が曾子の語を引いて居るが、自反而縮。雖千万人吾往矣。實に獨立自尊此上も無い盛んな氣象であります。孟子は孔子のやつたことを眞似たけれ共善い事を眞似たから賞賛すべきであります。孟子は匹夫からやり上げた。元來眇たる匹夫である

けれ共孔子の眞似をして盛んに道を講じ、大に德を修め、其見る所を當時に實行しやうとして働いた結果、アレ丈けの性格を作り上げた次第である。その樣に獨立自尊といふ精神は充分有るけれ共此インディビデュアリティーといふ概念は何うも明確で無かつた。それと同時に階級的の觀念はナカ〳〵强い。女子與小人爲難養也などゝいふ言葉も有つて、女子でも何でも同じ樣に視て人格の尊嚴に於て何等の區別をもしないといふやうな考が無かつた。そこは未だ實に闕焉として居るけれ共それは他の學問や何かゞ開けて居ない時でありますから固より恕すべきであります。兎に角インディビデュアル、ペルソナリティーの概念は明確で無い。それで權利の思想は勿論無い。是は獨り儒教丈けぢや無いけれ共、儒教に於ては是が顯著なる事である。レヒツベグリフがないから權利の主張といふ者が無い。論語の中に以直報怨。以德報德。とありますけれ共、是は今日のレヒツベグリフを言顯はしたものぢや無い。一番權利思想に近づいたのは墨子と孟子です。墨子は平

等主義を唱へて居りまするし、孟子は又權といふことを言ひましたが、到頭權利までは到達しなかつた。權利といふ文字は初めて荀子勸學篇に見えて居ります。併し荀子の權利といふのは今日の權利の意味では無い。唯ゝ荀子の權利といふ字を假りて西洋のレヒトといふことを今日は言顯はして居りますが、決して儒敎中に權利の概念があつたと云ふのでは無い。權利の概念は儒敎に全く缺乏して居るのであります。所がそれは西洋から輸入された。それで今日謂ふ所の個人人格の概念、それから人權又は國權の概念、總ての權利思想が儒敎には無い。

それから第三に儒敎は哲學的論理的思想に乏しい。非常に乏しい。幾らか宋學になつては補うて居りますけれ共、宋學は今日論じて居る此儒敎の範圍に入れませぬ。原始儒敎に就て見ると其側が非常に乏しい。さうして苟くも哲理に關するやうなことは孔子は務めて言はぬ。子貢が言つた言葉に夫子之文章可二得而聞一也。夫子之言二性與一天道一。不レ可二得

而聞也。とあつて、性だの天道だのといふやうな哲理に渉りさうなことは孔子は決して言はぬ。子罕篇に斯う云ふ事があります、子罕言利與命與仁、命だの仁だのといふことは哲理に渉るから斯う云ふ側は孔子が避けたものと思ふ。孔子はさう云ふことは嫌いで、極く實際の側に始終着目して居る。實際を離れない樣にしたのであります。尤も是が又儒教の長所ともなると言へば、さう言へないことは無い。哲學的論理的で無かつたから却つて儒教が今日貴ばれるといふことが有るのかも分らぬ。否、哲學的論理的であると今日の學理上から駄目だ。斯う一言にして刎ねられることが無いとも限らぬ。けれ共アレが誠に常識であるからさう云ふことは無い。論語に見ゆる所はアフォリズメン又はマキシーメンのやうなものばかりでありますから今日でも應用がきける。それが或は儒教の長所であるかも知れませぬが、兎に角哲學的論理的思想が乏しく今日の學者の知欲を充すことが足りない。此點から見るとそれは確かに儒教の短處とも謂ふべきでありま

す。唯〻易の繋辭などに至つては大分哲學が說いてありますけれ共易の繋辭といふものは愈〻孔子が作つたものであるといふことは斷言し難い。孔子の考があの中に這入つて居るには相違ないけれ共孔子の作だといふことを斷言することは容易で無い。能く分らぬ。歷史上の事實が無いのであります。或は子思のやうな人が書いたものかも分らぬ。それは姑く疑問として殘して置く。

第四に儒教は科學的知識に乏しい。さうして自然科學の必要を認めて居らぬ。夫は後の支那の發展竝に日本の發展にも影響がある。抑〻自然科學といふ者が支那日本に起らなかつたのも色々原因がありませうが、儒教が第一其必要を認めなかつたといふことが確かに一つの原因となつて居る。道德を貴び隨つて儒教を貴ぶの結果、總て其外の學問を賤しめた。諸子百家の學は一切之を賤しめた。其賤められる方には兎角世間の人が向かない。貴ばれる方に向くのが人情であるからして儒教は隆々として勢威を揚げて來たが、諸子百家の學は割合

に振はない。夫で諸子百家の學に屬する自然科學といふものも皆充分に發展して居らぬ。中には少しも發達しなかつたものさへあります。ケミストリーのやうな學科は少しも無い。學としては少しも出來て居らぬ、といふ樣に自然科學は發展して居らぬ。自然科學と調和することは出來るけれ共、儒敎といふものは元來自然科學の必要を認めて居らぬ。

第五には儒敎の短處と見るべきは理想の觀念が倒逆して居る。是は孔子が堯舜禹湯文武といふやうな昔の帝王だの、周の成王の時に攝政の地位にあつた周公だのの跡を繼いで來た爲に昔の人ばかり尊崇して堯舜の時代といふものを非常に偉い者と見た。稱贊を極めて居る。それで後の人は矢張堯舜禹湯文武周公を稱贊し、儒者は皆之を稱贊し、悉く聖人として尊崇して來た。餘り昔の人を聖人として尊崇して來たが爲に將來は昔よりもズット先きへ發展し得られるといふ觀念が非常に弱い。孔子も後生可畏といふことを言つたけれ共唯〻そ

れ位でそれに對して昔を稱贊したことは非常なものであるから後世では昔の堯舜の世のやうになれば宜いと斯う云ふ考になつて仕舞つた。昔よりもズッと先きへ發展し得られるといふ積極的精神が弱かつたのであります。それはどうしても一つの非常な缺點であります。それで一體に創意的のことが少い。自分から物を始めて來ることが少い。儒敎では物事を創造して來るといふ考はいけない。儒敎は唯ゝ繼續的の考を重んずる。孔子自ら述而不作で昔から在來りの敎を敷衍する丈けだと斯う言つた樣に、後の人も矢張り孔子の考を敷衍して繼續して行く丈けで自分から新說を立てゝ何か事柄を創めて來るといふやうな精神に乏しい。非常に弱い。殊に朱子學の方は尙ほ更少い。それも一つの短處となつて居る。

それから第六には道德思想の中に不完全と見るべき點が二三ある。之れを一つ〳〵擧げるのはうるさいから今引括めて道德思想の不完全なる點を第六として論じませう。それは色々あります。例へば、公

德心が少かつた。それも全く無いとは言へませぬ。孔子も支那全體を經營して當時の人民を救濟し樣といふ考は有つたから、その點から言へば、公德心は無論有つたと言はぬければならぬが、併ながら當時の事でありまするからして、今日の如く總てが社會的となつて團體精神が重んぜられる時とは非常に違ふ。今日は公德といふことが昔よりナカ／＼重大となつて來て居りまするが孔子の教にはそれが大變少い。少しも無いとは言はれぬけれ共非常に少い。又衞生の觀念なども少い。孔子は自らは大分衞生は注意した所もあります。例へば子之所愼、齋、戰、疾とありまして病氣に付ては餘程用心をしたものと察せられます、又論語の鄕黨篇を見ますると孔子が食物などに餘程用心したことが見えます、けれ共全體の衞生に於ては餘り注意が少いやうに見える。それで孔子の中にも衞生を守らなかつた者のが隨分有る。顏回、原憲などは著しいのであります。顏回は一簞食、一瓢飮で、疏末な物を食べて二十九歲にして頭髮が悉く白くなつて早逝したから孔子

は酷く嘆いて、不幸短命死矣と言つて實は氣絶する迄嘆いた。子哭之慟とあります。慟といふのは氣絶である。氣絶したからアナタは氣絶なすつたと言つて從者が注意した時に、孔子は非夫人之爲慟而誰爲。顏回の爲に氣絶せぬければ誰が爲に氣絶するものかと言つた位であります。さう云ふ工合に顏回を惜んだが、顏回はどうも衞生を重んじなかつたと見ゆる。彼れが早逝したのは一簞食一瓢飲で實に營養不良であつたからと思はれる。原憲も草澤の中に往つて、敝れた衣冠を着けて居つた所を見ると何うも衞生の側は構はなかつたものと思はれます。子路も何だか衞生抔は構はぬやうに思はれる。それから孔子の敎には一夫一婦の關係が明かでない。孟子は夫婦有別と説いたけれども、それでは足らぬ。一夫一婦の關係を嚴密にする必要がある。處がそれが全く缺乏して居る。さう云ふことが幾らもあります。一々擧げては論じませぬが、是等は皆儒敎の短處と言はぬければならぬ。固より是等の事に付ては色々辯解すべきことがある。第一孔子の時

代と今日とを同じ様に論ずる譯にいかぬ。孔子の時代は今日から二千四百年前の事でありますから今日我々が思ふやうな事を孔子が悉く述べて居るといふことは寧ろ無い方が當然である。今日は孔子の時代と時代も違ひ、又境遇も違ふ。二千四百年前に今日の社會の要求することを孔子が悉く述べて居らう筈が無い。それは何の宗教に就いて言つても同樣の事である。それで儒敎に就いて何も角も要求するといふことは固より無理な事である。

そこで今日は是等儒敎の缺點に對してどう考へるかといふと斯う云ふ事が考へられる。儒敎といふものはさう云ふ如上の長處短處を有つて居るものであります。その外まだ論すべきことがありますが今日は唯、要點丈け論じて置きます。さう云ふ事でありますが儒敎といふものは畢竟共產物、德敎として孔子を始め支那の智者の唱へた共產物であります。重もにそれをベグルユンデンしたのは孔子でありますけれ共、孔子は述而不レ作と言うた樣に孔子の前からありました。

堯舜以來の支那民族の共產的德敎であります。其歷史を考へて見るといふと、モウ孔子から曾子、それから子思、孟子に至るまでに餘程發達の跡が見ゆる。即ち孔子の言はない事を子思が言ひ、子思の言はないことを孟子が言つて段々と發展して來て居る。孟子以後久しく中絕して大きな人は餘り出ませぬ。宋の時に至つて程子だの朱子が出た。そこで儒敎といふものが再興しました。處が是れは原始儒敎とは大分違ふ、と云ふは隋唐の頃に佛敎が盛んになつて、其結果佛敎の元素が宋の時に至つて儒敎に這入つた。宋の時に出た人は儒佛又老莊の說を合せて大成して出て來た爲に原始儒敎より一層深くなつた。さうして是れが第二期の勢力ある儒敎になり、殆ど宗敎のやうなものになつて、日本にも傳はつて來たのであります。が日本の儒者中二三の有力なるものは之に反抗してそれは原始儒敎の精神で無い。矢張り原始儒敎は佛敎とは餘程違ふからして孔子の敎に立返るが宜いと主張した。素行、仁齋、徂徠などは直ちに孔子に立返つて原始儒敎に接續した。

やうとしたからそこで考へぬければならぬ。原始儒敎に立返らうとしたが、抑〻儒敎といふものはその形式と內容を區別して考へると內容は後の儒者が何處迄も發展させて行かぬければいかぬ。宋儒はそれをやつた。佛敎の元素と道敎の元素を採つて來てそれを儒敎とこね合せた。それで原始儒敎よりは一層發展したものが出來た。それで原始儒敎より一層發展したものが本當に出來て居れば宜い。それが惡ければ別でありますが、假令ひ佛敎だの道敎の元素が這入つて居つても原始儒敎より一層深遠なるもので立派な敎で有りさへすれば一向差支ない。何故なれば儒敎といふものはチヤンと一定したもので無い。孔子の敎丈けが儒敎かといふとさうで無い。孔子の敎は堯舜以來の敎であります。普通儒敎と言つて居るものゝ中に孔子の敎も這入て居る。儒敎は本と一人の思想で無い。儒敎は、支那民族の共產的德敎でありますからそこで後の人が更にそれを發展さして行かぬければならぬ。けれども割合に發展さして居らぬ。日本の儒者の中

ではは山鹿素行、伊藤仁齋、物徂徠などは原始儒教に歸らうとするのであるけれども、矢張さう云ふことをやつた方であるが、跡の人は一向やらぬ。各〻新しい見解を立てゝ儒教を發展させることを努めないから儒教の進歩はスッカリ止まつた。儒教などは今日本にあるか無いか殆ど分らぬ。儒教の學派といふものは何處に在るか眇として見えない。そこで儒教といふものはどうしても昔の儘ぢやいかぬ。そんなら今日我々は儒教に對してどう考へるかといふと儒教といふものは幾多の缺點を免れないものであるからして今日は儒教の教丈けぢやいかれぬ。足らぬ。足らぬならば何を以て補ふかといふと、西洋の學問、即ち倫理學だの、哲學の考を採つて來て補はなければならぬ。さうしてもそれが少しも儒教に戻らぬ。儒教は何處迄も儒教として繼續せぬければならぬといふことは少しも無い。我々は是非共儒教の內容を存續して行かぬければならぬといふ責任は有つて居らぬ。儒教が潰れれば潰れても宜い。けれ共儒教といふものは果してさう云ふも

のであらうか。儒教といふ名はどうでも宜い。一體儒教といふ名はモウ必要ない。今日の日本の立場からいふと倫理學や哲學の考で今日の世の中に要すべき德教を組立てゝ來さへすればそれで宜い。それが儒教の精神とは決して戻らぬ。儒教といふ名は無くても宜い。宜いが兎に角儒教の形式は幾らか殘る。儒教の內容は昔しの通りには存續しない。內容に於て變化は免れないが、儒教の形式といふものは殘る。その形式は如何なる處に認められるかといふと儒教といふものは、荒誕無稽の元素がない。迷信がない。儒教は當前の世間的道德でやつて行かうと云ふのである。その儒教中最も勢力の有る人は孔子である。孔子の敎が非常な感化を及ぼした。當時直接の弟子に偉大な感化を與へたのみならず、數千年の後までも、天下萬衆に感化を及ぼしたのは孔子の人格が然らしめたのである。孔子の敎の形式といふものは今日ではナカ〳〵重大なものになつて來た。日本の維新以來の德敎の有樣を見ると儒教といふものを必ず奉するといふ譯ぢ

や無いが、儒敎の形式と一致して來て居る。敎育勅語でも儒敎の形式と一致して居るのであります。少しも違はぬ。敎育勅語と儒敎と何處に戻る所が有るかといふと寸毫も無い。今日敎育社會に於て實際やつて居ることは儒敎の形式の中に在る。明治の今日にあつても儒敎の形式を脱却して居らぬ。矢張り荒誕無稽の事を交へないで全く世間的の德敎で以て修養して行けるといふ處に儒敎が手本を示し居る。儒敎がさう云ふ手本を示したのは非常に宜い。斯かる手本は他に求められぬ。西洋に於ても求められぬ。西洋には孔子の敎に對するものは無い。ソクラテースの敎は結果が餘程違ふ。あれは哲學となつて居ります。孔子のは哲學といふよりは德敎である。實踐道德である。理論と云ふは殆どないのである。哲學的論理的の事は無い代りに矢張それ丈けの長處を有つて居る。さうして斯かる德敎が西洋にはありませぬが近頃漸く出來つゝある。それは即ち倫理運動で道德に依つて行かうと云ふ考であります。そこで若し儒敎といふ言

葉を廣く用ゐればあれは西洋の儒教だ。西洋の倫理學者哲學者の大部分は儒者であります。儒者といふ言葉は好かぬかも知れぬが、廣い意味で言へば、ヴントでもパウルゼンでもヘフデングでも皆儒者です。天地人に通ずるを儒と謂ふのだから其應用は實に廣いのであります。大抵な人は次第に儒者的になつて來て居る。其方へ近寄つて來て居る。と云ふのは西洋の學者は段々宗教の儀式等を離れて古來儒者のやつた形式と似た形式を取るやうになつて來ました。又近世ゼームス抔が唱へて居るプラグマチズムも餘程儒教の精神と一致する所がある。又哲學の方で言ふ意志本位論（Voluntarismus）は儒教と矢張り一致して居る所がある。西洋の學風は此點から言へば次第に儒教的になつて來居る。儒教の形式は餘程大事なことになつて居るけれども儒教の内容は變つても差支ない。變へてならぬといふことは言つて居らぬ。變へなくちやいかぬ。孔子は變へてならぬといふことは言つて居らぬ。變へなくちやいかぬ。孔子は後生可ㇾ畏と言つた。後世の人が段々古人に優る事をやつて行かぬければ後生可ㇾ畏ぢや無い。

後生不足畏であります。後生不足畏の方になつて來てはいかぬ。又易の繋辭に變通といふことがある。時勢が變ると其變つた時勢に適應するやうにして行かぬければならぬ。孔子の時代は二千四百年前の支那の事でありますから日本の現況と違ふことは分り切つて居る。孔子の言つた中に是等の缺點が有ると言つても誰もそれを咎めることは出來ない。若しも孔子自身が今日に出て來て德敎を立てたならば、矢張今日の時勢に合ふやうにするでありませう。今日の時勢に合ふやうに德敎を立つると云ふことは寸毫も孔子の精神と相戾らぬ。假令ひ孔子の敎に幾多の缺點があるとしても又一方に於ては永遠不滅のものがある。さうして孔子の敎の立て方は今日の實踐道德の先鞭を着けたものである。二千四百年前に倫理運動をやつて支那全國を德敎化して仕舞はうとした。ナカ〳〵活氣あり精神ある偉い運動でありました。一代に於て偉いことをやつたのである。處がヘーゲルやショッペンハウエルが孔子の事を批評して隨分ケナして居る。殊

にヘーゲルはゲシヒテ、デル、フヒロソフヰーの中に論語を評して

diese finden wir allenthalben, in jedem Volke, und besser, es ist nichts Ausgezeichnetes.

と云つて居る。ヘーゲルには孔子の事は能く分つて居らぬ。極く不完全な飜譯物を見て孔子は斯んなものだといふことを論じて居る。それだから孔子の偉大な人格は少しもヘーゲルには分つて居らぬ。誤解して居る。少くも儒教の眞精神、眞意義と云ふものは丸で知らぬ。君子於其所不知。蓋闕如也。と云つてある。孔子は哲學者といふよりは寧ろ德教の祖師である。それが孔子の偉い處である。是迄基督教などにかぶれて居つた人も近來それを見て孔子の見識の偉いとが分つて來た。以前は牧師となつて會堂で以て祈禱などをやつて居つた者が疾くにそれを止めて近頃は儒教の復活で無ければならぬといふことを言つて來たのは儒教の形式の近世的で却つて健全なることが分つて來た爲である。さう云ふ儒教復活論者は一人ぢや無い。已に祈

禱などを止めて、段々孔子の方へ近寄つて來た人は一人ぢや無い。數人ある。孔子も丘之禱久矣と言はれたやうに獨りでは何か禱つて居られた。天でありませう。けれども祈禱と云ふことは儒敎にあつては人々隨意の事であつて、少しも儀式抔はない。儒敎の形式は全く世間的である。單に世間的の道德に依つて人格を修養して行く處に儒敎の特色がある。今日はモウ道德の基礎は哲學、倫理學、心理學、社會學等によつて建設すべきである。さうすれば進歩も出來る。それで以て今日に適應した德敎といふものが成立ち得ること疑ない。過去に於て儒敎が德敎として成立ちて來たから今後も出來ると思ふ。それに學理によつて基礎を造るの便宜があるから尙更の事である。今日は昔の儒敎よりも迴に進歩することが出來なくちやならぬ。今日は新材料が多くなり新知識が增して居るから、是からズッと先きに發展して行くことが出來る譯である。さうして先きへ〳〵と發展して行くに當つて儒敎といふ名は無くても宜い。單に儒敎で一向差支ない。

ければ共儒教はまだ學術の發展しない時に斯かることの出來得べきであるといふことをやつて見せた。だからして後世の人が斯かる事は出來ないと斷念して投て置くのは間違ひである。必ず出來るといふ自信を以て盛んに健闘して進んで行かなければならぬ。さうして行く處に此儒教の歴史が殘つた樣に德敎の歴史が出來る。その時代その時代に斯かる事業を負擔して努力して行くとは最も偉大な人間の使命である。學問の目的は畢竟研究其物にあるのでなくして研究から何か結果を出す爲である。研究の結果があればその應用が直接人間に關するとであつて極めて重大であります。けれども研究に際限がない。際限のない研究の結果を竢ちて而して後、行ふと云ふことならば、それは到底駄目である。行ひは日々の事であります。明日を竢つどころではない。今日已に行ひの標準が無くちやならぬ。況や社會は一人で無い。我四千萬の人間が日々何を標準として行くかといふことは研究の結果に竢たぬければならぬ。けれども研究は一代で

終るか二代三代で終るか分らない。さう云ふ研究の結果を待つて居る間に世の中は種々に變遷して仕舞ふ。それで其時代〳〵に適切なる德敎を立つるといふことは止むを得ぬことである。それは如何に困難なる事業であつても、必ず出來るといふ自信がなくてはならぬ。處が此事をやるのには何處までも偉大な人格を立てぬければならぬ。それは理想的の人格でも差支ない。但し具體的の人格ならば孔子がいゝ。孔子の言つたことが悉く今日役に立つと限つたことぢや無い。役に立つことも役に立たぬこともある。けれども研究して置く丈の歷史的價値はある。孔子の說いたことを倫理學として見たならば間違つて居る。倫理學では無い。孔子の說いたのは孔子の實行した結果を說いたのであります。どう云ふ工合にやれば道德的行爲が出來るかといふことを簡單に說いて示したのである。倫理學といふものと孔子のやつた實踐道德とは自ら違ふ。倫理學丈けやれば道德が自ら出來ると思ふのは間違ひであります。倫理學といふものは實踐道

德に大變助けにはなるけれ共、實踐道德は必ずしも倫理學を俟たぬ。實踐道德の側は孔子がやつて見せた。詰り最後の目的とすべきものをやつて見せた。玆に儒教の偉大なところがある。それで又宗教には佛教だの基督教だのといふ偉大な宗教がありまするが、その宗教は各、或一部の人の精神的要求を充たして居るに相違ないけれ共、併ながら日本人の大部分、……西洋も大抵同じ事であるが……矢張り成立宗教を離れて單に道德に由つて行かうといふ精神の人が多い。殊に學者教育家等の中には宗教家は大變少い。非常に少數です。昔からの宗教は餘り尊信しない。それならば何をやつて居るかと云ふに矢張り廣い意味に於ける儒教即ち德教をやつて居る。矢張りそれは學生でも多數のやつて居ることである。次第々々にさう云ふ風になつて來て居るけれ共そこに一つ危い事がある。それは外ではない。餘り單純で廣いから其精神を失ふ虞がある。その時代〳〵に盛んに德教を鼓吹する精神を發揚する人間が出て來なければならぬ。宗教の方

はそれ〳〵其の機關が有る。會堂や寺院があつてそれ〳〵宗敎の精神を鼓吹して居りますから繼續して行き居るけれども德敎の側は餘り單純で廣いから其精神を失ひ易い。失ひ易いから決して怠つてはならぬ。尙更努力してその精神を發揮して行かなければならぬ。それで儒敎と內容は違ふけれども、形式に於ては稍〻儒敎の如きものが今後社會の必要に應ずるであらう。成立宗敎といふものは段々必要が無いやうになつて來た。今日の宗敎の歷史を見れば次第〳〵に世間化してさうして道德の元素が多くなつて來居る。宗敎は古に溯る程道德の元素が少ない。原始宗敎に立返ると云ふと殆ど道德の元素を認められない。それが段々發展して來れば道德の元素が次第に多くなる。多くなる程德敎に近づいて來る。宗敎が道德化し、德敎が宗敎化して敎會若くは寺院組織の宗敎が純個人的となつて、道德的感化が大に社會に勢力を得るのであります。成立宗敎が發展して道德の元素が段々多くなればどうしても純道德とならぬければなら

ぬ。倫理的宗敎と云ふも其處迄至らぬければ純粹でない。處が儒敎は純道德を希望して居る。儒敎の內容は今日から見ると不充分であるけれ共、純道德を希望したことは事實である。唯、純道德を發展させて之を實現することが今日の急務である。今日の樣に時勢境遇一變して學問の大に進んで來るに際して宗敎は畢竟其處に歸着することになるに相違ない。宗敎と云へば、必ずしも成立宗敎に拘泥する必要はない。佛敎とか基督敎とかさう云ふ名を立てないで單に廣汎なる宗敎的觀念といふものが有れば宜い。即ち儒敎の如きものが有れば宜い。儒敎の如きものが有れば宜いといふのは儒敎の目的とする所は純道德で極く廣い。又之れを學校で敎へても差支ない。何故ならば自然科學と戾らない。佛敎や基督敎は學校で敎ゆるのに困るといふのは一方で敎へて居るナチユラルサイエンセスと兩立しないからである。日本のやうな元來宗敎に冷淡な處は德敎でやつても一向差支ない。それで行けるのであります。それで純道德は廣い意味の宗敎になる。

佛敎や基督敎を指して倫理的宗敎抔と云ふ不正確の意味でなくして、全く純粹なる意味に於て倫理的宗敎と云へるのである。昔の佛敎とか基督敎とかさう云ふやうに、必ずしも一つに限つた宗敎の考で無くして最後に皆普汎なる倫理的宗敎に歸着する。誰でも道德が無くては人間たることが出來ないから必ず、仕舞にはそれに歸着する。佛敎、基督敎などゝいふものも次第に其處に接近して來居るから最後にはさう云ふ倫理的宗敎に注意を拂つて斯かる廣汎なる純道德の立場に歸着して仕舞ふだらうと思ひます。

（明治四十一年十月廿五日）

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己れを盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

西郷南洲

附錄の六

第一　朱舜水の事蹟及び學説

朱舜水は明末の儒者である。丁度明の亡びる時に世に出たが爲に、屢〻亂を避けて日本に來たのである。或時は安南に行つて安南の兵を借りて明を恢復しやうとしたこともあるが、其れは成功しなかつた。其後また日本に來て、日本の兵を借りて明を恢復する積りであつたであらうけれども、是れ亦志を得ずして遂に日本に留まることになつて、長く長崎に居つた所が、其内に柳川の儒者安東省菴が之を知つて、舜水に師事して、自分の僅の俸祿の半分を割いて舜水の生活費と爲したので長く學界の美談として傳へられて居る。（第一篇第五章安東省菴の處を參考せよ）其後舜水は水戸の義公に知られて、賓師として聘せられたが、とう〳〵公の駒込別墅即ち今の第一高等學校構内に於て歿くなつて、水戸の瑞龍山に葬つてあるのである。舜水の生れたのは西暦紀

元千六百年卽ち我が慶長五年で、其歿したのが千六百八十三年卽ち我が天和三年である。彼れは八十三歲まで生存して居つた。隨分長命であつたのである。一體支那の學者は餘り長命でない。昔から八十歲以上の學者と云ふものは割合に少ない。孟子以來何人あるかと指を屈すると洵に少數である。舜水の如きは我が日本に來て平和な生活をした爲めに斯樣に長命であつたのであらう。舜水は儒者は儒者であつたけれども、唯〻儒者と云ふのみでない、一種の志士であつたのである。其事蹟は『先哲叢談』〔卷二〕にも出て居るし、又『朱舜水全集』の附錄にも精く出て居るから今は唯〻其概略を述ぶることにして置く。

著述としては從來『朱舜水先生文集』二十八卷が版本として行はれて居つたのであるが、其外に寫本で傳つて居つた加賀本の『朱徵君集』と云ふのが十卷ほどあり、又支那に傳はれる『泊舟稿』と云ふのが一卷ある。泊舟稿と云ふのは舜水の詩を集めたものである。さうして明治四十五年に至つて稻葉君山氏が『朱舜水全集』と云ふのを出版するに當つて

總て此等のものを其中に收載したのである。尚ほ其上附錄としていろ〱朱舜水に關する文章が採錄されて居る。此『朱舜水全集』を見るといふと舜水の文章、學說其他種々なる事が明瞭になる。

次に舜水の學說に就いて少しく述べることにしやう。舜水は學者は學者に相違ないけれども、專ら道學を研究すると云ふやうな學者ではなかつたのである。一は時勢が時勢であつたからして、さう專門的の研究をすることは不可能であつたかも分らぬけれども、併し唯、其れ許りではない。餘程道義の觀念が强いけれども唯、道學者と云ふのではなかつた樣である。併ながら、なか〱道義を重んずる精神が盛であつた爲に其影響も尠くない。水戶の義公に聘せられてより修史の事業にも影響したであらうし、又水戶の學界に精神的の感化を及ぼし、其他にも種々なる關係が生じて居る樣である。殊に門人としては先づ第一に水戶の義公がある。義公は舜水の門人となられたのであつて、朱舜水先生文集には門人と書いてある。あれは義公が編纂になつ

て居るのである。それから安積澹泊、安東省菴、山鹿素行と、此四人は舜水の門人と云つて差支ない人々である。尤も山鹿素行は獨り舜水に學び、舜水の學説を紹いだ譯ではない。殊に素行は古學を主張し且つ武士道の學派を開いた人であるからして、他の人々の樣に純粹な舜水の門人としては少し具合が惡いけれども、併し兎に角舜水にいろ〳〵質問をして習つたことがある。此等の門人の關係から見ても舜水は日本の朱子學派を論ずるに當つて看過する譯に行かないのである。さうして又學説の上に於ても多少講究すべき點がある。先づ第一に舜水は陽明學派であると云ふ疑を受けて居る。嘗て雜誌『陽明學』に於て、舜水は王陽明と同じ郷里に生れた人で、學説もやはり陽明の流派に屬するものである、と、斯う云ふ具合に隨分精しく論じた人がある。果して然うであらうか。此點に就いて吾々の見る所を明にして置きたいのである。

『朱舜水全集』を研究して見るといふと、舜水は王陽明を多少譽めた樣

な處がある。例へば「王文成卽有二高才一」と斯う云つて居る。又舜水が註脚などに拘泥しない處は餘程陸象山に似て居る。又舜水の鄕里は餘姚と云ふ所であつて、陽明の出生地であるからして陽明の學派を餘姚學派と云ふ位である、彼れは「王文成爲二僕里人一。然燈相炤。鳴鷄相聞。」と斯う云つて居る。それで鄕里は成程王陽明と同じであつたに相違ないけれども、鄕里が同じであれば必ず學說も同じとは限らぬのである。舜水は大分陽明を譽めて居るけれども、亦陽明を貶して居る處がある。例へば「王文成亦有二病處一。然好處極多」と。王陽明を論ずるに當つて「有二病處一」と云うてズッと貶して置いて、さうして又「好處極多」と、云つて譽めて居る樣な具合である。さうして又「英雄也」とも云つて居る。大分譽めて居るかと思へば「非二僕宗二陽明一也」と云つて、確に陽明學派の者でないと云ふことを明言して居る位である。さうして「若二王陽明先レ事之謀。使二國家危而復安。至二其先時擊二劉瑾。堪レ爲二直臣。惜其後多坐二講學一節。使二天下多一無限饒舌一。」と云つて、大變に亦陽明を貶して居る。彼れは餘程宋明理學の

弊に懲りて居つたと見えて、餘り區々として理學に沒頭するやうな態度は見えないのである。けれども陽明學派でないと云ふことは明瞭に述べて居る。それのみならず、嘗て安東省菴が少し迷を生じて陽明學派にならうとしたことがあつて、そこで疑を決する爲めに舜水に手紙を遣つて其事を問ひ質した。其時舜水が安東省菴に手紙を送つて答へて左の如く言つたのである。

學者之道。如治裘遴其粹然者而取之。故曰千金之裘。非一狐之腋。故曰擇其善者而從之。其不善者而改之。若曰我某氏學某氏學。此欺人盜名。巧取世資者也。何足傚哉。陽明先生爲不佞比隣。向日所言。終不肯少有阿私。賢契猶能記憶否。至於更爲朱陸兩可之見。則大非也。世間道理。惟有可不可二者。無兩可者也。（安東守男所藏舜水書翰）

斯樣に此書翰の中には「陽明先生爲不佞比隣」云云。至於更爲朱陸兩可之見則大非也。」と斯う云つて居る。陽明先生不佞の比隣たりと云ふのは、鄕里が近かつたと云ふばかりではなく、餘程學說に於ても近い處があ

ると云ふやうな意味も含まれて居る樣である。けれども彼れが決して陽明學派の者ではないと云ふことは明である。さうして更に朱陸兩可之見を爲すに至つては則ち大に非也と云つて、決して迷うてはならぬと云ふことを辯じたのである。朱陸兩可の見を抱けば陸象山と同じ思想の系統の王陽明も是としなければならぬ譯であるからして旗色が大變曖昧となつて來るのである。舜水は決して兩可と云ふ考ではいかない、何處迄も朱子學派の一本筋で以て行かなくちやならぬと云ふのである。

舜水は朱子學には深大なる關係がある。それで周濂溪だの程明道を尙んで居る。それから漢に於ては董仲舒、明に於ては薛敬軒を尙んで居る。周濂溪、程明道は孰れも朱子の尙ぶ所である。薛敬軒は無論朱子學派の人である。さうして人に對して「朱子之註不可廢」と、斯う云つて居る。また「宋儒之學可爲也」と、斯樣にも云つて居るからして、彼れが朱子學派の人であると云ふことは明瞭であつて毫も疑を挾むの餘

地はないのである。併ながら宋學の弊に懲りて居つたと見えて「宋儒之習氣。不可師也。」と云つて居る。宋學は必しも斥けぬけれども宋學の習氣に至つては斷じて避く可きであると云ふ意味である。それから「伊川先生及晦菴先生。但欲自明己志。未免有吹毛求疵之病。」斯う云つて居る。程伊川や朱子などに付ても全然心服して居つた譯ではない。多少さう云ふ批評もする位である。けれども又朱子に付ては斯う云つて居る。「朱子道問學。格物致知。於聖人未有所戾。」と云つて、朱子の學問が聖人の趣意に能く合つて居ると云ふことを述べて居る。

舜水が朱子學流の人であると云ふことは次の五つの點に依つて之を知るのである。

第一は、彼れが宋儒及び宋儒系統の人を尙んで居ると云ふことである。第二は朱子の註を取る精神が見えて居ると云ふことである。第三は彼れが德目を擧げるときに陽明學の德目は殆ど擧げない。例へば良知であるとか、知行合一であるとか、さう云ふ樣な術語を遣はない。

さうして之に反して朱子學派の德目を多く遣つて居る。朱子學派では誠、敬等の德目は大變大事なものであるが、さう云ふ事を談ずることが多い。彼れの遣ふ術語が朱子學派の術語である。第四には彼れは大に大義名分を尙ぶのである。大義名分を尙ぶと云ふことは朱子學派の特色である。朱子が資治通鑑綱目と云ふものを著して、司馬溫公よりズッと大義名分の精神を嚴重にした。それが日本にも夙く傳はつて、北畠親房などの書いた物にも影響して居る。所が舜水も朱子學派の側であるから大義名分の精神を以て日本に這入つて來た。水戶の學派には丁度其れが適切であつたのである。陽明學派では大義名分と云ふことはやかましく言はぬのである。さう云ふ點を見ても舜水が朱子學派であると云ふことを知るに足ると思ふ。第五には舜水の門人に朱子學派が多いことである。水戶の義公は固よりの事。安積澹泊でも、安東省菴でも皆朱子學派の人である。獨り山鹿素行は一家の見識を抱いて古學を主張したのであるが、併し其古學と云ふこと

は多少舜水にもあつたのである。それで素行も學脈系統に於て全然舜水と無關係と云ふのではない。兎に角門人に陽明學派の人と云ふものは無い。さう云ふ事を考へて見ても舜水の朱子學派たることは明である。

尤も舜水は非常に狹隘な純粹な朱子學派の人と云ふ譯ではない。廣い意味に於て朱子學派の人と論斷することが出來ると謂ふのである。彼れが餘り狹い意味の道學者でなかつたと云ふことは、彼れが斯う曰つて居るので分る。「本非倡明道學而來。亦不以良知赤白自立門戶」と斯う曰つて居る。彼れは其樣に朱子學派だとか、陽明學派だとか、斯う云ふ學派の區別を明にして一派を成さうと云ふやうな精神を懷いて居つたのではなかつたのである。彼れの學問は一體に經世實用の學であつた。それで「爲學當有實功有實用」と、斯う曰つて居る。さうして殊に禮を重んじた。文は必要とするけれども詩は必要でない、と、斯う言ふのである。多少詩も作つては居るけれども、詩はさう重んずる

所でなかつたのである。さうして却て歴史を大變尙んで居る。人に資治通鑑を熟讀する樣にと云ふことを勸めて居る。「資治通鑑。也且看」此一部。俟」文義透徹。玩索精讀。」などと云つて居る。彼れの學問が幾らか亦古學に似た樣な處がある。古學に似たと云ふのは實行を尙ぶ樣な處である。それで隨分古くから彼れの學問を古學と見た人がある。安積澹泊が舜水文集の後序を作つて、「先生獨爲」古學」」と云ふやうなことを云つて、舜水を古學者と見て居る。又「先生獨爲」古文」」ともある。けれども舜水は純粹な古學者ではなかつたのである。但、多少古學者と見えるやうな點もないではなかつたといふことは言へる。其處等が或は幾らか素行に影響したかも分らぬ。其影響を否定する譯にも行かない樣である。

舜水はなか〳〵妙な事を能く知つて居つた。嘗て水戸に行つて聖堂の模型を觀たときに實に感心したのである。義公の要求に應じて造つたのであらうが、全く彼れが記憶によつて聖道の模型を精細に拵

へたのである。いづれ湯島の聖堂も此模型によつて拵へたのであらうが、實に細かに記憶して居つたものであると感心せざるを得ないのである。どうも普通の者では迚もあんなに細かく記憶して居る譯には行かない。殆ど工業專門の士であるかの如くに微細なる處まで記憶して模型を拵へた。斯樣なことは餘程儒敎の盛な時には助を爲したに相違ない。さうして釋奠の禮なども餘程彼れが細かに傳へたらしく思はれる。舜水の德川時代の儒敎に影響したことは決して尠少でなかつたものと考へられる。

第二　賴山陽の精神及び影響

賴山陽は安永九年(卽ち西曆一七八〇年)に生れて天保三年(卽ち西曆一八三二年)に五十三歲で歿した人である。山陽は德川時代に於ける有名な文豪であつて、其事蹟は「近世叢語」「藝備偉人傳」「山陽遺稿」等の諸書に載つて居るのみならず、又坂本箕山の如きは特に精しく賴山陽の事蹟を叙述して居るやうな次第で、山陽の事は能く世間に知れ渡つて居るから、玆には單に山陽の朱子學系統に如何なる關係を有して居るかと云ふことを明にしやうと思ふのである。

山陽は稀なる大才子であつて、文章の技倆に於ては容易に他人の及び難い處があつたのである。まア流義は違ふけれども稍〻徂徠と匹敵して居る樣に思はれる。併乍ら徂徠にあつては經學が根柢を成して居つたのであるが、山陽は經學の方には力を用ゐないで寧ろ史學に力を用ゐたのである。それであるからして山陽と徂徠とは餘程違つた

形迹を遺して居る。唯、德川時代に於ける文豪として之を見るときは兩者は恰も伯仲の間に在るが如き觀を生ずるのである。徂徠は初は朱子學であつたけれども晩年古學に變じて、古學者として一派を成すに至つたのである。山陽は其れと違つて、朱子學の空氣の中に成長したのである。山陽の父は卽ち賴春水であるが、春水は固い朱子學派の人であつた。春水は文集もあり其他種々なる著書もあつて、當時優に一家を成して居つた人である。それから春水の弟に賴杏坪と云ふ人が出て居るが、杏坪は亦闇齋派の系統を引いた朱子學者であつて、朱子學に關する著述としては原古編が二卷ある。さう云ふ樣に、山陽の父も叔父も朱子學者であつたのである。それに春水は嘗て江戶に來つて昌平黌に於て學を講じた事もあるので、當時の三博士などは皆相識の間柄で其交際は隨分親密であつたやうに思はれる。山陽が十三歲(數へ歲の十四歲ならん)の時に江戶に居る春水に詩を送つたことがある。其詩は彼の山陽詩鈔の卷頭に「癸丑歲偶作」として載せてある。

十有三春秋。　逝者已如水。　天地無始終。
人生有生死。　安得類古人。　千載列青史。

此詩を讀んで見ると迚も十三童の作とは思はれぬ樣に好く出來て居る。柴野栗山が此詩を見て餘程驚いたらしく思はれる。さうしてなか〳〵是れは珍らしい子供であるから能く敎へて立派な人に爲したら宜からうと言ひ、先づ歷史を讀まして古今の事を知るやうにするが宜からうが、歷史を讀ませるには通鑑綱目より始めるが宜しい、と云ふやうなことを言つた。其事を或人が山陽に傳へたので、山陽が感奮興起して每日通鑑綱目を讀んだが、併し治亂の大勢を覺ゆるのみであつたと云ふことである。其後十八歲の時に叔父の杏坪に附いて江戶に來つて尾藤二洲の塾に入つた。けれども其處には長く居らなかつた。故あつて一年許りにして歸つたのである。それから備後の菅茶山の塾に居つたこともあるが、後京都に行つて京都に住まふことになつたのである。山陽は隨分彼方此方歷遊をしたのであるけれども、併し京

都が彼れの住處であつて、死んだのも京都である。學者にしては早死であつた。肺結核に罹つて五十三歲にして歿したのである。

其朱子學に關係のある點を考へて見るといふと、啻に父の春水、叔父の杏坪が朱子學者であつたと云ふのみならず、間接に山陽を刺激して通鑑綱目」を讀む樣にしたのは朱子學者の柴野栗山であつたし、又山陽が江戶に來て敎を受けたのは尾藤二洲であつたが、是れも當時の熱心なる朱子學の主張者であつたのである。それであるから山陽は朱子學の空氣の中に成長した譯である。さうして寬政異學の禁の後の事であるから、異學は壓迫されて朱子學が大に勢力を得た際である。乃ち朱子學の空氣の中に成長したからして山陽も大體朱子學であつたのである。門人の江木鰐水の書いた行狀に「經說歸主洛閩而不甚墨守。要以通古聖賢立言大義爲務。」と云ふやうなことが見えて居る。如何にも其通りであるので、大體は朱子學に相違ないけれども、普通の朱子學者の樣に、朱子學に拘泥して彼是細かいことを云ふといふ風ではなか

つたのである。それに經學者でなくして寧ろ史學文學の方の人であるが爲めに尙更窮屈な朱子學者の態度はなかつたのである。彼れは嘗て朱子の像に題して左の如き詩を作つて居る。

韓岳驅馳虎嘯風。四書獨費畢生功。

一張萬古科場㲉。無數英雄墮此中。

朱子も斯樣にけなして居る位であるからして、さう頑固な朱子一點張の人であつたとも思はれぬのである。さうして一方に於ては陽明學者の大鹽中齋などと隨分親密な交際をして居つた位である。

山陽は是れと云ふ學說を書いたものはない。彼れの著書の主なるものは、やはり「日本外史」と「日本政記」である。「日本外史」は源平二氏より筆を起して德川時代に至つて居る。「日本政記」は神武天皇より筆を起して後陽成帝に至つて居る。さうして「日本政記」は彼れが最後の著述と云つて宜いのであらう。死ぬる間際まで筆を執つて、完成しやうとしたのである。其外には彼れの詩文を集めた「山陽遺稿」が七卷あり、又

別に「山陽詩鈔」が二卷ある。其他注意すべきは「通議」である。初「新策」と云ふものを著はしたのであるが、段々其れを修正して終に「通議」と云ふものに爲したのである。是れは政治經濟に關する著書である。それであるから「通議」なるものは山陽の政治經濟に關する學説を述べたものと云ふことが出來る。併乍ら哲理に關するが如きものは一つもない。殊に朱子學の學説を叙述したと云ふべきものは尙更無い。併乍ら「日本外史」「日本政記」又は詩文等に顯れて居る山陽の精神に至つては朱子學の系統に於て實に顯著なるものがあるからして、朱子學の歷史に於て何うしても看過する譯に往かぬのである。山陽の書いた「日本外史」や「日本政記」の如き歷史は唯々單に史的事實を研究したと云ふに止まるのではない。一の學究が無意味に史的の事實を研究したと云ふのとは大變違ふ。唯々物好きで道樂的の研究をしたと云ふ樣な事と混同しては山陽も甚だ不本意であらうと思はれる。

山陽の歷史家としての地位は餘程水戶の義公及び烈公の其れと似

て居るのである。遡つて之を考へれば、北畠親房の「神皇正統記」の精神と一致して居るのである。一體北畠親房が朱子學者であつて「通鑑綱目」を研究して大に大義名分の精神を得たのである。況して親房の境遇が南北朝時代の事であるからして必然に「神皇正統記」を著さなければならぬ様な事になつて來たのである。「神皇正統記」は單に歷史を書くと云ふ動機から書いたのではない。皇統の正閏を正し、南朝の正統たることを明にし、臣民の執るべき方針の那邊に在るかを示す爲のものである。水戶の大日本史もやはり是れと同じ精神で編纂されたものである。唯、二百五十年の長年月を掛け、衆多の學者の力を累ねて大成した大規模の歷史と云ふ相違があるだけである。精神に於ては同じと云つて差支ない。所が、山陽の「日本外史」及び「日本政記」を著した精神に至つては矢張是等の歷史と同一轍に出で居る。日本外史は其叙述する處は武家時代に在つたので其間に勤王の精神を籠めたのであるけれども、日本政記に至つては殆ど神皇正統記だの大日本史と變は

らない樣な態度を取つて書いてあるのである。其れがやはり朱子學者の態度である。大義名分を重んずると云ふのは卽ち朱子學者の精神である。陽明學の方では大義名分などといふ事はやかましく云はない。又古學派でも素行一派の外は尙更さういふ事は云はない。それで區々たる註解の樣なことに就いては山陽は餘り彼是言はなかつたけれども、大義名分と云ふ樣な朱子學の重要なる精神を捉へて起つて來て、さうして歷史を編纂する上に其れを大に活用した形迹が見えるのである。それであるからして「日本外史」や「日本政記」は維新の際に偉大なる影響を及ぼしたに相違ない。言ひ換ふれば、維新の頃勤王の精神を喚起した一大原動力となつて居るのであらう。

又山陽が其程の影響を及ぼしたと云ふのは、彼れが非常に能文の士であつたことも補助原因となつて居る。歷史を著しても、廣く世間に愛讀せらるゝ樣なことがなければ實際影響も大きくならぬけれども、非常に能く書いてある歷史であつて之を讀めば興味津々として盡き

ずと云ふ樣なことであるから、なか〱廣く世間に愛讀せられたのである。愛讀せらるれば愛讀せらるゝ程山陽の精神が廣く社會に傳はつて行く。隨つて山陽の影響が尋常でなかつたのである。

山陽は獨り「日本外史」や「日本政記」に依つてさう云ふ影響を及ぼしたと云ふに止まらない。まだ外に注意すべき點がある。それは彼れの詩文である。彼れの詩文が亦なか〱影響した樣に思はれる。文は言ふ迄もないから姑く措いて、彼れの詩に就いて注意すべきことは、當時詩人は隨分多かつたのであるけれども、其中でも山陽の詩と云ふものは青年學生の吟唱して傳ふる處となつたのである。それが當時の青年學生の血を沸す樣な力があつたからである。若し專門的技巧から言つたならば寧ろ彼れの叔父たる賴杏坪の方が優つて居る。併ながら山陽の詩は其傑作に至つてはなか〱豪邁なる處がある。何となく氣魄精神が其處に籠つて居る。それで青年學生に愛吟せられた傑作が非常に多い樣な次第である。さうして其中に亦勤王の精神な

んと云ふものも含まれて居つて、此等の詩に依つて勤王の精神を青年學生の間に傳へたことも亦尠少でないと見なければならぬ。

山陽は朱子學の歷史に於て優に注意を拂ふべき特殊の地位を有せる一大人物である。

第三　佐久間象山の人格と學說

佐久間象山は文化八年(卽ち一八一一年)に生まれ、元治元年(卽ち一八六四年)に歿した人である。歿した年が丁度五十四歳で、山陽より僅に一歳上であつたのである。山陽は肺結核で歿したのであるが、象山は刺客に殺されたのである。象山は信州松代の藩士であつたが、二十三歳の時江戸に出て佐藤一齋の門に入つて學んだのである。さうして象山は後に至るまでも一齋を非常に尊敬して居つた樣に思はれる。けれども、一齋は最後まで學者として其態度を變へなかつたのであるが、象山は單に學者と云ふのみでなく、餘程活動的の處もあり、又時勢に應じていろ〳〵變化する處があつたのである。象山は幕末の偉人である。幕末維新の際に於ける傑出の偉人が四人ある。マア其外にもあるけれども、最も傑出した者は四人の樣に思はれる。それは江川太郎左衞門、佐久間象山、吉田松陰、西鄕南洲、此四人である樣に思はれる。

其中で最も學問に緣の深かつたのは象山と松陰であると思ふ。孰れも學者である。けれども只の學者ではない。時勢の產出した英傑であつたのである。殊に象山は深大なる知識があつて、學東西を兼ね、一代に傑出して居つた處が見える。

象山の學說に就いて一言して置かんければならぬことは、象山は陽明學者の人として曩に『日本陽明學派之哲學』の中に列して置いたのである。而してそれは省𠎝錄、象山詩鈔其他當時出版されて居つた書籍に依つて斷定したのであつたが、其後大正二年に至つて「象山全集」が出版された。「象山全集」に依つて見るといふと、彼れを以て單に陽明學者とするだけでは十分でない。此事に就いては飯島忠夫氏が嘗て『東亞之光』(第八卷第十號)に於て隨分精しく辯じて居られるが、飯島氏の論斷された處は大體的中して居るやうに思はれる。併しながら多少辯明を要することがある。一體一齋の門下の人は自から陽明と朱子の二派に分かれて行つて居る。一齋が表面朱子學であつて裏面陽明學で

あつたが爲に其流れが自ら二樣になつて行つた譯である。象山はどちらかと云ふと一齋の朱子學の側を承けて起つて來たのである。それで「迨有宋洛閩諸君子出。而後學者始得復聞聖賢之至論。」と云ふやうなことも云つて居るし、又「題一齋先生遺墨」と云ふ文の中に、一齋に對して其恩惠を述べた後に「先生主張王學。不好窮理。余則專承當程朱之規。以窮天地萬物之理。爲斯學起手。漢人所未窮知。則以歐羅巴之說補之。是則所以不能與先生不異者也。」と斯う云ふて居る。それのみならず彼れは斯う云ふことを云つて居る。「近日竊欲上啓林祭酒。請乘此機會。一洗海內學術之弊。一如有明洪永成弘之間。上之敎者。惟以程朱爲敎。下之學者。惟以程朱爲學。其違叛於此者。雖在俊髦異材。必黜而不取。若果如是。則將功利之毒日消。而考據文辭之陋日滅。」と。是れであると案外象山は朱子學を標榜して寧ろ異學を禁ずるの精神である。彼れの豪傑の資を以て餘程寬大であるべき樣に思はれる處に、却て學說の側では餘程嚴重なる態度を執つて居ることは意外に感ぜられるのである。さう云ふ譯であるか

らしで大體彼れは朱子學の立場である。さうして又彼れは餘程邵康節を尙んで居る。嘗て邵康節の全集が是れまで無いと云ふので、邵康節の文集を編纂しやうと計畫したのである。實は明の徐必達が校正した『邵子全書』二十四卷があるけれども、彼れには知れて居なかつたのであらう。それで其序文は象山淨稿の中に載つて居る。彼れは斯う云ふことを云つて居る。「余嘗謂。欲ㇾ窮₂物理₁者。必當ㇳ自₂邵子₁入ㇾ焉。其所ㇾ著皇極經世。擊壤集二書。固學者之所ㇾ宜₂潛玩₁。」と。斯う云つて居る。邵康節は宋學の系統から云ふと少し橫に外れて居るけれども、マア宋學の系統に入れて宜い人である。併し象山が邵康節を尙ぶのは唯、宋學の關係があると云ふばかりでなく、其窮理を喜ぶのである。象山は餘程窮理と云ふ精神がある。さうして窮理といふことから言ふと陸象山、王陽明では足りない。陸象山、王陽明は何うしても心の方を主として外界の物理を窮めると云ふやうな事はしない。王陽明の方では良知を明にすることが主である。陸子も、良知とは云はぬけれども、やはり心を

主として窮理を取らぬのである。象山は其れは喜ばぬ。何うしても外界の窮理を要する精神である。殊に蘭學をやつて窮理の必要を深く感じて居るのみならず、自ら窮理を喜んで居るやうな有樣であつて、蘭學と宋學とを照らし合はせて考へると窮理と云ふことに於ては一致して居る處からして、隨て陸王の學よりは寧ろ宋學を尙ぶ樣になつて居る。程朱を主とするのであるけれども、併し邵康節などは亦窮理と云ふことに於て大に力めた形跡があるからして特に之を喜ぶのである。

然らば象山は純然たる朱子學派の人であるかと云へば、多少やはり陸王の影響もあるであらうかと思はれる。まア陸子は兎に角、王陽明との關係は看過すべきでなからうと思ふ。彼れは「象山說」と云ふものを書いて、其中に陸子を餘程貶したかと思ふと亦大に陸子を譽めて居る。大に譽めて居るかと思ふと亦其弊害を述べて居る。さうして最後に至つて「予嘗竊有見於此。故爲學之方。一以程朱爲準」斯う云つて居る。

併乍ら陸子を以て亦自分の警と爲すと云ふやうなことも其後で述べて居る樣な次第で、上げたり下げたりして居る。貶したかと思ふと亦譽めて居る。それで決して全然貶しては居らぬのである。それから陽明の側に於ては斯う云ふ關係が見える。彼れ象山はひどく熊澤蕃山を追慕して居るのである。

「跋熊澤蕃山眞蹟」と云ふ文が「象山淨稿」の中に見えて居るが、其中に斯う云ふことが云つてある。「夫以英雄之資。抱經濟之學。聲色貨利之習。介然無以入於其胸中。挺特邁往。跨凌古今者。於此亦可想見其彷彿。而百載之下。令人竦然起敬。如對嚴師畏友。」と實に推尊極まれりと謂ふ可しと云ふやうな有樣である。

其外「省諐錄」に書いてあることを見ると、餘程陽明學者の語錄に似た樣な處がある。一體日本の陽明學者は大體二樣に分かれて居る。學者風の人は中江藤樹を尊崇して居り、經濟政治の方に傾いた人は熊澤蕃山を尊崇して居る。彼の横井小楠であるとか、橋本左内であるとか、

山田方谷であるとか云ふ風な人は皆熊澤蕃山を尊崇して居る。さうして象山も亦大に熊澤蕃山を推尊して居る處を見ると、どうも陽明學の影響のあると云ふことも否定されぬ樣である。況して象山一代の活動の狀況などを考へても、餘程陽明學の樣な處が見える。さうして象山は功利と云ふことを酷く斥けて居る。陽明學者は經濟政治に心を向けることはあるけれども功利は取らない。まア其れは朱子學者も同じ譯であるけれども、併し餘程陽明學者風の態度もないことはない。要するに象山は其主張して居る處を見ると大體朱子學者たることは蔽ふ可からざる所であるけれども、亦隨分陽明學の影響も受けて居る樣に思はれる。固い窮屈な朱子學派のやうな主張をして居るかと思はれるけれども、それに拘らず大に蕃山をも尊崇し、又陸子と雖も之を貶するかと思へば、亦之を譽めて居るのであるからして、其處は餘程注意すべき點であると思ふ。

それにもう一つ注意すべき事は、象山の門人の中に純然たる朱子學

者は少なくして寧ろ陽明學者が多いと思はれることである。例へば河井繼之助は象山の門人であるが、有名な陽明學者である。それから眞木和泉であるとか橋本左内であるとか云ふ人々は皆象山の「及門錄」中に見えて居るが、此等は何れも陽明學者である。それから吉田松陰は象山の門人であるが、まア陽明學者としてもよいのである。松陰の門人の高杉東行は陽明學者であつた。さう云ふ具合に象山の學系の側から見ても、どうも陽明學の關係が多い樣に思はれる。又遡つて一齋の學問を考へると云ふと、表面は朱子學であつても裏面は陽明學であるからして、其れが少しも象山に影響せぬといふことは殆ど考へられぬのである。

明治三十八年十二月十二日印刷
明治三十九年一月十五日發行
大正四年六月一日訂正增補五版印刷
大正四年六月四日訂正增補五版發行

朱子學派之哲學奥附
定價金貳圓

著述者 井上哲次郎

東京市神田區裏神保町九番地
發行者 合資會社 冨山房

合資會社冨山房社長
代表者 坂本嘉治馬

東京市牛込區榎町七番地
印刷者 渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地
印刷所 日清印刷株式會社

發兌元 （明治廿九年六月創立） 合資會社 冨山房
（電話本局一〇三六） 振替貯金口座五〇一番

東京 合資會社冨山房出版圖書特約販賣所

東京神田區 東京堂
同 同 文會堂
同 同 上田屋
同日本橋區 林平次郎
同 同 杉本書店
同 同 文盛堂
同 同 青野書店
同 同 至誠堂
同京橋區 東海堂
同 同 目黑支店
同 同 北隆舘
同 同 良明堂
京都寺町通 松田庄助
同 同 若林茂一郎
同 同 寶文舘
同 同 丸善支店
同篠山 小山富之助
同舞鶴 坂根榮正堂
大坂市東區 松村文海堂
同 同 三宅莊藏
同 同 盛文館
同 同 丸善支店
北海道札幌 富貴堂
同 同 維新堂
同函館 一二堂
同 同 魁文舍
同小樽 川南重祐
同旭川 村上賴夫
樺太 北進堂
同 若林書店
横濱市 弘集堂
同 第一有隣堂
同 勉強堂
同 第四有隣堂
兵庫神戸市 寶文館支店
同西ノ宮 策之房
同洲本 福浦文藏
同柏原 中井正吉

同姬路 木村治作
同龍野 竹內伊八郎
同明石 福井宗吉
同豐岡 石田松造
長崎市 好文堂
同 安中虎與號
新潟長岡 目黑十郎
同 同 覺張治平
同高田 高橋書店
同新發田 萬松堂支店
同三條 野島書店
同柏崎 高桑儀作
同直江津 柿村卯之吉
同新潟市 萬松堂支店
同 同 北光社
埼玉浦和 高野幸吉
同熊谷 伊藤儀八郎
群馬前橋 煥乎堂書店
同桐生 竹內藤吉
千葉東金 多田屋本店
同千葉町 多田屋支店
同松戸 立澤捨五郎
同 同 坂入門十郎
茨城水戸 川又銀藏
同 同 寺田書店
同龍ケ崎 富山石助
同水海道 明文堂
同 同 新々堂
同太田 宮田梧七
栃木宇都宮 煥乎堂
同足利 青木宇一
同栃木 出井書店
愛知名古屋 川瀨代助
同 同 永東書店
同 同 三輪書店
同 同 星野松次郎
靜岡市 吉見書店
同濱松 谷島屋

同沼津 蘭契社
同 同 杉山支店
同江尻 瀧治三郎
奈良市 木原文進堂
山梨甲府市 柳正堂
同 同 須藤朗月堂
同 同 徵古堂
滋賀長濱町 吉田文泉堂
同彥根 廣田七次郎
同大津 文泉堂支店
岐阜岐阜 郁文堂
同高山 平田書店
長野長野市 西澤喜太郎
同松本 水琴堂
同 同 松榮堂
同 同 高美書店
同 同 鶴林堂
同 同 明倫堂
同上諏訪 宮坂日新堂
同 同 堀田松造
同小諸 中屋七郎兵衛
同飯田 西澤支店
同野澤 西澤支店
宮城仙臺市 金港堂
同 同 鈴木英三郎
同古川町 佐々木榮之進
福島福島町 西澤支店
同若松市 西澤支店
同 同 鈴木三郎
同郡山 磐岳堂
同 同 虎屋忠左衛門
岩手一ノ關 文港堂
同盛岡 佐々木仙助
青森弘前 今泉道次郎
同青森 今泉支店
同八戸 伊吉商店
同 同 浦山青霞堂
山形山形市 五十嵐書店

同 同 牧野德太郎
同米澤 市川盛文堂
同酒田 中村禎吉
同鶴岡 日向源吉
同新庄 大泉善助
秋田秋田市 成見清兵衛
同 同 石川信助
同大館 藤島常三郎
同増田 東海林本店
福井福井市 品川書店
同 同 中村六三郎
石川金澤市 宇都宮源平
同大聖寺 谷作男
富山富山市 中田書店
同高岡 學海堂
魚津 小川傳之丞
鳥取鳥取市 平木久松堂
山本尙文舘
同米子町 今井兼文
同 同 木村粂三郎
同倉吉町 德國長藏
島根松江市 有田傳助
岡山岡山市 細謹舍
同 同 武內彌三郎
同 同 隆文堂
廣島廣島市 積善館支店
同 同 東西堂
同 同 中村貫誠堂
山口山口町 小原松千代
味村中和堂
同 同 白銀本店
同岩國町 白銀支店
同長府 村田梅龍堂
同萩町 藤川東輔
和歌山市 宮井宗兵衛
德島德島市 黑崎精二
同 同 井關粂吉
香川丸龜 入江開文舍

同高松 宮脇仲次郎
同 同 山形屋
愛媛松山市 向井藏次郎
同 同 土肥書店
高知市 澤本駒吉
同宿毛 高橋嘉吉
福岡博多 積善館支店
同 同 弘陽堂
同 同 博文社
同 同 丸善支店
同久留米 菊竹書店
同 同 田中幸次郎
同豐津 佐野長七
大分大分町 甲斐治平
同 忠文堂
同中津 梅津書店
佐賀佐賀市 大坪惇信堂
同 同 牧川支店
同唐津 牧川德次郎
熊本熊本市 長崎次郎
同 同 長崎次郎支店
宮崎宮崎町 修進堂
鹿兒島市 吉田幸兵衛
同 同 谷村藤吉
沖繩 小澤博愛堂
臺灣臺北 新高堂
同 高橋書房
朝鮮京城 日韓書房
同 同 大阪屋號書店
同 同 修文館
同大連 大阪屋號書店
同旅順 大阪屋號書店
同遼陽 大阪屋號書店
同鐵嶺 大阪屋號書店
同上海 日本堂
米國羅府 文林堂
同桑港 青木大盛堂
スタクトン 清水富春堂
シンガポール 好文館

井上巽軒著述目錄

（其重なるものを擧ぐ）

倫理と宗教との關係　第三版　富山房　一册　定價四十錢

目次―敍論―倫理學者の謬見―宗教家の謬見―倫理の根柢―宗教の根柢―宗教と道德―理想的宗教即ち理想教―結論―附錄、宗教の將來に關する意見、

巽軒論文初集　再版　富山房　一册　定價四十五錢

目次―歷史哲學に關する余が見解―日本民族思潮の傾向―老子の學の淵源―日本文學の過去及び將來―新體詩論―國字改良論―宗教の將來に關する意見、

同二集　再版　富山房　一册　定價五十五錢

目次―利己主義と功利主義とを論ず―獨立自尊主義の道德を論ず―武士道を論じ、併せて「瘦我慢說」に及ぶ―認識と實在との關係―小品五篇、

釋迦牟尼傳　第十三版　文明堂　一册　定價六十錢

目次―序論―歷史上に於ける釋迦の位置―釋迦は如何なる種族なるか―釋迦の誕生地及び其景況―釋迦の誕生及び少時―釋迦の結婚及び出家―釋迦の苦學及び苦行―

釋迦の成道―釋迦初發の說法―杖林に於ける釋迦の說法―故鄕に於ける釋迦―釋迦歸鄕後の誘化及び說法―釋迦入滅の狀況―附錄の一、釋迦牟尼關係書類―附錄の二―原始佛教史料考―附錄の三、和漢撰述佛教史類、

菅公小傳 再版 富山房　一冊　定價三十五錢

目次―敍論―菅公の祖先―菅公の時代―菅公の事蹟―菅公の夫人及び子孫―菅公の著述―文藻―學問及び技藝―史的評論―菅公關係書類、

日本陽明學派之哲學 第四版 富山房　一冊　定價一圓四十錢

目次―敍論―第一篇、中江藤樹及び藤樹學派―中江藤樹―熊澤蕃山―第二篇、藤樹蕃山以後の陽明學派―北島雪山―三重松菴―三宅石庵―三輪執齋―川田雄琴―中根東里―林子平―佐藤一齋―梁川星巖―第三篇、大鹽中齋及び中齋學派―大鹽中齋―宇津木靜區―林良齋―第四篇、中齋以後の陽明學派―吉村秋陽―山田方谷―横井小楠―奥宮慥齋―佐久間象山―春日潛庵―池田草庵―柳澤芝陵―西鄕南洲―吉田松陰―東澤瀉―眞木保臣―鍋島閑叟等―結論―附錄一、陽明學派系統―附錄二、陽明學派生卒年表―補正の一―補正の二、

日本古學派之哲學 第三版 富山房　一冊　定價一圓六十錢

目次―叙論―第一篇、山鹿素行―第二篇、伊藤仁齋及び仁齋學派―伊藤仁齋―中江岷山―伊藤東涯―並河天民―原雙桂―原東岳―第三篇、物徂徠及び徂徠學派―物徂徠―太宰春臺―結論―附錄一、堀河學派系統―附錄二、蘐園學派系統―附錄三、古學派生卒年表―補正、

日本朱子學派之哲學 富山房 一冊 新刊

目次―叙論―第一篇、京學及び惺窩系統―藤原惺窩―林羅山―木下順菴―雨森芳洲―安東省菴―室鳩巢―第二篇、惺窩系統以外の朱子學派―叙論―中村惕齋―貝原益軒―第三篇、南學及び闇齋學派―南學起原―山崎闇齋―淺見絅齋―佐藤直方―三宅尚齋―谷秦山―第四篇、寛政以後の朱子學派―柴野栗山―尾藤二洲―佐藤一齋―安積艮齋―元田東野―中村敬宇―第五篇、水戶學派―結論―附錄の一、朱子學起原―總說―京師朱子學の起原―海南朱子學の起原―附錄の二、朱子學派系統―附錄の三、朱子學派生卒年表、

巽軒講話集初編 第三版 博文館 一冊 定價七十錢

目次―教育の方針に就いて―教育上の宗教道德問題―我邦德育の前途―武士道と將來の道德―道德主義としての自主獨立―淸國開發意見―十九世紀の哲學―歐洲碩學

談―敎育の過去及び將來―女子敎育談―宗敎の本體に就いて―宗敎及び之れに對する日本人の位置―靑年の宗敎に對すべき態度―靑年に必要なる信念―公德と私德―道德及び宗敎に就いて―敎育雜感―佐々木弘綱翁の十年祭に際し所感を述ぶ―現今の敎育問題―日本社會目下の病弊―東西洋倫理思想の異同―敎育上に於ける黨派心の弊害―言文一致に就いて―裸體畫論―法律と道德との關係―日本現今の新聞を評す、

同二編 再版 博文館　一冊　定價八十錢

目次―宗敎革新の前途―理想と進歩―靑年將來の希望―女子自然の任務―圖書出版に關する希望―國民敎育と宗敎々育―國體と理想との關係―女子と文藝―美術界懇親會に於ける演說―德育小言―社會に於ける神社の地位―敎育雜感―德育の變遷に就いての所感―西洋美術の傾向―國風家懇親會席上の演說―人格の價値―人間の行爲及び目的―靑年と宗敎心―學業成功の要領―靑年は何を理想とすべきや―大學時代の高山林次郎君―宗敎と倫理との關係―再び倫理と宗敎とに就いて―支那文明の缺陷―讀書法に就いて―敎育宗敎上の雜感―今の初等敎育者に先づ何を望むべきか―文學者の修養―敎育上に於ける個人主義―新聞に對する希望、

巽軒詩鈔　木版　敬業社　　二冊　定價四十錢

敎科書類目録

增訂勅語衍義　第三十四版　六合館及び濟美堂　　一冊　定價四十錢

訂正中學修身教科書　金港堂　　五冊　定價九十錢

女子修身教科書　金港堂　　四冊　定價九十錢

師範學校修身教科書　金港堂　　四冊　定價壹圓二十錢

青年書類目録

日本學生寳鑑　第八版　大倉書店　　一冊　定價八十五錢

目次―第一篇、自己修養の方法―立志―獨立―人格―品性―良心―理想―完成―第二篇、處世及び成功の方法―起業―事務―活動―自信―公德―經濟―成功―第三篇、衛生上の注意―第四篇、書齋の樂み及び讀書法―第五篇、宗敎に對する用意―第六篇、美的趣味の養成―第七篇、禮法の心得―第八篇、自警及び座右銘―第九篇、先哲遺訓―第十篇、詩―第十一篇、歌―第十二篇、俳句―第十三篇、西洋詩歌―附錄、孝女白菊詩及び歌、―補遺、

合著書類目錄

哲學字彙 第三版 丸善　近刊

中學修身教科書 文學社　五冊　定價二圓六十四錢

倫理教科書 金港堂　五冊　定價一圓三十錢

商業修身教科書 金港堂　三冊　定價八十錢

農業修身教科書 金港堂　三冊　定價八十錢

編輯書類目錄

哲學叢書 共益商社

第一卷第一集

目次—緒言(文學博士井上哲次郎)—倫理法の必然的基礎(文學士吉田熊次)—實行倫理と宗教(文學士紀平正美)—哲學評論(文學博士井上哲次郎)—新刊批評(仝上)

第一卷第二集

目次―認識と實在との關係（文學博士井上哲次郎）―ロッチェの哲學（文學士西晉一郎）―哲學評論（文學博士井上哲次郎）―同上（文學士野田義夫）―新刊批評（同上）

第一卷第三集

目次―哲學の科學及び宗教に對する關係（文學士虎石惠實）―認識と實踐實在觀念と理想觀念（文學士森內政昌）―二程子の哲學（文學士宇野哲人）―哲學評論（文學博士井上哲次郎）―同上（文學士野田義夫）―新刊批評（文學博士井上哲次郎）

日本倫理彙編 育成會　十冊　定價 上製十四圓 並製十二圓五十錢

武士道叢書 博文館　三冊　新刊

關係書類目錄

井上博士講論集第一編 佐村八郎編纂 敬業社　定價二十錢

目次―人種言語及び宗教等の比較に依りて、日本人の位置を論ず、―東西文化の差異を論ず、

同二集 同上

目次—歐洲哲學の近況—王陽明の學を論ず—大鹽平八郎の哲學を論ず—文字と教育の關係—國民英學會に於て—教育上に於ける迷信の害、

勅語衍義考證 三石寅吉編次 敬業社 定價三十錢

宗教論批評集 巽軒博士 秋山悟庵編纂 金港堂 一冊 定價八十錢